太陰月にして、新月より次の新月に至るを以て一箇月となす。聖書に記されたる月の名に三箇の異れる者あり。即ち迦南名、數字名及び巴比倫名是也。

（イ）迦南名　迦南名の中にて殘存せるは四箇あるのみ。此等の名は凡て氣候及び經濟的狀態より來れる者也。

アビブ（אָבִיב, Abib）熟したる穗の義にして、第一月を指す（出十三の四）

ジフ（זִיו, Ziv）花の月の義にして、第二月を指す（王上六の一）。

エタニム（אֵתָנִים, Ethanim）間斷なき流の月の義にして、第七月を指す（王上八の二）。

ブル（בּוּל, Bul）雨月の義にして、第八月を指す（王上六の廿八）。

（ロ）俘囚時代に至り此等の迦南名は廢れ、數字を以て一月二月とやうに呼ばるゝに至れり。王上六の一、廿八、八の二、哈一の一、二の一、亞一の七、七の一等に見ゆるが如し。

（ハ）巴比倫名　俘囚以後巴比倫名希伯來曆に用ゐらるゝに至れり。此等の名の聖書に見ゆるは、十二箇の中七箇のみ也。

ニサン（נִיסָן, Nisan, Εὐθεινός = Xanthicus）三四月の交に當る。巴比倫の『動く』又は『出立す』なる動詞より來る。宗教曆最初の月也。（尼二の一、帖三の七）。

イヤル（אִיָּר, Iyar, Ἀρτεμίσιος）四五月の交に當る。聖書には記されず『ミシナ』にあり。語源は確かならざれ共、恩ふに『開く』『崩す』より來り、ジフと同義なるべし。

シワン（סִיוָן, Sivan, Λαίους）五六月の交に當る。（帖八の九）。

タムムズ（תַּמּוּז, Tammuz, Δείσιος）六七月の交に當る。（結八の十四）。

アブ（אָב, Ab, Λοῦς）七八月の交に當る。聖書には記されず『ミシナ』にあり。

エルル（אֱלוּל, Elul, Ἐλουλαῖος）八九月の交に當る。（尼六の十五）。

ティシリ（תִּשְׁרִי, Tishri, Τεβρί, Τισρί, Ἀρχαιοτέρος）九十月の交に當る。聖書には記されず『ミシナ』に在り。

マルケシワン（מַרְחֶשְׁוָן, Marcheshvan, Δίος）十一月の交に當る。聖書には記されず『ミシナ』に在り。

キスレウ（כִּסְלֵו, Kislev, Ἀπελλαῖος）十二月の交に當る。（亞七の一、尼一の一）。

テベス（טֵבֵת, Tebeth, Δοδεκάτος）十二月の交に當る。帖二の十六）。

シバト（שְׁבָט, Shebat, Σεβατός）一二月の交に當る。（亞一の七）。

アダル（אֲדָר, Adar, Δίστρος）二三月の交に當る。（帖、喇に歷。記せる）。

（三）週及び日（Weeks and Days）七日を以て一週となす事は、太陰月より來りたる者なれば週の循環は月の盈虧と略ぼ其時を同ふすれば也。其間に多少の相違を生ずること有れ共、有史時代に入りては新月と週の初めと相一致せるの形跡を認めざれば、此は希伯來の週に影響せざりしなるべし。アッスリヤ人及び巴比倫人は七日を一週となすことを知り、且月を以て週を初めたりしが、希伯來の週は一年を通じて規則正しく循環せり。毎週安息日が聖日として新月に代り重要視らるゝに至りて殊に然りとす。ノワックは以色列人は巴比倫人より週を借り來りしなるべしと云ひ、又古代の希伯來人は十日を以て一週となしたる形跡ありと云ひたれ共、後說は頗る疑はし。ドライヴェルは、安息日を以て終れる七日一週の制度は巴比倫より起れりと云へるシュラーデル。セース及び其他のアッスリヤ學者の說に同意するは困難なることに非ず。斯く天地創造物語は週を豫想せり、換言すれば週は創造の日より生じ來れるに非ず、創造の日週より生じ來れる也と云へり。然れ共又希伯來の週は必ずしも巴比倫より來りしといふを要せずと論ずる學者あり。何れか是なるを知らず。新約に於ては週は σάββατον と名けられ、週の日は數へられ、特殊の名を有せざりき。

巴比倫人は日暑に依りて日（יוֹם）を等分し、又之を分秒に分つことをも知り、西利亞人も亦同一知識を有したりしが如しと雖も、俘囚以前の以色列人が此等の知識を有したりし形跡は之を認むる能はず。以色列人と巴比倫人との間に存したる最も重要なる相違は、前者は日沒を以て一日の初とし、後者は日出を以て一日の初となしたること也。日沒より日沒迄を一日となすことは、律法の勝利と共に全然猶太的方法となりたれ共、アラブス、アゼニアンス及びガウル人の中にも此風行はれたりしといふ。又俘囚以前には日を精密に細分すること未だ行はれず、單に此を夕、朝及び日中となし『日昃る』『十九の八』『黃昏』（創廿四の六十三）『曉』（十九の十五）『日の熱き時刻』（十八の一）等と云へり。日を『時』に分つに至りしは遙か後世の事にして『ミシナ』には一日を十二時に分ちたり。之れより以前夜を三時に分つの風あり（哀二の十九、士七の十九、出十四の廿四、母前十一の十一）。此風は紀元第一世紀頃迄繼續したりしが、之を四時に分つ羅馬風も亦行はれた

るを見る（可十三の廿五に『夕』『夜半』『鷄鳴時』『早晨』とあるを見よ。是れ夕の六時より朝の六時に至る時也。）『安息日』『主の日』の條參照。又紀元に就ては其條を見よ。

特赦（トクシャ）Dispensation. 〔術語〕　教會の權威を有する者に依りて或る種の義務の赦さるゝことをいふ。羅馬教會に在りては、特赦の權は多くの場合に於て法王のみ之を有す。インノーセント三世以前に在りては、監督及び州の宗教會議も特赦の權を有したりしが、同法王の時以後は監督は唯法王の代理者としてのみ之を有することを得るこゝなれり。通常の場合に於ては、監督は破門の宣告、按手禮を受くる能はざる條件等を特赦することを得べし。又監督は斷食、婚姻に對する故障等の特赦を與ふる權を有することあり。英國教會に於てはカンターベリーの大監督婚姻の特許を與ふ。彼は又廿三歲以下の者の執事の按手禮を受くることを許可し得べし。監督は凡て其管區內の教職の一教會區以上を牧することを許可し得べし。

年（トシ）『時』の條を見よ。

トッド　聖書の年　The Year.

トッド　ジェームス　ヘンソルン　Todd, James Henthorn, D.D.　〔人名〕　一八〇五—六九　愛蘭の古學者。ダブリンに生れ、同市トリニチー、カレッヂを出で其フェローとせられ、一八三八年と四一年とにドンネラン講演者とせられ、四九年勅定教授となり、五二年大學圖書館長となり、六四年聖パトリック教會の唱歌隊長となり、又五年間愛蘭王立學校（アカデミー）の長を兼れたり。『但以耳及び聖保羅の文書中基督の敵に關する預言』『聖約翰默示錄に於ける預言』『聖パトリックの後繼者及びアルマの大監督等の歷史的小傳』二册『聖パトリックの一代と傳道』等を著はし又愛爾蘭學會の會員たり。

トッド　ジョン　Todd, John, D.D.　〔人名〕　一八〇〇—七三　米國會衆派の牧師。ヴェルモント州ラトランドに生れ、一八二二年エール大學を卒業し、四年間アンドヴァル神學校にて學び、二七年より三三年迄マサチウセッツ州グロートンにて、三六年までヒラデルヒア市第一會衆教會にて、七二年迄ピッツフィールドにて牧師たりき。國民一般より尊敬せられ、其の多くの著書は著れく讀まれたり。『小兒のための講演』二集は佛、獨、希臘其他の諸語に譯せられ、又盲人のために凸字版にて印刷せられ、レルム『日曜學校教師』『軍隊なる小品集』『未來の罰』『基督信徒のための暗示と思想』『婦人の權利』『日沒』等あり。

トッド　ヘンリー　Joln　〔人名〕　一七六三頃—一八四五　英國教會の教職、古書出版者。牛津を一七八六年卒業し、倫敦にて教會の司長となり、一八〇三年ラムベス宮の司長、三〇年ヨルクの受給教職、三二年クリーヴランドの大執事、女王附牧師となる。ミルトン。スペンサー。ジョンソン宇書を出版し『カンターベリー、ディーンの事』『聖書の英國欽定譯及び飜譯者』『プライアン、ウルトン小傳』二册『大監督タランマル傳』二册『英國欽定譯聖書實錄』等を著はせり。

トビット書　The Book of Tobit.　〔書名〕　舊約聖外聖書中の一書。俘囚時代に於ける敬虔なる家庭の生活を短歌的に描出せる者也。希臘語、拉丁語、スリヤ語、カルデヤ又はアラメイック語及び希伯來語にて書かれたる者各數種あり。現存せるアラメイック語の寫本は稍や晚代に成りたる者にて、且直接に原本より取りたる者に非ずと雖も、此書はもとアラメイック語にて書かれたる者也。

此書の物語の大要を記せば左の如し。ナフタリの支派に屬する猶太人にトビットと云へる者あり。敬虔にして猶太の儀節を守ることゝ、定まれる什一稅を納むることゝに注意深かりしが、其妻アンナ及び其子トビアスと共に、シャルマネゼルのために擒にせられ、ニネベに携へ去られたり。彼はニネベに往きてもモーセの律法を堅く守り、異邦人の食するものを食はざりしが、一時王の食膳方を命ぜられしことありき。彼は曾てメディアに旅せし時、ラゲにてガバエルと名くる猶太人に十タレントの銀を貸したりき。斯くてセナケリブがユダより歸りし時、トビットは王の怒に觸れて殺されたりし猶太人を葬りしことより、王の不興を蒙りたりしが、其姪アヒカルの懇求に依りてエサルハドン王は又彼を其位に復せしめたりき（一章）。ペンテコストの祀節にトビットはトビアスを遣はし、彼と共に食すべき貧しき猶太人を伴ひ來らしめんとしたりしに、トビアス歸り來りて、街上に一人の猶太人倒れ居れりと告げしかば、トビットは直ちに起ちて往き、之を匿し夜に入りて之を葬れり。斯く彼は死者に觸れて汚れたりしかば、庭に一夜を明したりしに、雀群彼の眼に糞して、彼は爲めに盲目となりたり（二の一—十）。彼は斯くして再び貧しくなり、其妻アンナは人のために紡績して糊口を支へたりしが、或る日其夫を怒り罵りしことありしかば、トビットは寧ろ死なんことを願へり（三の一—六）。斯くて又メディアのエクバタナにラゲエル及びエドナと云へる夫婦のものありけるに

が、其間に生れたる娘にサラと云へる者あり。曾て七度夫を迎へたりしが、彼等は何れも新婚の夕死したりしき。此はアスモデアスと云へる鬼の王之を殺したりし也。然るにサラは夫を殺したりとて罵られしかば、彼も亦死なんことを願へり（三の七―十五）。斯くて此二人の祈ぼ聞かれ、天使ラファエルは彼等を救はんとて遣はされたり。トビットは其最期に近づきたるを思ひ、ガバエルに貸したる金を取り返さんため、其子トビアスをラゲに遣はさんとし、長き勸を之に與へたり（四章）。トビアスはラゲに往く道案内を求めたりしに、天使ラファエル、アザリアスといふ者也とて來り案内ぜんことを請へり。トビアスは我をガバエルの許に伴ひ往かば相當の報酬を與へんと云ひ、ラファエルと共に其愛犬を伴ひメディアに向ひて旅立ぜり（五章）。其途上トビアスはチグリス河に浴したりしに、大魚來りて彼を呑まんとせしかば、彼は之を捕へ、且ラファエルの勸めに從ひ、後日の藥用に供ぜんとて其心臓、肝臓及び膽嚢を取りて之を貯藏せり。斯くて彼等はエクバタナを過り、ラゲエルの家に宿りたりしが、トビアスはサラと婚ぜんことを請へり。是より先きラファエルはトビアスにサラより惡魔を驅逐すべき法を教へたりしが、トビアスとサラとの婚姻は夜の祠に成りたり（七章）。ラゲエルは又災厄の來らんことを慮り、眞夜中に新郎を葬るべき墓を堀りたりしが、魚の心臓と肝臓とを焚きし時アスモデアスは其薫臭に依りて埃及に逃れ去りたりしに、ラファエルは彼を追ひ往き其處にて彼を縛したり。而してトビアスとサラとは終夜共に祈り、平安に其夜を過ぜり（八の一―十）。エドナは深く之を喜び、ラゲエルは神に感謝して後、十四日續りる饗筵を設けて婚姻を祝ぜり（八の十一―廿一）。ラファエルはラゲに往き、蠱に封じたるまゝなる銀を求めガバエルより取り返し、婚筵に來りて新婚の夕死したりき。此はアスモデアスと云へる鬼の王之を殺したりし也。然るにサラは夫を殺したりとて罵られしかば、彼も亦死なんことを願へり（三の七―十五）。斯くて此二人の祈ぼ聞かれ、天使ラファエルは彼等を救はんとて遣はされたり。トビットは其最期に近づきたるを思ひ、ガバエルに貸したる金を取り返さんため、其子トビアスをラゲに遣はさんとし、長き勸を之に與へたり（四章）。トビアスはラゲに往く道案内を求めたりしに、天使ラファエル、アザリアスといふ者也とて來り案内ぜんことを請へり。トビアスは我をガバエルの許に伴ひ往かば相當の報酬を與へんと云ひ、ラファエルと共に其愛犬を伴ひメディアに向ひて旅立ぜり（五章）。其途上トビアスはチグリス河に浴したりしに、大魚來りて彼を呑まんとせしかば、彼は之を捕へ、且ラファエルの勸めに從ひ、後日の藥用に供ぜんとて其心臓、肝臓及び膽嚢を取りて之を貯藏せり。斯くて彼等はエクバタナを過り、ラゲエルの家に宿りたりしが、トビアスはサラと婚ぜんことを請へり。是より先きラファエルはトビアスにサラより惡魔を驅逐すべき法を教へたりしが、トビアスとサラとの婚姻は夜の祠に成りたり（七章）。ラゲエルは又災厄の來らんことを慮り、眞夜中に新郎を葬るべき墓を堀りたりしが、魚の心臓と肝臓とを焚きし時アスモデアスは其薫臭に依りて埃及に逃れ去りたりしに、ラファエルは彼を追ひ往き其處にて彼を縛したり。而してトビアスとサラとは終夜共に祈り、平安に其夜を過ぜり（八の一―十）。エドナは深く之を喜び、ラゲエルは神に感謝して後、十四日續りる饗筵を設けて婚姻を祝ぜり（八の十一―廿一）。ラファエルはラゲに往き、蠱に封じたるまゝなる銀を

因なり。思想と意志とは神の存在格より離すべからず。神は絶對的歸一なり、單純なり。三位一體は眞なり。神は絶對的歸一なり、單純なり。三位一體は眞の能くせざる所なり。世界は神よりの分出なり。されど神の中の三位の區別を發見するは理性ならず。世界は始めありしならん。されど此は論ずべからず、知るべからず。選びと罰とは神の告命に在ることなり。凡ての物皆な神の攝理の中に在りて、終局の目的を達せんとすればなり。選びと罰との數は預め定まれるならん。されど罰は神の方の活動的行爲には非ず、其の成るに委せある事なり。神は罪の原因に非ず、神は唯だ惠を有す。人は自己の意志に由て墮落せしなり。亞剌比亞哲學者の說く所と異り、第二原因は影響を與ふるものなり。神は第二原因を介して働けり。意志には功罪の二傾向の何れをも選び得るの力あり云々と。

神の造りし萬物に關しては、トマスは天使の事を委しく論ぜり。彼はアウグスチヌスと同じく、アダムの元始正義は神の附加恩賜なりとし、基督の事業を勉め論ぜり。人類の無知不完全と、神の全知完全といふ兩反對原理は、基督に於て合體ぜりと言ひ、神が人となるは絶對的に必要なりてふ說を否定し、神は其の子に由らずしても人を救ふの道を立て得たるべしと言ふが如き點に於て、アンセルム說より離れたり。且曰く、人間の裁判官は罪の挽回物なくしては罰を免す能はざらんが、至上なる神は自らの心に由て挽回物なくも赦し得べし。罪人は其の功績を用ひられて罪より脫し、其の赦を得べし。人の天性は腐敗ぜり。永生に達するは唯だ神恩に由ると。當時七と定まり居りし聖禮典に關して、トマスは其の必要を論じ、聖晩餐の麵包と葡萄酒が基督の肉と血に化するか主張し、更に赦罪券の効力を論じ、其の効力は之を受くる者に依らず、教會の意志權威に依て生ずとし、此は生者のみならず死者にまで及ぶと論じ、來世論に於ては煉獄及び聖徒の仲保の教義を說き、肉體の復活と未來の祝福とを說き、復活せる肉體は現在の肉體と髮や爪に至るまで同一なりと言へり。トマスは倫理學者としても大なりき。ネアンデルはアリストテレースに次ぐ倫理學者なりと言へり。去れど彼は此點に於ても教會の子なりき。彼は當時の教會の思想に從つて多くの無用の小事を詳論せり。されど此の小事の方面には隨る控へ目に論じて大なる問題を深切に明白に論明せること多し。

アクイナスの死後其の神學に就ては爭論起り、ダンス、スコタス反對の首領たり。ドミニコ派はアクイナス說に與みし、此派をトミスト（トマス徒）と呼び、フランシスコ派はスコタス說に當し之をスコチスト（スコタス徒）と呼べり。其の教義の相違ぜしに非ず、唯だ其の教義の立て方相違せしなり。スコタスには神學は實際的學問なりしも、アクイナスには思辨的學問なりき。論爭は第十八世紀まで續けり。フランシスコ派のデ、ラダの『トマス徒とスコタス徒間の論爭』に記す所によれば、兩派の相違點八十六ありと云ふ。其の大なる相違は神の知り得べき事、神の屬性の區別、罪、基督の功等に關するものなり。コタスは肯定す。イエスイト徒はトマス說に反對せしが、西班牙にてはサラマンカ、コイムブラ、アルカラの諸大學にトマス說行はれたり。羅馬教會に長くトマスを讃とし、プロテスタント徒も其の文學的大才に感服したり。

トマスの福音。トマスの幼時の福音

トマスの著書の中重なるは若き時の『ロムバーデアのペトロスの宣言の註解』"Compendium theologiæ." "Summa de veritate fidei catholicæ." "Summa totius theologiæ" にして、註解は舊約の一部及び保羅書論、殊に福音書に關するもの價値あり。文書は全集とせられ居れり。英譯及び佛譯となれるものも多し。

トマス　アケムピス　『ケムピス』の條を見よ。

トマス福音書（ファイシヨ）　The Gospel of Thomas.

書名　新約經外福音書中の一書。ヒポリタスの書中にノスチック派『トマスの福音』より引用せりと稱する『我を求むる者は七歳以上の小兒の中に我を發見すべし、何となれば第十四のイーオンの中にかくされたる我は顯はさるべければ也』と云へる一句を載す。オリゲンも『トマスの福音』に就て語り、ユウセビウスは此名を異論書の中に列ぜり。エルサレムのクリロスは僞書の中にマニカイ教徒の書きたる『トマスの福音』を數へ、此書は使徒の書きたる者に非ずして、マニの弟子の書きたる者は讀む可らずと云へり。マニカイ教徒の福音がノスチック派の福音と如何なる關係を有したりしや明ならず。『トマスの幼時の福音』がノスチック派の手に成りし者なるは確かなれ共、もし此二書全く獨立せる者也とせば、一が基督幼時の物語より成り、他が小兒に關し基督の云ひたりしと稱する言を記せるは寧ろ奇異也とせざる可らず。『トマス幼時の福音書』の條參照）。

トマス幼時の福音書（ファイシヨ）　The Childhood Gospel of Thomas.

書名　新約經外福音書中の一書。此書は基督幼時の不思議なる物語を記せる者にして、初代基督教會にて廣く讀まれたる者也。現

今にては福音書と云はず、一般に『主幼時の逸話』（*apokryphi tou kyriou*）と稱せらる。此書は元來ノスチック派の用ゐたりし福音書にして、ヒポリタス及びオリゲンの言及せる者と同一なること疑ふ可らず。現形に於ては此書はノスチック派の手に成りたる長き福音書より拔抄せる物語を編輯し、ノスチック調を帶びたる者を省きたる者なること明也。書中尙ノスチック的思想の形跡を存す。幼童なる基督が驚くべき奇蹟を行ひ又彼が不可思議なる智識を有したりと云へる物語は、彼等が之に依りて基督は此世に屬する者に非ず、故に幼童として人類の制限及び發達以外に在り、幼童乍らも尙人の教師を教ふるの智識を有したりしといへる其特殊の說を維持せんとして作りたる者也。ヒポリタスの引用せる一句（『トマス福音書』の條を見よ）は蓋しノスチックの語を基督の口に說きたる者也。此書現形に於ては第三世紀より以前に成りたる者に非ず。

トムソン　ジョセフ　パーリッシ　Thompson, Joseph Parish, D. D., LL. D.

人名　一八一九―七九　米國の牧師、神學者。ヒラデルヒアに生る。一八三八年エール大學を卒業し、四〇年按手禮を受け、四五年より綠育市メロードウエー、タバナクル教會の牧師たり。七一年病の故に辭し獨逸に行き伯林にて死す。一八四三年五人の紳士と共に『ユウ、イングランダー』誌を起し、四八年にはレオナード、ベーコン。ジョシュア、リーヴイクト。リチャルド、エス、ストルスの諸博士と共に週刊『インデペンデント』を起し宗教政治に關して大なる感化を與ふ。トムソンは十四年間其の編輯に就て重なる責任を負ひたり。此の外に彼は尙多くの著作をなし九十種に及びしが『基督の言に於ける其の神學』『國民としての合衆國』『合衆國に於ける國家と教會』等は其の大なるものなり。牧會三十一年間彼は說教者として其の非凡の能を顯はせしが、而も其の業に忠にして曾て說教の草稿を造ることを怠りし事なし。是等のため成功し、其教會は紐育中にて最大にして最も知力の進めるものとなりぬ。彼は又外國宣教事業に力を盡し、慈善及び社會事業にも同情せり。奴隸制度の廢止には彼の功與りて甚だ多きに居れり。廢止主義尙甚だ勢なく、一般に不人望を極め、宗教新聞雜誌すら之に反對せし時、彼は他人の敢てせざる所を斷行し、自己の教會との關係をも政治との關係をも一切無視して、舌に筆に極力議論したり。同時代の人に彼ほど此の主義を以て思想界を感化したる人はなしと信ずる。南北戰爭の間には一時の自由と共に合衆聯邦の維持を主張し、身を以て之がために盡し、衛生民團の委員として北軍訪問中健康を害し、七一年教育を辭して外國に遊ぶの已むなきに至れり。曾て埃及に遊びし時（一八五三年）より埃及學に興味を抱き、モーセの一生と時代とに就て大著作をなさんと企て、伯林に行きしも之に資するためにて、何時まても中止の心になかりしも、彼の性質は活問題に無頓着なる能はざりしものから、獨逸にて諸方面の事情、米國の制度の辯護と米國思想の說明を侵すを覺え、乃ち之に從ひ歸米を繁く懇願となれり。彼は一私人にして何等の僭位勳等なかりしも政治家學者等其周圍に集り、年々米人禮拜堂に招かれて感謝演說をなせり。七三年の冬にはコペルニコス誕生四百年祭に當り、米國地理學協會の代表してトルンに行き、伯林に在りしアガシス　ブライアントとペーアード、チールロルの紀念會にても演說せり。萬國法改正協會の集會には常に列席し、又三年間でグラスゴーに行き、法王黨とプロテスタント主義とに就て演說し、歐洲平和擾亂の恐を去るには米國式に教會と國家とを分つの途あるのみと論じ、伯林、フィーレンチェ、ドレスデン、巴理、倫敦の各所に於ける講演にては、米國の政體に關する哲學的說明を試みて、歐洲人の之に對する偏見を正し、七八年の伯林條約には其の個人的感化を用ひて宗教自由を望ぶの句を挿入せしめ、七九年にはバーゼルに於ける福音同盟會にて墺太利宗教自由請願の決議案を出し、之を墺太利皇帝に呈する委員の一人となりしが、未だ使命を果たさるに伯林にて死せり。

トラ（オラスオルド）　Torah.

術語　希伯來語『律法』の義。『律法』の條を見よ。

トラクテーリアン（ウンドウ）　Tractarians.

運動　『牛津』の條を見よ。

トラコニテ　Trachonitis.

地名　聖書中路三の一にのみ記さるゝ所の地名にして、分封の君ピリポの領地なりき。トラコニテは元來希臘語のトラコン（岩石多き土地の義）地方の義にして、ダマスコの東南岩石多き地方を指すの名也。

トラピスト派（トラプ）　The Trappists.

僧派名　一一四〇年ベルシヤのロトルー伯（Comt. R. tron）の立てたるシトー派僧庵より起る。此の僧庵は『ノクトル、ダム、ド、ラ、メーソン、デュー』と稱し、殘氣多き不毛地の谷間に在り、狹き石途にて之に通ず。此の狀態にて第十七世紀の中頃まで續きしが、其時僧庵は十歳の少年たりしドミニコ、アルマンド、ジヤン、ル、ブーティリエ、ド、ランセーの手に落ちたり。此人精神的の才ありしも、一時肉慾に耽り居

りしが、悔改して極端に走せ、ラ、トラップに走き、僧侶の反對ありしにも拘はらず、嚴格なる戒規を行ひ、之がために或るベネディクト派僧侶を自庵に引き入れたり。

ランセーの規則にては、ラ、トラップの僧員たる者は二時に起き、冬は七時に、夏は八時に寢ることゝなり、墓の中に寢れ、日々十一時間を精神的勤行に費し、餘時を勞役に用ひ、其の作業中は互に全く沈默を守り、定まれる形式にて互に『メメント』、モリ』『記憶せよ我等は死なざるべからざるものなるか』の挨拶を交はし、其の頒ふ所は合圖にて通じ、其の飲食物は蔬菜、パン、水を用ひ、夕食後は暫く自己等の將來の墓を掘りたり。衣は長き灰色のクロークにて袖廣く又帽は黑色なり。

ランセーは文學的作業に反對し、其意見を『僧院生活の神聖と義務』（一六八三）に表はせり。マビリョンは『僧院研究論』（一六九一）を以て之に答へぬ。ランセーは一七〇〇年十月死す。一六九二年コンデーの女公ルイス佛國クラセーに女子部を立て、又フィレンチェ附近とデュッセルドルフとにも立つ。佛蘭西革命はトラップ派を佛蘭西より逐ひ出せしかば、彼等は瑞西に避け、アウギュスチン、ド、ルストランジュはフライブルヒ縣のヴァルセーントに一庵を起せり。一七九八年佛蘭西人之を破壞せしかば、ルストランジュは波蘭のワルサウ及びクラカウに遁れしも、一八〇〇年トラップ派は其所より逐はれ、獨逸及び以太利にて足溜りを求めし末、一八一七年ブルボン家再興後ラ、トラップを再び與へられたり。ルストランジュは活動して種々の支部を起し、一八二七年に死す。二九年王令發せられ、トラップ派の院は閉鎖せられしが、九個は幾りしを三〇年之も閉ぢられたり。一八四四年後等はアルジェに一院を開き、四八年には米國に移住せし者あり。五一年には『トラップ派說教者』と稱する一支派起り、宣教を事とし、アゲアリョン附近のピエル、キ、ヴィール僧院を本據とせり。以太利及び瑞西にては一八七〇年以後トラップ派は法律上認められず、一八〇三年一殖民所ルストランジュ自身の指揮の下にペンシルバニア州コーンウェゴー附近に設けられ、所々移轉後、一八一三年にノヴァスコシアのトレカディーに移れり。更に一八四八年には佛蘭西ラメイエラージュより米國ケンタッキーに移住せし一團あり。次で同所より米國アイオワ州デュビッタ附近に殖民せし者ありき。今日にては西亞弗利加ナタールと我國の北海道と支那とに殖民地を有す。

トラヤヌス　マルクス ウリビウス Trajanus, Marcus Ulypius　人名　羅馬皇帝。（九八—一一七在位）。羅馬皇帝中の最良なりし人にして、性質率直和仁慈なりしが、基督教反對の布令を發し、法律を以て迫害をなしたる人なり。此は小プリニオスをビッニアの方伯として任命せし時に起れり。東方にては基督信徒の數西方よりも多く、大都會にては住民の過半は信徒となり、異教神殿は寂寞となり乾牘に歸せんとするに至りしかば、之を見しプリニオスは大に警戒し、之を濟ふには秘密結社に對する法律を適用する外途なきを看取し、之を勵行して之がため非常に多數の人々訴へられしが、而も此の抑壓は到底成功すべくもあらざりしにぞ、プリニオスは皇帝に何書を出せしに、皇帝は答書を與へて嫌疑者を探求することや匿名の告訴を取り上ぐる事等を禁じ、改心悔改せし者へは赦免を與へ、若し自證して取り消さゞる者なれば罰すべきを命ぜり。皇帝の性質は此の命令によく現はれたりと云ふべし。之がため基督教徒の地位は不安となり、實際殉教の死を遂げし者も多く出でたり。エルサレムのシメオン。アンテオケのイグナチウス等は其の中に在りき。

トーランド　ジョン Toland, John　人名　一六六九—一七二二　英國の自然神論者。愛蘭ロンドンデリーに生る。父母は天主教徒なりしが、彼は或僧の私通兒なりとせられて、原名ジェナス、ジュニアスといひしを、學校にてトーランドと改めさせられたり。十六歲の時プロテスタント教に轉ず。グラゴー及びエヂンバラ兩大學にて學び、一六九〇年マスター號を得。又ライデンに行きて、非國教牧師たるべき望を以て神學を研究す。九六年『基督教は神異的ならず』を公にし世に感動を起す。其の結論は不明なれ共、神異的といふ事をば理性以上の事にして理性に反する事には非ずと定義し、此の意味にて基督教は神異的に非ずと言へり。彼は自ら異端なる基督信者、善良なる國教會の人と稱せり。同書は九七年九月著者がダブリンに在る時議會の命により絞刑執行者の手にて焚かれ、人民一體に彼を憎むに至りしかば、彼は其の後は流浪の生活を送り、倫敦及び歐洲大陸の間を彷徨し、或はプルンスウィク家の要求を贊する政治的小册子を著はし、或は伯林にて半官半民の職に就きしが、モールスウォルスより年金を受けて生活しつゝある間に死せり。『基督教は神異的ならず』に對する論駁に答へて『トーランドを辯護す』をも著はし『ミルトン集及び傳』三册を出版し『アミントル一名ミルトン傳辯護』『テトラディマス』『セルウィトスの公平なる傳記』等を著はせり。

トリテミウス　ヨハン Trithemius, Johann

人名　一四六二—一五一六　宗教改革前代の獨逸神學者。トリエルに近きトリテンハイムに生れ、貧困と闘ひてハイデルベルヒにて教育を受く。郷里に歸らんとしてスパンハイムの僧庵に留まり居りし時、暴風雨ありて出發するを得ず。豫期の時に歸るを得ざりしかば、彼は之を以て循理の籠る所となし、其まゝ僧庵に止まりて僧となり、僅に二十一歲の時庵長に選ばれたり。其の力に依て庵は繁榮し、ロイヒリン及びピルタ ハイメル等と交通す。一五〇六年ウルツブルヒの僧庵に轉ず。自然神學、類項哲學等に關して若干の著書あり。又獨逸の教會歷史の途を拓ける著書をなせり。

聽告（トナル）　Intercession.　術語　神學上基督が人類のために神に祈る働を指す。彼は其將さに十字架に釘けられんとする前に、其弟子及び信徒一般のために祈れり（約十七の十一、廿）。彼は『長く我等のために神の前に在り』（來九の廿四）『我等のために聽告し給ふ』（羅八の廿四、來七の廿五）。故に彼は『保惠師』と稱せらる（壹約二の一）。而して彼が廣く人類のために聽告し得るは比隣羅的事業に基けり。羅馬教會にては諸聖徒も亦人のために聽告し得るが如く教ふれ共、此は聖書の教訓に非ず。『『贖罪論』の條參照』。

トルクェマダ（又ツレクレマタ）　トマスデ Torquemada(Turrecremata), Thomas de　人名　一四二〇—九八　西班牙の教學、有名なる檢教官。父をフーアン、デ、トルクェマダと云ひ『カルディナル』たり。Dominicus Hispanus Marinus を著はす。トマスはウアラドリドにて生る。聖ドミニコ派に屬し、西班牙檢教制の制定に精力を傾注し、イサベラが獨逸遠征せるを屈服し、斯くてフェルヂナンドとイサベラとの間に由て所謂檢教の『聖學』は一四七八年十一月法王シクストス四世の創立する所となりぬ。法王檢教官長を任命するに及びトルクェマダは其の選に當り、西班牙檢教の法律と方法とを定め、七六年之を發布す。猶太人が多額の金をフェルヂナンドに獻ずしも拒まれ、九二年國を逐はれしはトルクェマダの妨害によれり。彼は冷血殘忍の別名なるが如く思はるゝに至れり。ロングフェローの詩に此の事を詠ぜしものあり。

地名　土耳其人は中央亞細亞より來りしものなるが、マホメット教（回教）を奉ずるや之を奉ぜり。オトマン土耳其人は回教帝國を立て、マホメットの名に由て職をなし、族首セリムが埃及を征服せし時には、コレイシュ家の最後の國教長を捕虜としてコンスタンチノープルに携へ行き、之より教長たる權利を讓られて始めて之を放て繼者たるカリフス（回教長）たり。而してマホメットは國教長たる者は己が家の者ならざるべからずと遺教せしにも拘らず、正統派回教徒もスルタンには教長の地位を保つの能力十分なるを認むるより、其の要求を承認せり。スルタン下の政治は飽くまで國教的にして、法律はコーラン（經典）と宗教的傳說と國教法律學者の決定とを基礎として造られ、スルタンは何事にも絕對的に至上なり。されど疑問題に就ては自己の任命せる官史『シャイク、ウル、イスラム』に謀る為常とす。彼等は自ら之に答ふるか、然らざれば又『ウレマ』即ち其の下僚たる學者等に問へり。萬事は教長の利益のために犧牲とせられ『コーラン』には若し此の信仰なきものは死に處せらるべしと宣言せり。此を以て土耳其には宗教の自由などは有るべからざりしが、クリミア戰爭後基督教に改宗する者は忍容せらるゝに至れり。是れ英國政府が二三の改宗者保護のために强硬なる行動を取りしが故なり。

土耳其人が國を征服せし時には、既に猶太教徒異教徒と共に若干の基督教徒こゝに存在し、埃及にはコプト人教會あり、亞細亞にはアルメニア教會、天主教會、スリア教會、正教會（即ち希臘教會）あり、歐羅巴の部には希臘教會及び天主教會ありき。此等は回教に服することを肯ざりしが、之を全滅することも出來ざりし故、土耳其人は『コーラン』の第三原則を適用して、此等には貢賦を納めしめ、之を隷民として國內に住ましめ、教會政治及び宗教をば其のまゝとし、或る特權と權利とをば皇帝の認可に依て之に與へ、教長及び監督等をば教會と政府との協承にて任命し、教會の役員たるものは事實政府の官吏たる爲あらしめたり。此等役員は時として或は土耳其人抑壓の道具となり、或は自ら抑壓者となり、或は基督教徒の保護者と變じたり。土耳其人は以爲へらく、教會を一組織體として統御するは、信徒を一個人として統御するよりも容易なりと。是れ一面には眞なりしが、他面には土耳其人は之に由て自己帝國破壞の基を作れり。此の政策にては、種々の國民體は其のまゝに並び殘りて國民的感情を保ち、回教の傳播を妨げざるを得ざりし也。土耳其人も終には之を悟り、近代となりては教會の權威を屈せんとし、其の特權を奪はんと努めしが、教會は激しく之に抗し、歐洲諸國は其の背後より之を援け、コンスタンチノープルには土耳其政府公認のもの、アルメニア、加特力アルメニア、拉丁、正教會教會の各教長、ブルガリア教會の教長任理、プロテスタント徒

の『ヴェキル』『猶太教の『ハハムバシ』あり。

（一）プロテスタント教の傳道　歐洲に於ける宗教改革は土耳其にも多少の感化を及ぼし、正教會最高の教職等の中にはプロテスタント主義に同情せし者もありしが、人民は全く無知蒙昧なりしかば、外來の運動は之に達せざりき。第十九世紀の初となりて、プロテスタント教土耳其帝國内に入りしが、初は猶太人及び東方教會信徒に對する宣教のみなりき。一八八三年には大英國より着手せる傳道會社の數二十五ありき。教會傳道會社、羅馬傳道會社、倫敦猶太人會、蘇格蘭國立教會、同自由教會、愛蘭長老教會傳道團、ベレスチナ教會傳道會社、大英スリア學校會社、レバノン學校協會、東方女子教育發揚會、埃及ホエートレー學校會社等は其の重なるものなり。米國より着手せる者は長老教會傳道局、改革長老傳道團、一致長老傳道團、メソヂスト監督傳道團、クリスチャン（カムベル徒）傳道團、英米友會等也。此外英國人、米國人の立てたる出版會社あり、聖書會社あり、小册子會社あり。獨逸派の傳道團はカイゼルウェルト女執事會、クリショナ傳道團、エルサレム、フェラインなり。此等の傳道會社中最も古くして最も有力なるはアメリカン、ボードにして、同局はもと米國の長老教會和蘭改革教會及び會衆教會を代表せしが一八七〇年後は會衆派のみのものとなれり。其の傳道に着手せるは一八一九年にして、フィスク及びパーソンスの二宣教師同年エルサレムに送られ、初は端緒開けざりしが、二三年スリア傳道ベールートにて始まり、三一年には米國よりの傳道コンスタンチノープルに設けられ、翌年猶太人傳道始まり、四九年アッスリア傳道始まり、五八年ブルガリア傳道始まり、後には傳道區を歐洲部、西部、中部、東部に別てり。宣教師は初は獨立の新教會を立てん志なく、既在の教會を改革する心なりしも、土耳其帝國特殊の制度として教長等に政治上の權力を與へあるのみならず、何等か公認の教會に屬せざる者をば違法者として取扱ひし上に、既在の教會は新教主義の傳播を妨害すること少からざりしかば、終に新教會吞寧ろ政治的の意味の結社を起すことゝなり、五〇年英國の後援によりて土耳其政府の認可を得たり。此外英米の兩聖書會社は宣教師と密に協同して勞役し、一八五八年まで宣教師等は米國聖書會社の活動員としてはたらき、之がためコンスタンチノープルのロバート學院、ベールートのスリア、プロテスタント學院は何れの傳道團にも屬せざる獨立の學校として起れり。

（二）天主教の傳道　土耳其に於ける天主教傳道團は何れも佛蘭西政府の政治的機關にして、常に政府より金錢上外交上の補助を受け、之が報償として如何なる場合にも佛蘭西の權力を擁護し維持し來れり。土耳其に在る天主教傳道團はラザロ派、メキタル派、フランシスコ派、ドミニコ派、カピュシン派、カルメル派、イエスイト派及び種々の基督教會より改宗者を得んとせしも獲る所少く、回教徒改宗のためには殆ど益す所なかりき。

ブルガリヤ人は基督教に改宗せし後一時天主教に傾かんとせし事あるも、終に東方教會と合し、パウリシアン教徒のみ天主教に屬せり。ブルガリヤ人と希臘教長と爭の起るや、天主教會は前者を自教會に引き入れんと努めたりしが、其結果は小なりき。ボスニア、ヘルツェゴビナ、アルバニアには有力なる天主教徒あり、墺太利早くより之を援けたり。希臘人の間には天主教は殆ど何等の進歩を見る能はざりき。アルメニア公教會は勢力ある教會なるが、屢々土耳其人のために迫害を受け、而して内部には羅馬教會が之を羅馬化せんとするより起る分離絶えざりき。

亞剌比亞語人種間にては、天主教はヤコブ徒とスリアのマロン徒との上に勢力を得、又希臘人コプト人の間にも多少の勢力を得たり。土耳人の信徒の外に外國人の信徒も在りて、宣教を助くること少からず。天主教の傳道は常に必ず歐州天主教諸國の外交又は商業機關に助けられ、土耳人は之に入るは或意味にて歐洲人となるなりといふ感を以て出入せり。種々の僧院、教育、慈善等の事業も固より助をなす所多し。其の學校は常に程度低けれど、佛語を教へて人民に向ひ一種の引着力を有しつゝあり。最も有効なる働は蓋し姉妹團の事業ならん。彼等は到る所に在りて無學なれど倦まずして勞し、献身的に勉め。服從の德最も備はれり。天主教の僧侶は土地にて生活する事に於て遙にプロテスタント宣教師に優れり。されば費用は割合に少くして傳道するなり。彼等は確に國内に教會を立てたり。されど回教徒を改宗せしむるの途は實て之を講ぜざりしなり。

要するに土耳其に於ける基督教の傳道は頗る困難にして、回教徒を改宗するが如きは容易の事に非ず。近年憲法政治を採用し其歴史に新紀元を開き、政治、商業、教育、宗教等の自由を與へられたれば、基督教傳道の上にも多少の好影響を及ぼすべけれ共、此は今後の事に屬す。

トルストイ　リオウ　ニコライ　ヰッチ　伯爵 Tolstoi, Count Lyov Nikolaievitch

人名　一八二三—一九一〇　露西亞の小説家。

ヤスナヤ、ポリアナに生る。一八五一年義勇兵となりてカウカサス軍に入る。彼が『幼時及び童年』を書きたりしは此間の事にして、彼は又此時『コサック』の稿を起したりき。五三年クリミヤ戰爭中彼は『セヴアストポール』と題する戰爭小品を著はせり。彼が初めてツルゲニーウに會したりしは、セヴアストポールの陷落を通知せんため聖彼得堡に遣はされたりし時なりしが、此二人間の交情は爾後常に親ならず、時には劇烈なる爭ありしが、ツルゲニーウは死に臨みてトルストイを劇稱したりしといふ。五七年の終り頃よりトルストイは其所領地に在りて著作に從事せり。六三年『戰爭及び平和』の稿を起せしが、此書は彼の大作の一にして、一八〇五年より一五年に至る露國歴史中最も重要なる時期に於ける社會の狀態を描ける者也。此書の廣く讀まるゝに及び、彼は漸く露國の文學社會に重を爲すに至れり。七一年頃彼は又『アンナ、カレニナ』と題する第二の大作に取り掛れり。此書は『戰爭及び平和』の如く社會の狀態を描寫せると共に、最も能く自家の心的經驗を顯はせる者也。『我が懺悔』は深刻なる靈的經驗を歴たる後、八〇年を以て世に公にせられたる者にして、それよりは以後一九〇一年露國教務院が彼に破門の宣告を與ふるに至る迄、彼の教會に對して取りたる態度は社會主義的破壞分員の態度なりき。八五年『我が宗教』『クロイツェル、ソナタ』出づ。前者は宗教に對する自己の見解を述べたる者、後者は社會の卑陋なる狀態を描ける者にして、共に遺憾なくトルストイの病的心狀を露出せり。九三年彼は其著書の版權、土地及び金錢の所有權並に其所領を放棄して、自ら社會主義を實行し、爾後著書は以上の生活を送り以て其死期に及べり。彼の著書は以上の外『復活』『神の國は爾曹の衷に在り』『主及び人』『イウアン、イリイッチ』『宗教とは何ぞや』『世の終り』等あり。何れも教訓的にして歴世的の傾向を帶ぶ。彼は作者としては頗る寫實的にして、其作は何れも趣味ありて面白し。彼は絶對的無抵抗主義を主張し、兵役、警察、裁判、監獄等の制度を以て基督の教訓に背反せりと論じ、極端なる愛他主義を唱ふ。然れ共晩年に至りて幾分變し來りし彼の思想には又變化ありし者の如く、一九一〇年十一月九日、頗難なる俗事に飽きたれば隱遁して靜養すべしとの遺書を遺して突然家出せり。彼の目的は其故郷より四五十哩隔たりたるカルガ縣のオプチニ修道院に入り、新禱三昧に餘生を送らんとするに在りしが如くなれ共、途中病を得て其目的地に達するに至らず、オスタポラにて死せり。彼の書はドールに依りて英譯せられ（十九卷、八九—九〇）其全集デンマーク國にても近年トルストイを紹介する者あり。其『我が懺悔』は加藤直士に依りて飜譯せられ『復活』は内田魯庵に依りて飜譯せられたり。詳に彼を知らんとする者は上記彼の著書の外ウィーネルの『トルストイ伯の近業、傳』（一九〇五）ヲルネルの『小説家及び思想家としてのトルストイ伯』（一八八八）ノールソンの『レオ、トルストイ』（一九〇四）ビルコッフの『レオトルストイの早き時代の傳』（一九〇五）及び『トルストイ、彼の生活及び事業』（一九〇六）等を見よ。

トルストイ伯

トールック　フリードリヒ　アウグスト Tholuck, Friedrich August, D.D.

人名　一七九九—一八七七　獨逸の神學者。プレスラウに生る。東誠の家より出づ。初め商業を學びしが、友人の補助によりて生地の大學豫備校に出で、次で伯林大學に學ぶ。豫備校を去るや『基督教界に優る東方世界』を演説し、マホメット教を讃せしが、大學在學中シュライエルマッヘル及びネアンデルの講義の感化と、殊にコットウィッツ男爵エルンストとの個人的交際の感化に由りて、全く其の汎神論及び懷疑説より改まれり。男爵はモラヴィア派の人にして、貴族的の品格と敬虔とを兼ね具へ居たるなり。トールックの『懷疑者の柔和』中にある『旅長』は此の人の事なり。二一年神學准允者として卒業し、私塾講師として講義し、二四年東方文學の特別教授としてデウェッテの後を襲ふ。二五年普蘭士政府の給費にて和蘭及び英國に文學的旅行をなし、二六年ハレ大學よりタナップの後の神學正教授として招かれ、之に應じて一生を獻ぐ。但し一八二七年二八年には普蘭士公使の附屬牧師として羅馬に行きたり。ハルレにてはゲセニウス及びウェヒシャイデルを代表者として唯理主義勢力を占め、彼は初の中反對と非難を受けしが形勢は頓に變り、其後ハルレの神學科は堅固に福音主義となれり。一八七〇年十二月にはトールックの宣外にも其友人等彼が教授就任五十年紀念會を行ひ、ハルレ大學及び執政官をはじめ諸

大學講神學校の代表者之に參列し、歐洲及び亞米利加に在る彼の弟子等は彼の家の附近に一神學校を立て、給費神學生を養ひ、永久に彼の獻身を紀念したり。トールックは健康弱き方なりしが、節制と規律正しき習慣とにて最後の年まで能く通例の業をなすに堪ふるを得たり。彼は講義を休まず、大學說教者として規則正しく說教し、其間に多くの書を著はせり。重なる著書は『罪と贖』一名懷疑者の眞の聖別』、『デウェッチのテオドロスに對する』、『日出國神々者よりの拔萃』羅馬書註解』、『約翰傳註解』、『日出國神々者』（最良の註解）、『希伯來書註解』、『詩篇註解』、『福音史の信ずべき事』（ストラウスの神話說の反對）、『基督信徒禮拜の時』二冊（多くの讚美歌を含み最も敬虔の精神に充つ）等にして『日出國神秘者』を除けば以上は何れも屢々版を重ね英譯あり。此外『大學說教集』五冊あり。當時の最も雄辯なる說教者たる面目を躍如たらしむ。尙『雜論集』もあり。最後の著作は宗教改革以後の獨逸教會史なり。『第十七世紀に於けるウイッテンベルヒのルーテル神學』、『第十七世紀の學校生活』、『唯理主義歷史』是なり。彼は又カルヴィンの福音書及び書翰註解及び『インスチチューッ』を飜版し、自らはルーテル徒なるに拘ばらずカルヴィンを獨逸に紹介す。多年文學雜誌を出せし事もあり。ヘルツォグの宗教事業編纂に關しては初め自ら出版者より編纂者として招かれしも之を辭し、出版者に向ひて編纂者としてヘルツォグを推薦し、自ら事業中に寄稿せし所多し。

トールックは第十九世紀の中間五十年に於る獨逸の最も感化ありし神學者にして、英米人に知らるゝ事他の人よりも著し。彼は獨創的にして、新鮮にして光彩あり、暗示多く、能辯にして、詩と機才と溢れ

に富めり。何れの學派にも偏ぜず。敬虔派、モラヴィア派、シュライエルマッヘル。ネアンデルよりは勿論ヘーゲルよりも感化を受けたり。其の心は常に新しき光明の爲めに開きて、而も其の心は直に正途を請み、基督に對する信と愛とを動かす事なかりき。語學には非凡の才あり。英、佛、以、希臘、亞剌比亞諸語其他古代語、近世語を自國語の如く語り、此點に於ては『カルディナル』メッチョファンチと雖も彼に優るを見出し難かりき。兩者は羅馬にて相會ひしなり。トールックは此等の諸語の文學より萃を拔きしが、而も信仰を助くる用となせり。神學界に於ては彼は獨逸神學の更生者なり。之を其の唯理主義の生命なき不毛地より救ひ出して、聖書と宗教改革文學の樂野に導きたり。其の個人的感化もネアンデルを拓したるものなり。其の個人的感化もネアンデルを除きては同時代に比なし。彼には一種の磁力と會話の力とありき。子女を有せぬ者から、學生を子の如く愛し、第二回の妻また善く之を助く。彼は牧師よりは牧師候補者を前途嶄達の望あるものたる故にとて愛したり。其の生涯は學生と僧なる生涯なりき。毎日十一時より十二時迄と四時より五時まで、學生二三と連く散步するを習とし、自由に彼等を家に招き、其の心を試驗し、難問を提出し、高等の問題を計論せしめ、知識と德と敬虔とを刺激し鼓吹したり。彼は又個人性を重ずること强く、凡て一人一人に向ひ、集まりて一學派を作らんよりも其の各自の特殊の召命を感ずべきを勸め、洗禮のヨハネの如く常に彼等を己れより大なる主に引き合はせ、自己は唯だ彼等を救主に對する信仰に至らせ、之に對する愛を起させんことを目的とし、ウィンフェンドルフの警語『我には唯だ一の情あり、即ち彼なり、唯だ彼なり』といふを自ら系すと言ひたり。其の講堂は實に基督の學校なりき。是れ實に彼の使命と功績の在る所にして、世界各地の學生は彼より靈的生命を傳へられたるを感ぜり。米國人は殊に彼を愛し、混沌たる獨逸神學界の北斗となせり。エドワルド、ロビンソンも彼と親しかりき。チャールス、ホッヂはハルレにて彼に近く接せり。ヘンリー、ビー、スミスもブレンチスも。アンドーヴァルのパークも彼と接したり。彼は是等を愛すること深かりしと云ふ。

トレゲルス サミュエル プリドークス Tregelles, Samuel Prideaux, LL.D.

人名　一八一三—七五　英國の聖書學者。ファルマウスのウォードハウスプレースに生れ、ファルマウス古典學校にて教育を受け、一八二八年より三四年迄グラモルガンシヤのニースアベー鐵工場に使はれ、三六年ファルマウスにて家庭教師となる。少時より新約聖書原文の研究に熱心し、二十五歲の時希臘新約聖書の批評的版行をなし、七世紀前の文書より引きたる原文とユウセビウスかも入れて初代教會著者文書よりの引用とを附し出版せんとの計劃を立て、生涯之に勉强せり。三八年最初の見本を出版し、四四年始めて『默示錄』を出す。古代原本を對照せんため三たび歐羅巴に行き、四五年には五ケ月間羅馬に留りてウァチカヌス原本を見ることを許されしも、之を對照するを許されざりき。四八年出版計劃の豫告を公にし、五七年に至て始めて馬太傳馬可傳を出す。希臘原文を併せてイェロニモスの拉丁譯をもアミアチヌス原本の對照より附加せり。六一年第二部を出せしが同時に不隨症にかゝり、七〇年にも病再發せしも其の事業を續け、七二年第六部を出し、七九年結論を含める第七部を出し

て大成せり。此の外彼は六一年にザクシオス原本を、六八年ムラトリアヌス聖經を出版し、又『英人新約聖書希臘同字索引』、『同索引』、『英人舊約全書希伯來及びカルデヤ語同字索引』の原稿を改訂し、又出版を監督し、ゲゼニウスの『希伯來及びカルデヤ語字書』を英譯し、ホルンの『聖書總論』の第十版の第四冊を著作し『但以耳書預言的幻象に就て』、『聖馬太福音書の原語』、『ヤンセン徒』、『新約諸文書の著者及び傳達の歷史』、『希伯來文法要題』、『希臘語新約聖書の印刷原文書に就て、附けたり其の批評的草理に由れる改訂』を著はせり。トレゲルスの父母はクェーカル派なりしも、彼は少よりプリマスブレッレンに入りしが、後又之より離れぬ。彼は慈善博愛の事にも活動したり。五〇年聖アンドリウス大學より法學博士號を贈らる。六三年政府より一百磅の年金受給者とせられ後二百磅を受く。七〇年英語聖書改譯會社の新約部に招かれしも病のため出席する能はざりき。

トレト フランセスコ Tolet, Francis

人名　一五三二—九六　イエスイト派最初の『カルディナル』、倫理學者、講經學者。西班牙コルドヴァに生る。サラマンカにて學び、同大學の哲學教授となり、羅馬に轉任して又哲學教授たり。法王位の相續の時大なる稱歎を受け、外交に用ひられ、クレメンス八世より『カルディナル』とせらる。シクトス五世及びクレメンス八世は彼をウルガタ譯聖書新出版の靈力者の一人とす。註解及び哲學的著作多き中に『アリストテレース論理學の緒論』、『インストルクチオ、サケルドゥム、デ、セプテム、ペカチス、モルタリブス』は有名なり。彼者は佛蘭西語、西班牙語に譯せらる。

トレント會議 Council of Trent.

事蹟

羅馬教會の認めたる第十九回世界會議（或者は第十八回とす）にして、チロルの南部以太利に屬する地に在る一市トレント（原名トリデンツム）にて、一五四五年十二月十三日より一五六三年十二月四日まで間隔を置きては引き續き開かれし會議の名也。教義及び戒規の點に於ては羅馬教會史上重要の會議にして、自教會の性質を明白にし、プロテスタント教會との關係を明にしたるものなり。羅馬教會の信仰及び實行の最高標準は此に依て造られ、一八七〇年のヴァチカヌス會議に至りて之を補へり。此の會議の開かれしは第十六世紀の宗教改革の呼び起したるものにして、新舊兩教徒とも之を要求せしを、法王延の政策のため歷々延期せられしが、最後に法王パウルス三世の命に由り、當時神聖羅馬帝國の一自由市にして公會議の支配せしトレントにて、特に羅馬教會の會議として召集せられ、一五四七年三月疫病を避くるためボロニヤに移され、四九年九月十七日無期限に停會せられ、五一年五月一日ユーリウス三世に依てトレントにて再び開かれ、サキソニーのモリツが皇帝カルロス五世を敗り、五二年四月二十八日ティロルに進軍せしため、衆に中斷せられ、一五六二年一月十八日ピウス四世に依てまた召集せられ、六三年十二月四日まで續き之を最後として終りたりき。此の會議の歷史は三期に分つべし。一五四五年より四九年迄と、五一年より五二年迄と、六二年より六三年までとなり。最後のものは最も重大なり。

此の會議の決議及び法典は、一五六四年一月二十六日法王ピウス四世の教書に依て確定せられ、此の教書は凡ての加特力教徒に嚴從を命じ、法王の命なくして之を解釋したる者をば悉く破門すと

し、解釋の權は獨り法王にあり、之に從はざる者は全能の神と其の使徒とを侮得と保羅の震怒を受くべき者也と宣言せり。會議の三時期には各々種々なる議員參列し、終に近づく程增加せしが、七百六十四人ありしてふニカヤ第一會議ほどには達せざりき。決議に調印せし者は二百五十五人にして、其中法王代理四人、カルディナル二人、教長三人、大監督二十五人、監督一百六十八人、而して其の三分二は以太利人なりき。

會議の目的とせし所は（一）プロテスタント主義の教義を否認し、天主教會教義の分爭點を確定すること、皇帝が初め之を一般の世界會議とし、プロテスタント徒をも公平に發言せしめんと欲したりしは眞なり。メランクトン。プレンチウス其他の獨逸ルーテル派の人々が一五五二年トレントへ向ひて出立せしも事實なり。されど彼等は發言權を與へられず、効なくして歸れり。（二）第二の目的は戒規改革にして、正直なる加特力教徒は、何人にても改革の出で來りしを無理ならずと思へる程なりしを擾亂せんためなりき。

二十五回の公開會議開かれしが、其の半は嚴肅なる式を行ふためなりき。おもなる事は委員の手にて行はれ、結局の處理は法王代理が行ひたり。而して羅馬の法王延は凡て自由的分子をば壓服及び陰謀にて排除し終り、當時耳目に明なりし弊害をば廢し、教罪券販賣、僧侶道德、僧侶教育などに關する戒規上の改革をば採用又は修正したり。此點に於て宗教改革は羅馬教會の利益となりしこと同教會の史家も之を許せり。されど教義に就ては有力なる議員中プロテスタント教の如き聖書至上權威と、信仰に由て義とせらるゝことを多少唱へし者なきに非ざりしも、其

等は少しも容れられざりき。

會議の教義的決定は法令と法典とに分たれ、法令は羅馬教義の積極的論明を含み、法典はプロテスタント教の見解を否認せるものなり。其の論旨明白痛切にして智慧に充つ。殊に人の義とせらるゝ事に關する法令は、能力と神學上の博識とを示せり。されどプロテスタント教義をば極端に誇大して表はし、眞の異端説と混同したり。

會議は以太利、葡萄牙、西班牙、佛蘭西、ネテルランド、波蘭、及び獨逸帝國の天主教部分にては承認せられしが、大抵王の特權に就きて保留せる所あり。佛蘭西にては一度も正式に公布せられざりしが、教義の方面のみは承認せられたり。英國は貪てこれを採用せしことなし。ビウス四世は蘇格蘭の女王メリーに書翰を添へて法令を送り公布せんことを求めしも、メリーはジョン、ノックスと宗教改革との面前に於て之をなすの勇氣なかりき。

此の『法典及び法令』を始めて出版したるはパウロ、マヌチウスなり（一五六四年）。其後各國語に譯せらる。會議の議決及び討論の原本は書記長盤骨アンゼロ、マサレリ六冊の四折大書冊として調製せしが、三百年間出版せられずして在りしを、一八七二年オラトリウムの僧アウグスチン、タイネル（Theiner）其の幾部を出版せり。されど大抵の公文書私報告は第十六世紀中に知られ居たり。ル、ブラット（Le Plat）のトレント會議史は最良の文書集なり。會議の歴史にては自由の思想を有して半プロテスタントたりしグネチェの『フラ』パオロ、サルピの著（一六一九）と法王側の『カルディナル』スフォルザ、パラヴィチノの著（一六五六—五七）と相並んで最も善し。

トロアス Tmas. 地名　イージアン海に瀕する小亞細亞の邑にして、チネドスと稱する一小島に對す。此邑所在の全地方は一體にトロアスと稱せられたれ共、今日は之をトロアドと稱す。ムシアの西北に在り。使徒保羅はシラス及びテモテと共にムシアを經てトロアスに來り、此處よりマケドニヤ傳道の途に就けり（徒十六の六—十）。傳説に依れば リンダカスとクチヤスとの間に在るポケトスと稱する村に、保羅及びシラスがトロアスに來りし時獻げたりしといふ教會あり。此傳説は思ふに保羅の此時の旅行を云へるものなるべし。哥後二の十二には保羅が後又此地に來りし事を記せり。

トンケル派 Tunkers. 『ドンケル派』の條を見よ。

ドー ロレンゾ Dow, Lorenzo 人名　一七七七—一八三四米國メンヂスト派の説教者。コンネクチカト州カヴェントリーに生れ、一七九八年年會に入り、間もなく除名せられ、再び何所にへも入會せざりしが、教義と實行とにてはメソヂストの人なりき。合衆國、英國、愛蘭を巡回して説教し、天幕集會の法を英國に輸入したり。其の衣服風采よりして感情過激なるを表し『気狂へるドー』とまで呼ばれしも、熱誠と天成の能辯とにて聽衆を得、悔改者を起せり。著書多し。

獨逸 Germany. 地名　名は羅馬時代に於て、西ライン河、北バルチック海、東ヴイスツラ及びカルパシアン諸山、南ダニウブ河に依りて境せられたる國に與へられたる者にして、羅馬人は歴々日耳曼諸族を征服したれ共之に勝つこと能はず。後に至り却て彼等の襲ふ所となりたり。此種族の中最も著名なるをアレマンニ（Alemanni）及びフランクス（Franks）となす。前者に初めて基督教の傳はりたるは紀元三百年の頃にして、其進歩遲々たりしが、第六世紀にはコンスタンス、バーゼル、ストラスブルグに監督管區の基礎置かれ、其法律には基督教を以て國教と稱するに至れり。後者は第五世紀の頃ゴールを征服し、此處にて初めて基督教に接し、後アレマンニ人と戰ひて之に勝つに及び、其將クロヴイス自ら洗禮を受け、其部下も亦多く彼に倣ひたりき。（此後の歴史に就ては『佛蘭西』及び『シャーレマンネ』の條を見よ。）獨逸が一個の王國となりしは、八四三年に結ばれたるヴェルダンの條約に初まり此條約に依りてシャール大帝の帝國は分裂し、獨逸は大帝の孫ルドウイグ（又はレウイス）の領する處となりたりしが、更に強大なる統治者の必要起るに及び、サキソニー侯ハインリヒ選ばれて王となり（九一九—三六）。其繼承者オット一世九六二年羅馬に於て法王ヨハネ十六世より帝冠を戴けり。彼は獨逸をして歐羅巴の最大強國となし、神聖羅馬帝國を恢復したりしが、爾餘の諸王は其權力を保つ能はず、獨逸諸邦の王公亦各々獨立を欲したりしかば、オット三世（九八三—一〇〇二）の帝國主義は一時獨逸諸邦の王公及び獨逸教會と衝突を來したりき。然れ共爾後國勢降運に向ひ、ハインリヒ三世の時獨逸は歐羅巴の運命を支配するの地位に達したりしが、ハインリヒ四世に至り羅馬法王と衝突し、國運衰頽の兆を呈したりき。一〇七七年ハインリヒ四世はカノッサに於て遂に法王に屈從したりしが、帝國と法王との爭は爾後二百年間繼續したりき。（『グレゴリウス第七世』の條を見よ。）ハインリヒ五世は一一二二年ウォルムス條約を結びて法王と交讐したりしが、十字軍、寺院的運動、教會律の發達等は何れ

も教會の權力を增長し、第十二世紀に至りては教會の權力は其最高點に達したりき。ロチール二世（一一二五—三七）はスカンディナヴィア及びスラブ諸國に基督教を傳へ、且獨逸帝國の政治的主權を擴張せんため、インノーセント二世と和睦協同したりしが、フレデリック、バルバロッサ（一一五二—九〇）は再び法王と爭端を開きて敗れ、一一七七年ヴェニスに於て法王と講和せり。オット四世（一二〇九—一四）は法王インノーセント二世より破門せられたりしが、フレデリック二世（一二一二—五〇）の時に至り、法王との爭鬪は止みたりしも貴族の權力增長し、是より中央の權力衰頽し、國家分裂の勢をなしたりしかば、シャール四世は此勢を防壓せんため黄金令なるものを發し（一三五六）、七選擧侯の制を立てゝ一方に法王の干渉を防ぎ、他方に都市の獨立を防ぎたりき。而して此黄金令は一八〇六年神聖羅馬帝國の解散せらるゝに至る迄其基礎律たりき。當時羅馬教の僧侶は漸次腐敗し、不品行と爭鬪とに由りて教會を汚し、中世の神學的運動も次第に衰微を來したりしが、第十四世紀の頃より神秘教獨逸に起り、靈的基督教を重じ、教虔の念を奬ふことを努め、第十五世紀に至りて益々盛大に赴きしが、第十六世紀に至りて、歐羅巴を振動せるルーテルの宗教改革運動は獨逸に起りたり。獨逸に於ける此運動は神學的、宗教的及び政治的爭鬪を經て、一六四八年ウエストファリア條約に於て、ルーテル派とレフォルムド派とが羅馬教と同權を得るに至りて始めて終結せり。事の次第は『宗教改革』『アウグスブルグの告白』『アウグスブルグの講和』『シュマルカルド同盟』『シュマルカルドの戰爭』『三十年戰爭』『ルーテル』『メランクトン』等の條に記せるを以て爰に略す、併せ見るべし。又第十八世紀に起りたるモラヴイヤン派の運動に就ては其條を見るべく、第十八世以後今日に至るまで起りたる神學的運動は『獨逸神學』の條に記載せるを以て就て見るべし。

現今獨逸帝國と稱するは、一八七一年普佛戰爭後立てられたる聯邦にして、北の方バルチック海、丁排及び北海、南の方瑞西及び墺太利匈牙利の間に横はり、廣袤廿萬八千八百十方哩、人口六千六十萬五千人（一九〇五年調）を有す。此中羅馬教會の信徒（レフォルムド及びルーテル派）三千五百廿三萬餘人、猶太教徒五十八萬六千九百餘人あり。概して論ずれば、南獨逸には羅馬教盛大にして、北獨逸にはプロテスタント教勢力を有す。羅馬教の盛なるは即ちボーゼン、シレシア、バイエルン、バーデン、アルサスローレン、ライン流域、及びウェストファリア並に西普蘭士の一部にして、此等の諸邦は五大監督管區（コローン、グネセンボーゼン、ミウニヒ、フライシング、バムベルグ及びフライブルグ、ムンブライガウ）に分たれ、更に廿監督管區に小分せらる。イエスイト徒は一八七四年に國外に驅逐せらる。一八七一年ゲアチカン會議の結果法王無謬説の公布せらるゝや、舊カトリック派と稱する分離派起り、彼等はボンに監督を置く（其條を見よ）。シュレスウイグホルスタイン、メクレンブルグ、ハノーヴェル、ブランデンブルグ及びサキソニー諸邦は略ど全くプロテスタント也。プロテスタント教會に於てはレフォルムド派とルーテル派との合同早くより計劃せらしが、此計畫は普蘭士及びナッサウに於ては一八一七年、バラケネートに於ては一八一八年、バーデンに於ては一八二二年遂行せられたりしが、一八六六年普蘭士がハノーヴェル、シュレスウイグホルスタイン及びヘッセを併合せし時は、前二邦の住民はルーテル派に屬し、後一邦の住民はレフォルムド派に屬し、此等の諸邦に於ては合同實行せられざりき。獨逸帝國は北米合衆國と同じく、全く相異れる聯邦が政治的に結合せるものにして、宗教に關する一切の事は帝國之に干渉せず、聯邦の自由に委せたり。故に國家と教會との關係は各邦相異じからず。公認教會は全國を通じて福音教會と羅馬加特力教會のみなれ共、バーデン及びウュルテムベルグの二邦は之に猶太教を加ふ。又國家が羅馬教に對して加ふる制限も各邦同じからず。バイエルンにては教會の發する命令を審査して後其發布を認可すれ共、其他の諸邦は之を届出でしむるに止る。僧職を設置し、又は之を變更するには國家の認可を要すること、國家は教會の行政に對して監督權を有することは、各邦相同じと雖も、僧職任命に關する條件及び教會行政監督の方法等は各邦各々相異れり。福音教會は普蘭士、ウュルテムベルグ等の如き邦に於ては、國家の元首を以て其首長となすを以て、其國家に對する關係羅馬教會と同じからず。邦に依りては教會の發する命令には國家の樞關の參與を要すとなせる者あり。普蘭士は此點に就き規定して、教會の發する法規は國王の認可を仰ぐ以前に於て、內閣より國法上不都合なき旨の認證を受くることを要し、又其法規の公布文中に右の認證を經たる旨を明記するを要すと云ひ、又凡て教務上の法律命令は其何れより出づるを問はず、國法と矛盾せざる範圍に於て有効也と云へり。又僧職に任命せられたるものは政府の承認を經ざるべからず。教會を組織する綱要は評會の同意を要し、教會の徵收する租稅は政府の同意を經るを要すとせらる。從て公認教

會は教會として團會に議員を出し、教會財産の租稅を免除せらるゝの特權を有す。又國家は公認教會のために其權力を用ゐて、必要の場合には宗教上の命令を强制し、若くは教會に租稅を徴收することあり。又議會開會の際には公認教會の儀式に依りて儀式を行ひ、兵營、教育院、監獄等には公認教會の禮拜所を設け、公認教會の祝祭日を法律にて定め、小學校の科目に公認教會の教義を加へ、大學の神學科を設くる等のことなし、又公認教會の僧侶を國家の官吏に準じて待遇し、其兵役、租稅を免除する等のことを爲せり。

編普教會の政治は、國家の元首を以て其首長となすこと前云へるが如くなれ共、其權力を行使するや、國家の機關なる政府を以てせずして、別に教會の機關に依りて之を執行す。此機關を宗教總務院（Oberkirchenrath）と稱す。宗教總務院は國王に代りて一教派の教務、殊に教會の立法を掌る者なれ共、重大なる事件は國王の許可を經るを要すとせらる。宗教總務院の下に、各府縣に教務院（Konsistorium）なる者置く。其議員は其都内に於て教務のために働く役員及び各教會の牧師を以て組織す。而して別に各府縣には一名宛の教監を置きて府縣内の宗教行政を司らしむ。教務院の外にシノッド（Synod）あり。教會組織微教の方法を講ずる會議にして、總會、府縣會、郡區會に分れ、議員は教區三分の一普通信徒三分の二より組織せらるゝ者となす。

獨逸カトリック派（ドイツ） German Catholics

Deutsch Katholiken）　宗派名　一八四四年ロンゲ（Ronge）及びツェルスキ（Czerski）指導の下に、獨逸に在る羅馬教會より分離せる一派。ロンゲ及びツェルスキは共にもと羅馬教會の僧侶なりしが、之より分離してスタナイデミユウルに『クリスチヤン、アポストリック、カトリックス』教會を建てたり。然れ共ロンゲは極端なる偏理派にして、其一致せるスキは編普主義プロテスタントにして、對照せる點にあるのみ。此派第一處は唯羅馬教會に反對せる點にあるのみ。大體に國の總會は一八四五年ライプチヒに開かる。大體に於てはプレスロウの信仰告白を採用し、會衆の多くは之を承ぜり。然れ共幾ならずして内部に分裂を生じ、又墺太利よりは追放せられ、普漏士にては其僧侶を承認せず。一八四八年以後會衆は分離し、羅馬教會に復歸するもの少からず。一八五九年其多數は『自由教會』に轉ぜり。一九〇〇年の調査に依れば會員の數サキソニーに於て僅に二千人を有するのみなりき。

獨逸神學（ドイツシンガク） German Theology.

獨逸神學の歴史は二分して、ルーテルの時より第十八世紀の終迄を第一期となし、シュライエルマッヘルの時より現時に至る迄を第二期となすべし。左に其概要を示す。

事蹟

（一）第一期（一五一七―一八〇〇）　宗教を以て誤りなき組織的思想也となし、其思想は信條に明記せらるゝが故に、基督教徒たらんとする者は此等の信條を研究し領解し信奉せざる可らずとなせるは、此時期の特色にして、此時期は更に分ちて三期となすを得べし、即左の如し。

（イ）建設の時代（一五一七―八〇）　此六十三年間は、羅馬教とプロテスタント教との區別漸次明かになりたる時代にして、プロテスタント教徒は聖書を以て信仰の唯一の標準となせしが、聖書に記されたる眞理を組織的に表明せんために、多くの信條及び信仰告白を作れり。プロテスタント神學上の根本的觀念は、羅馬教が神を以て僧職なる王者に比し、いと高き寶座に坐し、法王又は祭司を通じて人間を支配し、之を賞罰し給ふ者也となせるに反し、神を以て人類の父也となし、父なるが故に人は直接神と親係を結び得べき資格あり、即ち人は皆神の子にして、信徒は一般祭司也と云ふに在り。從て又プロテスタント教は人に無限の價値あり、又自己判斷の權利ありとなせり。プロテスタント神學は又羅馬教が外部の行爲を重じ、之に依りて救はるべしとなせるに反し、信仰に由りてのみ義とせらるべしと說けり。此時代に於ける神學者としては、ルーテル（一四八三―一五四六）メランタトン（一四九七―一五六〇）及びケムニツ（一五二二―八六）を擧ぐべし。

（ロ）正統神學組織の時代（一五八〇―一七〇〇）　此時代の神學者等は、宗教を以て知性に基くものとなし、基督教は明瞭なる思想にして、其思想は之を組織的に表明すべき者也となして、頗る精密に之を研究し論理的に之を組織せり。從て彼等は信條を尊重すること甚しく、之に權威を附し、尸等の信條すべき要件は擧げて此中に在りとなし、聖書を學ぶことよりも寧ろ信條を學ぶことを以て重要也と思惟したりき。此時代に於ける有名なる神學者はゲルハルド（一五八二―一六三七）キヤリキタス（一五八六―一六五六）クェンステッド（一六一七―八八）の三人也とす。

（ハ）正統神學衰頽の時代（一六五〇―一八〇〇）　獨逸の正統神學は宗教の知的要素を過重し、情的及び實踐的要素を看過したりしが故に、其結果之に對する反動起り、正統神學は爲めに土崩瓦壞するに至れり。當時の哲學及び科學も亦知的要素を過重したりしが故に、此等のものも亦正統神學と共に衰頽の

原に遭遇せり。知的要素過重主義に對して起りたる反動は左の四種也。

（a）敬虔派（Pietism）　知的方面を過重せる正統神學に不滿を感じ、活ける情的宗教を起さんとして現はれたるものにして、其最も重を置きしは、當時の冷淡無味にして活ける精神を失へる基督教に反し、基督教徒たる實際の資格を奬ふ點に在りき。此運動直接の首唱者はフィリプ、ヤコブ、スペーネル（一六三六―一七〇五）にして、彼に次で出で最も大體に此主義を實行せるは、アウグスト、ヘルマン、フランケ（一六六三―一七二七）也。此派は實際的宗教を重ぜしが故に、神學上に影響を及ぼすこと甚だ少かりき。（『敬虔派』の條を見よ）。

（b）偏理派（Rationalism）　此時代は所謂啓蒙時代（其條を見よ）にして、獨逸に於てはライプニッツ（一六四六―一七一六）を以て偏理主義の祖となすべく、ウォルフ（一六七九―一七五四）之を祖述し、其羅辨の哲學を通俗的に解釋せり。彼は自然神學と天啓神學とを區別し、前者の中に在る眞理は後者の中になかるべからず、去れど後者の中に在る眞理にして前者の中に無き者もあるべしと論じたり。レッシング（一七二九―八一）が神學上に及ぼしたる感化は頗る大にして、彼は理想的永遠の宗教と歴史的の宗教とを區別し、時に々々の不充分なる思想と言語とを用ゐたる凡ての歴史的宗教は變化し進歩すべき者なるが故に、永遠の眞理は未だ人間の者とならずと論じ、又耶蘇の宗教と弟子等の宗教との區別を立て爾後の神學研究の道を開けり。セムレル（一七二五―九一）は歴史的批評神學の先驅者にして、神學と宗教とを區別し、聖書のインスピレーションに關する古來の傳說を破り、其自由研究を主張し、基督自身の宗教も當時の人々の信解し得る程度に於て示されたる自然宗教也と論じ、且猶太教的基督教と保羅的基督教との區別を認め、チウビンゲン派所說の基を爲せり。偏理主義所說の要點を擧ぐれば、第一は聖書を以て最高權威となせる正統說に對して、道理を以て最高權威となし、道理を以て說明し得可らざる聖書の記事は一切排斥せる事、第二は信仰に依りて義とせらると云へる正統說に對し、德行に依りて義とせらると云へる事を以てせる事是也。此偏理說は正統神學を倒したれ共、カントの批評哲學起るに及びて自ら倒れたり。（『偏理派』の條を見よ。）

（c）ロマンチシズム（Romanticism）　又感情的自然主義ともいふべく、宗教以外に起りたる運動にして、神學に直接の影響を及ぼさざりしが、獨逸の重なる文學者技術者を生み出し、國民に文藝美術の興味を與へたる事著大なりしを以て、自ら非宗教的感化を及ぼしたりき。大體より云へば、ロマンチシズムは知的偏重に對する情的反動の一種と見るべきものなれ共、他面に在りては又從來の擬古主義の客觀を重じ形式を重ずるに反し、主觀主義自由主義を執り、感情及び想像の豐富にして且神秘なる事、生活行動の隨意自由にして拘束なき事等を尊び、人生賞ぶべきは自然に在りとの事を鼓吹したり。ウインケルマン、レッシング、ヘルデル、ノワリス、シルレル、ベスタロッヂ、ゲーテ等は此派の最も重なる者也。

（d）批評哲學（Critical Philosophy）　ロマンチシズムが自然及び自由を唱へ、盛に舊來の儀式習慣を攻擊しつゝありし時に方り、舊來の哲學思想　破壞せんとして出で來れる一勢力あり。是れ即ちカントの批評哲學にして、彼は觀念通りの事物實在せりと思考したりし偏理派の說を基て根本的に誤れりとなし、實在、實體又は因果の如き觀念は皆心の作用の原則のみ、斯る悟性の形式（カントは之を名けて範疇と云へり）は先天的に我心中に定めらるゝ者にして、外來の刺激あれば、之に適合する所の觀念を造る事宛も型を以て物を造るが如し、故に吾人が認識する所のものは物夫れ自身に非ずして唯現象のみ也と論じ、理性の權能に大なる制限を加へ、遂に神を以て不可知的のものとなしたり。彼は『純粹理性批判』に於て此の如く破壞的態度を取りたれ共『實踐理性批判』に於て神學的改造を試み、人の道德性は當然の前提として自由と靈魂不滅と神との三大眞理を承認す、是等は純理の範圍に於ては論定すること能はざれ共、實踐理性の要求としては之を承認せざる可らずと論ぜり。（カントの條を見よ）。

此の如くして起り來れる諸種の反動は、正統神學に對する猛烈なる破壞力となり、前期に於て建てられたる正統神學は斯くして漸次崩壞したり。

（二）第二期（一八〇〇―現代）　此時代の神學は複雜を極め、諸種の思想及び諸種の運動起りたれ共、大體より之を云へば、宗教は人間が己の無力を感じて全く神に信賴する特殊の感情也といふが此時期の特色也。此時期は更に四期に區別するを得べし。即ち左の如し。

（イ）哲學的批評時代（一八〇〇―三五）　カントの批評哲學は當時の神學の上に大なる打擊を與へたり。何となればもし彼の主張したりしが如く、客觀世界の眞相のみならず、神も亦不可知的のもの也とせば、宗教的信仰の根據は自ら動搖せざるを得ざれば也。斯る場合に方りて到達し得べき道三あり。其一は懷疑にして、當時カントの哲學に由り全く宗教

に無頓着となりし者少からざりき。其二は盲信にして知性もし全く頽む可らずんば、信仰に由るの外なし。此思想はカントの直ぐ後の時代に羅馬教會に入りたり。其三は更に確實なる信仰の根據を發見せんとする者にして、感情の方面と形而上學との方面より神學を新に建設せんとする者起るに至れり。第十九世紀の初め三十五年間は實に此哲學的建設の時代なりし也。此時代の最も重なる學者は、シュライエルマッヘル及びヘーゲルなれ共、シュライエルマッヘルの前に出でたるヘルデル。ヤコビ及びヘーゲルの前に出でたるフィヒテ。シェリングの四人は吾人之を看過するを得ず。ヘルデル（一七四四—一八〇三）は活ける感情と實際の生活に重を置き、カントの冷なる義務的宗教に反し、善と愛との滿ちたる宗教を主唱し、又歴史的基督教を講究せり。ヤコビ（一七四三—一八一九）はカントと同じく、理性は唯現象を知るのみにして實體を知ること能はずと說きたれ共、理性を以て知る能はざるものも信仰に依りて之を承認することを得べし、故に信仰は理性の缺陷を補充するものも云ひ、宗教に定義を下して、宗教は理想を事實とする信仰也、即ち理想を事實也と信ずるが宗教也と云へり。フィヒテ（一七六二—一八一四）はカントの哲學の消極的にして建設的の要素足らざるを認め、之を補充完成せんとしたる者にして、彼は以爲らく、物の實體は不可知なれ共、既に不可知と云へば何物をか知れるを意味す、何となれば絶對的に凡ての物を知らざれば、不可知と云ふことさへ言ふこと能はざれば也、且不可知のものは決して知識の根源たること能はずと。彼に依れば物共れ自身は全く不可知的に非ずして不知的なる也。又彼は萬物悉く客觀的の存在物に非ずして悉く主觀的の存在物也と云ひ、實體なも亦主觀物也となせり。シェリング（一七七五—一八五四）はフィヒテの此所說に滿足すること能はず、我の存在は非我の存在の必要條件なるが如く、非我の存在も亦我の存在の必要條件也、故にフィヒテの所謂我なる者は絶對的の者に非ずして相對的の者也、絶對的の者は我と非我とを超越したる者ならざる可らず、精神及び自然の反對差別を超越して、而かも兩者の根本たるものならざる可らずと云ひ『無意識的存在者』なる者を案出し、我と非我とは是より分出すとなせり。以上の四人は此時代に於ける神學の先驅者と目すべき者にして、建設者としてはシュライエルマッヘル及びヘーゲルの二人を推さゞるを得ず。シュライエルマッヘル（一七六八—一八三四）は聖教を以て或る教義を信じ、又は或る儀式を守る事に非ず、神に對する敬虔なる感情也となし、此敬虔なる感情を基きて、有限なる我が無限なる神に信賴する絶對的憑依の感情也と云へり。而して彼は宗教の眞體は救に在りとなし、救の觀念及び事實は基督教に於て最も完全に顯はれたりと云ひ、基督を以て基督教の中心となし、一切の教義經驗儀式は基督を中心として定むべき者也と云へり。彼は斯く宗教を神學及び儀式と區別して此等の者に優れる者なる事を示し、又基督を以て宗教及び神學の中心となしたりしと共に、宗教の研究は歴史的ならざる可らざることを主張し、基督教の社會的方面を發見し、個人の救は個人のみにては得べからず、自他相助け相補はざる可らずとのことを明にし、又各宗派間に寛容の精神を鼓吹し、宗教上神學上多大の感化を與へたり。ヘーゲル（一七七〇—一八三一）はカント及び其以後の哲學說の不備を補はんとし、絶對は一個の實體に非ずして、斷へず造行しつゝある作用也、此造行作用其物が絶對也、故に一切の現象は神自身の活動也、宇宙とは要するに自意識を起したる神の事也と說き、而して此造行作用を說くに正（Thesis）反（Antithesis）合（Synthesis）の作用を以てし、之を三一論と名け、哲學の基礎也となせり。彼は斯る見他より出立して、神の內在を主張し、創造の思想に新意義を與へ、創造とは一種の造行作用也、宇宙の造行作用是れ創造也と說きて、宇宙萬有の新化發展を明にし、彼の所謂絶對者は一の無差別純粹の存在者に非ずして、多くの差別を有する最も複雜なる存在者也と說きて、神學上の三位一體論に貴重の貢獻をなし、シュライエルマッヘルと共に、歴史上の基督が基督教の中心なる事を主張したれ共、彼に反して宗教を以て絶對者に對する一種の知識也となし、又天地萬有は悉く合理的なるが故に、自然界は凡て可知的也と云ひ、歴史上の出來事は偶然に非ずして論理的なる事を明にして、歴史研究の上に新なる興味を與へ、斯くして神學上に著大の感化を與へたり。（以上諸學者の性行學說に就ては各々其條下を見よ）

（ロ）批評的歴史的時代（一八三五—六〇）　建設的時代終りて批評的歴史的時代來りぬ。此時代は哲學の見地より歴史の意義及び順序を講究せんとしたる時代にして、シュライエルマッヘル及びヘーゲル死して、其弟子等各々其師の說の一部を執りて之を主唱せしかば、教會の分派を生ぜり。（a）此時代に於ける神學派　分ちて左の諸派となすべし。（あ）聖書學派　當時の哲學的神學說の空理なるを感じ、之を棄てゝ聖書の教訓に歸り、宗教的實驗を重じたる者にして、バック（一八〇四—七八）之を唱ふ。凡そ五十年間其勢力盛なりしが、學派としては今は

殆ど消滅せり。（い）新ルーテル派　シュライエルマッヘルの宗教的熱情に感化せられて起りたるものなれ共、其シュライエルマッヘルと異れるは第十七八世紀の正統神學說を棄てず、其奉ずる所の神學はルーテルに歸る者也と思惟せるに在り。トマシウス（一八二〇—七五）ホフマン（一八一〇—七七）ハーニス（一八一四—八八）デーリッチ（一八一三—九〇）フランク（一八二七—九四）ルータルト（一八二三—一九〇二）は此派の有名なる學者也。（う）中立派　舊思想にも新思想にも、宗教にも哲學にも科學にも、各々眞理あるを認めて之を調和せんと企てたる者にして、ウルマン（一七六八—一八六五）ローチ（一七九〇—一八六七）ニッチェ（一七八七—一八六八）ツェステン（一七八九—一八七六）ユリアス、ミルレル（一八〇一—七八）ドルネル（一八〇九—八四）マルテンセン（一八〇八—八四）ランゲ（一八〇二—八四）シャフ（一八一九—九三）は其最も有名なる者也。（え）自由神學派　主としてヘーゲルの感化を受け、歴史を以て永遠の眞理の發現也として歴史を重じたれ共、其眞理を領得せんには唯に史的研究の一途にのみ依るべからずとして、思想か最も必要也と考へ、歴史を研究するに先ちて或る思想を豫定せり。此派は又更に三派に分れたり。右派は保守的建設的にして、マルハイニケ（一七八〇—一八四九）エルドマン（一八〇五—九二）之を代表し、左派は之に反し、フェルジナンド、クリスチアン、バウル（一七九二—一八六〇）フォイエルバッハ（一八〇四—七二）ブルノー、バウエル（一八〇九—八二）之を代表す。中派は此兩極端を調和せんとする者にして、ウァイセ（一八〇一—六六）ローチ（一七九九—一八六七）ビーデルマン（一八一九—八五）シュワイツェル（一八〇八—八八）リッチュル（一八三〇—九二）之を代表す。（b）此時代に於ける歴史上の研究　此時代に於ける著しき進歩は神學上に非ずして歴史上の研究に在り。（あ）新約聖書　新約聖書の批評的歴史的研究の先驅者はストラウスにして、彼は一八三五年に出したる基督傳に於て、四福音書は歴史上の事實を示さんために書かれたる者に非ず、宗教上の思想を顯はさんために書かれたる者也と論じ、多くの奇蹟的記事の如きは見て是れ神話に過ぎずと斷じたり。是れストラウスの神話說なる者にして、此說の出づるや、ネアンデル（一七八九—一八五〇）トールック（一七九九—一八七七）ウルマン（一七九六—一八五五）ヴァイゼ（一八〇一—六六）等相讀で之を駁撃し、ししストラウスの說を眞也とせば、聖書の書かれし頃には既に奇蹟的記事を書きたる熱心なる教會ありしと假定せざる可らず、教會もし聖書を作りたりとせば、其教會を作りしものは何ぞやと論ぜり。（『ストラウス』及び『神話說』の條參照。）ストラウスの說は唯に當時の正統神學者の反對ありしのみならず、自由主義なるチュビンゲン派も亦之に反對せり。チウビンゲン派の創唱者はフェルヂナンド、クリスチャン、バウル（一七九二—一八六〇）にして、シュヴェグレル（一八一九—五七）ツェレル（一八一四—八六）ケーストリン（一八二六—八六）ヒルゲンフェルド（一八二三—）等は此派の著名なる學者也。彼等は、初代の基督教には矛盾と衝突と多くあり、彼得、保羅、約翰等各々其色を異にしたりしが、後凡ての說の調和せらるゝに及びて、今の新約聖書は書かれたり、是れ正、反、合の進行作用に從へるものにして、基督教發展の途上目ら然らざるを得ざりし也と論じ、精細綿密に聖書を研究したる結果、四福音書を以て紀元百三十年乃至百五十年に書かれたる者也となし、保羅の四大書翰を以て六十年頃迄の作也となし、其他のものを以て凡て之より遙か後に書かれたるものもとなせり。此說は今日に至りては最早何人も採用するものなしと雖も、新約聖書記者が各々特色を有せることを明にして、聖書の歴史的研究を勵ましたる彼等の功績は沒す可らず。（『高等批評』及び『チウビンゲン派』の條參照。）（い）舊約聖書　新約の智識の進歩すると共に、舊約に關する研究も亦漸く其歩を進め、ウェルハウゼン（一八四四—）はアダム、エバの記事を以て神話となし、アブラハム、イサク、ヤコブ等を以て種族の名となし、モーセを以て實在の人となしたれ共、其記事には多くの誤謬を含めりとなし、エホバは猶太國民の神にして、預言者以前の宗教は唯一神教といふ可らずと云ひ、今日吾人の有する舊約聖書は俘因以後に書かれたるもの也との說を唱へ、論戰一時大に盛なりき。舊約聖書の批評に於て有名なる人々はゲセニウス（一七七八五—一八四二）デウェッチ（一七八〇—一八四九）エワルド（一八〇三—七五）リーム（一八三〇—八〇）ウァトケ（一八〇六—八二）デーリッチ（一八一三—九〇）クエネン（一八二八—九一）ブッデ（一八五〇—）等也。（う）教會歴史　此方面に於ける最も著名なる學者はネアンデル（前出）ギーズレル（一七九三—一八五四）バウル（前出）ハゼ（一八〇八—六二）ローチ（前出）ハルナック（一八五一—）ローフス（一八五八—）等也。（え）リッチュルの時代（一八六〇—九〇）　ヘーゲルに至りて最も緻密精細を極めたりし哲學は、科學の進歩と共に不信任を來し、其影響竭なく神學及び

宗教に及びたりしが、リッチュル奮起して實驗的宗教を唱へ、衰頽せる宗教を恢復せんと企てたり。即ち彼は宗教を以て現在に活きて働く所の經驗也となし、凡ての教義は必ず經驗に基かざる可らずとなせり。故に彼は形而上學的思辨に極力反對し、基督教の教義に附隨せる形而上學的思辨は希臘思想の感化にして、基督教の眞髓に非ざるが故に、正當なる基督教神學には凡て形而上學的思辨を除去せざる可らずと論じ、又神學と科學的宇宙觀とを混合するの不可なるを論じ、如何なる科學的證明も神の存在を立證す可らず、唯基督教的經驗かなしたる者のみ天父としての神を知り得べしと云ひ、又宗教と歴史との範圍を區別し、宗教は現在の活ける經驗に基くものなるが故に、過去の事跡を研究する歴史には全く關係する所なしと云へり。彼の所謂經驗とは罪が赦されて神と和らぎたりとの感情と、罪の束縛より脱するより生じたる心の自由と、特別なる道德的能力との義にして、彼は教會を以て此經驗かなせし者、又此經驗を後代に傳ふる者の集合體也となし、教會の最大なる務は此經驗を世々國々に傳ふるに在りとなし、而して基督を以て教會の起源、神人間の仲保者也となせり。彼はロッツェの感化を受けて知的判斷と價値判斷とを區別し、凡て宗教上の判斷を以て價値的判斷也となせり。彼の神學說は此の如く甚だ單純にして、思辨的考察を要せざりしが故に、此說に依る時は三位一體論、奇跡論の如き難問に遭遇するの要なく、何人も安じて宗教を信ずる得たりしを以て、彼の說は一時一世を風靡するの概ありしが、今や漸く其勢力を失墜しつゝあり。『リッチュル』の條を見よ。

（ま）現代の獨逸神學（一八九〇年以後）分ちて正統派、リッチュル派、リッチュル派以外の自由派の三派となす。（あ）正統派　又分ちて數派となす。（あ）絶對的教權派　信仰上の主權は教會、聖書、信條、傳說に在りとし、個人に思想の自由を許さゞる者にして、是れ羅馬教會取る所の態度也。（い）舊ルーテル派　一八一七年に成りたるルーテル派とレフォルムド派との合同を非とし、ルーテルの教義を尊重し、逐語的インスピレーション說、聖書無謬說を唱へ、ルーテルの信條には聖書と同樣なる權威ありとし主張す。此派の人々は多くは牧師にして、其數少けれ共、自由主義者排斥運動には極めて熱心也。（う）新ルーテル派　合同を是認する事、及び舊ルーテル派程ルーテルの信條に重を置かず、レフォルムド派の信條を採用するも可也となす點に於て、舊ルーテル派と異れり。此派は聖書を重ずると共に教會の權威に重を置き、又自由主義者排斥運動に甚だ熱心也。獨逸多數の信徒及び牧師は此派に屬す。此派に屬する重なる神學教授はペット。ストラック。イメルス。ケーニヒ。ルットゲルト。ツァンツは現今獨逸に於ける保守派の巨將也。（え）聖書尊重派　傳說、教義に重を置かずして、新約聖書を重じ、其教訓の値を奉ずべしとなす者にして、ハルレ大學のケーレルは其最も重なる者也。彼は活ける信仰を重じ、宗教は知識學問に關する所なしと云ひて、實驗神學を主張せり。其リッチュルと異るは、彼が正統說を棄てず、神秘派に反對せざる點に在り。（お）現代的積極的神學派　一九〇〇年頃ルーテル派より分れたる者にして、古來の傳說、教義は批評的に研究せざる可らずといふ事と、福音を現代の人々に宣傳するには、現代の人心に適合する方法を用ゐざる可らずといふ事の二點に於て、舊新ルーテル派と異れり。此派の有名なる人々をゼーベルグ。クロバトシェック、テオドル、カフタン等となす。（か）中立派　ハウプト。カウチェは此派の最も有名なる者なれ共、此派今は勢力少し。（き）リッチュル派　分れて三派となる。（あ）右派　保守的リッチュル派にして、リッチュル程には傳說を排斥せず。彼等は天啓の實有、歴史上の基督、實驗的基督教を主張すると共に、形而上學の必要を主張す。此派の重なる學者は伯林大學のカフタン及びウォッパーミン、ゲッチンゲン大學のカッチンブッシュ（一九〇五死）ハルレ大學のライシラ（一九〇五死）にして、カフタンは其師呂ハルナックと比肩し、一八九八年其『組織神學』を出版す。是れリッチュル派組織神學出版の嚆矢也。ウォッパーミンは一八九九年『形而上學及び神學』を著はし、形而上學なき神學を建つるの不可能なる旨を論ぜり。（い）中派　此派の重なる神學者はハルナック及びローフスにして、共に歴史家也。ハルナックは純粹の基督教は基督の教へたる宗教のみにして、基督以外の者の傳へたる基督教には何物をか混入せりと說き、ローフスはハルナックに比すれば稍や保守的也。（う）左派　最も極端なる一派にして、最も有名なる學者はヘルマン也。彼は形而上學に反對し、宗教上の實驗を高調し、特に基督の權威を重ぜり。（え）リッチュル派以外の自由派　又數派に分る。（あ）自由神學派　ヘーゲルの右派とシュライエルマッヘルの左派とを合して成り、凡そ七十年間存續し來れる者にして、フライデレルは其最も著名の學者也。彼はヘルマンに反し、形而上學なくんば神學は立つ可らずと云ひ、經驗に顧ほれたる理性、殊に歴史に顧ほれたる道理を重じ、宗教上の權威を以て基

督教の理想に在りとなせり。（い）宗教歴史學派　十四五年前初めて世に出でたる新學派にして、ハイデルベルヒ大學のフロッチュ、伯林大學のグンケル、ゲッチンゲン大學のブーセットを以て其最も著名なる代表者となす。彼等は何れも新約聖書の專門家なれ共、フロッチュは最も哲學的趣味に富めり。彼等以爲らく、凡ての宗教は一方より見れば同じく天啓に依りて起り、他方より見れば均しく人類の心理的作用に依りて起りしものなれば、基督教の優れる點を知らんとせば、必ず基督教の起りし時代の諸宗教を精細に比較研究せざる可らずと。斯くて彼等は新約聖書研究上當時の宗教の比較研究の必要を主張せり。彼等は又傳說を排斥し、超自然的要素を拒否し。基督教を自然的科學的に說明せんとせり。現今此派は獨逸に於て最も極端なる神學派なれ共、熱心なる宗教的精神を有し、現時の獨逸國が無宗教の有樣に在るを慨し、教會に留まりて其類勢を挽回せんとしつゝあり。（う）科學的哲學的神學派　此派は前者に比して更に極端なる一派にして、ブルノー、バウエルを創唱し、初代基督教を以て悉く神話也となし、基督の歴史的人物なりやさへ之を疑ひ、若し然りとするも福音書に顯はされたる基督は一種の夢想家が理想的に描出せるものに過ぎずとなせり。然れ共此派に屬する者は少數に過ぎず。

ドイッチュ　エマヌエル　オスカル　メナヘム　Deutsch, Emanuel Oscar Menahem

人名　一八二九—七三　獨逸の東邦學者。猶太人の子、普蘭士領シレシアのナイゼに生る。叔父は博學のラビにて幼時彼を教育す。長じて伯林にて學び、一八五五年より死に至るまで大英博物館圖書館の助師たり。チェンバー百科辭典、キッテル聖書辭典、スミス聖書辭典等の諸項を書き、又諸雜誌に多くの寄書をなす。幼時より『タルムド』を研究し之に關する大册の書を著はさんと志し、一八六七年『四季評論』上に『タルムド』に關する文章を公にして有名となる。其文は佛蘭西、獨逸、露西亞、瑞典、和蘭、丁抹語語に譯せらる。されど過勞のため病を發して間もなく死す。六九年と七二年とに東邦を訪ひしことあり。希伯來學の外に梵語、カルデヤ語、アラム語、フェニキア語にも精通したり、獨逸語聖書（ドイッチェ・ビブル）German Versions of the Bible.

聖書が高地獨逸語に譯せられたるは、ウルフイラス（三八一年死）のゴチック譯ありしより數百年後の事にして、第八世紀に至り教會は獨逸語を使用せり。當時聖書中の單本の譯語

アウロガルス及びロラリウスなど之に任じ、毎週一回彼の居宅に集りて商議したりき。

ルーテルは直ちに原語より繙譯し、舊約は一四九四年のプレシヤ版な、新約は一五一九年版のエラスムス經文を使用せり。彼は當時の最良なる語學者といふを得ざりしかども、獨立して事を爲すに足る學力を備へ、語學的造詣の足らざりし處には、其正確なる註釋的直覺力と、聖書の靈的理解力とにて補へり。其繙譯には多少誤譯あり、殊に約自記及び預言書の難解の部分に於て之を見るべしと雖も、全體として之を見れば彼の繙譯は正確也と稱するを得べし。彼は經外聖書の繙譯にはあまり注意せず、拉丁譯より之を繙譯せり。獨逸語の上より之を論ずれば、彼は最も其事業に適せり。彼は徹頭徹尾獨逸人にして、其獨逸語は著しく力あり き。彼は直譯者たるを避け、明白にして且純粹なる獨逸語に之を繙譯せんとしたり。故に其危險はあまりに自由なる點に在りと雖も、彼が聖書の文字に對する崇敬心は此點に於ける誤謬を少からしめたり。然れ共彼は言語を强むる必要ありと思惟せる場合には、大膽に文字な添加せることあり。例之羅三の廿八に『唯』の一字な添へ、『人は唯信仰に由りてのみ救ばる』となしたるが如し。其言語は明白、快活にして力あり、豐富にして流暢、高尚にして正し。彼が適當なる言語な用ゐんとして如何に苦心したりしかば、彼が『我等は約百記な繙譯しつゝあり、而して時としては四日な費して僅に三行を終りしことあり』と云へりしに依りて知るべし。

ルーテルの聖書は宗教改革の事業な獨參する上に於て非常なる勢力な有したりしのみならず、是れ實に國民的書籍といふべき者にして、獨逸語を一定し、高地獨逸語な以て國語となさしむるに與りて力あり。即ち未だ百年ならざるに此書は教會及び學校に於て一般に使用せられ、低地獨逸語は方言となるに至れり。然れ共此書に對して苛酷なる批評な加へし者全く之れなきに非ず。エムゼルは即ち其一人にして、彼は此書は異端的誤謬と虚僞とに滿てり、何が故に一般人民の之な讀むな禁ぜざるやと云ひ、ウィシリウス及び羅馬教會も亦同一の立場な取りて此書な排斥せり。然れ共ルーテル及び彼の朋友は斯る批評な以て顧みるに足らずと爲せり。

ルーテル派教會はルーテルの繙譯な以て完全にして改正な要せずと思惟したるに非ず。之が改正の必要あることは何人も疑はざる處なれ共、之な改正するに方りてはルーテルの精神に於て之な爲さゞる可らず。私改譯はマイエル（J. E. Meyer）クラウス（Krauss）及びホップ（Hopf）に依りて成されたり。ルーテル譯の經文に彼此相違な生じたることは、更に改譯運動な促し、遂に一八五七年のスタットガルト、一八五八年のハムブルグの教會會議に於て委員な選手し、一八六三年のアイセナハ會議に於て委員な任命せり。此委員は聖書全部の改譯な企てり。新約は一八六七年ハルレに於て公にせられたり。羅馬教會はルーテル譯聖書の警くべき成功な默視すること能はず。ベリンゲル（Beringer）はルーテル譯に多少の變改な施したりしが（一五二六）ヒエロニムス、エムゼル（Hieronymus Emser）は更に多くの變改な施したりしが（一五二七）後者は數版な重れたりき。次でヨハン、エック（Johann Eck）新約は之なエムゼルに取り、舊約は之なルーテル以前の繙譯より取りて出版したりしが、世人の注意な引くに至らず。一五三四年メンツに於てドミニカン派の僧博士ディーテンベルゲル（Dietenberger）の聖書出でたりしが、是又創作的繙譯に非ず。此聖書は後ウレンベルグ（Ulenberg, 一六三〇）及びメンツの神學者等（一六三二）に依りて改譯せられ『公教會聖書』（Catholic Bible）の名な以て羅馬教會の使用する所となれり。

第十八世紀以降新繙譯若くは改譯な企てたる者少からざりしが、其の中にて最長なる者はベレンブルグ聖書（Defenburg Bible）と稱する者也（一七二六—四二）。デ、ウェッテ（De Wette）の繙譯（一八五八）も亦最良なる者の一にして、彼は註釋的才能に加ふるに、簡短にして綾列なる言辭な巧に使用するの才な有せり。舊約全書の部分的繙譯の中に在りては、エワルドの預言書（一八四〇）エワルド（一八三五）及びマイエル（一八五四）の詩歌的の書は殊に佳也。新約全書の繙譯は頗る多く其中最良と稱すべきものはウァイツセーケル（Weizsäcker）のそれ也とす（一八七五）。

獨逸レフォルムド教會（ドイツクワイ）　German Reformed Church.『レフォルムド教會』の條な見よ。

ドーウィー　ジョン　アレキサンデル　Dowie, John Alexander　人名　一八四八—一九〇七　米國ザイオニスト教會の創立者。『タリスチャン、カトリック派』の條な見よ。

ドウクオボル派（ドウホボル）　Dukhobors.　宗派名　露西亞の非國教の一派にして、多くの點に於てメニーカル派に類似せり。一七四〇乃至五〇年カルクコウ政府の下に起り、一八〇一年頃露西亞政府之なシウリダに移し、三七年又トランスコウカシアに移せり。第十八世紀の終より第十九世紀に至り、露西亞政府のため創しき迫害な蒙りしが、トルストイ伯及び

英米二國のクエーカル教徒の助な得て、彼等の多數は露國な去り、一八九八年にはタブロに移住し、九九年には七千五百人の多數加那太に移住せり。財産の點に就ては彼等は共產主義な來し、教習、祭儀及び形式的婚姻な排斥せり。彼等は極西北の或る地點に教主顯はるべしと信じ、一九〇二年其多數之に逃はんとて其地方に向ひ出發したりしが、非常なる困難に遭遇して歸り來れり。此派の事はモウドの『ドウクオボルス派』（一九〇五）に詳也。就て見よ。

同仁教會（ドウジンクワイ）　The Dojin Kyokwai.　宗派名　日本のユニヴァルサリスト派の名。初め『宇宙教會』と稱し、後『ユニバルサリスト教會』と改稱せしが、又『同仁教會』と改めたり。『ユニヴァルサリスト教會』の條な見よ。

道德的證據論（ドウトクテキショコロン）　又は道德論的證明　Moral Argument.『有神論』の條な見よ。

同胞教會（ドウホウケウクワイ）　『基督同胞教會』の條な見よ。

動物（ドウブツ）　聖書の　Bible Animals.　物名

聖書には事實として、又は比喩的に、許多の動物の事な記せり。而して此等の動物の形狀、習性等な多少理解するに非ざれば、聖書の意義の明ならざる場合又なきに非ず。然れ共聖書は素より科學の書に非ず。而して聖書の記載せられたる時代の猶太人は、殊に動物學の知識に乏しく、隨て其分類の如きも唯外形の類似するに從ひて之な爲したるに過ぎざることなれば、今日より其何物たるやな研究し繙き者少からず。下等動物に於て殊に然りとす。左に記するは聖書に記載せられたる動物の概要な說明したる者にして、主として英國の牧師ジェー、ジー、ウード（J. G. Wood）の『聖書動物』（一八九二版）に依れり。聖書の動物な研究せし學者少からざれ共、自らパレスチナな視察して、聖地の動植物な明にしたるなトリストラムとなす。其『パレスチナの動植物』（一八六七）は斯道の指針となすべし。此條項な分ちて哺乳類、鳥類、爬蟲類、魚類及び無脊椎動物の五となす。

【哺乳類】（一）猿、猿屬の聖書に記されたるは僅に三回に過ぎず。其一は王上十の廿二にして、此處には『そは王（ソロモン）海にタルシヽの船なもちてヒラムの船と共にあらしめ、タルシヽの船なして三年に一度金銀、象牙、猿猴及び孔雀な載せて來らしめたれば也』とあり。其二は代下九の廿一にして、其處にも同樣の事な記せり。其三は賽十三の廿一にして、邦譯聖書は牡山羊と譯したれ共、獅々なるべしといふ。當時パレスチナには猿屬なし。是れは善し之な印度より輸入したりしなるべし。希伯來語聖書にはコーフ（קוף）とあり。英譯は Ape と譯し、邦譯は猿猴（又は猿）とせり。今日の分類に依れば Ape は尾なき猿、即ちスマトラ、ボルネオの猩々、印度の猿猴な云ひ、日本の猴は Macaque に屬すれ共、聖書のコーフは單に『さる』と云ひん程の義にして、尾のある猿な指したるものなるべし。猿猴とせず、單に猿と譯するか可とす。

（二）蝙蝠、希伯來語にても拉丁語にても、蝙蝠とに『夜飛ぶもの』の義にして、聖書は禁食動物の中に之な數へ、又憎むべきものゝ喩となせり。賽二の廿、廿一に『其日人々已が邪せんとて造れる白銀の偶像と黃金の偶像とな鼠の穴、蝙蝠の穴になげすて岩々の陰、嶮しき山峽に入り、エホバの起ちて地な震ひ動し給ふ其見るべき容貌と威のかゞやきとな避けん』とあるは、鼠、蝙蝠の光明な厭ふ狀の小人に似たるな云へる也。利十一の廿に『又凡て翅翼のありて四爬にあるく所の爬ふもの（邦譯に昆蟲とあるは誤れり）は汝等には忌はしき者也』とあるは、蝙蝠の義也。パレスチナには如何なる種類の蝙蝠ありや明かならざりしが、トリストラム近年聖地に入りて動植物な探求し之な明にせり。彼れがパレスチナの中央に或る洞穴にて捕へたる者は、翼な擴ぐれば二尺に餘る褐色の鳥なりしといふ。此は果實な食する者にして、人の食し得べき者也。モーセが以色列人に食するな禁じたりしは蓋し此種のものなりしなるべし。トリストラムが又エリコ邊の洞穴にて捕へし者は、小なる者にして、細長き尾飛膜の外に達したりしといふ。此外パレスチナ所產の蝙蝠にして分明なるもの十五種ありといふ。

（三）獅子、現今パレスチナには獅子居らずなりたれ共、古昔は許多住みたりしと見え、聖書に引かるゝこと頗る多し。希伯來語の獅子は亞剌比亞語より出で『力』の義也。故にヤコブは死に臨み『ユダは獅子の子の如し、我子よ汝は所掠物なさきて歸りの臥る、彼は牡獅子の如く伏し牝獅子の如く蹲る、誰か之な爲すことなせん』（創四十九の九）と云ひて、ユダ族の强かるべき事な預言し、箴廿八の一、世一の世、母後十七の十、廿三の廿等にも、勇氣な獅子に喩へたり。摩三の四に『獅子もし獲物あらずば豈林の中に吼へんや』とあり。三の八に『獅子吼ゆ、誰れか恐れざらんや、主エホバもの言ひ給ふ、誰れか預言せざらんや』とあり。蓋しアモスはテコアの牧者なりしが故に、天地寂寞たる夜靜々獅子吼な聞き

たりしものなるべし。獅子が夜な〳〵餌を求むる狀は詩百四の廿、廿一に記され、隱れ潛みて獲物を待つ狀は詩十七及び十八に記され、其洞の狀は耶四の七、獅四の八に記さる。獅子を捕ふるには、洞の側に網を張り、石を投げ犬をけしかけ杙して獅子を怒らせ、此網にかゝるやうなす也（詩九の十五、世五の八、賽五十一の廿）。ヨブが『神我を虐げ其網をもて我を包み給へり』（伯十九の六）と云へるは、自らを狩場の獸の如くなりしに喩へたる也。其他陷阱を掘りて之を捕ふることも亦屢々聖書に見ゆ。ダニエルが王の命に逆ひたりしため獅子の穴へ入れられたりしと云ふを見れば、ダリヨス王は多くの獅子を蓄ひたりしが如し（尙結十九を見よ）。

（四）豹　現今パレスチナには多くの豹を見ずと雖も、古昔に在りては頗る多く住したりしが如し。トリストラム一行の探險隊は死海及びタボル山等にて豹の足跡を見、又カルメル山にて捕獲せしといふ大なる牝牡の豹を實見したりしといふ。現今にても此獸は死海の邊に住し、シナイには更に多く住せりといふ。希伯來語ナメル（נָמֵר）は『斑點』の義にして、斑點を有するより斯く名く。『エチオピヤ人（黑人）其膚なかへ得るか、豹其斑點なかへ得るか、若し之をなし得ば惡に慣れたる汝等も善をなし得べし』（耶十三の廿三）と云へるは人口に膾炙せる語也。ハバクが『其馬は豹よりも迅く』（哈一の五）と云へるは、カルデヤ人の軍勢の向ふ所敵なきを示し、ヒが『斯るが故に我れ彼等に向ひて獅子の如くなり、途の傍に潛み窺ふ豹の如くならん』（何十三の七）と云ひ、エレミヤが『林より出づる獅子は彼等を殺し、アラバの狼は彼等を滅ぼし、豹は其邑をねらふ』（賽五の六）と云へるは、群生禽獸の徒に神の審判の思はざる時に至るべきを云へる也。

（五）犬　パレスチナの犬には三種あり。通常の飼犬、羊を護り狼に手向ふ大形の犬、及び其面の狐に似たる獵犬是也。パレスチナの犬は我國のに比すれば稍や猛惡にして、人の屍體を食ひ、又は馬、驢駝等の屍體の遺棄せられたる者あれば、夜間出でゝ之を食したりしといふ。是れ此獸の猶太人のために忌まれたる所以にして、聖書は常に野犬を賤しむべき者、忌むべき者に喩えたり。ゴリアテが少年ダビデを罵りて『汝杖を持ちて來る、我豈犬ならんや』（撒前十七の四十三）と云へるは、我を傷る勿れの意『如何なれば汝死たる犬の如き我を咎顧み給ふや』（撒後十八）とはヨナタンの子の讒辭『此死たる犬何ぞ我が王を詛ふべけんや』（撒後十六の九）とはアビシヤイ王を詛ふべきか（王下八の十三）と云ふを見れば、ダリヨス王は多くの獅子を蓄ひたりしが如し（尙結十九を見よ）。

（四）豹　現今パレスチナには多くの豹を見ずと雖も、古昔に在りては頗る多く住したりしが如し。トリストラム一行の探險隊は死海及びタボル山等にて豹の足跡を見、又カルメル山にて捕獲せしといふ大なる牝牡の豹を實見したりしといふ。現今にても此獸は死海の邊に住し、シナイには更に多く住せりといふ。希伯來語ナメル（נָמֵר）は『斑點』の義にして、斑點を有するより斯く名く。『エチオピヤ人（黑人）其膚なかへ得るか、豹其斑點なかへ得るか、若し之をなし得ば惡に慣れたる汝等も善をなし得べし』（耶十三の廿三）と云へるは人口に膾炙せる語也。ハバクが『其馬は豹よりも迅く』（哈一の五）と云へるは、カルデヤ人の軍勢の向ふ所敵なきを示し、ヒが『斯るが故に我れ彼等に向ひて獅子の如くなり、途の傍に潛み窺ふ豹の如くならん』（何十三の七）と云ひ、エレミヤが『林より出づる獅子は彼等を殺し、アラバの狼は彼等を滅ぼし、豹は其邑をねらふ』（賽五の六）と云へるは、群生禽獸の徒に神の

（六）狼　現今にてもパレスチナには狼の住するを見れ共、古昔は尙多く存在したりしこと疑なし。トリストラムの一行はパレスチナにて幾度か狼に逢ひたりしが、此獸の用心深きため一頭をも捕獲し得ざりしといふ。此地の狼は普通の種にして、歐洲產のよりも大にして色は稍や淺しといふ。聖書には此動物を十三回記したれ共、直接に狼のことを記したるものなく、何れも猛惡の輩の比喩として記せるものゝみ。例之『ベニヤミンは物を噛む狼也、朝に其所掠物を喰ひ、夕に其所獲物を分たん』（創四十九の廿七）と云ひ『其中にある公伯等は食を擄く所の豺狼の如くにして、血を流し靈魂を滅し物を掠取らんとす』（結廿二の廿七）と云ひ『其審士は明旦迄に何をも遺さざる夜求食する狼の如し』と云ひ（番三の三）『僞の預言者を謹めよ、彼等は羊の委にて來れ共內は荒き狼也』（太七の十五）と云ひ『往け我れ謝實を遣はすは羔を狼の中に入るゝが如し』（路十の三）と云へるが如し。又耶蘇は自らを、狼を禦がんがため一命をも惜まざる牧羊者に喩えたり（約十の一—十六）。

（七）山犬　亞細亞の溫暖なる所、亞非利加の全部及び歐羅巴の南部に、狼よりも小にして狐よりも稍丈高き獸あり。是れ英語にてジャカル（Jackal）と稱する者にして、邦語聖書は之を野犬又は山犬となせり。希伯來語シュアル（שׁוּעָל）は意義明ならず。時には狐の意義にも用ゐられしを以て、欽定英譯は一般に狐と譯すれ共、邦譯の如く之を區別するを可とす。此獸は狐よりも寧ろ犬に近く、犬と狼との間に在るもの也。糸數群をなして夜求食をなし、田園を荒し、人畜の屍骸を食ひ、羊を追ひ、時には牛馬にさへ向ふことあり。詩六十三の九、十に『我靈魂を尋れ求むる者は…劍の刃にわたされ、野犬の獲る所となるべし』と云へるは之に喩へ取れる也。斯る獸の事として人里離れたる處に住するより、榮華の消えて跡なき示さんとて、イザヤは『豺狼其城の中になき、野犬榮華の宮に叫ばん』（賽十四の廿二）と云ひ、エレミヤは『シオンの山は荒れはて山犬其上を歩く也』（哀五の十八）と歌へり。士師記に『サムソン乃ち往きて山犬三百を捕へ、火炬を取り尾と尾を合せて其二の尾の間に一の火炬を結びつけ、火炬に火をつけてペリシチ人の未だ刈らざる麥の中に

放ち入れ、其麥束積みたるものと、未だ刈らざるものを焚き燒檔の間に迄及ぼせり』（十五の四、五）と云へる記事あり。當時此獸のパレスチナに頗る多かりしを知るべし。

（八）狐　狐は食肉類なれ共又葡萄の實を好みて葡萄園を荒すを以て、雅歌には『我等の爲めに狐を捕へよ、夫の葡萄園を害ふ小狐を捕へよ、我等の葡萄園は花盛りなれば也』（二の十五）と云へり。狐の狡猾なるは何處も同じ。故に耶蘇はヘロデ、アンチパスの二心あるを嘲りて『狐』と云ひ（路十三の廿二）以西結書には僞の預言者を『荒城に居る狐』に喩へたり。アンモニヤ人トビヤがネヘミヤのエルサレム神殿を修復するを嘲りて『彼等の築く石垣は狐上るも崩るべし』（尼四の三）と云ひしは、狐が夜求食を爲すに極めて靜に歩むに喩へ取れるものにして嘲罵の極みたるもの也。狐は穴居す。故に耶蘇は『狐は穴あり、空の鳥は巢あり、去れど人の子には枕する所なし』（太八の廿）と云ひて狐の安處を有するを羨めり。

（九）ヒエナ　亞非利加及び亞細亞の一部に、其頭鼬の如くなれ共全體の容貌犬に似たる動物あり。ヒエナ（Hyæna）と稱す。ヒエナに三種あり。其二種はサハラの砂漠以南に住し、身體に縞の條あり。他の一種は亞非利加の北部、小亞細亞、波斯、印度に住す。山犬を除きパレスチナに此程多き獸他に之れあるなし。邦譯聖書には此獸のことを記さざれ共、骨前十三の十八の『ゼボイムの谷』とはヒエナの谷の謂也。又耶十二の七—九に『斑殼ある鳥』と譯せるは、七十人譯にヒエナとあり。七十人譯を正とす。ヒエナは猛獸に非ざれ共、又容易に人に馴れず。村里に委棄せる鳥獸の死屍、さては墓中の死骸なあぢき食し、最も人に忌まる。是れエレミヤが罪の卑しき狀態に喩へたる所以也。

（十）鼬鼠　舊約の律法に汚れたる獸として以色列人の食するを禁じたるものゝ一に、鼬鼠なる語あり（利十一の廿九）。希伯來語クォレッド（קוֹף）なれ共、此語は此處に之れあるのみにして、他に之れなきを以て、精密に意義を定むること難し。或は鼠なりなれば、鼬鼠と見て可なるべし。

ヒエナ

（十一）獾　『汝赤く染めたる牡山羊の皮をもて幕屋の蓋をつくり、其上に獾の皮の蓋を施すべし』（出廿六の十四）と云へる外、出埃及記には幕屋の蓋とする獾の皮と云へること屢々之れあり。民數紀略には、營を進むる時至聖物の上に獾の皮をもて覆ふべしとあり（四の六、八等）。此獸パレスチナには數多けれ共、當時以色列人の漂泊せるシナイ地方には多からざりしが如し。此獸は穴居の動物にして之を捕ふること容易ならざれば、其皮を幕屋の蓋とするが如きは頗る困難の業也。此處に獾と譯せる希伯來語タクァシ（תַּחַשׁ）は海豚、鰐魚、腹鰭獸等を總稱せる亞剌比亞語と極似するより、鰐魚なるべしと想像せらる。鰐魚は鯨の類にて紅海には多く住す。營一丈程もあり、皮厚ければ幕屋の蓋となすを得べし。

（十二）熊　聖書に熊とあるは西利亞熊にして、熊の一種也。形大にして牛馬を攫み裂きて喰ひ、又人を害すること大也。パレスチナには森林の減少するに從ひ、熊も亦漸次減少すれ共、レバノン、ヘルモンの諸山には今も尙多く住す。人里近き處にてはゲネサレ湖邊に出沒す。夏秋の頃食物多き時は高山に住すれ共、冬日食物乏しきに至れば人里近く來りて畑を荒し、又羊、山羊等を捕へ食す。ダビデが牧場を守りし時、獅子と熊と來りて羊を捕へし故追て之を殺せりと云へるは是也（撒前十七の廿三—廿六）。熊は自ら人を害せんとする者に非ざれ共、人之を怒らしむる時は其勢猛くして恐ろし。アモスが『人獅子の前を逃れて熊に遇ふ』（摩五の十九）と云ひしは斯る時のことなるべし。王下二の廿四に、二頭の牝熊林中より出でゝ四十二人の兒童を刺けりと云ふも亦斯る場合のことなるべし。又人熊の仔を捕らんとすれば親熊は怒りて人を裂き殺すべし、故に『其子を奪はれたる熊』は猛り狂ふ者に喩えらる（箴後十七の八、何十三の八、箴十七の十二）。

（十三）蝎　希伯來語のキッポド（קִפּוֹד）なる語舊約に三回見ゆ（賽十四の廿三、世四の十一、番二の十四）。欽定英譯は五位鷺となしたれ共、改正英譯は蝎とし、邦譯又之に從へり。此獸はパレスチナの北方に住す。其種類歐洲產のものと同じ。夜食を求め、蛙、蜥蜴、蛇、小鳥、鳥の卵等を食す。パレ

スチナには蛇、蝮蛇の如き毒蛇多ければ、蝎の多く住するは天佑といふべし。

（十四）**鼴鼠**　塞二の廿に『鼴鼠の穴』と云へる語あれ共、パレスチナには眞の鼴鼠居らず。パレスチナに住するは外觀鼴鼠に似たれ共、鼴鼠よりも大きく、中には一尺以上に及べるものあり。地下に住みて胡蘿蔔、茴香等植物の根を食す。間々穴より出でゝ日に曝を取る。目は見えざれ共、耳敏く、人の足音を聞けば直ちに逃ぐ。又鼻官鋭く香を嗅ぎて其餌を求む。

（十五）**鼠**　希伯來語アクバル（עכבר）は邦語聖書鼠と譯す。原語の意義明ならざれ共『穀物を毀害す』と云へる意義の語より出でたるが如く、田野の産物を害する嚙齧類なること疑なし。此獸はパレスチナに多く產し『地みあちす鼠』と稱せらる（母前四—六）。以色列人に汚穢となる者として食することを禁ぜられたる動物の一也（利十一の廿九）。

（十六）**兎**　モーセの律法に依り以色列人が食するを許されたる獸は蹄の分たれたる反芻者にして、反芻者と蹄の分れたる者の中にも食するを禁ぜられたる者あり。卽ち豚は蹄分れたれ共反芻せざるが故に、駱駝、山鼠及び兎は反芻すれ共蹄分れざるが故に、共に食するを禁ぜらる（利十一の一—八）。然るに今日動物學者の云ふ處に依れば、兎（雲に兎と稱するは野兎也）は鼠、海狸、家兎と同じく嚙齧類に屬し、反芻類に非ず。是を以て此は希伯來語の誤譯か、然らざれば、聖書の誤なるべしと論ずる者あれ共、希伯來語アルネベス（ארנבת）が兎なることは、兎の亞剌比亞語がアルネベなるに依りて知るべし。兎は反芻類に非ざれ共、其体めり同も齒へて反芻を動かすが故に、反芻類と誤られ易し。聖書は宗教の書にして科學の書に非ざるが故に、當時の猶太人の知識に從て斯くは記せるのみ。兎はパレスチナに多く產し、頭廣く、耳長から ず。他は南部及びヨルダンの谿谷に住じ、小にして耳極めて長く、淡褐色也。

（十七）**牛**　雲に牛と稱するは牡牛、牝牛、犢、牝犢等の家畜を總稱す。此等の家畜は現今にてもパレスチナに多く飼養せられ共、古昔猶太國の繁榮を極めし時代に在りては、今日よりも遙か多く飼養せられたりしことは聖書の記事に依りて明也。古昔猶太人は此等の家畜を犧牲に用ゐたりしが故に、之を多く飼養するの必要ありしのみならず、犧牲に供する家畜は完全にして缺なきを要したりしが故に、之が飼養に充分の注意をなしたりき。現今の猶太人は牛を食用に供せざれ共、古昔に在りては之を用ゐ、之がため殊に注意して之を飼養せり。聖書に『肥えたる牛』とあるは卽ち食用のために殊に飼養せられたる者也（箴十五の十七、耶四十六の廿、王上四の廿二、廿三、太廿二の四）。又古昔の以色列人が犢を食したりしことは、アブラハムが天使を饗するに『犢の柔にして善き者を取りて調理せしめたり』と云へる事（創十八の七）及び放蕩息子の父が『肥えたる犢を宰りて』之に與へたりと云へる噺話（路十五の廿七）に依りて知るべし。然れ共當時に在りても、牛の重なる用は農業にして、以色列人が耕耘をなすに重もに牛を使用したりしことは、舊新約書中諸處に散見す。吾人は聖書の中に『犢』なる語の屢々比喩として用ゐらるゝを見るべし。此は牛を耕作に使用するに方り用ゐられたる器具の一也。牛を飼養することは古昔以色列國民の中に在りては、名譽の職業の如く思惟せられたり。故にサウルは以色列王となりし後も牛を飼養し（母前十一の五）ダビデは其王國の組織を完成せし時、府庫を掌り、農業を掌る人等と共に牧牛を掌る人をも擧用せり（代上廿七の廿九）。古代の埃及人は牛を崇拜したりしが（ヨベルの八）、此風は長く猶太人の中にも殘存したりき（『犢崇拜』の條參照）。

（十八）**羚羊**　希伯來語テオ（איל）にして、舊約に二回記さる。一回は牛、羊、山羊及び其他の反芻類と共に、以色列人の食し得べき獸の一として記され（申十四の五）一回は神の刑罰を蒙れる以色列人に嗜えられ『爾書の子等は息たえ〳〵にして網にかゝれる羚羊の如し』（賽五十一の廿）と記さる。英語聖書には野牛（wild bull or wild ox）とあれ共、邦譯の如く羚羊（Oryx）となすを可とす。强大なる獸にして、美麗なる角を有するを以て名高し。今も聖地の邊境に住す。

（十九）**兕**　希伯來語レエム（ראם）にして、七十人譯、拉丁譯共に一角と譯す。然れ共一角と稱する獸は實在せず。小說の一角は羚羊と馬と一角魚とを混合せる假作物に過ぎず。此語舊約に七回見ゆ。第一は民廿三の廿一、廿二にして、此獸の恐ろしき力を有する者なるを示す。次に申卅三の十六、十七にして、モーセは此處にエフライム、マナセを祝して此獸の角に嗜へたり。以て此獸が一角獸に非ずして二箇の角を有するものなるを知るべし。次は詩廿二の十九、廿一及び九十二の十にして、此等の句に依り吾人は此獸が當時以色列國民の熟知せる者なりし事、最も强き動物也と思惟せられたりし事、二角を有する獸なりし事、極惡危險なる動物なりし事、及び家畜と關係を有する獸なりし事を知るべし。次は伯廿九の九—十二、及び詩廿九の五、六にして、此

等の聖句に此獸の家畜と關係を有するものなる事を示す。邦語聖書は之を兕（又は野牛）と譯せり。曾て之を以て印度の犀屬と同一視したることありしが、今日にては學者一般既に絶滅せるウル也と推定せり。

（廿）**獐**　パレスチナに住し、聖書に記されたる羚羊屬凡そ四種あり。其一は希伯來語ツェビ（צבי）と稱し、英語聖書に Gazelle 又は Roe と譯し、邦譯に獐（又は麞又は鹿）となせる者にして、食すべき反芻類に屬する者として、又は比喩として屢々記さる。此語の比喩に用ゐられたるは、母後二の十八、代上十二の八にして、此處には走ることの速なることに嗜えらる。此獸の狩獵のものなることは、箴六の四、五及び賽十三の十三、十四に依りて知らる。又此獸の美しきものなることは、歌二の七—九に情人に嗜へられたるに依りて推知すべし。此獸の肉の食すべきものなることは、申十二の十五、十四の五及び十五の廿二に記さる。此獸は今日にてもパレスチナに普く產し、其肉は美味として稱賛せらる。古代に於ては更に多く產したりしこと疑なし。種類多く、コリンナ、ケヴェラ、コラ等の別あれ共、何れも其價習相同じく、群を爲すを好む。敵に逢へは疾走して逃る。故に獵師の之を捕ふるや、網、保蹄又は陷穽を用ゐ、又獵犬を用ゐて之を捕ふるを常とす。

（廿一）**羱**　羚羊屬の他の一種なるディション（דישון）となす。七十人譯はブガルゴス又はビガルグとなし、邦譯は麞となす。ディションの如何なる者なるや明ならざれ共、現時の學者は之を以て Addax と稱する羚羊屬の一種なるべしと推定す。此美麗なる獸は北亞非利加に產し、現今にてもパレスチナ附近に住するを見れば、古昔猶太人の獵したりしディションが Addax なること殆ど疑なし。其大サ及び攫れたる角有する點に於て酷る南亞非利加のクゥドゥ（kooduoo）に似たり。通常此獸の高サは三尺七八寸、角の長二尺あり。廣く蹄を有し砂地を愛す。羣ひ如く群居せず。聖書には食用に供し得べき獸の一として唯一回記されたるのみ（申十四の五）。

麞（ブガルガス）

（廿二）**小鹿**　羚羊屬の更に他の一種なるヤクムル（יחמור）といふ。英譯に Buffalo（Acronolus bubalis）となし、動物學者が Bubale 又は Fallow Deer 邦譯に小鹿となすもの是也。其形狀羚羊よりも寧ろ牛に類するを以て、亞剌比亞人は之を野牛と稱す。其大サ牝犢と同じく、赭褐色也。頭は長くして狹く、短くして太く一見牛の角の如き角を有す。群居を好み、又人に慣れ易し。現時北亞非利加に廣く產し、紅海附近にも亦之を見るべし。當時パレスチナに多く產したりしこと疑なし。律法上食するを許されたるのみならず。ソロモン王の食膳に上りたる獸の一として玉上四の廿三に記さる。

（廿三）**羊**　羊は宗教的にも政治的にも家庭的にも、以色列國民の生活と最も深き關係を有し、聖書中特異の地位を有す。古代の猶太人は遊牧の民にして、其生活酷る現時の亞剌比亞牧者のそれと似たり。水草の二者は牧畜のため最も必要にして、殊に必要なるは水也。故に牧者は先づ水流の在る處を撰び、もし水流なければ、井を穿ち、嚴に之を閉みて自己所有の羊群のみの使用に供す。羊に水かふは通常正午にして、其頃に至れば羊群は各自の井に集る。於是吾人は『エホバは我が牧者也、我れ乏しきことあらじ、エホバは我を綠の野にふさせ、いこひの水濱にともなひたまふ』（詩廿三の一、二）と云へる詩の意義を知るべし。羊若くは牧者のことを譬喩的に述べたる聖句は酷る多くして枚擧す可らず。詩七十九の十三、結卅四の十三、十四は其最も著しき例也。羊に水かふことは東方諸國の牧者の最も重要なる職務の一にして、其水かふ有樣は創廿九の一—十二、出二の十五—廿一に記さる。日中羊に水かふ井は年若き男女の會合場にして、羊の水を飲む間相互に物語る其中に婚約の成ること少からず。此風習は今も尙殘れりといふ。井、河、溪、泉等が譬喩的に用ゐられたる聖句も亦頗る多くして、一々數へ難し。古代パレスチナの牧者の他の重要なる務は羊群を守護して敵の侵掠を防ぐこと也。故に牧者は武器を携ふるを常とす。牧者は一見して其羊群を知り、羊の名を呼びて之を導く。羊も亦よく其牧者を知り、其聲に從ふ。而して牧者は自ら羊群の先に往き、羊群は其後に從ふ也。耶蘇は『門守は彼の爲に開き、羊は其聲を

聽く、彼れ己の羊の名を呼びて之を引出す、彼れ其羊を引出す時先きに行く也、羊彼の聲を識りて之に從ふ』と云へるは此光景を喩へたる也(約十の三—五、廿六)。羊の用は多し。先づ第一は其肉にして、通常の人には羊肉は寧ろ贅澤品にして、婚礼又は客來の時の如き場合にのみ用ゐらるゝに過ぎざりしと雖も、富者は之を常用せり。羊乳は更に多く使用せられたりしが、古代の其色列人は之に依りてバタ、チーズの如き者をも造りたりしが如し。羊毛は衣服の料として用ゐられ、角は喇叭として用ゐられたりき。羊の最も大切なる用は犧牲にして、羊の如く多く犧牲のために用ゐられたるもの亦他に之れあるなし。モーセの律法には、其場合に從ひ獻ぐべき羊の餘及び牝牡の別等を詳に規定せり。通常犧牲に用ゐらるゝは若き牡羊にして、羊の犧牲として用ゐられざるは、唯贖罪日のみ。此には二の山羊を用ゆ。其他の祭には大抵牡を用ゆ。而して其最も重なるを逾越節の犧牲也とす。耶蘇は逾越の羔に比せらる。(『逾越節』の條を見よ)。

(廿四) 羝　希伯來語ツェメル (צֵמֶר) なる語、一回食し得べき肢の一の名として記さる(申十四の五)。邦語聖書はおほやぎと譯し、羔つるに際なる漢字を以てす。英譯には Chamois とあれ共、シャモイスのパレスチナに住したりし證なければ誤譯なること明也。ツェメルとは飛躍者の義にして、善し疾走を以て著はれたる者なるべし。今日の動物學者は之を以て Kouhol (Ammodragus Tragelaphus) と稱する羚羊なる野羊也となす。此獸は大にして其力强く、非常に活潑なる動物にして、羊よりも山羊の習性を有す。故に今日の亞剌比亞人は之を山羊の中に數ふ。高さ凡そ三尺、全身暗褐色にして、長毛頭より乘れ、牡に在りては冠も獅子の鬣の如し。此獸昔時は埃及に多く住みしが、今はアトラス山脈中に時々發見するのみ。

(廿五) 山羊　山羊は衣食及び犧牲用として、羊と同じく最も重要なる動物也。食物としては山羊は羊よりも多く用ゐらるゝ。成熟せる牡山羊は肉硬く且臭氣あるを以て食用に適せず。食用に供せらるゝは若き仔牡山羊にして、古昔の猶太人に在りては饗應の重なる材料なりき。犢肉に比すれば更に劣れり(路十五の廿九)。猶太人は又山羊の乳を飲料に供し、其毛を衣服の材料に供せり。山羊の皮は水又は酒を容るゝ革囊を製するに用ゐ、又之に依りて麵糟をも製す。山羊は又羊と同じく犧牲に供せられ、殊に贖罪の日に於ては山羊のみを獻げたりき。斯く山羊は羊と同じく重要なる動物なるを以て、猶太の牧者は羊と同一なる注意を以て之を牧せり。山羊も羊の如く牧者の後に從ひ行けども、好みて險阻の地を往き、且決して羊と混交することなし。耶蘇が綿羊と山羊とを分つの喩話は斯くして起れる也(太廿五の廿一以下)。

(廿六) 野山羊　希伯來語エェリム (אֵילִים) なる語舊約に三箇所あり(母前廿四の二、伯廿九の一、詩百四の十八)。英譯は Wild Goats となし、邦譯は單に山羊となす。箴五の十九のヤアラス (יַעֲלַת) は英譯に Roe (改正譯は Doe) となし、邦譯は麁となす。原語は攀登者の義にして、此獸を岩と連結するを見れば、好みて險阻を攀登する者なること疑なく、又約百記に依れば此動物の野獸なること明也。旣約のエェリムが亞剌比亞山羊 (Arabian Ibex or Bedouin Caper, Nubian) なること殆ど疑なく、此獸は七八頭群をなして生息し、今も尚パレスチナに發見すべし。全身灰色にして、冬に至れば白色に變ず。足には黑白の斑點あり。牡は黑き髯を有すれ共牝には之れなし。山中險阻の地に住し、其走ること極めて迅し。其肉は極めて美也。

(廿七) 羚　舊約の羚が如何なる種類のものなりしやは明ならざれ共、其角の枝狀をなしたる者及び掌狀をなしたる者、共にパレスチナに多く生息したりしこと殆ど疑なし。此動物は潔くして食ふ得べき者の一として記さる(申十二の十五)。其肉の稱美せられしことは、ソロモン王の食膳に上りたるに由りて知るべし(王上四の廿三)。此獸の迅く走ることは雲雀五の六、母後廿二の廿三、廿四等に記され、牝羚が最も注意して其子を保護する習性を有することは伯廿九の一、詩廿九の九等に言及せらる。

(廿八) 駱駝　駱駝に二種あり。一は獨峯駝 (Camelus Dromedarius) にして、一箇の隆肉を有する者、他は兩峯駝 (Camelus Bactrianus) にして、二箇の隆肉を有する者也。前者は亞剌比亞に產し、後者は中央亞細亞、西藏、支那に產す。早くより猶太人に用ゐられたるは前者にして、後者は晩代に至りて彼等に知られたりしなるべし。駱駝の最も早く聖書に記されたるは創十二の十六にして、此處にはアブラムが僕婢牛羊等と共に駱駝を携へたりしことを記す。駱駝は古代に在りては一個の富源にして、ヨブは初に三千、後に六千の駱駝を有したりしと云ひ(伯一の三、四十二の十二)ミデア人及びアマレク人は海の砂の如く無數の駱駝を有したりしと云へり(士七の十二)。モーセの律法には駱駝の肉を食することを禁じたれ共(申十四の七)其色列人は其乳を飲用したりしが如し。彼等は之に重荷を負はしめ(王下八の九、代上十二の四十等)又驛車及び梨を曳かしめたりき(雅廿一の七)。又駱駝は又詩作の勝利の義也。駱馬は又詩作の之がために特に之を飼養せるものは、其走ること迅く、聖書は之を通常の駱駝と區別せり(耶二の廿三、裏六十の六)。新約にはバプテスマのヨハネ駱駝の毛衣を著たりと云ひ(太三の四)又耶蘇は二回此動物のことを比喩的に使用したり(太十九の廿三、廿四、廿三の廿四)。

(廿九) 馬　聖書記者は馬を表するに種々の希伯來語を用ひ、其種類の異るに從ひ、牝馬、小馬、戰馬等と稱すること英語邦語等と同じ。馬の重もなる用は騎ること、及び戰車を曳くことにして、戰車の馬をス、(סוּס) と云ひ、騎者をパラシ (פָּרָשׁ) と稱す(王上四の廿六)。聖書の馬が現今の亞剌比亞馬と同種なりしことに就ては內外の證あり。而して此は埃及より輸入せられたりき。或る理由よりモーセの律法は、其色列人の馬を多く飼養することを禁じたれ共(申十七の十六)此律法は行はれず。ダビデもソロモンも共に戰爭に馬を使用し、ソロモンは之を埃及に仰げり。彼が多くの戰車及び騎者を蓄へたりしことは王上四の廿六に明也。

(三十) 騾馬　東方諸國にては騾馬は最も重要なる動物の一にして、先づ第一には乘用として使用せられ、パレスチナにては殊に富者又は貴人の用に供せらる。故にアブラハムはベルシェバよりモリアに三日路の旅行をなすに方り騾馬に乘りたりと云ひ(創廿二の三)其他士師の子孫にして騾馬に乘りたるもの、士師十師記に記載せらる(十の三、四、十二の十三、十四)。ザカリヤは來るべきメッシヤは騾馬の子に乘るべしとの事を預言し(亞九の九)耶蘇は此預言に應じて騾馬の子に乘りてエルサレムに入れり(可十一の一—十)。騾馬に乘ることは謙遜を表することに非ずして、寧ろ勝利の義也。騾馬は又詩作のために使用せられ、其乳は飲料に供せらる。

(卅一) 騾馬　希伯來語アロド (אֲרוֹד) 及びペレア (פֶּרֶא) の二語伯三十九の五に在り。改正英譯も邦譯も共に、二語共野驢馬となす。此動物は學名 Asinus hemippus と稱せらるゝ者にして、亞細亞及び亞非利加に產し、全身灰色にして夏は赤色を帶ぶ。其走ること極めて迅く、山岳を樂とし、性群居を好み、人に馴れ難し。聖地に住したることなきが如くなれ共、其近國に住したりしを以て昔く猶太人に知られたりしが如し。其自由を好み、人を避け、草を追ふて轉移することは、伯廿九の五—八に記されたり(六の五、耶十四の六參照)廿四の五には惡人と其行爲との喩として記さる。其外此動物に就て記さるゝ處少からず(創十六の十二、伯十一の十二、耶二の廿四等)。

(卅二) 騾馬　騾馬の聖書に記されたるはダビデの時より以後の事にして、新約には全く記載せられず。其初めて記載せられたるは母後十三の廿九にして、次は十八の九也。此處には以色列王及び其王子の騾馬に乘りたること記載せらる。利十九の十九には騾馬を繁殖せしむ可らずとの禁制あるを見れば、此等の騾馬がパレスチナにて繁殖せられたりしとは思惟し難し。思ふに以色列人は之を使用するは差支なしと思惟し、ダビデの時より以後埃及及び其他の諸國より之を輸入したりしなるべし(王上十の廿四、廿五)。イザヤの時代に騾馬が通常貴人の乘用として用ゐられしことは、六十六の廿に依りて明也。騾馬は又荷物を負ふためにも使用せられたり。

(卅三) 豚　モーセの律法に潔からずと規定せられたる動物の數は少からず、豚の如く猶太人に忌み嫌はれたる者は又他に之れあることなし。豚肉の食す可らずとのことは、利十一の七に記され、猶太人が如何に之を忌み嫌ひしかは、裏六十五の三、四、六十六の三、十七等より推知すべし。彼等は唯に其肉を食ふことを欲せざりしのみならず、其毛に觸るゝことさへ汚はしき事也と思惟し、甚しきは豚の名をいふことさへ避けて、之に代ふるに『憎むべき者』なる語を以てせり。今日にても熱心なる猶太人及び回教徒の之を憎むことは昔時に異らず。思ふに彼等が此の如く之を憎むに至りし所以の者は、豚肉を食することに依りて皮膚病殊に癩病を助長すべしと思考したりしがためなるべし。斯く豚を憎むこと甚しき中に在りて、モーセの律法に無頓着なりし猶太人の中には之を飼養する者もありしが如し(太八の廿八—廿四)。野猪のことは詩八十の十三に唯一回記さるゝのみ。

(卅四) 象　聖書には象牙の事を記したれども(王上十の十八、歌五の十四、七の四、詩四十五の八等)象のことなど記さず。

(卅五) 山鼠　希伯來語のシャファン (שָׁפָן) 英譯は Coney (熟兎) となせ共、熟兎はパレスチナに生息せず。シャファンは Syrian Hyrax (Hyrax Syriacus) なること疑なく、邦譯は之を山鼠となせり。熟兎よりも稍や大きく、其形熟兎に似たれ共、厚皮類に屬し、犀加と河馬との中間に位す。聖書には四箇處に記さる。二箇處は其肉を食ふ可らずとのことにして(利十一の五、申十四の七)他の二箇處は其習性を記す(詩百四の十八、箴卅の廿六)。岩石の間に生息し、極めて敏捷なる動物にして、岩より岩に飛び移る。

(卅六) 河馬　希伯來語ベヘモス (בְּהֵמוֹת) なる語

伯四十の十五に在り。其獣の何なるやに關しては古來諸説ありしが、今日の學者は之を以て河馬（Hippopotamus）也と推定す。トリストラムは今日河馬は亞細亞洲に生息せざれ共、古昔はパレスチナの塩ヨルダン河邊に生息したりしなるべしと云へり。

【鳥類】　聖書に記されたる動物の中には、其何物なるやを明にすること能はざる者少からざれ共、殊に鳥類に於て然りとなす。左れば希伯來語を取りて一々之が我國の鳥に當て欲めんことは到底なし得べからず。故に唯大概に從ふのみ。

（一）黄鷹　希伯來語ベレス（בָּרֶס）なる語他の食肉鳥と共に、以色列人の食す可らざる者として二回記さる（利十一の十三、申十四の十二）。此外には其形狀習性を記さざるを以て、其如何なる鳥なるやを確定し難しと雖も、ベレスとは摩つ者の義なれば、拉丁語の Ossifragus 即ち Bone-breaker なるべしといふ。邦譯は黄鷹となせり。鷹よりも寧ろ鷲に似て、類の下に毛あり、鷲の如し。鳥類中最大なるものゝ一にして、其長さ四尺あり。其翼を擴ぐれば一丈に達す。歐亞諸國に產し、パレスチナ各處にも生息す。群居せず、雌雄相伴ふ。

（二）大鷲　禁食鳥の中にラカム（רָחָם）なる者あり（申十四の十七）。其何物なるやに關して古來諸説ありたれ共、近時の聖書學者は之を埃及鷲（Egyptian Vulture *Neophron percnopterus*）となすに一致せり。邦譯は大鷹となせり。然れ共此鳥は左まで大なる者に非ず、翼長さが故に之を擴ぐれば大きく見ゆれ共、其大さ略大鴉に同じ。翼の外其色白く、頗る一美也。舊世界の暖なる部分には大抵生息す。此鳥も群居せず、雌雄常に離れず。ラカム（愛の義）の名は斯くして起れりといふ。動物の屍骸のみならず、凡ての腐肉を食すが故に、最良の市街掃除者也。

（三）鷲　希伯來語ネッシェル（נֶשֶׁר）　英譯は Eagle となし、邦譯も亦鷲となせ共、此は鷲に非ず、Griffon Vulture 又は Great Vulture（*Gypus fulvus*）にして、兀鷹と譯するを可とす。東半球の溫暖なる部分には大抵生息す。黄褐色にして翼は黑く、頭部には毛なし。頗る大なる鳥にして其長凡そ五尺、翼を擴ぐれば凡そ八尺あり。パレスチナには頗る多く、埃及鷲と異りて群集し、朝夕群をなして空中に翔翼するを見るべし。此鳥の群集する事に就ては『屍の在る處には鷲集らん』と云ひ（太廿四の廿八）其禿頭なる事に就ては『汝の頭の剃りし處を大きくして鷲の如くせよ』と云へり（米一の十六）。此鳥の食食なる事、視力鋭くして食を發見するに迅き事は伯廿九の廿七―廿一に記さる。又此鳥は力强き事、敏捷なる事、及び會變なる事の比喩として記さる。岩窟に其巢を搆ふ（耶四十九の十六）。

又希伯來語ヤッェニャー（יַעֲנָה）なる語あり（利十一の十三、申十四の十二）。英譯には Osprey となし、邦譯は鳶となしたれ共、此は蓋し蒼の鷲にして、鷲の中の最も重なる者を Golden Eagle（*Aquila Chrysaëtos*）となす。日光、加賀、松前等に產し、主として生肉を食す。パレスチナに產し、主として生肉を食す。群居せず。又 Imperial Eagle（*Aquila mogilnik*）と稱するものあり。肩に白き飾を有する者と區別せらる。又短趾鷲（Short-toed Eagle, *Circaëtus gallicus*）と稱するものあり。パレスチナに多く產し、蛇、蜥蜴等を捕へて食す。

にして、上総の鹿野山、信濃の宇出峯、長崎、薩摩、筑前、近江等に產する鷲の類也。魚肉を食す。故に海邊又は海岸の河邊に產す。

（四）鳶　利十一の十四、申廿四の十五、伯廿八の七のダアー（דָּאָה）欽定英譯は Vulture となしたれ共、改正英譯は Kite となせり。蓋しダアーは鳶屬の總稱也。邦譯に鵄となせるは狹きに失せり。トリストラムはダアーに赤鳶（*Milvus regalis*）黑鳶（*Milvus atra*）の二種ありとし、前者はパレスチナ全地に產し、小鳥、鼠、爬蟲類及び魚を食し、其視力甚だ鋭し。黑鳶は冬期三箇月の外パレスチナ全地に生息し、好んで群居し、一匹の羊を屠殺すれば無數に群集すと云へり（申廿四の十五參照）。又申十四の十三のラアー（רָאָה）は英譯に Glede となし、邦譯に鶚となせり。思ふにパレスチナに產する各種のはやぶさを總稱せるものなるべし。

（五）鷹屬　希伯來語ネッツ（נֵץ）禁食鳥の一として利十一の十六、申十四の十五に記さる。英譯は Sparrow-Hawk, *Accipiter nisus*）は其亀もなる一種にして、パレスチナに多く產すれ共、ネッは鷹屬の總稱にして、ごいさ鷹（Common Kestrel, *Tinnunculus alaudarius*）雲狗鷲（Harrier Hawks）等をも含めるなるべし。此等の鷹屬は何れもパレスチナに產す。ネッの事は伯廿九の廿六にも記さる。

（六）梟又は鴟鴞　欽定英譯に Owl と譯せる希伯來語は一ならず。利十一の十六、十七に禁食鳥として擧げられたる者の中ベス、ハヤァナー（בַּת־הַיַּעֲנָה）を Owl とし、コス（כּוֹס）を Little Owl とし、ヤネシウフ（יַנְשׁוּף）を Great Owl となせり。然れ共バス、ハヤァナーは鳥に非ずして蛇鳥なることは今日學者

の既に一致する處也（改正英譯、邦譯共に蛇鳥となせり）。コスなる語は又詩百二の六に見え、其處には荒れたる跡に住むものとなせり。此は思ふに梟なるべし。（邦譯利十一の十七に鶴となすは誤れり）。ヤネシウフなる語は又賽廿四の十一にも見ゆ。是又荒地を家とするもの也と云へば梟の屬なること疑なく、蓋し角鴞なるべし。（邦譯鷲となすは誤れり）。賽廿四の十四にリィス（לִילִית）なる語あり。欽定英譯は Owl とし、改正英譯は Night-monster とし、邦譯には鴞鶚とせり。作者は蓋し比喩的に之を用ゐたるものなるべしと雖も、字義明ならず。次節のキッポド（קִפּוֹד）も欽定英譯は Owl とし、改正英譯は Arrow-snake とし、邦譯は蛇とせり。然れ共之を舊と對照するを見れば、蛇となすは當らざるに似たり。トリストラムは此は亞剌比亞人の所謂マロウフと呼べる Zeoga Owl（*Ephialtes Scops*）なるべしと云へり。

（七）夜鷺　利十一の十六、申十四の十五に記載せられたる禁食鳥の中にタクマス（תַּחְמָס）なる語あり（此語他に之れなし）。此鳥の何なるやに就きては古來諸説ありて一定せず。英譯は Night-Hawk とし、邦譯は鳥となせ共、其字義明ならず。暫らく英譯に從ひ夜鷺となす。

（八）燕　動物學の知識なき人々は小鳥の種類を區別せず、其形の類似するに由りて之を概稱するに過ぎず。殊に古代の猶太人に在りては然らざるを得ざりしことなれば、聖書の小鳥を精確に見定むることは到底なし難し。燕と譯せる原語はデロル（דְּרוֹר）にして『自由の鳥』の義也。其開翔自在なるを云へる也。パレスチナに生息する燕屬の種類は一ならず。デロルは蓋し之を概稱する也（詩八十四の三、箴廿六の二）。希伯來語に又シス（סוּס）なる語あり（詩廿八の十四、耶八の七）。欽定英譯は之を鶴と譯し、アグル（עָגוּר）を燕と譯せり。是八誤りて順倒せる也。改正英譯及び邦譯に之を正し、シスを燕となせり。シスは蓋し鵲鴣（ژسلى）屬を概稱せる也。

（九）戴勝　利十一の十九、申十四の十八の禁食鳥中にドゥキァファス（דּוּכִיפַת）なる語あり。欽定英譯は Lapwing とし、改正英譯は Hoopoe（*Upupa epops*）となせり。邦譯は、鳥となしたれ共、改正英譯に從ひ戴勝となすが可とす。戴勝は色綠を以て飾られたる羽翼と、美しき冠とを有す。樹木の洞穴又は岩窟に巢を造る。其巢に一種の臭氣あり。小蟲を食す。

やつがしら

（十）雀　希伯來語チッポル（צִפּוֹר）は鳥の概稱にして、利十四の四には犧牲の鳥として用ゐらる。詩百二の七に『唯汝なくして屋根に居る雀の如くなれり』とある雀の原語もチッポル也。雀は群居するものなれば『汝なくして屋根に居る』といふは恠し難し。故に此は Blue Thrush（つぐみの類）なるべしといふ。詩八十四の三に『鳩や雀は窩を得』云々とある雀も亦同字也。トリストラムはエルサレム神殿近傍の廢址に許多の雀を見たりしとのことを語れり。思ふに此處に所謂雀は我倩の普通見る所の雀なるべし。耶蘇が『二羽の雀は一錢にて售るに非ずや』（太十の廿九）と云へる雀の希臘語 στρουθίον も鳥の概稱にして、雀又は其他何れの小鳥にも適用すべし。當時種々の小鳥羽をはがれ串刺にして街頭に賣られたり。耶蘇は之を云へる也。

（十一）鶏　希伯來語シャカフ（שָׂכְוִי）なる語禁食鳥の中に在れ共（利十一の十六、申十四の十五）語義明ならず。欽定英譯は Chuck-o（杜鵑）となせり。杜鵑もパレスチナに多く產すれ共、多くの學者は之を以て海鳥なるべしと思惟し、改正英譯は gull となし、邦譯又之に從ひ鷗となせり。何れが是なりや確言し難し。

（十二）鶴及び班鳩　鶴及び班鳩は羊と共に無罪を裝し、犧牲に供せらるゝを以て、聖書中重要の地位を占む。希伯來語鶴はヨナ（יוֹנָה）班鳩はトル（תּוֹר）にして、其初めて記載せられたるは、ノアが方舟より之を放ちし時のこと也（創八の八）。次はアブラハムがエホバと契約をなせし時之を犧牲に獻げたりとの事にして（創十五の九）之を犧牲に獻ぐることに就ては特殊の方法規定せられ（利一の十四―十七）縫人子を生む時は班鳩一雙又は鴿鶴二を獻ぐべしとの律法あり。マリアは耶蘇を獻ぐる時斯くなしたり（利十二の八、路二の廿四）。猶太人は斯く此鳥を熟知したりしが故に、聖書記者は此鳥の事を種々に記せり。其單調にして憐れなる鳴聲に就ては、

『彼れ（ハザブ）は網にせられて擄はれゆき、其宮女胸を打ちて鴿の如くに鳴くべし』（賽廿八の七）と云ひ『我は…鳩の如くにうめき』（賽廿八の十四。五十九の十一參照）と云ひ、其美麗なることに就きては雅歌歴々之を記し（一の十五、五の十二、六の九）其色の金銀の如く輝ける事は詩六十八の十三之を云ひ、其翼の强きことは詩五十五の六、七之を記せり。

（十三）家禽　現時パレスチナ及び西利亞には多くの家禽あり。而して新約時代に在りて猶太人が家禽を飼養せしことは、耶蘇がエルサレムを望みて『嗚エルサレムよエルサレムよ、預言者を殺し、爾に遣はされし者を石にて醉てる者よ、母鷄の雛を翼の下に集むる如く、我爾の赤子を集めんとせしこと幾回ぞや』（路十三の廿四）と云ひ、又ペテロに向ひ『今日鷄鳴かざる前に爾三次我を識らずと言はん』（廿二の廿四）と云へるにて推知すべし。然れ共舊約には家禽の事を記さず、其他の鳥類の事を規定せるモーセの律法にも一言之に及ばざるを見れば、初代の猶太人が之を知らざりしは明なるが如し。然れ共何時頃猶太に輸入せられたりしやは明ならず。

（十四）孔雀　ソロモン王が外國より輸入せし者の中に記さる（王上十の廿二）。希伯來語ツッキイム（תוכיים）は鸚鵡なるべしと云ひ、又珠（ココ）なるべしと云ふ者あれ共、ソロモンが此等のものを輸入したるは印度よりにして、シンガリー語にて孔雀のことをトッカイと云へば、ツッキイムは其希伯來化せる者也と見る為得べく、之を孔雀と譯せるは誤に非ず。

（十五）鶴鴣　パレスチナには諸種の鶴鴣生息す。コレ（אנפה）は其總稱也。ダビデはサウルに追はれ、エルサレムを逃れ羅谷に其身を隱せしを、鶴鴣に比し（母前廿六の廿）エレミヤは不義をもて資を獲る者が半途にして之を失ふを、鶴鴣が其抱ける卵を孵化せざるに先ちて取らるゝに喩えたり（耶十七の十一、邦譯に『生まざる』とあるは『孵化せざる』の義也）。鶴鴣は多くの產卵をなす。猶太人は之をも探し取る也。

（十六）鶏　其色列人が紅海を渡りて後數日曠野にて食物なきがつぶやきしに、夕に及びて鶏來りて營を蔽ひたりとのこと出埃及記に記さる（十六の十一―十三）。後一年にして又同じ事の起りしこと民數記略に記さる（十一の廿一、廿二）。或る學者は原語セラウ（שלו）は鶴なるべしと云へり。左れ共セラウが或種の鳥類なりしことは詩七十八の廿三―廿七に依りて知るべし。或る學者は之を以て鶴なるべしと推定したれ共、鶴は禁食鳥の中に在り。鶏は多く亞剌比亞に產し、現時の亞剌比亞語もセラウに似たれば、此鳥の鶏なること殆ど疑なし。

（十七）鶏　鶏は種類多く、世界中何れの處にも產出せしことを初めとし（創八の七）其汚れたる者なるる事（利十一の十五、申十四の十四）エリアがケリテ河の邊にて之に養はれたりし事（王上十七の一―六）神は之をも養ひ給ふ事（路十二の廿四。伯廿八の四十一參照）其色の黑き事（歌五の十、十一）人智性ある事（箴廿の十七）荒址を棄ての眼を拔出す習性ある事（賽廿四の十一）抔記さる。希伯來語のオレブ（עורב）は鶏の總稱也。

（十八）鴕鳥　鴕鳥の聖書に記さるゝ事七回（英語譯せざるに先ちて取らるゝに喩えたり（耶十七の十一、邦譯に『生まざる』とあるは『孵化せざる』の義也）。鶴鴣は多くの產卵をなす。猶太人は之をも探し取る也。

（十八）鴕鳥　鴕鳥の聖書に記さるゝ事七回（英語譯せざるに先ちて取らるゝに喩えたり（耶十七の十一、邦譯に『生まざる』とあるは『孵化せざる』の義也）。鶴鴣は多くの產卵をなす。猶太人は之をも探し取る也。

（十六）鶏　其色列人が紅海を渡りて後數日曠野にて食物なきがつぶやきしに、夕に及びて鶏來りて營を蔽ひたりとのこと出埃及記に記さる（十六の十一―十三）。後一年にして又同じ事の起りしこと民數記略に記さる（十一の廿一、廿二）。或る學者は原語セラウ（שלו）は鶴なるべしと云ひ、他の學者は或種の鳥類なりしことは詩七十八の廿三―廿七に依りて知るべし。左れ共セラウが或種の鳥類なりへり。鶏は多く亞剌比亞に產し、現或る學者は之を以て鶴なるべしと推定したれ共、鶴は禁食鳥の中に在り。鶏は多く亞剌比亞に產し、現時の亞剌比亞語もセラウに似たれば、此鳥の鶏なること殆ど疑なし。

（十七）鶏　鶏は種類多く、世界中何れの處にも產出せしことを初めとし（創八の七）其汚れたる者なる事（利十一の十五、申十四の十四）エリアがケリテ河の邊にて之に養はれたりし事（王上十七の一―六）神は之をも養ひ給ふ事（路十二の廿四。伯廿八の四十一參照）其色の黑き事（歌五の十、十一）人智性ある事（箴廿の十七）荒址を棄ての眼を拔出す習性ある事（賽廿四の十一）抔記さる。希伯來語のオレブ（עורב）は鶏の總稱

表號的に記載せられたるのみ（默十六の十三）。

【魚類】　聖書の中には單に魚とあるのみにして、其特殊の名を記せるものなし。モーセの律法は翅と鱗ある者を食ふべしとなし、之れなきものを食ふ可らずとなせり（利十一の九―十二、申十四の九）。

【無脊椎動物】　（一）　蝸牛、詩五十八の八に『融け消え往く蝸牛』とあり。當時猶太人は蝸牛の歩む毎に粘泥の跡をつくるを見て、遂に融けて消えゆくべしと信じたり。故に斯くいへるなるべし。

（二）　蝗、パレスチナには數種の蝗産す。聖書に記されたるもの少くも四種あり。其一は希伯來語アルベー（אַרְבֶּה）にして『群集す』の語源より出づ。士六の五、王上八の廿七、耶四十六の廿三、耳一の四、二の廿五に記さる。次はクァガブ（קָגָב）にして、民十三の廿一、申四十の廿二に記さる。思ふに以上二種は普通の蝗ないへるなるべし。利十一の廿二のサルアム（סְלְעָם）は蝗屬の一種なるべしと雖も其如何なる者なりや明ならず。モーセの律法は蝗を食用となすを許せり。バプテスマのヨハネは蝗と野蜜とを食したりとのことなれ共、此は今にてもパレスチナに於て普通に見る處也。

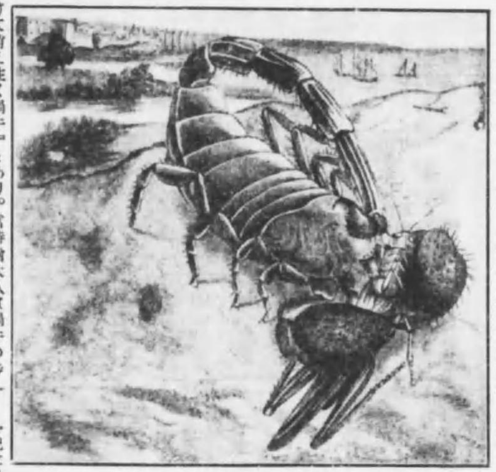
（三）　蜜蜂、蜜蜂は非常に多くパレスチナに產す。

我國普通の蜜蜂に類す。其性質は申一の四十四、詩七の十八、十九等に言ひ顯はさる。

（四）　黄蜂、黄蜂のことは出廿三の廿七、廿八、申七の廿、書廿四の十一、十二に記さる。何れも比喩的にして事實としてには非ず。パレスチナには黄蜂非常に多く、旅人は屢々之に追はるゝことありといふ。

（五）　蟻、パレスチナには多くの蟻產し、數種あり。箴言は其勤勉の事を記せり（六の六、八）。

（六）　蠍、蠍はパレスチナに非常に多く生息す。尾に有毒の爪あり、壁の穴其他罅隙ある處に巧にかくれ、人の近くあれば之を刺す。蠍の毒は其種類大小に從て同じからず。大なる蠍の毒は頗る劇烈にして、間々人を死に至らしむることあり。蠍の有毒なる動物なることは直接間接に聖書屢々之を云へり。例之申八の十五、結二の六、默九の五、十、路十一の十二等の如し。



蠍

動物崇拜（ドウブツスウハイ）　Animal Worship.　【術語】　下等なる動物を神化し之を崇拜することは、最古の宗教に於て之を見るのみならず、今日生存する人種の中にも亦尙行はるゝ風習にして、其起源一ならざるが如し。最も下等なる野蠻人の動物崇拜が、虎豹、熊羆及び鰐魚等の猛力を恐れ、之を宥めんとするより起りたる者なることは殆ど疑なきが如し。又或る場合に在りては、動物の身體を氏神の住家也と信ずるより之を神聖視する者あり。此觀念は惡魔が憑くといふ思想及び輪廻說と關係を可らざる關係を有す。此意義に於ける動物崇拜は今日にてもポリネシヤ人の中に行はるゝを見るべく、印度人の中に在ては一層明に之を見るべし。テーロルは其『原始的文化』に於て『敬虔なる印度人は聖き牛を尊重するのみならず、毎年の祝節には神として之を禮拜し、又日々其前に往きて精首す。猿神ハヌマンには殿堂あり、像あり、其大自在天の化身なるは豹が突迦の化身なるが如し。頻那夜迦は象頭を有し、金翅鳥は昆濕奴の乘物也。其他魚、野猪、龜等皆神の化身也とせらる』と云へり。古代埃及の宗教も亦同一思想に滿さる。希伯來人が金の犢及び銅の蛇を崇拜したりしも亦同一起源より出でたる者なるべし。又或る場合に於ては神の靈其中に住めりとの故に非ず、其が祖先を代表せりとの理由に由り、特殊の動物を畏敬することあり。又動物崇拜の一種と見做すべきは保儒を畏敬することにして、マダカスカルのマラガシー人がヴァヂンバと稱する既に滅亡せる原人種の身長三尺六寸許りなるものを神として崇拜するが如

し。古代埃及人がアピと稱する牛傷を崇拜したりしも思ふに同一觀念より出でたる者なるべし。ナニキヤ人のバタキ及びコバイリはブタより來れる者也といふ。

ドゥーリンゲル　ヨハン　ヨセフ　イグナツ　フォン　Döllinger, Johann Joseph Ignaz von　【人名】　一七九九―一八九〇　獨逸の神學者。バムベルグに生る。一八二六年ミウニヒ大學の教會歷史學教授に任ぜらる。四二年英國に起りたる牛津運動に深き同情を寄せ、ピウゼー。グラドストン其他の人々と通信を往復せり。五〇年より六〇年に至る間に、法王の骨權は羅馬教會に須要なる者に非ずとの說を唱へ、之がために大なる論爭を惹き起せり。七〇年ヴァチカン會議に於て法王無謬說の確立せらるゝや、ドゥーリンゲルは『クリスチヤンとし、神學者とし、歷史家とし、國民として』此の如き決議に從ふ能はずとのことを唱へ、之を排斥したりしかば、法王は其年四月十四日を以て彼を破門したりしが、彼に稱讚狀を贈る者頗る多く、牛津、エヂンバラ其他の諸大學は彼に名譽學位を與てせり。彼は實に古公教徒運動に於ける最大勇士なりき。然れ共彼は此運動を賛成したりしに拘はらず、之に加入することはなさゞりき。後彼は教會の合同を希望すとのことを述べ、七二年此主意に關する講演を公にせり。彼は七四―五年ボンに於て開かれたる舊カトリック派の會議には議長となりたりき。彼の著書の重なる者は『基督教會史』（三三―五）『宗教改革』（四六）『ルーテル』（五三）『ヒッポリタス及びカリスタス』『偶像教及び猶太教』（五六）『基督教及び其創立時代に於ける教會』（六〇）『預言及び基督時代に於ける預言教』『モハメットの宗教』『トレント會議の歷史』（七六）等にして、其多くは英譯せらる。（『舊カトリック派』の項參照）。

獨立教會（ドクリツシユキヤイ）　Independents.　『會衆派』の條を見よ。

獨身主義（ドクシンシユギ）　Celibacy.　【制度】　此處に獨身主義と稱するは、聖別せられたる僧侶の不娶の狀態に在るを云ふ。猶太の祭司及び祭司長は婚姻するを得たりしか共、其職の神聖なる故を以て、娼妓又は離婚せられたる婦人を娶ることを得ざりき。且祭司長は寡婦との結婚を禁ぜられたりき（利廿一の七、八、十三、十四）。新約には何れの部分にも婚姻を禁じたる言語を見ず。基督の使徒の中には婚姻したる者多く（太八の十四、哥前九の五）又會衆の重立たる者には結婚を奬勵したりき（提前三の二）。尤も或る場合には婚姻せざる方愈れりとの事保羅に依て說へられたりしが（哥前七の廿八）此等の語より基督教會に於ては早くより婚姻の生活よりも婚姻せざる生活の方愈れりとの觀念行はれ、此觀念はやがて婚姻を輕蔑するの風を助長し、第二世紀の頃既に獨身生活の誓約なる者起り、教會に於て重要の職を取るものは獨身なるべしとの要求一般に是認せられ、第四世紀には遂に法律となりて顯はるゝに至れり。羅馬の監督シリシウスは三八五年に、舊約に在りては祭司はレビ族よりのみ取りたりしが故に、其婚姻を認許したれ共、此制限の廢絶と共に其認許も亦廢絶し、教職に在る者は婚姻す可らざることゝなれりと云ひ、次に出でたる諸監督も亦同一の主張を採納したり。なし、西教會は凡て羅馬監督の主張を採納したり。婚姻を禁ぜられたる者は初め監督、長老及び執事のみなりしが、第五世紀より副執事（subdeacons）も亦之を禁ぜられたり。下級の僧侶は婚姻を許容せられたれ共、寡婦を娶るを得ず、又再婚を禁ぜられたり。此等の規定は國家の法律も亦之を承認せり。婚姻したる者及び子女を有する者は監督に選ばるゝを得ず。高級の僧侶の婚姻は無効とせられ、斯る婚姻に依りて生れたる子女は庶出とせられたり。希臘教會も亦以上の規定を是認したれ共、是れ以上には進まず。現時の制度も亦之に異なることなし。然るに拉丁教會に在りては內部に於て僧侶の反對ありしに拘はらず、此主義益々鼓重に勵行せられ、第十一世紀の中頃よりヒルデブランド（後の法王グレゴリウス七世）此問題に大なる力を注ぎ、一〇七四年の宗教會議に於て、一〇五九年及び一〇六三年の法令を復活せり。之に依れば婚姻せる僧侶にして主の晩餐を執行し、又は信徒にして斯る僧侶より晩餐を受けたる時は共に破門せらるべしと也。一〇八九年法王ウルバン二世は高級の僧侶にして婚姻する時は其職を剝がれ其俸祿を失ふべしとの法令を發し、ライムス（一一一九）及びラテラン（一一二三）の宗教會議は、斯る婚姻は速に取消さるべく、其男女は懲悔所に幽閉せらるべしとの事を附加せり。第十六世紀の初め宗教改革運動起り。改革家等が凡て羅馬教會の制度を破壞せんとするに方り、シャール五世は此問題をトレント會議に附し精査せしめたりしに、此會議は此問題に關する當時の狀態を是認し、獨身生活は高級の僧侶に在ては絕對的義務也となし、聖別後に爲されたる結婚は無効とせられ、下級の僧侶にして結婚する場合には、其婚姻は正當と認めらる共、其僧職を失ふべく、既婚の人も爾後永久夫婦の交を爲さゞるべしとの誓約を爲す時は、下級の僧侶に聖別せらるゝを得べしと雖も、其妻たる者にして寡で尼院に入ることを承諾するに非ざれば、高級の僧侶に

昇進すること能はずとのことを規定せり。福音主義の教會に在りては獨身主義を承認せず。此問題はアウグスブルグの告白及び其辨證論に論ぜらる。而して此主義は今日に至るも變化せず。

ドケテ説 基督假幻説 Doketism or Docetism. 【學説名】 基督は眞實の身體を有せず、其身體は浮象、其生と死とは幻想にして、換言すれば彼の出現は魔術的出現なりし也と主張する一種の説にして、基督假幻説又は基督如幻説と譯す。此説の起源は最も早くより之れありしと見え、壺約四の二及び貳約の七には此種の思想を辨駁せり。而して此説はサツルニヌス。バシリデス。ヴアレンチヌス。マルシオン等大低のノスチック派の中に混入せり。而してドケチ（Doketai）と稱せられたる一派が第二世紀の終に存在したりしことは、テオドル。亞歴山のクレメント。ユウセビウス等の書に於て知らる。此派の説は物質は惡の根源也との思想に其源を發したる者にて、物質を惡となしたりしが故に、基督なる以て全く物質世界に關係なき者となすの必要を感じ、斯くは基督無體説を主張するの必要を感じ、斯くは基督無體説を主張する迄に至りし也。而してバシリデスの如きは、耶蘇に假裝して十字架に釘けられたりしはクレネのシモンにして、耶蘇はクレネのシモンに假裝して迫害者を笑ひ乍ら其側に立ち居りし也との説さへ唱へ出でたりき。

ドシテオス Dositheus 【人名】 サマリア人中の僞メシア。其の傳は明ならず。ザドクの師にしてサドカイ宗を起せしドシテオスと混同せらるゝに至る。此のドシテオスは基督と同時代か、少し後に現はれたるものゝ如し。當時サマリア人の宗教感情は微弱し居たるものから、彼は己れを出埃及記十八の十八に約束されたる預言者なりと主張せり。其の説の著しき點は律法の明文、殊に安息日に關する條に非常なる重きを置きたることなり。其徒は多かりしとは見えねど、第六世紀まで存せり。彼斯人テオヒロスは第四世紀中此の宗派に反對せる書を書き、五八八年には埃及にてサマリア人とドシテオス徒とは出埃及記十八の十八に就て議論せしこと見ゆ。

ドッヂ ウィリアム アール William Earl 【人名】 一八〇五—八三 Dodge, 米國の商人、博愛事業者。コンネクチカット州ハートフォルドに生る。浩教徒の家より出づ。十三歳の時商店に入り、暫くコンネクチカット州ノルウィッチ附近の父の紡績會社に在りし外は殆んど學校教育にて年を過ごせり。身體柔軟少行澁輕眼黑くして鋭く、狀貌智と親切とにて輝き、心意富澤、才機活潑、言語明快、判斷堅固、精力不衰、己れを顧みず、見識博く、然かも宗教上の確信なく固執し、助言に於ては賢く、且同情深く、演説は力あり、人を統御する能力に秀でしと云ふ。彼は商業上社會上宗教上の事に熱心なる有し、政治的國家的の運動に加參したり。初め綿物絹物毛物の商業に從ひしが、易のアンゾン、ジー、フェルプスと共に金屬商を營み合名會社を立て、此會社は米國にて著名のものとなれり。エリー、ニウヨルシー中央、デラウエア、ラッカリナ、西部、ハウストン、テキサス中央其他の諸鐵道創設者にも加はり、後製造業にて大利を博し、合衆國及び加那太の所々に廣大なる材木業を有したり。彼は商業會議所の有力なる議員たり、多年其の頭取たり、多くの事業や會社に加はり第三十九國會に列せり。ドッヂは凡ての基督教及び慈善事業に熱心と自由を以て盡力し、其の住地の事は勿論全國及び全世界のことに之を及ぼせり。敬虔なる父母の教育を受け、ネットルトンの信仰復活時代に悔改したることゝて、基督の事に直接關係するを樂とし、殊に諸派諸階級を一致せしめたる一般の靖神的覺醒を起す運動に熱心せり。若き頃はフインネー其他の傳道者の盡力に同情して奬勵し、後にはムーデー及びサンキーの傳道に助力し、教會にては常に有力なる地位を占め、長老教會の長老たり、安息日學校長たり、米國聖書會社理事たり、小冊子會社副長たり、基督教青年會及び市内傳道團の篤き援助者たりき。福音同盟會米國支部長ともせられ、國民禁酒會の設立にも與かり、其の最初の會長たり、其の他の事にも關係せり。内亂中は舌と金とを以て熱心に政府を助け、基督教事業及び衛生團なども助けたり。彼は又解放せられし奴隷に特殊の同情を寄せ、彼等のための設備及び教會に大なる助を與へ、健全なる基督教育の力を信じ、各所の學院及び學校を助け、紐育のユニオン神學校の理事員たり、其の寄附者たり、他の神學校へも篤志寄附をなし、自ら鐵道と關係せるより屢々旅行せしに依て、南部西部の缺乏せるものを看取し、福音の設備と其の感化の必要を認め、自費を以て種々の學校や神學校や有爲の青年に支給し、基金を遺して此の事業の繼續を謀りぬ。外國傳道にも熱心にして、アメリカン、ボードの副長たり、長老教會外國宣教局の局員たり。多年之に寄附せし金額年々一萬弗に上り、屢々特別寄附をもなせり。ベールートに於けるスリア學院の創設にも與かり、其の礎石を置きしも彼なりしが、其他全世界の傳道地は彼の名を知らずして助を受けし所甚だ多し。而して彼の同情は自教派や身邊に限らず、凡て基督の名のため人のためとなりて賢く金でられたる事ならば容易く耳を傾け、其の財産を之に開けり。個人的の慈善補助に至ては一層寛容

然なりしにして、凡て援すべき者を温かき情にて但ぜたり。其の事務的の認識錯雜迷のため事をなすに當りては適當の手段を知り、又同輩の商人に對しては信用を有するを得たり。彼は自らを神の家宰と思ひ、其の富を博愛のために散じ、又遺言して諸設備のために費せり、七子あり。

ドッヂ マルカス Dods. Marcus 【人名】 一八三四—一九〇九 英國の神學者。ノザムベルランドのベルフォルドに生る。一八五八年蘇國自由教會に於て説教者の允許を得、六四年グラスゴーのレンフイルド自由教會の牧師となり、八九年エヂンバラのニウカレッヂの新約註釋學教授となる。其取る所の地位は保守的にして、其著書には『其色列の歴史時代』（七四）『モハメッド、佛陀及び基督』（七七）『創世記小註釋』（八二）『帖撒羅尼迦書註釋』（八二）『新りな教ふる講義』（八九年第六版）『新約聖書總論』（一八九三）『聖書、其起源及び性質』（一九〇三）等あり。

ドッドウェル ヘンリー Dodwell, Henry 【人名】 一六四一—一七一一 英國の神學者。愛爾蘭ダブリンに生れ、市のトリニチー、カレッヂのフェローたりしが、一六六六年辭して教職に入り、七四年倫敦に居住し、英國教會歸護の書を著はして名を得、八八年牛津のカムデン史學教授となる。然れども、ジェームス二世寛なりしを以て、ウィリアム三世即位の時忠誓を拒みて九一年地位を失ひ、同羅の諸監督を歸護し、王に服せしなれば難教者と宣告し、自らも國教會を去りしが、後其の意を翻へして其の所謂應教の權威を承認し、死する前國教會に歸れり。著作多く殊に古典文學に關しては精通博なりしが、判斷力はなしかりき。『イレネウムに就ての議論』にて新約聖書の墨墨者は精神病者なりと論ぜしこと、又書翰的論文に於て、聖書及び最初の師父により、靈魂はもと可滅的なるを、其がバプテスマの神靈に合一するに由て僅かの賞かのために神の樂に依て不滅的にせられたることは著しき事なり。之には反對を難議し、洗禮と不滅とを結合し、僅倒の赦罪を有功と主張せり。私想は高く隱道主義の堅固なる人なりき。子のヘンリーは懷疑者として著はれ、同じくウイリアムは正統信仰者として著はれしは頗る奇なる現象なり。

ドッドリッヂ フィリップ Doddridge, philip, D.D. 【人名】 一七〇二—五一 英國の非國教神學者、讃美歌作者。商人の子、甘人の同胞中の末子、倫敦に生る。幼より虚弱なりしが、敬虔なる父母の教育を受け、夙に傳道に志し、一七二三年始めてキプウォルスに定住し、二九年ハーボローにて助師となり、非國教派教師の總會にて一學校の長に選ばる、同年ノルザムプトンに招かれ尚學校を教へて成功せしが、肺結核のため温和なる風土に去らざるを得ずしてリスボンに行き、同地にて死し遺骸は英國に葬らる。彼は篤信の人にして自ら省みること深く、研究の習慣強く、朝は五時に起き、一月後の研究の計劃と説教の趣意とを考へたり。論爭を避くることを自己の規則とし、メソヂスト徒に同情し、之がために中間者又は兩説者の譏なをまで受けたり。著書の中重なるは『大佐ガーディナー傳』『家族講經者』『新約註解』『英國家族間に行はる靈魂に於ける宗教の興起進歩』等にして最後の書は分派也と思惟したりしが故に、彼等はコンスタンチヌス帝に訴へて皇帝の審判を請へり。於此皇帝は羅馬に宗教會議を開き（三一三）續てアルレスに會し、其の事務的の認識錯雜迷のため事をなすに當りては適當の手段を知り、又同輩の商人に對しては信用を有するを得たり。彼は自らを神の家宰と思ひ、其の富を博愛のために散じ、又遺言して諸設備のために費せり、七子あり。

ドッヂ マルカス Dods. Marcus 【人名】 一八三四—一九〇九 英國の神學者。ノザムベルランドのベルフォルドに生る。一八五八年蘇國自由教會に於て説教者の允許を得、六四年グラスゴーのレンフイルド自由教會の牧師となり、八九年エヂンバラのニウカレッヂの新約註釋學教授となる。其取る所の地位は保守的にして、其著書には『其色列の歴史時代』（七四）『モハメッド、佛陀及び基督』（七七）『創世記小註釋』（八二）『帖撒羅尼迦書註釋』（八二）『新りな教ふる講義』（八九年第六版）『新約聖書總論』（一八九三）『聖書、其起源及び性質』（一九〇三）等あり。

ドッドウェル ヘンリー Dodwell, Henry 【人名】 一六四一—一七一一 英國の神學者。愛爾蘭ダブリンに生れ、市のトリニチー、カレッヂのフェローたりしが、一六六六年辭して教職に入り、七四年倫敦に居住し、英國教會歸護の書を著はして名を得、八八年牛津のカムデン史學教授となる。然れども、ジェームス二世寛なりしを以て、ウィリアム三世即位の時忠誓を拒みて九一年地位を失ひ、同羅の諸監督を歸護し、王に服せしなれば難教者と宣告し、自らも國教會を去りしが、後其の意を翻へして其の所謂應教の權威を承認し、死する前國教會に歸れり。著作多く殊に古典文學に關しては精通博なりしが、判斷力はなしかりき。『イレネウム

に就ての議論』にて新約聖書の墨墨者は精神病者なりと論ぜしこと、又書翰的論文に於て、聖書及び最初の師父により、靈魂はもと可滅的なるを、其がバプテスマの神靈に合一するに由て僅かの賞かのために神の樂に依て不滅的にせられたることは著しき事なり。之には反對を難議し、洗禮と不滅とを結合し、僅倒の赦罪を有功と主張せり。私想は高く隱道主義の堅固なる人なりき。子のヘンリーは懷疑者として著はれ、同じくウイリアムは正統信仰者として著はれしは頗る奇なる現象なり。

ドッドリッヂ フィリップ Doddridge, philip, D.D. 【人名】 一七〇二—五一 英國の非國教神學者、讃美歌作者。商人の子、甘人の同胞中の末子、倫敦に生る。幼より虚弱なりしが、敬虔なる父母の教育を受け、夙に傳道に志し、一七二三年始めてキプウォルスに定住し、二九年ハーボローにて助師となり、非國教派教師の總會にて一學校の長に選ばる、同年ノルザムプトンに招かれ尚學校を教へて成功せしが、肺結核のため温和なる風土に去らざるを得ずしてリスボンに行き、同地にて死し遺骸は英國に葬らる。彼は篤信の人にして自ら省みること深く、研究の習慣強く、朝は五時に起き、一月後の研究の計劃と説教の趣意とを考へたり。論爭を避くることを自己の規則とし、メソヂスト徒に同情し、之がために中間者又は兩説者の譏なをまで受けたり。著書の中重なるは『大佐ガーディナー傳』『家族講經者』『新約註解』『英國家族間に行はる靈魂に於ける宗教の興起進歩』等にして最後の書は分派也と思惟したりしが故に、彼等はコンスタンチヌス帝に訴へて皇帝の審判を請へり。於此皇帝は羅馬に宗教會議を開き（三一三）續てアルレスに會

ドナチス派 Donatists. 【宗派名】 第四世紀より第五世紀に至り凡そ一百年間亞非利加教會を擾亂したりし分派にして、適當に宗派と稱すべき者に非ず。事の發端を尋ぬるに、羅馬帝ディオクレチアン迫害の時に方り、基督教徒の中に迫害を受くるを喜び、信仰のためには死も亦辭せずと唱ふる狂熱家ありしが、カルセージの監督メンスリウス（Mensurius）は最も明に此有意的殉教に反對し、其後繼者カイキリアヌス（Caecilianus）も亦同説を有したりしかば、之に反對せる一派は『彼は迫害に堪えずして官府に聖書を渡したる不義者より按手禮を受けたる者なるが故に、監督となすべからず』と稱して之を退け、別にモヨリヌス（Majorinus）を選びて監督となし、彼死して後ドナツス（Donatus）之に代れり。ドナチス派の名は即ち是れより起れる也。斯くカルセージには二人の監督あり、教會は二派に分れて相爭ひ、其影響北亞非利加諸地方に及べり。此二派共信ずる所の教義に於ては毫も異なるなく、唯ドナチス派は當時廢頽したりし教會の紀綱を嚴にし、惡人の教會に入るを禁じ、教會を聖化せんと揚言したりしにあるのみ。然るに教會の多數はカイキリアヌスの監督たることを承認し、ドナチス派を以て分派也と思惟したりしが故に、彼等はコンスタンチヌス帝に訴へて皇帝の審判を請へり。於此皇帝は羅馬に宗教會議を開き（三一三）續てアルレスに會

議を開き（三一四）更にミランに會議を開きて（三一六）之を調査せしめしが、彼等の訴訟の理由なきを發見せしかば、權威を以て之を脅迫したりしが、彼等は迫害を樂るに從ひ益々其狂熱を增すのみなりしを以て、コンスタンチヌスは迫害の益なきを知り、双方に自由を與へたりき。後コンスタンス帝に至り再び彼等を庇護したりしが如し。四一一年オノリウス帝の命に依りカルセージに會議を開き、公教會の監督二百八十六人、ドナチス派の監督二百七十九人之に出席して三日間論判を繼續し、アウグスチヌスは公會を代表して兩派一致の意見を述べ其調和を謀りたれ共、ドナチス派は斷然公會に復歸するを拒みたり。於此アウグスチヌスの割策を用ゐ、皇帝は再びドナチス派迫害の政策を取りたり。是れより後此派は漸次其數と勢力とを減じ、第六世紀に至りては僅に殘喘を保つのみとなりたりき。

ドナルドソン ジョン ウィリアム Donaldson, John William 人名 一八一二—六一 英國の古典學者。劍橋を出で古典學者として名あり。『新タラチラス』（ヴァロニアヌス）著はす、『ヤシャル一名、舊約聖書マソラ原文に挿入されたる希伯來原詩歌の斷片』は拉丁語にて著はしたるものにて、現存舊約聖書中に挿入せられたる古歌及び古史の斷片を集めてヤシャルの佚書を再作せんと試みたる者なるが、大なる物議を招けり。彼の見解は極めて自由なるが判斷力を缺けり。されど其書は該博にして價値多し。之が批評はビローンのを最良とす。

ドノソーコルテス ジュアン Donoso-Cortes, Juan 人名 一八〇九—五三 西班牙の政治家。エストマデュラのヴァル、デ、ラ、セレナに生れ、セヴィルにて法律を學び、一八三〇年マドリッドに居を定め文學及び政治に從ふ。三七年カディズ市出代議士として『コルテス』に入り中正自由派として院内に立てり。されどボナルド及びマイストルを讀み、又王母クリスチンと知りてより漸次其の說を變じ、四九年には凡ての自由主義を廢棄し、特命全權委員を要求して同盟及び國人を驚かせり。五〇年伯林へ、後巴理へ大使として遣はされ巴理にて死す。『加特力主義自由主義社會主義論』は五一年の作にて直ちに佛、獨、英諸語に譯せらる。グレゴリウス七世とインノーセント三世の思想を美はしく闡述し、近世哲學を攻撃したるものにて第十九世記晩期の反動の先驅をなせしものなり。

ドミチラ Domitilla 人名 スエトニウスの文書に依れば、ドミチラは羅馬帝ドミチアヌスの姪にして、其の從兄たる方伯フラヴィウス、クレメンスに嫁し、夫が無神者又は猶太化主義者の罪名にて斬首せられし地パンダテリア島に流されたりとあり。ネレウスとアキレウスの殉教者行傳、ユウセビウスの文書によれば、ドミチラはフラヴィウス、クレメンスの姪にして、ポンティオス島に流さるとあり。二人のドミチラありしか、一人を異樣に傳へしかは今尚不明なり。殉教者行傳は假作的の事も多けれど、地下墳墓にあるドミチラの墓などより考ふれば、其の傳說の核子たるものは存在したるが如し。

ドミティアヌス Domitian 人名 一般に第二回の基督教徒迫害を行ひし人なりとせらる。初めヴェスパシアヌス及びティトスの世にジュピテル神のための稅を猶太人に課せしが、ドミティアヌスは自ら猶太人と思はざる者にても猶太風に生活せる者、及び其の國籍宗教を隱せる者にまで此の稅を及ぼしたること、スエトニウス文書に在り。又無神者と呼ばるゝ者の起りしもドミティアヌスの世なり。而して此の名に由て苦みを受けしは殊に基督教徒たりしなり。更に又ユウセビウス文書にはドミティアヌスの世多くの基督教徒殉教せりとあり。テルチュリアヌスの書にも帝の迫害の事を記せり。

ドミニコス 聖（セント） Dominics, St. 人名 一一七〇—一二二一 ドミニコ派の開祖。ドミンゴ、デ、グスマンと云ふ舊カスチルのオスマ教領カラルエガに生れ、六歲の時よりグミエル、デ、イサンに於て大長老たりし叔父の教育を受け、十四歲にしてパレンキア大學に入り、一一九四年『カノン』となり、後オスマのカノン會の副長となり、監督ディエゴー、デ、アゼヴェドを助けてアウグスチヌス規約を之に採用す。回教及び附近の異端徒の間にも宣教して成功す。一二〇四年ディエゴーに伴ひて南部佛蘭西に使ひし、羅馬教會より贈れしアルビゼンセス徒と接し、モンペリエに會して之が復歸を勸めしも成功せず。ディエゴーは急に歸任し、當初此の離教徒改歸勸誘を委任されしシトー派の僧等も歸り去り、ドミニコは獨り殘りて接衝し。ツールースの監督フルコよりの助を受けしも、同教徒の改宗勸告は成功せず、唯だブルイルに女院を建つるに至りたるのみ。而もドミニコは此の女院を以て其の活動の根據地となせしが、セラニ其徒に加はりてツールースの一家を供し、羅馬法廷もドミニコを用ひざるべからざるを覺りて彼をベジエの監督とせり。インノーセント三世は說教の前は異端徒に對する武力

とするに足らざるを思ひ、劍と攻城機とを用ふるを利とし『カルディナル』カステルノーの暗殺後はアルビゼンセス徒に對する十字軍を勸誘せり。此の軍の成るやドミニコと其徒は之に從て檢數院の如きものを組織し、凡て異端の疑ある者を悉く檢問し、罪定まれは之を火刑に處したり。戰ひ止みて後ドミニコは其の長く異端攻撃の目的を以て組織せし團體を說教僧の一派と改めんと欲し、監督フルコも自己教領内にて一新宗派の成るを喜び、相伴ふて羅馬に行き、恰も聞會せしラテラン第四會議（一二一五）に於て之を請願す。然るに會議は新派の生ずるを欲せずして之を顧みざりしが、ドミニコは尙其志を棄てざりければ、インノーセント三世は終に其の派は在來の一宗派の規則を守るべき事、又單にカノン會の形にて組織すべき事を條件として之を許せしを以て、ドミニコはアウグスチヌス派の規則を採り、之にプレモンストレー派の規則、沈默、貧乏、斷食、肉慾全禁、麻衣等を加へしが成功甚だ覺束なかりしを、一六年インノーセント三世死し、後繼者オノリウス三世は說教僧に同情ありしものから、ドミニコは羅馬に急行し、オノリウスより同宗規則の裁可を得、又其の徽章として炬火を啣へたる犬の像を與へられたり。蓋し犬の如く教會を守り炬火の如く之を照すの意なり。此に於て同派は盛なる活動を始め、或は西班牙に行くもあり、或は巴理に行くもあり、巴理にては聖ヤコブ院に一僧院を立てたり。佛蘭西にて後に同派をジャコビンと呼びしは此故なり。ドミニコ自身もメッとヴェネチエに僧院を立てたり。羅馬滯在中法王宮の下僕等の絕えて精神的教育を受け得ざる者共に說教し、之がため法王宮延說教者とせらる。此職今も存しドミニコ派の勤むる所なり。

然も其派は尙盛ならざりしが、ドミニコは一二九年アレシに開かれしフランシスコ派總會に臨み、其派の人民の意に投じ居れる所以の原因を看取し、直ちに之に倣はんとし、二〇年ボロニアの聖ニコラス院に開かれたる自派の總會に於ては、如何なる形に拘はらず凡ての所有物を廢棄し、純貧を守り、日毎の必要なるものを人に乞ふことを宣言せり。翌年同所の總會には六十院の代表者出で、尙擴張のため會員を派遣することゝなり、斯くて成功を見つゝドミニコは死し、十二年後其の友グレゴリウス九世より聖者とせられたり。

多くの事情はドミニコ派の發達を助けぬ。乞丐說教僧は市に住まざる得ざりしに、市は其の頃恰も急激に發達せり。シトー派の如きも之を見て市に入りしも、彼等の組織は市中生活に適せず、ドミニコ派の如く根を下す能はざりき。然れどもドミニコ派の純貧てふことは間もなく有名無實となり、一四二五年マルチン五世は財產領地を所有するを禁ぜし程となれり。寄附は集まり、僧院、教會に立ち、美術の如きもゴチック形建築の或種類は實にドミニコ派に起りたる位なり。學問に於ける勢力は一層著しく、一二二八年巴理大學の教師等女王ブランカと爭ひし事ありて、學生と共に退き、或はレンスに或はアンゼアに去りし時、ドミニコ派は同大學に入り、其より諸大學には乞丐僧等（フランシスコ派も）入り行くに至れり。而して後に全く教育を其手に奪ひ、眞の學問を破壞せし論緒も此に始まりしなり。煩瑣主義の如きはドミニコ派の採るに急なりしものなれど、又同主義の末となりて偏狹牢强的となりしものは實は同派の造りし所なり。煩瑣主義の行はれし間は神學も哲學も行學も、唯だ唯だドミニコ派とフランシスコ派との爭ひしあるのみ。トマス派とスコトス派のマリア無罪に關する論爭の如き之にて終始せり。而してドミニコ派は常に優勢なりき。アルベルトス、マグヌス、トマス、アクィナス。マイステル、エッカルト。ヨハン、タウレル。ハインリヒ、スソー。サボナロラ。ラス、カラス。ヴィンセン、フェリエ。ボーバイのヴィンセンの如き其材は皆同派の出なり。八百の監督、百五十の大監督、六十のカルディナル、四人の法王は同派より出でぬ。されど次第に退步せしも事實なり。宗教改革の初には神學上に大勢力を有せしに拘はらず、驚くべく無學にして赦罪券の販賣に從事して教會を汚せしも彼等なり。尙嘆ずべきは彼等には更新の力なかりし事なり。フランシスコ派の如きは最分之を有せし證には、改革派の如きものを造りたり。ドミニコ派が六世紀間の勞力の結果贏ち得し所は、一八五四年ピウス九世聖母無罪懷胎の教義を布告せし時、常に之に反對し來りし同派は、教會の大首長より嚴酷なる讚賞を受けしこと是れのみ。（ドミニコ及びドミニコ派の事を詳に知らんと欲せば、大監督アルマニーの『聖ドミニコ傳』、附ドミニコ派梗概』ジェソグブの『乞丐僧の起源』ヘルクレッスの『フランシス派及びドミニコ派』等を見よ）。

ドミニコス派 Dominicans. 僧派名 聖ドミニコスの創設せる僧派『ドミニコス』の條を見よ。

ドラ（ドロシー、ウィンドロー、バッチソン）Dora, Sister (Dorothy Wynblow Pattison) 人名 一八三二—七八 英國の看護婦。コルクシヤのホークスウェルに生る。父は

ホークスウェルの司長にして中流の人なりしが、ドラは自ら其の社交的地位を棄て三年間村落學校を教へし後、一八六四年英國々教會の『善きサマリア人姉妹會』に入り、六五年同會の擬當ぜしワルサル假會病院に送られ、看護執務に手腕を現はして直らに有名となり、七六年病篤くして始めてワルサルを去れり。其の一生は變化少かりしも、小説の如く人を感動せしむ。基督の精神を實現したる人にして、不屈の勇氣と不動の信仰とを有し、病院の凡ての患者と町内の凡ての貧民との友となり、從つて如何なる種類の人にも崇められたり。彼は良家の出にして教育あり健康あり容貌秀で欲情豐に且頑氣强かりしかば、其の職務を行ふに自然の助を得たり。ワルサルは工業地にして出來事の絶えざる所なりしかば、彼は看護婦たると共に外科醫として熟練せる者となりぬ。然れども其の感化の秘訣は宗教にして人の肉體を癒すことを志さるのみならず、又精神を助け改むることを勉めたり。

ドライヴェル サミュエル ロールス Driver, Samuel Rolles 【人名】 一八四六　英國の希伯來語學者。サマムプションに生る。一八七〇年牛津ユウ、カレッヂのフェローとなり、七五年同校講師となり、八三年牛津希伯來語教授に任ぜられ以て今日に至る。曾て舊約改譯委員の一人なりき。英國舊約聖書學者中最も錚々たる一人にして『希伯來語時の使用に關する一論文』(九二)『以賽亞、其生活と時代』(九三)『舊約文學總論』(九四)註釋書には『約耳書及び亞摩士書』(九七)『利未記』(一九〇一)『申命記』(一九〇二)『創世記』(一九〇四)『小預言書』『約百記』(一九〇五)及び『舊約の希伯來語英語字書』(一八九二)等の著あり。何れも源泉として尊重せらる。

ドラクマ Drachma 『金錢貨幣』の條を見よ。

ドラモンド ジェームス James Drummond, 【人名】 一八三五　英國の神學者。ダブリンに生る。一八六九年倫敦ユウ、カレッヂの神學教授となり、八五年マルチノーに繼ぎて其校長となり、八九年學校と共に牛津に轉ず。其著書には『靈的宗教』(七〇)『猶太のメッシヤ』(七七)『神學總論』(八四) :"Philo-Judaeus" (二卷、八八) :"Via, Veritas, Vita" (ヒッパルト講演、九四)『マルチノー博士の傳及び書簡』(ウ プ トン共著、一九〇二)『第四福音書の性質及び作者』(一九〇四)等あり。

ドラモンド ヘンリー Drummond, Henry. 【人名】 一八五一—九七　蘇國の科學者。スターリングに生る。米國の傳道者ムーデー及びサンキーの英國に來るや、ドラモンドは彼等に伴ふて凡そ廿箇月間英國の各所を巡回說教せしが、一八七七年グラスゴー、フリー、チャルチ、カレッヂの自然科學講師に選ばれ、八四年教授となる。彼が初めムーデー及サンキーと傳道せし頃は、其神學に於て實際古來の傳說を信ずるに過ぎざりしが、彼が基督教に對する意見は慨全なる者にして、當時と雖も世の所謂リバイバリストとは同じからざりき。彼は其懷中聖書に『宗教は靜肅なる者也、其最大の標識は平和及び安息也、世の中に最も發動せる者は救はれざる靈魂也』とのことを記せり。而して彼の信仰は大學に在りし時より漸次變化し、殊に舊約聖書の研究は彼をして科學と宗教との調和の必要を感ぜしむるに至れり。『靈界に於ける自然法』(Natural Law in the Spiritual World, 一八八三)は即ち其結果として顯はれたる者にして、彼は此書に於て最も巧妙的確に靈物二法一元なる說き、久しく衝突せりと思惟せられたりし宗教と科學との調和を試み、至大なる感化を當時の思想界に與へたり。次で出でたる "Ascent of Man" (一八九四)とす。此書も亦靈界に於ける法則の自然界に於ける法則と同一なることを說きたる者にして、即ち進化の法則は宗教的情感の發達に於ても、動物的性質の範圍に於けるが如く行はるゝ者也とのことを示せる者也。ドラモンドは其初めに於ては、個人の救濟に最も重を置きたりしが、其相識と經驗の進むに從ひ、其教訓は漸次其調子を變じ來り、基督教の社會的方面を高調するに至れり。彼は唯に知識に於て秀でたりしのみならず、又敬度の念深く、其品性高貴なりしを以て至大の感化を當時の人々、殊に學生青年に與へたりき。以上に擧げたる者の外 :"Tropical Africa" (一八八八) :"Travel Sketches in our New Protectorate" (九〇) :"Pax Vobiscum" (九〇) :"The Greatest Thing in the World" (九一) 等の著あり。九八年ジョルジ、アダム、スミス彼の傳を著す。就て見よ。

度量衡 聖書の Weights and Measures in the Bible. 【雜語】 希伯來人の間に行はれたる度量衡の概略を叙す。

【秤量】 希伯來人秤量の單位はシケル (שֶׁקֶל, Shekel) にして、此シケルは『聖なるシケル』又は『聖所のシケル』と稱せらる。シケルを小分してベカ (Beka i.e. half) 即ち半シケル及びゲラ (Gerah i.e. a grain or bean) となす。倍量はキッカル (כִּכָּר, Kikkar i.e. circle or globe) にして、七十人譯は之を Talanton と譯し、英譯は七十人譯に從ひ之を "Talent" と譯す。邦譯には『斤』とあり。更に區別して

て之をミネ (מָנֶה, Mina, Mineh, or pieces or numbers) となす。此等の秤量は通常銀を秤るに用ゐられたる者にして、現存の銀貨より之を推斷すれば其價格凡そ左の如し。但しゲレーンは精密に秤りたる者なれ共、磅の目方は概算に過ぎず。

銀量					
ゲラ	ゲレーン	ポンド	オンス	匁
10	11	……	四分一厘八毛〇三	三分一厘八毛〇三
二〇	110	……	四分二	三匁二分八厘餘
二シケル	二〇〇	二分一	三分一	四匁三分六厘餘
一、二〇〇	一二〇〇	二	二匁六分三厘餘	二匁六分三厘餘
六〇、〇〇〇	六、〇〇〇	一五	一匁二分五厘餘	一匁二分五厘餘
六〇、〇〇〇	六、〇〇〇	一五	キッカル(タレント)	二〇〇、〇〇〇
一〇〇	一〇〇	二分一	四匁三分六厘餘	四匁三分六厘餘
一、二〇〇、〇〇〇	一二〇〇	二	二匁六分三厘餘	二匁六分三厘餘
一〇、〇〇〇	一〇〇	一	一匁二分五厘餘	一匁二分五厘餘

金を秤るには之と異れるシケルを以てせり。此は思ふに外國より來れるものなるべし。其價格は百廿九グレーンより百卅二グレーン也とせらる。此秤量のキッカル(タレント)は銀の秤量の二倍に當る。一タレントは一百メネに分たれ、一メネは一百シケルに分たる。即ち左の如し。

金量				
シケル	グレーン	ポンド	オンス	匁
一〇〇	一〇〇	……	三	三匁六分一厘六毛餘
メネ	一〇〇	一	……	二匁六分三厘餘
一、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇	一貫四百四十四匁餘	一貫四百四十四匁餘
キッカル(タレント)				

銀か秤るには更に異れる秤量ありしが如し。即ち銀の一シケルは金の一シケルの四倍(即ち五二八グレーン)に當り、一千五百シケルは一タレント(即ち七九二、〇〇〇グレーン)に當る。貨幣に於ては更に半シケル(即ち二六四グレーン)四分の一シケル(即ち一三二グレーン)及び六分の一シケル(即ち八八グレーン)に分たれたりしが如し(『金錢貨幣』の條を見よ)。

【尺度即ち長短及び距離】 尺度は通常の意義に於ける長さ及び距離の二に分る。兩者單位の間には一定の關係あり。

(一) 長短　長短を測る尺度は一般に初め人體の或る部分より取り來りし者なれ共、希伯來人に在りて最も著しきは、此目的に向て用ゐられたる唯一の部分が手及び前腕のみにして、奉西人が一般に單位として用ゐる足を全く使用せざりしこと也。故に東洋人がノアの方舟を造りたりし當時より尺度の單位として用ゐたりし(創六の十五、十六、七の廿)キュビト(אַמָּה, Cubit)は『ファート』の割合を以て測定し難し、キュビト以下の尺度にはエッパム (אֶצְבָּע, dikitus, digitus) 即ち指の厚さ(耶五十二の廿一)にのみあり)テパク (תֶּפַח, Tebhah, palmus) 即ち掌寬(出廿五の廿五、王上七の廿六、代下四の五、詩廿九の五)セレト (זֶרֶת, zarthag, palmus major, or span) 即ち拇指の頭と小指の頭との間の廣さ(出廿八の十六、往前十七の四、結四十三の十三、塞四十の十二)等あり。

キュビトなる語は三箇の異りたる意義を有す。即ち臂より手頸に至る前腕の長さ、若くは臂より指の頭に至るまでの長さ、若くは臂より指關節の一に至る長さ是也。而して此等三箇の異りたる標準は共に用ゐられたりしが如く、兎に角其中二箇は通常使用せられたり。故に舊約以西結書には大キュビト又は指關節に至るキュビトを一キュビトと一手澤と均しとして記載せり(四十の五、四十一の八)。此大キュビト又は長きキュビトはエゼキエルが其幻に見たる神殿を測るために用ゐたるものにして、思ふに彼の敬度なるモーセの用ゐたる律法上の標準以外のものを用ゐざりしなるべし。此モーセのキュビトは之に依て幕屋及び神殿を測りたるもの也。若し果して然りとせば、他のキュビトは通常のカルデヤ人の尺度なりしなるべし。律法上のキュビトはモーセの時代に於て巨人オグの寢臺を測りたる人のキュビト(人の肘)より區別せらる(申三の十一)。此『人のキュビト』は蓋し迦南人の中に普通に用ゐられたる者にして、故に又カルデヤ人の標準(エゼキエルの小キュビト)となりし者なるべし。又ソロモンの神殿は『古の尺に稽ふて』之を建てたりと云へば(代下三の三)當時他のキュビト即ち新なるキュビト使用せられたりしが如し。吾人が此等の事より推定し得ることは、第一以上三箇のキュビト王朝時代に使用せられたる事。即ち(イ)人のキュビト又は迦南人の普通使用せるキュビトはモーセのキュビトと異り、カルデヤ人の標準となせし處のもの也。(ロ)モーセ又は律法上

のキュビトは『人のキュビト』よりも一エ調長く、埃及の『小キュビト』と同樣也。（ハ）新キュビトは更に長く、埃及の『大キュビト』と同じく、凡そ二〇吋、六を有す。第二、聖書に記されたる普通のキュビトは他國のキュビト程に長からざりし事。家を測るために用ゐられたる竿は六キュビトに均しく、此は唯以西結書にのみ記さる（四十の五―八、四十二の十六―十九）。左に掲げたる表は單に概算を示せるのみ。

長短の尺度	吋	糎	呎	吋
エツバア（指の厚）……	〇、七五六	一、九		
一 テパク（掌寬）……	三、二五三	八、三六五		
二 三 ゼレス（拇指と小指間の長）…	九、五三五	二四、二分一		
三 六 一キュビト（前腕の長）…	一九、〇五一五	二	七	
一四 三六 一三 六 竿	二四、三八六	九	六	

（二）距離　希伯來人の距離にツァアド、キプラスエーレツツ、一日程、安息日程等の名あり。（イ）ツァアド（בַּצַּעַד, pace）は日本語聖書には『歩』と譯せり（母後六の十三）。一歩は通常三十吋にして、二歩は大抵五呎に當る。兵士の進軍を基礎とせる羅馬の制度にては特密に『歩』の長さを規定したれ共、猶太人の中には斯る規定なかりしが如し。パレスチナの遺程を測るに羅馬の制度の採用せられさりし以前より猶太人は（מִלּוֹן, milon, milo）を有したりしが如し（太五の四十一）。ミルは猶太人の一千歩、羅馬人の五千呎（千六百十八ヤルド）英國の一哩、我十四町半に當る。（ロ）キプラス、エーレツツ（קִדְמַת־אֶרֶץ, a little way）は七十人譯には寫も之を以て地名となせるかの如く、希伯來語を音譯して Καδμαθαία（創世五の十六）となし、前四十八の七には更に καδμονία なる語を加へたり。思ふに此語は競馬場又は競技場の在る場所の名にて、通常馬の走り得る路程を指したる者なるべし。而して其長さはヤツレヘムとラケルの墓との間の距離と均しと想像せらる。日本語聖書には『路の隔ある處』と譯せり。（ハ）一日程（דֶּרֶךְ יוֹם־אֶחָד, a day's journey）は旅行するに方り其距離を測るに最も普通に用ゐられたる方法にして、舊約及び羅外聖書には屢々記されたれ共（創世の世六、世一の世三、出三の十八、五の三、民十の世三、十一の世一、世三の八、申一の二、王上十九の四、王下三の九、拿三の三、マタカビース上五の世四、世八、七の四十五、トビット六の一）新約には唯一回記されたるのみ（路二の四十四）。一日程の距離は旅行者又は其旅行する土地の狀態に依て一樣ならず。例之平坦なる土地を旅行する者は山川を跋渉する者よりも遠路を往き得べく、至急の用務を帶べる使者は、隆商よりも多く往き得るが如し。ヘロドタスは二百スタヂア（一スタヂウムは我凡そ六百尺に當る）より百五十スタヂアの間也と云ひ、マリヌスは百五十乃至百七十スタヂア也と云ひ、ストラボは二百五十乃至三百スタヂア也と云ひ、ヴェゲチウスは羅馬里程の廿ミル乃至廿ミル也と云へり。猶太人の通常一日の行程は三十ミルなれ共、隊かくみて旅行する時は十ミルに過ぎず。故に一日程の距離は精密に定難しと雖も、平均廿哩乃至廿五哩となさば大なる誤なかるべし。（ニ）安息日程（שַׁבָּת־דֶּרֶךְ, Sabbath-day's journey）は二千キュビトの距離にして、新約にのみ記さる（使一の十二）。此はラビの規定したる者にて昔時には之れなかりき。思ふにモーセが『第七日には其處より出づる事あるべからず』（出十六の廿九）と云へるより起りたる者なるべし。而して二千キュビトは神の櫃と民との距離及びレビ人に與へられたる邑の外の廣さなりしが故に（民廿五の五）旅行者の住したりしエルサレム市の石垣より測りて之を安息日の行程となしたりし者なるべし。前に記したるキュビトの長さよりすれば、安息日に往き得る道程は一ミルの十分の六若くは十分の七即ち我が八九町に當れり。尤も場合に依りては二千八百キュビトまでは往き得たりしと云へば、我が凡そ十一二町を往き得たりし譯也。近時ゲゼル附近に此割合の距離に境界石の立てるを發見せり。此は蓋し安息日の行程を示したる者なるべしといふ。（ホ）俘囚後猶太人は技斯人、希臘人及び羅馬人と觸接したりし結果、パラサング（parasang）スタヂウム（stadium）及びミルを用ゐたり。スタヂウムはもとオリンピアの競馬の長さなりしが、希臘尺度の標準として用ゐられ、初めてマカビース書（下十一の五、十二の九、十七、廿九）に記され、新約には普通に用ゐられたり（路廿四の十三、約六の十九、十一の十八、默十四の廿、廿一の十六）。英譯には（furlong）と譯せられ、邦譯は之を日本里數に換算し六十スタヂアを三里となせり。羅馬のミルは新約に一回（太五の四十一）に記されたること以上既に之を云へり。（ヘ）保羅が羅馬に航せし時亞歷山の水夫が海の深さを測りし時用ゐたりしは希臘語オルグヰア（ὀργυιά）にして、英譯には fathom とあり、邦譯は之を尋と譯せり。左の中指の指頭より右の中指の指頭に至るまでの長さにて、凡そ六呎に當る。今左表に希臘及び羅馬の尺度を示す。

希臘、羅馬の長及び距離		英哩	呎	吋
羅馬呎＝希臘の〇、九六呎 ……		……		二、九四九六
一四分二	希臘呎（πούς）……	……	一	〇、三四一
四	四、三分三　羅馬步（passus）……	……	四	一〇、三四八
六	六　一四分二（希臘步）orgyia ……	……	六	〇、八二
六三四	六〇〇　一二四	一〇〇　スタヂオン（στάδιον）……	……	六六六
五、〇〇〇	四、八〇〇　一、〇〇〇	八〇　八　羅馬ミル ……	……	九、八二五
二八、九四〇	二八、〇〇〇　二三、九四五	三〇　三、四分三	彼斯パラサング	三、三分一
……	……	……	……	……

猶太人は面積殊に土地を測るに特殊の重積を用ゐたることなく、面の長さ及び幅を測るにキュビト（民廿五の四、五、結四十の廿七）又は竿（結四十二の廿、四十三の十七、四十五の二、四十八の廿、默廿一の十六）を用ゐたり。

【容量】（一）流動體の容量を測るには左の標準の使用せられたるを見る。（イ）杯（κοτύλη, cotylē or hin）默十四の十其他に記さる。（ロ）ヒン（הִין, hin）埃及に起りたる者にて、屢々聖書に記さる（出廿九の四十、世の廿四、民十五の四、七、九、結四の十一等）。（ハ）バス（בַּת, bath）流動體量を測る標準の最も大なる者にして、邦譯には『斗』と譯せり（王上七の廿六、世八、代下二の十、喇七の廿二、寒五の十、路十六の六）。以上の標準の比較的容量は聖書にては明ならざれ共、ヨセファス其他に據れば、一バスは六ヒンに當り、一ヒンは十二杯（ポチリオン）に當る。

（二）凝體量の標準は左の如し。（イ）カブ（כַּב, cab）元來孔又は門の義也。王下六の廿五にのみ記さる。（ロ）オメル（עֹמֶר, omer）元來塊又は束の義なる有す。出十六の十六―世六にのみ記さる。（ハ）セア又はセヤ（סְאָה, sata, seah）創十八の六、母前廿五の十八、王下七の一、十六、去十三の世三、路十三の廿一に記さる。寒四十の十二及び詩八十の五には シャリシ（שְׁלִישִׁי, shalisch）と名けらる。（ニ）エパ（אֵיפָה, or אֵיפָת, ephah）埃及に其起源を有し、屢々聖書に記さる（出十六の世六、利五の十一、六の廿、民五の十五、廿八の五、士六の十九、結四十五の十一、十母前一の廿四、十七の十七、結四十五の十一、十三、十四、四十六の五、七、十一、十四）。（ホ）レセク（לֶתֶךְ, letheq）何三の二にのみ記さる。『濾ぎ出されたる者』の義にして、半ホメルに當る。（ヘ）ホメル（חֹמֶר, homer）積聚又は塊の義にして、利廿七の十六、民十一の廿二、寒五の十、結四十五の十三に記さる。又之を測る器の圓形なるより コル（כּוֹר, kōr, kor）とも名けらる（王上四の廿二、五の十一、代下二の十、廿七の五、喇七の廿二、結四十五の十四、路十六の七）。以上凝體量の比較高は左の如し。

カブ

一、六分四		
六	オメル	
一八	三、三分一	
一八〇	一〇	アセ
	一〇〇	三、三分一	エパ
		三〇	バ
			一〇	ホメル

右の流動體及び凝體量の容量の價値に就ては、之を定むる材料乏しきを以て諸說一定せず。其重なる者はヨセファス及びラビの計算なれ共、吾人は其何れが是なるを定むる能はず。今左表に之を示す。

		ヨセファス	ラビ
ホメル（コル）	八六六瓦、六九六（二石六斗六升七合四勺）	四四瓦、二八六（一石一斗〇七合一勺餘）	
エパ又はバス	八瓦、六六九六（二斗一升六合七勺餘）	四瓦、四二八六（一斗一升〇七勺餘）	
セア	二瓦、八八九八（七升二合二勺餘）	一瓦、四七六二（三升六合九勺餘）	
ヒン	一瓦、四四四九（三升六合一勺餘）	〃、七三八一（一升八合四勺餘）	
オメル	、八六六九（二升一合六勺餘）	〃、四四二八（一升〇九勺餘）	
カブ	、四八一六（一升二合四勺餘）	〃、二四六（六合一勺餘）	
ログ	、一二〇四（三合餘）	〃、〇六一五（一合五勺餘）	

新約には又外國の量を用ゐたるものあり。即ち左の如し。(イ)メトレタス(*μετρητής, metretes*)約二の六に記さる。邦譯には『四五斗』と譯せり。希臘の一メトレタスは八瓦、六六九六に當るを以て、日本量に換算すれば二斗一升六合七勺餘に當る。而して六の石甕に滿てりとあれば、百十瓦即ち我が一石三斗餘の水ありし譯也。(ロ)コイニクス(*Κοινιξ, choinix*) 默六の六に記さる。邦譯には一コイニクスを五合と譯せり。(ハ)ケステス(*Κεστης, a vessel*) 可七の四、八に記さる。邦譯には『杯』と譯せり。蓋し小さき器の謂也。(ニ)モディオス(*μοδιος, modios*)太五の十五、可四の廿一、路十一の卅三に記さる。邦譯には『斗』と譯せり。蓋し麻馬の量目にして凡そ一ペック(即ち我五升四勺弱)程のものなるべし。

ドルトの會議 The Synod of Dort. 【事蹟】 アルミニウス神學の論爭を決定せんため、一六一八年十一月に開き、翌年五月を以て閉ぢる會議也。『アルミニウス派の神學』の條を見よ。

ドルネル Isaak August Dorner, 【人名】 一八〇九—一八四 獨逸の神學者。ウュルテムベルグのノイハウセンに生る。一八三七年チウビンゲン、三九年キール、四三年ケーニグスベルグ、四七年ボン、五三年ゲッチンゲン、六二年伯林大學教授に歷任す。ヘーゲル及びシュライヘルマッヘルの感化を受け、其取る所の地位は概して正統派と稱すべしと雖も、新思想の中にも舊思想と同じく眞理あることを認め、勉めて之を調和せんことを求め、簡る自由の精神を顯はしたり。彼の神學の中心點は基督は其神人的性格に於て凡ての個人の儀表たるものを結合せりといふに在り。其重なる著書は『基督の性格の教義の發達史』(五九)『プロテスタント神學史』(七一)基督教義の系統』(八八—九〇)『基督教倫理の系統』(八七)等にして、何れも英譯せらる。

奴隷制度 Slavery, Slave Trade. 【制度】 【希伯來人間の奴隷制度】 舊約聖書は人は神の像にかたどりて造られしが故に、其の天性に犯すべからざるものありとし、又人類は一の血統より出でしが故に同胞なることを表はせるを以て、之に從へば奴隷制度は初より許すべからざるものなるが如く見ゆ。尤も舊約聖書には人間の歷史の初より既に一の民族が奴隷として定められしことを記しあれど、此は其の特別の職務のために受けたる咒ひの結果なりとせられたり。然れども舊約全書は奴隷制度を既に記し居れること事實にして、僕は在りしものとして記し居れること事實にして、僕は他の物と同じく財產の一部となり居れり(創廿四の三十五、廿六の十四、伯一の三)。且奴隷の賣買も族長時代に既に常習たりしことを示せり。族長の僕に二種あり、家に生れたるもの(創十四の十四)と、錢を以て買はれし者(創十七の十三)と是也。アブラハムは多くの僕を有したるが如く、或時には其の家に生れたる若者三百十八人に武器を取らせし事あり。家に生れし僕は他の者よりも大なる特權ありて、主人の信任を受けしものなるが如し。エリエザル(創廿四)の如きは其一例にて、彼はアブラハムが子なくして死にたらんには、其の繼嗣たるべかりしなり(創十五)。アブラハムの僕等は主人と同じ宗教上の特權を與られ、契約の印を受けたり(創十七の九、十四、廿四、廿七)。希伯來人の奴隷制度は一セ法の許せる限りは、法律を以て規律し、極めて人情深き性質を有し、異教國の同じ制度の甚なると著しく異れり。奴隷制度に關する法律は二種に分たる。一は希伯來人の奴隷に關するもの、他は希伯來人外の奴隷に關するものなり。

(一) 希伯來人の奴隷　希伯來人が奴隷とせらるゝ事情は(イ)貧窮のため(出廿五の三十九、四十七)。(ロ)盜なせるため(出廿二の一、三)。尚して此場合には盜人を外國人に賣るを得ず。(ハ)父母の權力を以て奴隷とせらるゝ事(出廿一の七)。而して此場合には唯女兒のみを賣るか許さる。斯くて奴隷となれる者は三の途に依て其の役を免かるゝを得。即ち自己に對する凡ての要請を償ひ果す事、ヨベルの年の回り來る事(利廿五の四十、而して此年は何人の一生にも一度は必ず來るべし)。此等の何れに依ても免除せられずば、其の奴隷役に就きてより六年を終了することに由りて免さる(出廿一の二、申十五の十二)是也。而して第三の規定は貧と盜とに由て奴隷となれる者にも及びたるは明なり。七年といふ期は安息年の主義より來るものなるべけれど、安息年に關係あるものにはあらず。安息年の執行に當りて奴隷の一般解放ありしは唯だ一回見ゆるのみ(耶三十四の十四)。奴隷もし其の役を免るゝことを好まずば、其旨を士師の前にて表すべく、然れば主人は之を戶柱の所に携へ行き、錐にて耳を刺し通し、之に由て僕と其家との間に契約を立て、此は無期の僕となる(出廿一の六)。僕の事情は決して忍ぶべからざるものには非ざりき。主人は之を奴隷として扱はず、雇人と寄寓者とを取扱ひ、苛酷に之を使ふべからずと命ぜられたり(利廿五の三十九、四十、四十三)。役果つれば主人は之を空しく歸らしむべからず、其の家畜多餘酒の飲分を與へて去らしめざるべからざりき(申十五の十三、十四)。國内に在る外

國人の僕となりし希伯來人は、ヨベルの年の回歸か、又は主人に事へし日數に應じて之を金額に見積り、之を身賣金より差引き、其の殘りを償還するは自ら贖ふことをも得べく、親族に依て贖はるゝ事をも得べし。希伯來の女は貧のために自ら進んで奴隷となるを得たり。此場合には六年にて免され、男子と同じ取扱ひを受く(申十五の十二)。若き娘が父より希伯來人に賣られし時は、之と異り、買主之を妻とせんとするか、又は其子にめあはせんとして買ひし時、主人長く其の心ならば女は其家に留まるべけれど、若し主人之を妻とする事を欲せずば、女の友に向ひて女の身料を拂ひ、之を解放せしめざるかを問ひ、若し子に之をめあはせんと約束せしならば、之を娘の如く取り扱ひ、若し己れが子が女と婚して更に他の女を娶るならば、前の女の待遇を改めべからず、以上の三件の一つも行はれずば身料を償はずして免さるゝ事を得べしとせられたり(出廿一の七—十一)。

(二) 希伯來人外の奴隷　此は大抵戰に由て虜とせる者にて、カナン人の殘れる者か、其他附近國民より捕へられし者なり(民三十一の廿六)。此外外國の奴隷商人より買はれし者ありき。法律が外國人奴隷の增加を抑ふる傾ありしは、申命記廿三の十六以下にて知らる。巴比倫より歸還後は、奴隷は七千三百三十七人即ち自由民の六分の一ほどありしのみ(喇二の六十五)。奴隷は宗教上の特權に關して優待せらる。彼等は割禮を授けられ、會堂の供物を獻ずるに與かることを得たり(出十二の四十四)。他の宗教祭にも與かれり(申十二の十二、八、十六の十一、十四)。安息日には休み(申五の十四)主人に男子なければ其の女婿とせらるゝを得たり(民下二の三十五)。女の奴隷の取扱は申命記廿一の十以下にあり。凡て主人は奴隷の生命を與奪する權なし(出廿一の二十)。奴隷を故意に殺す時は、自由者を殺せしと同じ罰に處せらる(利廿四の十七、廿二)。されど奴隷が打たれし後一二日生き延びなば罰なし。彼は主人の金なれば(出廿一の廿、廿一)。目又は齒を傷つくる如き小傷害は、奴隷に自由を與へて償はれたり(出廿一の廿六、廿七)。一體に奴隷の待遇は柔和にして、箴言廿九の十九、廿一の助言まで出づるに至りし如く、柔和に過ぎたり。エッセネスの徒は全く奴隷制を廢したり。

【新約聖書に於ける奴隷制度】 新約は全人類が平等に救に與かるべきことを教ふ(多二の十一、提前二の四)。是れ奴隷制度に關する見解を決するに充分なる指針なり(加三の廿八、西三の十一)。基督教は人を國民若くは民族として視ず、一個人として視、之に内的の靈を生かす主義を與へ、基督と直接に接し、之と合一せしむるを目的とせしが故に、内なる人の權利を認めたり(徒二の四十一、十三の四十六、加二の十九—廿一)。是れ異教の思はざる所、舊約も尙知らざりし所にして、實に一プロテスタント教に至りて始めて完全の實現を見、地上に奴隷制度の絕滅せる基なるなしたり。基督は靈の自由を說き、使徒等又之を敎へたりき(約八の三十二、哥前七の廿三、加五の一、彼前二の十六等)。されど唯靈の自由のみならず、一體に自由といふものが、基督と共に人類に來り、麵酵の如く生活の諸關係に及びたるは明也。

奴隷制度に關して哥前七の廿一に云へる所は特に注目すべし。其の解釋は如何なるにもせよ、保羅が當時の事情の基督教精神に反對なる點をも無理に之を抑止せんとは欲せず、唯だ先づ内的自由を人心に植ゑ付け、其より時の進むに從ひ、外部の自由の發することを欲したるは疑なし。羅十三の一以下に依れば、使徒時代に於て當時の政府に服從を育ぐる傾向幾分存したる事を見るべく、又オネシモの例より之を推せば、當時奴隷が主人の軛を脫せんと欲せし傾向ありしは明なり。オネシモの場合には、保羅は彼に基督教の性質目的を十分に知らしめ、喜んで主人に歸るに至らしめたりき(門十—十六)。コリントの奴隷にも同一の傾向ありしが如し。同市にては多くの者改宗せしことなれば(哥前一の廿、廿六—廿八)保羅は彼等に向ひて、其の神に召されたる時の狀態に在りて主に事ふべしとのことを命じたりき(哥前七の十七、二十)。其の理由として、彼は今は困難の時なれば、未婚にて召されし者は未婚に留まるべく、奴隷にて召されし者は奴隷に留まるべしと云ひしが、此は時の短きと災禍ありて世界の事情の一變する時の近きとを意味せるものにて、其の教を守らしむるに非常の力を有したり。されど保羅は自由の權利と個人獨立の權利とを抑へず。哥前七の廿三には此の權利を唱へ、主の憲は凡て人間の束縛を廢棄すと言へり。此の權を否定せば自己の自由の要求(哥前九の一)と矛盾し、又其の根本思想、即ち基督に由て萬事一新すべしといふこと(五の十七)とも矛盾す。基督教自由の主義はピレモン其他に奴隷を視同に兄弟として扱へと勸めたるにて明かなり(弗六の六、西四の一、門十六)。ライトフートの云ひし如く、保羅は奴隷解放の命令をなさざりしも、事實に於ては解放以上の事をなせと言ひしなり。

の權利に關する定說と新約の教訓とに依り、基督教と奴隷制度とは正反對のもの也と思惟することなれ共、古代の社會は全く奴隷制度の上に築かれ、殊に基督在世時代の羅馬帝國に於て古今無比の完成を見たり。基督は奴隷制度に對しても、拜像など他の弊害に對せしと同じく、之を廢止せよと命ずしことなし。且基督教以後三百年間は基督教の敎に奴隷の廢止を唱へし者、敵味方双方に之れあるを見ず。されど後に至り奴隷に關する意見の起りしは、おもに基督教の道德觀より發酵したるものなること明なり。今左に奴隷制度の終に基督教に依りて廢止せらるゝに至りし次第の概略を記すべし。

（一）コンスタンチヌスの世までの基督教と奴隷制度との關係、　初代の改宗者の中には、多くの奴隷あり、主人あり き。保羅は同じく神を父とし、同じく教に與かり得る人間に、差別を立つる愚を言明し、新世界にては神の前に萬人平等なりとのことを說き、又之と共に奴隷には服從の義務あり、主人には權威ある教へたり。其より後三百年間、使徒も師父も、奴隷制度は定まれる社會組織にして、自己等の改むるを得ざるもの也として之を見すごし、唯だ此制度の下に在りて、其道德的弊害を救ふを目的となし、奴隷等の知力に訴へず、心に訴へて之を教へ、柔和謙遜を勸め、始めて人に使はるゝ事の德義を聖化せり。彼等は奴隷等の神に事ふるは全き自由を與へらるゝ所以なりとし、新しき神の都にては彼等も主人と平等の地位にあるもの也と認めたるが如く、主僕は皆な兄弟にして、共に教會の役員となり、共に慈善の執行に與かり、同じ圓體の員に備はり、同じ權利を受け、來世に於ける共通の報を同じく望める者也との事を敎へたりき。

疑もなく當時の羅馬には、法律上習慣上の多くの弊害ありて、基督信徒の心を動かしたるべきも、彼等は唯だ服從し忍耐し、自己等の善行を以て之に當りたり。羅馬の法律が基督教と衝突するに至りても、信徒は革命的の急擊を以て之に對せざりき。

（二）基督教師父の奴隷に關する意見　師父等の意見は、疑もなくストア學派の倫理學より出で來れるものとなり、其後久しく此の有樣なりしな、基督教來りて之を一變し、勞働を高尚の事とし、勞働に服するは愛の誡より離すべからざる事也とし、勞働は所有其物ほど基督教品格の完成に必要なりと爲せり。

コンスタンチヌス及び其後の基督教皇帝の世となりても、奴隷制は依然繼續し、ユスチニアヌスの時の奴隷法（五二九年）の如きは、自主人と奴隷との區別を明にせしこと古今無比のものなりき、ニカヤ會議及び其の後の基督教師父等は、政府なして奴隷を格鬪者として用ひ、女を女優として用ふるを禁するの法律を出だましむることを得たりしが、人民が此等の觀物に熱心なりしため、法律も實行せられざりき、コンスタンチヌスは師父等に勸かされて、爾後奴隷解放は政府官吏の前ならで、教會監督の前にて行ひ、此の行爲の神聖を加ふべしと命じ、此の習慣は中世の教會に移れり。

コンスタンチヌスに新に生れし子を奴隷に賣るの權利を父母に與へしが、此は羅馬の舊法律に正反對なれども、時代の悲慘を幾分にても救ふために出でたるものにて、小兒を放棄し飢渴せしむるよりも良しとして採用せられたりし也と云ふ。

（三）コンスタンチヌス以後の奴隷制度　コンスタンチヌス時代よりアレキシス、コンメヌス（一〇九五）の時まで、東帝國にては奴隷制度に關し、基督

て、制度の行はるゝ範圍を狹めんとし、戰爭にて俘虜となれる者を贖ひ、負債のため奴隷に賣られんとする者の自由を買ひ、父の不幸に由て奴隷狀態に沈みたる家族を助くるために慈善をなし、羅馬人の久しく知らざりし勞働の尊嚴の主義を吹き入れたり。羅馬が世界征服を始むるや、凡ての勞働は奴隷のなすものとなり、其後久しく此の有樣なりしな、基督教來りて之を一變し、勞働を高尚の事とし、勞働に服するは愛の誡より離すべからざる事也とし、勞働は所有其物ほど基督教品格の完成に必要なりと爲せり。

コンスタンチヌス及び其後の基督教皇帝の世となりても、奴隷制は依然繼續し、ユスチニアヌスの時の奴隷法（五二九年）の如きは、自主人と奴隷との區別を明にせしこと古今無比のものなりき、ニカヤ會議及び其の後の基督教師父等は、政府なして奴隷を格鬪者として用ひ、女を女優として用ふるを禁するの法律を出だましむることを得たりしが、人民が此等の觀物に熱心なりしため、法律も實行せられざりき、コンスタンチヌスは師父等に勸かされて、爾後奴隷解放は政府官吏の前ならで、教會監督の前にて行ひ、此の行爲の神聖を加ふべしと命じ、此の習慣は中世の教會に移れり。

コンスタンチヌスに新に生れし子を奴隷に賣るの權利を父母に與へしが、此は羅馬の舊法律に正反對なれども、時代の悲慘を幾分にても救ふために出でたるものにて、小兒を放棄し飢渴せしむるよりも良しとして採用せられたりし也と云ふ。

（三）コンスタンチヌス以後の奴隷制度　コンスタンチヌス時代よりアレキシス、コンメヌス（一〇九五）の時まで、東帝國にては奴隷制度に關し、基督

教司祭者と、帝國政府との間に意見の喧鬪ありしこと今は明になりたり。此の喧鬪の性質如何なりしかは、一般人民の意見に、教會に於ける結婚は奴隷を事實上の自主者たらしむべしてふことありしにて知らる。マケドニアのバシロスの時まで、斯かる結婚は行ふことを許さず、男女奴隷の結合は、コンツベルニウム即ち一つ天幕の中に住む連合ひにして、羅馬人の有効合法の結婚の實質たるコンヌビウム即ち結婚としては認定せられざりしなり。バシロス（八六七―八八六）は僧侶に奴隷の結婚を祝する祝禱を命じたりしも、此の命令は時人の偏見に咎められて大反對を受け、屢々撤去せられしが、アレキシス、コムメヌス之を再興し、之を力づくるために『神一つ信仰一つバプテスマ一つ』てふ基督教の格言を呼び起し、奴隷にしてもし主人より教會にて結婚することを禁ぜらるゝ者あらば、其等は皆な直ちに自由となるべしと命じたり。

西帝國にてはチウトン民族に依て征服せられし後にも、家内の奴隷は尙存し居たること見ゆ。但し奴隷の大多數は農奴にして、羅馬のコロニの如く（Ad-scripti glebae（地付き）たり、其の土地より離して賣らるゝことを得ざりき。羅馬帝國ならびに野蠻人の立てたる敵峻なる奴隷法は、此等の農奴に對する法律として政府に依て維持せられぬ。中世封建制度の下には奴隷制は代りて農奴制となるの傾向ありて、奴隷制は次第に歐洲より跡を絕ちぬ。是れ勞力の雇主たちが經濟上と利己心より出づる勤儉を主とし、種々なる原因より賃錢を拂ふこと、及び其の農奴と相約定して、彼等に一定の種類一定の額に於て、土地のために義務を盡さしむる條件にて、其の土地を所有せしむることを得なりとするに至りたればなり。

されど此の時代、教會又は僧侶が、農奴や奴隷解放者の待遇を介意せざりしと思ふべからず。教會又は僧侶は早き時代には征服したる人種の凡てなりしが、教會は單なる奴隷使用を攻擊せざりき。封建制度のために、教會、僧院は信徒の寄附に依て自ら大なる奴隷及び農奴所有主となり居たり。然れども制度の弊に對しては絕えず抗議し、人情ある處置をなすべきを唱へたり。チャールス、エルス、ブレースは三十七の教會々議は奴隷に都合よき決議を通過せりと言へり。中世には基督教の捕虜を奴隷に與へられ、奴隷贖償のために大金額を費し、解放式は屢ば行はれ、教會は之を神の愛に由て動かされたる行爲のために從なりとして奬勵せり。されど大法王グレゴリウスが基督我等を讀ふために人となりたれば、奴隷は免されざるべからずと宣言せし宣言は、中世教會政治の指導となりしとは見えず、ラルローク（教會の十五會議の決議を記し、其の奴隷釋放に同情なきを示せり。

（四）近世に於ける奴隷制度及び其廢止　歐羅巴には、其後間もなく米國の發見ありて、此の新大陸にては勞働者僅少なるに再興するに至れり。新大陸にては勞働者僅少なるに其の必要は大なりしかば、基督教精神の上より、將た經濟思想の上より、多くの故障ありしに拘ぢらず、奴隷制度は之を買して成り、米國に殖民地を有する凡ての歐洲國民は、加特力教徒とプロテスタント教徒とを問はず、亞非利加海岸より奴隷を米國に運び、其の結果（アーサー、ヘルプスの計算によれば）一五七九年より一八〇七年まで五百萬の亞非利加人米國に移され、其の子孫も奴隷となれり。二百五十年以上の間、教會の內外一人として奴隷買賣と其の結果とに反對の聲を揚ぐる者なかりしが、第十八世紀の中頃二つの相異れる運動顯はれたり。甲は哲學的理由より來り、乙は基督教理由より來り。甲は佛蘭西に限られ、乙は英國に限られたり。黑奴に關する近世の意見及び法律は此の二つの何れかに基づけり。哲學的理由はルーソーの名著『エミール』中のサボイアーのヴィケーア信仰告白と稱する部分に見ゆ。此の說其後の第十八世紀政治論者に深き印象を與へ、佛蘭西革命の勢力の要素となれり。ルーソーに從へば、人は天性上著にして正義秩序を愛する者なれば、社會の理想狀態に於ては各員自由平等ならざるべからず。如何なる人如何なる家又如何なる階級も、己れに與へられざる權利特權を求むべからず。又各人は凡てに共通の規則を定むるに當りて之に與かるべきなり。此等の說や之を敷衍したる說は、種々の理由により佛國にて、極度の熱心を以て奉ぜられ、人民は之を適用せば黃金時代現はるべしと望みたり。而して奇とすべきは、此の意見を明白に官職的文書に言ひ顯はしたるものが實に米國の獨立宣言を以て最初となすことなり。曰く、凡ての人は平等なり。彼等は一定の犯すべからざる權利を造物主より與へらる。其中に生命自由及び幸福の追求ありと。一七八九年佛蘭西革命の初に於て採用せられたる『人權及び市民權の宣言』の第一條にも、人は自由平等に生れ、同權を有すと言へり。ルーソーの敎に基づける此の宣言の論理的結果として一七九四年二月四日の佛蘭西コンヴェンションは、凡ての佛領殖民地にては黑奴を廢すべし、其地の凡ての人は佛蘭西公民たる權利を有すと布令せり。是れ實に歐洲にて奴隷廢止布令の出でたる嚆矢なり。而も之を決行したる人民

ば、其の三月前に巴理のノツトルダム大會堂にて、一婦人を道理の女神として位に卽かせ禮拜したる人民にて、基督教より甚だ遠く離れ居たる者どもなりしなり。

恰も其頃英國及び米國にて、基督教義務の立場より同じ問題を考ふる運動起り、單に感情に依らで良心に依りて行動すべしとし、深くして堅き義務の確信に依て熱誠持久の個人的事業起るに至れり。此等の奴隷廢止運動者は、先づ亞非利加奴隷貿易を攻撃し、一七七二年グランヴィル、シャープ（Granville Sharp）は宗教的立場より其の抑止を切論し、米國革命の少し前ヴァージニアは此上濠奴を殖民地に送らざらんことを請願し、二三年後クラークソンは全生命を獻げて、法律にて此の基督教人道逆犯の事を禁止するに至らせんと努力し始め、クェーカル派は他教派に卒先して活動的態度を取り、一七八四年兼議院に廢止の請願をなしたり。少數の廢止運動者は不倦不息文書公會等にて活動せしかば、ウィルバーフォルス。ピット。フォックス。ホルク等を始め、英國名士の助を得、一般人民も之を信ずるに至り、其の熱心烈しくなりて、議會は終に一八〇七年奴隷貿易を廢止せり。英國に於ける此の運動は全く基督教感情に導かれしものなり。

米國合衆國にては、外國奴隷貿易は憲法に依り議會に附與せられし權力の作用に依り、一八〇八年廢止せられ、歐洲の海岸諸國も間もなく之に倣ひ、一八一五年の維納歐羅巴會議の宣言に依て、此の商業は宗教及び自然の法の咎むる所なりとせられ、愈よ奴隷貿易廢止は其の實行を全うしたり。

米國にてクェーカル徒は宗教團體として、初より一齊に奴隷制に反對し、一六八八年今のヒラデルヒアの一部となれる其時のジヤーマンタウンに在りし獨逸教會徒は、年會にて奴隷所有反對の手段を取ることを請願し、一六九六年より一七七六年まで年々非奴隷制宣言をなしたり。ジョン、ウイルマン（John Woolman）とアンソニー、ベネゼット（Anthony Benezet）とは近世クェーカル徒中の廢止論者の先驅なりき。一七七六年には友會は其徒の奴隷所有を禁じ、其後益々熱心に運動したりき。米國の長老教會は一七八七年と一八三六年の間に六回の廢止を可とする正式宣言をなし、奴隷制を非認し、また此等の宣言を確定せしことも屢々なりき。メソヂスト監督教會また初より奴隷制に反對し、一七八四年總會組織せらるゝや之に關する戒規を定め、傳道者にして奴隷を有する者なれば、教會より放逐することなせり。されど南部地方會員の地位のために、此の規定は屢々撤去せられて實行せられざりき。一八〇八年後は私人として奴隷を所有するは、戒規の問題とならざりき。然るに北部の同派には非奴隷制感情盛にして、一八四四年の總會にては、監督アンドリウが其の妻の法律上の權利のため奴隷を有せりとて、之を悉く解放するまでは教職を全然停止すべしといふ決議案出で、之がため總會は分裂し、南メソヂスト教會の分離組織を見るに至れり。尙記憶すべきは、米國北方諸州にては基督信徒の大多數全く非奴隷制精神に充ちたりしも公民としての義務を信じ之を盡すに止まり、廢止運動に活動せざりしに、奴隷制が南方諸州叛逆、對政府戰爭の口實とせられ、奴隷制が首石とせる一帝國を立てんと企つるに至り、殊に國民政府（北方）が奴隷解放を布令せしに至り、奴隷寬容の勢は全く民心より去るに至りたることなりき。英米諸國にて奴隷貿易廢止に與りて力ありしは、以上記載せる人々の外尙クラークソン。ニウトン。チャンニング、ギャリソン。ピーチャル及びピーチャル、ストウ夫人等數ふべし。詳なる事知らんとせばクラークソンの『奴隷貿易廢止史』を見よ。

ドレスデンの會議 Dresden Council. 『フイリップ派』の條を見よ。

ドーレマス夫人（サラ　プラット　ヘーンス）トマス　シー　Doremus (Sarah Platt Haines), Mrs. Thomas C. 人名　一八〇二―七七　米國の女流博愛者。紐育市の人、一生を基督に獻げ凡ての悲める者の救助に盡せり。三十二年間婦人監獄協會の理事たり、一八六三年より役員長たり。三十六年間紐育市及び小册子ミッション會社の理事たり。二十八年間紐育市聖書會社の理事たり。一八五〇年には工業館及び學校の創設者の一人たり。一八六七年以後は其の長たり。又育兒館及び小兒病院の創設者の一人たり、常に其の次長たり。五五年には博士ジェー、マリソン、シムスを助けて紐育市に婦人病院を立つ、同種の設備の最初のものなり。六六年長老教會老婦人館の組織を助け、第一回會合を司會し、引き續きて理事となりぬ。內亂中は市の內外の凡ての病院に必要物を供給する活動に力を盡せり。終生日曜學校教師たり、小兒生活に趣味を有すること深かりき。自分の家族は多人數なりしが、彼は決して其の中に於ける義務を怠らざりき。されど其の最も傳ふべきは、外國傳道に關する働なり。彼は『宣教師の母』と呼ばれ、紐育市の港を出入する宣教師にして彼の宣教的熱心を感ざる者はなかりき。十歳の時母と共にイサベラ、グレハム夫人等の催したる世界改宗新會に列し、其より終りまでは其の事に熱心を有し、一八二八年には

土耳其人のために苦められつゝありし希臘基督教徒救助除を組織し、三五年には加那太のグランド、リニエにあるフェラー夫人の浸禮派ミッションを助くるため紐育に一會社を組織せり。殊に長く彼の名を留むるものは一八六〇年紐育に設立せられて全國に普及せし婦人一致傳道會社なり。此は教派の宣教局と關係なく寫志寄附にて維持せられ、異教國婦人の傳道を目的とせるものなり。夫人は南改革（和蘭）教會員なりしが、教派的の偏見なく、從て全國の婦人社會に重ぜられたり。

ドレランクーア　シャール　Drelincourt, Charles. 人名　一五九五―一六六九　佛蘭西のレフォルムド教會牧師。セダンに生る。セダンとソーミュアにて教育を受け、一六二〇年より死に至るまで巴理附近のシャーレントンのレフォルムド教會の牧師たり。多くの書を著はせしが、殊に二書は非常なる成功なせり『死の恐怖に對する信仰ある靈魂の慰め』は四十餘版を重ね、外國語に譯せらる。英譯にはデフォーの有名なる緒言添へり『愛ある訪問』も屢々版を重ね諸國語に譯せらる。

ドロテア　Dorothea. 人名　童貞殉教者。ディオクレシアヌスの迫害の時と思はる。カパドキアのカイザリアにて殺され、七七一年羅馬教會より揚表せらる。別に普蘭士のドロテアあり。四十四歳に達し九子を産みたる後、一三九四年發心して隱者生活に入り、マリーンウェルデル大會堂に近き庵室に住み、自ら基督より授かりしと稱せし規則に從ひて生活せり。一四〇四年死にしが死後墓にて奇蹟行はると傳へられ『ナウトン騎士』宗の長は『ポニファキウス九世に之を聖者とせんことを申請せしが、調査の結果ドロテアは曾て幻にて前請代の『ナウトン騎士』宗の長等が無駄に在るを見、同宗の減亡を預言せしことありしこと明かとなり、遂者號申請は沙汰止みとなれり。去れど一般人民は尙ドロテアを崇め之を普蘭士の守護聖者となせり。

ドワイト　ティモシー　Dwight, Timothy. 人名　一七五二―一八一七　米國の教育家、說教者、神學者。マサチウセッツ州ノルサムアトンに生る。母はジョナサン、エドワルヅの女なり。一七六九年エール大學を卒業し、七一年より七七年まで同校にて助教授たり。一年位革命軍の從軍牧師となり、八三年より九五年迄コンネクチカット州グリーンフィルドの高等學校長たり。九五年より死するまでエール大學總理として大なる教育家、說教者の名を博せり『神學の說明と辯證』は學校禮拜堂にて說教せし講學組織を出版したるものにて、國內及び大英國にて非常に汎く行はれたり。彼は溫和なるカルヴィン說を說き、一體にエドワルヅ派新英州派の說と合へり。形而上的の裝飾なく基督教感情の溢れたる所、人の心を得たるなり。若き時詩を作りしが、其は長く誦せられざりしも『あな慎かし生命をもて』に愛誦せらるる。

ドン　ジョン　Donne, John 人名　英國の詩人、神學者。商人の子、倫敦に生る。牛津と劍橋とに學びしが、學士號を取らず。一五九二年天主教信仰を棄て之に反對する爭論的文書『僞殉教者』（一六一〇）『イグナチウス秘密室』（一六一一）の二を著はす。ジェームス一世前書を讀み彼を官に薦む。一四年聖職に入る。後にダルハムの監督となりしモルトン博士は七年前切に之を勸めしことありき。就職後直に宮廷牧師に擧げられ、二〇年には聖保羅會堂の『ディーン』に擧げらる『死の爭ひ』は最後の說教なり。聖保羅會堂に葬らる。作詩は其時代に愛誦せられ、ドライデンも之を讚し、ポープは之を倣作せり。說教集は哲學的見識と詩想とに富めり。

ドーン　ジョルジ　ワシントン　Doan, George Washington, D.D., LL. D. 人名　一七九九―一八五九　米國監督教會のニュージェルシー監督。ニュージェルシー州トレントンに生れ、一八一八年紐育ユニオン學校を出で、二一年聖職に入り、三二年監督となる。精力强くして勞に倦まざりしが、又敵を有し多くの論爭をもなせり。散文及び韻文著作集あり。『日かげ靜に薄れ行く時』（Softly now the light of day）『罪の獄より解き放たれて』（Thou art the Way : to Thee alone）等は其の作れる讚美歌なり。

ドンケル派又ドンカルド派又はトンケル派　Dunkers, Dunkards, or Tunkers. 宗派名　獨逸バプチスト派中の一派にして、一七〇八年頃獨逸に起る。其鼻祖なアレキサンデル、マック（Alexander Mack）と稱す。然れ共此一派は迫害のため間もなく和蘭に逃れ、和蘭より更に米國に移住し、一七一九年より二九年の交にヒラデルヒヤ附近に其永遠の居を定めたり。爾來此派は合衆國內に傳播し、三派を包有す。卽ち保守派獨逸バプチスト（一九〇〇年の調査に依れば會員九萬五千を有す）舊派獨逸バプチスト（會員三千五百）及び進步派獨逸バプチスト（會員一萬三千）是也。加那太にも亦多數の信徒あり、歐羅巴、印度及び小亞細亞に傳道地を有す。此派は福音主義の信仰篤く奉じ、浸禮を行ひ、教會政治は會衆政治にして、牧師は通

常會堂に依りて扶持せらるれ共、給料として支給せらるゝに非ず。服裝並に宣誓及び戦爭な忌避する等の點に至りてはクェーカル派に似たる處多し。

ドンス　スコトス　『ダンススコタス』の條を見よ。

ドンネル　人名　ロベルト　Donnel, Robert　一七八四―一八五四　カンバーランド長老教會初代の一首領。北カロリナ州ダイルフェルド縣内に生れしが、幼時父母に從ひてテンネッシーに移る。時弊が傳道者な要すること切なるな感じて、一八〇六年所謂カンバーランド長老會の會議に一身な提供せしに、會議に之な奬まして信仰問答教育者及び奬勵者として其の才な發揮すべく勸めしかば、教會より獨立して重にアラバマ州にて說教し、一一年に至り新興のカンバーランド長老會に入籍せり。其よりテンネッシー、アラバマ、西部ペンシルバニアにて活動し多くの教會な組織し、同派中に重きななすに至れり。『諸問題に關する思想』な著はす。

ナの部

内在　Immanence.　『超絶』の條な見よ。

ナイチンゲール　フロレンス　Nightingale, Florence　人名　一八二〇―一九一〇　博愛家、軍隊看護事業の卒先者。父母共に英國の慈善家にして、以太利に漫遊中、フロレンスに於て生れたりしな以て名けらる。幼より同情の念に富み。其讀なる愛情に犬、馬、さては無生の人形に迄及びたりしといふ。貧窮の民な憐れむの念深く、病院、孤兒院等な訪ひ、當時の看護婦の技術の拙にして、現切の忍びしきな慨し、早くより自ら身な看護婦となし、憐むべき病者な救はんとの決心ななしたりしといふ。一八四五年父母と共に獨、佛、以諸國の學校、工場、病院、盲唖院等な巡覽して歸り、五一年獨逸に赴きカイゼルウェルスのルーテル派病院附屬看護婦學校に入り、半年の後優等な以て卒業し、巴理に往き慈善病院の方法な調査して歸り、倫敦ハルレー街に看護院な起し、且看護婦學校な監督し熱心に教育せり。一八五四年英佛兩軍土耳其な救はんため、クリミヤに於て露軍との戰鬪な開始し、將校士卒の虎列拉病に罹る者一萬三千の多きに及び、百人中五十二人の死者ありとの報倫敦に達するや、ナイチンゲール嬢は世四名の看護婦な率ひ、亞細亞土耳其の南岸なるスカッタリーに赴き、同地に在る野戰病院に於て、數千人の病兵、負傷兵な看護するに敏捷と懇切とな以てし、初め百人中五十人以上の死者ありし者、後には僅々二名に出でざるの有樣となりしかば、病傷者は皆彼女な天使と尊び『光明ある貴女』の名な彼女に捧ぐるに至れり。斯くて五六年三月な以て講和條約締結せられしかば、彼女は同年八月名譽ある遠征隊と共に英國民歡呼の中に歸國せり。英國民は五萬の金額な醵出して彼女に贈り、政府も亦五十萬圓な贈りて感謝の意な表せしに、彼女は其金な以てナイチンゲール看護婦學校な建てたり。爾來彼女は此學校な監督せる傍ら力の有らん限りな盡して、看護法の改良と慈善事業の擴張とに努め、殊に軍隊衛生に關しては深く研究する所あり、貢獻する所甚だ少からざりしといふ。老年に及びて倫敦ハイドパークに靜に餘生な送りつゝありしが、一九一〇年八月永眠せり。

ナイチンゲール嬢

ナイン　Nain.　地名　此の地は唯一回聖書中に記載せられたるのみ（路七の十一）。即ち耶蘇が寡婦の獨子な蘇生せしめたる場所にして、ヘルモン山の北西端にあり。現今は僅に小屋茅舍の散在するあるのみ。其の遺跡によりて一度は重要なる所なりしことな證し得べし。

訓慰者（ナグザムボノ）　Paraclete.（παράκλητος.）　術語　使徒約翰の書きたる者の中にのみ見る處の語にして、約十四の十六、廿六、十五の廿六、十六の七には、耶蘇が其死後弟子に與ふべしと約束せる聖靈の義として用ゐ、壺約二の一には約翰之な昇天せる基督に適用せり。欽定英譯は此語な羅晉書にては Comforte（訓慰者）となせり。改正英譯も同譯語な使用すれ共、羅晉書の欄外には Or Advocate, or Helper, Gr Paraclete と記し、書翰の欄外には Or Comforter, or Helper, Gr. Paraclete と記せり。此等の譯語は新約に於ける此語の說明の歷史な示す。之な基督に適用せる場合に『保惠師』と譯するには異論なしと雖も、聖靈に適用せる場合に之な『保惠師』と譯すべきや、又は『訓慰者』と譯すべきやに就ては學者の說一定

せず。此語は元來古典希臘にては法律上の語として用ゐられ『辯護士』といふよりも一層廣く『勸問』といふが如き意義な有す。フィローンは屢々之な『辯護士』又は『仲裁者』の意義にて使用せられたり。之な『訓慰師』と譯するに至りしは、耶蘇が之な送らんと約せし時は、其將さに世な去らんとするな告げたりし時にして、弟子等皆心に憂へたりし際なりければ、此前後の事情より彼の送らんと約せる聖靈は即ち彼等の心な慰むる者也と解說し、之に意譯な施せるに外ならず。此語に『訓慰者』の義なければ、羅晉書の場合に於ても之な『保惠師』と譯すべしとの說あれ共、聖靈な『保惠師』と譯するは當らず。故に近時の學者は多く『パラクリート』なる原語な其儘存し、之に譯語な下さゞるな可とせり。

ナザレ　Nazareth.　地名　耶蘇の生長せる處として名高し。レバノン山脈の最も南方なる石灰質な帶びたる丘中、南、及び西南より、北及び東北に亘れる高き谿谷に位し、谿谷は地中海面な抜くこと一千二百呎、ナザレの邑は西方の丘上海抜一千六百呎の處に立てり。谿谷には季節に從ひて野生の百花、櫻桃、無花果、桑、巴旦杏、及び柘榴等の果物な產出す。左れ共父處々に秀げたる場所ありて風致な添へざる所なきにあらず。氣候は夏期甚だ熱く、冬期は全く降雪な見ざるにあらざれども、概して溫暖の方なり。パレスチナの多くの場所に起る暴風雨は、此の地も亦之な免れず。ナザレの舊邑は今や全く其の跡な留めずと雖も、其遺れる最中の墓により て之な判斷するに、現時のナザレ村よりも西方の小山の方に攢がり居りしが如し。此の地はカペナウム及びテベリヤより一日の旅程にして、エルサレム城より三日の旅程に過ぎざりしと雖も、國民の生活上何等重要の位置な占めざりしが如し（約一の四十六）。此の地は舊約全書、ヨセフスの著書、タルムド等に記載せられず。其重要視せらるゝに至りしは、全く耶蘇の生涯に關係な有するに由れり。此の村は昔日より多くの人口な有せず、現今の人口は七千五百人と註せらる。ヨセフはマリアと共にナザレより ベツレヘムに行き（路二の四）耶蘇の誕生後は再びナザレに歸りたり（路二の廿九）。而して耶蘇は十二歲の頃尚ほナザレに住みたり（路二の五十一）。馬可は耶蘇はヨルダンに於て洗禮な受けんが爲に、ガリラヤのナザレより來れりと云へり（一の九）。耶蘇は荒野の試鍊の後一たびナザレに歸りしも、後幾ならずカペナウムに往き此處に住みたりき（太四の十二）。彼が自ら預言の應驗せる者なることな告白せるはナザレの會堂なりしが、其邑の人々は耶蘇な邑より逐出さんとせしかば、彼は遂れて此處な去りたり（路四の十六、可六の一、太十三の五十四）。如此彼が ナザレと密接なる關係な有するより屢々ナザレ人と稱せられたりき。

耶蘇の生涯に取りて、ナザレの蔭だ重要なりし點は左の如し。（一）ナザレの位置はガリラヤに在りしな以て、神殿の塵化な蒙むること少かりき。又エルサレムに於けるが如く一切異邦の事物な旅忘するが如き穢濁の弊なく、而してガリラヤ人の愛國の情は頗る强烈なる者ありき。（二）ナザレの位置は諸邦と通商貿易な爲すの要點にあらざる隔絕せる所なりき。（三）左れ共ナザレの位置は北方パレスチナの實際的生活な目擊するには適當なる場所なりき。又遊歷者、埃及及びミデヤンの商隊、羅馬の軍隊等の通行は悉くナザレの高丘より一眸の下に認め得られしなり。

ナザレ人（ビム）　Nazirite.　聲語　聖別せられたる者、多くの人々の中より區別せられたる者の義にして、之に二種類あり。即ち一生涯のナザレ人と一定の時期間のナザレ人と是れなり。民數紀畧六の一―廿一の律法は後世起りたる者にして、後者に屬せしナザレ人に關する律法の一部分也。此の律法に從へば、ナザレ人は自己な神の爲めに聖別せし者にして、葡萄の間は酒類及び凡て葡萄より造れる者の飲用な禁じ、剃刀な頭にあてず、髮な長くし、如何なる近親者の死體と雖も、之に接觸することな避けざるべからず。若し自己の傍に在りし者不意に死することあり、之がため汚さるゝことある場合には、普通の潔の式に預からざる可らず。即ち第七日に頭髮な刈り取り、第八日には一匹は罪祭のため、他は燔祭のために、祭司な經て二匹の鳩な捧げざるべからず（利五の七、十二の八）。誓願の期滿つる時は、律法に從ひて諸種の禮な盡したる後、普通の生涯に復歸することな得る也（利十四の十二―廿一、民十五の三、出廿九の二、利二の四、八の二、七の十二）。

舊約書中に記載せられたるナザレ人の中サムソン。サムエルの如きは、一生涯のナザレ人の種類に屬す。此等の人々に就て記載せられたる事情と、民數紀畧六章の律法とは精細に一致せざる者あり。サムソンは其の頭に剃刀な用ひざることに就て語らるゝも（士十三の五）禁酒に就ては記さるゝ所なし。又彼は死者に接近せしも（士十四の九、十九、十五の十五）聖別に妨げなかりしが如し。而して婚姻の宴に於て酒な飲みたりしと假定せらる（十四の十）。サムエルに就きては其の頭に剃刀な用ひざりしとあるのみ（母前一の十一）。又アモスに就ては禁酒の事な記せるのみ（歷二の十二）。ナザレ人は民數紀畧に存す

る律法の表示せるよりも一層豐富なる性質を有し、且以色列人の宗教的生活に大なる地位を占めたり。畢竟律法は律法なくして發達し來れる此の制度を律せんがため以色列の史上に顯はれたる後代の企圖なりとす。生涯間のナザレ人が原始のものなりやは明ならず。サムソンの例は、單に比較的早き時代に於ける生涯間のナザレ人に關する傳說の存したりしを証するに過ぎず。民數紀畧の律法は前云へる如く一時的ナザレ人の制度を示したる者なれ共、之に依りて此以前には一生涯間ナザレ人たるの例なしと斷言す可らず。ナザレ人に要求せられたる禁戒は、禁酒、長髮、及び死體に觸るを避くること以外にも之れありしなるべしと雖も、此三は漸次最も緊要なる者と思惟せらるゝに至りし者なるべし。此三禁戒の表する意義に就ては學者の所說概ね其揆を一にせり。即ち禁酒はナザレ人の誓願に於ける敏感なる禁慾的要素也。長髮はナザレ人の聖別を外に示すための表徵にして、祭司長の纒りたる『エホバに聖し』と銘りつけたる法冠と其義を同ふす。死體に觸るゝを避くることは、凡ての以色列人、殊に祭司に要求せられたることを更に要求したるに外ならず（利廿一の一以下）。

舊約にナザレ人の事の記さるゝこと甚だ稀にして、其の起源を明にすること能はず。然れ共其初めて起りたるは蓋し士師時代にして、是れより遡かるべからず。思ふに當時以色列人は全くカナン人を征服すること能はずして、之と交通せるより漸次其感化を蒙りて、以色列人固有の特色を失はんとするの恐れありしかば、カナン人の文明及び習俗に反抗し、以色列古代の質朴なる原始的生活を維持せんため、自ら禁戒を守り國民の摸範とならんとして、ナザレ人なる者起りたる者なるべし。彼等は特殊の意義にて『エホバに聖別』せられたる者にして、通常の誓願に在りては或る物質を聖別するの例なれ共、彼等は自己を全く聖別せり。彼等は其國人に異の以色列人の理想的生活を示さんため、其理想的生活に不似合なるものを禁斷せしと謂も、此は單に其積極的聖別の結果に過ぎず。故に此禁戒は彼等の社交を禁じたるものに非ず。舊約の記事には何處にも彼等が『預言者の子』の如く社會より離れて別に一社會をなしたるが如き形跡なし。ナザレ人は元來國民的宗教の熱心家にして、自己をエホバと其民とのために獻げたる者なれば、彼等は思ふに其時の多分を祈禱及び神殿の奉仕のために送りたりしなるべく、又彼等は其禁慾的生活に依りて時の惡風に抗し、又時には士師として國民を統治し、又國家のために外敵と戰ひたりしなるべし。兎に角彼等が特殊なる神の器として、エホバと其民とのために盡したること明也（士十三の五、廿五、十四の六、十九、十五の十四、麼二の十一參照）彼等の數は幾何なりしや明ならざれ共、舊約の記事より吾人が推量し得べきよりも實際多かりしなるべし。俘囚以後此制度は再び盛大に赴き、或時には三百人のナザレ人相集り、其誓願の期滿つるに及び獻ずべき犧牲の供給に困難を感じたりきと傳ふ。新約の時代にも何敬虔なるナザレ人少からず。パプテスマのヨハネに生涯のナザレ人なりしと云び（路一の十五）ユウセビウスの傳ふる處に依れば、主の兄弟ヤコブも亦然りしと云ふ。アンナ（路二の廿六）もナザレ人なりしと思惟せらるれ共、此は單に想像に過ぎず。初代の猶太人なる基督教徒の中には、間々一時的ナザレ人の誓願をなせし者ありとのことは、徒廿一の十七以下の記事に依りて明也。徒十八の十八より保羅も亦ナザレ人の誓願をなせしと想像する者あれ共明ならず。

ナザレ人 Nazarene. 【雜語】『ナザレの耶蘇』なる語は福音書中に屢々使用せらるれ共、それは唯耶蘇の弟子以外の人々が、耶蘇を彼と同名の他の人と區別せんがために用ゐたるのみ。然れ共使徒行傳には此語は彼得（二の廿二、三の六、四の十）保羅（廿六の九）及び復活の基督（廿二の八）に依りて使用せられたり。馬太傳記者は『ナザレと云へる邑に至りて居れり。彼はナザレ人（Nazarenos）と呼ばれんと預言者に託りて云はれたる言に應はせんため也』とのことを記せり（二の廿三）。舊約の預言書中基督がナザレ人と稱せらるべしとの預言は何處にも之れあらざるを以て、此語に就ては古來種々の解說ありたれ共、思ふに此は概してメッシヤの苦難に關する預言を指したるものなるべし。ナザレ人なる語は使廿四の五には基督教徒の義に用ゐられ、テルチュリアヌスの時代にも此語は猶太人に依りて同樣の義に用ゐられたりしと云ふ。然れ共爾後此意義に於ては使用せられず。四百年頃基督教一派の名として用ゐられたり。

ナスミス 【人名】 デヴィド Naſmith, David 一七九九—一八三九 蘇格蘭の博愛家。グラスゴーの人、一八二六年始めて同市に市宜教會（City mission）を立て、次で一八三五年倫敦市宜教會を起し、其より大英國の諸市、加那太及び合衆國に同事業を起し、其の一生を重に此事業の擴張に獻げたり。

ナタナエル Nathanael. 【人名】 耶蘇の弟子の一人。ガリラヤのカナの人にして、ピリポの

紹介にて耶蘇に來りし人也（約一の四十五、廿一の二）。耶蘇は彼を『眞の以色列の人にして、其心詭譎なき者ぞ』と稱しき。彼が靈的特權を尊重して以色列人の理想的生活を實現せんと努め、且誠實公明にして虛僞なき性格を有せるを以上引用せる二箇處に記されたるのみにして、彼に關しては以上の外何事も明ならざれ共、今日一般の信ずる處に依れば、彼はバルトロマイと同一の人なるべしといふ。果して然らば彼は十二使徒の一人也。尙『バルトロマイ』の條を見よ。

ナタン Nathan. 【人名】 舊約聖書中此名を負ふ者數人あり。其重なる者は（一）預言者ナタン。預言者的政治家の系統に屬し、サムエルの相續者にして、以色列王ダビデの顧問たり。ダビデがエルサレムに神殿を建築せんとしたり一時、ナタンはエホバの旨を受けて之を諫止し、且ダビデの子其の後に立ちて其國を堅うし、且エホバのために家を建つべしとのことを告げたり（母後七の一—十七、代上十七の一—十五）。又ダビデがウリヤを戰死せしめ、其妻を奪ひたりし時、ナタンは富める牧者と貧しき牧者との喩話を語りて、其良心を警醒し、其罪を悔悟せしめたり（母後十二の一—十五）。ナタンは又ソロモン王を助けて、其政治的才能を發揮せり。彼の子ザブデはソロモンに召されて、特別なる祭司及び王の友とせられたり（王上四の五）。歷代志略記者はナタンを以てダビデ及びソロモン傳記の作者となせり（代上廿九の廿九、下九の廿九）。（二）ダビデの子ナタン。エルサレムに生る（母後五の十四、代下十四の四）。代上三の五に依れば、バテシバの生みたる第三子にして、ソロモンは第四子なれ共、母後十二の廿四より推せば、ソロモンはバテシバの生みたる長子也。馬太は耶蘇の系統を、ソロモンよりダビデに溯りたれ共、路加はナタンよりダビデに溯りたり（三の廿一）。

挽回の祭物（ナダメノ） Propitiation, 【術語】 希臘語 *hilasmou* の譯語にして、欽定英譯には propitiation なる語を三回使用し（羅三の廿五、壹約二の二、四の十）改正英譯は更に一回を加ふ（來二の十七。欽定譯は reconciliation）。邦譯は前の三箇處に於ては『挽回の祭物』と譯し、後の場合にては『贖』と譯せり。此語は舊約に其起源を有し、其處には『贖罪、罪の赦免等の義に用ゐられたり。『贖罪論』の條を見よ。

ナフタリ Naphtali. 『以色列の支派』の條を見よ。

拿翁書（ナホムシヨ） The Book of Nahum. 【經名】 舊約正經の第二部中小預言書と稱せられたる者の第七位を占む。此書の有する『ニネベに關する重き預言』及び『エルコシ人ナホムの異象の書』と云へる二箇の標題は、書中記載の題目及び作者の何人なるを表示す。ナホムに關しては聖書中他に記す處なしと雖も、經外聖書（エプラ第二書一の四十）及びヨセフアスの書中には、彼の名を有する許多の人々の事を語れり。例之ナザレのヨセフの祖先がナホムと稱せられ（路三の廿五）第二世紀の有名なる教師にメデア人ナホムと云へる者あり。又學者の中にもナホムと稱せられたる人ありしが如し。フェキヤ人の中にも此名は珍らしからざりき。然れ共此書の作者のナホムに就ては、エルコシ人也と云へる外何事をも知ること能はず。而してエルコシの所在に就ても、舊約書中之を解くの證徴なきを以て之を知るに由なし。之を以てモスロの北凡そ廿七哩の邊に在るアルクスと云へる基督教徒の住せる村落と同一視する者あり。此處にはナホムの墓と稱する者さへ存在すれ共、此は第十六世紀以後に起りたる說にして、素より信ずるに足らず。又之を以て基督教の初代にカペナウムと稱したる地と同一也となす者あり、又北ガリラヤの現今エルコブと稱する地と同一視する者あれ共、何れも臆說にして確固たる根據あるに非ず。ナホムは北王國の滅亡して久しき後に預言したることなれば、彼の出生地は恐らくは南王國内にして、エルコシと云へるは當時サラミスと稱せられたるタプロの地なるべしと思惟せらる。

【此書の內容】 ナホムの純然たる預言の前には聖詩あり（一の二—二の一、三）。此詩はもといろは歌の體に書かれたる者にして、尙明に其形跡を認む。先づエホバの嫉妬の神、報復の神たることを叙し、故に其敵に對しては義しき審判をなし給ふべしと雖も、眞に彼に服從する者に對しては、眞實にして善良也とのことを述べ（一の二—六）此詩の後部には、長く神の民の重荷となりし輕は除き去られ、敵人の神は棄てられ、彼等は全く滅亡すべく、福音の使者はユダの諸丘に疾歸して之を宣傳へ、ユダと其民との救拯所けりとのことを歌へり（一の九—二の二）。

二の一、三—三の十九はニネベに關する眞の預言にして、二部に分る。（一）第一部にはニネベの攻圍、陷落及び其滅亡を順次に描けり。先づ作者は緋の軍服を纒ひ、鐵の戰車に跨れる敵の接近せる有樣を描き、次に彼等が城壁外の大路に推し合ふ光景、城兵

が突進して之を防ぐ有様を叙し、防禦の堤破れて、宮廷は狼狽し、宮女等は淫喚の中に捕へられ、之を回復せんとするも益なく、翁て獅子の如く恐れられたりしアッスリヤも、あはれ敵のために駐屯せられ、斯くてニネベは永久滅亡せる有様を巧に描きたり（二の一、三―二の十三）。（二）第二部即ち第三章には、此の「血を流す邑」の滅亡せる有様を更に詳細に叙し、其最後の攻撃の實況を描きたり。何が故に此悲惨なる運命はニネベを襲ひたりしか。是れ其淫蕩の政策、妓女の淫行、及び魔術を以て人を惑はしめたりしがため也。故にエホバは之を罰し、其蔑ろる所を諸國に示し、諸國民の觀物とならしめたり。而して此困難屈辱の時に方りて何人も此を慰むる者なく、其不幸の有様は埃及の女王アモンよりも甚し。ニネベが翁て埃及人に蒙らしめたり一苛酷殘忍の行は、今や其上に報ひられ、其城壁と守兵とは無花果の人の口に落つるが如く敵の手に落ち、許多の商人、重臣、軍長は蝗軍の日出で來りて飛去るが如く滅びて其在る所を知らず。ニネベのために翁て苦められたる者今や手を拍ちて喜び、斯くて「血を流す邑」は歴史の塵壺より永遠に消し去られたりと記せり。

著作の時代　此書は第一、二、三章共同一作者の作也とのことは、近年に至るまで何人も之を疑ふ者なく、クイネン。ウェルハウゼン。コルニルの如き進歩せる學者と雖も亦之を疑はざりしが、一八八〇年ビイタゲルが二たび第一章はいろは歌の體を以て書かれたる詩にして、ナホムの預言に非ずとのことを唱へ出ぜしより、フランツ、デーリッチ。グンケル等の學者之に和し、今日は一般に之を承認するに至れり。其て此處に記載せるユダ王國の政治上及び宗教上の狀態より、此書全體の著作の時代を定めんとするの企劃は、之を放棄せざる能はざるに至れり。故に此書著作の時代は第二、第三章に依りてのみ之を定むべく、而して此部分の預言は之を定むべき二箇の要件を吾人に供せり。其一は上埃及の女王ノアモンの掠奪となりしことにして、此事は前六六四年若くは六六三年に起れり。其二はニネベの陥落にして、近年地中より掘出したる碑銘、及び史家の傳へたる記錄より推せば、此事は前六〇六年頃に起れり。去れればナホムの預言は、六六四年乃至六〇六年の間になされたる者にして、此書に記載せられたる光景より之を考ふるに、アッスリヤが敵軍のために襲はれし時と、ニネベの攻撃の初まりし時との間に書かれたる者なること殆ど疑なきが如し。

【參考書】　エワルド。ビウゼー。カイル。ウェルハウゼン。エー、ビー、デーヴィドソン。ノワック。ジョルジ、アダム、スミッス等の註釋書、之にファーラルの『小預言書』カルタバトリックの『預言者の教義』を加ふべし。

ナホル Nahor.　**人名**　（一）アブラハムの祖父、セラグの子、テラの父（創十一の廿二―廿五、代上一の廿六、路三の廿四）。（二）テラの子、アブラハムの兄弟（創十一の廿六、七）彼はハランの兄弟ハランの娘ミルカを娶れり（創十一の廿九）。十二人の子を有し、八人はミルカによりて、他の四人はリウマより生れたり。彼はアラム種族の祖先となり、卓越せる子孫彼より出でたり。

ナーマン Naaman.　**人名**　西利亞の勇士。癩病のために悩まされたりしが、以色列の預言者エリシヤに來り、其の勧に從ひ七度ヨルダン河にて其の身體を洗ひ、其病を癒されたりとのこと舊約に記載る（王下五）。而して耶蘇に新太人の長老なることを責め、神恩の驚くべき顕現を説明せんとて之れを引けり（路四の廿七）。彼の性格の最も著しき特色に感謝の念厚くして、エリシヤに謝恩し、且以色列の神に仕へんとの心を有せし點にあり。

ナルド Nard.　**物名**　敗醬科の一植物より搾れる香油『植物』の條（四十二）敗醬科の項を見よ。

ナント令 The Edict of Nante.　**雑語**　一五九八年四月十三日佛王アンリ四世が、佛國に於けるレフォルムド教會と國家との關係を規定せる勅令にして、一六八五年十月十七日ルイ十四世に依りて廃止せらる。此勅令は佛國に於けるプロテスタント教徒良心の自由を許したるものなれ共、其信教自由を許し、之を羅馬教徒と同等の地位に置きたる者には非ず。故に此勅令發布せられたる後も、プロテスタント教徒は或る場所に於て或る制限の下に禮拝するを許されたるのみ。彼等は羅馬教會の祝節及び斷食日を守り、其僧侶に十分一税を納め、其婚姻法に從はざるを得ざりき。尤も彼等は大學、其他の學校及び病院に入るを許され、又訟争者の屬する宗派の異りたる場合には、混合裁判所を設くることを許されたりき。然れ共此勅令が國會の承認を得るには頗る困難なりき。而してアンリ四世在位中既に之に背くものありき。ルイ十四世の之を廃止したるは、レフォルムド教會牧師の悉く逐窟せられ、レフォルムド教會に屬する學校の悉く閉鎖せられ、龍騎兵の設けられし上は、佛蘭西には最早プロテスタント教徒あらざれば、此勅令を要せずといふに在りき。

ニの部

新島襄（ニイジマジョウ） Niishima, Joseph Hardy (or Neesima, Joseph Hardy)　**人名**　一八四三―九〇　同志社創立者、最初の社長。天保十四年正月十四日江戸に生る。幼名七五三太、家世々上州安中藩主板倉侯に仕へ其臣たりき。幼にして讀書習字畫法等を修め、稍々長ずるに及びて武藝を講ぜしが、十六歳の頃藩主の召を蒙り有筆職の席末に列せらる。而して職務の餘暇蘭學を研究し、又海軍傳習所に入りて航海術を修めたりしが、當時日本は鎖國を開き、人心正に世界の大勢に攪醒せられ、身を挺して海外に赴き國威の壯擧に從事せんとするの欲望、有爲の青年の心を挑發つゝありし時なりしかば、襄も亦此氣運に促されて竊に海外渡航の志を抱き居りしが、藩主板倉勝靜は當時の閣老中最も聰明にして事局に通曉せし政治家なりしかば、竊に彼の志を贊し之を慫慂せしを以て、彼は遂に志を決して、元治元年（一八六四）三月厭然江戸を去りて兩御に向ひ、當時同地に滞留せし希臘教の宣教師ニコライに日本語を教へて數月を經過し、竊に時機の至るを待てり。當時英人某の函館の書記に福士字之吉なるものあり。深く襄の志を憐み百方周旋の勞を取り、彼のために上海に渡航せんとする帆船を發見せしかば、彼は六月十四日夜陰に乘じ艀に乗船に乗込むことを得、斯くて無事に禁令を犯して函館を脱出したり。航海中彼は卑賤なる船僕の職を取り幾多の辛酸と試煉の中に上海に着せしが、當時恰も米國ボストンの紳商アルフィアス、ハーデーの所有船の上海に在りて將さに出帆せんとする者ありしかば、彼は船長に請ふて之に乗り込

新島襄

むことを得、一年餘の日子を經、具さに艱苦を嘗めてボストンに着するを得たり。船長の紹介に依りて船主ハーデーに逢ひ其希望を語りしに、ハーデーは深く其志を喜し、彼を助けて其志を遂さしめんことを約し、資を併して彼をアンドーヴァル中學に送り、數年にして又アモスト大學に送れり。彼がアモストを卒業せしは明治三年（一八七〇）にして、熱切摯實なる學生として其名聲頗々たりき。明治四年の末岩倉大使一行が歐米視察の途次米國に來るや、彼が在米七年願る泰西の事情に通曉せるものあるを聞き、召して其一行に加はり彼等の事業を助けんことを請ひしかば、彼は之に從ひ其一行と共に歐米諸國の大都市を巡覽し、周旋縱横大使取調の要務を助くること凡そ一年に及び、此間其久しく修練したりし基督教的紳士の光彩を發揮して大に一行の信任を得たり。彼が歸朝の後同志社を建つるや、當時扁堂に立ちし諸公が彼の計劃を贊して百般の便宜を之に與へしは、此時此一行より得たりし交誼と信任とに基くもの多し。彼は明治六年（一八七三）九月再びアンドーヴァルに來り神學を修め、翌年六月神學校を卒業せり。彼今や業成りて故山に歸らんとするに方り、深く自己の使命の日本教化に在るを感じ、按手禮を受けて基督のために其一生を獻げんと決心したりしが、時恰もヴォルモント州ローランド市に於て米國傳道會社の總會あり、招待を受けて告別の辭を述ぶるを許されしかば、席上滿腔の熱誠を吐露し涙を流して故國の現狀を述べ、基督教主義學校建設の必要を語りしに、深く列席者の心を動かし席上直ちに六千弗餘の醵金を得たり。斯くて彼は明治七年十二月を以て歸朝し、傳道の傍直ちに同志社設立の計劃に着手し、翌年地を京都に相し、山本覺馬と結び此處に其基礎を據え、其年十一月廿九日開校式を擧げたり。此時生徒僅かに八名に過ぎず、未だ校舍なく一定の課目もなかりしが、翌年九月十八日漸く最初の校舍建築せられて其捧堂式を擧行し、又之と同時に熊本洋學校に於てジェーンスの教育を受けたる學生三十餘人入學することゝなり、初めて學校の實を備ふるに至れり。當時基督教に對する國民の感情尚未だ全く融和せず、殊に京都は神社佛閣の濃密地にして且保守的の精神最も盛なる地なりしかば、此地に於ける基督教主義學校の創業には許多の困難の伴ふものありき。加ふるに彼は外國宣教師と日本信徒との中間に立ちて、常に兩者の間を調停せざるを得ざりしかば、頗る苦心慘憺たるものありしが、時運幸にして彼の事業を助け、校運頗る隆盛に向ひしかば、彼は明治十六年に於て既に同志社を擴張して基督教大學を起すの企を抱きたりき。然れ共歸朝以來寢食を忘れて同志社のために拮据經營したりし結果、痛く心身を勞し健康ために大に衰へたりしかば、彼は靜養の傍ら米國に於て大學資金を募集するの必要を悟り、明治十八年四月歐米漫遊の途に上れり。然るに瑞西に於て心臟病を患ひ、漸く愈えて蘭英諸國を經、合衆國に渡り、諸教會に訴へて有志の贊助を得、同年十二月歸朝し、明治廿一年大學設立趣旨書を公にし、爾來東奔西走資金の募集に忙はしかりしが、朝野の紳士富豪を初め日曜學校の生徒に至るまで其志を贊し、奮て募金に應ぜしかば、忽ちにして數萬圓の寄附を得たりき。明治廿二年アモスト大學は贈るに法學博士の學位を以てす。此頃より健康又漸く衰へ、其年の暮大磯に靜養したりしが、廿三年一月廿三日死せり。京都若王寺山上に葬る。山本覺馬の妹を娶りしが子なし。

初め新島襄は青雲の志を懷して米國に來りしが、模範的基督教の家庭に育養せられ、米國風の教育を受けしかば、自由の使徒、基督教の使徒として故國に送り還されたりき。然れ共彼を以て單に熱心敬虔なる傳道者に過ぎずとなすは誤れり。彼は其溫和なる衣裳の下に俠骨蒼々たる武士の真情を有したりき。故にハーデーの庇護を受くるに方りても、成るべく武士の體面を維持せんと欲し、恩に昵れて必要以外の物を請ふことなかりき。面目を重じ獨立を尊びたりし彼の品性は、米國的感化を受くるに至りて熱心なる基督信徒となり、之と共に熱心なる自由の信者となりたり。故に彼は始めて板倉大使一行に會せし時、日本在來の慣習に依りて此等の長上の前に平伏禮首するの禮を取らず、米國風なる平民的の禮法を取らんとし、又此時日本政府の金に依り留學し居る十二名の學生と同樣に取扱はることを欲せざる旨を公言したりき。明治十九年頃より組合、一致兩教會合同の議盛に起り、議頗る熟するものありしに、彼は斷乎として之に反對し、ために教徒の非難を招きたりしも、亦彼が自由と獨立とを基礎とせる組合派の教會政治に心醉したいしがためなりき。兎に角彼は日本の精神界に基督教的自由を鼓吹したりし精神界の偉人にして、福澤諭吉と共に二大教育家と稱せらる。彼の傳記には邦文にデビスの『新島襄先生傳』石塚正治の『新島先生言行錄』英文にエー、ジー、ハーデーの『新島襄の傳及び書簡』デビスの『新島襄』あり。（『日本』『日本組合教會』の條參照）。

ニウエル　サミュエル　及び　ハリエット　Newell, Samuel and Harriet　**人名**　印度派遣米國宣教師夫婦。サミュエルは一七八四年メーン州ダムツムに生れ、十歳にして孤兒となり、四

年振ボストンにて某公ゼーが、其の學を終むるより主人其他に助けられて學校に入り、一八〇七年ハーバードを、〇九年アンドーヴァルを卒業し、他の三人の青年と共に外國宣教に身を投ぜんことを申し出で、アメリカン、ボールドの成立を愈々確かならしめたり。ハリエットはモセス、アトウッドの女、一七九三年ヘヴァヒルに生れ、幼より信仰篤く、一八一二年サミュエルに嫁す。サミュエルは同年二月ジャドソン、ノット。ライス。及びゴルドソン、ホールと共に按手禮を受け、直ちに妻を携へて印度カルカッタに至る。然れどもカルカッタ在留を許されざるよりマウリチウスに行き、更にフランス島に行く。航海中旅中に生れし女を喪ひ、次で夫人も急激の腸結核に襲はれ、一八一二年十二月十九歳の妙齢を以て死去す。若き女子が外國宣教に身を委ねて之がため夭折せし事は、世の同情を呼び起し、宣教心を刺激せしこと少からず。サミュエルは一八一四年ボンベーに至りて諸友と共に宣教し、一八年再婚せしが、三年後コレラに罹りてボンベーに死す。

乳香　Frankincense.（ニウコウ）『植物』の條（廿四）微機軸（イ）の項を見よ。

ニウトン　アイザック　Newton, Sir Isaac　**人名**　一六四二—一七二七　有名なる引力發見者。英國リンコルンシヤのウルスソルプに生る。父の死後の遺子なり。體質弱かりしも、幼より數學重學に熱心にして、其能力も非常に優れ居たり。一六六〇年劍橋トリニチー、カレッヂに入り、六五年卒業、六七年フェローとなり、六九年バルローの後を襲ふてルカシアン數學教授となり、九五年造幣局監督となり、九九年局長となる。其の有名なる大發見は疾くに成し居たるも之を發表せざりしものゝ如し。一六八七年に至り『フィロソフィエ、ナチュラリス、プリンシピア、マチマチカ』始めて出で、一七一一年『アナリシス、エカションス、ヌーメロ、テルミノルム、インフィニタス』出づ。當時デカルト派の微分子回轉說全學問界を支配し、多少の困難を感じつゝも神學者の說と相調和し居たるに、ニウトンの引力說は之を根柢より顚覆せしかば、勢ひ神學者と衝突せざるを得ざりき。彼は觀察と經驗とをのみ科學の基礎とせざるべからずと言ひて、全然煩瑣哲學と反對し、形而上學を斥け、臆想を排しぬ。ヴォルテヤは實に此の思想に化せられし最高足の弟子なり。英國にては素よりさほど激しき衝突起らず。ニウトンは一六九九年創設の一七〇四年牛津の教授となり一地位に應じて言ひ編ぼしたり。されど彼は個人としては正統派にあらず、アリウス說に陷みこみ居たり。而も敎度にして聖書及び其研究に大なる興味を有し居たることは、其の著『古代諸王國訂正史記』『ダニエルの預言及び聖約翰默示錄所觀』『聖書の二大訛誤の歷史的證明』等に徵しても明なり。

ニウトン　ジョン　Newton, John　**人名**　一七二五—一八〇七　英國教會の牧師。倫敦に生れ、若き時は航海者たり。自白に依れば、至て放埒の生活を送り、遂に利加にて奴隸賣買をまでなさんとしたり。然れども一七五八年より五四年迄の間に、特殊の事情のため、殊に夢のために、多少の困難化し、英國教會教職に入らんと決心し、バッキングハムシヤ藩の後六四年に按手禮を受け、バッキングハムシヤのオルネーの牧師となる。此にて詩人カウパーと交はり、大なる感化を與ふ。或はカウパーをして益々憂鬱とならしめたりとの批評もあれど、如何にや。彼れ自らは快調の人にして、又人を快調にすることを以て自己の務としたることは明かなり。後墨メリー、ウルノスの牧師となり、其の交際と說教とにて倫敦はじめ全國に大なる感化を與へ、國教會中の福音的分子の支柱となり、其の住地ホクストンにて國教非國教兩派の牧師等の合同團を造れり。其著『オミクロン』及び『カルディフォニア』は英米に愛讀せられ『オルニー讚美歌集』中に寄せし讚美歌は最も佳なる讚美歌の中に列す。同歌集は三百四十八の歌より成り、中六十七はカウパーの所作なり。彼の讚美歌は日本語『さんびか』の中にも多く歌めらる。

ニウマン　ジョン　ヘンリー　Newman John Henry　**人名**　一八〇一—九〇　英國の『カルディナル』牛津運動の主動者。倫敦銀行家の子也。一八一六年牛津トリニチー、カレッヂに入り、二一年業を卒り、翌年オリエル、カレッヂのフェローとなる。二四年ビウゼーの勸めに從ひ、牛津聖クレメント教會の牧師となり、二五年ホエトリーの下に聖アルバン學院の副校長となりしが、一年にして之を辭し、二六年オリエル、カレッヂの助教授となり、二八年襲れて聖メリー教會の『ヴィカル』に任ぜらる。當時彼は表面尙福音主義を持したりしが、衷心既に之れより離れつゝありき。大學教授の宗教的性質に關し、學長ハウキンスと意見を異にせるより、三二年助教授の職を去り、同年十月フラウドに伴ひ南歐に遊ぶ。彼は當時羅馬にて書きたる書信の中に、羅馬加特力教會の事を記して『多神教的、偶像教的にして墮落せり』と云へり。然るに彼はシヽリに於て劇しき熱病に罹りしが、快復の後自ら英國教會內に加特力教的精神を復興する使命を荷へりとの確信を以て、翌年七月牛津の舊居に歸れり。『みめぐみあるひかりよ』（Lead, Kindly Light.『さ

んびか[二二一]と云へる讃美歌は、彼が此時歸國の途中にて作れる者也。三年後は "Tracts for the Times" を創刊す。其目的之為以て英國教會に教義及び戒規の確固たる基礎を與ふるの機關となさんとするに在り。彼は此等の小册子に於て、盛に其高教會主義を鼓吹し、又聖メリー教會に於ける毎日曜日午後の說教に於て之を補足せり。三五年ピウセーも亦此運動に加はれり。此頃ニウマンは『アリチッシ、クリチック』の主筆となり、又聖メリー教會の側堂に於て數回の講演をなし、英國教會は加特力主義と

ソマウニ　ルナイデルカ

通俗プロテスタント主義との中間に（via media）に在りとのことを論じ、英國教會の地位を辯護したりき。彼が牛津に於ける勢力の最も隆盛に達したりしは三九年頃の事なりしが、此頃より彼は一性派の異端を研究したりし事と『ダブリン評論』紙上に記載せられたるウアイズマン（後『カルディナル』）の『アングリカンの主張』と題する論文を讀みしことゝに依り、英國教會の地位に疑惑を起すに至りたりき。尤も彼は尙高教會派の論學者として其地位を維續したりしが、四一年小册子第九十號に於て、英國教會三十九箇の信條は、羅馬教會の公認信條に反對せんがために作られたる者に非ず、唯其通俗の誤謬に反對せんがために起りたる者なれば、其必要に應じて編輯者が領解したりしより他の意義に之を解釋するも妨なしとのことを論じたりしかば、先づテート（後カンターベリー大監督）及び其他の牛津教授之に反對し、世論頗る沸騰したりしを以て、牛津監督は小册子の續刊を禁じ、ニウマンも亦自ら『プリチッシ、クリチック』の主筆たることを辭せり。四二年彼はリットルモーアに退き、少數の弟子と共に嚴肅なる半院的生活を營み、且此間に『基督教義發達論』なる完成せり。此書は彼が自己と羅馬教會の信條及び制度とを調和せんと試みたる者也。四三年九月彼は英國教會に於ける最後の說教をなし、聖メリー教會の牧師職を辭し、後二年を經て神父ドミニックの紹介に依り羅馬教會に轉じたり（四五年十月）。四六年二月牛津を去りオスコットに移る。同年十月羅馬に往き、司祭の按手禮を領し、且法王より神學博士の學位を授與せらる。翌年末『オラトリアン』として英國に歸り、初めメリーヴェール、次に聖ウィルフリッド、カレッヂ、次に聖アンに住し、後エッヂバストンに移り、愛蘭に往きたりし四年を除き、此處に殆ど四十年の歲月を送りたり。五四年愛蘭諸監督の請に應じ、ダブリンに往き、新に建てられたる大學の校長となりしが、實際の管理は彼の長ずる所に非ざりしと、又諸監督の彼に對する嫉妬とに由り、四年の後職を辭して英國に歸れり。其『大學論』は彼がダブリンに在りし間に著はせる者也。六四年チャールス、キングスレーは『マタミラン雜誌』上に於て、フラウドの『英國史』を批評したりしに、其中に『神父ニウマンは吾人に語りて、倫理のための眞理は羅馬教會信條の遵たるを要せず、全體としては德たるべき者に非ずと云へり』と言ひたりしより、錦なくもニウマンとの間に爭論を惹起し、ニウマンは初め『キングスレーとニウマン』と題する小册子、次に "Apologia pro Vita Sua" を書きて之に答へたり。前者は諷刺的の者、後者は彼が羅馬教に轉じたる始末を述べたる自傳的の者也。七〇年 "Grammar of Assent" を著はす。彼の著書の中最も理論的の者にして、蓋然說の教義の論理的發達と見るべし。彼はヴァチカン會議の時には、法王無謬說の定義に反對たりしが、此定義の公表せらるゝに及びては之を承認せり。七八年牛津のトリニチー、カレッヂは彼を名譽フェローに選び、彼は牛津を去りて後世二年にして再び之を訪へり。七九年彼は法王レオ十三世に依りて『カルディナル』とせらる。此後彼の書きたる者の中最も著しきは、八四年二月の『第十九世紀』に見はれたる聖書批評に關する議論にして、之に依れば彼の聖書批評に對する態度は頗る寬大なる者ありしか見るべし。

論爭者及び說教者としてのニウマンの勢力は頗る大なる者ありき。彼が羅馬教會に改宗せる一事は、同教會に取りては大なる利益にして、寬大なる精神を鼓吹し、多くの僻見を取り去る事に於て大なる力ありき。彼は自らを神秘家と呼びたることなかりしと雖も、宗教的眞理は先づ直覺に依りて悟得せざる可らずと信じたりき。彼は又信條の必要、及び嚴重眞面目の生活の基督教徒に缺く可らざる事を明にすることに依りて、プロテスタント諸教會に大なる感化を與へたりき。基督教詩人としての彼の地位も亦甚だ高く、其最後の作なる "The Dream of Gerontius" の如きは、見えざる世界を歌へる者としては、ダンテ以後唯一の者也と稱せらる。散文家としても、其

筆新なること、其力あること、彼に比し得る者少く、後の說に服せざるものも亦好んで之を讀みたりき。彼は全く科學の智識を缺きたりしが、神學上比較的寬大なる意見を有し、基督教以外の宗教にも各々神の啓示せる多少の眞理あるを認めたりき。（ミス、モブレーの『ニウマンの書翰』バーリーの『カルディナル、ニウマン』ウォルラル及びバルロウの『カルディナル、ニウマン』ネヴイルの『ニウマンへの書翰及び其返答』等を見よ。『牛津運動』（オックスフォード）の條參照）。

ニカヤの會議 Councils of Nicæa.

事蹟

ニカヤは小亞細亞の古市にして、ビテニアの中に在り。前三百年頃アンチゴヌスの建設する所也。今の名をイスニクといふ。此地に二回の世界會議開かれたりしを以て、宗教史上有名也。

（一）ニカヤの第一會議　第一回のニカヤ會議は、世界會議の嚆矢にして、基督の神性に關する教會の教義を議定せり。此會議は其論爭せる事柄が深奧なる形而上學的問題なりしと、其議決せし事が後世長く教會の教義の上に至大の影響を與へたりしとに由り、教會史上最も重要なる者の一也と思考せらる。此會議はアリウス說爭論を決定せんとの目的を以て、コンスタンチン帝の召集したる者にして、三二五年六月十四日を以て開會し、七月廿五日を以て閉會せり。西利亞、亞剌比亞、フェニキヤ、波斯、リビア、メソポタミア、小亞細亞、埃及、希臘、パンノニア及び西班牙等の諸國より來會せる監督三百十八名（ユウセビウスは二百五十名と註し、ソクラテスは三百と註せり）之に長老及び侍僧を加へたりしかば議員の數は頗る多かりき。而して東方教會よりの代議員其大多數を占めたりき。羅馬の監督シルヴェステル一世は老齡のため列席せず、長老ヴイトス及びヴイケンチウス之に代れり。列席者中最も著名なるはエルサレムのマカリウス。アンチオケのユウタチウス。亞歷山のアレキサンデル及び執事アタナシウス。クプロのスピリドデイオン。アリウス。ニコメディアのユウセビウス。ニカヤのテオグニス。トレマイスのセクンヂスとなす。最後の四人はアリウス派に屬する者也。皇帝自ら會議を開き、拉丁語にて簡短なる演說をなし、議會は自ら議長を選み議事を進行し、遂にアリウス說を罰するの議を通過せり。（此會議を開くに至りし狀況及び此會議の模樣に就ては、四十六―七頁『アリウス說』の條を見よ）。

此會議は基督神性論の外メレチウス爭論、論越節爭論を論定し、又廿箇條の教會法を議定せり。其中には僧侶の自ら身體を毀傷する事、僧侶と婦人との關係、破門の方法等に關する規定あり。

（二）ニカヤの第二會議　第七回の世界會議にして、主として偶像禮拜に關する問題を議決せり。之れより先き皇帝レオ第三世偶像禮拜に反對し、七五四年會議の決議を以て之が禁令を發し、コンスタンチン、レオ第四世同樣にて此禁令を厳守し、之に背く者を罰し來りしが、レオ第四世の死後皇后エレネ皇太子幼沖の故を以て自ら攝政となり、偶像禮拜の禁制を解きしかば、偶像禮拜に贊成する者漸く擡頭なり得るに至り、斯くて七八七年九月廿四日ニカヤに會議を召集し、七五四年の決議を取消し、基督、マリア及び聖徒等の偶像並に畫像及び十字架の像を教會に於て使用するを許可するの決議を通過したり。

ニカヤの信條 レシヤク

チノープル信條 及びニカヤ、コンスタンチノープル信條 The Nicene Creed and Nicæno-Constantinopolitan Creed.

信條

羅馬教會及び希臘教會の一般に使用し、プロテスタント教派多數の承認せる信仰箇條にして、通常信ぜらるゝ處に依れば、今日ニカヤの信條と稱せらるゝ者は、三二五年ニカヤの大會議に於て議定したる者也、三八一年コンスタンチノープルの大會議に於て修正したる者也といふ。ニカヤの會議はアリウス爭論を解決せんため開かれたる者にして、其議定せる信仰箇條は左の如し。

一　我等は萬物の造主にして、全能の父なる獨一の神を信ず。

二　我等は主たる基督を信ず。彼は天父より生れし獨子、即ち父の本質より生れし子、神より出でたる子、光より出でたる光、眞の神より出でたる眞の神、彼は造られし者に非ず、生れし者にて天父と同質のもの、又彼は天に於ても地に於ても萬物を造り、我等人類のために世に降り、肉體を取りて人となり、死して後第三日に甦りて昇天し、萬民を審判せんがために來らんとする者也。

三　我等は聖靈を信ず。

ニカヤの會議は多數を以て此信條を通過し、一時アリウス說を抑壓したりしが、之を贊成したる者も悉く衷心より之を是認したるに非ざりしを以て、爾後五十年間劇烈なる爭論相續き、アリウス說の消長常ならざりしが、三八一年コンスタンチノープルに於て開かれたる會議は、再びアリウス說を抑壓し、子は父と同質也との說を一層強固にし、ニカヤの信條を左の如く修正せり（『アリウス說』の條參照）。

一　我等は天地萬物の造主にして、全能の父なる獨一の神を信ず。

二　我等は主耶蘇基督を信ず。彼は神の獨子にして、諸の世より先きに生れし者、即ち光より出で

だる光、眞の神より出でたる眞の神、即ち造られし者に非ず、生れし者にして、天父と同質のもの、又萬物を造り、我等人數ばんがために天より降り、聖靈に依りて處女マリアより生れ、人となり、ポンテオ、ピラトの宣告に依り、我等のために十字架に釘けられ、死して葬られ、聖書に稽ひて第三日に甦り、後昇天して天父の右に坐し、再び榮光を以て萬民を審判せんために來らんとする者也、其國は永遠無究也。

三　我等は聖靈を信ず。彼は生命の君、天父より出づる者にして、父と子と共に拜すべき者、又預言者を通じて教へし者也。

四　我等は一の聖公會と、罪の赦免のために一の洗禮を信ず。

五　我等は死者の復活、又來世の生命を待ち望む者也。

尤も此信條がコンスタンチノープルの會議に於て、ニカヤの信條を修正して作られたる者也との傳說に就ては、歷史家の中に異論あり。ハルナック其他の人々は此會議が東方教會のみな代表せる者にして、世界的に非ざりし事、所謂『コンスタンチノープルに於る第二世界會議』の法令として保存せられたる文書の中に此信條あらざる事、此會議に列席したるナジアンゾスのグレゴリウスの書翰中にニカヤ信條の事を記したれ共、其修正に就ては何事をも云はざりし事、第五世紀の中頃より前の拉丁教父が此會議の事を記したりしに掏はらず、此信條には毫も言及せざりし事、此信條の內容がニカヤ信條の修正と認め難き事等の理由に依り、此信條がコンスタンチノープルの會議に於てニカヤ信條を修正したる者也との說を含み、此信條は使徒信條又はアタナシウス信條と同じく僞作にして、エルサレム教會に於て洗禮の時の信仰告白として古くより用ゐられたりし者を基礎として、三六〇年より四〇〇年に至る流の間に作られ、第五世紀の中頃よりニカヤ信條の修正也と思惟せられたる者也と論ぜり。

二元論（ドゥアリスム）Dualism.　【學說名】　二元論とは、哲學上にありては宇宙萬有の究竟原因を一元に歸せず、之を二元に歸するものを云ふ。例之デカルトは精神と物質、思想と延長とは全く調和すべからざる反對のものなりとなし、此二元を以て宇宙萬象人間萬事を解釋せんと試みたり。故にデカルトの哲學はスピノザの一元哲學に對照して、之れを二元論と稱す。カントが其智識論に於て、智識の形狀と智識の材料との間に截然たる區別を劃したるも、二元的性質を帶ぶるものなり。倫理學に於て、シヂウイックが人には本來自愛と他愛、利己主義と愛他主義との全然異なれる二力ありて爭鬪すと主張したるは、所謂『倫理性の二元』を承認するものにして、倫理學上の二元說と稱するを得べし。宗教上に於てはゾロアスタル教（拜火教）は二元的宗教なり。何となれば拜火教は善惡二力の存在を信ずれば也。基督教の神學が、神に對して惡魔を立つる點より見れば、二元論と見るを得べけれ共、其惡魔は初めより獨立の存在に非ずして、神の支配の下に立つ者なれば、其二元論は終極の者に非ず。又神と世界との關係に就て、兩者を別視する見解を取り、人間の性質に就て、肉體と靈魂とを峻別せる從來の神說學は二元論的也といふを得べし。（『一元論』『唯心論』『唯物論』の條參照）。

ニコデモ Nicodemus.　【人名】　猶太人の宰にて夜耶蘇の所に來りし人。ニコデモなる名はヨセフスの書中に、アリストブラス、ポンペーに遣はしたる使者として記さる。此名がもと希臘人の名なりしこと疑なし。タルムドにニコデモ、ベン、ゴリオンと呼ばれたる人の事を記す。故に此二者を同一人となす者あれ共、第四福音書（約三の一—廿一）に記されたるニコデモは、既に此時老年なりしと云へば、エルサレム滅亡の時まで生存したりしタルムドのニコデモと同一人たり難し。此ニコデモの事は第四福音書以外に傳へられず。故に約翰傳記者が文學上の目的のために代表的人物として之を假作せる也と云ふ者あれ共、吾人は斯る想像をなすの要なし。又之を以て共觀福音書に記されたるアリマタヤのヨセフと同一人也となす者あり（太廿七の五十七、可十五の四十三、路廿三の五十と約三の一—廿一、七の五十、十九の廿九を對照せよ）。此二人の間には類似の點もあれ共、約翰傳に記されたるニコデモの物語の歷史的なることを否むに足るの理由なし。約翰傳に依れば、ニコデモはパリサイ派に屬し、サンヒドリンの議員にして、富める人なりしが如し。彼は耶蘇に聞かんがため夜其所に來り、パリサイ人が耶蘇を捕へんとしたりし時『其人に聽かずして其行を知らざる先に之を審くは我們の律法ならんや』と云ひて耶蘇を辯護し（七の五十一）、耶蘇の十字架上に死せし時、沒藥と蘆薈とを携へ來り、其屍を取りて布と香とに包みたりしとして傳へらる（十九の廿九）。而して此等の事は、何れも彼が敵の批評を恐れたりし怯懦の行爲を表する者也と想像せらる。彼の事は此外聖書に記載せられ共『ニコデモ福音書』又は『ピラト行傳』と稱せられたる書に彼が此後の事を記せり（次の條を見よ）。又他の傳說に依れば、ニコデモは使徒及び約翰よりバプテスマを受け、猶太人の反對を受けてエルサレムより追放せられたりしといふ。

ニコデモの福音書（フアイシレコ）The Gospel of Nicodemus.　【書名】　新約經外聖書中の一書。耶蘇の審問、死及び復活、並に彼が陰府に下りたりし事を記す。『ピラト行傳』（Acta Pilati）及び『陰府への下降』（Descensus Christi ad inferos）と稱する二書を編輯したる者にして、古代の希臘寫本は前者のみを有す。最古の者は第五六世紀頃に成りたりと思はるゝ拉丁譯に之を發見すべし。尤もニコデモの名の之に附せられたるは第十三世紀以前の事に非ず。此書はニコデモが希伯來語にて書きたる者を、太守アナニアが希臘語に飜譯せる者也と稱せらる。『ピラト行傳』は多くの校本を有す。其最古の者も恐らくは第五世紀の半以前の者に非ざるべし。然れ共ユスチヌスの書中に『此等の事はポンテオ、ピラトの下に描かれたる行傳（アクタ）より知り得べし』との語あり。又テルチュリアヌスの書中に『此時心中既にクリスチャンなりしピラトは、基督の事に就て時の皇帝チベリウスに報告せり』といへる語あるより、ピラトの書きたる者古くより存在したりしなるべしとの說起り、ティッチェンドルフは現存の『ピラト行傳』を以て第二世紀には既に存在したりしとなし、スチュルケンは、現存の『ピラト行傳』の基礎となりし者をユスチヌスは知りたりしなるべしと云ひ、ハルナックはユスチヌスは斯る者を知らず、唯其存在を假定したりしに過ぎずと云へり。『陰府への下降』は後前三の十九に基き、早くより廣く行はれたりし傳說を、發達せる形狀に於て顯はせる者にして、此傳說の早き痕迹は之を『被得福音書』に發見すべし。

ニコポリス Nicopolis.　【地名】　使徒保羅がテトスに贈りたる書翰中に記載せらるゝ所にして（多三の十二）彼が多く過さんと定めたる地なり。ニコポリスと稱する地數ヶ所あり。而して此處にはイピラスのニコポリスを指すこと確實也。此の市北西は現今アルタと稱するアムブレシア灣內に聞まるゝ岬の上に在り。前世一年九月アウグスタスは北方の海上に於て決戰を試みしが、勝利を獲たるアウグスタスは此地を『勝利の市』と稱したりき。左れ共今は荒廢して其跡を留めず。岬の南五哩に在るプレヴァサと稱する市今は繁榮ぜり。保羅の時代には多くの希臘人此地に住居し、アポロの神殿も亦此處に立ち、アカルナニア及びエピルス西海岸の中心たりしかば、保羅は此地に暫く留まり、之を中心としてエピルス、アカルナニア全州に傳道せんとしたりしなるべし。但し保羅が此決心をなし、且之をテトスに通知するに至りし次第は明ならず。又保羅が果して此地に來りしや否やも確かならざれ共、牧會書翰の確實なる信ずる人々は、保羅が羅馬にて一たび放免せられし後、此地にて紀元六十四—五年乃至六十六—七年の冬を過したりしなるべしと思惟せり。

ニコラ Nicolas　【人名】　猶太教に入りしアンテオケの人にして、貧民施濟の事を掌らせんため、エルサレムの基督教徒が選び、十二使徒が按手せる七人の執事の一人（徒六の一—六）新約書中彼の事に就ては此外記事なし。イレニウスは默示錄二章に記されたるニコライ宗と云へるは、彼の門徒也と云ひ、ヒッポリツスは更に明に、ニコラは正しき教より離れ、放恣なる生活を教へたる異端者也と云ひ、テルチュリアヌスの書と稱せられたる僞書には、ニコラを攻擊せり。之に反して彼の不道德なる教訓を攻擊せり。之に反しイダナチウスの書翰には、ニコラを

即となすは誤れりと云ひ、ユウセビウスは之を以て根據なき說也となし、亞歷山のクレメンスはニコラは有德なる婚姻生活をなし、其妻も亦貞節なりしことを云へり。故にニコライ宗の祖が此ニコラなりしや、又は他のニコラなりしやに就ては、今日より之を確定するを得ず。

ニコライ Nicolai, Philip　【人名】　フィリプ　一五五六—一六〇八　ルーテル教會の神學者、說教家、讚美歌作者。獨逸メンゲリングハウゼンに生る。父は牧師にして、彼を挾くより『神と其教會とに』獻ぐ。エルフルト及びウイテンベルヒ兩大學にて神學を修めし後、一五八三年ウェストファリアのヘルデッケの牧師となりしが、西班牙軍來寇のため暫く他に走り、歸り來れば教會にては再び『ミサ』行はれ居れるにぞ、ケルンにてルーテル派の秘密刷體を牧し、後ニーデルウィルヅングンの同種の團體を牧す。マルブルフ大學より神學博士號を贈られ、一五九六年にはウェストファリアのウンナに招かれ、カルヴィン派との論爭の神頭に置かる。一六〇一年ハムブルフに招かれ、牧會說教に於て非常なる感化を與へつゝ生を終る。彼は熱心なるルーテル派にして、基督遍在說を主張し、カルヴィン派と論爭し、多くの著作を公にす。『フンダメントルム、カルビニアナイ、デテクシオ』『デ、コントロバルシア、ウビキタリア』『デ、ヴオプス、アンチクリスチス』『カルヴィン派の神と宗教に就て簡短に論明す』等其なり。殊に此の最後の者は第十六世紀對カルヴィン派議論中の最も皮肉なるものなり。然れども他の方面に『永生の喜樂の鏡』の如き眞に美はしく優しき著あり。其他基督の再來を望み、其の近づけるを說ける著、基督の遍在を說ける著等あり。

然れども ニコライの名を慕めしむるものは、其の四の讃美歌なり。殊に『げに美はしく曉星の我等に輝くかな』『醒めよ起きよ呼ぶ聲あり』の二はウンナにて疫病の時（一五九九）に作りしものにして、日耳曼讃美歌中最も美はしきもの、信仰と愛とを包み、又詩的音樂的調律を有し居りて、宗教改革時代には全くなかりし特色を有し、讃美歌史に一新時期を作りしものなり。『醒めよ起きよ』の方は ニコライ自ら譜を作れり。

ニコライ宗 Nicolaitans. 宗派名　古昔小亞細亞のペルガモ教會に行はれ、基督及びエペソ教會の惡める所の者として、新約默示錄に記載せられたる宗派（二の六、十五）。其教義は以色列人に偶像に獻げし者を食ぶべし、姦淫を行はしめたるバラムの教と均しかりしと云へば（二の十四）此宗派は俗羅が其書翰（哥林六の十三—廿、八の九、十、十の廿八）に於て、彼の誡及びエルサレムの會議にて定めたる命令に背き、異邦人の祝節にて偶像に獻げたる物を食し、且斯る祝節に伴ふ淫行を犯せるアンチノミアン派と均しき者なりしなるべく、兩して彼等はコリント教會に在りし者よりも一層進歩し、宗派をなし、教義を有し、猶四、十一、十二及び後二の一二、十四、十五に記されたる僞教師に近きものなりしなるべし。學者の中には、默示錄の語は譬喩的にして、ニコライ宗と稱する者眞實に存在したりしに非ざるべしと唱ふる者あれ共、此派の事はイレニウス。亞歷山のクレメンス。テルチュリアヌス。イグナチウス等の書中にも記載せられ居ることなれば、ニコラと稱する者に依りて創められたる瀆る宗派の存生したりしこと殆ど疑ふ可らず。此派とアンチオケのニコラとの關係に就ては『ニコラ』の條を見よ。

ニコラス クザの『クザヌス』の條を見よ。

ニコラス一世 Nicholas I. 羅馬教會の皇帝の權力法王（八五八—八六七在位）羅馬教會の皇帝の權力の下より脫出せしめ、教會と國家とを同一物とし、基督教全世界を統一せんといふ思想を代表し、又之を實現したる著名の人物なり。先づラヴェナの大監督ヨハネスが失政の故を以て都ドより羅馬に訴へらるゝや、ラヴェナの老監督は羅馬監督の對立者たりしを以て、ニコラスは之を利するに好機會を得たりとなし、ラヴナ大監督に迫りて、爾後エミリヤ領に於ては羅馬の承認を經ざれば、一切監督を任命せず、又監督は誰にても羅馬に告訴するを得といふことを宣言し、ラヴェナの大監督は

育せられしといふも、一の學校にて彼が猶太學生の習慣に從ひしことを暗示せり。使徒時代には此種の學校著しく增加し居たり。邑に宗教のことに志す者十人あれば、必ず一會堂を有することゝせられ、二十五人の兒童ある所には必ず一人の教師を置き、四五十人の兒童ある所には二人の教師を置かざるべからざりき。但しマイモニデスに據れば、一百二十五家族ある所には必ず教師を置く制度なりしと云へり。而して使徒時代には教師は牧師、預言者、傳道者とは全く異れる教役者の團體と認められ（哥前十二の廿八、廿九、弗四の十一、來五の十二等參照）最眞の聖書解釋者等は、當時の教師は今日の日曜學校教師と同じ目的を達し居たる者なりと唱ふ。

（二）**初代基督教會の信仰問答學校**　此の時代の學校は猶太教會の學校の繼續發展したるものなりき。モスハイム等は之を以て第一世紀より廣く行はれたる者也と云ひ、ネアンデルは稍々後の者也とせり。此等の問答學校及び學校は新悔改者を教育して教會員とするを目的とし、又少年及び無知者に神と救の事に關する知識を與ふる方法とせられたり。是等は知識の程度に從ひて二學級又は三學級に分たれ、聖書の句を記憶し、神と創造と攝理と聖書歷史と墮落と神の人となりしことゝ復活と未來の賞罰とを學べり。書物は聖書の讀文の部と聖詩と對話となり。紀元六八〇年のコンスタンチノープル第六回世界會議は、各都各邑に於ける長老に命じて、學校を設けて兒童を之に送らゝ小兒を教へ、決して謝儀を取るべからず、唯だ父母より隨意の贈物をなさしむべしと言へり。シャロン第二回會議も聖書教育の學校を設くべきを諸監督に命じたりき。

（三）**宗教改革時代の日曜學校**　ルーテルは既に一五二九年より日曜日に於ける一定の信仰問答教育を始めたり。宗教改革の行はれし地方は何れも此の制を取りぬ。ミラノの監督カルロ、ボロメオは、一五六〇年より八四年迄に於て、殆ど今日の日曜學校と同形式なる組織の學校を設けたりき。此の學校にては、兒童は男女に二大別せられ、次で小級に分たれ、各級に教職の教師あり、男兒の方へは平人信者一人助師たり、女子の方へは取締一人助師たり。此制度は同監督管區の凡ての教會に用ひられ、今日まで繼續せるが、聖書をば用ひざりき。スペーネル。フランケ。ヴィンツェンドルフ、及び英國改革者等の盡力は又近世日曜學校のために途を開ける所少からず。グラウセスターの日曜學校の設けられし前に、所々にて種々の人に依て起され居たる日曜學校は決して一二に止まらず。一五六〇年頃にはジョン、ノックスに依て蘇格蘭に立てられ、一六五〇年より六八年迄には『アルレーンの警告』の著者ジョセフ、アルレーンに依て英國バスに立てられ、一六七四年には米國マサチウセッツ州ロクスボリーに、八〇年には同州プリマウスに、九三年頃には監督フラムプトンに依て英國に立てられ、一七〇七年頃には蘇國グラスゴーに、一七四〇年にはジョセフ、ベラミーに依て米國コンネクチカット州ベスレヘムに、一七三九年より四〇年迄にはルドウィグ、ヘッカーに依てペンシルバニア州エフラタに立てられ、此校は三十年間續き頗る良好なる成績ありき。一七六〇年にはプレーアに依て蘇國プレチンに、一七六三年にはセオフィラス、リンゼーに依てカッテリクに、一七六五年には ハリソン女史に依て英國ビデールに、一七六七年にはオペルリンに依てワルドバックに、一七六九年にはハンナ、ポールに依てハイ、ウィコムブに、一七七〇年より七八年迄には博士ケネディーに依て愛爾蘭ブライト、バーリシに、一七七三年にはキンデルマンに依てボヘミアに、一七七五年にはジェームス、ヘースに依て英國ボルトンに、一七七八年にはデビド、シムプソンに依て英國マクレスフィールドに立てられたり。

（四）**近世の日曜學校**　以上の日曜學校は區々に立ちし者にて、尙一般的運動と運絡との必要あり。此の意味に於ける日曜學校運動の創始者なロベルト、レークス（Robert Raikes）となす。彼は英國グラウセスターの市民にして、グラウセスター雜誌の持主たり。一七八〇年事業のため市の近郊に行き、ピン製造所其他に使はれ居れる貧兒の群を見て心太だ痛み、四人の女教師を雇ひて日曜日に其の下に送らるゝ貧兒に教育を施し、信仰問答を諳誦せしめたり。其等兒童は必ず頭と手とを洗ひ清め髮を梳り衣服を調へて來ることゝし、午前十時より十二時まで留りて後歸家すべく、午後一時には再び登校し學課を受けし後教會にて信仰問答の幾分を諳誦し、五時靜に家に歸り決して途中にて遊戯せざるべく、勤勉なる者は、全部の聖書、舊約書、新約書、絨、襪、衣服を褒美として受け、教師には一日一シリングを拂ふことゝなしたり。レークスは一七九三年十一月三日のグラウセスター雜誌にて之を報じ、教會教の『紳士雜誌』にて之を報ぜしかば、忽ち世人の注意を引き、其頃既に倫敦少年の道德狀態に就て考慮し居たるウイリアム、フォックスは之を目に留め、レークスと通信し、公會にて此の計劃を慫慂し、ジョナス、ハンウェー（Hanway）ヘンリー、ソルントン（Thornton）其他の博愛家の助力を得て、一七八五年九月七日大英國全領土の日曜學校を奬勵する會を組織したり。

一七八五年より一八〇〇年迄、此會が教師の給料のために貸したる所凡四千磅なりき。此の計劃は人民の贊歎する所となり、平人の學者及び有力者その贊助者となり、後の監督ホルン。監督ボルチウス。サリスボリー及びランダフ兩監督、牧師トマス、スコット。詩人ターバー。アダム、スミス、ウェスレー兄弟。ホイフトフィールド等も皆な其中に在りき。されど宗教家の中には其の必要を疑ひて烈しく之に反對したるものあり。當時のラウセスター監督は激しく此運動を攻擊し、カンターベリー大監督は諸監督を集めて之が禁止の法を問へり。蘇國にては、平人をして安息日に教育せしむるは先例なき事にして十誡第四の違犯なりと宣言せり。されど日曜學校は迅速に增加して英、蘇、愛の諸國歐洲大陸にも米國にも全土に亘りて擴張し、グラウセスターの當初の學校は數年後消滅せしも、一層改良せる計劃に依りて立ちし學校之に代りて起り、一七九〇年十二月には米國ヒラデルヒアにて會合あり、監督ホワイト。博士ラッシュ。マシウ、ケレー其他の博愛家等集まり、之に次で九一年一月十一日日曜日に貧兒を教育するためとして、第一日（即ち日曜學校）協會の設立を見るに至れり。是も教師には給料を拂ひ、一七九一年より一八〇〇年迄に凡四千弗を支出し、九一年に於て既にペンシルバニア州として自由（無授業料）學校設立の法律を立てしめ、其の後繼續し來りて州内の貧しき學校に教科書や宗教的書册を寄附せり。其の心質頗る亘大なり。

レークスの學校や大英國の協會の學校やヒラデルヒアの第一日協會は、教師に給料を拂ひ、教會員外の貧兒の類に教育を與へを主眼とし、其の學校は純粹に傳道學校なりしが、教師有給制は費用多く、從つて其の評議に陥りありければ、次で一歩を進めて無給教師に依て教育する學校起るに至れり。『サー』チャールス、リードの言ふ所に依れば、始めて教師が給料を受くるを辭し無給教授を喜んでなしたるは、英國オルドハムの日曜學校なりしと云ふ。ジョン、ウエスレーの言に依れば、一七八七年に英國ボルトンの日曜學校には八十の無給教師あり、唯だ大なる主よりの報のみを以て滿足し居たり。有名なるストクポート日曜學校にては、一七九四年に三十人の教師中六人有給なりしのみ。一七九〇年米國南カロライナ州チャールストンに開かれしメソヂスト教會年會は、傳道者に命じて白人黑人のために寬志教師を以て日曜學校を設くべしとのことを決議せり。印度人兒童日曜學校は有名なる印度人傳道者オッカムの一姉妹に依り、一七九二年紐育州ストクブリヂに開かれ、一七九四年にはニウゼルシー州バサイク縣木綿製造所の少年職工等のため日曜學校設けられ、九七年にはロードアイランドのポータケットにてサミュエル、スレーターは自己の職工等のために同種の日曜學校を起せり。ダブリウ、ビー、ガルニーも一七九六年頃倫敦の諸日曜學校に此の寬志教育制を皆れ、且聖書の句の質問、教師會等を用ひ、教師ローランド、ヒル其他と協力して一八〇三年七月サルレーチャペルにて倫敦日曜學校同盟を造り、無給教師制日曜學校の奬勵を謀りたり。之より先き一七九九年同所に於ける同じ會合は、倫敦宗教小册子會社を立てゝ日曜學校に關する文書をも發行せり。されば無給制は直ちに一般の歡迎を受け有給制に代りて進歩其だ速にして、二十五萬人の生徒既に登錄せられ居りしが、無給制行はるゝに至りて一層設立が便宜となりしため、貧者の利益を受けしこと甚しかりき。米國にて此の運動はグレハム夫人ベシウン夫人の英國を訪問し、一八〇三年歸りて紐育に日曜學校を立てしため刺激を受け、更に一八一一年倫敦より宣教師ロベルト、メーがヒラデルヒアを訪ひ、賞券の見本を示し、同市福音協會に書面を以て改良方法を勸めたるに由て刺激を受け、其他の原因よりも日曜學校は繁榮し、一八二七年には在籍生徒百三十五萬人となれり。英國及びウェールスにては、一八五一年に二、四〇七、六四二人、蘇國にては二九二、五四九人あり。同年大英國愛爾及び英國諸島の全體にては二、九八七、九八〇人、校數は二七、〇四八、教師三二五、四五〇人ありき。米國にては同年殆ど三百萬人の生徒あり。一八八〇年レークス百年祭に當り報告せられし所に依れば、英國及びウェールスにて教師四二二、二二二人、生徒三、八〇〇、〇〇〇人、世界全體にて教師一、五五九、八二三人、生徒一三、〇六三、五二三人なりき。米國のみの統計は一八八一年の萬國大會の報告に校數八四、七三〇、教師九三、二八三人、生徒六、八二〇、八三五人とあり。一九一〇年の萬國大會の統計に依れば、全世界に在る日曜學校總數二八五、八四二、教師二百五十萬人、生徒二五、八八八、四七九人に上り、中千六百萬人は合衆國及び加那太に屬せり。

書に數に於て非常に增加せしのみならず教育の方法、建物、室内の設備、庭園の完美、教師の人物、日曜學校の文學、其他日曜學校に直接間接關係ある思想事物の發達は頗る著しく、此等は皆な日曜學校を助けて急速に發達せしめたり。而して日曜學校として斯かる盛況に至らしめしには、所々に起りし日曜學校協會の力與りて多きに居ることなれば、今其

の主要なるものゝ二三を擧げて記さんに、第一に倚教日曜學校同盟は一八〇三年教師の改良、學校の擴張、適當の文書の廉價供給を目的として起り、諸教派の會員に依て維持せられ、幹部參員五十四人、分屬參員多數あり。委員は無給なりき。此の時代には倚教職なれば使用せず、地方同盟を造ること、學校の建築とに依て其の目的を遂行し、一時米國の同盟に倣ひて北部にて教職を用ひし事あるも、一八三七年其人の死去のため又止みたり。第十九世紀の後半には十五年間乃至二十年間歐洲大陸に教職を送り、各國にて日曜學校の設立を助けしめたり。此の協會のおりに造せし所は學校の改良、少年宗教文學の發行及び頒布、日曜學校統計の蒐集等なりき。其の出版せし所は夥だしく、必要の場合には定價の半額又は三分の一にて協會關係の日曜學校に供給せり。生徒は學校より教會に入るもの甚だ多く、教師は倫敦にては八割八分、地方にては八割一分教會員なり。巡回圖書館、博物館、讀書會、希臘語希伯來語學級、教師會、師範學級、其他も屢々設けられて大に功を擧げ來れり。

一七九七年蘇格蘭にも一日曜學校協會起り、一八一一年又聖書を教ふるゲール人學校補助のためにまた一校組織せられ、何れも初は教師を有給とせしが、後に無給となり、ストー及びジェームス、ゴールの盡力に由て教育法に大改良を施せり。次でエヂンバラ及びグラスゴーに地方日曜學校同盟造られ、諸教會も日曜學校を設け、夫會合を開き、教職を用ひ、小兒禮拜式を立つるなど著しき進歩ありき。愛蘭にては一八〇九年日曜學校協會造られ、其の發行せる『日曜學校處理指針』などは廣く賞れ行き、米國にて稱賛せられたり。英國教會日曜學校學會は一八四四年教師奬成の目的を以て立てられ、最長の機關雜誌を發行し來れり。大英國のウェスレー派教會は一八七四年日曜學校同盟を作りぬ。和蘭、佛蘭西、獨逸、瑞西、以太利にも日曜學校協會起りて各々用をなせり。

米國にては一七九一年組織せられしヒラデルヒア第一日又は日曜學校協會最も著しく、一八〇八年には福音主義協會ヒラデルヒアの日曜夜學校を奬勵するために作られ、其の教師は無給なりき。紐育女子日曜學校同盟と男子同同盟とは一八一六年エリアザル、ロルドの發議に由りて造られたり。ロルドはヒラデルヒアの日曜學校制度を觀察して之を發議せしなり。ヒラデルヒアの日曜學校及び大人學校同盟は、一八一七年同市と近郷の凡ての日曜學校及び大人學校協會を合同するために造らる。一八二一年教職を用ひ六十校を結合せり。聖書の句の紙片、カード、小册子、褒賞用册子等を發行す。七年後同種の同盟を合併して一八二四年國民的協會たる米國日曜學校同盟となれり。大人同盟も其頃は盛にして各州に同盟の會を有し、校數七百、生徒五萬以上を統一せり。日曜學校同盟は教派に屬せず、各派の平人代表者に依て導かれ、平人及び教職の傳道者を用ひ牧師等も其の事業に協力せり。第一年の報告に依れば同盟協會三二一、碧給學校一、一五〇、教師一一、二九五人、生徒八二、六九七人ありき。其の奬勵賞行せし事の中にて著しきものは、傳道者を用ひて各所に日曜學校を立てし事、一八二五年全世界に日曜學校のための祈禱日を通知勸告せし事、二六年に共同學課を立てしこと、三〇年にミスシッピ地方全體に日曜學校拱殖策を立てし事、二四年に教師月刊雜誌を出し、三二年に國民日曜學校大會開會を建議し、自由巡回圖書館を起し、學年別疑問書制を立て、小兒用廉價繪解雜誌を發し、日曜學校管理及び改良のための記錄及び一覽表を作りし等なり。其の傳道者事業は全く寄附金に依て維持せられ、英大の功績を擧げ、設立より五十九年間に七萬四千の學校を組織し、其教師四十六萬六千人、生徒三百十萬人、宜教費用二百八十二萬五千弗、內貧民學校のための書册及び紙の費用六萬弗なりき。頒布せし書册の代價は七百五十萬弗に上りぬ。マサチウセッツ日曜學校同盟は一八二五年諸教派の代表者より組織せられ、一たび解散せしが、一八三二年會衆派のマサチウセッツ安息日學校協會立ち、一八六八年會衆派出版局と合併せり。同局は書記や巡勸員を使ひ會衆派間に日曜學校を奬勵せり。監督メッヂスト教會の日曜學校同盟は一八二七年作られ、一八四四年改造せられ、教派內の教者に依て文書を發行分布して大なる功績あり。長老派浸禮派の各出版局も、日曜學校部あり、書籍頒布員あり用ひ日曜學校を奬勵し、又文書を配り、和蘭人改革教會日曜學校同盟も一八五〇年起りて、其の出版會社に併され、米國監督教會日曜學校同盟及び福音的知識協會また學校用少年文學を其の派內に頒布せり。紐育の外國日曜學校協會にもと米國日曜學校同盟の聯合體なりしが、一八七八年合併し、歐洲大陸をおもとし外國の日曜學校奬勵のために盡せり。

第十九世紀の初年より米國各地にて地方日曜學校大會開かれ、殊に一八二〇年より三〇年迄東部及び中部諸州に多かりしが、三二年米國日曜學校同盟の發議に由りて全國大會紐育に開かれ、當時の合衆國二十四州四殖域中十四州會境域より二百二十の代表者

集りたり。三三年にもヒラデルヒアにて國民大會あり。此等の大會は宗教々育組織の原理を發見し、同意協力を謀るを目的とせしものなり。五九年また第三回國民的大會あり。聖書研究と少年宗教々育の熱心を復活せしめて其の功著し。六二年には英國倫敦にて世界大會開かれ、方法及び進歩の途を議す。六九年ニウジェルシーのニウアークにて米國々民的第四回日曜學校大會あり、二十八州七國より五百二十六人の代表者集まりぬ。第五回は七二年インヂアナポリスにて開かれ、第六回は第一回國際大會として七五年バルチモアにて開かれ、第二回國際大會は一八七八年アトランタにて開かれ、第三回は八一年トロントにて開かる。此外地方的大會は枚擧に遑あらず。一九〇七年羅馬に開かれたる萬國日曜學校大會にて『世界日曜學校協會』を組織し、英國のエフ、ビー、マイヤーを擧げて會長となせり。一九一〇年ワシントンに開かれたる萬國日曜學校大會には、米國各州を初め五十餘倚國より來會せる代表者三千人、此外有志の出席七千人に及び、大統領タフト及び其他の演說あり。米官有の盛況を呈せり。

近世日曜學校の組織は普通三部より成る。即ち初等(又は幼年)科中等科高等科なり。中等科は六歳より十歳までを教ゆ各級に教師あり。高等科の各級は稍々大なり。幼年科は初は百人二百人ありても教師一人か二人なりしが次第に學級を分つに至れり。全校には珍長あり副校長書記會計圖書掛あり。

教授及び文學教育の方法も變遷ありき。レークスの起したる日曜學校は下級社會のために立てられしかば初等の讀方等を教へ、信仰問答の口授教育をなしぬ。次で聖書の句の讀方及び諸話となりしが、聖書及び信仰問答の諸論非常に重んぜられて、各週七百句に上るに至りしかば、終に二百句と限られたり。バーディーの言に依れば、小兒に腦病を起すものありたりといふ。ジェームス、ゴールは『安息日學校教授の目的と實賞』及び『自然の師範學校』を著はし、蘇格蘭にて一層思ひやりある學課制の立てられんことを唱へ、米國にても此言を一八二〇年より既に採用せり。ストーの紹解を重とする教授法も又改良の一方法となり、米國にては一八二五年起草の『共通制限學課』に依て改良することを得たり。此の制にては聖書全課を五年にて終ることを得たり。至十五節より成る同じ學課を凡ての級に用ひ、少くも三學年の別なく立てたる解釋質問及び批評を定めたり。二九年ガルは自己の學課を英國の教師にも薦め、三〇年正學課完成したり。四〇年倫敦同盟は學課表を發行し、四二年註を加へ長く世に用ひられたり。此外ミムプリスの福音史を基礎として全校に一學課を用ふる方法も四四年公にせられ、故郷には用ひられたり。米國にては七二年前は各學校自由に學課を定めしが、六五年シカゴの雜誌『日曜學校教師』も六七年ビー、エフ、ゼコブスも學課齊一のことを必要を感じ、七一年國民、日曜學校出版者會紐育に開かれ、七二年の共通學課を立つ定し、同年のインヂアナポリス大會にて學課委員を立て、全聖書七年終了の學課を定めし、之を全國に推薦したり。七八年更に委員を增して世界共通學課を定めしむ。七五年の報告にては初の學課は米國、英國、歐洲諸國、スリア、印度、支那、メキシコ、地大剌利亞、布哇にて用ひられつゝありしが、七八年改正以後は更に廣く用ひられ、教派の諸大出版會も一致し、註釋等に所々より出で、宗教新聞雜誌ならぬ出版物にも毎週註解の出づるに至り、牧師教授等學課の解釋を寄稿せり。又近時兒童心理學の開くるに及び、日曜學校の教授法にも亦之を採用し、漸次其面目を改めつゝあり。

近世日曜學校運動の起りしまでは、少年宗教文學は存せざりき。『天路歷程』やワッツの『宗教讃歌唱歌』や、其他少數の信仰問答書などが小兒のために存せしのみ。小兒のための信仰問答にて英語にて最も古きは、一四二〇年に出でしものにて、之に次ではクランマルが一五四九年に出したるものと、一五五三年出でし『拉丁語英語小信仰問答』と、一六四七年出でし『ウェストミンステル問答』と、一七二九年出でしワッツの『第一第二信仰問答』となり。ルーテルも一五二九年出せし事あり。英蘭及び愛蘭にて日曜學校教育のための最初の書は、重に聖書の幾部を取りたる綴字書及び讀本なりき。其後『赤と青の切符』と稱し小さきカードに聖書の句を載せたるものと、小册子と、小兒へ褒賞として與へられ、時としては校長教師より生徒へ褒賞として書物を貸して讀ませし事あり。漸くにして少年宗教文學は日曜學校生徒の讀書慾に由て發達し、各校に巡回圖書館も設けられ、博士ジョン、エス、ハートは既に七〇年に於て日曜學校圖書館書册を發行する出版會を三十六、其の資本を五百萬弗、日曜學校圖書館書册の全數を七千册、年々出版の剩合を一日一册以上、六八年中には四三四册なりしと計算せり。其後此等のものゝ增加は夥しく、殊に萬國共通學課制定以來甚しとなる。代表的の雜誌は米國にては『日曜學校時事』(タイムス)、倫敦同盟の發行する『日曜學校史記』(クロニクル)及び『英國日曜學校時事』等の週刊紙あり。米國メッヂス

ト派の『日曜學校ジョルナル』『バプチスト教師』『ウエストミンステル教師』『日曜學校世界』『倫敦の『教會日曜學校マガジン』『ウエスレー派日曜學校マガジン』『安息日曜學校マガジン』等の諸雜誌また有益なり。

（五）日本に於ける日曜學校事業　日曜學校の事業は基督教會と共に我國に入り來りたれ共、教至の不完全、教材及び教師の乏しき等より尚未だ充分の發達なさに至らず。明治卅九年（一九〇六）十二月米國の人ジェー、エル、ブラウン萬國日曜學校協會を代表して來朝し、各地に日曜學校講習會を開き、日曜學校事業の鼓舞奬勵に努めたる結果、四十年五月『日本日曜學校協會』を組織するに至れり。爾來日曜學校協會は智識の普及、講習會の開催、部會の組織、教師の養成、教科書の改善、通信機關の發行等に力を盡し、其結果委員創作の幼稚科、初等科、及び中等科用の掛繪、教科書、教師の友等を發行し、又通信講義錄供給の事業成れり。初めより日曜學校のために最も力を盡したるは田村直臣にして、三戸吉太郎、鵜飼猛等も興味と熱心とを以て盡力しつゝあり。最近の調査に依れば、本國に於ける日曜學校の數一千二百六十八、教師及び生徒の總數八萬五百六十八人也。

ニッチェ　カール　インマヌエル　Nitzsch, Karl Immanuel　人名　一七八七―一八六八　第十九世紀の神學者中新舊兩派の中間說を取れる代表者。獨逸ザクセンのボルナに生れ、父カール、ルタードウイヒ、ニラチェの教授たりしウイッテンベルヒにて神學を學び、一八一〇年其の講師となり、翌年シュロックスキルへの補助牧師となり、一三年佛軍の包圍襲撃の間にも擔任し、一七年ウイッテンベルヒ新設神學校の教授となり、伯林より神學博士を贈られ、二二年ボン大學に招かる。二九年『基督教教理大系』を著はす。合理派、超理派、シュライエルマッヘルに對する立場は明となれり。曰く『余は父とダウブとシュライエルマッヘルより學ぶこと他の師よりは甚だ多し。然れども多少づゝ其の師よりは異る所あるに至れり』と。神と世界との關係、神の必然性等に就てはシュライエルマッヘルと異り、シュの『基督教意識』に代ふるに神の言葉自身なる以てせしが、而もトウェステンと相並びてシュ派の代表者とせらるゝに甘じ、神學と哲學とを割然區別して、神學者の任務を表明することに勉めたり。尚此時代には記號學に關する書を著はし『神學研究及び批評』雜誌に寄稿し、大學說教者ともなりて、儀式文の改正、ルーテル派及びレフォルムド派合同運動等に加はり、合同に就ては面白き書を著はしたり。一八四七年伯林大學に招かれ、死に至るまで在職す。又高等教職會議員とせられ、一八四九年には國會議員にも選ばれ、五四年には聖ニコライ教會の司牧とせられ、六八年には神學就任五十年祭及び金婚式を舉ぐることを許さる。伯林時代の著作は即ち生涯の大作『實際神學』二冊なり。先づ教會生活の學說を叙し、次で現代に於ける實行を說けり。他に說教集もあり。ニッチェの父は純カント派の神學者にして、基督教の實質は其の道德的合理的宗教たるにありとし、基督を信ずる信仰は第二の事となせし人なりしことゝて、ニッチェは何所までも神學者なりき。信仰の經驗を基として神學を立つる如きことなかりしなり。其の實際的神學の大系としてはシュライエルマッヘル以後の第一流といふを得べし。

ニッチュマン　ダーウィド　Nitschman, David　人名　一六九六―一七七二　モラヴィア教會の最初の外國宣教師、又最初の監督。モラヴィアのツァウフテンタルに生れ、迫害の殿しかりしため一七二四年ヘルンフットに脱れ、モラヴィア派の福音的事業の統領となる。一七三二年八月廿一日レオナルド、ドーベルを伴ひて出發し（後同派宣教の紀元日となる）途にて絶えず反對冷嘲を受けながら、コーペンハーゲンに達し、其より聖トマスに航し、十二月に着して黑奴に說教す。翌年歐洲に歸り、一七三五年監督とせられ、直ちに同派の一團を率ひて米國ゼオルジヤに赴く。大西洋航海中大暴風雨の時敬虔にして且怖れなかりしは深く同船中のジョン、ウェスレーを感動せしめたり。米國にて最初のモラヴィア派任職式はニッチュマンが司りたるが、ウェスレーも列席し、其の式の單純にして而も嚴肅なりしに深く感歎し、千七百年以前に聞りて天幕工保羅や漁夫彼得の司どれる會合の中に在る心地したりと云へりしとぞ。其より按ニッチェマンは多くの旅行と五十回の航海をなし、日耳曼、大英國、ゼオルジヤ、北カロリナ、紐育、ペンシルバニヤの諸國諸方にて福音のために勞せり。

ニードネル　クリスチアン　ウィルヘルム　Niedner, Christian wilhelm　人名　一七九七―一八六五　獨逸の教會歷史家。牧師の子、ザクゼンのオベルウィンケルに生る。ライプチヒ八年神學博士又教授となり、同校下級教師より昇りて一八三八年神學博士又教授となり、同年ヘルメスに關する書を公にす。哲學と神學との趣味を合せ有し、教會歷史をも哲學的精神にて講義す。一八四四年イルゲン死―て歷史神學雜會の長となり、又歷史神學雜誌

の編輯長となる。四六年逝去しながらも『基督教會歷史』第一卷を發行す。パウルは其の該博正確にして又材料の精選せられたるを讃し、其の學者的に且重苦しき非難す。ニードネルの名は直ちにネアンデル。ギーゼレル。ハーゼ等と相肩線す。彼の神學の立場は中間說にして、ストラウスやパウルと同情少し。一八四八年の改革後辭してウイッテンベルヒに退きしが、五九年に至り教授兼高級教職會議員として伯林に招かる。シェンケルの『耶蘇の繪姿』の出でし時には彼も之に對して論爭せり。彼は小兒の如き敬虔の人、謙遜にして抑揚し、小事にも感謝し、勤勉にして一時は隔夜に睡眠せし事もあり。決して散歩せず。又結婚するの道を有せざりき。書を讀むこと無限なりしも、絕えて實世界を知らず、歷史の大研究者なりしが著作者には非ざりき。

ニネベ　Nineveh.　地名　創世記十の十一に依れば、ニムロド、カルデヤより出で行きてニネベを建設したりといふ。同樣なる傳說は米迦書（五の六）にもあり。其土地の紀念碑も此の傳說の正當なるを表し、且ニネベが嘗て巴比倫帝國の境界内に包含せられたりしことを示せり。此の名はユフラテ河畔のニナと稱する邑の名より起りたる者なるが如し。而してニナは巴比倫の女神ニナより來りたる者なるべし。市はチグリス河の東方に當り、ザブの北、近世モスルと稱する邑に相對する方面に在り。紀元前第四世紀にゼノフォンが此の地を通過せし際には、既に其古跡の位置を回想し難き程に全く荒廢に歸したりしと雖も、紀元第十二世紀の頃チュデラのベンジャミンはニネベの名稱に依り其の廢趾を知り得たりしといふ。其の廢趾は二大塁及び古代城壁の遺物より成り、城壁の面積は殆ど一千八百エーカルを包み、その周圍七哩半に亘れり。城邑の廣は百四十五呎にして、クサル河の水之に注ぎ、古代ニネベ城の中央を貫流して後、南方チグリス河に入る。タサル河の北方にクユンジクの堤あり。其南北にセネケリブ及びアッサルハドンの宮殿あり。セネケリブは舊殿の遺蹟を平にして、之に牛ばアッスリヤ風、半ば西利亞風の壯大なる建築を經營し、アッサルハドンの宮殿は宮女の室と圖書館とを以て秀でたり。此の地に初めて住みたる王は、チグラテピルゼル一世（前一一〇〇）の子なるアッサピルカラなりき。之れよりニネベはアッサナゼルパル（前八八〇）の治世に至るまで王の住處なりき。ニネベの陷落したるは前六百七年にして、之と共にアッスリヤ帝國も亦滅亡せり。ニネベの滅亡はナホム及びゼパニヤ（二の十三―十五）に依りて預言されたり。之を亡ぼしたるはエクバタナに其居を定め、巴比倫王ナボポラサルを援けたるマンダの王なりしといふ。ヨナがニネベに道を說きたりし事、及び耶蘇が之を引きたりし事に就ては『約拿書』の條を見よ。

日本　Japan.　地名　先づ羅馬加特力教傳道の由來を叙し、次にプロテスタント教傳道の起源、及び發達の概略を叙す。

【羅馬教の傳道】（一）傳道の起源及び發達　マルコポーロが其紀行に於て一たび東洋に樂土あることを唱道してより、西洋各國は競ひて商船を東洋に送り、商貿易を營まんとせしが、蒙古分國も亦專ら力を之に致し、後奈耳天皇享祿三年（一五三〇）の頃商船九艘に奇器雜貨を載せて豐後灣内に來り互市を請ふ。是れ蒙古人の我國に來りし嚆矢にして、尋で天文十二年鳥銃を齎して多種島に來り、翌十三年又薩摩に來りて貿易を求む。當時我國は尚未だ鎖國せられず、外國人は何れの港灣にても便利に乘じ入港するを得たりしが故に、是れより後は比年來りて豐後、大隅、薩摩等の沿海に泊せり。

薩摩の一青年に牛次郎（西人はアンゲルと稱す。或は曰く、大和の醫師了西也と）なる者あり。嘗て鄉里に於て人を殺せるの故を以て遁るゝに道なく、蒙菊牙船に身を投じてマラッカに來りしが、此處にてイエスイト社の宣教師フランシス、ザヴィエーに逢ひ、其說教を聽て大に之を喜び、直ちに洗禮を受けて之に歸依せんことを願ひしに、ザヴィエーは之を許さず、彼を印度の臥亞に送り、監督ドムゝジャン、ダルブゲルクより洗禮を受けしめたり。牛次郎は臥亞にてイエスイト社の學校に入りしが、聰明にして且强記なりしかば、僅の間に拉丁語學に通じ、且熱心嚴格に基督教の規律を守りしが故に、大にイエスイト社の稱讚と信任とを受けたりき。是れ蓋し天文十五六年の頃なりき。彼はザヴィエーに向ひて日本傳道の事を請願せしが、ザヴィエーは牛次郎の道に進むの運なるを見、且蒙菊牙の同人等が、日本人は溫和にして禮讓を守り、公正にして從順なる人民也と云へるを聞き、日本人の必ず基督教を受くる人民たるべきを信じ、遂に日本傳道の志を決し、其友コスム、ド、トレー（Torre）及びジャン、フェルナンデズ（Fernandez）の二人を伴ひ、牛次郎を案内者となして、天文十八年（一五四九）五月臥亞を發し、幾多の艱難を經て同年八月十五日鹿兒島に到着せり。是れ即ち基督教の宣教師が我國に來りし嚆矢也。然るに此地方の人々は大に宣教師を歡迎し、殊に薩摩の藩主島津貴久は、其領内に於て自由に基督教を說くことを許可したりしかば、ザヴィエー等は牛次郎をして基督教の大意を飜譯して之を記せし

め、自ら路傍に立ちて之を朗讀せしかば、之を聽かんとして集り來るもの頗る多く、數箇月にして凡そ百名の者洗禮を受けるに至れり。然るに後烏津貴久は薩摩守船が平戸に來りて兵器を其藩主に賣りたりしを憤り、之を以て宣教師の與る處也となして之を疎じ、且其宗教宣布を禁じたりしかば、ザヴィエー等は鹿兒島に留ること凡そ一年にして此處を去り、肥前の平戸に來りしに士民之を歓迎し、未だ廿日ならずして凡そ百名の個洗者を得たり。ザヴィエーは其齋手の初めより成功の著しきを見て以爲らく、京都は日本の首府にして英俊の集る所なれば、全國に道を弘むるの道先づ此處よりするに若くはなしと。於是彼はトレーを平戸に留め、フェルナンデズ及び日本人二名を伴ひ天文九年（一五五〇）十月平戸を發し、周防に渡り山口に入り留ること一ケ月、それより道中多くの困難を經て、天文廿年（一五五一）二月京都に到着せり。初めザヴィエーは先づ皇帝及び將軍に謁し、道を訊かんとの希望を有したりしが、當時京都は兵燹に罹りて全市荒廢し、且比年内亂相續きて騒擾極めしかば、其志を遂ずして空しく歸り留ること僅に十有五日にして、平戸に歸り、それより又山口に赴けり。山口の士人は初め未だ之を信ずるに至らず、宣教師を見ること夷狄禽獸の如く、其道路に於て說教する時の如き其面に唾して之を辱め、或は之を嘲笑したりしが、遂に亦之を信ずる者あるに至り、ザヴィエーは留ること數箇月にして三千餘人に洗禮を授けたり。斯くて後はトレーを平戸より招きてフェルナンデズと共に之を山口に留め、自らは豐後に往き府内に留り、藩主大友義鎮の厚遇を受けたりしが、印度に在るイエスイト社より歸還を促すこと頻りなりしかば、日本に留ること二年と三箇月にして、天文廿年十一月下旬二人の日本信徒を伴ひ印度に向へり。斯くて後は臥亞に歸りて後、バルタザル、ガゴー。ベール、ドラル、カスガハ。及びエドリルド、シルヴハの三人を宣教師として日本に送り、其身は支那に傳道せんとして舟山島に來りしが、内地に入るを得ずして病死せり（ザヴィエー『日本の事蹟に就ては『ザヴィエー』『イエスイト社』『支那』等の條を見よ）。

此の如くザヴィエーは日本に於ける傳道を開始し、且日本傳道の熱心を喚起したりしが、是より傳道の大事業なるに至りしは、初め彼と共に來りて其一生を日本傳道に獻げたりし彼の二人の次と、其後に渡來したる宣教師也。ザヴィエー歸國後此等の宣教師は熱心と忍耐とを以て道を傳へたりしに、佛教僧侶の中には彼等と爭論し、且彼等の傳道を妨ぐる者もありしが、又眞に悔改めて天主教に歸し其傳道師となる者あり。其他傳道上困難なかりしに非ずと雖も、彼等は銳意邦人の未だ知らざる福音の道を說きしのみならず、教師自ら順良の行爲に依りて其德行を示し、或は貧者を救恤し病者を愛傷し、或は聖典を盛にし儀式を肚にして其堂好衝動し、或は天文、醫學を教へて教育ある者の稱讚を博せる等、百方術を盡して邦人の心を歓攫せしかば、此外に又基督教の弘布を助けたる事情あり。即ち西國諸侯の中には海外貿易を以て利を收めんとする心より、葡萄牙の商人を誘引する方便として宣教師を厚遇し、自ら基督教を信じたるのみならず、領内の民をして又之を信ぜしむるものあり。又當時佛僧の勢力盛にして稍もすれば政治に干渉するが如きことありしかば、之に反抗せんがために基督教を歓迎したる者ありき。永祿十一年（一五六八）九月宣教師ウルカン京都に來り、織田信長に謁し其教を弘めんことを請ふ。信長は彼て より比叡根來の强樂なる佛僧の勢力を殺がんとしたりしかば、即ち其請を許し、京都に教會堂を創建せしめ、初め永祿寺と號し、後南蛮寺と改稱せしめ、之に近江甲賀郡五百貫の地を寄附す。後更に教師三名を葡萄牙より迎へ、近江の伊吹山にて方五十町歩の地を給し、本國の奇草玲木を植へ藥圃を設けしむる等歓待を極む。斯くの如くなりしかば基督教の蔓延は頗る速にして、天正の中頃に至るまで三十餘年の間に信徒漸く多く、九州にては豐後の大友、筑前の黒田等之が魁たり。長崎、大村、深堀、有馬、柳川、八代、天草、小倉、博多の人々は翕然之に應じ、就中小倉、柳川、大村最も盛にして教會を建て四方に傳道せり。山陽にては山口、廣島を最とし、南海にては和歌山を盛也とす。延て京都、大阪、堺、伏見より遂に關東諸州に波及し、遠く仙臺、會津に至り、北は金澤に達し、一時天下傾動の勢ありき。當時日本在留の宣教師三百餘人に及び、貴族少年輩のためには修道院あり、教會の數二百五十箇所に及び、改宗の日本人殆ど三十萬に達したりしといふ。而して奉教に熱心なる肥前の大村純忠、有馬義純等は使者を羅馬に遣はし、書信方物を法王グレゴリウス十三世に贈り、以て忠誠の意を表するに至りたりき。

（二）教義の要領、信徒の熱心　初め半次郎が臥亞にてザヴィエーに、日本國に天主教を傳へなば其民之を率すべきやと問はれし時、彼ほど之に答へて、我國民は容易に人の說く所に服すまじ、先づ其事の義理を知り明らめんことを欲し、人の迷ぶる事に就て疑問をなし、且說教者の爲人を察し、其行ふ所は言ふ所に副ふや否を見んと言ひたりしと云ふ。ザヴィ

エーが後日本より臥亞に在る教師に贈りたる書中、日本に派遣すべき宣教師の資格を述べたる中に、品行の公正なること、艱苦に堪ゆることとの外に、日本人中には學者ある由り、明瞭なる道理を以て事を證明するに非ざれば、決して承服せず、故に必ず多智多材なるを要すとのことを言へり。『當時の日本人が天主教を信仰したるは、昔時サクソン人、ケルト人等が初めて基督教を信仰したりし時とは全く其狀態を異にせり。歐羅巴に基督教を傳へたるは所謂北方の蠻夷に傳道したる者にして、其有樣無人の地を行くに異らざりしが、日本に於ては然らず。基督教の來りし前既に神、儒、佛の教ありて、宗教上の素養は比較的深く國民の間に普及せり。應仁以後天下麻の如く亂れたりしと雖も、之を以て歐洲中世の暗黑時代と同一視すべからず。日本の武士は戰國の最中にても書を讀み、歌を詠じ、參禪かもなし、曾て精神上の修養を怠りたることなかりきゝ。されば天主教が初めて日本に來りしは、戰國の世にして文物の盛なる時代には非ざりしが、其僧侶等は傳道の初めに方り先づ異端の排斥に從事せざるを得ざりき。中にも佛教は當時最も盛大にして人心を牧攫したりし宗教なりしかば、彼等は至る所に佛教を攻擊し、其僧侶と爭ひたりき。釋迦は印度淨飯王の子にして人間也、人間は人間を救ふ力あるべからず。釋迦に五百の大願ありしといふ、釋迦既に願ふ人ならば願はるゝ主なかるべからず、此所願の主こそ神に非ずして誰ぞ。或は阿彌陀は則ち天主教の神に均しとの說もある可けれ共、阿彌陀とは無量壽經に昔時國王あり、國を棄て王位を去り、沙門となりて法藏比丘となり、此比丘が修業を積みて阿彌陀となりたりと云へる者にして、所說人間に外ならず。人間なれば人間が救ふの力あるべき筈なし。元來佛教の秘意は一切の法を無也と說くものなれ共、之を與ふ可らずとぼ、當時バテレン（パテレンとは天主教僧侶の義也）の說きたる處にして、是れだけの議論にて佛教を論駁したりと云ふ可らざるは云ふ迄もなきことなれ共、斯く天主教が從來の宗教に對して辯難攻擊を加へたる其事は、當時の人心に新なる感覺を與へ、宗教問題の研究に新なる刺激を與へたりしが如し。

以上は唯破邪の方面を述べたるのみなれ共、天主教の僧侶等は之と共に顯正の方面にも力を盡し、其携へ來れる新なる教義を稍々として說教したりき。其說教の主意は大體に於て今日の天主教の教ふる所と異ることなし。今當時の文書に依りて彼等の傳へたりし教義の大要を記せば左の如し。即ち彼等は先づ有神論より說き始めて曰く、天地萬象を以て能造の主を知り、四季轉變の時を違へざるを以て其治手を知る。例之一字の殿閣を見れば其巧匠あることを知り、家内に墨書ありて其旨に隨ひて家中治まるを見る時は必ず主人あることを知るが如し。其能造の主をデウス（Deus天主）と號す。デウスは始もなく終もなく、色彩なく、形體なく、能はざる所なく、知らざる所なく、智慧の源、慈悲の源、意法の源、諸善萬德の源にして、之をスピリツアルス、タンシヤといふ。無色無形の實體の義也。此デウス『ヒイヤツアレ』といふ一語を發したるに、世界は其言葉の下より出現せり。天地世界萬物は悉く此『ヒイヤツアレ』の一語の下に現出したる者にて、デウスが能生の念を生じたる時、萬物出現せりと說く。是れ即ち天地創造論也。世界既に成りて後デウスは土を取りて先づ男を造り之をアダンと名け、アダンを凡そ三時ばかり眠らせ、右の脇の一骨を取りて女を造り之をエヴと名け、此二人を夫婦となして、ハライソ、テレアル（地上の極樂世界）に置けり。此ハライソ、テレアルと云へる所は、不寒不熱にして衆苦を離れたる處也。アダン、エヴ此處に居りし程は貧苦病苦なく如意滿足なりき。於是デウス一戒を授けたり。曰く、諸木諸蕃の實を食するとも、マサンといふ菓實を食す可らずと。然るに此處にはアンジヨ（天使）と云へるものあり。デウスの人間を造り給はざる先きに造られたる者にて、常にデウスの左右に侍したりしが、アンジヨの中にルシヘルと云へる者あり。己が善に誇りて我は是れデウス也、我を拜せよと勸めしに、アンジヨの三分一は之を同意したりしかば、デウス即ちルシヘルを初とし彼に與せし三分一のアンジヨを下界へ追下し、インヘルノ（地獄）に繫し給ふ。アンジヨは即ち高慢の罪に依りてザヤボ（天狗）となりたる也。此天狗となりしアンジヨの首長ルシヘルは其失ひたるハライソを人間のために奪はるべきを妬み、エヴを誘ひ、マサンの菓實は三世を知る智慧の菓實にて、之を食へばデウスの如くなるべしと言ひしかば、エヴはデウスの戒を破りてマサンを食ひ、且夫アダンにも勸めて之を食はしめたりしかば、デウスの怒に觸れてハライソ、テレアルを追はれ、子孫に至るまで死苦病苦を初として許多の艱難あり、初へインヘルノに墮さるべき身となりたり。元來天地の間には三のアニマ即ち精あり。草木の精をアニマ、ベゼタチイヴといふ。此世に生じて此世に枯れ、唯生死ありて感覺なきもの也。禽獸の精をアニマ、センシチイヴといふ。苦樂の感覺ある者也。以上此精は生死を限りとして散じ亡ぶる者也。人間の精をアニマ、ラショナルといふ。

色身に附屬せず、色身と共に滅びず、後生に生き復りて現世の樂に從ひ、永劫不屈の苦樂に預かる。善人の行く所をインヘルノといふ、天堂也。惡人の行く所をパライソといふ、地獄也。別にフルガトリヤといふ所あり。此宗教に歸しても修行足らず、デウスの許可を得ざる者は先づフルガトリヤに行き、輕微なる苦痛を受け勸教を經たる後、其罪因を盡して始めてパライソに生る。以上は即ち人祖及び其種落並に未來說の大要也。人祖既にルシヘルに欺かれ罪を犯したる後、死苦病苦及び其他の不足不如意子孫に及び、何れも地獄に墮つることゝなりたれば、大慈大悲の源なるデウスは、天地開闢より五千年を經て、セイザルと號する帝王の御宇ジュデヤのベレンと云ふ處にて、ジョゼイフを父としサンタ、マリアを母とし、人體を受け給ひて誕生し給ふ。是れ教祖ゼズ、キリストにして、彼は自ら、我は是れデウスの化身にして、衆生の後生を救はんがために假りに世間に生れたり、我教に從てデウスを信ずる者は、假令其罪山の如くなるも消滅して、デウスより天堂の樂を與へらるべしと說き給ひぬ。サンタ、マリアもジョゼイフもビルジンとて、一生婚娶の義なくして愼誡誕生し給ふ。然るを何とてデウスの御出世とは之を知るぞといふに、此マリアに黃昏アンジョ來現し、長談合掌してアベガラシヤベレナタウミヌステクンといふ。デウスの愛相滿々給ふマリアに御證をなし來る御主は御身と共に在ますといふ譏也、此時より愼姙十月滿ちて、件のベレンに於て夜半深更に及で厩の內にて御誕生あれば、天人天降り音樂を奏し、異香四方に散滿す。御在世三十三年にして衆生に眞道を教へ給ひ、御身自らデウス也と宣ふが故に、ジュデヤと云ふ者の一類之を聞て魔法也と云ひ、權門に訴へ呵責打擲を加へ、終にキリストをはたものに掛け來る。是を以て人間の滅罪生善の功德、アダン、エヴの料錢として三十三の御年入滅を唱へ給ひ、三日目に蘇生し給ひ、其後四十日を經て天し給へり。是れ即ち基督論、讀罪論也。末世に天地滅盡の時あり。此時墓に眠りたる諸人復活し、パライソに生るべき人は身先づ自ら光を發し、インヘルノに墮つべき人は皮骨逆立す。然る後にジュデヤ國の或る處に集會し、キリスト此時再來し、善人を引きて右の坐に安ぜしめ、惡人を引きて左の坐に安ぜしめ、善惡を分ち輕重を定め、惡人は永くインヘルノに墮ちて苦患を受け、善人はデウスに從てパライソに生れて快樂を受く。是れ末日審判の說也。當時の文書の傳ふる處に依れば、當時天主教の傳へたる教義は大要右に云へるが如し。（『破提宇子』『天文未錄』等の書に據る）。

大體より云へば其頃にても日本の學者には、斯る教義はあまりに淺薄に見えたりしが如く、佛僧の書き羅の書を見れば、冷笑の態度を以て之を迎へたりしが如し。然れ共當時天主教徒の熱心に至りては慢る可らず。日本にて先づ人々の注意を喚起したりしは、天主教の教義其物よりも、寧ろ信徒の熱心なりしが如し。殊に日本人民をして最も驚愕せしめたる者は、天主教徒の排他的精神にして、彼等は從來の佛教信徒の他宗他派に對して寬容なりしが如くなら ず、異端排斥の熱火の如くにして、到る處に神社佛閣を破壞し、毫も舊信仰の跡を止むる能はず。ザヴィエーは其信徒に神原と偶像とを毀棄せんと企つべきことみ命じたりしかば、大友宗麟の如きも兩つ二筑の宗教的建築物を破壞して毫も惜む所なく、長崎の信徒は天火と稱して神殿佛寺に火をかけたりき。

火に當時の天主教徒に特異なる點は、宣教師、殉教者、及び殉教者の遺骨遺物等が、信心の功德にて奇特の働を顯はすことありとの事を信じたること也。例之ザヴィエーは神水と十字架とを以て各種の病者を愈し、立どころに聾者をして聞くを得、啞者をして言ふを得せしめ、又死たる小女を復活せしめ、未だ曾て學びたることなき日本語を忽然として流暢に語り得たり抔言はれ、眞面目に之を信じたる者少からず。又或る外國宣教師は、新禱懺悔斷食の德に依りては舟なくして安然に水上を渡り得べしと信じ、自ら之を試みたりしと云ひ、其他獄中にて天の奇蹟にて飯き飯が白き飯となり、辛き鹽漬の魚が甘く味ある者になれりと云ひ、殉教者が火刑に逢ひし時天火ありて刑場に降れりと云ひ、或は微雲天より殉教者の上に降り、日光を蔽ひ冷風を吹き起し、苦痛を淺ぎ易からしめたりと云ひ、殉教者自ら火刑の柱を離れ宙に止まれりと云ふが如き信仰行はれ、教師も信徒も當さに斯る邪あるべしと思ひて敢て疑ふことなかりき。斯る信仰はやがて教會の力となり、人々好みて殉教者たるのみならず、殉教者の遺物も靈能あるものとして重ぜられ、殉教者の磔刑に處せられたる其柱を削りて護身の符となし、後には價を定めて賣ぐものさへありしと云ふ。是れ實に當時の信徒の狀態なりし也。

（三）天主教の禁制　織田信長が天主教を歡迎し之を保護したりしとの次第は、前既に之を述べたり。晩年に至りては信長も基督教蔓延の神速なるに驚き、之を忌憚するの念を生じたるが如くなれ共、當時其事多端にして未だ之を禁ずるに遑あらずして止みたりき。信長弑せられて、豐臣秀吉之を繼ぐに及

び、初めは基督教に對して厚意を表したりしかば、彼に忠誠なる諸侯及び臣下の中にも黑田孝高、小西行長の如き熱心なる天主教徒ありしが、天正十五年（一五八七）に至り俄に其政策を變じて基督教の禁制を布き、南蠻寺を廢し、高山右近を流鳥の羽に處し、凡ての外國人バテレンに廿日以內に日本より退去すべきを命じたり。翌十六年に至り、肥後の國主佐々成政が東上を命ぜられて、尼崎に至り遂に死を賜ひたるが如きも、黃酷の政をなしたるに由れりとは雖も、彼が天主教を奉じたりしも亦其一原因なりしなるべし。秀吉は尙寺澤廣高、藤堂高虎を長崎市民の彼等に附隨して非分を行ふを禁ぜしめたりき。斯く秀吉は百方力を盡して基督教の信仰を禁じたりしかども、此不寛の禁制は未だ以て天主教の蔓延を止むるに足らず。普通の人民は尙公然之を信奉し、稍や身分ある人にして世間の物議を憚る者は私かに之を信仰したりき。又南蠻牙人、西班牙人等は依然として竊に新選のバテレンを載せ來れり。左れば當時の嚴令も政府の期するが如き効果を奏せざりき。當時イエスイト派僧侶の書きて其本國に贈れる書翰に依れば、天正十八年（一五九〇）天主教徒の死に處せられたる者二萬五百七十人なりしも、同年及び翌年の二年間に於て更に一萬二千人の新信徒を得たりしと云へり。當時改宗の信徒等が、其信ずる所の宗教を棄てんよりは寧ろ甘じて重刑を受くべしとて、從容死に就きたりし狀態は、益々世人をして斯く人をして熱心に歸依せしむる所の宗教は何も如何なる宗教なるかを知らんと欲するの念を起さしめ、再して一たび之に入るや又同一の熱心を以て之を信奉したりしかば、政府の迫害も容易に其目的を達すること能はざりし也。然るに此時に際し基督教徒に不幸なる事こそ起れり。初め羅馬法王はイエスイト派僧侶の外何人も宣教師として日本に赴くを許さざるの法令を發し、又西班牙、葡萄牙兩國の主權者なるヒリピ二世も、日本と貿易するの獨專權を葡萄牙の商人にのみ與へたりしが、ヒリピン群島に殖民せる西班牙人及び其僧侶は法王及び國王の命令を不法となし居たりしに、文祿の初めマニラ太守の使節の本邦に渡來せるに際し、西班牙人なるフランシスコ派の僧徒隨從し來り、其宗教を傳へざるべしとのことを條件として京都に滯留するを許されたりしに、彼等は久しからずして其條件を無視し、イエスイト派僧侶の諫止するも聽かず、公然京都にて說教をなし教會を建築する等のことをなしたりしかば、秀吉は大に之を怒り、文祿三年（一五九四）京都及び大阪に於てフランシスコ派の宣教師六人及び日本教徒廿人を捕へ、長崎に送りて之を磔刑に處し、且て去すべきことを命ぜり。斯くして天主教の傳道は又一頓挫を來したりしが、多年の間苦辛して其根據を据えたりし教會は容易に根絕す可らず。イエスイト派の宣教師は表面秀吉の命に從ひ歸國せしが如く裝ひたりしも、諸方に潛伏して竊に時機の到來するを待ちたりき。

秀吉死して德川家康天下の實權を掌握するに及び、耶蘇教の禁令漸く弛み、諸方に潛伏したりし宣教師は其隱家より現れ出で、新來の宣教師と共に公然傳道に從事し、再び其勢を恢復せんとするの勢ありしかば、慶長十六年（一六一一）家康令して大に天主教の禁を嚴にし、外國宣教師は悉く之を海外に放逐し、南禪寺の僧崇傳に命じて、其教を奉ずる者を論して強教に歸せしめ、從はざる者は流刑に處し、或は斬に處したるもあり。同十八年（一六一三）又大に天主教の盛蔓を索め、山口駿河守は九州に往き、長崎に在る天主教の會堂十一を焚き、近隣の諸國に在る者も亦悉く之を毀てり。此年天主教徒大久保藤十郎、外記樣之助等數人を磔し、其他の族流は悉く斬流に處せり。其翌十九年にも亦大久保忠隣京都に到りて天主教の會堂を焚き、其教を奉ずる者を逮捕し、三月には高山友祥、內藤如安、加々山隼人等男女二百人を捕へて京都の獄に下し、遂に所司代板倉勝重の議を以て友祥以下男女百餘人を海外に放てり。此の如く禁令を嚴にして天主教の蔓延を防ぎたりしが、尙之を滅絕するを得ず、裏面に於ては益々勢力を得つゝありしが如き有樣なりしかば、晉に政令の力に依るのみならず、教を說きて以て之を防遏せんと企つる者も次第に起り、元和三年（一六一七）には長崎の僧傳譽上人一寺を建てゝ佛教を說き、誘掖頗る力め、同九年には佐賀の人青木賢清一祠を建てゝ之を祀り、以て天主教に抗する等のことを爲したりき。宣永三年（一六二六）水野守信長崎奉行となり、州郡に令して天主教徒を索め、偷ぐる者には賞を與へたれ共、尙之を盡すこと能はず。其追捕の嚴なるため教を奉ずる者陽に改めたる者の如くして其實然らざる者多かりしかば、同六年（一六二九）踏繪令を發す。是れ耶蘇の像を銅板に刻し、人毎に之を踏ましめ、以て其信ずると否とを檢するの法にして、外人と雖も亦此の如くなすに非ざれば上陸するを許さざりき。同十二年（一六三五）には外船との通商及び航通を一層嚴にし、以て天主教の滅絕を謀りしが、同十四年（一六三七）十月には遂に發して天草の亂となり、孤城を陷るゝに海內の兵を以て

し、血を流し骨を積みたるのみならず、軍費とし大阪城より出したるものゝみにても、卅九萬八千百の多きに達したりしといふ。(『天草盛衰』の條を見よ)。翌年亂漸く平ぎ、天主教の勢之れより頓に衰へたりしが、幕府は急々鎖港の政略を採り、爾後國民は何人たりとも外國に往くを得ず、外國の臣民は其何國たるを問はず本邦に來るを禁じ、唯和蘭人のみ島原の一揆を平定するに與りて功ありしを以て、特に其通商を許し、且海外諸國の事情を報知するの耳目たらしめたりき。

斯く島原戰亂以後は嚴に外船の出入を禁じ天主教徒の入るを防ぎしに拘はらず、倚外船の來る者其跡を絕たず。寛永十七年(一六四〇)には葡萄牙船一隻又來りて通商を請へり。於是幕府は其乘組員七十四人を捕へ、其船と貨物とを燒き、六十一人を斬り、十三人を生して之に小船一艘並に薪水等を給し、本國に還らしめ以て我國が天主教を禁ずるの意を示さしめたりき。同廿年(一六四三)五月にはイエスイト派の宣教師十人日本風の衣服を着け、月代を剃り、小船に乘じて筑前國髮日の大島に來れり、島守之を捕へて長崎に送り幕府に訴へしかば、幕府は命じて之を江戸に送致せしめ、俄に小日向に切支丹屋敷を設けて獄を造り、彼等十人を之に下し終身出づること能はざらしめたり。然るに翌正保元年にも外船一艘來り、同四年(一六四七)六月には大艦二艘に四百餘人を載せ長崎に入港せしかば、西國在城の諸侯は更也、江戸よりも家老物頭數多に士卒を率ゐて長崎に至らしめ、海陸守備を嚴にして港口を守らしめしに、此は天主教を弘むるために非ずして、唯日本沿岸渡海の禁を解かんことを請求するの意なりしこと明白となりしかば、幕府は命じて其船を還し、諸侯の兵を撤ぜしめたりき。

尋で明暦三年(一六五七)に至り、肥前大村領内なる天主教徒相集り亂を構へんとするを聞ふる者あり。於是直ちに兵を發し其當五百餘人を捕へ之を刑す。之れより天主教徒の追捕は更に一層の嚴を加へ、翌萬治元年(一六五八)には日本全國に令して諸侯の封内に潛伏せる同教徒を捕へしめたりしに、全國中大隅、日向、志摩、甲斐、伯耆、丹後、安房、陸奥の八國を除き、其他の諸國は何れも多きは二三十人の教徒を出しぬ。されば此時に於ては我國中既に天主教の弘布せられざりし地は殆ど之れなかりしも。越えて延寶元年(一六七三)五月英吉利船一艘來り、貞享二年(一六八五)六月にも外國船一艘我が漂民を乘せて來りしが、何れも天主教を弘むるために非ざるを以て諭して之を還らしむ。此年より天主教に關する書は之を燒き、或は人民の讀むを禁ぜしが、當時三十四種の禁書と云へるものありき。降りて元禄、寶永の頃に至りても嚴禁せし書少からず。斯る有様なりしかば、天主教の勢は之年に衰へ、之を信ずる者も亦極めて隱密の間に於てしたりき。然るに寶永五年(一七〇八)八月我國人を撰し、刀劍を佩びて月代を剃り、我國語を以て記したる書八册を携へたる外人一人又大隅に來り、天主教を弘布せんとせしかば、其地の有司之を捕へ、薩州侯より之を江戸に送り、小日向の切支丹屋敷に居らしむ。當時新井白石幕府の樞機に參し、外交の事にも稍や意を用ゐしかば、自ら切支丹屋敷に至りて海外の事情及び天主教の大意を之に問ひ、其見聞せし所を錄し、且天主教の教義を駁せり。事は西洋紀聞に詳也。此外人は切支丹屋敷に繫がれ居りし中、其獄を守る者夫妻二人も天主教に勸誘せしとの譯を以て、正德四年(一七一四)三月更に詰牢に移され、其年十月病死せり。白石の云ふ所に據れば、天主教徒を劾せし初めより其頃に至るまで刑罰せられたる者廿八萬人、其信仰を棄てし者又廿餘萬人ありしといふ。爾後益々政令を嚴にして之を禁じ、外國船舶の出入を拒ぎ、其過酷のため止むを得ず上陸する者も長崎の出島に於て之を檢し、諸船の事態を聽に非ざれば上陸を許さず。斯く禁令嚴なりし故之れより以後は天主教に關し特記すべき事又之れあらざりしが、九州地方に於ては尚全く滅絕せず、大阪地方に於ても天保年間大鹽平八郎が天主教徒を捕へたることあり。尋で嘉永安政の頃に至りては外事日に多きを加へ、且幕府の威權亦昔日の如くならざりしを以て、此政令を行はれざりしに非ざれ共、天主教は此間に隱然勢力を得るに至り、竊に之を信ずるものありき。此頃より以後の歷史は第五項に說くべし。

(四) 天主教禁制の理由 初め信長が耶蘇教を歡迎し之を保護したるは、比叡根來の强敵なる佛僧の勢力を殺がんがためなりしとのことは、前既に之を述べたり。然るに耶蘇教の漸く勢力を得るに至るや、其教徒の熱心は從來の宗教信徒の比に非ず、殊に其排他的精神の强烈なる驚くべきものあり。彼等は異端征伐を以て神聖なる事業也と信じ、天主教を信ずる諸侯は何れも領内の神社佛閣を破毀し、經論を燒き寺、其臣民に迫りて强て洗禮を受けしめたり。斯る有様なれば耶蘇教と佛教とは到底兩立す可らず。秀吉摩下の臣中にも佛耶の二徒ありて勢ひ確執不和を生ずるの虞ありしのみならず、耶蘇教徒の關結は頗る强固にして、早く之が撲滅を謀らざれば、前門虎を防ぎて後門狼を入るゝの憂ありしかば、秀吉は深く之を顧慮し、さては耶蘇教の禁令を布くに

至りしなるべし。而して又當時秀吉は外國船より世界の地圖を得、西班牙の領地の廣大なるに驚き、其領地擴張の手段を訊問して、天主教の傳道と土地の掠奪との並行するを知り、天主教傳道は他國を奪ふ手段にして、天主教の僧侶は政治家の手足たるに過ぎずと思惟したりしが、是も亦秀吉をして耶蘇教の禁を嚴にせしむるに至りし原因なりしこと言ふ迄もなし。德川氏に至り禁令を嚴にしたりし主意も亦之に外ならず。秀吉の死後天主教は又其勢を回復し、他宗に對する迫害は依然として止まず。慶長十五年(一六一〇)肥後唐津の人高順なる者其登信する菩公のために一祠を長崎に建てゝ之を祀らんとせしに、天主教の徒日夜瓦石を擲ちて之を妨害し、其祠遂に成らずして止みしことあり。斯く排他の精神强烈なる宗教を根絕するの必要は、家康も亦疾くより悟りたる處にして、天主教の傳道と土地の侵掠との並行する事實も亦家康の早くより看取したりし處なるべし。然るに慶長十五年の末に至り家康は和蘭國王の書を得たり。和蘭は之れより少し以前より平戸に來り貿易を營み居りしが、此時初めて國王より書を幕府に贈りし也。其書には和蘭が支那と貿易を營まんとしたるに、葡萄牙之を妨害したることを述べ、葡萄牙人は和蘭の日本に通ぜんとするをも必ず妨害すべしとの趣を記し、葡萄牙人が斯く日蘭の交通を妨ふ所以は、元來葡萄牙は全世界を次第に蠶食して己が物となさんとする志あり、斯くて宣教師を送り自國の宗教を日本人に傳へて、日本國を奪はんとするが故に、和蘭の如き他宗のものゝ日本と交通するを欲せざる也との旨を書きたり。此は和蘭國王の書なれば、幕府が之を軍視したりしこと疑ふ可らず。是より先き慶長五年(一五九九)江戸に來り其儘滯在して幕府の顧問となりし和蘭人にヤンヨー(Jan Joos)なる者あり。後も亦屢々歐羅巴人が宗教を以て他國を掠奪したりしことを語りしことあり。此等のことより幕府はもし天主教を此儘にして置かば、將來必ず國の禍を來すべしと確信するに至りしこと疑なるべく、斯くて如何なる手段を用ゆるも必ず之を撲滅すべしと決心し、禁制を斷行したりし也。

一說に慶長十六年(一六一一)葡萄牙船に於て日本の耶蘇教徒より葡萄牙王に呈せんとする密書一通を得たり。乃ち之を幕府に呈したりしに、日本の耶蘇教徒等葡萄牙人と相結びて幕府を倒さんとする陰謀の顚末、雷用の兵卒船舶等に就き葡國と約定して之を得んとすること、其反逆に與せる日本諸侯の姓名、及び最後に此企圖を成就して屋馬法王の權率を得んか希望せる事等悉く此書に依りて暴露したりしかば、幕府は天主教を嚴禁し、其信徒を捕へて刑戮に處したる也と云へり。此說は西人の間の傳說にて日本の史書には其事實證すべきものなし。幕府は天主教徒に對する迫害の度を特に强めたるは、此頃より後の事なりしかば、斯る風說も起りしことなるべしと謀ありしといふは全く無根也。尤も浮田秀家、小西行長[illegible]天主教信者にして石田無二の大將なりき。明石掃部も熱心なる天主教徒にして、大阪城に籠り德川氏に抗したる者も少からざりしが、關原の役、大阪の役に於て德川氏に抗したる者は獨り天主教徒のみに非ず。此は全く政治上に基きたることにして、之を以て天主教の信仰より起りたりとなす可らず。且當時の日本人天主教徒を以て外國宣教師を主君の如く尊敬し、其言ふ所は何事も聽きたりしが如く思惟するは誤れり。當時の文書の傳ふる所に依れば、當時の外國宣教師は人格的御見知る强かりしが如く、日本人を侮りし之を教師に用ゆるを快とせず。故に日本人天主教徒中には、彼等が倨傲にして日本人なに人とも思はざるを憤るもの少からず、又其行狀の長短さへ之を議する者ありしと云へり(『破提字子』に據る)。斯る有様なれば當時の天主教徒が外國教徒の助を借りて國を賣べしといふが如きは思ひも寄らず、是れ全く天主教徒を誣ふるより起りたる風說にして、幕府もしかく思惟したりしとせば、そは單に幕府の猜疑に過ぎざりし也。

(五) 近世に於ける天主教の略史 以上述べたるが如く幕府に於ては天主教を嚴禁し、苟て之を根絕せんとしたりしを以て、久しく外國宣教師の渡來なかりしが、彼等は全く日本傳道を斷念したるには非ず。天保三年(一八三二)法王グレゴリー十六世は朝鮮に傳道區を設け、之に琉球を附屬せしめ、之に依て再び日本に傳道するの道を開かんと企てたり。於是佛國巴理に在る外國傳道會社は、數人の問答教授者を日本に送り來りしが其結果は明ならず。弘化元年(一八四四)に至り佛國の一軍艦は天主教の伶俐二名を載せて來り、那覇に上陸せしめたり。彼等は其處に留まることを許されたりしが、政府の監視嚴にして寇も監禁せられたるが如き狀態に在りき。次で二人の宣教師來り、安政元年(一八五四)更に二人の宣教師來り、其一人の死するや又三人の宣教師來りしが、何れも同樣の運命に遭遇したりき。安政四年佛國軍艦は二人の宣教師を載せて長崎に來り、其一人は上陸するを得たりき。翌年佛國との條約成り、横濱、長崎、函館の三港開かれ、居留外國人は信教の自由を得たりしを以て、外人信徒のため右

三港に宣教師滞在し、横濱、長崎の二港には禮拜堂建設せられたりき。斯くて文久二年（一八六二）に至り法王ピウス九世は日本に於ける最初の殉教者廿六人に聖徒鑑を贈り、聖靈降臨節に於て之がため莊嚴なる儀式を行ひしが、慶應元年（一八六五）二月長崎に於て一の莊麗なる教會此殉教者に獻げられたり。此教會は萬延元年日本宣教師として來着せるベルナール、ペチットジアン（Bernard Petitjean）の建つる所にして、彼の云ふ所に依れば、此新會堂の建てられたる一ケ月後浦上より三人の婦人來りて、其村人の基督教徒たることを告げしが、復活節には一千五百人の信徒新會堂に來りて禮拜したりしといふ。斯くて長崎附近の村落を搜索して數千人の天主教徒を發見したりしが、彼等は幕府の嚴重なる禁令ありしに拘はらず、竊に孤先の遺訓を率じて基督教を信じたりし者にして、其中には問答教授者あり、洗禮執行者あり、而して洗禮を執行する時には昔時より傳はりし所の拉丁語を使用しつゝありしといふ。然るに此事の漸く公となるや、佛教の僧侶は其勢の漸く盛ならんとするか見て之を嫉み、浦上の庄屋を說き、長崎奉行所へ訴へ出でしめければ、慶應三年（一八六七）三月浦上の信者は俄に奉行所に呼び出され、嚴重なる取調を受け、戶主六十人獄に投ぜられたり。德川幕府仆れて王政維新となるも、政府は尙基督教に對する政策を改めず、明治二年（一八六九）十月より三年一月に至るまで浦上、長崎大村、五島等に於て凡そ四千人の信徒を捕へて獄に繫ぎたり。尋で其逮捕したるものを諸藩に配附し、之を說諭して其信仰を棄てしめんとせしが、彼等は頑として之に應ぜず。而して他方に在りては、佛國公使等の強硬なる抗議ありしかば、政府も止むを得ず其政策を改め、教囚を放免して歸村せしめたり。之より後數年の間は政府の迫害尙實際に於て止まざりしが、明治六年三月基督教禁制の高札撤去せられし後は信教自由となり、傳道の進歩見るべき者あり。宣教師の數も逐年增加し、萬延元年三人なりしものが、明治十三年には廿八人となり、廿八年には九十八人となるに至れり。尼も亦明治五年に至りて渡來し、日本婦人にて尼となれるものも少からず。又邦人にて司祭となる者なも生じ、其最初の司祭は明治十六年（一八八三）九月を以て按手禮を受けたりし人村人の基督教徒たることを告げしが、復活節には一千五百人の信徒新會堂に來りて禮拜したりしといふ。斯くて長崎附近の村落を搜索して數千人の天主教徒を發見したりしが、彼等は幕府の嚴重なる禁令ありしに拘はらず、竊に孤先の遺訓を率じて基督教を信じたりし者にして、其中には問答教授者あり、洗禮執行者あり、而して洗禮を執行する時には昔時より傳はりし所の拉丁語を使用しつゝありしといふ。然るに此事の漸く公となるや、佛教の僧侶は其勢の漸く盛ならんとするか見て之を嫉み、浦上の庄屋を說き、長崎奉行所へ訴へ出でしめければ、慶應三年（一八六七）三月浦上の信者は俄に奉行所に呼び出され、嚴重なる取調を受け、戶主六十人獄に投ぜられたり。德川幕府仆れて王政維新となるも、政府は尙基督教に對する政策を改めず、明治二年（一八六九）十月より三年一月に至るまで浦上、長崎大村、五島等に於て凡そ四千人の信徒を捕へて獄に繫ぎたり。尋で其逮捕したるものを諸藩に配附し、之を說諭して其信仰を棄てしめんとせしが、彼等は頑として之に應ぜず。而して他方に在りては、佛國公使等の強硬なる抗議ありしかば、政府も止むを得

ずして一時釋放せらるゝに至れり。而して此事件は一時日本の文明國に對する信用を墜すに至りしが、其後日本政府は外國人の內地旅行を許すに至りしが、其後日本政府は外國人の內地旅行を許すに至りしが、其後日本政府は外國人の內地旅行を許

の御洗者にして、維新以前に於けるプロテスタント信徒は以上の三人に過ぎざりき。

第二期　定礎時代　明治元年より同十一年に至る（一八六八―一八七九）。

（一）當時に於ける日本の狀態　紛々擾々たりし頑國攘夷の議論も世界の大勢には抗す可らず。舊日本の重鎖は幕府の衰亡、王政の復古と共に打破せられ、愛に所謂維新の革命を生ぜり。此革命は單に政治機關の改造のみに非ずして、社會萬般の根本的革新なりき。明治元年三月十四日天皇陛下が二條城に在り、諸侯を會し天神地祇を祭りて發せられた五條の誓文の中には『舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし』『智識を世界に求め』『大に皇基を振起すべし』との文字あり。是れ實に王制復古よりも更に一歩を進めたる者にして、我國未曾有の變革をなさんとするもの也。新政府の政治家は所くの如く勇大の氣進歩の精神を以て、天下の視聽を一新せんことを勉めたりしかば、世は漸次舊物を破壊し西洋文明を輸入せんとするの念愈々切になり往けり。福澤諭吉は當時民間に於ける開國主義の先驅にして、夙に歐米に遊び新智識を獲得し歸朝し、慶應義塾なる學舎を開きて天下の青年を集め洋學を教へたりしが、彼は又他方に在りて其獨特の文字を以て許多の書を著はし、以て洋學の實益を明にし、只管西洋文明の鼓吹に努めたりき。其著はす所の『西洋事情』『窮理圖解』『世界國盡』『學問のすゝめ』『文明論之概略』等の書は其實行路に盛にして、所謂洛陽の紙價を高からしむるの慨あり。『西洋事情』は初篇の實高十五萬部以上に上り、『學問のすゝめ』は後編の實高二十萬部以上に上りたりといふ。亦以て當時如何に新思想の歓迎せられたりしかを推知すべし。去れば明治一二年の頃は長馬尚桜憶の際なりしに拘はらず、當時既に新奇の說を喜ぶ者少からず。息軒文集に依れば、息軒の知人某は明治の初年に於て同學の徒百餘人と共に、盛に共和政治の美を唱へたりしと云ひ、横井小楠の日誌に依れば、明治元年の末彼は森帝之丞（森有禮）と大に米國議院の事を論じ、快談夜を徹したることありしといふ。又明治二三年の頃當時の外務大系たりし上野景範は、米國共和政治の美を說き、其上下貴賤の平等を稱讃したることあり。小野梓は明治四年世界混一論を作りて、四海同胞主義を唱へたることあり。中村正直は幕府の末造より英國に在りて其文明を觀察し、而して其文明の根本に宗教あることを看取し、歸來憚る所なく基督教に同情を表し、明治五年『攘奏西人某上書』なる一文を草して、基督教を公許するのみならず、之を奬勵すべしとの事を論じたりき。此の如き有樣なりしかば洋學の流行なるものも亦頗る盛にして、各所に洋學校設立せらるゝもの少からず。慶應義塾、同人社の如きは、當時私人の手に依りて建てられたる洋學塾の中最も盛大なる者なりしが、此外各所に洋學指南所の看板を掲げ未熟の英語を教へ、以て衣食の資を得たりし者甚だ少からず。當時福澤諭吉、中村正直、森有禮、西周等の人々は明六社なるものを組織し、盛に歐化主義を鼓吹したりしが、其中最も極端なる改革論者森有禮の如きは、普通教育に英語を用ゆべしとのことを論じたりき。亦以て當時に於ける進歩主義の人々が日本の舊物を賤みし、外國の文物を慕ひたりし有樣を想見すべし。素より此の如く西洋文明の思想にかぶれたるものは、日本人民の全體より見れば極めて小數にして、久しく德川時代の泰平無事に慣れたる一般の人民は、急激なる改革を喜ばず、竹橋騒旗を翻して新政府に抗したる例少からず。多數の國學者及び漢學者等は何れも洋學者の言論を以て國家を誤る者也となして之に抗したりしが、時代に必要なる智識と學問とは少數なる進歩主義者の專有する所にして、多數の守舊黨は如何にして當時に處すべきかを知らざりしかば、無念乍らも少數黨の爲す所に任せ、斯くの如くして當時の日本は洋學者流の舞臺となりたりき。

歴史の進歩は素より一直線に非ずして、一進一退常に波動的形狀をなすが故に、此十年の間にも亦保守的反動なきに非ず。明治九年の頃には既に歐化主義に對する反動起り、末戸、西郷の如きは政治上に於ける漸進論を唱へ、加藤弘之は民撰議院尚早論を唱へ、福澤諭吉さへ風俗保存論を唱へ、又外國傳道會此に依りて衣食せる基督教傳道者を嘲罵したりき。明治十年には西南の戰爭ありて、陰雲久しく天を鎖し、十一年には大久保利通の暗殺せらるゝ等のことありて、世は再び逆退せるが如き有樣なりしも、此は唯表面の潮流にして、進歩の機運は斯る中にも止まざりし也。

（二）政府と基督教　新政府は既に德川幕府を倒し、開國主義を採用し、舊來の陋習を破り、智識を世界に求むべしとの旨を宣言したれ共、尚其の命令に服せざる者の出で來らんことを恐れ、政府は神聖ならしめんがため神道を採用して國教となし、基督教に向ては依然德川幕府の政策を踏襲し、去政官の名を以て『切支丹邪宗門の儀は堅く御制禁たり若し不審なる者有之ば其筋の役所へ申出べし御ほうび下さるべく事』との高札を全國各地に立てしめたり。而して浦上及び長崎に於て天主教徒の殘存せる者の發見せらるゝや、政府は先づ大村藩士浦上村及び長崎

に遣はして信徒を捕縛し、厳命を藩にせしめ、尋で參與木戸準一郎を長崎に遣り、耶蘇教徒として逮捕したる士民三千七百餘人を諸藩に配附し、之を說諭して信仰を易へしめんとしたれ共、彼等は何れも刑を恐れず、一人も說諭に從ふものなかりしのみならず、佛國公使等の政府に對する抗議甚だ强烈なりしかば、耶蘇教退治に鋭意なりし新政府も止むを得ず方針を一變して教因を放免したり。是れ實に明治三年の事なりき。然れ共政府の基督教に對する迫害は之を以て全く止みたるには非ず、其後も依然として繼續し、獨り天主教徒、希臘教徒のみならず、プロテスタント教徒も亦同一の厄に遭遇したりき。即ち長崎に於てゲルベッキより洗禮を受けたる清水某と云へる無倡は、事顯はれて三年間投獄せられ、グリーンの日本語教師たりし市川榮之助は、單に聖書を所持したりしとの理由を以て獄に投ぜられ遂に牢死したりき。此の如き有様なりしかば、新教の宣教師も驚きて之を日本駐劄の公使に訴へ、公使は政府に忠告して其行爲を改めんことを求めたりしかども、政府は言を左右に託して容易に其請を容れざりき。然るに明治四年の末歐米回覽のため横濱を解纜せる岩倉大使一行が米國及び其他の諸國に至り、條約改正の談判を開始せんとするや、耶蘇教迫害の事を以て至る所輿論の痛擊に遇ひたりしかば、大使は留守の政府に電信を發して耶蘇教禁制の高札を撤去せしめたりき。是れ實に明治六年（一八七三）二月の事なりき。同年又政府は曆法を改正して太陽曆を採用し、明治九年（一八七六）三月一六の休日を廢し、日曜日を以て一般の休日と定めたりしが、基督教傳播の上には是亦少からざる便宜を與へたりき。

（三）新宣教師の渡來　明治維新の時迄は我國に宣教師を近れる傳道會社は米國監督、同長老、同ダッチ、レフォルムド、同浸禮の四派にして、右四派傳道會社派遣の宣教師は併せて十人に過ぎざりしが、明治二年（一八六九）に至りアメリカン、ボールドも亦日本傳道を企て、其十一月ダリーン（D.C. Greene）を最初の宣教師として送り來り、續てギュリック（O. H. Gulick）デビス（G. D. Davis）ベリー（J. C. Berry）の三人來着せり。明治六年に至り米國メソヂスト監督（美以）教會及び加那太メソヂスト教會も亦新に宣教師を送り來れり。即ち前者の最初の宣教師はマクレー（B. S. Maclay）デビソン（J. C. Davison）ハリス（M. C. Harris）ソーパル（J. Soper）の四人にして、後者の最初の宣教師はカッタラン（G. Cochran）マクドナルド（D. Macdonald）の二人なりしが、後ミーチャム（G. M. Meacham）イビー（C. S. Eby）の二人之に加はれり。同年英國傳道會社も亦シャウ（Archdeacon Shaw）を最初の宣教師として送り來り、翌七年蘇國の一致長老教會も亦三人の宣教師を送り來れり、而して此外に最初傳道したりし諸派も亦各々新宣教師を送り來りしかば、明治六年には日本在留宣教師の數は其妻を併せて五十七人となり、明治十一年には凡そ百人に達するに至れり。

（四）日本基督教の創立者　此の如く許多の宣教師は遥年到着したり。維新政府の基督教徒に對する態度は、初め强硬を示したりしと雖も、未だ幾ならざるに初心を翻へして緩和政策を取りたり。急物破壞新物輸入の精神は漸く民心を刺しつゝあり。此の如くして基督教が我日本に其基礎を据ゆるの時は徐々として近づきつゝありし也。米國ダッチ、レフォルムド派最初の宣教師の一人ブラウンは初め新潟に在りて官立學校の教師たり。後橫濱に來りても官立學校の教師たりしが、明治五年に至り自ら私立學校を起し、英語を授くるの傍ら聖書を教へたりしが、本多庸一、植村正久、押川方義、井深梶之助、熊野雄七等の人々は彼の門下に在りて、遂に基督教を信じ、後其一生を傳道の事業に委するに至りしが、本多庸一は『メソヂスト教會』に入り、今其監督たり。其他の人々は『日本基督教會』を創立し、今尚其主腦たり。又熊本藩士細川侯は明治三年藩校の時習館を閉ぢ、醫學校及び洋學校を建て、米國人カプチン、ジェーンス（Captain James）を聘して洋學校の教師となしたりしが、彼の門下に在りて道を信ずるに至りしもの亦三十餘名に上り、明治九年の初め花岡山に會し精神會の改革に從事すべきことを誓ひたりき。宮川經輝、海老名彈正、小崎弘道、横井時雄、金森通倫、浮田和民、市原盛宏等は即ち其重もなる人々にして、此等の人々は後新島襄の門に來り『日本組合教會』を創立し、其或る人々を除くの外今尚同教會の主腦として活動せり。米國マサチュセッツ農學校長クラーク（Clark）が開拓使長官黒田清隆の聘を受けて札幌農學校（今の東北農科大學の前身）に來り、青年篤陶の任に方りしは、明治九年にして、彼は留まること僅に一年に過ぎざりしが、彼の感化に依り、彼の去る時には五十人の生徒中十七人は基督信徒となりたりしといふ。其重なる人々は内村鑑三、新渡戸稲造、佐藤昌介、宮部金吾、廣井勇、岩崎行親、大島正健等にして、此等の人々は直接傳道の任に當らざりしと雖も、或は基督教主義を以て教育界に立ち、或は基督教文學を以て一世を教導する等我國の基督教に貢献したること少からず。ブラウン門下及びジェーンス門下の人々と共に日本基督教

の創立者と稱するを得べき也。

斯く内に在りて日本教會の創立者たるべき人物の養成せられつゝありし時に方り、海外に於て同じ使命を荷ふべく教育せられたりし二人の傳道者は歸り來れり。其一人は即ち新島襄にして、彼は元治元年國禁を犯し幾多の苦辛を經て米國に渡り、ボストンの藥商アルフィアス、ハーデーの眷顧を得て、アンドーヴァルの中學校より、アモスト大學に入り、更に進でアンドーヴァル神學校に學び、米國的基督教及び自由獨立の精神に深く感化せられ、日本教化の大任を自ら負ひて明治七年（一八七四）歸朝せり。彼は在米中岩倉大使一行の歐米遊覽に伴ひて、其東道の主人となり彼等のために多くの便宜を謀りたることありしかば、顧官の間に信用重く、政府も亦彼の爲す事には多くの便宜を與へたりしが故に、基督教はために大なる好影響を蒙りたりき。他の一人は澤山保羅にして、彼は初め宣教師グリーンに就て學び、明治五年米國に往きてエバンス大學に遊び、明治八年歸朝せり。彼は當時既に自給獨立傳道の必要を悟り、身自ら躬行實踐し、僅に七圓の月給に甘じ、終始外人の保護を受けざりき。不幸にして彼は肺を病み早世したりしと雖も、其業は長く日本の基督教會に留り、自給獨立の精神を鼓舞しつゝあり。

其外繁津尚明はジェームス、バラに就て英語を學び、明治三年洗禮を受けたりしが、彼亦精神界の革新を以て自ら任じ、而して獨立傳道の必要を悟り、其身海軍兵學寮の教授にてあり乍ら、東京麻布仲町の自邸に會堂を建設し、自ら牧師の職に當りしが、不幸中道にして斃れたり。田村直臣は米國長老派の宣教師カラゾルス（Carrothers）に就て學び、從米國に遊學せしが、最初より基督教のために盡したる處少からず。今尚基督教界の一重鎭たり。平岩愃保は初め開成學校に在り、後カラクランに就て學び、遂に身を傳道界に投じたる者にして、加那太メソヂスト教會の創立に與りて力あり、今尚『日本メソヂスト教會』の有力者として活動せり。松村介石は横濱に在りてジェームス、バラの門に學び、其洗禮を受けたるは明治十年にして、爾來基督教文學のために盡したる效少からず。今は『日本教會』を立てゝ其獨特の宗教を宣傳しつゝあり。

（五）教會及び學校の設立並に其他の事業　斯く日本青年の中には基督教を聞て之を信ずる者起りしかば、此等の人々は遂に相結びて教會を設立するに至れり。最初の教會は横濱の海岸教會にして、明治五年三月十日外國人居留地たる海岸に於て、十一名の會員に依りて創立せられたり。此年の一月横濱在留の外國人等相集りて初週祈禱會を開きたりしが、當時宣教師より英語を學びつゝありし數名の青年も之に倣ひて祈禱會を開きしが、次第に熱心を增すに從ひ、一週間を以て閉會すること能はず、尚之を繼續したりし結果遂に九名の青年の受洗を見るに至り、前に受洗したりし二名の青年と共に、三月十日を以て日本最初の教會を設立するに至れり。此教會は將來に於ける日本の基督教を支ふべき運命を有する人々を其會員名簿に有したりきゝ。即ち押川方義、熊野雄七の如きは其創立者たる十一人の中に在り、本多庸一は五月を以て入會し、井深梶之助、植村正久も亦此年を以て入會したりき。次に設立せられたるは東京新榮教會にして、明治六年九月廿日八名の會員を以て創立せられたり。之を東京に於ける最初の教會となす。次に設立せられたるは神戸教會にして、明治七年四月十九日十一名の青年の創立に係る。之を日本に於ける最初の組合教會となす。次で五月十四日七名の創立者を以て大阪に最初の教會創立せらる。是れ今の大阪組合教會也。之れより以後信徒の數漸く增加し、東京、横濱、大阪、京都、兵庫、仙臺、弘前、結館、靜岡、甲府等の各地に諸派の教會所次設立せらるゝに至れり。各派の信徒が相集りて初めて東京に親睦會を開きたりしは、明治十一年七月にして、此親睦會は後の福音同盟會の濫觴となりたるものなるが、此時會する者六百人ありしといふ。以て當時基督教が漸く我國に其地歩を占めつゝありしを知るべし。

最初の基督教主義の學校といふべきは、明治二年カラゾルスが東京に於て開きたるものにして、田村直臣が此學校の出身なりしとのことは前既に之を云へり。然れ共此學校は中途にして閉校せり。永續して今日に至れるものゝ中最も古きは京都の同志社にして、此同志社は新島襄が歸朝に先ち、アメリカン、ボールドの年會に臨み、日本に基督教主義學校設立の必要を述べ、凡そ六千弗の寄附金を得たるより、歸朝後山本覺馬の助を得て、明治八年十一月廿九日宣教師デビスと共に八名の學生を教授したるに初まり、當時未だ校舍なく且一定の課目もなかりしが、翌年九月十八日を以て漸く最初の學舍建築せられて其落成式を擧行し、又之と同時に熊本洋學校に於てジェーンスの教育を受けたる學生三十餘名入學することゝなり、初めて學校の實を備ふるに至れり。明治十年東京築地に於て一致神學校創立せらる。是れ今の明治學院の前身也。翌十一年耕教學舍なるもの又築地に創立せらる。是れ後に横濱に設立せられたる傳道學校と合併して、今の青山學院となれる者也。此外女學校のことを云へば、横濱共立女學校は明治四

年に創立せられて、翌五年に今の名稱となり、フェーリス女學校は明治三年に創立せられて、同八年に今の名稱となり、神戸女學院は明治七年の創立に係れり。以上は當時に於ける基督教主義の學校にして、此等の諸學校が間接に我國の青年男女に基督教の精神を鼓吹したりし効力は毫も直接傳道に讓らず。

當時の基督教文學は殆ど言ふに足るべきものなし。最初出版せられたる小冊子はヘッボンの著作にして、此外にヨングマン夫人の『神の大なる愛』は明治六年に出版せられ、デビスの作れる『近路』と題せる小冊子も同年に出版せられたり。基督教主義新聞の最初のものは『七一雜報』と題する者にして、明治八年十二月廿九日ギュリックの盡力に依り神戸に於て其初號を發刊したり。是れ今の『基督教世界』の前身と見るべきもの也。『寡の書』の初めて發刊せられたるは、明治十年にして、今尚繼續せり。聖書の初めて邦語に飜譯せられたるは、明治四年ゴブルの出版せる馬太傳にして、次で明治五年ヘッボン譯の馬可傳及び約翰傳出版せらる。同年九月廿日横濱に集會せる十四名の宣教師は新約聖書飜譯の事を決議し、委員を擧げて、明治七年三月廿五日を以て之に着手し、此第一期の終り即ち明治十一年迄に四福音書、使徒行傳、羅馬書、哥林多前後書、加拉太書、希伯來書、及び約翰の書翰を完成せり（『日本譯聖書』の條を見よ）。讃美歌は一首としては早くより飜譯せられたるものありしが、一冊として出版せられたるは明治六年ルミスが横濱に於て十六の歌を集めて出版したるものを嚆矢となす。明治七年には數種のもの出版せられしが、其中ベリーが三十九の歌を集めて新讃美歌と題し出版したるものを最も優れりとなす。明治十一年までは未だ譜付の讃美歌集はなかりき。

（六）當時の信仰　基督教は此の如く徐々として其根を下しつゝあり。新奇を好める青年は相率ゐて宣教師の門を訪ひ、遂に其捕ふる所となりて自ら信徒となるのみならず、又自ら傳道者となりて其同胞を其道に入れんと努むる者さへ生ずるに至れり。去れば此新信仰の活動に對して掛念に堪えず、其妄を辨じて之を駁逗せんとする者を生じたりしは怪むに足らず。其中最も有名なるものゝ碩儒安井息軒となす。彼は明治六年五月『辨妄』五篇を著して基督教と戰はんとせり。當時に於て保守黨の代表者とも云ふべき島津久光は之に序して、耶蘇教が西洋の文明と共に入り來るは國家の大患也と云へり。是れ當時に於ける基督教反對家一般の思想にして、息軒も亦基督教と共和政治とを混同し『耶蘇已まずんば陷て無君無父の人となる』抔と云ひたれ共、概して論ずるに彼は感情に依りて議論を行りたる者に非ず、先づ自ら聖書を讀み、更に基督教に關する數種の著述を讀み、或は程度迄之を咀嚼して後毀撃を加へたるものにして、其聖書批評の使命に至ては寧ろ敬服すべきものなきに非ず。教會外の青年の中には、此書のために動されて新信仰を輕侮し、其門に近づくことを止めたるものも少からざりしなるべし、と雖も、既に西洋日新の文明に醉ひ、氣湯の如く新宗教を悦惚し、之を信じたりし青年は此の如き一老儒の議論に傾聽すべくもあらざりき。若し聖書批評の使命よりせば、當時新信仰を抱きたりし青年は到底息軒の敵に非ざりしなるべし。然れ共彼等が基督教を信じたりしは、基督教の教義を以て悉く合理的也と信じたりしためには非ず。當時設かれたりし教義は今日より見れば頗る粗雜なるものにして、彼等の學び得たりし神學は天道淵源の神學に過ぎざりしかども、彼等は之を以て日本に現存する凡ての誓き信仰に優れる信仰也と信じ、又其以上を望まず。當時彼等を教へたりし宣教師も亦實際の方面に重を置き、躬行實踐以て彼等を導きたりしかば、彼等は寧ろ之に感激したりき。且彼等の從來受けたりし教育は所謂修身齊家治國平天下の教にして、學問の要は畢竟救世濟民に在りと信じたりしかば、彼等が基督教を受くるや之を以て天下を救はんとし、自ら精神界の革新家を以て任じたりし也。左れば當時青年の意氣は頗る壯なるものにして、明治九年二月花岡山に於て誓約を結びたる熊本隊青年の中には、其母の之を諫めて自刎せんとするものあり、其父の之を怒りて斬らんとするものありて、事壓甚だ容易ならざるものありしに拘はらず、毅然として屈せず遂に其志を遂げたりき。此の如く當時青年の信仰は神學に非ず、教義に非ず、寧ろ精神、意氣にして、彼等は我國精神界の革新は基督教に依るに非ずんば成し遂ぐ可らずと信じ、而して身を以て革新の事業に任じたりしも也。

第三期　發展の時代　明治十二年より十八年に至る（一八七九—一八八五）。

（一）四種の思想　西南戰爭の終ると共に、世は政論哲學の時代となり、四種の思想は數年の間に新陳交代して日本の思想界に入り來れり。其第一種の思想は所謂民主々義にして、沼間守一、大井憲太郎、中江篤介、松田正久等の如き佛國學者に依りて代表せられ、先づ權利てふ思想を鼓吹するに努めたり。彼等の思想は甚だ單純にして、其所論、社會は民約に成り、主權は國民に存し、法律は衆庶の好惡に成

るといふに在りき。去れど新に政論に覺醒したる人民に取りては、其議論の單純なるは理解せられ易き所以にして、彼等の政治學を代表したる自由黨が旭日天に昇るの勢を以て進み來りしものは、斯る單純なる權利論を其旗幟となしたれば也。然れ共泰西の新學問をなしたる人々の中には、斯る權利論に滿足すること能はざりし者あり。即ち英國の經驗派、功利派を代表したる慶應義塾一派及び之と臭味を同うする者にして、彼等はヒウム。バックル。ミル。ベンザム。ギッボンなどにし、科學に於ては實驗、政治に於ては功利、宗教に於ては懐疑の精神を鼓吹したりき。此派の當時に於ける勢力は頗る盛大にして、其主義を率するものは朝野に盛りたりしが、政府が分明保守主義を取るに至りて、政府と人民とは漸く相分れ、小野梓、矢野文雄、島田三郎等は遂に明治十四年十月に至り大隈重信と共に官海を去り、星間の志士と和結びて改進黨を組織したり。而して政府は此時明治廿三年を以て國會を開設すべしとのことを約し、翌十五年に至り憲法取調のため伊藤博文を歐洲に遣はせり。是より政府と人民とは兩々相對して相爭ひ、政論頗る囂々たるものありき。

此の如く政府は既に進歩主義者と絶ち、保守主義を標榜して立てり。權利自由の議論と實利實益の學問とに不滿足なりし人心が、於此政府に結び付きて保守的反動の大勢を捲き起すに至りしは自然の勢にして、明治十五六年の頃政府を中心として起りし耶蘇仁義說なるものは、即ち此の如くして起りたる第三種の思想也。我國民は開國以來泰西の物質的文明に醉ひ之を輸入するに急にして、ために其精神的文明の方面をば全く閑却したりしことなれば、人心日に益々放蕩に流れ亂雜に赴き、又割說なるものなきが如き狀態に至りしかば、斯る反動の起りたるも自然の勢にして、單に懐古懷舊の情に勵まされたるのみには非ざりし也。

然れ共當時日本の思想界は無政府、無統一の狀態に在りき。去れば斯く一方に於て忠孝仁義說の復興したりしと同時に、スペンセルの不可議論とダルウィンの進化論とは、東京大學の教授に依りて國民に紹介せられたり。是れ當時に行はれたる第四種の思想と見るべき者にしてスペンセルの哲學は外山正一之を唱道し、人祖論はモールス之を唱へ、加藤弘之は其嘗て唱へたりし天賦人權論を放棄し『人權新說』なる一書を著はして、先天的に人權存在せりとの說を否定し、所謂權利なる者は强者が便宜のために設けたるに過ぎずとの事を主張したり。是れ明治十四五年の頃にして、此等の議論は何れも當時教育を受けたる青年の間に大なる影響を及ぼしたりき。

（二）基督教徒の奮鬪　此時に方りて基督教徒は此等の思想の間に介在して種々なる經驗を歷たりき。今先づ當時に於ける基督教の勢力を云はんに、日本に於ける傳道の多望なる事漸く世界に明となるに及び、米國に在る各派の傳道會社は競ふて日本傳道を企て、既に傳道を開始せる諸派が其宣教師を增加したりしのみならず、明治十二年には組合派新に來り、翌十三年には日耳曼レッフォルムド。メソヂスト。プロテスタント（英普）及びフレンド（友會）の三派新に來り、十六年にはデサイプル派（基督教會）新に來り、同年四月大阪に於て各派宣教師會を開きし時には、十六派六會社を代表せる宣教師百六名之に出席したりき。斯る勢なりしかば信徒の增加も頗る遂にして、前期の末（明治十一年）には教會四十四箇信徒一千六百十七人に過ぎざりしが、明治十五年には教會九十三箇、信徒四千三百六十七人に達し、漸々五年の間に會員の數に於て凡そ三倍の增加を示し、基督教は漸く世人の注目する處となるに至れり。當時の民權論者に素より基督教と何等の關係を有する者に非ざりしが、基督教と民權論と共に泰西の產物なると、基督教會の有力者中には新島襄の如き自由の空氣を呼吸し、民主主義の信者たる者ありしことより、基督教徒は自然民權論者と相近くに至り、自由黨の首領板垣退助は明治十五年三月甲府に於て、神儒佛の三教を以て國家の進運を阻害する者也となし、基督教に同情を寄するの意を公言し、同十七年には牧師横井時雄を招きて基督教の講義を聽きたりき。此の如く當時に於ける權利論の代表者たりし自由黨の或部分は、基督教に向て一臂の聲援を與へたりしが、之がため基督教徒は屢々民主論者と同一視せられ、保守黨の反對を蒙り、政府又陰に基督教を迫害したりき。然れ共當時の基督教徒が理論上正面の敵として戰ひたりしは、慶應義塾一派の代表せる經驗派、功利派、懐疑派及び大學派の代表せる不可議論及び進化說にして、當時に於ける基督教の勢力は之を慶應義塾派若くは大學派に比すれば素より微弱にして言ふに足らざりしと雖も、彼等は健氣にも此等の强敵と戰ひて敢て屈せざりき。當時此戰鬪の機關として用ゐられたりしは『六合雜誌』にして、此雜誌は當時設立したりし東京青年會の機關として明治十四年十月其初號を發行し、小崎弘道、植村正久、高橋五郎等主として筆を執り、破邪顯正の議論を行り、其意氣頗る壯なるものありき。明治十六年一月より四月に至る四箇月間毎土曜日明治會堂に於て、英語及び邦語を以てなしたる『東京演說』は主として大學派に向てなしたる者にして、加藤太メソ

ヂスト派の宣教師シー、エス、イビー實に之が發起者にして又其主なる歸士なりき。英國公使パークス及び米國公使デキソムは此舉を贊し、毎回出席して交互司會し簡短なる紹介の辭を述べ、イビーの外東京大學教授イウイング及び工部大學教授デキソンも亦辯士に加はり、科學的に基督教を說明し、スペンセルの不可議論を駁し、基督教と進化說との關係を論じたりしが、此演說は當時の思想界に深大なる影響を與へ、教育ある人々の基督教に對する態度を一變せしめたりき。

（三）リバイバル　斯く基督教は外部に於て傳道の曙線擴大しつゝありしと共に、教會の內部に於ても亦信仰大に振ひ起りたりき。明治十六年横濱に於て開かれたる初週祈禱會は頗る活氣に滿ち、一週間を以て滿足すること能はず、二週三週四週相續きて開かれ活氣益々盛なりしが、此息龍は先づ東京に波及し、東京英和學校（青山學院の前身）海岸女學校（青山女學院の前身）等の生徒にして、悔悟めて道を信ずるもの頗る多く、轉で府下各派の教會に波及し、更に上州安中及び神戸、大阪等の諸教會に及び、一時に多くの信徒起りたりしが、同年五月東京に開かれたる大親睦會に於て又一大リバイバル起り、其壓絶桑式に列席したる四五百の會衆一人として感涙に咽ばざる者なく、一同十年を出でずして我國を基督教化すべしとの希望を以て散會したりしが、此恩化は全國の教會に波及して其傳道に活氣を與へ、毎日曜日悔改めて教會に加はるもの至る所に起りたりき。翌十七年一月京都同志社生徒の間に祈禱の精神盛に起りたりしが、三月十七日夜同社內に開きたる祈禱會に於て一大リバイバル起り、同夜は祈禱を續けて眠らざるもの多く、是迄冷淡なりし者は涙を流して其罪を悔ひ、久しく教を聽きて信仰を起さざりし者は茲に至りて決心して道に入り、凡そ二百名の生徒暴て信仰を起すの有樣となり、其感動の激烈なる、甚しきに至ては精神の錯亂を來せる者三四人を生ずるに至りたりき。而して此リバイバルは大阪、神戸、中國、及び四國に波及し、更に進で上州及び仙臺地方に及び、諸教會は大なる興奮を蒙り、信徒に驚くべき刺合を以て增加したりき。斯く明治十六、七の二年は全國にリバイバルの起りし時にして、十八年にはリバイバルの如き顯著なる出來事なかりしと雖も、教會の進歩は頗る迅速にして、一年間の受洗者は殆々會員の二割五分乃至三割に達し、十八年の終に至りては教會百六十八箇、信徒一萬一千人を數ふるに至れり。而して暫に憲法取調のため歐洲に遣はされたる伊藤博文は此年を以て歸朝し、外務大臣井上馨と共に條約改正の必要上頻りに歐洲主義を鼓吹せり。福澤諭吉は明治十四年其著はしたる『時事小言』に於て基督教に言及し、其傳播は我國々權の擴張を現書すべしと論ぜたりしが、明治十七年に至りては全く其說を變じ、之を受け入るゝは國家のため必要也とのことを『時事新報』紙上に公言するに至れり。斯く朝野の議論態度は漸く基督教を導きて順境に赴かしめつゝありき。

（四）學校及び文學　同志社を初め基督教主義の學校は、此時期に入りて次第に其設備を整頓し、精神的戰鬪に從事すべき勇士の教養に勉めつゝありき。又此時期に入りて新に起れる學校あり。加那太メソヂスト派に屬する東洋英和學校及び東洋英和女學校の如きは即ち是也。當時政府の學校は尙未だ今日の如く機關全からず、殊に英語の一點に至ては基督教主義の學校に一着を輸したりしが故に、上流の子女にして此等の學校に來り學ぶもの頗る多く、間接に基督教の傳道に與へたりし影響は甚だ少からざりき。

明治七年を以て繙譯に着手したりし新約全書は、十三年四月を以て完成し、一册の書となりて出版せられたり。舊約全書繙譯の事に十一年を以て宣教師會の決議する所となり、聞來委員の手に依りて翻譯修正せられつゝあり、而して其或るものは單行本として出版せられたりき。植村正久の『眞理一斑』は十七年十月出版せられ、基督教の眞理を闡明したる功頗る大也。小崎弘道の『政教新論』山崎爲穆の『天地大原問論』も亦此頃出版せられ、我國人を基督教に導きたること幾何なるを知らず。共に當時に於ける好著作なりき。

第四期　顯著時代　明治十九年より廿三年に至る（一八八六—一八九〇）。

（一）歐化主義の勃興　條約改正の問題は久しく我政治家の頭腦を惱ましたりしが、政府は此問題を圓滑に解決せんために、泰西の法律に則りて我法律を制定し、外國語の教育を奬勵し、內外人の交際を盛にし、日本人をして能ふべくんば其皮膚を泰西人たらしめんとするに至れり。所謂歐化主義なる一種の傾向は此の如くして生じたる者にして、政府以外の人士と雖も始めより深く泰西に心醉する者ありて、此潮流に乘じ、盛に日本を泰西化せざる可らずと唱へたりき。此の如き傾向は當時凡ての現象に於て見ることを得たりし處にして、例之鹿鳴館、演劇改良會等を初めとして諸種の改良論唱へられ、殊に甚しきに至ては人種改良のため泰西人と雜婚すべしとのことを唱ふる者ありしが如き、亦以て當時思潮の赴く處を察すべき也。此の如き風潮が洋學の流行を

來し、之と共に男女基督教主義學校の生徒を多くし、從て基督教の勢力を增加したりしほ怯しむに足らず。日本に於けるスペンセル學者にして、從來基督教に對し皮肉の批評を試みたりし外山正一すらも『社會改良と基督教』なる一小册子を著はして、基督教に依るに非ずんば社會改良の事は望む可らずと論ずるに至り、外務大臣井上馨は自己の案に成れる條約改正を遂行せんため、屢々禮を厚くして宣教師及び牧師の有力者を其邸に迎へ、又其部下を教會に出入せしめ、以て竊に基督教徒の歡心を求むるに至りたりき。既にして餘りに交誼に過ぎたりし井上案は失敗し、其故らに現出せしめんとしたりし假裝の歐化政策は冷笑の下に葬られたりしが、此間に奏成せられたる泰西的の學問と趣味とに至りては、此政策の失敗したりしがために遽に衰へざりき。新日本を建設し、之に第十九世紀文明の洗禮を授くべしとは當時尙識者の唱へたりし處にして、此頃德富猪一郎の創刊せる『國民之友』（明治廿年二月初號發刊）及び巖本善治の主幹せる『女學雜誌』の如きものが、多數の讀者を有したりし一事は、以て歐化主義の尙頗る盛なるものありしを證して餘りありし也。

（二）基督教の盛運　世は實に此の如き有樣にして、泰西のものとあれば其何物たるか問はず世人擧て之を尊重し之を歡迎したりしかば、基督教は宛も順風に帆を揚げて駛るが如き勢を以て進歩したりき。而して政府は明治廿二年二月十一日を以て發布したる憲法に於て、信教自由を宣言したりしかば、基督教は事實に於ても名目に於ても最早日蔭者に非ずして、公然闊歩するの自由を得たりき。斯る有樣なりしかば基督教會に出入し其說教を聽聞し洗禮を受くる者頗る多く、統計表の示す處に依れば、明治十九年に教會百九十三箇信徒一萬三千人なりしものが、明治廿三年には教會三百箇信徒三萬四千人にして、此間の受洗者は一年平均五千人以上に上れり。當時の基督教徒の中に、日本は期年ならずして基督教國となるべしと思惟する者少からざりしも亦宜也といふべし。基督教主義諸學校の隆盛を極めたりしも此時期にして、何れの學校も生徒を以て充滿し、校舍の狹隘を感じたりき。此時に方り新島襄の同志社大學設立の運動は始まれり。彼は基督教主義に依りて立てられたる大學の必要を感じ、之が資金を得んがため、明治十八年を以て再び第二の故郷たる米國に渡航し、到る所の慈善家に誘へて義捐を求め、其歸國するや明治廿一年同志社大學設立趣意書を世に公にし、奔走盡力怠らざる處なかりき。彼は不幸にして中道に斃れたりしが以て其事業の結果思はしからざりしと雖も、當時彼の名は朝野に喧傳せられ、彼のために其事業の費を供したるもの甚だ少からざりき。

（三）教會の衰兆　基督教は此の如く歐化主義の潮流に乘じて一時隆盛を極めたれ共、斯る風潮は素より永續すべき者に非ず。されば此順潮時代に於て教會は既に接來るべき逆潮時代の兆候を有したりしも。然り、我教會は同志社大學運動の前後よりして、既に其進歩に一頓挫を來せる傾向を有したりき。其傾向とは外部に於て保守的反動の勢漸く萌しつゝありしこと、內部に於て內部の紛爭を來せる傾向を有したりしこと是也。今前者に就て之を云はんに、先づ第一に注目すべきは當時政府の官吏及び大學教授間に獨逸思想の入り來ると共に所謂國家主義なるものを唱ふる者漸く多きを加へつゝありし事是也。明治十八年伊藤內閣の成立するに當り文部大臣となりたる森有禮は、其壯年時代に於ける極端なる自由主義に反比例したる極端なる國家主義を持し、之を其教育の方針に應用し、國民教育の目的は國家のために忠良なる臣民を作るに在りとなし、身を以て來るべき保守的反動を豫報したりしが、彼の組織者も亦其方針を嗣ぎ、明治廿三年十月には夫の有名なる教育勅語の發布を見るに至りたりき。岡野保存論が歐化主義に反動して唱道せられたりしは明治廿一年の頃にして、當時三宅雄次郎、志賀重昂等に依りて創刊せられたる雜誌『日本人』は尙來だ『國民之友』程の勢力を有せざりしが、保守主義の人々には大に歡迎せられ、漸次讀者を增加しつゝありしも也。其他佛教徒が『奉王奉佛大同團』なる者を組織して基督教に反對し、又米國神智學會長オルコットの來朝を機とし、之を搖ぎて基督教徒に當りたりしが如き、何れも基督教の逆潮時代を豫報する者に非ざるはなかりき。

而して基督教は又此時期に於て早く既に神學的紛爭の種子を蒔きつゝありき。前既に云へるが如く日本に於ける最初の傳道者は、天道獨源の神學を以て滿足したりしが故に、彼等の神學の知識は極めて幼稚なるものなりしが、明治十七八年頃より教會の讀書家中には漸く神學上の問題に注意する者を生じ、爰に基督教義の根拠を動搖せしむべき新知識に對する摸索は初まりたり。之に次で矢野文雄は報知新聞紙上に於て、ユニテリアン教義の日本に採用すべき者なることを唱へたりしが、明治廿年には獨逸新神學の流を汲める若及福音教會の宣教師スピンネル（William Spinner）及び米國ユニテリアン派の宣教師ナップ（A. M. Knapp）相前後して來り、翌廿二年にはユニヴァルサリスト派の宣教師ベリン（Geo.

F. Verin）亦來り、普及福音派は雜誌『眞理』を發行し、ユニテリアン派は雜誌『ゆにてりあん』（優尼宗教）を機關とし、前者は聖書の高等批評の達したる結果に基きて敏密なる神學を說き、後者は銳利なる筆鋒を以て三位一體說、基督論等に關する正統派の所論を攻擊したりしかば、從來正統說の外神學に就ては多く知らざりし日本の傳道者は、此等の有力にして且根本的なる論難に對して狼狽せざるを得ざりき。而して此新主義の渡來と前後し、所謂正統教會內に在りても、新神學の聲漸く高まり、小崎弘道は明治廿二年七月發行の『六合雜誌』に於て、聖書のインスピレーションを論じ、歷史科學の方面に於ては聖書記者にも亦誤謬ありとの說を主張し、斯くして漸く神學的紛爭の源を作りつゝありしが、明治廿一年に起りたる組合、一致二派合同の議は種々の事情に依り廿三年に至りて全く破れ、日本に於ける二大教會は愛に隔離を生じ、傳道の意氣漸く振はず、教會の衰兆愈々明にして、此處に基督教は其逆潮時代を迎ふるに至れり。

第五期　逆潮時代　明治廿四年より三十三年に至る（一八九一—一九〇〇）。

（一）保守的反動　久しく世界主義、自由主義の一方に傾きたりし所謂歐化主義なる者に反動して、國家主義、國粹保存主義が、歐化主義の尙盛なりし時代に於て既に漸く其頭を擡げつゝありしとの次第は既に之を說きたり。今や此の他の一方に傾きたる思想は、洪水決潰の勢を以て奔騰激駛せり。而して不幸にして先づ此保守的反動の犧牲に供せられたりしは熱心なる基督教徒にして正直なる愛國者內村鑑三なりき。彼は第一高等學校の教師として、明治廿三年の天長節に於て教育勅語を宗教的に云ふ所の意義に於て禮拜するは其心の謬誤なる所也と云ひたりにて、世間より不敬漢也と目せられ、教育界より放逐せられたり。久しく猜疑の眼を以て基督教徒を見つゝありし世間は、彼の此一擧に依りて基督教徒に蒙らしむるに不良、非愛國の惡名を以てして之を唾罵するに至れり。次で明治廿五年の一月に至りて熊本英學校長就任式を擧行するに方り、教員奧村禎次郎なる者博愛主義を說き、眼中國家なしと云ひたりとて、保守主義の人々より盛に非難せられ、熊本縣知事松平正直は遂に學校に向て奧村の解雇を命ずるに至りたりき。於是基督教徒に對する國民の激昂は强烈を極め、必予之を日本國內より一掃せずんば止まざるの勢を示せり。去れば佛教徒は其勁敵を仆すは此時也となして、許多の事實を捏造してあらゆる惡名を基督教徒に蒙らしめたりしが『日本』新聞及び其他保守主義の新聞雜誌も亦競ふて基督教徒に不利なる記事を揭げて之を罵りたりき。而して此の如き時代の精神は遂に明治廿六年に至りて博士井上哲次郎が公表したる『宗教と教育の衝突』なる論文に於て最も明白に實現したり。彼の論點は要するに、我國の教育主義は明治廿三年の教育勅語を以て其礎とせざる可らず、教育勅語は國家主義也、忠孝主義也、基督教は世界主義にして愛に差等なしと說くが故に國家主義に非ず、君父の上に天父あり基督ありと說くが故に忠孝主義に反す、故に基督教と教育とは衝突すと云ふに過ぎず。彼の基督教に關する知識は極めて不完全にして、四福音書中の顯著なる事實さへ知らず、故に其論ずる所巷に當るものなく、且內村事件及び其他に關して引用せる記事は、基督教に對して當に激烈なる憎惡の念を有したりし佛教の機關雜誌及び極めて頑固なる保守主義の新聞雜誌に記載せられたる者にして、此等のものを材料として、其議論を行りたることなれば、素より學者の公平と冷靜とを缺きたりしかども、彼が大學教授たり、文學博士たる名譽は、國民的反動思想の潮流に結び付きて、教育家の大部分をして此論文を以て金科玉條の如く思惟せしめ、盛に反基督教の感情を燃やさしめたりき。於是學校內の基督教迫害は初まり、其生徒は教會及び日曜學校に出入するを禁ぜられ、其教師は自ら公然基督教徒たるを自狀することを能はざるに至れり。

井上博士の此論文に對して基督教徒は素より默して止まざりき。即ち横井時雄、植村正久、大西祝、久津見息忠、丸山通一、石川喜三郎、前田長太等は筆を揮ひて基督教の辯護に努めたりしが、就中最も異彩を放ちしは高橋五郎の辯駁也とす。彼は『倚哲學論』なる一編を『國民之友』紙上に揭げて井上博士の所論を最も痛快に批判したりしかども、教育界の輿論は全く井上博士に贊し、結局基督教は教育勅語の主意に反する者也といふに歸着し、此觀念は久しく教育家の思想を支配したりき。

斯くして明治廿七八年の日淸戰爭となり、基督教徒は同志會なる者を組織し、內に在ては來公の道を說きて國民を教へ、外に在ては慰問使を派して出征軍人を慰撫奬勵する等のことをなしたりしが、此戰爭は國民的自覺を生じ、戰後國民思想を鞏固にするものは國家主義に依るの外なしとの信念起り、其結果明治廿年井上哲次郎、高山林次郎、木村鷹太郎等『日本主義』なる者を唱へ、一切の宗教を排斥するに至りしかば、此戰爭は基督教には何等の好影響を與へざりき。

（二）信仰の動搖　基督教の尙順潮時代に在りし時

に於て、既に基督教義の根柢を動搖せしむべき新知識の摸索初まりたりとの次第は既に之を述べたり。而して此傾向は此時代に入りて其絶頂に達し、教會の信仰は遂に根柢より動搖せり。而して先づ之が端を開きたりしは、明治廿四年六月を以て出版せられたる金森通倫の『日本現今の基督教並に將來の基督教』と題する書にして、此書は百四五十頁の小册子に過ぎざりしが、最も大膽明白に高等批評派の主張を是認し、日本將來の基督教は歴史的研究の到達したる結果に基かざる可らずとの論ぜり。彼は後又フライデルの『宗教哲學』を譯し『自由神學』と題して之を出版したりしが、此書が亦幼稚なる我教會の信仰を動搖せしめたりしことは疑ふ可らず。少壯なる傳道者の中には、此書を讀みて從來の信仰に疑惑を抱き、遂に之がため其職を抛つに至りし者さへありき。增野悦興は明治廿七年米國より歸朝し『基督教革新會』なる者を起し『教理講話』なる小册子を出し、新神學の旗幟を立てゝ盛に正統説を攻擊したりしが、更に深大の印象を與へたりしは、同年出版せられたる横井時雄の『我邦の基督教問題』と題する一書なりき。彼は之れより先き『六合雜誌』の主筆として、既に久しく新神學に同情を表し來りしが、此書に於て彼は最も大膽に、舊神學の破壞せざる可らざる事、新神學の建設せざる可らざる事、教會の基督教を説かずして基督の基督教を説くべき事、萬物の絶對的大原因は不可知的なる事、神は萬物に顯現す、而して基督は神の顯現なる事、吾人々類は倫理的理想を發揚實現すべき任務を有す、此任務は人類に取りて最も確實最も高尚なる者にして、吾人の神を信ずるは人類としての道心の要求に基くものなる事等を論じたりき。彼の所謂新神學は此の如く人類的倫理的見地及び之に基ける所謂有神論的要素と、不可知論的要素と凡神論的要素との相交れる者にして、其所論稍や明白を缺きたる處ありしと雖も、當時最も進歩せる説を代表せる者として歓迎せられたりき。而して當時更に明白なる頭腦と鋭利なる論鋒とを以て進歩派に氣焔を添へたりしは、大西祝にして、彼は一方に於て頑固狹隘なる當時の學者教育者に反對して基督教を擁護したりしと共に、他方に於て盛に傳説的基督教を攻撃し、自由討究の精神を鼓吹したりき。當時正統派の機關として起りたり『六合雜誌』が全く進歩派の手に落ち、遂に轉じてユニテリアン派の機關となるに至りしは、實に彼が主筆たりし時代のことなりき。

斯く當時我教會には泰西思想の影響を受けて起りたりし新神學説盛に行はれたりしが、之と共に之とは類る其趣を異にせる種々の傾向を有する思想も亦盛に行はれたりき。即ち海老名彈正は天御中主神を以て舊約のエホバと同一也と説き、東湖の所謂正氣を以て基督の教へたる聖靈と同一視し、大靈女命は日本民族の理想也と云ひ、基督教は日本魂を進化せしむる生命也と喝破したりしが、斯くして彼の説きたりし基督教は神道的基督教の名を得たりき。松村介石は東京青年會館の講師として、一部青年の間に勢力を有したりしが、彼の説く所は傳説に近しとて儒教的基督教の名を得、巖本善治、戸川安宅等の説く所には禪的臭味ありとて佛教的基督教の名を與へられたりき。此の如き有樣にて所謂正統説と稱する者は、此等の人々に依りて詛測せられたりしが、當時舊信仰の旗幟を立てゝ正統派のために能く戰ひし者は、植村正久、内村鑑三、山路彌吉等の數人に過ぎず。其他の人々に至ては所謂先輩と稱する人々まへも多くは神學問題に觸るゝことを避け、其態度の頗る明白ならざる者ありしかど、一般の傳道者は何れに適歸すべきやを知らず、ために傳道の活力と勇氣とを失ひたりしのみならず、基督教に於ける信仰其者までをも失ひて傳道界を去りし者も少からず。教役者既に此の如くなりしかば、一般信徒の中にも其信仰冷却して教會を離るゝものを生ずるに至りしも亦怪しむに足らず。

（三）獨立問題　此時に方り更に教勢の不振を來す一原因となりしは、外國宣教師と我國教會との間に感情の衝突を來したりし事是也。從來宣教師は我國教會の監督者たるが如き位置に在り、其財政を補助すると共に、信仰及び思想をも監督するの有樣なりしが、我國教會の漸次發達し、且國民的自覺の生長するに從ひ、思想及び財政上の獨立を得んため外國傳道會社の羈絆を脱せんと欲する者を生じたりしに、外國宣教師は日本教會の實力尚甚だ微弱なるを見て其前途を氣遣ひ、之を寧ばざるが如き有樣ありしより、自然宣教師に對し激烈なる言論を弄するものあり。横井時雄が『六合雜誌』に宣教師論を掲げたりしは實に此頃の事なりき。去れば宣教師の方面に於ても亦日本信徒の爲す所を見て疑惧、反抗の態度を以て之に當りたりしは、勢止むを得ざることなりしなるべしと雖も、斯くして双方の間に感情を生じたりしは傳道上頗る遺憾のことなりき。斯くして此時代には所謂同志社問題なる者起り、外國宣教師も日本教會と共に不愉快の經驗を嘗めたりき。押川方義は日耳曼レフォルムド教會の宣教師と共に東北學院を經營し來りしが、遂に苦悶の末傳道界を去て身を實業界に投ずるに至りたりき。

（四）實業熱の勃興　保守的反動、信仰の動搖、外

國宗教師との衝突は、右云へる如く此時代に於ける教會の不振を來せる原因を爲せしこと疑なしと雖も、此外に尚教會を逆潮の中に押し流したりし一大原因あり。實業熱の勃興是也。我本國民の富と生活とは維新以來驚くべき長足の進歩を爲し來りしが、日清戦役の結果實業熱勃興し、實業界は多くの人物を要したりしが故に、比較的多額の報酬を與へて人才を其圏内に吸收せざる能はざりき。昔者政治に志を得ざる者は文學に走り、文學に志なきものは身を宗教界に投じたりしを以て、宗教界は高材逸足の士を集め得たりしが、今や時勢は一變し、實業界は其廣き範圍に於て多くの人才を要するに至れり。基督教界に在りて其教師たらんには勞多くして功少く一生不如意の生活を爲さゞる能はざる時に方り、一方に於ては禮を厚くし俸を重くして歓迎せんとする者あり。天下の人才が教會に赴かずして實業界に行かんとするもの、人情として之を論ずれば決して之を無理也と云ふ可らず。

斯る有樣なれば教會の衰靡として振はざること實に甚しく、曾て明治廿一、二年の頃には受洗者の數一年五千人以上に達したりしものが、明治廿四、五年の頃には僅に其半に過ぎず、廿七年以後は更に減じて毎年一千人の受洗者を有するに過ぎざるに至れり。其詳に著しきは所謂名士の教會と稱せらるゝに至りしことにして、曾て一たび基督教界の驍將たりし者にして、傳道界を去り身を實業界に投ずる者あり。或は政治家となり了る者あり。學問あり、教育あり、地位あり、名望あり、曾て一たび教會に重なたしたりし信徒も亦多く教會に對して冷淡無頓着となり、其僅に教會に留まれる者も意氣銷沈して又昔日の活氣なきに至れり。曾て天下の青年を惑めたりし基督教主義學校なる者も、亦教會と同一の運命に遭遇し、僅に其命脈を維持する有樣なりしが、明治三十二年八月文部省が一般の教育をして宗教の外に特立せしめんとの目的に由り、文部省の規定に依れる學校に於て、課程外なりとも宗教上の教育を施し、又は宗教上の儀式を行ふを許さずとの調令を發せしより更に一大打擊を蒙り、其或者は宗教上の教育を廢止して其得たりし特權を保持し、其或者は全く學校を閉すの止むを得ざるに至れり。斯く日本の基督教會は此時代に於て最も苦き經驗を嘗めたりしが、斯る時代に在りてさへ基督教は全く進歩せざりしに非ず。神學上の紛爭は信仰の動搖を來し、信仰の動搖は教會の不振を來したりしかども、他方より見れば、是れ我國の教會が自ら神學上の問題を解決せんと試みたる者にして、之に依りて我教會は神學上の諸問題を學び、思想上大なる進歩をなしたり、又獨立問題のために外國宣教師の感情を傷くるが如きことありしは遺憾の事なりしかども、此時期に於て日本基督及び組合二派の傳道會社は各々外國傳道會社より離れて獨立し、以て教會獨立の基礎を据えたりき。是又大なる進歩也と云はざる可らず。

第六期　同化時代（明治三十四年）

（一九〇一―一九一〇）。

（一）世界的思想の發達　逆潮時代は比較的長かりしも、運は又漸く一轉せり、明治三十三年清國に於ける義團征伐の各國聯合事件は、端なくも國民の精神上に世界的思想の要求を誘致したりしが、除て三十七八年の戰役は、日本帝國の偉大なることを世界に紹介し、國民的自覺を喚起したりしと同時に、他方に在りては國民をして世界の列强と伍せんには尚一層の奮起を要する者あるを悟らしめたり。換言すれば、此戰役は國民をして一面に於ては自重と權利の念とを生ぜしめたりしと共に、他面に在りては謙遜と責任の念とを起さしめたり。今や日本は區々たる東洋の一孤島に蟄居して其獨立を守るに汲々たりし時代を過ぎて、世界の列强と共に世界の見ての問題に關して發言すべき權利と責任とを有する時代に入れり。從て日本國民は文藝に於ても哲學に於ても宗教に於ても、世界の萬民が同情を表し得べき立脚地に立ちて批判せざるを得ず。是れ日本の人心をして久しく文明世界の信仰たりし基督教を度外視すること能はざらしめたる所以にして、斯くて基督教に對する國民多年の猜疑心は漸次に氷釋せられ、基督教の主義主張は國家を危うする者に非ざるのみならず、之を國民性と一致融和する時は、國家進運の上に偉大の効果を及ぼすべきものなること漸く國民の領解する所となるに至れり。

（二）自然主義的思想の動搖　然れ共世界的思想の發達は必ずしも悉く基督教の利益のみ也と云ふ可らず。世界各國との交通頻繁となり、海外思想の我國に紹介せらるゝや、唯に善良なる者のみに非ず、不健全なる者も秘端なる者も共に均しく入り來るほ勢止む可らず。斯くて現代的反宗教反道德的思潮は泰西物質的文明と共に、宛も潮の堤を決する如き勢を以て入り來り、我國民の思想を提亂し、大なる動搖を起せり。其最も著しきは自然主義的思想の輸入にして、明治三十四年高山林次郎の唱へたりし美的生活論は、此類の諸種の思想の魁たるものなりき。彼の所謂美的生活とは本能滿足主義にして、ニーチェを紹述したる者に外ならず。續て登張信一郎はニーチェを紹介し、頗りに仁義道德の觀念主義なるを攻擊したりしが、帝國大學出身の文人中には公然文を

著はして、青年は飲酒せざる可らず、花柳の遊をなさゞる可らずと唱ふるものあるに至れり。此頃より又イブセン、ツルゲネーフ其他の海外文藝盛に輸課せられつゝありしが、明治三十九年頃より所謂自然主義の文藝と稱する、無理想な標榜し、淫猥の事實を描寫せる作物現はれ、四十一、二年の頃に至りて最も隆盛を極め、遂に政府をして斯る作物の濫出を取締らざるを得ざらしむるに至りたりき。

以上の思想は云ふ迄もなく海外思潮の我國に流入したる者なれ共、一面より見れば此は又文部省に依りて强行せられたる所謂國家教育主義に對する反動と見るべき者なりき。所謂國家教育主義は其目的善良なる國民を造らんとするに在りて、此點に於ては何等議すべき所なかりしと雖も、其方法あまりに機械的にして、學生の本能を抑壓せんとするものありしかば、之に依りて少數にして微弱なる基督教徒を迫害することを得たりしかども、一般の學生に滿足を與ふること能はざりき。彼等は同一の主義を以て全國の學校に及ぼし、斯くして其理想としたる忠君愛國の士を造らんとしたりしが、此は空想に過ぎざりき。日本の青年殊生は其初め謹嚴なる態度を以て、學校の教師より忠君愛國主義の教訓を聽きたりしが、屢々繰りかへさるゝに及びて、此は畢竟形式に過ぎざることを悟りて矢伸を催せり。假令如何に善良なる教訓にても、外部より强て注入せらるゝに及びては、彼等遂に之に堪ふること能はずして遂に反抗の態度を取るに至るを得ざるに至りたりき。此如くして忠君愛國の士を造らんとしたりし國家教育主義は、却て無愛を厭び本能を滿足するを以て其理想となし、國家と君主とみば其念頭に置くことを欲ざる自然主義を生ずるに至りたりき。而して最も明白に國家教育主義の破產を證したる者は、明治三十五年の暮より三十六年に亘りて天下の耳目を驚動したりし教科書敎唆事件なるものなりき。此事件は其關係する處頗る廣く、宛も瓜蔓を抄くが如く、知事、視學官、縣郡の視學より師範、中學の校長教諭に至るまで國民子弟の師表を以て任ずるもの續々縛に就き、教育社會は腐敗な一時に暴露したりき。此の如く反宗教的思想、反道德的行爲の行はるゝことは、素より基督教の傳播に取りて都合よきことに非ず。近時我國の人心を支配する自然主義的思想と、又之に伴ふて行はるゝ腐敗墮落とが傳道上少からざる妨害を與へつゝあるは言ふ迄もなきことなれ共、國家教育主義の失敗と之がため生じたり此悲むべき結果とが、國家教育主義の唱道者、維持者をして宗教に對する態度を一變せしめ、從來學校の門外に放逐せんとしたりし宗教を歡迎せんとするに至らしめしことは、消極的なれ共基督教のため全く不利益なりしといふ可らず。即ち井上哲次郎は明治三十四五年の頃より新宗教樹立の必要を唱へ、近時に至りては加藤弘之の唯物主義に反對して精神主義を唱道し、澤柳政太郎は明治三十八年を以て、教育家に向ひ自己修養のため宗教を信奉せんことを勸告し、谷本富は同年故大西祝を論じて、宗教と教育の兩立せざるべからざることを說けり。是れ即ち國家教育主義者が自ら背年の主張を抛ちたることを示す者にして、其結果此頃より全國の官公立學校は其頒したる門戸を開きて基督教の牧師を歡迎し、其宗教談を聞くに至りたりき。

自然主義と關聯して此處に一言すべきは、明治四十一年頃より儒教復活、古典復興の唱へられたりし事にして、此は自然主義的思想に反對して起り來れる者なりき、而して此議論を唱道したる者の中に、浮田和民、横井時雄、嶋田三郎、增野悅興等の如き基督信徒多かりしは、注目すべき事實にして、思ふに基督信徒の中に此の如き議論を生じたるものは、基督教を日本化して、我國民の實生活に適切ならしめんとするの傾向漸く彼等の中に生じたるに由らずんばあらず。

（三）人生問題の研究　漸く一方には自然主義的思想の勃發したりしと共に、吾人は又他方に於て宗教的要求の擡頭の此時代に於て盛に起りたりしを見る。高山林次郎は一たび美的生活論を書きて本能主義を唱へたれ共、長く之を以て滿足すること能はず。明治三十五年日蓮論を公にし、信仰に憧がれつゝ之を得ずして鬱れたりしが、此頃より青年の宗教に對する渴仰心は盛に焚え上れり。藤村操なる十八歲の青年が、人生の行路に行き惱み、煩悶終に瀑布に身を投じて死したりしは、明治三十六年の事にして、彼が失望落胆、自殺を以て解脫の最良法と思考したりしは、素より不健全の思想なれ共、是れ實に當て杉浦重剛の理學宗に滿足し、加藤弘之の天則宗に湯仰し、中江篤介の無靈無魂論に感服したりし時代漸く去りて、世は漸く物質以上の物を要求するに至りしを示せるもの也。黑岩周六の『天人論』が盛に實行きたりしも亦此頃のことにして、亦以て當時思潮の赴きたりし處を知るべき也。續て明治三十八年より三十九年に至り我精神界には奇異なる現象を生じ、自ら神と交通したる實驗を有せりといふもの、神子の自覺を得たりといふもの、又は自ら預言者也と云ひ、救世主也と云ふもの續々現出したりき。其中最も眞面目なりしものは綱島梁川にして、彼は不治の病床に臥して、燈ゆるが如き信念を以て見神の

實驗を說き、神子の自覺を得たる旨を宣言せり。又此頃伊藤證信は無我の愛を說き、河上肇は其職を抛ち、其所有を賣り、以て無我の愛の生活に入りたりと稱し、大に世人の注意を喚起したりき。此等の思想は何れも不健全にして病的なるを免れず、故に又永續するを得ざりしかども、是れ我國の人心が漸く人はパンのみにて生くるに非ずとの眞理を悟り、人生問題の解釋に着眼するに至りしを證するものにして、斯くして我國民の宗教的要求は漸くにして痛切に赴きつゝあり。基督教にしてもし能く此機會に乘ずるを得ば、其利益たるや云ふ迄もなし。

（四）基督教の活動　機運の斯く一轉し來れるに方り、久しく抑壓せられたる基督教會は、時宜も第廿世紀の曙光を迎ふるに際し、明治三十三年の春大阪に開きたる福音同盟會に於て、第廿世紀紀念大舉傳道を擧行すべしとの議決を通過し、翌年全國各地に於て進擊的運動を開始したりしに、其効果頗る著しく、之がため金を集むること一萬圓以上に及び、求道者を得ること殆ど二萬人に達したりき。此年萬國學生同盟會の幹事モット又來朝し、東京を初め各地に於ける學生の間に傳道し、凡そ五千人の悔改者を出したりき。前既に說きたるが如く此頃より國家教育主義の破綻漸く暴露し、人生問題の研究漸く起らんとしたりしことなれば、基督教會にしてもし能く內に一致して外部に向ひしならんには、更に能く其勢力を擴張するを得たりしならんに、不幸にして教會內に於ける保守派と進步派とは、實際傳道の事に於てさへ一致すること能はざりき。三十四年十月海老名彈正が『新人』に『三位一體論』を揭げて、自己の意識に依り基督教の此根本教理に一種の解釋を下せしより、植村正久は『福音新報』に於て正面より之を駁し、小崎弘道は『東京毎週新誌』に於て、高木壬太郎は『護教』に於て之を評し、基督教主義の新聞雜誌は一時之が批評を以て充されたりしが、此論爭は不幸にして神學上の論爭に止まらず、三十五年四月東京に於て開かれたる福音同盟會は、所謂福音主義なる語の意義に關する決議案を通過せしめて、進步派を其同盟より省きたりしがため、基督教諸派間に於ける一致の精神を缺如たらしむるに至りたりき。斯くて三十七、八年には日露の大戰役ありて、基督教會は軍隊慰問のために大に盡す所ありしも、其他の事に就ては殆ど何事をも爲すこと能はざりき。戰役の結果は滿韓傳道の必要を生じ、從て又各派間の合同も一層の必要を生じ來りしが、諸種の事情は容易に之が實行を促すに至らず。三十九年の春東京に於て開かれたる福音同盟會は、各派合同の議を通過し、之が實行を計劃せんため、廿五名の委員を擧げたれ共、此委員は遂に會合するに至らず。福音同盟會は此時を以て、更に教會同盟を作るべしとの條件を以て解散せられたりしが、從教會同盟を改めて教派同盟となすべしとの議起り、尙未だ成立するに至らず。

斯く基督教會は唯に合同の實を擧ぐること能はざりしのみならず、近年に至りては益々各派分立の勢を成し、外に對して共同一致の働をなすことさへ頗る困難を感ずるに至れり。此に於て明治四十三年秋大阪に開きたる組合教會の總會は、各派合同の議を通過し、爾後合同を唱ふるの聲其處此處に聞えざるに非ずと雖も、各派の間に合同の誠意ありとも覺えず、實際問題としては機尙未だ熟せざるものあるが如し。斯く我國の教會は依然として各派分立の委靡なりと雖も、內部に於ては教會の基礎漸く鞏固を加へ、日本基督及び組合の二派は三十八年を以て外國傳道會社との關係を解決し、政治上經濟上共に獨立自治の教會となりたり。メソヂスト監督（英以）加那太メソヂスト及び南メソヂスト監督（南美以）の三派は四十年を以て其合同を成就し、其第一總會を開き、政治上全く外國の教會より獨立せり。日本聖公會及び浸禮教會は未だ全く獨立するに至らざれ共、亦同一步武に向て進步しつゝあり。

此最後の時期に於て更に特筆すべきは、明治四十年（一九〇七）東京に萬國青年大會を開きたること是也。此會合は日本に開きたる世界大會の嚆矢にして、四月三日を以て初まり八日を以て終り、英、佛、獨、米、露、諸、印度、支那、韓鮮、日本等諸國の代表者數百名會合して、協議會、講演會等を開き、深大の影響を國民の思想に與へたり。又四十二年宣教開始五十年紀念會を東京に開き、五日より六日間に亘る大集會を催し、以て過去の事業を考察し、將來の希望を語れり。

（五）基督教現在の勢力及び諸事業　（イ）教會、會員及び教役者の數　此五十年間勤勞の結果として得たる者を統計的に示せば、現存の教會五百四十六箇、講義所九百九十六箇、信徒の現在數七萬五千六百八十人、現在傳道事業に從事せる者、外國宣教師九百三十一人（妻を含む）邦人教師五百六十三人、按手禮を受けざる傳道者六百一人、婦人傳道者四百一人也。現時日本に存在する教派の數は廿餘派あれ共、其最も重なるものは、日本組合、日本基督、日本メソヂスト、日本聖公會の四派也とす。現時直接傳道若くは牧會の職に在りて最も廣く名を知られたるものを宮川經輝、植村正久、海老名彈正、小崎弘道、本多庸一、平岩愃保、綱島佳吉等也となす。

倚表に依りて各派の教會、會員、教師、傳道者、外國宣教師、日曜學校生徒數等を例別に示せば左の如し。（明治四十三年（一九一〇）十月編行『ゼ、クリメ

教派名	仮十歳全会員にはなる教師	仮十歳全会員にはなる教會	教師（傳道者合計）	正會員	聖餐式（陪餐者を含む）	教會	自給教會	講義所	日曜學校生徒	會員寄附年額
日本組合	六八	三三	七六	二、四〇一	二、八〇二	九三	三	一	九、〇〇〇	七、三六三
米バプチスト	二〇	三七	六二	二、九〇一	三、二四七	二〇	一	三〇	八、〇〇〇	二、〇八〇
南バプチスト	六	七	一八	三四七	四四七	三	一	二	二、〇五六	九八三
クリスチャン	六	六	一八	三三一	三四〇	二	一	三	二、〇一〇	六九九
基督教	三三	一	三三	二、〇一〇	二、〇一〇	二	一	二	二、四一一	二、三六一
福音	一四	二六	四〇	一、〇四五	一、〇四五	三九	一	一	一、〇〇〇	二四〇
普及福音	五	三	八	二六	二六	二〇	一	一	三五〇	三五八
ヘブライ、フエースミクシヨン	一	六	七	二四	二四	二〇	一	一	一四〇	一、〇四〇
ルーテル、ルーテル、イングリカ	二	三	五	二一	二一	一九	一	一	二、二一八	三、〇八九
日本メソヂスト	一四	八	一二	九、九四八	一三、三〇八	一八	一	一	二、三八八	二、九一二
美普メソヂスト、ミツション	三	一〇	一三	九六四	一〇	一四	一	一四	六三五	一、〇四六
日本基督	一	一四	一三	三三一	一四、一九六	一七	一	二六八	二、一四〇	九、〇〇〇
日本聖公會	九五	九八	一七七	一、九五六	一、八五六	一四	一	六四	一、〇四〇	二四、二五一
オリエンタル、ミツシヨナリー、ソサイエチー	一四	一四	二三七	六四七	一三、三四〇	六	一	二三五	一、〇〇〇	三三一
救世軍	八	一六	二四	一九	一九	一九	一	一	一、〇〇〇	一、〇〇〇
セヴンスデー、アドヴェンチスト	二	二〇	二二	一〇	一〇	一〇	一	一	三〇〇	三〇〇
友會	一	六	七	一八	一八	一八	一	一	一、九二〇	一、九二〇
スカンヂナヴイアン同盟	九	三	一二	六六八	六六八	四六九	一	一	四〇〇	四〇〇
基督同胞	八	八	一六	一七一	一七一	一四	一	一	一、八〇〇	一、八〇〇
日本同仁	五	一	六	一七一	一七一	一四	一	一	一、八〇〇	一、八〇〇
エヴアンジエリカル、ユニオン、ドブスエスト、ユニオン、ドブスエスト、ユニオン、ドブスエスト

の傳道に依て我國に與へられたる實のやがて自ら發展して生じたる基督教會たるなり。さはいへ最初の傳道は頗る困難なりき。基督教禁制の高札は明治六年まで全國到る所の街上に立てられ、刺さへ我國歴史上空前絶後の大變革の時に際し人心の動搖甚しく、基督教は官民一般の厭忌する所たり。明治維新の後に至りても、基督教を信ずる者は必ず投獄を免せざるべからず。斯る有様なりしを以て、宣教師は各派としに直接傳道に從事するを得ず、唯だ或は語學教授に依り、或は醫術に依り、其他個人的の善意親切を以て一般の感を懷き信用を得んことを勉め、ブラウン及びバラは横濱に、カラゾルスは東京に、ヴルベッキ及びスタウトは長崎に學校を立て、ヘプボン夫妻は横濱に女學校を起し、斯くて徐々に國民教化の基を作りつゝありき。元治元年（一八六四）もと神奈川の針醫にしてバラの日本語教師たりし矢野元隆なるもの病死に先ちて受洗す。是れ日本に於けるプロテスタント最初の受洗者なり。慶應二年（一八六六）肥前の國老村田若狭其弟綾部某と共にヴルベッキより受洗す（『日本』の條を見よ）。明治元年（一八六八）春もと佛僧たりし清水某またヴルベッキより受洗す。彼は直ちに捕へられ五年間在獄後免されたり。同年五月横濱にて栗津高明、鈴木貫一の二人バラより受洗し、二年二月小川義綾、鈴木鉀次郎、島屋だいの三人タムソンより受洗す。其の後多少の受洗者ありて、明治五年までに十數人の基督信者を生じたりき。

其等信徒は間もなく所々に散じて、横濱には唯二人殘りしが、此外に宣教師に就て英語聖書を學び、實際に信仰を起し居りしもの又數人ありき。明治五年舊暦正月彼等は相謀りて外國人の聞きし初週祈禱會に倣ひ、また祈禱會を開きたりしが、頗る信仰の振興を結果三月十日を以て一個の教會を建設する事となりたり。是れ『日本基督教會』の濫觴なるものあり。其の結果三月十日を以て一個の教會を建設する事となりたり。是れ『日本基督教會』の濫觴にして、又實に我國プロテスタント教會の濫觴なりしなり。建設の日長老一人執事一人を選び、長老按手禮及び洗禮、晩餐禮を行ひ、會員十一名とぜられ、小川義綾長老に、仁村守三執事に選ばれ、バラ假牧師となり、規則を定め、『日本基督公會』と稱し、居留地百六十七番の小室に集會したり。是れぞ今日の海岸教會の胴身なりしなり。（海岸教會の名は明治八年會堂を新築して後命ぜし所にかゝる）。翌明治六年に至り東京に移り居りし信徒七名は、九月二十日鐵砲洲に一教會を設立し、之を『支會』と稱し、又『東京公會』と呼べり。是れ今の新榮教會の始なり。斯くの如く日本最初の教會は、長老教會及びレフォルムド教會の宣教師の宣教に起源し、教會政治に於ては長老主義を取りしと雖も、初の信徒は教派分立を厭ひ、日本に於ては諸派宣教師は須らく一致して一教會を造るべしと主張し、最初の教會設立も此の精神に則り、其の公會規則なるものゝ如きも僅に十五條より成り、聖書を唯一の權威となすことを唱へ、又基督を信ずるものは悉く一の全公會たる事を得と說き、絶えて教派的信條もなく、今日より見れば案外なるばかりなりき。宣教師の中にはカラゾルスの如き教派分立主義者もありて、初より議論あり、明治七年には沸騰するに至りしが、信徒は飽くまで一致主義を唱へ、或は書を各派宣教師に贈り、或は押川方義、熊野雄七を遣はして宣教師に說かしめ、或は米國の本教會に書を贈りて、バラとタムソンの日本公會のために盡力するを許可せんことを請ふなど頗る勉むる所あり。在米の新島襄に招聘書を贈りて牧師とならんことを請ひ、其承諾を得る能はざりしも明治七年の事なりき。早に横濱、東京の兩教會が一致せしのみならず、アメリカン、ボールド派遣宣教師の宣教に由て明治七年建設せられし神戸、大阪の教會とも又互に提携し、明治七年十月の會議には此の兩公會より代員三名來りて出席し、其の合同を議し、委員を立てゝ規則を草し、翌年の大會にて之を決することゝまでなりたり。然るに翌年に至り神戸教會は書を致して、一致親交は望む所なれど政治を一にするを欲せずと通報し、バラ及び奥野昌綱は代員として神戸に赴き、デビス及び新島襄と商議せしも、終に神戸側の拒絶する所となり、合同の議は此に中止することゝなれり。されど他方は弘前に於て米國メソヂスト派宣教師イングと、横濱教會員本多庸一とが鵠力傳道の結果として生ぜし信徒十五名より、同地に支會設立、牧師もしくは長老派遣を請ひ來るあり、即ち之を許し、本多を長老たらしめ明治八年十一月教會設立せられたりき。（此教會は後にメソヂスト派に屬せり）。

斯く教會一致の精神盛なりしと共に、教會獨立の精神も亦最初の信徒の最も盛に抱きし所なりき。彼等は明治七年より武藏、兩總、伊豆、下野、安房、箱根等の各地に日本人自らの傳道を試むるなどの事ありしが、其の精神は極端にまで走りて、明治八年新榮教會長老栗津高明等十數人は、純然外人の手より獨立すと稱して教會より分離し、日本教會と稱する一教會を起せり。後明治十六年に至り其の教會の過半は組合派に合し、靈南坂教會を起し、東京に於ける同派教會の祖となれり。

然れ共斯く一方に長老派、レフォルムド派の宣教師が日本信徒の精神に贊して無教派主義の日本基督公

會を助けつゝありし間に、他方には長老派の宣教師にして日本基督公會と合同せずして、遂りに教會を立て、之を日本長老公會と稱し、米國の長老會に屬せしめ居たる者ありき。即ち横濱指路教會は斯くして明治七年九月に、東京築地の東京第一長老教會は同年十月に、下總法典教會は八年十二月に起りたりき。

【日本基督一致教會時代】　日本基督公會は先きに全國一教會主義を以て起り、之を實行せんとして各派宣教師に交渉したりしも、メソヂスト派、監督派、浸禮派等何れも之を聽かず、たまゝ之に同意したりしアメリカン、ボールド宣教師の關係せし神戸公會との合同談さへ遂に中止することゝなれり。而して長老派又別個の教會を立てたりしが、明治九年に至り內外人間に長老、レフォルムド二派合同の議起り之が一致を謀ることゝなり、外に蘇格蘭一致長老教會派遣宣教師デビソン及びリデルとも交渉して、議遂に成り、先づ一致せる憲法を制定採用し、同年五月此の三派と合同して一教會となし、之を『日本基督一致教會』と稱したり。同日小川義綾、奥野昌綱、戸田忠厚の三人教師の按手禮を受く。是れ邦人教師の嚆矢なり。合同せし教會は日本基督公會の横濱六十七番教會、東京新榮教會、信州上田教會（九年十月設立）長崎教會（九年十二月）と長老教會の横濱住吉町教會（指路教會）東京芝露月町教會（第一教會の分離せしもの）下總法典教會、品川教會、千葉縣大森教會にして、麴町、淺草、牛込の三教會は同時に新設許可となれり。

其より教會の數次第に加はりしかば、明治十四年四月西南地方教役者の建議に基づきて、全國の教會を三分して三中會を立て、東京日本橋以北を北部中會とし、同以南を東部中會とし、中國及び九州を西部中會とし、教會二十五餘信徒總數千六百四十二人を數へたり。明治十八年仙臺外宮城縣下の三教會一致教會に加入し、之に由て中會は五箇とぜられ、東京第一中會、同第二中會、浪花中會、備西中會、宮城中會となれり。之と同時に明治十二年より東北傳道に從事し居りし米國日耳曼レフォルムド教會宣教團は一致教會と協力することゝなれり。同十九年米國南長老教會宣教團又協力宣教團となる。此は前年始めて我國に來り、神戸を中心として宣教し居たるものなり、廿二年に至り米國カムバルランド長老教會宣教團また九個教會を以て協力宣教團に加はる。同團は明治十年以來大阪、紀伊邊に傳道し居たるものなり。斯くて一致教會は七派の宣教團と協力し、其等の傳道と其の結果とを一致包容したるものとなれり。されど共間もなく蘇格蘭一致長老教會は我國より傳道を引き上げたり。

此の時代に於て起りし最も著しき出來事は、一致教會及び組合教會合同の運動也とす。組合教會は先きに神戸大阪附近に宣教したるアメリカン、ボールド派遣宣教師等の關係せし神戸公會大阪公會の發展したるものなりしが、明治十九年、二十年頃より一致組合兩教會合併の議起りて勢力あり、二十年五月東京に開かれし一致教會大會はイムブリー、押川方義、井深梶之助、植村正久、吉岡弘毅を委員に擧げ、同時に東京に開かれし組合教會總會選出の委員と商議し、兩教會の同意し得る憲法草案を作らしめ、之を大會に提出し、大會は直ちに之を可決したり。同草案に依れば、各教會の內治は其の自由に委せ、部會は各教會の牧師及び代人を以て組織せられ、大會を以て組織せられ、大會は聯合教會總會議長本間重慶は、書翰を以て種々止みがたき事情あり、總會は合併を暫時中止することに決し、又部會より也も廣き範圍の會議とし、總會は聯合教會牧師及び代員にて組織せらるゝことゝなり、又古より傳來せる信條告白は既往に有益にして今尙貴重すべしと雖も、必ずしも之を信ぜざるべからざるものに非ず、教役者たる者は使徒信經、ニカヤ信條及び羅晉同盟會の九個條をば承認するを要すれども、他の信條及び問答をば其の大意を是認すれば可なりと宣言し、他の教派とも此の精神を以て合同の交渉に應ずべしと添へたり。組合教會の會議も同じく此の草案を可決せしかば、一致教會は更に細目確定の委員十名を擧げ、組合教會の委員と協議せしめ、二十一年五月其の草案は遂に印刷せらるゝに至れり。同月臨時大會を東京に開きて委員の報告を聽き、十一月便宜のため再度の臨時大會を大阪に開きて此の草案を可決したり。然るに同時に大阪に開かれし組合教會會議にては議終に決せず、翌年五月亟決議延期となりぬ。一致教會は更に二十一人の委員を擧げて草案修正權を與へ、彼等は組合派委員と商議修正する所あり。明治二十二年五月待ちに待ちたる組合派總會は神戸に開かれ、一致教會大會は東京に開かれ、後者は委員案を容れしが、組合派は議論喧囂、草案に根本的修正を加へ、小崎弘道、金森通倫、湯淺治郎、宮川經輝、杉山重義をして交渉せしめしかば、一致派大會は或點を容れ、或點を拒むことゝし、更にイムブリー、植村、井深の三人を交渉のため二十七日神戸に向て出發せしむるに決せしに、組合派は同日電報を以て會議を三委員に問く旨を報じて總會を閉ぢ、一致派の三委員は空しく神戸に閉會後の總會を訪ひたり。二十二年七月兩派委員また會合せしも、議即決せざりしが、二十三年四月に至り、組合教會總會議長本間重慶は、書翰を以て種々止みがたき事情あり、總會は合併を暫時中止することに決

議ぜりと恨じ來れり。此に於てか一致教會が其の制度を變じてまでも遂行せんと熱心せし合併は行はれすして已みたりき。

此の時代は教會の進歩最も著しかりし時にして、明治二十三年末には教會七十二箇、信徒一萬六百十二人に上りたりき。

【日本基督教會時代】　組合教會と合併の望み絶ゆるに及び、一致教會は直ちにイムブリー、井深、植村等七人の委員を擧げて憲法を起草せしめ、明治二十三年十二月東京に開かれたる大會にて修正の上之を採用し、同時に教會の名稱を『日本基督教會』と改めたり。其より後は或は國民の保守的反動時代を通過し、或は日清戰役を通過し、或は日露戰役に會ひ、教會の勢、傳道の勢と共に一歩一緩して着々進歩し、もと教派の宣教團の傳道の結果を合併して成りたる教會は、此期に及びて内には組織漸く整ひ、有機的關係次第に密となり、實力發達し、外には滿洲朝鮮にまで擴張するに至れり。

此の期に於て最も著しき出來事を、外國宣教團との關係の交渉となす。『日本基督教會』は既に内部より發達して自ら支へ自ら治むるの力の加はりたると共に、教會内には國民的自覺に刺激せられて、外國宣教團に補助せられ、時としては干渉せらるゝを厭ふ精神の起れるあり。當初より日本に於て獨立せる基督教會の設立を志とせし日本基督公會の後身たる『日本基督教會』には、漸くて協力宣教團に對する關係を正さんとするの議起り來れり。殊に二十七年『日本基督教會傳道局』が宣教團との關係を離れ、大會に依て設けらるゝに至りて此の議盛となり、二十八年の大會は井深、植村、押川等六人の委員を選び、宣教團は中會の部内に傳道地を選び、又其の使用する教師傳道者の資格及び報酬を定め、之を任命進退するに就き、中會と協議しつゝありやを調査せしめしに、三十年七月の大會にて、委員は之を調査せしも協力の實あるものなしと報告し、同大會にては協同宣教團とは同盟及び中會の同數委員の間に一切の商議をなす宣教團を云ふと定義し、宣教團をして此の定義に適する協同あるに至らしむるために、交渉の委員七名を選びたり。されど事は頗る複雜にして、交渉容易に決せず。此の問題は爾後毎年の日本基督教會大會に於ける最難題となり、大會其自身の決議も一進一退の委なりしが、明治四十二年十月東京に於て開かれし大會は、正式に協力せる宣教團の外を關係宣教團と稱し、尙關係あることを認めて、其の附屬教會を『日本基督教會』の關係教會とすることとゝし、此に落着の方に向て一歩を進めたり。

（一）傳道及び傳道局　明治十年より東京の信徒は内國傳道會社設立を企て、十二年に至て中會の管下に之を設けしが、尙至て微なる者なりき。十一年には海外傳道委員なるものさへ選ばれ、朝鮮に傳道者を送らんとして人を得ずして果さゞりし事あり。十六年に至て大會に大會傳道局なるものを設け、資金の四分一を信徒より集め、四分三を諸宣教團より出し、傳道者を置きて傳道せしが、二十五年に至り傳道局改革案大會にて可決せられ、全權を大會が有することゝなりしに、カムバラランド宣教團の外見ての宣教團は此の規定にて協力することを肯ぜず。此を以て翌年の大會は全く獨立して傳道局を起し、其の委員は直ちに會議の上先づ信州南佐久、茨城縣太田に傳道を開始し、翌年の大會には豫算を三千圓とす る事、臺灣へ傳道を開始することを提議して容れられ、二十九年臺灣傳道を開始し、其より所々に、或は在來の教會と提携して之を獨立に至らしめ、或は新に傳道を開き、三十四年に至りては局の組織を變じて、時の衆議院議長たりし片岡健吉を總裁とし（教

井深梶之助

植村正久

年にして死す）豫算を七千五百圓として事業を擴張し、天津に傳道者を送り、三十六年には朝鮮釜山に傳道者を送り、日露戰役中は戰時傳道部を起して全國に傳道し、戰役終りては滿洲の大連、營口、安東縣、旅順、朝鮮の京城、群山に傳道を開始し、此等前後の活動に依て、臺灣には三側の獨立教會生じて三十九年一中會を組織し、天津と大連には傳道開始

後一二年にして獨立教會を見るに至れり。傳道局は又時々巡回者訪問者を送り出し、又各地に特別傳道を試み來れり。

傳道局の外各中會にも傳道組織ありしが、此は次第に傳道局に併されつゝあり。各教會も其れ〴〵傳道し、中には傳道地を有するもあり。斯くて日本基督教會の傳道は日本帝國及び其の勢力範圍の殆ど全面に普及せり。

（二）神學校　神學校は久しく宣教團の立てしものゝみなりき。日本基督公會時代にはカラゾルスの東京の學校と、ブラウンの横濱の學校とありしが、一致教會建設と共に二者を合併して東京築地に一致神學校を立て、十九年に至り一致英和學校及び英和豫備校を併せて明治學院と稱し、後に芝白金に移れり。長崎にもスタウト學生を集めて神學を教へ、一校を起し、明治二十一年他の一校と合併して東山學院となれり。此はダッチ、レフォルムド教會に屬するものなり。仙臺にも米國日耳曼レフォルムド教會宣教團明治十九年に傳道者愛成學校を起し、ホーイ、押川方義之を導きしが、二十三年神學校立てられ、翌年二校を合せて東北學院となせり。後東山學院は神學部を廢して明治學院神學部に合す。此外横濱に米國婦人宣教團の起したる女學校にても、婦人傳道者を養成して後共立女學校と稱し、長老教會宣教團も東京芝二本榎に女子聖書學館を起し、折年に至りては長老派のセレー大阪川口に簡易なる傳道者學校編晉同志會を起し、南長老派宣教團は明治學院と別れて神戸に神戸神學校を起せり。然るに明治三十七年植村正久は全く外國宣教團の關係なき男女神學校を東京市ヶ谷に起し、東京神學社と稱し、後東京麹町飯田町に移れり。此等神學校の中明治學院と神學社とは中學卒業後二年の豫備教育を受けたる者を本科に教授しつゝあり。

（三）機關新聞　日本基督教會には正式に機關新聞と稱すべきものなし。然れ共植村正久の經營に係る『福音新報』は日本基督教會と最も親密なる關係を有す。

（四）教會政治及び信條　公會時代には信條も政治も極めて簡略なりしこと上記の如し。明治十年一致教會の組織せらるゝに至り、大なる議論の後ドルト教典、ウエストミンスチル信條、耶蘇教略問答、ハイデルベルヒ問答の四を信仰の標準とすることゝなり、政治に於ては一教會に牧師と長老と執事とあり、何れも會員の選擧により、此等を以て教會を教導統治せしむ。中會は各教會より牧師と長老と各一人出席して、範圍内の教會の政治を議し、更に各中會より三教會毎に教師長老各一人の代員を選びて大會を組織し、全體の教會に關する事を議ぜり。然るに二十三年日本基督教會と改名すると共に定まりたる憲法は、在來の信條問答を教會の信條とするを止め、單に使徒信條に短き序言を加へて之を信仰の告白に代へ、政治に於ては舊の長老政治を一層整頓改め、全國各教會より各々牧師長老を出すことゝなし、翌年より之を實行せり。

（五）現狀　明治四十二年度末の統計に依れば、中會は東京、浪花、宮城、鎭西、山陽、北海道、臺灣の七側、獨立教會六十三、傳道教會と稱する自立せざる教會百十一、外に外國ミッションに屬する者三十六、按手禮を受けし教師百廿六人、傳道准允を受けし者九十一人、會員一萬九千八百廿四人にして、内男九千四百九人、女八千二百三十四人、小兒二千百九十五人、日曜學校生徒一萬二百十五人、一年間の獻金八萬七千八十六圓餘、教會の中最も大なるは海岸（横濱）富士見町（東京）高知、指路（横濱）にして、海岸は九百人以上、富士見町は八百人以上、高知、指路何れも五百人以上の會員を有す。此外滿韓に於て教會一、傳道教會八、傳道地五、會員三百四十人、日曜學校生徒三百廿三人を有し、一年の獻金五千五百八十三圓に上る。

此派は日本に於けるプロテスタント教會中最大なる教派の一にして、其勢力日本組合教會と相伯仲せり。現今此派に於て最も勢力を有するは植村正久、井深梶之助の二人にして、前者は富士見町教會を牧し、其傍東京神學校を經營し、週刊福音新報を編輯せり。後者は明治學院長也。此外山本秀煌、星野光多、熊野雄七、稲垣信、貴山幸次郎、福田錠二、柏井園、笹尾金太郎等の名世に知らる。（『日本』の條參照）。

日本組合教會（ニホンクミアイケウクワイ）　The Nihon Kumiai Kyokwai (Japan Congregational Church)

宗派名　日本組合教會が日本の基督教會史上に於て、特殊の發達を遂げたる起源を溯ぬるに、三派の源泉に溯るを得べし。即ち一はアメリカン、ボールド派遣のミッション團體、二は熊本洋學校より起因し來れる所謂熊本隊、三は京都同志社の教育團體なりとす。而もこの三者とも、當初より日本の傳道は日本人須らく其責に任ずべしと云ふ愛國的獨立の精神に充ちたりしは、組合教會が特殊の發達をなすに於て最も深き關係を有する事實なりとす。ミッション所屬の外國宣教師等が、始めよりこの主義を執りたるは、日本人より之を見れば最も感謝すべきことにして、外國宣教師等と事を供にしたる邦人の先輩

夢が堅く此の主義に立ちたりしは、最も喜ぶべきことなりとす。かの系統上より云へばミッション派に屬すべき澤山保羅が、明治十年に米國より歸朝し、大阪浪華教會を設立したる時、僅に十餘名の會員より新圓の佈給を受け乍ら、苦心經營教會自給論を唱道せしが如きは、最も著しき事實なり。無本洋學校や京都同志社に學びたる青年にして、愛國の至情より信教の勃興を起し、遂に傳道の事業に當りしものも亦皆然り。此の如き精神を持せる以上の三源流が相合して、今日の組合教會を成すに至りしことなれば、此教會が純然日本の基督教會たる實を現はすを得るに至りしも偶然に非ず。

（一）　組合教會の起源といふべし　明治二年（一八六九）十一月アメリカン、ボールド傳道會社派遣の宣教師デー、シー、グリーン（D. C. Greene）夫妻始めて横濱に着し、翌年神戸に定住し、傳道に着手せり。是れ日本組合教會の濫觴なり。爾來ギュリック（O. H. Gulick）デビス（J. D. Davis）ゴルドン（M. L. Gordon）ヂッオレスト（J. H. DeForest）ラルネッド（D. W. Learned）其他の男女宣教師相繼で渡來し、神戸と大阪とに駐在し、神戸よりは三田地方に傳道し、大阪よりは京都地方に傳道しつゝありしが、明治七年四月十九日、神戸に於て十一名の男女を以て一教會を組織し、攝津第一基督公會と稱せり。是れ今の神戸教會の前身にして、日本最初の組合教會也。翌月十四日大阪に於て梅本町公會生る。今の大阪教會即ち是れなり。此二教會ともに問接、直接宣教師の力に依りて設立せられたるものなり。斯く初代に於ては宣教師等は率先傳道に從事せしが、漸次邦人の教師增加するに從ひ、退きて補助者の地位に立つに至り、七十四名の現在員中（明治四十三年四月調）直接傳道の任に當るものは僅かに二十餘名に止りて（此等も皆補助者又は指導者にして主任者に非ず）他は主として教育事業に從事し、少數のものは慈善事業に從事しつゝあり。

グリーン博士

（二）　熊本隊　熊本隊とは肥後細川侯の創立せる熊本洋學校の外國教師ジェーンス大尉（Capt. James）が熱心の餘り學課の餘暇在學生に傳道したる結果、三十五名の少年子弟等が、明治九年一月廿日を以て花岡山に於て宣誓したる團體を稱する名稱なり。此等の少年は多くは十三四歳より十七八歳に至る迄の幼年なりしに拘らず、父兄等の非常なる迫害に堪へて、能く其信仰を維持し、百折撓まず、學校は閉され、教師は歸國せるに及びて、同年秋相率ひて京都同志社に投じたりき。同志社第一回の卒業生は、實に此バンド中の十五名にして、宮川經輝、海老名彈正、小崎弘道、横井時雄、金森通倫、浮田和民、市原盛宏等は其最も重なる人々の中に在り。此等の人々は横濱に於けるブラウン門下に起りし人々と共に、日本傳道の先覺者となりし者也。當時花岡山に於て宣誓したる誓文は左の如し。

デビス博士

余聖容て西教を學ぶに頗る悟る所あり、爾後之を嘗むに益々感發し欣戴措かず、遂に此の教を皇國に布き大に人民の衆味を開かんと欲す。然りと雖も西教の妙旨を知らずして頑固舊說に沒溺するの徒來だ尠なからず、曼慢嫉に堪ゆべけんや。此時に當り苟くも報國の志を抱く者は宜しく感發興起し、生命を塵芥に比し、以て西教の公明正大なるを解明すべし、是れ吾輩の最も力を竭すべき所なり。故に同志を花岡山に會し同心協力して此道に從事せんことを要す。

凡そ此道に入る者は互に兄弟の好を結び、百事相戒め相規し惡を去り善に移り以て實行を奏す可し。

一　度此の道に入りて實行を奏する能はざる者は是れ上帝を欺くなり、是れ心を欺くなり、如此者は必ず上帝の譴罰を蒙る。

方今皇國の人民多く西教を拒む、故に吾徒一人此道に背くときは衆の誇を招くのみならず、終に吾徒の志願をして遂げざらしむるに至る、勸めざる可んや欲まざる可んや。

（三）　同志社　是れより先き米國修學中に基督教を奉じたる新島襄（其條を見よ）は、明治七年アンドーヴァル神學校を卒へ、同年秋アメリカン、ボールド年會席上に於て滿腔の熱誠を以て故國の現狀を述べ、基督教主義學校建設の必要を語り、紳士淑女の贊成を得、若干の醵金を蒙してその年の暮歸朝したりしが、翌八年十一月に至りて山本覺馬、デビス等と提携して、京都に同志社を創立せり。翌九年九月熊本隊の一團來り投ずるに及びて、學校の形漸く成りしが、最初六年間は備さに創業の難を嘗めたり。明治十七年に至りて彰榮贈樂かれ、續て公會堂、圖書館成ると共に、十九年には新島二回目の洋行より歸朝するあり、同志社の名頓に朝野に知られ、明治廿一年同志社大學設立の議宣言せられ、翌廿二年の事には男女學生の同志社に集るもの九百に上れりと。（同志社女學校は明治十年に設立せられたりと。）然るに不幸にして新島は翌廿三年一月病で歿したりし爲め、同志社の事業は一時頓挫したるの觀を呈せり。小崎弘道は新島の後を襲ふて社長兼校長となり、七年間學校の經營に當り、次で横井時雄之に代り三年間苦心慘瘁したりしが、當時內外多事の際に處して校運振はず。後單に社長として西原清東（三年間）等で片岡健吉（二年間）を迎へ、明治三十七年には下村孝太郎社長兼校長となりしも、幾何もなくして辭職し、三十九年秋に至り原田助之に代はるに及び、時運は漸く回復して男女學生の來學する者漸く多く、四十三年末には在學者總數八百を越ゆるに至れり、同志社と組合教會とは當初寃も異身同體の如く、卒業生は云ふ迄もなく、在學生及び教師等も休暇を利用して、四方に傳道するの有樣なりしが、日清戰役前後より日露戰役前後に至る凡そ十年間は、二者沒交渉となり、一時は行進上互に相反目せるが如きことありしも、原田助就任以後は兩者全く相一致協力するに至れり。尤も同志社に宗派若くは教會に屬するものに非ず、純然たる教育機關にして、精神的教育を授くるを以て其目的とし、男女校友の現存せるもの千二百名あり。四十三年春以來、母校の爲に基金の募集を唱へ、先づ校友に同りたりしに、應募額は已に凡そ二十八萬圓に及びしと云ふ。

（四）　組合教會の成立と日本傳道會社の設立　最初の二教會が明治七年に創立せられたりとのことは前既に之を云へり。斯くて明治八年には三田教會設立せられ、九年には京都の三教會八第一第二の兩教會は合して同志社教會となり、第三教會は後平安教會と改稱せり）設立せられ、十年には浪華、兵庫、多聞の三教會設立せらるゝに至れり。翌十一年一月大阪、神戸其他九教會の代員大阪の梅花女學校に會し、日本傳道會社を設立せり。斯くて一方には同志社出身の青年四方に散じて盛に傳道するあり。就中上州地方、岡山縣下、愛媛縣下等最も盛也。明治十九年京都に於て、日本傳道會社年會と共に組合教會第一回總會を開く。この年會と總會とは後に同一視せらるゝに至りしが、共に組合教會が日本に於て特殊の發達を遂ぐるために、大切なる影響を與へたるものなり。これより先き此教會は單に基督教會と稱し、何等の派名をも稱せざりしが、何時ゝなく『組合』なる名稱を唱ふることゝなれり。翌二十年總會を東京に開く。同時に一致教會（今の日本基督）も大會を同地に開きしが、兩教會に於て兩派合併の議起り、各々委員を擧て交渉を重ねしが、二十二年に至り異論百出、其議遂に實行に至らずして止みたり（『日本基督教會』の條參照）。二十三年頃より外は保守的反動全國に普及すると同時に、內は神學論の勃興あり、傳道上の經驗を受けたりしが、二十九年大阪に開かたる第十回總會は、傳道會社獨立の議を決し、從來米國より送附し來りたる指定寄附金を謝絕せり。翌三十年總會を東京に開き、同時に傳道會社創立二十年紀念を擧行す。同年組合教會事務所を大阪に設置するに及び、傳道會社を京都より大阪に移せり。

（五）　奈良大會と組合教會教師會　保守的反動と新神學の流行とは、我教界の進歩を沮みたるに際し、又日清戰爭の破裂ありて、一般人心に國家的自覺漸く盛ならんとする者ありしが、組合教會の教師等は明治廿八年秋奈良に會合し、祈禱、懇談の結果共に誓ふて宣言書を議決し、彼等が天下に宣傳すべき福音の綱領を定めたりき。其宣言書は左の如し。

小崎弘道

我倂耶蘇基督を救主と尊信し、神の召を蒙れる者、大に時勢に慨する處あり。玆に南都に會して天父に祈願し、聖靈の感化に浴し、遂に左の綱領に從ひて、福音を宣傳し、神の國を建設せんことを期す。

一　罪惡を悔改し、基督によりて天父に歸順すべきこと。

一　人は皆神の子なれば、互に愛隣の大義を全ふすべきこと。

一　一夫一婦の倫を保ちて家庭を潔め、父子兄弟の道を盡すべきこと。

一　國家を振興し、人類の幸福を增進すべきこと。

一　永生の望は信と義とによりて完ふせらるゝこと。

宮川經輝

海老名彈正

同時に組合教會教役者會（後に教師會と改む）を組織せり。爾來同會の組織は、年を追ふて益々堅固となれり。蓋し組合教會の教師等が一致協力、歩武を整へて同胞教化の大任に臨しつゝあるは、同會與りて大に力あり。現在の役員は會長は原田助にして、評議員は綱島佳吉、小崎弘道、牧野虎次、宮川經輝、長田時行の五人也。

（六）傳道會社の發展と獨立完成　明治三十年以來外國よりの補助金を謝絕し、全く獨立となれる傳道會社は、三十六年の秋岡山にて總會開會の際、二十五年紀念會を擧げ、海外傳道前手の決議をなし、翌年夏始めて傳道師を朝鮮に派遣するに至れり。絕て三十八年秋、東京に開きたる總會は、ミッション所屬諸教會を擧て組合教會に引受くべきことを決議したり。其結果、三十九年一月よりミッションの管轄内にある補助教會は、一切傳道會社の引受る處となれり。尙向ふ三年を期して此等諸教會の獨立自給を完成せんがため、ミッションよりは傳道會社へ金八千七百圓を寄附せしが、組合教會にても別に九千六百圓の獨立寄附金を募集したりき。かくて補助教會三十個のうち獨立を完成せしもの二十三個、所屬部會に引渡して傳道中のもの四個、自治的假教會となりしもの三個なりとす。斯くて組合教會は全國を通じて、全然ミッションとの關係を絕ち、獨立自給となれり。この獨立完成問題を別にして、傳道會社創立以來、其傳道範圍は三府三十二縣北海道及び朝鮮に涉りしが、三十年設社獨立以後、傳道教會にして自給となりしもの七個、目下の傳道地は内地に九箇、朝鮮に一箇所あり。

日本婦人傳道會は、明治三十九年秋、神戸總會の婦人大會席上に於て議決せられたるものにして、爾來會員は增加して千三百二十四名に上り、四十三年度の收入は金千三百三十圓に達せり。現に京城を始め、東京、廣島等に婦人傳道師を派遣し、外に創立以來の會長（會幹事）なる渡邊常子は、幸に巡廻傳道に出張して、應援に盡力しつゝあり。

（七）機關新聞　明治十六年東京にて小崎弘道等が『基督教新聞』を發行するや、たとひ宗派的機關には非りしも、社員又は記者として盡力したるは、主に組合教會の有志者なりしを以て、自ら機關新聞の觀ありき。役主任者に幾度の交迭あり、題號も亦更められたりしが、明治三十六年一月よりは明かに組合教會の機關となり、題號を『基督教世界』と改稱し、事務所々在地の大阪より發行することゝなれり。目下の主筆は加藤直士にして、海老名彈正、原田助、宮川經輝、渡瀨常吉、堀内徵、高木貞衛、村松吉太郎等社員として盡力しつゝあり。

（八）規約及び組織　組合教會の現行規約は明治四十一年十月、京都の總會に於て修正したるものなり。一方に於ては飽く迄も自治獨立を主義とすると共に、他方に於ては組織的活動を圓滑ならしめん爲め、毎年總會に於て會長を選擧し、會長は傳道會社々長を兼ることゝし、同時に理事五名を擧げ、會長と共に組合教會の事業を經營せしむることゝなせり。別に評議員二十名ありて諮詢に應ず。全國を十一部會に分ち、各部會に於て部内諸教會の設立と解散に關する件、及び各牧師の就任と辭任に關する件等を受理せしむることゝし、其部會を總括するものを總會（毎年十月開會）とし、總會にては部會に關する件、及び組合教會教師の進退に關する件等を執行せしむることゝなせり。又組合教會にては事業を教務部、傳道部（日本傳道會社）教育部、出版部（基督教世界社）の四部に分つ。現在の役員は會長（兼傳道會社長）宮川經輝。理事小崎弘道、海老名彈正、原田助、高木貞衛、渡瀨常吉にして、外に評議員廿名、

幹事二名、會計、書記各一名を有す。

（九）信仰の告白　組合教會は由來思想の自由と、靈性の發展とを標榜して立てり。故に最初より信仰箇條なるものを有せしことはなかりしなり。然るに信仰の標準を示さん爲め、明治二十五年四月に開會したる第七回總會に於て、左の本文を信仰の告白として採用するに至れり。

一　我們は聖書に於て父、子、聖靈として示されたる無限純全なる獨一の神を信ず。

一　我們は神にして人となり、世の罪人を救はん爲めに苦痛を受け、死して甦り給ひし耶蘇基督を信ず。

一　我們は新なる生命を與へ給ふ聖靈を信ず。

一　我們は神の感化によりて成り、而して我們に救を得せしめん爲めに智慧を與ふる聖書を信ず。

一　我們は聖なる教會、水のバプテスマ、聖晩餐、聖き主の日、永遠の生命、死者の復活及び正しき賞罰を信ず。

されば組合教會中には、この告白に據らざる教會もあり。蓋し教理や信條の問題は、組合教會の本領となす處に非ず。故に此教會中には所謂保守論者あり、所謂新神學者あり。たとひ所說は千差萬別なるも、天父に事ふる至孝の念と、基督に對する至愛の情とを以て、互に一致合同せんことを期しつゝあるなり。

（十）集中傳道と擴張傳道　三十八年秋の東京總會は、次年度に於て全國有數の地を選び、特別傳道を擧行することを決議せしが、翌三十九年春に至りて、東は仙臺、西は高知に於て開催したるを集中傳道の手始とす。こは其名の如く教師、信徒、求道者等一切の力を、時と處と方法とを限りて、一に集中するの謂なり。該傳道法は我邦傳道界に一新機軸を出し、到る處に豫想以外の効果を奏し、爲めに全國の教勢を活動せしめたること尠なからず。四十二年以後は既往の經驗に徵し、更に精錄せる方法によりて、擴張傳道の名の下に、益々大計畫の傳道を行ふことゝなれり。就中四十三年春大阪に於て擧行したる同傳道の如きは、擧行期數週間に亘り、傳道中の受洗者三百六十餘名に達せり。三十九年より四十三年に至る五年間に、この傳道を擧行せし箇所は百數十ケ所に亘り、其費用（特別指定寄附）は二萬圓以上に達し、受洗者數（傳道擧行中に受けたるもの）三千餘名に上りたりき。

（十一）現在の教勢　明治四十二年末日の調査に依れば、日本組合教會々員の總數は一萬五千五名、小兒一千廿一名、外にミッション講義所會員一千二百廿四名にして、合計一萬七千二百五十名也。集金總額は金十萬四百二十七圓にして、財產總額は凡そ二十八萬圓に上れり。卽ち之を他教會に比較すれば、會員全體を平均して一年間の集金額約六圓に相當するが、顧る多額なりと云ふべきも、財產總額の比較的に少きは、會堂建築と敷地購入は外國の補助なきに因るなるべし。更に其他の統計を擧ぐれば、獨立教會七十二箇、假教會及び講義所二十六箇、按手禮を受けたる教師六十一名、男女傳道師三十一名、日曜學校生徒七千二百廿五名也。又四十三年の收支總算は金一萬二千三百八十八圓にして、大部分は日本傳道會社の經常費なり。この内には積張傳道費若くは特別會計費に屬するものを計上せず。現時此派の教會の中最も基礎の堅きは、關西に在りては神戸、大阪、天滿、岡山、四條（京都）平安（同）を最とし、關東に在りては本郷（東京）番町（同）雲南坂（同）を最とす。

此派は日本に於けるプロテスタント教會中最大なる教派の一にして、其勢力日本基督教會と伯仲し、日本基督教會が關東に其根據を有するに反し、此派は關西に其勢力を振へり。現今此派に在りて最も勢力を有するは、關西に在りては宮川經輝、關東に在りては海老名彈正の二人にして、小崎弘道は此派の耆宿として重望あり、原田助は同志社長として聲望漸く重し。此外綱島佳吉、長田時行、古木虎三郎、杉田潤、渡邊常吉、安部清藏、牧野虎次、日野眞澄、ユキヒセイケワイ等の名人に知らる。（『日本』の條參照）。

日本正教會　The Nihon Sei Kyokwai (The Greek Catholic Church of Japan.)　宗派名

露國より傳へられたる希臘教會にして、其教義、禮拜の儀式及び教會政治等は他の希臘教會と異らず（『希臘教會』の條を見よ）。左に記するは日本に於ける傳道の略史也。

（一）宣教師の來朝、最初の信徒　我日本帝國が世界の列國と通商條約を結ぶに及び、締盟諸國は何れも互市場と定められたる地に領事館を設置したりしが、露西亞政府は一八五九年（安政六年）函館に領事館を置き、館内に希臘教の禮拜堂を設け、マアホフを司祭に任じたり。領事館附の司祭は素より宣教を職とする者に非ず、且當時の時勢は尙未だ宣教に便ならざりしかば、彼は日本人に向て傳道するの機會を得ず。日本に在ること一年にして病を得歸國せしかば、領事館は露國教務院に向て後任者の選擇を依頼せしに、教務院は聖彼得堡神學大學の卒業生ニコライ（Nicholai）を選びて之に任ぜしかば、ニコライは卽日修道士となり、司祭の職を帶び、一八六

○年七月首都を發し日本に向へり。時に彼れ齡廿四歳なりしといふ。翌年（文久元年）六月函館に到着せり。此函館の地たるや寛政十年（一七九八）の交幕府が蝦夷地の警備をなさんがため、津輕、南部兩藩の兵を發して之に據らしめ、北門の鎖鑰となしたる要害の地なりしかば、當時紛々擾々たりし攘夷開國兩論者の觀縫も自ら此地に注ぎ、諸國の浪人、殊に東北人士の此地に遊び、鶴に鵬翼を伸べんとする者甚だ少からざりき。ニコライは斯る地に來着し、日本帝國の形勢を觀望し、福音を傳へて救拯の道を布かんとの念切なりしが、先づ之が準備として日本語の研究を始め、且當時函館に在住せる和蘭の學者及び僧侶に就て、博く和蘭の書を學び、儒教の經典、史傳は勿論、古事記、日本紀、大日本史の類より神道佛典の類をも研究せり。而して彼は又教書を日本語に飜譯し、以て傳道の資料に供し、又宣教規則なる者を作りて預め傳道の方針を定めたり。

時に土佐の士族に澤邊琢磨なる者あり。嘗て江戸に遊び武道を修業し、後諸國を遊歷し、函館に來り神官某の女婿となり、後自ら其後を襲ぎて神職となりしが、彼れ慨世の志深く、竊に浪士と交を結び、國家のため爲すあらんことを期せり。偶々當時の露國領事は其子のために倒道の師を求めたりしに、澤邊は其師として聘ぜられ、屢々領事館に出入し、遂に修道司祭ニコライに會するを得たり。彼れ元來外人を忌み嫌ひ、目するに外寇を以てし、殊に當時一般に切支丹と稱せられたる耶蘇教の宣教師を忌むこと蛇蝎の如くなりしかば、ニコライを見る毎に憤怒の情禁ぜず。以爲らく、我國將來の禍根を絶たんとせば、攘夷の精神を發揚すると共に、切支丹の教師を一掃せざる可らず、故に彼れ先づニコライに面して論駁を試み、もし答辯の明確ならざるものあらば天誅を加ふべしと。即ち兩刀を腰に横へ、怒氣滿面ニコライの室に入り、辯を怒らして『爾の信ずる教法は邪教也、爾は我國を冒瀆する者に非ずや』と問へり。ニコライは之に答へて『君は耶蘇教のことを能く知らるゝや』と反問せり。澤邊は答ふるに知らざる旨を以てせしかば、ニコライは未だ知らざるに基督教を妄りに邪教也と云ふ可らず、もし自ら知らずんば之を研究して然る後に正邪如何を斷ずべしと云ひ、遂んで基督教の大意を說き聞かせしかば、澤邊は翻然悟る所あり、是れよりニコライに就きて基督教の教義を研究し、漸く之を解するに及び信仰の念を起せしが、身神職に在ると妻子なるとの故を以て、之を信ずるに非常の困難を感じたりしも、遂に斷然せる一切の事情を排して基督教を奉ずるに至れり。彼の知人に酒井篤禮と云へる醫師あり。澤邊は彼れ及び南部の人浦野大藏に道を傳へ、三人國法を犯して基督教の研究を始めしが、彼等は政府基督教を禁壓すべしとの風說を聞き、且港民も基督教を嫌忌し彼等と交を斷つに至りしかば、彼等は函館の地を去せんとし、其居宅に於て竊に此三人に洗禮を授けたり。是れ明治元年（一八六八）四月にして日本に於ける希臘教の最初の信徒也。澤邊及び酒井は後司祭となり、日本正教會の柱石となれり。斯くて三人は函館を逃れ、酒井は郷里會成に向ひ、澤邊は浦野を伴ひ江戸に赴きて身を隱し、又世の形勢を視はんとせしが、澤邊は翻然は官軍の間者なるべしとの疑を蒙り氣仙沼にて捕吏の捕ふる所となり、函館に送還せられたり。幾ならずして奥州地方の戰亂漸く平定し、王政復古四海統一の世となりしが、當時仙臺藩の士にして函館に在る者少からず。ニコライは此等の人々と相識るの便を得、之に依りて將來の傳教師たるべき者を仙臺の舊藩士より得るの機會を得たり。斯くて日本傳道の好機能く熟せんとするに及び、ニコライは露國に外國傳道會社を設立し、其補助を得て日本に於ける正教の傳道を開始するの必要を感じ、一たび歸國して之を教務院に諮らんと欲し、明治二年（一八六九）澤邊に後事を託し、新井常之進等に別を告げ、歸國の途に就けり。金成、新井の二人はニコライ歸國の後、義

ニコライ

澤邊琢磨

兵を募り官軍に抗せんと欲し、仙臺に歸りしが、警戒甚る嚴にして其目的を達すること能はず。於是彼等は時勢の非なるを悟り、斷然募兵再舉の念を棄て、寧ろニコライ及び澤邊に聞く所の基督教を以て國家の改革を謀らんと欲し、同志に說くに基督教の事を以てせり。斯くて新井は明治三年（一八七〇）の初め再び函館に赴き、澤邊に告ぐるに仙臺に於ける同志の家同を以てせしかば、澤邊は之を聞て大に喜び、彼等にして斯教に歸するあらば、日本宗教の改革と國民の教化とは先づ彼等と協力して奥羽地方より着手するを得べしとなし、新井をして書を贈りて彼等を招かしむ。於是彼等は家財を賣り相前後して函館に來れり。前に來着せるは小野莊五郎（後司祭となる）笹川定吉（後司祭となる）大立目謙吉（後傳教師となる）の三人にして、後に來着せるは津田德之進（後傳教師）柳川一郎（後傳教師）影田孫一郎（後司祭）其他數人也。彼等は來函後澤邊に就きて基督教義を學びたりしが、當時は漢譯舊新約聖書及び其他二三の教書あるのみにして、澤邊の學力を以て充分に之を解するは頗る困難なりき。然れ共新井、小野、笹川等は早くより信仰の念を起し、國家將來の革新は必ず此宗教に據らざる可らずとなし、三人は相前後して仙臺に歸り高屋仲（後司祭）其他同志に福音を傳へたり。此間在函の同志は生活の資に窮し、澤邊は祖傳の刀劍を賣りて彼等を助けしが、資盡くるに及びて彼は更に其妻を賣りて志士を愛はんとせり。彼等の究之如何を察すべく、又彼等の所謂基督教が單に武士道の變名に過ぎざりしを見るべし。斯くて彼等は衣食に窮し商業を營みて僅に糊口の資を得たりしが、ニコライは其志を達し、傳道會社長に任ぜられ、且掌院に昇叙せられて、明治四年（一八七一）二月再び來朝せしかば、彼等の喜び少からず。ニコライは澤邊と謀りて先づ傳道の大方針を立て、日本全國内に五百名の信徒を得ば司祭一名を選立し、又五千人の信徒を得ば主教を立つべしと定めたりしが、此方針は後年其儘に實行せられたり。ニコライは澤邊をして先づ書を贈りて歸仙せる小野、笹川等を招致せしめしに、彼等は同志を率ゐて來函し、館内に寄寓して教義を研究せり。是れより先き新井常之進は江戸に出でしが、森有禮に隨行して米國に往き、後ハリスと稱する神父の門に入り其教に服し、在米三十年にして明治廿二年歸朝し、駒鴨に住し『讀者讀』なる書を著はし、一時其門に集まる者頗る多かりき。當時澤邊、影田は傳道の急務を論じ、露語の研究に反對せしが、小野、笹川等は原語を學ぶの必要を主張し、教義を學ぶの傍露語を研究せり。ニコライは仙臺の儒者眞山温治をして漢譯聖書を和譯せしめ、又其自ら譯したる任として露和字典を編纂せしめ、小野を補天主經、日誦經文、東教宗鑑、教理問答等を印刷せしめ、以て布教の資に供せり。此年の冬在函の有志者洗禮を受く。十二月小野、笹川、高屋を仙臺に遣はし布教に從事せしむ。是れ希臘教會が日本人をして日本内地に傳道せしめたる嚆矢にして、當時別に布教の費用なかりしかば、彼等は歸仙の上自給の法を立てゝ布教するの決心にて其途に就けり。

（二）東京に於ける布教の開始　掌院ニコライは傳道の端緒漸く開けたるを以て、是より日本全國を相手として傳道を開始せんとするも、東京に移轉するの必要を認め、澤邊をして先發せしめ、修道司祭アナトリイをして函館地方の布教に當らしめ、己は一人の從者を伴ひ、明治五年（一八七二）一月海路東京に向ひ、暫く横濱に留まり、二月上京せり。澤邊は前年十二月小野の上京せるに會し、ニコライの上京に先ち萬事を小野に托し、己は布教のため仙臺に往けり。ニコライは築地に寂寥なる日本家屋を賃貸し之に居住し、且此處を以て講義所となして希臘教の說教を開始せしが、幾ならずして此講義所は類燒の厄に罹りしかば、彼は港町に一家を賃貸し、之を以て居宅兼講義所となせり。仙臺に於て迫害の初まりしは此頃のことにして、澤邊、笹川等獄に投ぜられたりとの報至りしかばニコライは憂愁に堪えず、小野をして外務卿副島種臣、左院議官細川潤次郎を訪ひて迫害解釋の運動に奔走せしめ、又人を伴して福澤諭吉をして當局者を訪問せしめ、遂に迫害を解くべしと建說せしめたりき。當時ニコライの名聲漸く四方に傳はり、其門に入り語學を研究せんとする者次第に加はりしかば、彼は布教の傍ら語學の教授を開始せり。

（三）仙臺、函館、水澤等に於ける傳道及び迫害　仙臺布教のため函館を發したる小野、高屋、笹川等は明治四年十一月仙臺に着し、各々自宅及び其外有志の家を講義所となして傳道を開始せしが、聽衆頗る多く、後小野は上京し、澤邊來仙して布教に勤めしが、日々百餘人の來聽者を有するに至れり。斯く布教の好都合に向ふに從ひ、種々の怪聞奇說世に傳はり、傳道者及び聽聞者を以て魔術を行ふ者の如く風聞したりしが、明治五年二月宮城縣廳は捕吏を遣はして澤邊を縛し、國禁を犯し邪宗門を傳へたりとの理由を以て之を獄に投ぜり。續て笹川、高屋も捕縛禁獄せられ、信徒も亦續々捕縛せられ、大なる迫害を蒙りたりしが、在京の仙臺藩士大童信太夫等之

を聞きて大に驚き、之が救濟を時の太政官顧問たりしグルベッキに謀りしに、グルベッキは大隈重信等に忠告する所あり、又外務卿副島種臣等も小野の訪問に接して情を詳にしたりしかば、廟議は放任默許に決し、宮城縣に内達して信徒を放免せしめたりしを以て、五月に至り澤邊以下の人々は放免せられたり。此迫害に依りて怯懦なる者は去り、眞に道を聽かんとするものは留まり、教勢益々進歩するに至れり。

函館に於ては司祭アナトリイ館内の學校を以て傳道師變成の學校となし、又在校の有志と信徒の有力者とを以て市内の傳道に任ぜしむることゝなし、影田、酒井、津田をして專ら傳道の任に當らしめしに、聽聞者日々に加はり、明治五年三月の復活祭には世人前後の信徒及び數十名の未信徒相會して之を祝し、大祭後一週間は日々教鐘を鳴して市民を集め、希臘教の要義を說き聞かしめしかば、耶蘇教の風說全市に滿ち異響紛々たるに至れり。開拓使廳は此有樣を見て大に驚き、之を禁壓せんとして先づ酒井を捕へて獄に投じ、津田、影田相繼て捕へられしが、信徒は迫害に依りて益々其信仰を勵まし、米穀を供して入獄者の家族を助けたり。やがて中央政府は開使拓に教徒放免の命を傳へしかば、五月に至り酒井以下放免せられて出獄せり。於是信徒の勇氣愈々加はり、人々の道に歸するもの益々多きを加ふるに至れり。

當時酒井の原籍は舊水澤縣内なる陸前國合成に在りしが、水澤縣廳は酒井の歸縣を命じ糺問の末懲役に處したりしが、酒井は苦役中逃ふ所の人々に傳道して怠らざりき。之と同時に官手縣に於ても亦同じく迫害ありき。而して地方縣官の迫害止みし後も、郡村の官吏が信教を妨ぐるが如きことは屢々之れあり。一家族の迫害の如きは教學に逃あらざりしが、斯る中に教會は各所に於て漸次に成長發達したりき。

（四）第一回の布教會議　仙臺、函館等の迫害漸く止み、基督教の傳道は自ら默許の姿となり、東京に於ても傳道事業を擧ぐべきの時となりしかば、ニコライは露國に來集する數十の學生に語學を教授し、夜間は基督教の講義をなせり。彼は此の如くして府下の傳道に着手したるも、港町は大帝都に於ける將來の教會所となすに足らざるを以て、適當の地を求めつゝありしに。偶々駿河臺に廢邸（元火消屋敷、後戸田邸）ありしを以て之を購ひ、明治五年九月を以て此に移れり。是れ今日盛々たる復活聖堂の建てられたる地也。當時此内には大小の家屋幾棟もありしかば、此家屋を以て直ちに學校となし、有志の學生輩をして在學せしめ、ニコライも亦其一室に起臥して教育、傳道の業に從事せり。此頃仙臺より上京したる者及び府下の語學研究中に信仰に進みしの者ありしかば、ニコライは此年九月を以て十名に洗禮を授けたり。是れ東京に於ける希臘教洗禮の初にして、當時政府の基督教に對する方針明ならざりしを以て、ニコライは此洗禮を秘密に執行したり。而して十二月に至りて第二回の洗禮を執行し、八名に授洗せり。斯くてニコライの名は皆く四方に聞え、朝野の名士は輾を彼の門に枉げて交際を求め、ニコライも亦好んで客に接せしかば、其名聲全國に聞ゆるに至りしが、從て彼に關する種々の風說を生じ、彼を以て露國政府の遣はせる間諜也と云ひ、又露國が彼をして其宗教を弘布せしむるは、漸くして人心を教攪し、遂に國を奪はんとする也と云ひ、世間彼を疑ふもの漸く多く、遂には彼に危害を加えんとするものさへ起るに至れり。而して時の顧官中にさへ尙斯る疑惑を抱く者ありしかば、ニコライは外務省に向て一篇の建白書を出し之を辯解せり。去れども時の政府は尙之を疑ひ、警視廳に命じ、在職の警部伊學數繁、大山綱正等をして、ニコライの學校に入學せしめ之を内偵せしめたりしが、伊學數繁は却て希臘教の信徒となり。宗教公認を上奏するに至れり。（此上奏文は蓋し上達せられざりしなるべし）。

當時東京市内には駿河臺の教會を初め、四谷、下谷、淺草、本所等に講義所を設け、各々主任の傳道者を置き、神田、日本橋等には聽教者の求めに應じて時々出張し、福音を傳へたり。東北地方の傳道は既に前に述べたるが如く、着々進歩しつゝありしが、名古屋、岡崎等の方面にも布教線を擴張し、京阪地方に傳道を試み、傳道者の數も漸次增加し、布教の形勢益々好況に向ひしかば、將來の傳道に就き傳教師を召集して集議するの必要を認め、仙臺、名古屋諸地方に書を發して重なる傳教師を召集し、明治七年（一八七四）五月ニコライ自ら議長となり會議を開き、傳教規則を制定し、各々任地を定め、澤邊を全國巡回傳教師に任ぜり。是れ日本希臘教會の一節布教會議にして、日本全國に於ける將來の傳道の組織、方針は此會議に於て定められ、爾後年々聖使徒祭を期して此會議を開くことも此時決定せられたり。

（五）全國布教の概況　ニコライの東京に移りて後は、東京を以て布教の本部となし、傳教學校、語學校等を設け傳教準備の機關となせり。然れ共函館、仙臺等には早くより傳道したりしを以て、東京に比すれば教勢甚だ盛にして、東京本會と相應じて各々其近傍に傳道せり。明治九年（一八七七）頃に至り

ては佐沼、盛岡等の教會も亦教勢大に進歩し、函館、仙臺間に於ける布教の中心となれり。又東海道地方に在りては、名古屋、岡崎等の諸教會漸く興起し、同地方傳道の中心たらんとするの形勢あり。當時傳道の任に在りし者は、各自公會に於て定められたる任地に住居するも、傳道の便宜あれば自ら振ふて數十里外にも出張傳道し、其運動甚だ活潑なりしかは、教名の傳教師の在任する教會は自ら其地方に於ける傳道の中心となれる也。故に最初仙臺より高清水地方の傳道に赴きたりし津田は、同地方より松川、千厩等を經て氣仙沼地方に至り、酒井は舊水澤縣内の諸處を巡回して傳道せり。又當時の傳教師は身の究乏を憂とせず、專心一意福音の宣傳を勤めたりしが故に、時勢の甚だ困難なりしに拘はらず傳道の進歩特に著しかりし也。

傳教師は何れも此の如き熱心を以て傳道の衝に當り、明治七年頃より同十三年頃迄の間に、福音の種子は四方に播かれ、各地方に多くの教會の設立を見るに至れり。日本に於ける希臘教の弘布は、函館より一轉して仙臺地方に及び、後又函館より東京に及び、更に舊水澤縣地方に波及せり。東京本部に於ては傳教師を教育して函館、仙臺地方に派遣せしむると共に、下總、下野地方の傳教をも開始し、東海道に在りては名古屋、岡崎に次で、掛川、袋井等の地方次第に教勢の進歩を見、間もなく豆相地方にも傳道せり。南部地方の布教線は當初の教役者が函館より盛岡、仙臺等を經て東京に往來するの間に、三戸、福岡、七戸、八戸、野邊地等の地方に布教を開始せるに起り、次第に東漸して盛岡に及び、更に盛岡を中心として花卷に及び、次で土澤地方にも傳道せられ、更に延て大槌、釜石、山田、遠野等に波及せり。又仙臺を中心として布教せられたる地方は其近郷は勿論、高清水、築館、佐沼、涌谷、古川等にして、石卷、港は之に次で起り、石卷、港の盛なるに及び、其附近にも亦多くの教會起りたり。山ノ目は仙臺と殆ど同時に傳道せられ、金成、若柳等は初め酒井其故郷なるの故を以て傳道を開始せしが、後仙臺より布教し、教會を設立するに至れり。日本に於ける希臘教會は此の如く函館を起點として、東京、仙臺、盛岡地方に及び、更に此諸地方を起點として其近國に多くの教會起れり。殊に東京は後年日本正教會の主教座となり、傳教の中心は全く東京本會に集中せり。其結果上野州、信越地方の傳教を巡ならしめ、又東海道地方の布教は更に勢力を加へ、大阪に有力の司祭を置き傳教學校を設け、時々外國宣教師を帶在せしめしかば、大阪教會は關西諸教會の中心となり、山陰、山陰の諸教會相次で起り、後間もなく九州地方にも傳道するに至れり。

（六）現今の教勢　最近の調査に依れば（一九〇九年）全國に在る教會の數二百六十五にして、其中百七十四は會堂（希臘教會にては『聖堂』と稱す）を有すれ共、其他は講義所也。信徒の總數は三萬一千一百七十五人にして、教師は大主教一人（ニコライ・セルギイ）共に東京に住す。日本人司祭三十三人、同訓事五人、外國人司祭一人也。此外に百廿二人の說教者あり。日本人信徒の寄附年額は一萬四千九百七十二圓餘也。東京駿河臺に男女の神學校あり。男神學校は七十人、女神學校は七十一人の生徒を有す。京都には女學校あり、廿四人の生徒を有す。現今教勢の最も盛なるは北海道にして、札幌教會のみにて過去一年間百名の改宗者を出せり。機關新聞としては『正教新報』を有す。現今此派にて最も有力なる日本人司祭は正教新報主筆石川喜三郎、神學校長瀨沼恪三郎、京都教會司祭三井道則、大阪教會司祭鈴木允八等也とす。（此條『日本正教傳道誌』『日本に於ける基督教運動』等の書に據る。）

日本聖公會（ニホンセイコウクワイ）　The Nihon Sei-ko-kwai (The Episcopal Church of Japan).　宗派名

米國の監督教會傳道會社、英國の教會傳道會社（The Church Missionary Society）及び福音傳播會社（The Society for the Propagation of the Gospel）の三者に依りて日本に扶植せられたる監督教會が、明治廿年合同の上組織したる教會也。左に傳道の初めより今日に至る迄の略史を記す。

【宣教時代】　傳道の初めより明治廿年日本聖公會の組織せらるゝに至る迄の時期を宣教時代となす。此時代の傳道は純然たる外國傳道會社の事業也。今左に此等傳道會社の事業の概要を示す。

（一）米國監督教會の傳道　米國監督教會は日本に傳道を開始せる最初の教會にして、其最初の宣教師ジョン、リッギンス（J. Liggins）は安政六年（一八五九）五月二日長崎に上陸し、チャニング、ムーア、ウィリアムス（C. M. Williams）は同年六月下旬長崎に來れり。次で同年九月シュミッド博士亦宣教師として來着したりしが、リッギンスは病痾のため在留僅か十箇月にして歸國し、シュミッド亦健康を損したりしため、在職一年餘にして歸國せしかば、傳道の責任は悉くウィリアムス一身に集りしも、當時耶蘇教の國禁は嚴に行はれしを以て、直接傳道を爲すの餘地なく、彼は專に日本語の研究と飜譯事業に從事したりき。元治元年支那在留の監督ブーン死せしを以て、ウィリアムス選ばれて之が後任となり、

慶應二年十月米國綏育に於て支那日本監督として聖別せられたり。同年長崎に於て一名の肥後人ウィリアムスより領洗す、之を日本に於ける聖公會最初の信徒とす。明治二年ウィリアムスは長崎より大阪に轉住し、聖年三月大阪に一小禮拜堂を設け、毎日曜日英語にて禮拜式を行ふ。ウィリアムスは實に當時彼に續で間もなく來着したりし長老教會のヘッボン、レフォルムド教會のブラウン及びヴルベッキと共に、先着宣教師として日本の教會史に特筆せらるべきもの也（『日本』の條參照）。

明治六年耶蘇教の禁制撤去せらるゝや。各派の傳道會社は競ふて男女の宣教師を派遣し來りしが、米國監督教會も亦此頃より年々多くの宣教師を送り來れり。明治十七八年頃迄に來着したりし此派宣教師の中最も重なるものはヘンリー、ラニング。ジョン、マキム（今の監督）。エドマンド、アール、ウッドマン。ジェームス、ガルデナー等也。明治六年十一月監督ウィリアムスは居を東京に移せり。明治十年の末横山鉾橋米國より歸り、執事に按手せらる、之を日本聖職の按手を受けたる初めとなす（此人は後間もなく病のため辭職せり）。明治十一年五月英國の福音傳播會社及び教會傳道會社、並に米國監督教會の宣教師等東京に連合會を開き、教役者養成の目的を以て神學校設置の議を可決し、同年直に開校せり。十六年三月神學卒業生金井登、田井正一の二人執事の按手禮を受く。

米國監督教會傳道會社が明治十九年以前に於て設立したる教會は、明治八年ウィリアムスの創設せる眞光教會を以て最古とす。次で聖約翰教會、諸聖徒教會、神田基督教會、川越基督教會等設立せらる。大阪にては聖提摩太教會（今の川口基督教會）を以て最古とし、明治四年の設立に係る。大阪英和學會は明治五年創設せられしが、後立教學校に合併せらる。立教學校は明治七年創設せられ、立教女學校は明治十年に起る。鮫暗女學校は明治八年創設せられ、世七年大阪より京都に移り、平安女學院となる。

（二）英國教會傳道會社の傳道　日本に於ける英國教會傳道會社の傳道は、米國監督教會が南北戰爭のため日本傳道に全力を盡す能はざるに至り、其助勢を請ひしに起り、其最初の宣教師ジョルジ、エンソーは明治二年一月長崎に來着せり。彼は傳道に從事すること四年病を得て歸國せしが、此間十人乃至十二人に授洗したりしといふ。エチ、バーンサイドは明治四年に來着し、エンソー歸國後自宅にて公然說教を開始し、且出島に教會を新築せんとせしが、工事半にして病を得て歸國し、當時大阪にて傳道せしエビントン（後監督となる）其業を繼ぎて之を落成せしめたり。明治六年シー、エフ、ワレンは大阪に、同七年セー、バイバーは東京に、ダブリウ、デニングは函館に來り、ピー、ケー、ファイソン（後北海道監督）は新潟に來り、各々傳道を開始し、之より東京及び大阪を中心として其傳道勢力を東西に擴張し、此會社は今日聖公會關係の傳道會社中最も大なる領分を占むるに至れり。

此會社の大阪に於ける最初の受洗者は明治九年にして其數六人なりしといふ。大阪三一神學校は明治十七年に開始せられ、桃山學院も亦同年に創設せらる。大阪聖三一教會は明治十一年、聖救主教會は十二年の設立に係る。此會社の東京に於ける傳道は、バイバーが明治七年五月東京に來着したるに初まり、明治九年の頃五人の信徒結合して教會の基礎を造りしが、是れ聖保羅教會の起源也。中國の傳道は明治十六年石見國濱田に、十八年出雲國松江に、十八年より十九年の交に備後福山及び府中に着手せり。德島傳道は十三年に開始せらる。九州に在ては長崎を中心として鹿兒島、佐賀、熊本に傳道し、北海道函館は明治七年よりデニングの傳道地なりしが、神學思想の變轉より彼は明治十五年會社との關係を絶ち、アンデレス其後を繼ぎ、北海道の各地に布教し、アイヌ傳道は明治十二年バチェラーに依りて開始せられたり。

（三）加那太に在る英國教會傳道會社の傳道　加那太トロント市ウィックリフ大學の學生は外國傳道の精神に勵まされ、明治廿一年一人の宣教師を日本に送れり。是れより多くの有志者起りて日本傳道に從事せんことを希望せしも、少數なるウィックリフ大學々生の力にては之に應ずること能はず。於是英國教會傳道會社との合同を主張するものあり。其結果明治廿八年を以て加那太教會傳道會組織せられしが此傳道會は、明治三十五年加那太に於ける英國教會傳道會社即ちエム、エス、シー、シーとなり、直ちに當會のために寄附金を募集せず、新組織のエム、エス、シー、シーに合同すべき事を議決し、其募集金額の支途は從來の傳道會之を指定し、該傳道會より擧げたる宣教師は新會社の命令に從て働くべき事となし、現に之を實行しつゝあり。

（四）英國福音傳道會社の傳道　此傳道會社が日本傳道に着手したるは明治六年にして、其年東京に於て先づ傳道を開始し、明治九年横濱傳道を初め、明治十六年福島傳道を企てたり。此會社最初の宣教師はダブリウ、ピー、ライト及びエー、シー、ショウの二人にして、明治六年九月渡來し、直ちに東京に入り、聖年に至りて傳道を開始し、同年一人の日本

人に授洗し、爾後四年間に凡そ百五十人の信徒を得たりしといふ。此間ショウは慶應義塾倫理學の教師として基督教道德を講じ、又新聞紙上に基督教擁護論を掲載したることありき。明治十五六年の交ライト及びショウ共に歸國し、傳道上一頓挫を來せしが、十六年十二月に至りブール日本監督として渡來し、此教會の日本傳道史上に一進歩期を劃せり。然るにブールは間もなく其健康を損し、明治十八年英國に歸りて永眠せしかば、ピカステス其後を襲ふて監督となり、明治十九年四月東京に着せしが、之れより此會社の傳道は更に新活氣を添ふるに至れり。ピカステスは明治廿年聖アンデレ傳道團及び聖ヒルダ傳道團を創設し、前者は英國大學出身者の團體とし、後者は婦人傳道の熱心なる貴婦人を以て組織し、之を維持經營するために英國に於て聖保羅協會を起し、之を此傳道會社と連合せしめ、此等の團體に依りて教育ある上等社會の人々に接觸し傳道せんと企てたりき。斯くて此傳道團は此年より續々日本に宣教師を送り來れり。チャモレー。キングゲ。フリーズ。ガルデナー。ライド。メードレー。ウェップ等は即ち此傳道團の派遣する所也。此傳道會社に屬する最古の教會は東京芝聖安得列教會にして、明治十二年ショウの創立する所也。聖ヒルダ傳道團の事業は東京麻布永坂に集中し、愛に看護女學校、女子神學校等あり。

【日本聖公會の組織】　以上述ぶるが如く英米二國の監督教會は其信仰、政治を同ふせるに拘はらず、其傳道會社の異るに從ひ、各々獨立の運動をなし來りしが、此は傳道の擴張、教會の發展に妨ありとの事眞に外國宣教師及び日本信徒の間に感知せられ、此思想漸次熟成して、明治十九年五月大阪に開きたる教會傳道會社に屬する年會は、我國に存在する英米監督主義の三傳道會社に關係せる日本信徒の間に具體的一致の實を擧ぐるは、一の强固なる監督教會を建設するに必要也との事、及び在日本の監督及び宣教師が速に此問題に關して三傳道會社の聯合會議を開かれんことを希望するとの事を議決せしに、ピカステス、ウィリアムス兩監督は此議を贊し、直ちに英米諸傳道會社の聯合會を開き、組織草案を作り、同年七月開きたる右傳道會社代表者會に提出して可決せられ、更に之を翌廿年二月八日開かれたる聯合總會に提出して可決せられ、三日の後即ち二月十一日日本聖公會第一總會大阪に於て開會せられ、三日間討論熟議の末法憲七箇條法規十五章を議定し、愛に日本聖公會の成立を見るに至れり。此會議に列席したるは監督二名、宣教師十八名、日本人五十二名、合計七十二名にして、ウィリアムス監督之が議長たりき。

（一）法憲　第一總會に於て定められたる日本聖公會の憲法は左の如し。即ち　第一條　本會は新舊約聖書を以て救を得るの要道を悉く載せたる神の默示也と信じ、且ニカア信經及び使徒信經に基約せる信仰の道を公認す。　第二條　本會は主基督の命じ給へる義理、サクラメント（バプテスマ、聖晩餐）及び訓誡を施行し、且監督、會吏、會吏の三聖職を固く守るべし。　第三條　本會は教主紀元千八百八十七年より毎二年に總會を開くべし（其時日會場は當時本に在留する監督の定むる所に據る）。但し監督は常置委員と商議の上臨時總會を開くことを得べし。　第四條　總會は監督及び其認可狀を有する諸教職（懲戒中の者を除く）並に各地方會にて選擧したる信徒代議員を以て組織する者とす（地方會の事は法規第十章に在り）。但し教職の人員增加したる時は教職も信徒と同じく代議員を出すべき者とす。　第五條　會議に於て監督は其可否の數を別にすべし。教職及び信徒代議員は之を共にし又は別にすることを得べし。而して會議の可否は監督の多數と教職及び信徒代議員の多數に據る。但し監督の數二名のみなる時は、もし其一名教職信徒の多數に加はれば之を議決せしものとす。　第六條　正當に召集せる總會の議權は左の如し。（一）本會の平安進歩に係る事件を議すること。（二）內外傳道會社を設立し之を管理すること。（三）法規を改正すること。（四）法憲を改正すること。但し其改正案を定期總會に提出し、其承認を得て次の定期總會に於て三分の二以上の同意を得るを要す。　第七條　總會議長は臨席せる先任の監督たるべし。此法憲は日本聖公會自治の整備する迄假りに制定せるものにして、此年九月より實行せられたり。斯くて從來專制監督制度たりしものは、此法憲に依りて立憲監督制度となり、總會は法憲に於て定められたる範圍に於てあらゆる律法を立つるを得べく、監督も其律法に從ふの義務を有することゝなれり。

（二）立法部の事業　日本聖公會は法憲に從ひ、明治廿二年四月東京に第二總會を開き。爾後二年毎に之を開き、第五總會より三年毎に東京と大阪とに於て交代に開會することゝし、明治四十一年四月大阪に於て開かれたるものを第九總會となす。

總會に出席する資格を有する者は第一總會にて監督、聖職及び各地方より其地方聖職と同數の信徒代議員と定められしが、第四總會（明治廿四年）に於て聖職代議員の數は一地方より六名とし、信徒代議員の數は之と同數なるべしとせられたり。三職位の

名稱は法憲に監督、會長、會吏とあり。其後之に就き種々の議論ありしが、第四總會に於て監督、長老、執事と改め、其傍にエピスコポ、プレスビテロ、デヤコノなる原語を假名付にすることに決し、第五總會に於て之を確定せり。

現行の法憲は從來の法憲と其趣旨異なることなきも、條項の配置、文字の用法は改正せられ、第六總會に於て議決し、第七總會に於て確定せり。現行法規は幾多の改正增補を經たる結果にして、第八總會に於て完結せられたる者也。

總會は法憲法規を制定し改廢したるの外、日本監督資金局を設き將來日本人監督設置の準備をなし、聖公會傳道局の事業を臺灣に實施し、教務局を設けて統一の機關となし、地方部の區劃を定むる等のことをなせり。

（三）地方部の分割　日本聖公會は前述べたる如く元來英米二國の三傳道會社が各自思ひ〳〵に傳道せし所なりしを以て、日本聖公會の組織成りて後も從來の歴史を無視すること能はず。且其獨立なる者も組織上の自治にして財政上の自治に非ざれば、外國傳道會社と關係を斷ちたるには非ず。從て其會社の歴史及び事情をも尊重せざるべからざりしを以て、地方部の分割に就ては種々の困難を生じ、總會毎に議論百出せしが、結局第五總會（廿九年）に至り、東京南北部、京都、大阪、熊本、函館を以て地方會の中央となす事に定め、東京南北、大阪、京都、各々獨立の地方部となりて各自の地方會を開くに至り、第七總會（廿五年）に於て熊本地方部を九州地方部、函館地方部を北海道地方部と稱するに至れり。

（四）共同傳道事業　日本聖公會の組織成ると共に、傳道會社の組織も成り、同社の傳道地を東京、大阪、熊本の近傍とし、廿一年一月より開始し、會社の維持は社員及び教會の寄附金並に外國傳道會社の補助金を以てし、地方部出金高の割合に應じて配當することゝなせり。然るに明治廿九年大阪に召集せられたる第五總會は、從來の傳道會社を廢し、新に傳道局を設置し、海外又は新領土に傳道の事業を擴張すべき準備をなし、キング、今井（壽道）二人を派して臺灣を視察せしめ、其報告に基きて本局の傳道は專ら臺灣に向てなすべき事に決し、三十年九月長老寺田藤太郎を渡臺せしむ。寺田長老は八年間臺灣に在りて專心傳道に從事し、三十八年職を辭して內地に歸り、北川千代吉之に代はれり。臺南は三十七年海保熊次郎赴任して傳道を開始し、四十二年一色檜吉之に代れり。

【日本聖公會の發達】　明治廿年日本聖公會組織當時に於ける會員の數幾何なりしや明ならず。明治廿二年末の統計に依れば、信徒全數は八千七百五十三人にして、內受聖餐者四千五百七十四人なりき。而して明治四十年末には前者は一萬三千四百四人にして、後者は七千八十六人となれり。同年末の調査に依り、其教勢を案ずるに、在職監督六人、退職監督一人、宣教師長老六十四人、執事二人、信徒八人、女宣教師九十四人、宣教師の妻五十五人、合計二百廿八人、日本人教師長老四十五人、執事廿七人、傳道師百四十一人、婦人傳道師七十人、合計二百八十三人、教會堂八十九箇、講義所百廿九箇、一年間の出金額三萬二千三百九十圓餘也。

（一）監督　最古の監督はチャンニング、ムーア、ウィリアムにして、安政六年六月初めて日本に來り、明治廿二年一たび職を辭して本國に歸りしが、後再び日本に來り、明治四十一年飄然日本を去る迄傳道のために盡したり。人其仙穗を欲せざるものなし。四十三年十二月米國に於て眠る。次の監督はアーサー、ウィリアム、ブ

マキム監督

ポーフワー監督

ールにして、明治十六年日本に來り、滯在十箇月にして病のために歸國し、後英國にて死せり。第三の監督はエドワルド、ピカステスにして、明治十九年日本に來り、敏腕の聞高く、內外信徒の嘱望を得しが、病を得て歸國し、三十年英國にて死せり。第四の監督はジョン、マキムにして、明治十三年宣教師として日本に來り、廿六年監督に任ぜられ、現に北東京

地方部監督となり任に在り。次にヘンリー、エビントンにして、明治七年宣教師として日本に來り、廿七年九州及び琉球の監督となりしが、病のため四十二年英國に歸れり。次はウィリアム、オードレーにして、明治廿九年大阪地方監督に任ぜられ、後ピカステスの後を襲ひて南東京地方の監督となり、學識、經驗を以て名ありしが、健康を害して英國に歸り、明治四十二年永眠せり。次はフィリップ、ファイソンにして、明治七年宣教師として日本に來り、廿九年北海道監督となりしが、四十一年職を去りて英國に歸れり。次はヒウ、ゼームス、フォスにして、明治廿二年大阪地方第二監督となり、現に其職に在り。次はシドニー、シー、パートリッヂにして、明治廿三年京都地方監督となり、現に其職に在り。次はセシル、ヘンリー、ボーフワーにして、明治四十二年オードレー監督の後を襲ぎて南東京地方の監督となり、現に其職に在り。次はウォルター、アンドリウにして、明治十一年宣教師として日本に來り、後疾のため一たび歸英せしが、四十二年北海道地方第二監督として來朝し、現に其職に在り。次はアーサー、ヲーにして、明治卅年宣教師として日本に來り、四十二年九州地方第二監督となり、現に其職に在り。

（二）日本人教職　明治十年福山錦橋米國より歸朝し、執事の按手禮を受けしを以て日本人教職の嚆矢となす。次で明治十六年田井正一、金井登の二人執事に擧げられ、十八年には山縣與根二、廿年には寺田藤太郎、廿一年には今井壽道、廿二年には吉澤直江、飯田榮次郎、島田弟丸執事の按手禮を受け、此年今井、田井二人は長老に任ぜらる。是れ日本聖公會最古の長老也。爾來年々執事又は長老の按手禮行はれ、今日五十名の長老と廿一名の執事を有す。聖公會教師の中現今世に知られたるは今井壽道、元田作之進、田井正一、山縣雄杜三、名田保太郎、木庭孫彦、松井米太郎、多川幾造、小林彦五郎、落合吉之助、杉浦彦道等也。

（三）聖公會の事業　（イ）普通教育　現今其事業を繼續するものゝみを擧ぐ。乾行義塾は神戸に在り。明治九年創立。專ら商業派として必要なる學科を授く。桃山學院は大阪に在り。明治廿三年創立。中學程度の教育を授く。立教學院は東京に在り。明治七年創立。立教大學と立教中學とに分る。女子の教育機關としては、東京に立教高等女學校、香蘭女學校、京都に平安女學院あり。（ロ）神學校　

月横濱に於てコレルは二人の夫婦に洗禮を授けたり。之を日本に於ける美以派最初の信徒となす。次で翌八年一月ソーバルは津田仙夫婦に授洗せしが、

マクレー博士

此頃より長崎及び函館に於ても亦洗禮を領する者漸く起るに至れり。當時横濱は美以派傳道の中心にして、現今蓬莱町に在る横濱教會の前身は天安堂と稱し、明治八年マクレーガ浸禮派の宣教師ゴープルより買ひ取りたるもの也。而して明治九年には栗村左衛八、松本總吾及び其他の人々個洗したりしが、此等の人々は洗禮を受くるや否や直ちに宣教師を助け

ハリス監督

て自ら傳道せり。東京に在りては、ソーバル津田仙の學農社に聖書研究會を開き、明治九年には相原英賢、大貫文七の二人長老派より轉じ來り、ソーバルを助けて築地に傳道したり。ソーバルは當時又神田古川英學校に於て英語教授の傍ら生徒に基督教を傳へたりしが、其教を聽きて信ずる者もありき。ハリスの初めて函館に赴きたりしは、明治七年一月にして、明治十二年東京に轉じたりしは、當時札幌農學校にはクラークあり、學生の間に大なる感化を與へつゝありしが、ハリスは之と相呼應して働き、青年の來り接して道を學ぶもの甚だ少からず。其感化今に至りて見るべきもの少からずといふ。九州に於けるデビソンの働も亦顧る成功し、長崎を中心として熊本、福岡、鹿兒島等に傳道し、明治十一年の末には鹿兒島に假教會を立て、六十二名の洗禮志願者を有するに至れり。池田德松、市來敎太郎等は即ちデビスの下に起れる傳道者也。

斯く東京、横濱、長崎、及び函館に開始したりし傳道は、種々の困難ありしに拘はらず、着々成功つゝありしが、此等の諸地方に在りて洗禮を受けたる人々は、四方に散じて傳道し、斯くて明治十年頃より武州八王子、信州の松本、松代、飯田、尾張名古屋、下總の安食、山形縣天童等に傳道を開始したりき。弘前は本多庸一の故郷にして、彼は明治五年横濱に住き、米國ダッチ、レフォルムド派の宣教師ブラウンに就て英語を學び、遂に道を信じて洗禮を受けたりしが（『日本』の條參照）後郷里に歸り、美以派の宣教師ジョン、インガを助けて傳道せり。斯る緣故に由り、弘前は最も早き傳道地の一にして、明治八年六月には十四名の青年一時に洗禮を受けたりしといふ。且弘前は最も多くの傳道者を出せし地として名高し。

仙臺の傳道は明治十七年エチ、ダブリウ、スワルツが中學校に英語を教授せる傍ら傳道を開始したるに初まり、後教會の設立せらるゝに及び、本多、山田等相繼で牧師となり、此處よりも多くの青年信徒を出せり。

此派の教育事業は明治十一年東京築地に耕教學舎と稱する英語學校を創立せるに初まる。此學校はチャールス、ビショップ。ソーバル等の創設する所にして、明治十四年元良勇次郎、和田正毅の二人主として教授の任に當り、校舎を銀座に移し、東京英學校と稱し、翌年更に築地に移れり。又此派は明治十二年横濱に傳道學校を創設し、エム、エス、ヴェール主務となり、神學及び英語を教授せしが、明治十五年の秋之を廢して東京英學校に合併せしめ、翌年青山に校舎を新築し、東京英和學校と改稱し、マクレーの總理となり、神學、高等普通學、豫備普通學の三科を設け、十六年秋教育を開始せり。是れ今の青山學院の前身也。又長崎には佛西學院あり。婦人傳道會社の事業としては青山女學院を初め、函館、名古屋、長崎等に女學校の設あり。男女學生の來學するもの頗る多く、他派の經營に係る男女宣教學校と共に間接に傳道を助けたること少からず。

（二）日本婦人會の組織及び其後の發達　斯く傳道地各所に起り、教會諸所に建設せられ、邦人にして教職に就く者漸く多きを加へしかば、明治十七年八月監督アイ、ダブリウ、ワイレー米國より來り、日本年會を組織せり。當時の統計に依れば、組織せられたる教會廿八箇、外國宣教師十三名、日本人教師廿三名、定住傳道者十九名、會員九百七名、日曜學校生徒一千二百三人、日本人信徒の出金年額凡そ千五百圓に上れり。此第一年會に於て全國の傳道地を八連回

區（今の『部』）に分つ。即ち東京東部、同西部、同北部、横濱、横濱北部、長崎、蝦夷及び本道北部にして、外國宣教師之が長老司（今の『部長』）だりき。（後日本人教師にして長老司となりし者あり）。後傳道地の漸く擴張せられ、教勢の進歩するに及び、日本全國に亘れる教會を一年會に包含するの不便漸く感知せられたりしかば、明治卅一年の年會に於て、九州を分離して別に一年會を組織するの議を通過し、翌年七月九州宣教年會組織せられ、並えて三十七年に至り正式の年會組織せられ、美以教會は二箇の年會を有することゝなれり。此派の日本人にして初めて按手禮を受け教職に就きたるは本多庸一にして、彼は明治十一年監督ワイレーより按手せられたり。明治十六年には相原英賢、栗村左衛八、十八年には古板啓之助、松本總吾（後死す）廿年には平田平三、中山忠恕、山田寅之助、山鹿旗之進等按手禮を受け、廿一年後は年々按手禮を受くるものあり。池田德松、石板龜治、笹森宇一郎、川澄明敏、關澤義之助、杉原正義、鷲飼猛、山鹿元次郎、別所梅之助等は即ち其最も重なる者也。最初の宣教師中マクレー。コレル。ヴェール。インガ等は明治廿一、二年の交歸國し、ハリスも一たび歸國せしが、明治卅七年米國美以教會の總會に於て、日本及び韓國宣教監督に任ぜられて同年再び渡來し、三派の合同成るに及び主として朝鮮に在住することゝなれり。其後渡來したる古參の宣教師にして今尚在任せるはドレーバル。ビショップ。スペンサー、スワルツ。小方仙之助。チャペル等也。

日本年會の組織せらるゝや内國傳道會社も亦設立せられ、初め自給教會奬勵のため之を補助したりしが、明治廿五年琉球傳道の開始せらるゝに至りて之を助け、卅二年に至り更に這回傳道師を置きて之が費用を辨ずることゝなせしが、卅四年再び最初の政策を採用し、卅七年に至りて更に在朝鮮日本人間の傳道に着手し、三派合同の時に及べり。此派の教會にして最初に自給せしは横濱にして、次で藤崎、銀座、名古屋、札幌、長崎、仙臺、小樽、九段、青山等相續て自給の域に達せり。合同の時には此派の傳道地は東京、横濱を中心とし、千葉、埼玉、群馬、福島、宮城、山形、岩手、青森の諸縣、北海道各所、愛知縣全體、九州各地、沖縄、朝鮮の一部に亘り、教會七十七箇（内自給十箇）講義所三十箇、會員七千人なる有せり。其所屬學校の重なるものは青山學院、青山女學院、同女子手藝學校、横濱聖經女學校、名古屋清流女學校、函館遺愛女學校、長崎鎮西學院、同活水女學校、福岡英和女學校、弘前女學校、仙臺自助館等にして、今尚盛大也。

【加那太メソヂスト教會】（一）起源　加那太メソヂスト教會傳道會社が、日本に傳道を開始したりしは明治六年（一八七三）にして、其年六月の末最初の宣教師ジョルジ、カックラン（Geo. Cochran）デビッドソン、マクドナルド（D. Macdonald）の二人は横濱に上陸せり。彼等は暫らく横濱に留まり英語を教授したりしが、偶々静岡に於て語學教授のため外國人を要したりしを以て、マクドナルドは其聘に應じ、明治七年四月静岡に赴けり。カックランは偶々中村正直と相知るに至りしが、招かれて同人社内に住することゝなり東京に移れり。彼等が横濱を去る前牧野某、安宮某の二人洗禮を受けたりしが、是れ實に日本に於ける加那太メソヂスト派最初の信徒也。マクドナルドは静岡に在りて英語教授の傍ら醫立病院を助け醫術を施したりしが、其年六月自宅にて傳道を開始し、九月に至り十一人の個洗者を得、此人々を以て教會を組織したり。是れ此派最初の教會にして今の静岡教會也。カックランは同人社に在りて英語教授の傍ら聖書を講じ、毎日曜日には基督教の説教をなしたりしが、其教を聞きて悔改むる者亦少からず。平田篤胤は彼に依りて導かれたる者の一人也。明治十年に至りジー、エム、ミーチャム。シー、エス、イビーの二人新に宣教師として來朝し、ミーチャムは直ちに沼津に赴き、英語教授の傍ら傳道を開始せしが、江原素六は當時道を信ずるに至

カックラン博士

マクドナルド博士

れり。斯くて東京及び靜岡の二地方に在りては傳道の効果漸く顯り、教會の組織せらるゝものあり、且傳道志願の青年も亦漸く起り來りしを以て、此年東京に於て神學生の教育を始め、カッタラン。イビーの二人之が教授の任に當れり。而して其九月を以て初めて部會を組織し、之をトロント年會に屬せしめたりしが、此第一部會に於て三人の青年は教師試補として推薦せられたり。翌十年イビーは山梨縣有志者の聘に應じて甲府に赴き、同市を中心として傳道を開始し、山梨部の基礎を置けり。當時基督教に對

平岩愷保

する國民の誤解尚未だ融けざりしを以て、諸地方に於ける傳道頗る困難なる者ありしも、信徒は漸くに增加し、明治十五年に至りては東京、靜岡、沼津、甲府の四箇處に傳道地を有し、東京にては築地、牛込、下谷等に教會若くは講義所を有せり。會員の總數二百八十人にして、日本人傳道者九人あり。此年擢きに試補として推薦せられたりし三人の青年は、按手禮を受けて教職に就任せり。平岩愷保、山中笑、杉山（後土屋）彥六是也。此年加那太婦人傳道會社も亦日本に傳道を開始す。明治十六年イビーは其有名なる『東京演說』をなし、教學大に振ふ。（『日本』の條參照）。翌十七年十二月東洋英和學校を麻布鳥居坂に開き、神學部、普通學部の二部を設け、カッタラン。ホイッチングトンの二人主として教授の任に當れり。翌十八年東洋英和女學校創立せらる。當時英語の需要頗る盛なりしを以て、男女學生の來學する者頗る多かりき。イビーが此氣運に乘じ基督教大學を創設せんとの企劃を起したりしは此頃にして、彼は加那太に歸り之を計劃したりしも、事意の如くならざりしを以て、其計劃を變更し、學生傳道の目的を以て本郷に一大會堂を建設するの企劃をなし、明治廿五年に至りて之を落成せしめたり。中央會堂（ヂョーチング・パレス）即ち是也。且彼は大規模の傳道を企劃し、自給傳道隊（セルフ・サプォート）なる者を組織し、官公立學校の教師たる傍ら傳道するの方法を立て、明治廿年より廿四年に至る迄の間に十二人の青年を其本國より招致せり。此自給傳道隊は後途に解散するに至りしが、中六人は此派の宣教師となりて日本に留まりたり。

（二）日本年會の組織及び其後の發達　明治十九年加那太トロント市に開きたる加那太メソヂスト教會總會の議決に基き、傳道會社に明治廿二年書記サマランドを遣はし、其六月十三日東京築地教會に於て年會を組織せしむ。此時の報告に依れば、年會區域は東京、靜岡、山梨の三部に分れ、教會の數十二箇、講義所十箇、宣教師十一人、日本人教師七人、試補及び傳道師十八人、會員一千五百三十八人、會員寄附年額千八百七十六圓餘に上れり。斯くして組織せられたる日本年會は、尙加奈太メソヂスト教會の總會に屬し、其傳道會社の管理を受け、之を母教會より見れば一の傳道年會に過ぎざりしが、此組織は愈もなく進歩の一階段をなしたり。中央會堂は明治廿三年礎石を置き、中途火災に罹りしも直ちに再築に着手し、廿五年の初め落成し、學生傳道の中心となれり。宣教師サンビーに依りて北海道に開始せられたる傳道地も徐々として効果を奏し、廿三年を以て金澤部新に組織せられ、長野縣下の傳道も稍や緒に就きたるを以て、廿七年信越二州を金澤部より割きて新に長野部を組織せり。之れより先き明治十九年創立したる內國傳道會社は、初め其年々募集せる資金を以て微弱なる教會を補助し來りしが、明治三十年北海道淀ノ川に新に傳道地を開始したり。此傳道地は其効果の顯らざりしため、明治廿四年之を廢止し會社の資金は內地自給教會設立奬勵の資に供することとなせり。教會の自給は早くより奬勵し來りし所なりしが、靜岡教會先づ自給し、續て麻布、甲府も自給の域に達したり。斯くて明治四十年メソヂスト三派の合同成りし時には、傳道地は東京を中心として、靜岡、山梨、石川、富山、福井、長野、新潟諸縣に亘り、即ち日本の中部を占め、教會二十九箇（內自給四箇）講義所廿箇、會員三千三百十八人、會員寄附年額八千五百六十五圓餘に上るに至れり。平岩、山中、土屋の外小林光泰（後先す）橋本瞻之、外山孝平等は年會組織以前に教職に就き、後原野彥太郎、太田虎吉、飯沼權一、波多野傳四郎、曾木銀次郎、高木壬太郎等相續て教職に入り、合同の際には教師廿三人、試補及び傳道師十四人を數ふるに至れり。最初の宣教師カッタランは明治廿五年病のため歸國し、後來國に在りて死し、マクドナルドは明治廿七年歸國し、翌年加那太に在りて眠れり。ミーチャム。イビー。ホイッチングトン其他先輩の宣教師も多くは辭任歸國し、合同の際留まれるものはコーツ。マッケンジー二人を除くの外多くは少壯の宣教師にし

て、當時に於ける傳道會社の方針は、日本の傳道は日本人を以て自ら當らしむべしと云ふに在りき。此派の教育事業は不幸にして失敗に歸し、一時隆盛を極めたりし東洋英和學校は、明治廿一、二年の頃より衰類し初めたりしが、三十三年三月遂に其普通學部を廢止し、神學部も其翌年廢止せらるゝに至れり。其他靜岡の英語專門學校、甲府の有朋義塾、金澤英學院等も閉校するの止むを得ざるに至れり。尤も明治四十三年に至り、加那太ミッションは南美以派と其教育事業を合同し關西學院を擴張するの議を決せり。而して婦人傳道會社の經營に係る女學校は東京を初め靜岡、甲府共に之を繼續し益々隆盛に赴きつゝあり。

【南美以教會】（一）起源　米國南美以教會（南メソヂスト、エピスコパル教會）傳道會社が日本に傳道を開始したりしは明治十九年（一八八六）にして、其年七月來最初の宣教師ジェー、ダブリウ、ランバス（J. W. Lambath）オー、エー、デュクスの二人は支那の南美以ミッションより轉じて神戶に着し、九月十七日監督エー、ダブリウ、ウィルソン特に此處し神戶に於て創立式を擧げたり。其年十一月ウォーター、ランバス又宣教師として渡來す。此派は神戶を以て中心となし、此處に傳道を開始し、續て大阪にも傳道を始め、デュクスは兩市間淀道の主任たり。住吉（今の御影）は其頃の傳道地也。同年十月ランバスは廣島に赴きて其地に傳道を開始す。翌廿年シー、ビー、モズレー縣立中學英語教師として和歌山に聘せられ、其傍ら傳道を始めたりしが、是れ和歌山傳道の濫觴也。同年ランバスは有志者の聘に應じて宇和島を訪ひ、此處に傳道の端緒を開き、同時に八幡濱の傳道にも着手せり。翌廿一年ウェーンライト大分縣立中學校の英語教師として大分に着し、傍ら青年の間に傳道を初め大に成功せり。松山、多度津及び郡路は廿二年、山口は廿四年、豐前中津は廿七年、京都は廿一年、下關は三十九年に開始せり。斯く此派は神戶を中心として西は四國、山陽及び九州の一部、東は大阪、和歌山及び京都を其傳道區域となせり。

（二）日本年會の組織及び其後の發達　南美以教會日本年會の初めて組織せられたるは、明治廿五年七月廿日にして、神戶美以教會に於て開會し、出席者

スパンラ、ウリブダ、ーエジ

は宣教師十二人、日本人教師四人にして、監督ジョセフ、エス、キー之が議長たりき。日本人にして初めて教師試補に推薦せられたるは吉岡美國（明治廿三年九月）初めて執事の按手禮を受けたるは鵜崎庚午郎、田中義弘（廿七年八月）初めて長老の按手禮を受けたるは鵜崎庚午郎（廿八年九月）にして、堀峯植、釘宮辰生等續て教職に入り、明治四十年三派合同の時には日本人教職十三人を數ふるに至れり。最初の宣教師ランバス父子、デュクスを初めウェーンライト。モズレー等も後歸國し、合同當時に在てはニウトン。ヘーガー、ウォータース等は其最も古參の宣教師なりき。日本人傳道會社は明治廿三年頃創立せられ、最初より自給を奬勵したりしが、最も早く自給せしは神戶教會にして、廣島教會之に次げり。合同の時には教會廿三箇、講義所廿一箇、會員一千五百七十三人を數ふるに至れり。

關西學院は明治廿一年の創立に係り、神學部、普通學部の二部に分れ、普通學部は中學程度に準ぜり。此外廣島女學校（明治十一年創立）パルモア學院（神戶）ランバス紀念傳道女學校（神戶）等あり。明治四十三年に至り、關西學院は加那太ミッションと合同讀賣の議を決せり。

【日本メソヂスト教會の組織】（一）合同の由來　以上の三派は米國に於て各々別に旗幟を樹つれ共、何れも英國に於けるウェスレーのメソヂスト運動に其起源を發したるものにして、其信仰儀條及び教會政治は大體に於て相一致せり。（『メソヂスト教會』の條參照）。故に日本に於て別々に旗幟を樹つるの必要なく、以上三派の合同は神の事業を遂抄する上に於て寧ろ必要也との事、早くより外國宣教師及び日本人信徒の間に感知せられ、明治廿一、二年の頃より合同の議起り、遂に以上の三派は委員を擧げ、廿三年二月名古屋に會同し、商議の上一致其提案を可決したりしが、時未だ熟せざるものありて之を實行するに至らざりき。然れ共二派一致の精神は之がために毫も減退したるに非ず。出來得る範圍に於て協力せんとの精神より明治廿四年『護教』と稱する週刊新聞を創刊し、之を以て三派共通の機關となし、最初には加那太メソヂスト派の山路彌吉を擧げて其主筆となし、明治廿年美以派の別所梅之助之に代り、明治廿四年加那太メソヂスト派の高木壬太郎更に之に代

はれり。斯くして以上三派の間に一致の精神を喚び來りしが、明治廿三年頃より更に區域を擴張し、日本に在るメソヂスト六派（以上三派の外に美音、福音、同胞の三派を加へ）の合同を希望するものあり。於是明治廿四年に開かれたる以上各派の年會は正式に委員を選びて合同基礎案を作ることを議決し、此委員の作りたる基礎案は翌廿五年の各派年會に於て可決せられたり。之に次で開かれたる各派總會に提出せられたりしが、美音、同胞二教會は當時會派と合同の議ありしを以て之に加はらず。福音教會は合同を尚早として否決したりしが、美以、南美以、加部太メソヂスト三派の總會は合同を以て希望すべきことを決し、各々數名の委員を擧げて三派合同に關する一切の權を之に委任したりき。斯くて日本に在りては、明治三十八年日露戰役終り、國民的精神の覺醒すると共に、基督教會の中にも外國教會の管轄を離れて自治せんとの精神盛に起りしが、メソヂスト三派も之を機として合同を成就せしめ、以て自治の教會を造らんとするの運動起り、東京に在るメソヂスト派の有志者は合同基礎案に修正を加へて之を實行を迫らんとし、明治廿九年に開かれたる各派の年會は有志者の提議を容れ、合同委員に向て速に合同を實行すべしとのことを促すの議を可決し、美以派の本多庸一は陰情のため有志者に推されて渡米したりしに、之に先ちて合同委員は同年七月十八、十九の兩日合衆國紐育州バッファロー市に開ける最終の旅行會に於て全會一致を以て合同を可決せり。此決議に基き、右三派の四年會より夫々選出せられたる代議員より成る一總會明治四十年（一九〇七）五月廿二日東京青山に召集せられ、米國より渡來せる三派委員の助言と說可とに依り、基礎案に基きて教義及び條例を議定し、正式に組織せられ、本多庸一擧げられて監督となりぬ。是れ日本メソヂスト教會組織の由來也。

（二）**教義**　日本メソヂスト教會が其第一總會に於て採用したる宗教箇條は十八箇條より成り、大體に於てウエスレーの定めたる廿五箇條と異なる處なし。信徒一般の遵守すべき者と定められたる總則も、亦ウエスレーの定めたるものと大體に於て同じく、唯當時英國に於て必要にして、今日日本に於て必要ならざるものを除きたるを異れりとするのみ。

本多監督

（三）**教會政治**　教會政治は教職に關する規定、米國に在るメソヂスト教會の例を參酌して定めたる者にして、教會政治の權は總會と稱する代議的團體に保有せらる。此總會は教職及び信徒同數の代議員より成り、四年毎に一回會合し、教會のために規則及び法度を制定する全權を有す。總會は必要と認むる員數だけの監督を選擧し、其任期を八年とす。總會の隨時指定する所に從ひ、教會の包括する全區域を分割して教師及び各自給教會より一名宛選出せられたる信徒總代より成り、毎年一回會合し、其區域内に在る教勢を調査し、教師の試驗、任免等の事を行ふ。此年會の區域は更に分割せられて所部となり、各部は年會の選擧に依りて各々部長を有す。部會は部内の教師、傳道師、日曜學校長、各牧會區より選出せる信徒代議員より成り、毎年一回若くは二回會合し、部内の教勢を調査し、進歩の策を講ずる等の事なす。又教會員は相團結して其局處に教團を作り、一個若くは數個の教團相集合して一の牧會區を組織し、之に牧師を置き、牧師、傳道師、勸士、幹事、組長、委托人、日曜學校長、共勵會長等を以て四季會を組織し、牧會區内の教勢を調査して之を年會に報告し、傳道志願者を推薦し、教會維持金及び他の諸費の收支を調査する等の事をなす。又牧會區は毎年々會の前後教會々議を開き、幹事を選擧し、教會の豫算を定むる等の事をなす。

教職は分ちて執事、長老の二階級となし、條例に定められたる學科の試驗を通過し、且一定の期間成功ある傳道をなしたるもの、年會の決議に基き、監督の按手に依りて任職せらる。監督は長老の中より選ばるべきものとせらる。

（四）**傳道及び其他の事業**　内外の傳道事業を擴張するため傳道局を設け、之に會堂建築課及び奬給課を附屬せしむ。傳道局の費金は會員の寄附に成り、現今主として朝鮮傳道を經營す。出版局は出版事業を管理し、機關新聞を發行す。合同前三派の機關新聞たりし『護教』は日本メソヂスト教會の機關となれり。日曜學校及び青年協會員は、日曜學校及び共勵會の事業を進渉するを以て目的とし、教育局はメソヂストの諸學校の事業を謀り孤兒教育及慈善の教師及び各自給教會より一名宛選出せられたる信徒總代より成り、毎年一回會合し、其區域内に在る教勢を調査し、教師の試驗、任免等の事を行ふ。此年會の區域は更に分割せられて所部となり、各部は年會の選擧に依りて各々部長を有す。部會は部内の教師、傳道師、日曜學校長、各牧會區より選出せる信徒代議員より成り、毎年一回若くは二回會合し、部内の教勢を調査し、進歩の策を講ずる等の事なす。又教會員は相團結して其局處に教團を作り、一個若くは數個の教團相集合して一の牧會區を組織し、之に牧師を置き、牧師、傳道師、勸士、幹事、組長、委托人、日曜學校長、共勵會長等を以て四季會を組織し、牧會區内の教勢を調査して之を年會に報告し、傳道志願者を推薦し、教會維持金及び他の諸費の收支を調査する等の事をなす。又牧會區は毎年々會の前後教會々議を開き、幹事を選擧し、教會の豫算を定むる等の事をなす。

教職は分ちて執事、長老の二階級となし、條例に定められたる學科の試驗を通過し、且一定の期間成功ある傳道をなしたるもの、年會の決議に基き、監督の按手に依りて任職せらる。監督は長老の中より選ばるべきものとせらる。

（四）**傳道及び其他の事業**　内外の傳道事業を擴張するため傳道局を設け、之に會堂建築課及び奬給課を附屬せしむ。傳道局の費金は會員の寄附に成り、現今主として朝鮮傳道を經營す。出版局は出版事業を管理し、機關新聞を發行す。合同前三派の機關新聞たりし『護教』は日本メソヂスト教會の機關となれり。日曜學校及び青年協會員は、日曜學校及び共勵會の事業を進渉するを以て目的とし、教育局はメソヂストの諸學校の事業を謀り孤兒教育及慈善

進渉するを以て目的となせ共、現今尚未だ日本メソヂスト教會の管理に屬する學校なし。

（五）**現今の狀況**　日本メソヂスト教會は第一總會に於て東西二年會に區分せられ、愛知縣、岐阜縣、富山縣の東境界を劃する一線の東部を東部年會とし、西部を西部年會とす。最近の調査に依れば、東西兩部年會を合して教會百廿一箇（内自給十九箇）講義所百卅五箇、教師百三人、試補五十二人、宣教師四十人、信徒一萬三千十五人、信徒の寄附年額三萬二千百六十四圓餘、日曜學校二百八十三校、生徒二萬二千九百八十四名也。組織の上より云へば、日本メソヂスト教會は純然たる自治教會なれ共、經濟上尚外國傳道會社の補助を受け、全く自給するに至らず。青山學院、關西學院、鎭西學院等は尚全く外國傳道會社の經營する所に係り、神學生養成の事の如きも全く之を此等の學校に委托せり。此派は日本基督、日本組合の二教派に次で大なる教派にして、現今本多庸一、山田寅之助、鵜崎庚午郎、別所梅之助、石坂倫治等の名世に知らる。（『日本』の條參照）。

日本譯聖書　Japanese Version of the Bible.　**書名**　元亀天正の頃イエスイト僧侶の初めて基督教を我國に傳へたりし當時、基督教文籍は如何程迄我國語に繙譯せられたりしや明ならざれ共、プロテスタント教の傳へらるゝ頃に及びては、基督教文學の事業は意外に早く起り、其宣教師の足未だ我國の土を踏まざる前既に其端を開きたりき。即ち今より凡そ七十年久しく南部支那に傳道したりし獨逸の宣教師カルル、ギュツラフ（Karl Gützlaff）及びウェルス、ウィルヘルム（W. Wells Williams）の二人我漂流人より日本語を學び、遂に約翰福音書を譯出し、一八三九年（天保十年）新嘉坡に於て之を出版したり。是れ邦語聖書譯の嚆矢也。後獨太人にて醫宣教師たりしベテルハイム（B. J. Bettelheim）一八四六年（弘化三年）より五三年（嘉永六年）迄琉球那覇に傳道し、稍や日本語に通ずるに至りしが、彼は路加、約翰二福音書及び使徒行傳を譯訳し、米國に歸りて後シカゴに於て一部人の助を得て之に校訂を加へ、稍や完全に近きを得たり。此譯課はもと片假名にて書かれたりしが、後之を平假名に書き換へ、一八七二年（明治五年）墺太利の維納に於て教授ブライツマイエル（Pritzmayer）之が出版の勞を取り、先づ約翰博を出し、翌年路加傳及び使徒行傳を出せり。又我國開國後間もなく渡來せる宣教師ゴーブル（Goble）ブラウン（Brown）ヘッボーン（Hepburn）等も熱心に聖書譯課の事業に從事せしが、ブラウンの譯課したるものは火災の爲め燒失し、ゴーブル譯馬太傳は明治四年（一八七一）出版せられたり。是れ我國に於て出版せられたる最初の聖書也。翌年即ち明治五年ヘッボーンは馬可、約翰の二福音書を譯課出版し、其翌年即ち明治六年更に馬太福音書を譯課出版せり。然れ共此等の譯課は一個人の手に成り、且聖書合し、聖書會社の事業として新約聖書譯課の事を議決し、繙譯委員を擧げたり。此委員に擧げられたる者は、ヘッボーン、ブラウン、グリーンの三人にして、後マクレーも亦之に加はり、明治十年（一八七四）三月廿五日を以て新約聖書の譯課に着手し、明治八年に出版せられたる者等も出版せられたり。

其翌年即ち明治六年更に馬太福音書を譯課出版せり。然れ共此等の譯課は一個人の手に成り、且聖書合し、聖書會社の事業として新約聖書譯課の事を議決し、繙譯委員を擧げたり。此委員に擧げられたる者は、ヘッボーン、ブラウン、グリーンの三人にして、後マクレーも亦之に加はり、明治十年（一八七四）三月廿五日を以て新約聖書の譯課に着手し、明治八年に出版せられたる最初の聖書也。翌年即ち明治五年ヘッボーンは馬可、約翰の二福音書を譯課出版し、

聖書譯課の事業に從事せしが、ブラウンの譯課したるものは火災の爲め燒失し、ゴーブル譯馬太傳は明治四年（一八七一）出版せられたり。是れ我國に於て出版せられたる最初の聖書也。翌年即ち明治五年ヘッボーンは馬可、約翰の二福音書を譯課出版し、其翌年即ち明治六年更に馬太福音書を譯課出版せり。然れ共此等の譯課は一個人の手に成り、且聖書合し、聖書會社の事業として新約聖書譯課の事を議決し、繙譯委員を擧げたり。此委員に擧げられたる者は、ヘッボーン、ブラウン、グリーンの三人にして、後マクレーも亦之に加はり、明治十年（一八七四）三月廿五日を以て新約聖書の譯課に着手し、明治八年に

心かりしかば、委員は斯くして既に飜譯せられたる者は、多少の修正改竄を加へて之を採用し、其他は各自分擔を定めて之を飜譯し、斯くして十年の歲月を費し、明治廿一年（一八八八）に至りて舊約聖書飜譯の事業全く終了したりしかば、同年二月三日大會を東京に開きて聖書飜譯事業の完成を祝せり。

斯くして成りたる和譯聖書は、日本に於ける完備せる聖書の最初の飜譯にして、譯者は英譯漢譯等を對照したること勿論なれ共、之を譯するに於ては原文よりなせり。此飜譯の特徴とも云ふべきは前半世紀間に行はれたる漢文的日本文に反し、特に和文的要素を多く用ゐたるに在り。行文流麗、雅俗宜を得て、日本に於て爲されたる諸文學飜譯中の最も上乘なる者と稱せらる。然れ共是れ最初の飜譯として稀有の成功也といふだけの義にして、素より完全せりとの義に非ず。中には意譯に過ぎて原意に遠き者あり、譯せる者あり、譯文譯語の全當を缺き者等ありて其缺點少からず。故に改譯の必要は早く認められ、近時に至りては個人として之が改譯を企つる者さへあり。明治卅七年の頃内村鑑三、植村正久、小崎弘道、柏井園の四人相謀りて之が改譯を企てたりしが、此事業は半途にして止めり。宮崎八百吉は羅馬書を私譯し、左近義弼亦馬太傳（明治卅九年）及び詩篇（明治四十二年）の私譯を公にせり。明治卅九年五月東京に開きたる聞要會は聖書改譯の議を可決して委員を擧げ、日本在留宣教師會も亦同様の議を可決して委員を擧げしが、宣教師會の議決は明治四十三年の初に至り漸く實行の緒に就き、フォクス。ハリントン。グリーン。松山高吉、別所梅之助、川治萬藤江等改譯委員に擧げられ、同年四月改譯の事業に着手せり。羅馬教會にては高橋五郎を主として四福音書を飜譯せしめたりしが、同教會宣教師ダルラーグ（白耳義人）は武笠三其他の助を得明治卅八年頃より改譯に從事し五年の星霜を經て、新約聖書を脱稿し、四十三年七月之を出版せり。希臘教會にてはニコライ主教主任となり、中井某之を助け、明治三十三年頃舊約を飜譯出版せり。バプテスト教會にても明治三十三年新約を飜譯出版せり。

ニムロデ Nimrod. 人名 創世記に『クシ、ニムロデを生めり、彼始めて世の權力ある者となれり、彼はエホバの前に在りて權力ある獵夫なりき、彼の國の起初はシナルの地のバベル、エレク、アッカデ及びカルネなりき、其地より彼アッスリヤに出でニネベ、レホボテイリ、カラ、及びニネベとカラの間なるレセンを建てたり、是は大なる城邑也』とあり（十の八―十二）。ニムロデを以てイグバル（Izdubar）又はギルガメス（Gilgamar）と同一視する者あり。アッスリヤ學者も初めは此說を歡迎したりしが、後イグバルの巴比倫發掘はギルガメスなることを排棄せられたり。一八七四年ジョセフ、グライヴェルは、ニムロデはメロダク（Merodach）と云へる日神也との說を唱へ出せり。此說はメロダクはセミチック人の神に非ずして、アッカデヤ人の神なる事、及び創十八の『クシ、ニムロデを生めり』とあるは、彼はクシ人にしてセミチック人に非ずとの義なる事也との事實に基き、多くの學者の承認する所となれり。巴比倫人はニムロデを以て權力ある獵夫也となし、又ニムロデの名を以て呼べる地少からず。彼等は後代に至り彼を以て巴比倫市の建設者となし、其邑に建てられたる高塔を以て彼の經營に歸し、バベルの塔は其模型を之に取れる也とさへ傳へたり。

ニル The Nile. 地名 埃及の大河。新約には記されざれ共、舊約には屢々記されたり。尤もニルの名は用ゐられず。シホル（黑き流の義。書十三の三、塞廿三の三、耶二の十八、代上十三の五）イール（邦譯には『河』とあり。詩七十八の四十四、結廿九の三、卅の十二）埃及の河（歴八の八、九の五）又は單に『河』（創四十一の一、出一の廿二、二の三）と稱せられたり。此河は希伯來人古代の歴史と密接の關係を有したれ共（創二の三、七の廿、民十一の五、詩百五の廿九、耶四十六の七、亞十四の十七）ユフラテの如く深き印象を與へざりしが如し。

ニール ジョン メーソン Neale, John Mason 人名 一八一八―六六 英國福音派の牧師又作詩家。倫敦に生れ、蘭橋トリニチー、カレッヂを卒業し、サセックスの受給牧師となり、東グリンステッドのサクビル學校長となる。神學博士號なも受く。最も進みたる高教會派に屬せしが、其意見を包ませず發表し、其所信を固持せるよりして褒と攻擊とを受け、十四年間其の監督より停職を命ぜられ、一八五七年には僅を作りて代理火刑に處せらる。其の教入は甚だ薄かりしが、敬神と慈善に勉むると共に、其の天才を活用して無盡の文學的勞作をなして在活を維持したり。一八五六年には聖マーガレット姉妹團を起せしも、當時は非常に不人望なりしが、後には大に人民に喜ばれ、全國に最其の看護者を供給するに至れり。彼の文學的産物は稀稀なる程に多し。其中最大なるを『聖東方教會及び亞歴山教會の歴史』四卷『詩篇解釋』『老人讀本』『ヒエロログス』『マッ島教會事故』『東の聖』『初期教會ヤンセッ徒歴史』

『對兒童說教』『アンチオケ教會』『人路聖稅の適合』等なり。此等に於て彼の意見と目的とは明白徹底し、當に宗教は實在中の最も確なる者なるを示さんとせり。所信强くして之を言ひ顯はすに憚る所なし。殊に兒童のための著書はパンのために書きたる者ながらも、歴史によりて古の迫害及び殉教の様を最も面白く且有益に書き顯はし、教會史を通俗に且信仰的に書きなしたる使徒稀なるほどなり『アブトンガの地面』『埃及吟行者』『主の隨從者』『大齋物語』『基督教士道及び忍耐の話』など大人も讀むべく、其の得難きを嘆ぜられ居れる日曜學校教材として最好なり。ニールは又詩を作りて十一度シートニアン賞を得、其他にも詩を作りしが、最も名を得しは讃美歌に於てなりとす『病者の讃美歌』『兒童讃美歌』『所註讃美歌』『中世讃美歌』『ベルナールの讃美歌』『東方教會讃美歌』等創作あり。殊に飜譯は最も妙を得たるものなりき。ニールの羅馬教會に傾ける思想をば喜ばぬ人も多けれど、其の讃美歌をば愛する人多く、其の勤勉と勇氣と堅確と忍耐とは彼を追懷するものゝ一樣に尊敬する所なり。

ヌの部

ヌレムベルダの和約（ワナク） The Religious Peace of Nuremberg. 事蹟 アウグスブルヒ國會（一五三〇年）に於ける羅馬教徒の決議は、獨逸プロテスタンド教徒の立場を危からしめたりしが故に、彼等は之に抗議したれ共、皇帝カルロス五世は兵力に訴へても其決議を遂行せんとするの意志強だ明かなりき。於是プロテスタント教に關する諸侯は、一五三一年シュマルカルドに相會して防禦同盟を締結したりき。然るに幾ならずして形勢一變し、プロテスタント教諸侯は佛國と提携してカルロス帝に對抗せんとし、加ふるに土耳其兵侵し來れるを以て、帝はプロテスタント教諸侯の助なくしては、土耳其兵を防ぐ能はざるを慮り、一五三二年春ヌレムベルグに於て彼等と商議を開き、秘密和約を結べり。帝は此和約中に高等法院に提出せられしプロテスタント教徒に對する訴訟事件は一切之を取合はざる事、且宗教大會の開かるゝ迄は兵力を用ゐざる事等を約束したり。此和約はプロテスタント教徒に取りて大なる勝利なりき。

ネの部

ネアポリス Neapolis. 地名 使徒傳聖書に見ゆ。マケドニヤに向ひて出帆せし際上陸せし地也（徒十六の六―十一）。此の地は十哩程内地に位するピリピの港にして、現今カヴァラと稱せらるゝ人口凡そ五千人を有する地と同一視せらる。近時カヴァラの附近にて重要なる古代の遺跡並に遺物多く發見せられたり。

ネアンデル ヨハン アウグスト ウィルヘルム Neander, Johann August Wilhelm 人名 一七八九―一八五〇 獨逸近代の教會史大家。ゲッチンゲンに生れ、本の名をダヴィド、メンデルと云ひ、猶太人なり。哲學者メンデルソン及びハノーフェルの遺生尚書スチーグリツと外祖的關係あり。生れて幾何ならずして、夫と別居せし母に携へられてハムブルグに至り、スチーグリツ等友人の助によりて教育を受け、高等幾衡校にては特にプラトーンを研究せしが、シュライエルマッヘルの『宗教論』を讀で感激し、宗教の理想はこれなりと信じ、一八〇六年基督教の洗禮を受け、名をネアンデル（新人）と改め、全心を以て主の用に立たんと欲し、其まで志し居りし法律研究を止めて神學研究を決心し、シュライエルマッヘルの居りしハルレ大學に入りしが、戰爭のためゲッチンゲンに轉じ、ブランタ等に學ぶ。然れども翌年に至りてシュライエルマッヘル。シェリング。フィヒテを一齊に棄てゝ新約聖書及び師父に心を寄せ、暫くして教會歴史研究の決心を友人に告白し、誤に陷らざらしめんことを神に祈れり。卒業してハムブルグに歸りて教授し、又歴々説教し、一八一二年ハイデルベルヒ大學の特別教授となり、一三年伯林に招かれ、シュライエルマッヘル。デウエッテ。マルハイネーケ等と並びて教會史及び新約講解を教へ、大に成功す。以前より史論を公にせしが、此時より益々盛く『ユリアヌスと其時代』『聖ベルナール』『ノスチック說開發史』『聖タリソストム及び著名人物』『非ノスチックス』等出で來り、終に一八二六年其の大事業たりし『基督教及び教會の一般歴史』第一卷現はれ、一八四五年に至り第五卷成る。死後シュナイデルは遺稿より續篇一卷を出だしぬ（一八五二）。ネアンデルは此外『使徒の基督教會樹植及び訓練の歴史』を著はし、又『耶穌傳』を著はしてストラウスの著に對抗したり。ネアンデルの史學界に現はれし時には、所謂プラグ

マチズム勢力を振ひ、教會史の大家ブランクは同派の人なりき。ブラグマチズムは基督教を以て單に教義の組織のみとなし、凡ての變遷進歩は唯だ個人の思想計劃より起るのみにて、客觀的勢力の存するなしとし、凡て上よりの力を認めず、教會の發達を基督の生命の顯現とはせずして、之を人間の過誤を表はす繪畫の陣列場と見做せり。素よりシェリング。マルハイネーケ。ギーゼレルの新歴史觀起りつゝありしとは言へ、尚勢力なかりしなり。此時に當りてネアンデルは既に其の『エリアヌス』（一八一二）に於て攝理の歴史を導けるを說き、心理的の說明に代へて歴史的材料の研究の結果より斷案をくだし『ベルナール』『クリソストム』にても同じ精神を以て論ずる所あり『一般歴史』の序文には、基督教は人心の底に生れし組織に非ず、天より下りしものなりと說き、基督教を教義のみに非ず上より下れる神の力なりとせり。故に彼の所見にては、基督教は人の力と神の力との結合徹底なり。人間に過れく行はれんとする神の生命の發展史なり。而して神の此の生命は基督に於て完全に現はれたり。凡ての基督信者は不完全ながら或る容子に於て基督の此の生命を再現する者なり。教會歴史は人類間に行はゝ基督の生命を表はすものなれば、其督の生命が經驗に依て知らるゝに比例して理解せらる。教會史は教會の生命を教會自らが意識することなり。ネアンデルは個人の性格及び傳記を書くに最も妙を得たり。主觀を交へずして史上の個性を明かに示すことネアンデルの如きは、前代の史家になかりし所なり。然れども彼は個人に重を置きて、教會全體に在る基督の生命を見るを忘れたり。其の世界を征服する力、其の教義を造り、法律を立て、習慣を起し、美術を誘を出す上に有する力に氣付かざりき。是れ其の史眼の缺點なり。彼は歴史を唯だ三時代に劃し、一は純粹なる精神的宗教時代、二は一旦殷ぎし衣裳を再び引き纏はんとする時代、三は其の反動にして自由を再び得んとする時代なりとせり。

彼は三十八年間伯林にて教授し、聖書講解なる組織神學なる倫理なる教へぬ。組織神學はシュライエルマッヘルに依る所多し。學生に於ける其の感化は大なる者にて、其の單純にして小兒の如く、世故に迂く、職分に忠に、自己を責むるに嚴、他を待つに寛大にして愛に富める、而も凡神論及び本體的唯心論なる故容赦なく攻擊し、又『福音的教會時報』とも猛烈に論爭せる、時人を啓發し時代の信仰を勵ましたる所少しとせず。彼は元來身體虛弱かりしが、一八四七年より視覺を損し、其の教會史著作を續くる能はず。死ぬる前數日間中氣にかゝり、床中尙講義を草し、教會史の續稿を思ひ居りしが、最後に何時ぞやと問ひ、我は疲れたり睡るべしとて別離なかはし眠を閉ぢしが是れ即ち永眠なりしなり。彼は生涯獨身なりき。其の狀貌は中背にして細長く、溫顏親しむべく、黑く强き猶太人の類色を具へ、眼くぼみて光り、眦はなはだ濃く、統らぬ黑髮額上に垂れ居たり。風采等には全く頓着せざりしと云ふ。

ネオプラトーン學派（ガクハ）**。**『新プラトーン學派』の條を見よ。

ネクタリウス Nectarius.

スタンチノープルの教長、タルソの人、もと議官なりき。三八一年の會議後ナジアンゾスのグレゴリウス辭任してコ府の教長缺け居りしより歸鄉の途に就かんとしつゝありて帝在中なりしタルソの監督デオドルスを訪ひしに、監督は太く此の老議官の人品に感服し、心私かに自己が教長職候補者として立ちし恥おしといふ。皇帝の推薦は諸監督の意外にもネクタリウスに來れり。何となれば彼等は曾て其名を知らず、彼は信徒にも非ず、否洗禮さへ受け居らざりければなり。教長となりては會議なれば自由と穩和を以て處理し、三九〇年頃懺悔信徒の制を廢せり。此はノヴァチウス紛爭後希臘教會に設けられたる特殊の信にして、受洗後の罪の懺悔を聽く者なるが、秘密を守るべき規定なるに拘らず之を洩らすことありたるが故なり。

ネコ Neco.　人名　古代埃及の王にして、舊約には常に『パロ』なる語に伴ふ（王下廿三の廿九―廿三、代下廿五の廿二、廿六の四）。其の父サメチアス一世の後を繼ぎ、第廿九朝（前六一〇―五九四）の第二王たり。此の王の歴史は舊約に引證を有し、又（ヘロドタスの中にも簡短なる記事を有すれ共、彼が治世の事蹟に關しては明かなる歴史を存せず。但し第廿九朝はマネッ附近に居を占めたりしが如し。

ネストリウス Nestrius.　人名　古代教會史上基督論にて有名なる人。西利亞の一市ゲルマニキヤに生れ、モプスエスチアのテオドールに從ひアンテオケにて教育を受けたるものゝ如く、僧としては隱遁的生活と正統的信仰護持に熱心なるとを以て譽を得、說教に依ても尊敬を博せり。四二八年コンスタンチノープルの監督に擧げられ、ソクラテスの言ふ所に從へば、異端に對する烈しき敵なりき。多くの說教にて長老アナスタシウスに與みし、マリアを神の母と呼ぶ稱號を非認し『言』たる神は母を有せず、唯だ之が自ら取りし人性こそ母を有するなれ、十字架にかゝりて死しは神にはあらずと言へ

り。此の說はコンスタンチノープルにて大なる騷亂を招き、プロタルスなる人の　は反對し、教會なる一教治家はネストリウスの意を結じ、神提頭、廣くなるや、亞歴山派、代表者たる亞歴山のクリロスは、身コンスタンチノープルの教長の競爭者たる地位にも立てるより、反對の態度を表し、コ府に在る自派の僧及び皇帝の妻と妹とに書を贈れり。されど皇帝はネストリウスに與みせり。ネストリウスは頗る珍大の態度を以てクリロスに答へ、又機を得て羅馬の監督ケレスチンに基督論の意見を明定せんことを求めしに、ケレスチンはネストリウスに反對し、四三〇年の羅馬大會にて、若し速に其の說を撤回せずんば破門せんと決議せり。クリロスは亞歴山に大會を開きて、十二條に同意調印すべきをネストリウスに要求し、ネストリウスは唯だ自己の要求十二條を公けにして之に答へ、アンテオケ派の神學者アンテオケのヨハネス。サモサタのアンドレウスまたクリロスに反對して論爭す。ネストリウスとクリロスとの神學說の差は次の點なり。ネストリウスは、亞歴山派の受する語句『神の母』てふことを以て、神の事と此世の事との混同にして異教的なり、神豈母あらんや、受造物豈造られざる神を生み得んや、ロゴスの神性は其の肉の宮と區別するを要す、誕生、十字架刑、又死といふが如き死ぬ可き者に有ることは、神性に有り得べからず、死ぬべき人性は本質神的に非ず。『神人』中の兩性はいつも兩つながら存す、而も『神人』は一人格なり、彼は人に於けるる神なり、されば、マリアは基督の人性をば生みしも、神の子を生みしと言ふべからず、基督の母にも非ず、神の稚き機關にもあらずと說き、クリロスは之に反して、ロゴスは實際に人となれり、人性は神性の中に和せり、ロゴスは人の人格を取らず、受肉の後には兩性なく、唯だ受肉せるロゴスの單性あるのみと說き、ネストリウスを以て基督を二つの子、神を以て充たされたる人とする者なりと言へり。ネストリウスは又クリロスを以て ロゴスを肉に化すとなし、人より惱まされ得るものとする者なりと說き、互に敵手の言を捕へて、有らゆる方に押し詰むる傾ありたり。此に於て皇帝テオドシウス二世は、四三一年エペソ會議を召集して之を決せしめんとせり。ネストリウスは法官イレニウス及びカンディディアヌスの護衛監督の中に、エペソに到着し、クリロスも五十の監督を率ひて到着せしが、アンテオケのヨハネスを首とする西利亞の監督等は遲延したり。十六日の延期の後、西利亞監督等の近づける報ありしに拘ほらず、クリロスはカンディディアヌスの抗議を冒して會議を開き、ネストリウス派を訴へ、二百の監督は彼を監督職より落し、凡ての僧會より排除せり。西利亞人は到着して大に怒り、別にカンディディアヌスの司會の下に會議を開き、クリロスを免黜せしも、羅馬よりも使節到り、クリロスの處置を是認したりしかば、兩黨は先を爭て帝に申告す。帝は代表者をコンスタンチノープルに招きしも、カルケドンより近く來るを許さゞりしが、ネストリウスは論爭に疲れて遂に志切なりしかば、帝は之をアンテオケの僧庵に歸らしめ、反對黨は勢力を得て帝都に入るを許され、クリロスは其の教會に歸れり。然れども帝は尙ネストリウスの說に與みし、兩派の調歩包容を欲し居りしが、かゝる間にクリロスも皇室の心を得んとて神學說を多少改め、アンテオケのヨハネスを始めネストリウスの友人は彼を離るゝに至り、終にアンテオケ派が基督に兩性ありとすると共に、神の母てふ語を用ふるの害自を皇帝に惡し、クリロスも之を守れて但容成立せり。然れども前派何れも滿足せざりき。クリロスも自派の者より攻擊を受け、中央亞細亞、西利亞、テッサリーの諸監督はアンテオケ派を造りてヨハネスに反對せり。然れどもヨハネス及び皇帝は公然クリロス黨となりて包容の實を擧げんとし、四三五年帝はネストリウスを亞剌比亞のペトラに追放し、其書を燒きぬ。ネストリウスは上埃及の砂漠島に住みたるしきが、埃及地方官等より遂ほれては遂はれて諸地に移り、其の終る所を知らずなりぬ。

ネストリウス派（ハ） Nestrians.　宗派名　ネストリウス及び其基督論に關する爭論は、前の條に之を述べたり。此條には其以後（四八九年後）の歴史の概略を記す。此一派は俄に强大なる宗派となり、羅馬帝國より追放せられたるより彼斯、印度、支那の方面に向て大なる活動を開始せり。其初めて傳はれるは彼斯にして、エデッサのイバスより彼斯の監督マルスに贈れる書翰、西利亞語に飜譯せられたるタルソのデイオドラス及びモプスエスチアのテオドルの著書は、ネストリウス派教義の彼斯帝國に弘布せらるゝに與りて大に力ありき。エデッサより追放せられたる教師等も亦彼斯に入り、ニシビスに其居を定めたり。之れより先き基督教は早くより彼斯に入り、セルキアの監督は彼斯教會の首長として公認せられ、彼斯の諸監督はニカヤ會議に列席したりき。パビーウス（Barsuma）は『教長』の稱號を得たりしが、彼はセルキアのネストリウス派の最初の監督なりしといふ（四九八―五〇三在職）。彼の相續者アカシウスも亦ネストリウス教徒也との疑を蒙り、マッブクのケナイアスは彼及び其徒に『ネストリウ

ス教徒』の名を與へしが、是れ實に此名稱の起源也。彼等は自らを『カルデヤ基督教徒』(Chaldæan Christians)と稱し、ネストリウスは彼等の教長に非ずとのことを主張せり。然れ共パビーウスは大膽に自らネストリウス教徒也と公言し、教長職を立て、會議を開き、教長、監督及び司祭に一人の妻を娶るを許し、セルキアの監督管區の優越權を認めたり。パビーウスの相續者等は凡ての監督管區にネストリウス教徒を任命し、此派の教義を全國に傳播せんとしたり。此派學問の中心はニシビスにして、此派は有名なる神學者、醫師、哲學者等を出し、當時東邦に於る文學を代表したりき。

此派は又亞剌比亞に傳播し、西利亞、パレスチナ及び埃及にも傳ぼれり。使徒トマスが初めて基督教を輸入したりしと傳へられたる印度にも此派は渡及し、唐初支那に來りし景教と稱する一派も亦ネストリウス派なりしといふ(『支那』及び『景教』の條參照)。

第六世紀の初め彼斯のネストリウス派は二に分裂し、二人の教長を置きて相爭ひしが、十二年の後和睦して一となり、バウル教長となりしが、數月の後マル、アバ一世之に繼げり。彼はネストリウス派の新譯書を希臘語より西利亞語に飜譯せり。今日尚使用せらるゝ者是也。彼は又教會統治の上に驚くべき力を顯はせり。五四四年會議を召集し、此會議にて教長及び監督は婚姻せざるも可也との議を通過し、又ニカヤ信條を以て憑據となすべきことを定めたり。皇帝ホルミヅ四世及びコスロース二世はネストリウス教徒を保護し、後者は國内の基督教徒をして凡て此派に歸せしめたり。

亞剌比亞のネストリウス教徒は唯に迫害を免れたりしのみならず、回教徒の保護を得、政治上重要の地を占めたるものさへありき。蒙古人の下に在りても亦同樣にして、一二六八年旭烈兀汗がバグダッドを陷れし時、ネストリウス教徒をば敵したりしといふ。其相續者も亦此派に對しては寛容を示したりしが、此派の儀式が佛教の儀式に類似する處ありしは、少くも之が一原因なりしと信ぜらる。マルコ、ポーロに依れば、成吉思汗の一子は基督信徒なりしといふ。斯く亞剌比亞及び蒙古に在りては、ネストリウス教徒の地位頗る順境に在りしが故に、東亞細亞に於ける基督教は長足の進歩をなし、一二五八年バグダッド攻圍の後、廿五箇の都市はネストリウス派教長の施政を承認したりき。初めて此派を迫害したりしは帖木兒にして、是より以後此派は漸次衰類に赴けり。羅馬加特力教の熱心なる傳道も亦此派の衰類を來すに與りて力あり。一二四七年法王インノーセント四世が、東方ネストリウス教徒に教人の監督を遣はして、羅馬教に復歸せんことを勸告せし以來、世々の法王此政策を繼ぎしかば、漸次其勸告に從ふ者を生出し、一四四五年にはタブロ島のネストリウス教徒悉く羅馬教會に歸せり。一五五一年教長シメオンの死せし時、其相續者パルマヽの教長たるを承認せざる一派はヨハネス、スルカを選びて自派の教長となし、羅馬に送りて之を其職に聖別したりしが、爾後凡そ百年間其相續者其職を繼承せり。一六八四年インノーセント十一世はヨセフと名けられたる教長を指定せしが、此は爾後羅馬の支配權を承認せるネストリウス派教長の名となれり。他の一派も亦其制度及び教長を有し、第十七世紀の終より『シメオン』なる名を之に與へ『カルデヤ人の教長』と稱せり。此教長は人跡の達せざるタルダ山卓の密谷に住す。斯くて一たび勢力を振ひたりしネストリウス教徒も今は衰へて、其殘徒は此等の諸山及びオルーミヤ附近の平原に限られ、一八三三年には其數僅に七萬人に過ぎざりき。一八三四年米國傳道會社は宣教師を送りて、彼等の羅馬教に復歸するを防止せり。彼等が何古代アラミヤ語を保存せりとのことを明にしたりしは、此等の宣教師也。印度に於けるネストリウス派も一時長足の進歩をなしたりしが、一一三〇年教長ヨハネスが羅馬の支配權を承認したりし以來漸次衰類に赴き、其殘徒今は僅少に過ぎず。現今亞細亞諸國に在る此派の信徒は總數凡そ二十萬を出でざるべしといふ。

ネストル Nestor. 人名 一〇五六—一一二〇頃 露西亞史學の祖。十七歳にしてキェフのペトシェリアン僧院に入り、一生僧として終る。露西亞古語にて『史記』を著はす。其後著者等彼の事業を伝る/〜相繼して五世紀間連續す。書は魔術的臭味ありと雖も尊敬すべく又信ずべきものなりとす。

ネブカドネザル Nebuchadnezzar. 人名 ネブカドレザル (Nebuchadrezzar) の變じたる者。前六〇四年より五六一年迄巴比倫を統治せし巴比倫帝國の建設者にして、ナボポラサルの長子也。メデヤ王の娘アムヒヤと婚を結べり。前六〇五年ユフラテ河畔の大戰にパロ王を破り、西亞細亞より埃及人を駆退せり。今や巴比倫の勢力は遂に埃及の國境にまで及び、ユダ王は巴比倫王に臣屬せり。偶々父のナボポラサル逝きければ、彼は巴比倫に召還せられ、其後を襲ひて前六〇四年即位せり。彼の治世は戰爭と建築を以て充され、彼に叛きしツロは其治世の第七年に襲撃せられ、十三年の後征服せられたり。後後は又エルサレムのエホヤキムを攻め（王下

廿四の一）エホヤキムの死後、其の子エホヤキン位に即きけるが、三ヶ月の後位を廢せられて巴比倫に虜はれ、彼の伯父ゼデキヤ其の位に擧げられたり。ゼデキヤは埃及のエブリースと謀り、巴比倫の羈絆を脱したりしが、ネブカドネザルは三度ユダに攻入り、埃及軍を追ひ、エルサレムを圍み、二年の後（前五八六年）之を陷れ、宮殿及び神殿を破壊し上流人士を追放せり（王下廿五の一）。ゼデキヤは逃れてエリコの附近に捕はれ、巴比倫に送られ、兩眼を抉出され、其の子及び重臣等は殺されたり。ネブカドネザル即位の三十七年（前五六七）彼は又埃及のアマシスと戰へり。事は耶四十六の十三—廿六、結廿九の二—廿に記さる。前五六一年其の子イヴルメロダクに位を讓れり。曾てネネケリブのために破壊せられ、イサハドンのために再設せられたるバビロンはネブカドネザルの時又世界異跡の一たるに至れり。彼は三箇の壕を設けて堅固なる城となし、其の二大壕の一はイムガルベルと稱し、他はニミチベルと名けらる。彼は又バビロン及びカルデヤの都會に瓦顧の費を投じて神殿を築き、又十五日間に完成せられたる新宮殿は、妻のために懸庭を設けたりき。彼に關する記錄に依れば、彼は熱心なる宗教的性格を有せし人なりしが如し。

ネヘミヤ Nehemiah. 人名 有名なる猶太の愛國者、エルサレム城の改修者。以色列人の巴比倫に擄ほるゝや、彼も俘囚の一人として彼處に往き、アルタシヤス王の寵を得、其酒人として之に仕へたりしが、王即位の廿年（前四四四）エルサレムに歸り、其城壁及び先祖等の墳墓を改修するの許可を得たり。於是彼は總督及び王の山林を守る者に與ふる王の書を得て、巴比倫を發し、エルサレムに到着し、總督等の助を得、工事を初めしに、サンバラテ・トビヤ等彼に反對して起り、彼の事業を妨げんとせしかば、ネヘミヤは民に盾、鉾及び弓を持たせ其宗族に從ひて之を備へ、敵人を防がしめ、以て其工事を成就せり。ネヘミヤは無恐の愛國者、賢明なる指導者にして、國民の貧しきを知り、其受くべき報酬を受けず、其食膳には日々百五十人の猶太人侍座したりしといふ。彼の事蹟は尼希米亞記に記さる。彼は舊約書中最も高貴にして義俠なる人物の一人にして、ヨシュアの如く敬虔にして活動的なる平凡も其國民性を恥しめず、最も熱心なる愛國家として其光を輝かせり。彼は又巧妙なる技術的才能に豪ねるに、勇敢にして思慮ある大將の器を以てせり。

尼希米亞記 The Book of Nehemiah. 『以士哪書及び尼希米亞記』の條を見よ。

ネボ Nebo. 靈名 巴比倫の神の名。ネボは預言者の義を表し、元來巴比倫のベルメロダク神の意を解釋する者なりしが、遂にベルの廟に祭らるゝに至れり。ネボはメロダク及びザルパニトの子にして『聽聞者』タスミトの夫なりき。彼は文學及び科學の統監者にして、楔形文字の組織は彼の創作なりと思惟せられたり。故にカルデヤの古語に彼は『學者』と稱せらる。彼は又『賢者』『智者』『神託の創作者』『文字の作者』『開始者』『耳の展開者』等の稱號を有す。彼は後火神ヌスクと同一視せられたり。西亞細亞に巴比倫の勢力盛なりし時代（前三八〇—一四〇〇）に於てネボの名稱と禮拜は巴比倫の他の諸神と共に西利亞に移されたり。故にモアブにネボの山あり（申廿二の四十九、賽十五の二）ルベンにネボの邑あり（民廿二の三）。以賽亞書（四十六の一）にはベルメロダク及びネボを巴比倫市を代表せる者として記せり。又後カルデヤ帝國の起るに及び、ネブカドネザルといふが如く、王の名にネボを附せり。

ネボ Nebo. 書名 （一）邑名 モアブの邑名にして、民廿二の三にはセベムとベオンの間に在りとし、廿二の廿八にはキリヤセームとベオンとの間に在りとなす。モーセがルベンに與へたる土地なり（代上五の八）。又ユダ王國にネボと云へる邑ありしを、哪二の廿九、尼七の廿三に記さる。（二）山名 モーセが死に臨み約束の地を一眸の中に認めし山也（申廿二の四十九）。ヘスボンより西南五哩、死海の東北端より西九哩半の所に在り。

ネメシウス Nemesius. 人名 基督教哲學者『ペリ、フセウス、アントロポウ』といふ人性論の著者。同書の表紙に據れば、フェニキヤのエミサの監督なるが、其一代も其の存生時代も凡て不明也。或はナジアンゾスのグレゴリウスが書信を與へしカパドキヤの長官異教人ネメシウスと同一人ならんかとの說あれど、確證なし。第四世紀の終頃の人と思はる。フィロポヌス。ダマスコのヨハネス。エリアクレテンシス等は其の著書を引用する所多し。

ネリ フィリッポ デ Neri, Filippo de 人名 一五一五—九五 羅馬教會聖徒の一人、オラトリウム會衆の創設者。フィレンチェに生れ、幼より快活溫厚の質を現はす。火災のため父母の家貧しくなり、聖ゼルマノに在る西人なる叔父の所に送らる。一五三三年叔父の懇なる勸を拒みて羅馬に行き、アウグスチヌス派僧侶の指導の下に神學を研究し、之を卒ふるや直ちに書庫を賣て貧者に施し、慈善に身を献ず。三十歳の時聖靈を祈りて己を忘れ大地に倒れ、胸腔拳大に擴張す。後年解剖せしに心臓

は堅固なるも肋骨二枚折れ居たりと云ふ。一五五一年僧職に入れられ、貧者盲人を顧るため設けし聖三一會創設にも與かりしが、オラトリウム會衆の創設は特に彼の名を殘す所以のものなり。同會は祈禱、聖書、師父文書及び殉教記の朗讀、唱歌吉の會合を、ネリが一室即ちオラトリウムにて開きたるより起れり。之に用ひたる音樂を『オラトリオ』と呼びしなり。會合は親睦と快濶の氣に充ちぬ。ネリは快濶は憂鬱よりも基督教に適ふと勸め、其の奇蹟は大抵快濶なれ疑ふ勿れといふ言を以て行ひ、日常の生活も此の精神を以てし、社交も輕快の情趣を以てし、遊戯をさへ試みしかば、パリサイ的の態格を改良せんと欲する人々の注意する所となれり。羅馬の『カルディナル』司牧は彼が同盟に舞踊を勸めしとの理由を以て訴へ、懺悔僧の職を停止し、說教を禁ぜしが、同カルディナルの死し時ネリはカルディナルとならんことを勸められしも之を辭しぬ。奇蹟は生時にも死後にも屢々起りしと傳へられ、一六二二年聖者號を贈らる。オラトリウム會衆は一五七五年法王命にて認定せられしが、同會は凡て平等主義を取り、會員は僧俗に非ず、其の世上の職を棄つるを要せず、又立誓するを要せず、其の勸むる所は祈禱、聖禮典の執行及び說教のみ。以太利の同會は之に屬し、一五七六年に建てらる。三年後タルッチはナポリ、ミラノに教會を立て、其より諸地方に續々建設せらる。ネリに繼で羅馬の同會の長となりしは、教會史家バロニウスなり。一六一一年にはベルユ、巴理に同會を起し、次第に佛國に弘まる。マルブランシ。トマサン。マスカロン等は此の流の人にして、一七六〇年には佛國に五十八の會館ありたり。

ネルセス　クラエンシス Nerses Clayensis. 人名　一一〇〇頃—一一七三　アルメニア教會の首長としてネルセス四世と稱す（一一六三—七三在位）。マヌエル、コムネヌス帝の婚アレキシウスと會見の時、アルメニヤ教會と希臘教會との差別の無意味なるに驚き、ア教會の信仰告白を皇帝に贈り、合同の交渉其より始まる。後、帝は希臘哲學者テオリアヌス及び僧院主ヨハネス、ウトマンをアルメニヤに遣はし、兩派大討議の末兩教會は益々近きものとせられ、皇帝は更に九條の異點を指摘してア教會の承認を要求せしに、ア教會の地方大會は之を承認し、更に總會を開かんとせし時ネルセス死せり。彼は文學上にも神學者及び詩人として著はれ『信仰の言』『子耶穌』を韻文にて、說教、註解、祈禱等を散文にて著はせり。

ネルセス　ラムブロネンシス Lambronensis. 人名　一一五三—九八　アルメニヤ教會の首長。キリキヤのラムブロンの公子オシンの子、母はネルセス、タラエンシスの姪なり。コンスタンチノープルにて教育を受け、希臘、拉丁、コプト諸語に通じ、一一七六年タルソ及びラムブロンの大監督とせらる。說教の天才ありしも謹慎生活を愛し、就任の翌年二十四歲にして辭職し、曠野に退き『ミサ』の儀式に就て著作する。されど尙

革命後は資顏せしも一八五三年聖ロシュのベテトの刺激にて復興し『耶穌と無罪のマリアのオラトリア』と稱す。グラトリは之に屬す。英國にてもニウマン國教會員を會員として一八四七年バーミングハムに同會を立て、四九年倫敦にも一會立ちぬ。彼の傳記はカベケラトロ及びフオン、ペクマンの著あり。前者は英譯せらる。

ネルセス　クラエンシス Nerses Clayensis. 人名　一一〇〇頃—一一七三　アルメニア教會の首長としてネルセス四世と稱す（一一六三—七三在位）。マヌエル、コムネヌス帝の婚アレキシウスと會見の時、アルメニヤ教會と希臘教會との差別の無意味なるに驚き、ア教會の信仰告白を皇帝に贈り、合同の交渉其より始まる。後、帝は希臘哲學者テオリアヌス及び僧院主ヨハネス、ウトマンをアルメニヤに遣はし、兩派大討議の末兩教會は益々近きものとせられ、皇帝は更に九條の異點を指摘してア教會の承認を要求せしに、ア教會の地方大會は之を承認し、更に總會を開かんとせし時ネルセス死せり。彼は文學上にも神學者及び詩人として著はれ『信仰の言』『子耶穌』を韻文にて、說教、註解、祈禱等を散文にて著はせり。

ネルセス　ラムブロネンシス Lambronensis. 人名　一一五三—九八　アルメニヤ教會の首長。キリキヤのラムブロンの公子オシンの子、母はネルセス、タラエンシスの姪なり。コンスタンチノープルにて教育を受け、希臘、拉丁、コプト諸語に通じ、一一七六年タルソ及びラムブロンの大監督とせらる。說教の天才ありしも謹慎生活を愛し、就任の翌年二十四歲にして辭職し、曠野に退き『ミサ』の儀式に就て著作する。されど尙

邁行中なりしアルメニヤ、希臘兩教會合同交渉には勢力ある關係者となり、アルメニヤ教會大會議の開會の時には雖大なる說教なし、希臘教會の要求に從は所々故障を申し出で、自教會よりも要求を提出せり。されどもア教會側の多くの讓歩に由て交渉全然調ひしに、皇帝は未だ使節のコンスタンチノープルに達せざるに先ちて死せり（一一八〇）。其後は時勢の亂れし上に、アルメニヤ教會と十字軍との關係害なりし事が希臘の疑を招き、ネルセス憂々一一九七年希臘に赴きしも其の効なく、合同問題は終に沙汰止となりぬ。此のネルセスも以上の說教の外註解、說教、歷者傳等を著はせり。

ネルガル Nergal. 靈名　クタ人の拜したる神として王下十七の世に記さる。セミチック以前の時代にはウガルとして祈願せられ、後代にはニパルのベルの子と爲され、マラド市の神ルガルバンダと同一視せられたり。アッスリア國王は彼を狩獵の守護神と仰ぎたり。

ネロ Nero. 人名　羅馬帝（五四—六八在位）。羅馬の基督信徒の最初の迫害者。紀元六四年七月十六、十九日の間に、羅馬パラチン丘の南腹より出火し、六晝夜燃え擴がりし末、更に北部より出火して三日間續き、十四區中の十區は灰燼に歸せしとき人心鼎沸し、帝自ら放火せしとふ風說起る。是れ必ずしも不穩の妄想に非ず。ネロは偉大なる事を爲さんと欲する心抑へ難き者あり。羅馬を整理し、又は改築せんと願ひ居りたれば なり。ネロは人民の激怒を去らんとせしが、並々の事にてかなふべくもあらぬを知り、公に火災を基督信徒の所爲として訴へたり。何故に基督信徒を選びて此の犧牲にせしかは不明なり。說は皇后ポッペアが、猶太人と謀とかりし

上に帝の寵愛にして、多分基督信者なりしと思はるゝアクトを妬みて、帝に信徒を讒訴せし故と思ふ人もあれど、當時の羅馬人の眼中には猶太人と基督信徒との別はあまりなかりしなるべければ、帝は羅馬人が一般東邦人を憎惡せる僻見を利用し、殊に基督信徒が基督の近く再來し人類を審判し、世界を火にて燒くと信じ居れるを知りて、之に乘じて罪を嫁せしものなるべし。ネロは己が庭園内にて基督信徒を或は十字架に釘け、或は野獸の皮に包みて犬に喰はせ、或は杭に縛りつけ蠟をかけ之に火を點して燈火とするなどの事をなせり。市以外には迫害は行はざりしが、基督信徒に與へたる感動は大なりき。初代の教會にてネロ死にしかど、再び基督の敵として現出すべしてふ風評ありしを以ても知るべし。默示錄中には屢々隱語を以て彼の名を出だしあるは近代批評家の言ふ所なり。

年忌祭 Anniversarius. 行事　第二世紀より、基督教會にては殉教者の忌日を紀念するの風起り、又各人の家庭にても死したる家族の忌日を紀念することを爲せり。羅馬教會にては今日にても此風を維持せり。然れ共此風習は主として富者の間に存し、貧者の爲には諸死者紀念祭（All-Souls' Day）あり。

ネンニウス Nennius. 人名　ケルトの聖徒。ケルトの聖徒中此名の人多し。其の一人八〇九年頃に死せしネンニウスは、エルボドスの弟子にして、北ウェールスの大監督たり『ヒストリア、ブリトヌム』の著者なりと稱せらる。然れども第十二世紀以後の稿本三十中彼の著に歸するは二あるのみにて、第十世紀前の稿本には著者の名なし。同書はサクソン人に逐はれしブリトン人が跡大なる作話を作りて自ら慰めたるものにて、第九世紀初年に出來せしものゝ如し。

ノの部

ノア Noah. 人名　レメクの子にして、セッ系の第十位即ち最後のもの也。ノアの單語は『慰むる』の語原より出で、レメクが『此子はエホバの詛ひ給ひし地に由れる我操作と我勞苦とに就て我等を慰めん』と云ひて、斯く名けたりし也と云へり。ノアの生れたりしは世界の人類が腐敗の極に達したりし時にして、神は之を罰せんため大洪水を氾濫せしめ、ノア及び其家族と各々一雙（又は七雙）の生物とを方舟に乘らしめて之を救ひ、其他の萬物は悉く之を滅せり。ノア方舟より出でゝエホバのために境を築き、燔祭を之に獻げたり。而してエホバは虹を以て其贈となしてノアと契約を立て、再び地上に洪水あらざるべきを約せり。洪水の起りしはノアが六百歲の時にして、彼は洪水の後尙三百五十年生存し、九百五十歲にして死せり。彼は又葡萄酒製造術の最初の發明者なりしが如し。以上は創世記五の廿八—九の廿八に記されたる記事の大要にして、此物語は一見單純にして矛盾なきが如くなれ共、詳に之を見れば、相異れる二箇の文書より成れるを知るべし。即ち一はエホバ典と稱せられたる者にして、此處にはノアが諾を放ち出したる事、犧牲を献げたる事、エホバ之を喜び、再び人類を咀ふまじきことを約束し給へる事抔の美しき物語を記せるのみなれ共、祭司典より取りたる他の部分には、方舟の構造、大小、ノアの祀編、人を殺し血を食ふ事を禁ずる法律、虹の契約等に關する詳細の物語を記せり。且或る點に在りては此二の記事は矛盾せり。即ち祭司典には生物は其類に從ひ各々二の生命を保つべしとあれ共（六の十八—廿）エホバ典には諸の潔き獸を牝牡七寃、潔からぬ物を牝牡二寃取るべしとあり（七の一—三）。又祭司典は百五十日を經て水減り初め、八ケ月と十三日にして山々の巔顯はれ、一年と十日にして全地初めて乾きたりとあれ共（八の三、五、十四）エホバ典に依れば、洪水の續きたりしは四十日四十夜に過ぎず（七の十二、八の六）。

（一）洪水の歷史的なる事　近代に至るまで基督教會にては、創世記に記されたる洪水を以て世界的也となし、海中動物の化石、世界の各地に住する多くの人民が洪水の物語を有する等の事實を以て、聖書の記事の眞實なる證據となし來りたりしが、地質學及び比較神話學研究の結果と其他の理由とに由り、今日の聖書學者は斯る信仰を以て最早維持し難しとなすに至れり。即ち（イ）世界に保有せる水若くは水蒸氣全體の量を以てするも、地球の全面を蔽ふが如き洪水ありとは信じ得べからざる事。（ロ）洪水に關し諸國民の有する神話は、一箇の同一なる出來事に關する者と信じ難き事。（ハ）今日人類の有する人種言語の相違、及び原初人の有したる文明より推すに、聖書の年代の推定せる時期中に、世界的洪水ありしとは信じ難き事。又各所の洞穴、墳墓等より發見する原初人の遺物は、人類が今日迄數千年の間斷へず發達し來りしことを示す事。（ニ）聖書の記事より推すも、其洪水が今日吾人の所謂全世界に及びたる者とは信じ難き事。例之ノアは各生物を二寃

方舟に入れたりとあれ共、世界中の生物な悉く探集するが如き事は到底なし得べからず。假に之なし得たりとせば、如何にして之な悉く一箇の方舟の中に收め得たりしや。又數人にて如何に之な飼養し得たりしや。此等の事のみな考ふるも、此洪水の世界的に非ざりしな知るべし。以上の事實に依り、今日の聖書學者は創世記の記事な以て、初代人民の物語又は文學の中に發見する多くの物語中の一也と信ずるに至れり。

（二）聖書の記事と他の洪水物語との關係　諸國民の間に傳へられたる諸種の洪水物語は、聖書の洪水物語な異樣に傳へたる者也との古來の信仰の維持し難きことは以上云へるが如し。創世記の物語に類似の點より此等の物語な類別すれば左の如し。

（イ）最も聖書の物語に近似するは巴比倫の洪水物語にして、其全體の主意及び詳細の點に至るまで類似せるな見れば、もと同一の物語が異樣に傳ばりたる者なること疑なし。巴比倫物語は二の形狀にて存在せり。其一は前三世紀巴比倫史な書きたる埃及の祭司ベロサスの書中に傳はりたる者にて、簡短にして價値少し。其二は楔形文字の碑文に傳ばりたる者にて、之に依れば、シトナピヌチ（又はカシサドラ又はキストロス）ユフラテ河口に於て洪水の歷史な其孫ギスヅバルに傳ふ。智惠の神エア、シトナピスチにアヌ、ベル等の諸神が洪水な下さんとしつゝあることな告げ、其災な免れんため舟な造るべきことな命ぜしに、シトナピスチ初は之な肯ぜざりしが、遂に之に從ふ。此處に造船のこと詳記せられ、中に『遲青なもて其内外な塗るべし』と云へる語さへ記さる。斯くて食物及び所有の金銀舟に運び入れられ、シトナピスチの奴隸、妻妾、家畜、野の畜、人の子等携へ入れらる。舟は日神サマスの助に依りて造られ、シトナピスチが戶な閉ぢし前夜洪水地に臨めり。此處に風神水神等のあるゝ有樣、神々さへ恐れてアヌの天に逃れ、女神等が泣き叫びて救な求むる光景な詩的に描けり。斯くて六日六夜の間雨降り續き、七日目に水減り、陸乾き初む。シトナピスチ窓な開けば、許多の屍體の水に浮ぶな見る。舟はニジルの山に止りぬ。第七日に彼は鴿な放ち出しけるが、鴿其足の跡な止むべき處な得ずして彼に歸れり。次に燕な放ち出しけるに亦然り。最後に鴉な放ち出しけるに、彼れ腐肉な食ひて再び歸り來らざりき。斯くて動物な放ち出し、山の麓に壇な築き犧牲な獻ぐ。諸神其馨しき香な聞き、蠅の如く犧牲の上に集り、女神はアヌの造りし虹な起せり。然るにベルは其意の思ふ儘に遂行せられざりし事な怒りて獨り壇に來られ、舟に止まりて生存者の外出な妨げんとせり。於是アダル、エアが諸神の謀なシトナピスチに洩したりしことな告げ、エアはベルと共に忠實なる者なも謀人と共に滅ぼさんことな請ひしに、結局エアが諸神の謀な洩せしは夢に依りてなしたることなりしに、彼又人事明となり、ベルは舟に入りてシトナピスチと契約ななし、彼及び彼の妻は爾後神に列すべく、又シトナピスチはユフラテ河口に住すべき事な告げたり。此物語は少くも紀元前三千年頃の作なるべしと信ぜらる。巴比倫は既に族長時代より進歩したる文明な有したりしに反し、猶太人は其れより遙か後に至るも尙文明の程度カナン人種よりも低かりき。且巴比倫の言語、文字は出埃及前既にパレスチナに行はれ、巴比倫朝廷とカナン人種との交通機關となりし事はテル、エル、アマルナ碑の證する處なれば、洪水の物語は巴比倫人が希伯來人より得たる者に非ずして、希伯來人が巴比倫人より得、其の思想感情に從ひて之な改作したるものなること疑なし。

巴比倫物語

（ロ）唯大體に於てのみ聖書及び巴比倫の洪水物語に類似する多くの物語あり。此等の物語は各々相異りたる原因より起りたる者にして、聖書及び巴比倫の物語に何等の關係あるに非ず。此種の者は其原因の相違に依りて之な三種に區別すべし。即ち（a）水な以て創造的元素となす創造說より起れる者にして、馬來半島のビンナ人が地球は皆て堅き外皮な以て蔽はれしが、神之な破りて水な地の全面に漲らせ給へりと信ずるが如き是也。（b）歷史的出來事、又は非常なる天災に關する傳說より起りたる者にして、海岸又は島國に住する人民が、海嘯又は河水の氾濫若くは地冥、火山の破裂等に依りて受けたる災禍の洪水物語となれる者也。例之フィヂー、ベリウ等の島人が有する洪水物語が、火山の破裂に由りて島の消失せるより起れるが如き、エスキモー人の洪水物語が地

震と關係な有するが如き、支那の洪水物語が河水の氾濫と關係な有するが如き是也。（c）或る場合には他に解釋し難き事實な洪水に歸するより起ることあり。例之亞米利加印度人の中には其銅色なること、其言語、性質の他の人種と異れることな以て洪水に歸し、古昔人類の乘りたる舟が二に破れ、彼等の先祖は其一半に他の人類は他の一半に乘りたるが爲め也と信ずる者あるが如し。又海中動物の化石、氷河等な洪水に歸する者あり。

（八）古き神話の聖書又は巴比倫物語と混交し、又は之に依り着色せられたる者亦少からず。希臘の洪水物語、印度の洪水物語等は此種に屬す。（尙洪水の事に就て研究せんとする者は、ジョルジ、スミスの『カルデヤ創世記物語』アレストウイクチの『地質時代の終りの現象及び其洪水の傳說に及ぼす影響』アンドレの『人類學上より考察せる洪水物語』チャールス、ハルドウィックの『基督及び他の教師』セースの『高等批評及び碑銘』ディルマン、デーリッチ等の『舊世記註釋』等な見よ）。

ノアの書（ノオ）　The Book of Noah.　書名

舊約經外聖書中の一書。此書は單行本にては傳はらざりしと雖も、其大部分はエテオピヤ語のエノク書中に在り。即ち其六十、六十五—六十九の廿五、一〇六—一〇七が元來ノアの書に屬したる者なりし事明にして、之な離してまた元の一書となすことな得べし。書中の記事はレメクにノアの生れたりし事、彼の身體は雪の如く白く、薔薇花の如く赤く、毛髮は羊毛の如く白く、眼は日の如く輝き、口な開きて義の主な讚美せしかば、レメク恐れてメトセラに謀り、メトセラ又エノクに問ひしに、エノク來るべき洪水の災な預告せし事、ノア人となりて幼に地の沈みつゝあるな見、往きてエノクに尋ねしに、彼又人類が天使の秘義な學び惡魔の力な得、神な畏るゝことな忘れたるが故に、洪水な以て之な滅すべきことな彼に語りたる事、ノア自ら方舟な造るべき神の啓示な蒙りたる事、洪水來りてノアと其家族の外萬物な除き去りたる事等也。此書が何時頃書かれたるものなりや正確に定むること能はざれ共、紀元前五十年より紀元八十年迄の間に成りたる者なるは殆ど疑なきが如し。此外に更に後世に成りたる希伯來語のものあり。此書が以上云へるノアの書より來りたるものなること又疑なし。

ノヴァリス　實名はフリードリヒ　フォン　ハルデンベルヒ　Novalis (Friedrich von Hardenberg).　人名

一七七二—一八〇一　獨逸の文學者。アイスレーベンに近きウィデスチットに生れ、イェナにて法律及び神學な學び、世でゝ文學に身な委ね。ティーク及びシュレーゲルと友とし善く、又極端なるロマンチック派の統領たり。其の非常に超自然の事な普通と見、普通の出來事の中に超自然の事な見しことは、其の未成稿『ハインリヒ、フォン、オフテルディンゲン』及び『夜の讚美歌』之な證す。最好著は『歌史』なり。其の天性の優美なる事も、幼年從びしモラヴィア派の教訓も、ウィンツェンドルフ及びラファーテルとの會話もロマンチック派の審美的趣味傾向も此の内に調和せり。ジョルジ、マクドナルドの英譯あり。『スピリチュアル、ソングス』と云ふ。

ノヴァティアヌス　Novatianus.　人名

第三世紀中頃の羅馬教會分離派の首領。其の分離せしまでの事跡は確かなら字。唯だ明かなる點のみ尊ばれば、病苦に篤かりし時監督の認定なき洗禮な受けしに、後羅馬にて長老とせられ、僧侶兩方より其の無功の洗禮（當時の習慣に依れば）のために嫌しきに反對な受けしことあり。然れども一方には其の學問と能辯と、又其の公私の生活に缺點なきとにて大なる人望な得たり。其の教會に分離な起せる顚末な尋ねれば、紀元二二〇年以後羅馬の教會は偶像禮拜、姦淫、殺人な破門にて罰せしが、懺悔僧なるものゝ生ずると共に此の制先づ破れ、次で法王カリクストス一世が破門者の復歸許可も不可能には非ずといふ布令な發するに至りて更に此制破れ、ヒッポリタスの之に反對して分離するな見るにさへ至りたりき。其後は平和の時代なりし故、たゞ肉慾の罪のみ行はれて、偶像教に陷る者もなく、次の法王等は稍嚴格なる方針な取りしかば、教會の分離も幾何もなく癒されしが、デキウス帝の迫害起りては狀態大に變化し、惡教者續出し教會の存在さへ危ぶまるゝに至れり。恰も其の時教義も發達して、教會は神が人な救はんため必要なるものとして特に立てしもの、個人は僧侶に依てのみ神と關係し得るものならば、教會が赦免と復會とな拒みし者は、神如何で之な許して惡な與へ得べけんやといふ思想も、愈々確かに言ひ顯はさるゝに至れり。デキウス帝の世法王（實は監督）ファビアヌス死するや、其の後な襲ふものゝ直ちに殺さるべき事明なりしため、新法王の選ばれざること十五ケ月、此間長老及び執事の五十三人より成れる團體、法王の職な執りしが、ノヴァティアヌスは其上席に在りたり。此間に發せし書論三通今日に傳はれるが、何れもノヴァティアヌスの書きしものらしく、其中に彼等は決して棄教者な捨てず、却て懺悔するときは之が復歸な許すと言ひ、又新法王選ばれなば

新方針の取らるゝこともあるべきを豫想せり。されば其頃までは教會分離の形勢はなかりしなり。然るに二五一年長老コルネリウス法王に選ばるゝや。其の手續等に何等の遺漏なかりし事は明かなれども、羅馬には此の選擧を喜ばざる少數派ありき。多くの長老及び懺悔僧等より成れり。彼等ノヴァチアヌスを立てゝ分離法王となし、以太利の三監督にて之に任職式を行ひたり。此の分離は初の間は何等教義上の異同ありし故に非ず、實に個人同志の反對に基ぜしに過ぎざりしなり。之より先き戒規を嚴格にすべきを唱へて已まざりしはクプリアヌスにして、ノヴァチアヌスや懺悔僧マキシムス及びモセスなどは羅馬に在る時之を援け居たるのみ。然るにクプリアヌス其の避難所より自己の教會に歸る前より、既にフェリキシムスの分離の起りしため、其の嚴しき說を去て寛教者復歸許可說を容るゝことゝなり居たり。此を以てフェリキシムスを熱心に助けしノヴァティアヌスが羅馬に來りし時には、コルネリウスとクプリアヌスとは益々密に相結び、二五一年には懺悔僧等も分離を愛へ教會の平和を復せんと欲して、ノヴァチアヌスを去りゝ本教會へ歸り、分離派は孤城落日の悲境なりき。然れども他國にては監督中戒規の弛緩なるを厭ひて、或はノヴァティアヌスに就き、或は唯だ之を靡從するもあり、殊にアンチオケの監督ファビウスは最も同情を寄せ、大會議を召集して之を議せんとせしに、其の問會に先ちて死に、同會議は終に穩和說を決せり。されど埃及、アルメニヤ、ポント、ビツニヤ、キリキヤ、カパドキヤ、西利亞、亞剌比亞、メソポタミヤなど東方にてはノヴァティアヌスの說勢を得て、分離の形勢は益々危きを示すに至れり。此の論爭の初は單に監督と長老、懺悔僧との關係、懺悔の有効無効の問題等にて、長き間論じつ辯じつ爭はれしが、其の大眼目となれるは即ち教會の『鍵』の力如何なり。有權者の派はクプリアヌスの說を取れる者にて、教は唯教會に依てのみ得らるゝ者ゆゑ、明かに教會より離れし者は必ず亡びざるべからず、故に明かに教會を離れざる者に聖禮典を拒むは、之を神の最後の審判の時神より絕たるゝに至らしむるものなり、たとひ復歸許可を與ふるとも、神の救恤拒絕を妨ぐる能はずと說けり。ノヴァチアヌスは之に反し、教會には重き罪人（即ち偶像禮拜者等）を永久に教會より除くの權利と義務とあり、教會は救のため人類を教育する設備には非ず、聖徒の集合なり、此内に重き罪人あらば其の集合は存在し難しと說き、監督と長老の關係の如きは第二流の問題なりと說けり。ソクラテス及びカタリ文書に依れば、ノヴァティアヌスは殉教して死せりと云へど、此は確ならず。其より後二世紀間カタリの教會は小さけれど堅固に發達し、モンタヌス派にして加はる教會も多く、加持力教會とは教義も靈法も異る所は少かりしが、西班牙、ガリア、上以太利、羅馬、マウリタニア、亞細亞、パフラゴニア、フルギア、ビツニア、スクテア等に弘まり、コンスタンチノープルにてはソクラテスの時三教會あり。ニカヤ會議にはノヴァティアヌス派の監督アリウス出席して優待を受け、皇帝より母教會に合同せんことを勸められしも肯ぜざりき。其より十年を經てコンスタンチヌス帝神學宣見に多少の變化を來すや、ノヴァティアヌス派をマルキオヌス派ワレンチニアヌス派と同等に扱ひ、公開禮拜を禁じ、教會を閉鎖し、其書を燒かしめぬ。アリウス論爭の時にはノヴァチアヌス派教會は加持力派に好意を有し居りしが、其の修るや間もなく羅馬にてインノーセント一世は彼等の教會を閉鎖し、ケレスチヌス一世は公開禮拜を禁ぜり。されど東方にては第六七世紀まで存在を保ち居たり。以上ノヴァティアヌスに關する事をクプリアヌスの敵對的書論を始め、ユウセビウス。僞クプリアヌス。ソクラテス等の諸文書に徵して知らるゝなり。

ノーエル　アレキサンデル　Nowell, Alexander　人名　一五〇七―一六〇二　英國

エリサベス朝の宗教家。ランカスターシヤのリードホールに生れ、十三歲の時ブレースノース、カレッヂに入り、一五三六年パチエロルの稱號を得、四三年倫敦ウエストミンステル、カレッヂの長となり、五〇年說教者の准允を得、五一年ウエストミンステルにて一席を與へらる。改革主義に從ひ、メリー即位の時には大陸に脫れ、エリサベスの即位するに及びて歸り、ミヲドルセクスの大執事にすられ、一五六〇年にはカンターベリーの『カノン』となる。其頃より第一流の學者として知られ、諸般宗教界の事に重大の關係をなし、六三年にはカンターベリー教會議の議長となり『宗教條例』を議定し、六五年にはドルマンがジュエルの『辯證論』を攻擊せしに對して論爭し、常に大なる公事の起りし場合又は名士の葬式の場合に重大なる務を托せらる。アルマダ滅亡の宣告を大市長等の前にて第一になすべく選ばれたるも彼なりき。アイザク、ワルトンはノーエルが心柔和にして學問深く細心にして敬虔に富めること、又鈞を好みて時間の十分の一を之に用ひしを記せり。彼は又信仰問答を著はし、國會より許可せられ賞讃せられ、六三年之を上下兩教會議に獻納す。其の問答の一は七一年拉丁語に飜譯せられ、大陸諸

は序文を附して世に行はしめたり。

ノスチック派　Gnosticism.　學派名　ノスチック派は猶太人の思想と東邦異教の思想と又希臘哲學風の思想とを混和せる一種奇怪なる學派にして、其萌芽の基督教以前既に存在したりしことは、ペイローンの著書の中にも、又經外聖書の中にも之を發見するに依りて知るべし。而して此思想は早くより基督教會に入りて基督教と混和し、幼稚なる基督信徒の信仰を亂さんとしたり。使徒保羅がコロサイ教會に贈りたる書翰に於て戰へるは、即ち此ノスチック派の所說也。（『哥羅西書』の條を見よ）。然れ共此派の盛大に赴きしは第二世紀にして、第二、三世紀の間盛大を極め、セリンサス（Cerinthus 使徒時代の終頃の人）バシリデス（Basilides 百廿五年乃至百三十年頃の人）及びヴアレンチヌス（Valentinus 百六十年頃に死す）は其最も有名なる代表者也。尤も此學派の中にも相異る傾向あり。セリンサスは猶太思想に傾き、後の二人は希臘思想に傾き、亞歷山のノスチック派と稱せられたり。又西利亞等東邦の異教に傾ける者あり。サトルニヌス（Saturninus）、ハドリアン帝時代の人）の如き即ち是也。

此の如くノスチック派には種々の流派あれ共、彼等に通じたる主要なる思想は、宗教上の信仰（πίστις）を單に信仰に止めずして、進んで之を宗教上の智識（γνῶσις）となさんとするに在り。ノスチックの名稱は即ち此處より起れる者にして、彼等は宗教上の信仰に智識的根據を與へんとしたる者なれ共、彼等の所謂智識は通常の所謂智識に優りて神秘的に解釋を直觀せる者也。彼等の此世界を觀るや只管宗教的眼光を以てし、先づ神の觀念より初め、發出の教義に依りて世界の起源を解說し、神人調和說を以て之を終れり。此の如く彼等は吾人の知れる世界より出發して、以て萬物の究竟的原理に及ぼすことを爲さず、却て究竟的原理より出發し、之より萬物の存在を推論せんとしたり。即ち彼等は神を以て世界より離れ、夫れ自ら絕對的に完全也となせる者にして、彼等が此の如き觀念に達したりしは、蓋し當時の思想の潮流自ら之をして然らしめたりしに外ならず。故に彼等の說明せんとしたりし問題は、神と世界、殊に神と人との關係にして、彼等は神を以て全く萬物の上に超然たる者と爲せり。ゲアレンチヌスに依れば、天地創造以前に太原存在せり。此太原は彼の所謂『深奧』（βάθος）と稱する者にして、絕對的に唯一獨存のもの、非創造的のもの、時間にも空間にも吾人の領解すべき何物にも關係を有せざる者也。バシリデスに依れば、神は『在らざりし者』即ち思想も概念も意志も目的も情操もなき存在にして、此『在らざりし神』が、在らざりし物より在らざりし世界を造りたりし也。此の如くノスチック派の神は、吾人の全然領解す可らず、又言語に表出す可らざる者にして、彼等在りとさへいふこと能はざる處のものも也。神を以て凡ての知識に超越せりとなせる此思想は、基督教神學の上に大なる影響を與へ、第二世紀の終に至り、基督教神學者が一般に此說を採用せるはハッチが指摘せる處の如し。例之亞歷山のクレメンスが、神は名く可らず、彼は一也、善也、心也、絕對的存在也、父也、造物者也、主也とさへ云ふ能はざるもの也と云へるが如きは、其最も著しき例也。

斯かる完全なる神に依りて、此不完全なる世界は如何にして創造せられ得べきやとは、ノスチック教徒の解說せんとしたる主なる問題にして、彼等は世界の創造を以て直ちに完全なる神に歸せず、神と世界との間に所謂『イオン』又は『アイオネス』（αἰῶνες）と稱する者を置き、所謂太原なる神より漸次段階をなして世界の發出せる有樣を說けり。其發出を說く趣は、人々に依りて同一ならず、又頗る綴密複雜にして、今爰に之を細說し難しと雖も、要するに神聖なる太原と墮落したる者との間に媒介を置きて、彼が之に歸ゝ道を說きたるに外ならずして、神人の調和は其最も主なる目的也。即ち彼等以爲らく、第一に『イオン』より出でたるは『ヌウス』と眞理とにして、最後に出でたるは智慧也。『アイオネス』の全體は神の圓滿の相を發現せる者也、而して其最下に位せる智慧、太原に等しからんとするの妄念を起したりしがため混沌たる物界を生じたり、基督は此混沌たる者に秩序を與へんがため『ヌウス』と眞理とより生れ出でたり、故に彼は『アイオネス』界の救濟者として世に降り『アイオネス』界の秘密を人類に傳へたり、此秘密を知る、是れ『ノシス』也と。斯くして彼等の達したる結論は素より不完全にして、假令其目的は之に依りて基督教を解說し、擁護するに在りしとするも、基督教眞髓の解說としては唯に不充分なりしのみならず、基督教會の信仰より離れたる處も亦少からざりしを以て、彼等は早くより異端として攻擊せられたりしが、彼等が解說せんとしたる問題及び之を解說せんとして取りたる方法は、基督教會の決して攻擊せざりし處にして、且當時基督教會には尙未だ一定の神學なる者あらざりしかば、彼等が希臘思想に依り、天啓の基礎の上に神學を立てんとしたる功は沒す可らず。

ノスチック派に反對して起り極力之を攻擊したりしは、イレニウス。ヒッポリタス。テルチュリアヌス。

オリゲノス等の辯例學者にして、イレニウスの如きは、保羅が其書翰に『信仰に在る神の道を立てずして、辯論を生ずる奇しき談』と云へりしは、ノスチック派を指せる也とて、口を極めて之を罵倒せり。（ノスチック派の事を知るべき主なる材料は、上記辯解學者の文書也。ネアンデル。バウル。リプシウス。マッター。マンセルの論文、及びハルナックの『教義史』も亦參考に供すべし）。

望 ノゾミ Hope. 【術語】 使徒保羅は『信仰と望と愛と此三の者は常に在る也』（哥前十三の十三）と云ひて、望を基督教的三德の一に數へたれ共、注意を惹くこと他の二者よりも少し。望は信仰と密接の關係を有すれ共（來十一の一）其特色とする所は善き將來を希望するに在り。信仰の對象も望の對象も共に見さる所のもの也。然れ共信仰は均しく過去、現在、將來に關係するを得るに反し、望は唯將來にのみ關係す。而して望の期（エホスペタツーション）と異るは、後者は善惡何れにも關するを得るを以て、願望の要素を缺くに反し、前者は善き將來にのみ關し、從て願望の意を含むに在り。望は性質上殊に舊約に著し。舊約は約束の時代、預言の時代なれ共、新約は約束及び預言の成就せる時代也（太十三の十七）。故に舊約時代に在りては凡ての事前途を祈し、希伯來人民の黃金時代は將來に在りき。舊約の民の望は從唐、富、勝利の如き俗世的の幸福に過ぎざりしと云ふ者あれ共、詩六十三の一、十七の十五に顯はれたる者は、靈的憧憬の最も純潔なる者也と云はざる可らず。又希伯來人の望の基は、基督教徒と同じく神にして（詩廿三の十八、廿二、四十二の十一等）エレミヤは『エホバは以色列の望』也と云へり（耶十四の八、十七の十三）。もし彼得を以て新約に於ける『望の使徒』也とせば、エレミヤは舊約に於ける『望の預言者』也。彼の望は其性質全く靈的也（耶廿一の廿三以下）。然れ共新約に於ける望は其範圍更に廣く、其內容更に篤的にして、更に大なる確信を以て伴はる。新約の望は『愈れる約束に基きて立てられたる契約』（來八の六）の上に立てらるゝが故に『更に愈れる善き望』也（七の十九）。望の求むる幸福は單に來世にのみ限られず、又現世に於て信仰ある者に約束せられたる凡ての者を含む。聖書は屢々現世と來世との區別を看過し、神の約束及び基督教徒の渴仰する處は共に現世及び來世の幸福を以て來世に在りとなし、以て基督教の望を高調せる處（哥前二の九、腓三の十二—十四）完全なる幸福を以て來世に在りとなし、以て基督教の望を高調せる處赤少からず（羅五の二、八の廿一、廿三、多二の十三等）。彼得もし望の使徒ならば、保羅は望の神學者也。預言者がエホバを以て望の基となせしが如く、保羅は最も明白に基督を以て望の基礎となせり（哥前十五の十九、提一の一、西一の廿七）。而して基督の復活は特に望の確實なる印（哥前十五、彼前一の三）即ち『活ける望』也。基督教の望は、神は父の愛を以て我等を愛し給ふとの感情より起るが故に、神の前に在りて平安なる狀態を伴ひ、又其望の必ず遂ぐべきことを確信せしむ（羅五の一—五）。望は又信仰と共に救に至る道の要素（八の廿四以下）亦の源（五の三、十二の十二）にして、忍びて艱難に堪ゆる事に依りて顯はる（撒前一の三、來六の十一、十二の一）。望は又『靈魂の錨』（六の十九）。驅動多き世の中に在りて堅くして動くことなからしむるがため也。約翰は自ら證むる動機として一たび之を記せる外望に就て云ふ所なし（登約三の三）。

ノックス ジョン Knox, John 【人名】 一五〇五—七二 蘇格蘭の宗教改革者。父はウィリアム、ノックスと云ひ、小さき地主にして名家の末、母はシンクレアと云ふ。ジョンはハッディングトン近村にて生れたるものゝ如く、初等教育はハッディングトンにて受けたり。同地は既に自由の氣に富み、學校は耳教師の多きを以て當時に知られ居たり。其よりグラスゴー大學に入りしが、何年在學し何時卒業せしや明かならず。唯一五二二年の年報に彼の名の殘れるのみ。去れど彼が拉丁語に通ぜしはアウグスチヌス及びイエロムニスの書を知れるにて察せらる。希臘語希伯來語は中年歐洲にて學びたる者の如し。一五三〇年以前に僧職に就きたりしことは確なれど其年月は明ならず。一五四四年までは尙天主教より離れ居らざりしことも、教會紀傳に自署せるものゝ殘れるにて知らる。彼は其頃イーストロシアンのヒウ、ドーグラスの家庭教師となり、又近隣の紳士ジョン、コックボルンの子を監督し居たるが如し。此等は何れも新教に傾き居りし人なり。ノックスの心は斯くて長く新教に向ひて流れんとしつゝありしが、一五四四年有名なるジョルジ、ウィシャルト蘇格蘭に歸り來り、到る所に新教主義を說教せり。其のイーストロシアンに至り一時ノックスは之に接し、既に四十の壯年ながら太く之に感激したるものゝ如く、自ら兩刃の劍を佩てウィシャルトを護衛して法王の密使の暗殺を防ぎたりき。然るに一五四五年ウィシャルトはカルディナル、ビートンのため捕へられて終に死に處せらる。ノックスも同時に捕へられんとせしな、ウィシャルト懇ろに『君の子弟の所に歸れかし、犧牲は一人にて足れり』と諭して去らしめしに由て免るゝを得たり。其頃ノックスは愈々聖アン

ドリウス市に招かれ、新教徒牧會者となる。市はビートンの死後新教徒の落ち伸びし所なりき。ノックスは前記ドーグラスやコックボルンの子等と共に、此處にて比較的平安に暮せしが、一五四七年七月市は略取に遭ひ、ノックスは落人の幾多と共に佛國軍艦に囚獄の身となり、廣內奴隸とせられ、十九ケ月以上の間言ふに忍びざる程の虐待を受けつゝ勞役に服したり。其の生涯虛蔚衣に堪へざる程の體となりしは此時の苦痛のためなりと云ふ。かゝる間にも彼は故山に歸るの望を失はず、病で友人も見切りし時にも尙『我が舌彼所にて神の名を崇むるまでは決して此世を去らざるべし』と答へたりといふ。一五四九年

ジョン　ノックス

の初エドワルド六世の治り成しに依て免されしが、國狀を視て今度は自ら脫國者となり、英國に行きて一五四九年より五四年迄同國教會の牧師となりぬ。國教會の過渡時代にしてエドワルド六世の朝は、英國教會の儀式的の事などは強制せられざりければなり。然れども五二年ローチェストルの監督にせんと言はれし時には、彼は斷然之を拒絕したり。エドワルド死してノックスは英國を去り歐洲に流寓しつゝ、一五五四年九月ジェネヴァに達し、カルヴインに會ひ、フランクフルトの英人教會に招かれ之に應ぜしが教服儀式及び國教會祈禱本の採用に就て意見合はず、頗る忍耐せし末五五年三月終に之を辭し、再びジェネヴァに行き、直ちに會の牧師となり、一五五九年いよ〳〵故國に歸る時まで之を牧ぜり。蘇國へ歸りし時は、國は多事の日なりしが、ノックス等の苦心は終に功を奏して蘇國教會の條に見ゆる如き順序を經、一五六〇年いよ〳〵改革教法律に依て國定となり、ノックスは當時エデンバラの大教會たりし聖ジャイルズ教會の牧師に任ぜられぬ。時に年五十五。彼の有名なる『宗教改革史』は一五五九年より筆を執り五六年同纏きて著はせるものなれば、其に依て此間のノックスの意氣如何を知ることを得べし。同史は用語不完全なれど、其の精力に充てること驚くばかりにして、一個の天才の筆たるを示し、大なる首領たり政治家たる人の性格を映じ居れり。牧會の業に從ふや間もなく彼は妻を喪ひぬ。妻はマルジョリー、ボースと云ひ、若き時より愛したる女にして一五五五年ノックス愈々ジェネヴァより歸りて結婚したる間柄なりき。されば彼の悲哀は大なりしが如し。一五六三年オキルトリーの貴族スチュワルトの女マーガレットと再婚す。年齡の差甚だしかりければ、世人の噂に喧しく上りしも幸福なる家を成せしが如し。當時教會は尙幼稚にして、ノックスは辛勞配慮多忙等に閲まれしも、尙家庭の慰めあり、金錢の報酬も相應に多く、時の裁判官に相及ぶ位の收入を得、一の家屋をも購へり。此家今尙保存せらる。彼は又後人の想像と異りて凡て隣人と親しく交ぜり、優しく親切なりしを見る。ジェームス、メルビルの日記に據れば、彼は一五七一年再び危に遭ひ、聖アンドリウス市に到り、屢々學校に行き、庭にて休み、學生を呼び集めて之を視し、神を知り少時を善く費すことを敎へ、住家より敎會に行く時は、片手にて杖に片手にて僕にすがり、敎會にては人々より講壇に扶け上げられ、一たびは之に覺られど說敎を始むれば活力橫溢壯者も及ばざるに至りしと云ふ。一五七二年十一月妻の慰寬なる看護の中に死す。蘇格蘭の心ある人々之を悼まざるなし。僕リチャルド、バランチン主の死を記して曰く『斯くの如くして神の人、蘇國の光、同敎

會の慰藉・神慰の餌、凡ての信の傳道者の保護者又奬勵者、清き生活、健全なる教義の人、惡を實むるに大膽なる人、如何に大なりとも人の愛を受けんことを心に留めざりし人……は此世を去りぬ』と。又蘇格蘭の長官セールトウン伯は聖ジャイルズ教會地内の墓碑に銘して曰く『存世中曾て人の類を恐れざりし人こゝに横たはる』と。ダヴィド・レーングの編輯せる彼の全集六卷一八四六—八年出版せらる。彼の傳記にはマックリー。ブラウン（二冊）。マクミラン。グラッス。ラング。コウアン等の著あり。マクミラン以下の傳記は一九〇五年ノックス四百年紀念に出でたるもの也）。

ノットル ダム Notre Dame. 【譯語】 佛語『吾等の貴女』の義にして、處女マリアを指す。故に歴々佛國に於ける羅馬教會の名に用ゐらる。世界に於けるゴチック型建築の最良なるものゝ一は、巴理ノットル、ダム大會堂也。

ノット エリファレット Nott, Eliphalet 【人名】 一七七三—一八六六 米國の宗教家。コンネクチカット州アシュフォルドの貧しき農夫の子、少にして父母を喪ひ、兄サミュエル（フランクリンの牧師）と共に住みし時語學教學を修め、十七歳にしてブラウン大學に入り、二十二歳にして說教の准允を受け、二年間チェリヴアレーにて牧師叢中學校長となり、一七九八年アルバニー長老教會の牧師に招かれ、一八〇四年ユニオン學院長に選ばる。當時同校は學生僅に十四人財政の困難甚しかりしを、彼の處理周勉により國中の最有力なる學校の一となり、在任中三千七百の卒業生を出せり。彼は一八一一年の長老教會總會には議長たりしが、其の分裂するや舊派に就けり。彼は又取曖法の改良に功あり、其の發明の暖爐は好評を得、特許權に依て大なる利益を得しが、之を學院のために投じたり。彼は說教に於て當時の能辯者なりき。一八〇四年七月アレキサンデル、ハミルトンがアロン、ブルに促されて決鬪して死せしを弔せし說教は名高きものなり『青年へのすゝめ』『禁酒論講演』『基督の復活』等の著も亦有名なり。

ノリス ハンセルド Knollys, Hanserd 【人名】 一五九八—一六九一 有名なる英國浸禮派の牧師。劍橋大學にて教育を受け國教會教職となりしも、幼兒の洗禮に就て意見合はず、非國教派に投じ、說教に就て多くの迫害を受け、米國に渡り、ボストンに至りてコットン、マザー其他の有權者と爭ひしが、ニウハムプシャのドーヴァー教會の最初の牧師となり、一六四一年英國に歸り、其より種々の狀態の下に餘生を終れり。彼は學問あり又才能ある說教者なりき。米國渡航前は倫敦にて說教の時毎に一千人集りたりと云ふ。著書に『シオンの燃ゆる日』『自叙傳』等あり。

ノルウェー Norway. 【地名】 スカンディナヴィヤ半島の西の部分をなせる王國にして、廣袤十二萬四千百卅方哩、人口二百廿四萬を有す（一九〇一年調）。基督教は第十世紀及び第十一世紀に、オラフ、トリグヴアソン（Olaf Trygvason, 九九五—一〇〇〇）及び聖オラフ（一〇一四—三一）に依りて此國に輸入せらる。二人共に愛蘭に於て受洗せる者也。然れ共武力を以て之を傳播したりしが故に、人民は表面基督教徒となりしも、事實に於ては後尚長く異教徒なりき。一一五二年獨立の大監督管區をニダロス（現今のトロンドヒエム）に置き、其下にオソロ、ベルゲン、スタヴァンゲル及びハムメルの四監督管區を置けり。第十二世紀に什分一稅の法、第十三世紀に獨身制度を輸入したりしが、羅馬教會は此國に在りては遂に勢力を有するに至らず。此國は一三八七年より一八一四年迄丁抹と合併し、過去三百年間丁抹の一州として統治せられたりしが故に、此二國は此間共通の教會及び教會歴史を有す。宗教改革の諸威に入りしは、一五三六年にして、諸威教會は國教となれり。是れ丁抹教會を其儘模倣せる也。此國宗教の特色は其不寛容なるに在り。ルーテル派教會の外他の宗派を許容せず。一八一四年丁抹より離れ、瑞典と合併し、一箇の獨立王國を作りたれ共、其新憲法は教會の制度に何等の影響を及ぼさず。凡て政府の官吏となる者はルーテル派に屬せざる可らず、ルーテル派より他の宗派に轉ずる者は、追放の刑に處せらるべしと定められたり。後稍や寛容の風行はれ、一八四五年七月の法律に依りて、他の宗派も禮拜の自由を許され、一八五一年には猶太人も亦其信教の自由を許されたり。ハウゲ及びグルントヴィヒの指導に依りて行はれたる、諸威教會内の運動に就ては其條を見よ。諸威は一九〇五年瑞典との合併を解き、今獨立王國也。

ノルス ブラウンロー North, Brownlow 【人名】 一八一〇—七五 蘇格蘭自由教會の傳道者。英國々教會の牧師の子、イートン、カレッヂにて六年學び、一八二五年出でゝ大陸に遊び、博の樂を知り、二八年に結婚せしも定まれる職業なく、蘇格蘭の親戚の領地に住み、快樂生活を追ひ求め居りしが、一八五四年十一月骨牌を弄び居る內俄熱靈性の幸福を求むる心起り、病者の如く感じて、中途其の子に命じて己れを階上に曳き上げしめ、翌日その自ら一變せることを公言し、十二歳より嗜の

酒草を絶し、數月の間に聖書のみを讀み、クリミヤ戰爭の開始の慰藉をさへ全く知らざりしと云ふ。幾月かの誘惑を經て終に平和を得、悔改後十一月にして蘇國エルジンの貧民間に小册子頒布を始め、次でグラス及びフォルス兩教會の求によりて說教を始めしが、其の熱心にして有力なること直ちに世の認むる所となり、一八五九年蘇國自由教會は彼を傳道者となしぬ。十年間は專に蘇國にて活動し、愛蘭英蘭にも渡りて屢々說教し、信仰復興の時には之に與かる所多大なりしが、一八七一年エルジンを去りて倫敦に移り、死に至るまで同市にて活動せり。

ノルトン アンドリウス Norton, Andrews, D.D. 【人名】 一七八六—一八五三 米國ユニテリアン派の神學者。ハーバード大學を卒業し、神學を研究し、ボードイン、カレッヂ、ハーバード大學、ハーバード神學校等にて教師をなし、ユニテリアン學者中の儕々たる者として認めらる。批評說に就ては急進的なれど、超自然を信じてセオドール、パーカルの反對者たり。其著『福音書の正確なる證據』は名高し。福音書の著作年代及び記者は在來信ぜられし通りなり、故に信ずべき文書なりと主張す。其外尙多くの著書あり。又諸雜誌へ寄稿せし事は更に多く、詩人としても決して下位のものに非ず。其の作りし少數の讃美歌も愛誦せらる。

ノルドハイメル イサク Nordheimer, Isaac, Ph.D. 【人名】 一八〇九—四二 猶太人學者。獨逸に生れ、一八三四年ミウニヒ大學にて學位を得、三五年紐育に行き、紐育市大學の東方語教授となり、一八三八年より四一年迄同市ユニオン神學校の希伯來語教師となる。終身猶太教を改めず。希伯來語學者としては米國未曾有の材なりき。『希伯來語文法』『名文抄』『希伯來語カルデヤ語引照』等の著之を證す。

ハの部

背教 ハイ教 Apostasy. 【術語】 ギリシヤ語 apostasia は『背反』の義にして、基督教會に教義の定められしより『信仰に背くこと』(Apostasia perfidia) 及び『權威に背くこと』(Apostasia inobedientia) 及び『規則に背くこと』(Apostasia irregularitatis) を以て『背教』と名く。後二者は羅馬教會に於てのみ見る所のものにして、信仰に對する背反はプロテスタント教會にも之れあり。異端を唱へ、若くは分派を起すことは、背教として破門せられ、又は嚴しき迫害を蒙りたれ共、現時に在りては古昔の如く之に對する制裁厳ならず、悔改むるものは又教會に入るを得べし。

ハイデルベルヒ問答書 Heidelberg Catechism. 【信條】 獨逸帝國七選舉州の一なるバラチネートのために、ハイデルベルヒ大學の神學教授ザカリアス、ウルシヌス及びハイデルベルヒ選擧侯延の說教者カスパル、オレヴィアヌスがレフォルムド教會の教義の大要を摘記したるものにして、彼等はジェネヴア及びツウリヒに住したりしが故に、瑞西改革派の影響を受けたること大也。カルヴイン。ラスキー。モンハイム等の問答書を基礎として作り、一五六二年の末ハイデルベルヒ總會に提出し、各會一致為以て可決せられ、翌年一月フリードリヒ三世の序言を附し公にせられたり。此書はレフォルムド派信仰の著述の最も悉く含有すれ共、其初めの點は多く他に之を見ず。其第一問は罪惡と苦難とに沈める靈魂の要する者、又唯一の安慰は何ぞやといふに在り。其熱心なる福音的精神に富めるより廣く大陸諸國の教會に行はれ、又蘇國及び米國の教會の中にも之を承認する者あり。今尙多く人の稱讚する所となる。

灰の水曜日 アシュ Ash-Wednesday (*dies cineris et cilicii.*) 【行事】 四旬節の初日にして古代の教會に於てはモーセ（出廿四の十八）エリヤ（王上十九の八）及び彼に耶蘇が四十日の間荒野に斷食せし事を紀念せんため、斷食前に此日を守り、舊約の預言者の所謂麻を着灰を裝りて其罪を懺悔すと云へるに因み、灰の日と稱せられたりしが、羅馬教會に於ては更に新なる意義を生じ、此日ミサ祭の前、前年の棕櫚の主日に於て聖別せられたる枝を焚きて造りたる灰を聖別し、其一抹を信者の首に點じつゝ『人よ汝塵埃なること、及び塵埃に歸るべきことを覺えよ』と唱ふるより斯く名けらるゝに至れり。プロテスタント教會に於ては英國教會の外此日に特別の儀式を行はず。

拜物教 ハイブツ Fetichism or Fetishism. 【宗教名】 又は庶物禮拜 『フェチキ』又は『フェチシ』は葡萄牙語『フェチショ』より來り『呪物』の義也。故に又呪物禮拜とも譯す。木片、貝殼、石塊、羽毛等の如き或る物品を崇拜する最下等の宗教の一にして、其禮拜の對象となる物品を『フェチキ』『物』又は『庶物』と稱す。禮拜者は思ふに斯る物品そのものを直ちに神也と思惟するに非ず。又之を以て神の表徴又は代表物となすにも非ず。唯之を以て神靈若くは魔力が之に依りて自らを世界に知らしむる媒介

物也と思惟するのみ。而して斯る魔力と斯る媒介物との間には、別に論理的關係を要せざるが故に、如何なる物にても人工物にても、生物にても無生物にても—自然物にても人工物にても、此種の宗教の初めて發見せられたるは、第十五世紀にして、葡萄牙人がギニアの海岸を航行せし時に在り。而して其後之と同一の經驗は亞米利加、濠洲及び西北利亞の野蠻人中に許多發見せられ、一七六〇年ド、ブロッスは埃及古代の宗教も亦拜物教なりしことを指摘せり。コムテの『實驗哲學』ジョン、ラボックの『文明の起源』ヘルベルト、スペンセルの『社會學』フレーゼルの『黄金の枝』（一九〇〇）テーロルの『原始時代の教化』（一九〇四、第四版）ナックサウの『西亞非利加の拜物教』（一九〇四）等を見よ。

ハウアルド ジョン Howard, John 人名 一七二六—九〇 有名なる監獄改良家。ハクネーに生れ、幼時盤貨商に來公せしが、十四歳の時父の死去により遺産を繼ぎ、商人となり、歐大陸に往復す。一七五六年リスボンに渡らんとして海上佛國巡邏艦のために捕へられ、ブレストの獄に投ぜらる。待遇殘酷にして供給甚だ粗惡、食物は外より投げ入れて囚徒の分ち食ふに委せしほどなりき。後モルレーに移され、赦されて英國に歸り、氣象に關する發見をなして王會々友となる。彼は曾て一たび結婚せしが妻を喪ひ、此に及んで再び結婚し、カーデントンに退きて生活せしが、一七六五年また妻を喪ふ。六九年大陸に遊び、七三年歸りてベッドフォルドの知事となる。此頃より監獄の狀態に就て研究を始め、先づベッドフォルド管内の監獄を巡視し、制度の甚だ不備、囚徒の狀態の悲慘極まれるを見、更に隣縣の監獄を視、更に又英、蘇、愛蘭内諸縣の監獄を巡見し、いよ〳〵改良の必要を感ずるに至れり。何處にても獄室は一部地下に在り、暗く、濕氣多く、穢なく、所によりては市の共同下水、直下を流れて而も無蓋のまゝなり。疫所は何れも驚に限られ、食物は甚だ粗惡。監獄熱と呼ばる病とは到る所に蔓延し、見る吐き、之がため其年囚徒待遇改良に關する二議案は議院を通過せり。翌年巴理の監獄を訪ひ、更に瑞西、獨逸、伯耳義、和蘭を巡り、次の年には瑞典、露西亞、匈牙利、其他諸國を訪ひて獄狀を視察せり。晩年は傳染病の救濟に心を傾け、一七八五年以太利の諸市の傳染病院を訪ひ、スムルナまで至り、自ら傳染病に感染せる者を乘せたる船に乘りて航海し、爾後其の子の精神異常となりしを控へつゝ、尚博愛の精神を失はず、最後に復た大陸に渡し、墨海沿岸のチェルソンにて傳染病にかゝれる貧女を看護したりしが、自ら又感染して一七九〇年一月二十日同地に客死す。其の功業や誤に大にして大英國は勿論、世界萬國は其の獄制の改良に於て彼に負ふ所甚だ多しとす。聖保羅大會堂には紀念碑あり、碑頌また善く書かる。ハウアルド自身の著には『英蘭及び威爾斯監獄の狀態』『歐洲諸國傳染病院現狀』等あり。共に觀察せし時に成れり。

ハヴァーガル フランセス リッドレー Havergal, Frances Ridley 人名 一八三六—七九 英國の女流作家。英國教會牧師の女にして、篤く學を好み聖書を原語にて讀まんために、希伯來語及び希臘語をも學べり。敬度なる信徒にして、其著作は何れも讀者に敬度の念を起さしむ。其最も有名なる著なる『Ministry of Song』『Under the Surface』及び『Under His Shadow』の三詩集とす。散文には『鶯鶯と小さき枕』『我が君』『主の御國のために』等あり。

ハヴィラ Havilah. 『ヤデン』の條を見よ。

ハヴェロック ヘンリー Havelock, Henry, Sir 人名 一七九五—一八五七 英國の將官。サンダーランドのビショップウェアマウスに生る。父は同所の富める造船家なりき。法律を研究せしも一八一五年中尉として陸軍に入り、二三年印度に遣はさる。二九年有名なる賞教師博士マーシュマンの女と結婚し浸禮派に入る。勇將の資備はりしかば、次第に昇級し、一八四〇—四二年のアフガン戰爭に從ひ、五四年には高級副官となり、五七年のセポイ叛亂には一縱隊を率ひて戰ひ、勇猛と細心とに由て大捷を得。ラクナウ攻撃の時將軍アウトラムより義俠的に總指揮を委ねられ、大奮戰を以て之を陷れしが、餘りに戰鬪に熱せしため赤痢にかゝり三日後死去す。ラクナウの勇士の名其より世に稱せらる。議會は彼を少將とし士爵に叙せしが、其報告は勿論生前に達せざりき。彼は海軍の司令長官グードエナフと相並んで近代英國の基督教軍人の模型と稱せらる。自ら行ふ慎み參所にても戰場にても毎朝二時間は神に事ふるに用ひぬ。

ハウグ マルチン Haug, Martin 人名 一八二七—七六 獨逸の東方學者。チュビンゲン、ゲッチンゲン、ボンにて學び、ブンゼンの『聖經事業』を助け、一八五九—六三年ボーナ學院にてサンスクリット語教授となり、英政府に遣はされてグセラト領を巡回し、ゼンド及びサンスクリット古文書を蒐めて成功し、一八六六年獨逸に歸り、六八年後はミュニヒ大學にてサンスクリット語及び比較文法

教授たり。其の自ら集めしゼンド、レーレビ、サンスクリット、ペルシヤ諸文書はバイエルン政社買收し、ミュニヒと圖書館にあり。

博士 Magi. 『マギ』の條を見よ。

ハガイ Haggai. 人名 俘囚後に出でたる三豫言者の一人。次の條を見よ。

哈基書 The Book of Haggai. 經名 舊約預言書中の一書。小預言者の第十位を占む。以色列人が巴比倫の俘囚より歸り來りし後十六年を經て、尚未だ神殿の再建に着手せず。ダリヨス治世の第二年（前五二〇）預言者ハガイ及びザカリア出でて、國民の怠慢を責め、直ちに其事業に着手すべきことを勸む（唌四の廿四、五の一、二）。其結果四年にして神殿再建の事業成れり（六の十四、十五）。此預言は即ち國民に向て神殿再建を勸めたる者也。此預言は四部に分れ、年代的に排列せらる。

（一）第一章 ダリヨス王の二年六月一日ハガイ民に向ひて、彼等が自らのために板を以てはれる家を造れるを見れば、神殿を造るの責なしといふ可らざること、又旱魃のために收穫の乏しきは、エホバ實に彼等の忠誠ならざるを憤り給へるに由れることを述べて、神殿再建の一日も猶豫すべからざることを說く。民之を聞きて大に感動し、方伯ゼルバベル、祭司長ヨシュアを首とし、同月廿四日を以て工事に着手せり。

（二）二の一—九 七月廿一日ハガイは、今造れる神殿のソロモン神殿の壯觀に比すべきものなきを見て、竊に失望せる遺れる民を慰諭して、異邦民裝飾のために其貴きものを獻ぐべく、エホバ又平康を與へ給ふべければ、此神殿の後の榮光は前の榮光よりも大なるべしとのことを告ぐ。

（三）二の十—十九 九月廿四日律法上の汚れに就き二箇の問に答へたる祭司の語に基き、ハガイ民に教へて、神殿再建の工事に着手せざりし以前に在りては、彼等も亦汚れたる民にして、彼等の獻物は神之を受け給はず、其作物の實らざりしも亦之がためなりき。然れ共神殿の基の置かれし此日より、エホバ彼等を祝し給ふべしといふ。

（四）二の廿—廿三 同日ハガイ方伯ゼルバベルに告げて、異邦の諸國滅びて、彼れ神の愚寵と守護との印を受くべしといふ。

此書の文體は勢力なしといふに非ざれ共、比較的單純にして文飾なし。作者の目的は實際的にして、彼は直ちに其要點に往けり。預言者の多くが通常有せる想像と詩的勢力とは此書之を缺けり。然れ共此書も全然散文には非ず、通常希伯來詩歌に見る處の聯句は此書も亦之を有せり。ハガイの生涯に關しては何事も明ならず。

【參考書】 ケーレルの『哈基』ベルーンの『哈基及び撒加利亞』ジョルジ、アダム、スミスの『十二預言者』卷二、ハンターの『俘囚以後』ドライヴェルの『舊約文學緒論』等。

ハガル Hagar. 人名 埃及虜の女、サラの侍女。サラ子なかりしかば、當時の風習に從ひハガルを娶めて其夫アブラハムの妾となす。ハガル孕めるに及びサラ嫉みて之を苦めしかば、其面を避けて逃れしが、歸りて男子を生むに及び夫を勸めて之を追放せり（創十六）。後サラ子を生むに及び夫を勸めてハガルを逐出さしむ。ハガルはイシマエルを携へてベエルシバの野にさまよひしが、後パランの曠野に住めり（創廿一）。保羅はハガルを喩えてシナイ山にて與へられたる律法の代表者となせり（加四の廿四以下）。猶太王サウルの時北亞剌比亞にハガリ人なる者ありて、ヨルダン河東の民と戰へりとの事代上五の十に記さる。ハガルの子孫なるべしと想像せらる。

ハギオグラファ The Hagoigrapha. 術語 聖文學の義。舊約聖書の中詩篇、箴言、約百記、以士喇書、尼希米亞記、歷代志略、雅歌、路得記、傳道之書、及び以士帖書を包含す『舊約聖書』の條『聖文學』の項（三一四頁）を見よ。

ハケット ホレショ バルク Hackett, Horatio Balch, D. D., LL. D. 人名 一八〇八—七五 米國浸禮派の教師、學者、聖書解釋家。マサチウセッツ州サリスボリーに生れ、アンドーヴァル神學校を出で、獨逸に學び、ブラウン大學の拉丁語教授、ニウトン神學前の聖書文學の教授、ローチェストル神學校の新約聖書希臘語教授に歷任す。教師としては博學にして熱心に充ち、乾燥無味なる細末の研究にも熱情を以てし、個人としては溫厚にして愛情に富み、信仰厚き人なりき。米國聖書改譯委員の新約部の一員ともなれり。其の重なる著はブルタークの『デ、セラ、ヌミニス、ヴィンディクタ』附註版、ウイネルの『カルデヤ文法』補譯、『希伯來文法』『使徒行傳註解』『聖書の解說』『勝利門書』『基督教戰爭の紀念』等にして、其他その翻譯及び編纂等にかゝる好著多し。スミス聖書辭典の米國版も彼とエブラ、アボットとの共同事業に成る。

ハーゲンバッハ カルル ルドルフ Hagenbach, Karl Rudolf 人名 一八〇一—七四 瑞西の神學教授、教會歷史家。バーセルの人、ボンに行きてシュライエルマッヘル及びネアンデル等に學び大に感化せられ、一八二三年デ、ウ

エッテの勧めに由りてバーゼルに歸り講師となり、次で教授となり、又說教家としても大なる感化を與へ、七三年には大學關係五十年紀念をなせり。其の專門の長所は教會歷史なりしが、神學にては超自然派と唯理派との間なる中立派に就き居たり。若き時はシュライエルマッヘルの說に從ひしが、次第に之を離れ、基督教事實の客觀的實在に重きを置き、教會の告白を重く視るに至れり。『神學諸科一覽及び法式』『教理史教科書』『教會史』『古代教會史』『中世教會史』等は重なる著作なり。

方舟 Ark. 物名　大洪水の時ノアの造りたる舟『ノア』の條を見よ。

ハックスレー トマス ヘンリー Huxley, Thomas Henry. 人名　一八二五—九五。第十九世紀に生れたる最も有名なる英國の生物學者。モクドルセクスのイーリングに生る。幼時定まりたる教育を受けず。ウィリアム、ハミルトンの『論理學』を讀みて哲學の趣味を愛ひ、カーライルを讀みて藝術を愛する所多かりしといふ。十七歲にして醫學を學び、廿歲にして倫敦大學の試驗に應じ醫學士の稱號を得。一八四六年當時遠洋航海の途に就かんとしつゝありしラットルスネーク號の補助外科醫となりて之に乘じ、ニウギニア及び濠州のバリエル、リーフに航す。航海中（一八四八）水母族の解剖及び族類』を書きて本國に送り之を公にす。五四年フルブスの後を襲ひ、倫敦ジャーミン街の官立鑛山學校の教授となり、此間又王立學會（六三—七）及び王立外科學校（六三—九）の教授たりしが、其一生は主として鑛山學校に寓れり。彼の科學に關する著書はミカエル、ホステル及びレー、ランケステルと為四卷として出版し（一八九八）補遺一九〇三）宗教其他に關する論文集は九三—四年九卷となりて出づ。生理學、地文學、脊椎及び無脊椎動物の解剖學教科書の如きは不朽に傳ふべきもの也。彼は天性熱心懇實にして、自己の眞理と信ずる處を傳へんために其一生を獻げ、世の毀譽褒貶の如きは其顧みる所に非ざりき。

彼の神學及び哲學に對する態度は懷疑的なりき。一八六〇年九月廿三日チャールス、キングスレーに與へたる書翰の一節に、自己の立場を明示して曰く、『余は人間の靈魂不滅を肯定せず、又否定せず、余は之れを信ずるの理由も、亦之れを反證するの手段をも有せず。余は教義に對して毫も先天的故障を有せず、思ふに身常に自然界の研究を事とするの人は、何人も先天的故障てふ事に耳を貸すの暇あらざるべし。但し何事にても證據を提供して其信仰を證明したらんには、余は之れを信ずるに躊躇せざるべし。然り、之を信ずるに躊躇するの理由なし。蓋し靈魂不滅の如きも之を物質不滅勢力恒存に比すれば更に怪むに足るものなければなり。余に對しては類推論や蓋然說は何の力もなし。余は幾何學の法則を信ず、余が之れを信ずべきの理由あればなり。余は數理の確實なるよりも確實ならざる薄弱なる信仰の上に我生涯と希望とを据へん事は余の好まざる所なり』と。又彼が六三年五月五日を以て同じくチャールス、キングスレーに贈りたる書翰には『余は正統派に反對する夫の先天的理由なるものに對して毫も同情を有する者に非ず。余は又自らの性質の然らしむる所として、無神論及び不信說に對して最も大なる反感を有す。然かも余は正しく基督教徒が無神論者不信說者と稱呼する所の一人なるを知る。余は宇宙の現象の背後に横ほる大不可知が基督教徒の斷言するが如き父——我等を保育し我等を愛撫する父——の關係を有すてふ何等の證據を見る能はず。夫の基督教の他の大信條たる靈魂不滅、善惡の賞罰に至りても、何等の證據を見る能はざれども、又何等の反論をも之れに與ふる事能はず……但し余に與ふるに幾何かの證據を以てせよ、余は天父の存在も靈魂不滅も善惡の賞罰も之れを信奉するに躊躇せざるべし』と云へり。彼が承認せし唯一の確實は自然の秩序也。彼曰く『自然の秩序は永遠的也との觀念は、近代思想の最も重要なる觀念となれり。人は假令如何なる思辨的教義を有するも、自然の秩序は永遠的にして自然的因果の鏈鎖は斷ゆることなしとの信仰に依りて、其生活を指導するものなることは確實也』と。然れ共彼はヒュムが奇讃を以て自然法の背反となせるに反し、一方に於て人生實際の生活を以て自然法の永久不斷の信仰に基けりとなすと共に、他方に於て何人も自然の秩序は斯くならざる可らずといふこと能はずと云へり。彼に在りては奇蹟の信ずべきや否やの問題は全く證據の有無の問題なりき。彼は無神論者には非ず、彼は無神論を以て哲學上成立し得べからざる者也となしたりき。然れ共彼の神は

ハックスレー

絕對に不可識的神の外に出でざりき。一八八〇年以後彼は所謂正統派と稱するものと戰ひ、今日宗教と稱する者は希臘化せる猶太教に過ぎずと云ひ、又今日の基督教は必ず滅亡するの時來るべしと云へり。然れ共彼は此基督教に代りて新宗教の起るべきことを信じたりき。彼の傳及び書翰は其子レオナルド、ハックスレーの著はせり（一九〇〇）。就て見よ。

ハッチ エドウィン Hatch, Edwin 人名　一八三五—八九　英國の神學者。デルビーに生る。バーミングハムのキングエドワルヅ學校にて、後のマンチェスター監督ジェームス、プリンス、リーの下に教育せられ、牛津ベムブローク、カレッヂに學び、一時加那太トロント市トリニチー、カレッヂの古典學教授ともなりしが、一八六七年牛津に歸りて聖メリースホール總理とせられ、八五年に至る。八三年にはエセックスのブルレーの職給を與へられ、八四年には教會史大學講讀師とせらる。若き頃の生活は勉强奮鬪を要せしかば之がため性格を毅はれ、嚴なる勉學の習慣を作り、又思想の獨立を保つを得たり。大學公報雜誌及び學生大學入學案内の最初の編輯をもなし、又七十人譯聖書の索引編成に重なる地位を占む。此は死後出版せられたり。されど最も其名を博したるは八〇年のベムプトン講演たる『初代基督教會の組織に就て』と、八八年のヒクバルト講演『基督教會に於ける希臘思想習慣の感化』となり。ハッチは勞し盡して死し、死にし時は大に惜まれたり。

ハッチソン フランシス Hutcheson, Francis 人名　一六九四—一七四六　愛蘭の哲學者。ドラマリックに生れ、ゲブリンに移り一私學校の校長となる。一七二九年グラスゴー大學の道德學教授に任ぜられ、以て死に至る。哲學に於ては森國哲學の先驅者なりしが、彼の重要なる地位を占めたるは倫理學に在り。彼の倫理說はシャフツベリーのを更に開發して完全なる組織的學說となせる者にて『美及び德の觀念の本源論』及び『道德哲學』は其主著也。彼は道德上最も寶貴するに足るべき感情は、普遍的善惡（人類の最大幸福を得んと欲する仁慈の情）と德を慕ふ情の二也とし、此二者を不離のものとなし、相合致して矛盾せざる者と見たり。彼は又熟慮的に出づる慈愛は道德上何等の關係なしとなせしが、之と共に眞の自愛は常に道德官及び慈惠と合致して相悖らざる者也と云ひ、公利と私利との調和を主張せり。然れ共彼は之と同時に慈惠の感情を以て純乎無私の感情となさんと慕めたり。彼は『最大多數の最大幸福』なる語を初めて用ひたるものにして、後の功利論の先驅なせり。

ハットフィールド エドウィン フランシス Hatfield, Edwin Francis, D. D. 人名　一八四七—八三　米國の牧師、讃美歌編纂者。エウゼルシー州エリザベスタウンに生れ、一八二九年ヴェルモント州ミドルボリーに卒業し、二九年より三一年迄アンドーヴァル神學校にて研究し、三二年聖ルイス市第二長老教會の牧師となり、三五年より五六年迄紐育市第七長老教會牧師たり、五六年より六三年迄北長老教會牧師たりしが、病の故に辭す。されど六四年より六六年迄また紐育市のユニオン神學校の特別運動員として活動し、會員な募集せり。彼は四六年以後死に至るまで長老教會總會の常任書記なりき。八三年には總會議長に選ばれ、七十六歲の身を以て最も長く任を果せり。讃美歌學に精通し、大なる蒐集をなし、七二年『讃附教會讃美歌書』を公にす。其の圖書館はユニオン神學校内に殘れり。教會政治、國會法、長老教會史に精しかりき。

ハットン リチャルド ホルト Hutton, Richard Holt 人名　一八二六—九七　英國の神學者、記者。リーヅに生る。初めユニチリアンの雜誌"The Inquirer"の主筆たりしが、後"National Review"の記者となり、一八六一年"Spectator"の記者となれり。彼は斯く雜誌記者として其一生を送りしが、其文學的宗教的論文は讀者に大なる感化を與へたり。『神學的及び文學的論文』『スコット傳』及び『ニウマン傳』を著はせり。

ハート ジョセフ Hart, Joseph 人名　一七一二—六八　英國の牧師、讃美歌作者。倫敦の人、古典教育を受け、暫く語學教師たり、一七四九年ヘロディアンの『時代史』を飜譯し。又後に世より不道德褒瀆の書とせられし書を著はす『宗教の不理』（一七四一）の如きは其の一なり。一七五九年頃說教を始め、間もなくジョウィン街の獨立會堂の牧師となる。極端のカルヴィン派なりしが、非道德律派には非ざりき。他人を引く力は乏しかりしも、創始的才能あり。稍や狹隘なりしも、誠實にして熱烈、言ふ所少しも修飾なく、露骨なりき。一七五九年『讃美歌並びに作者の經驗』を著はし、六二年と六五年に增補出版せり。第十八世紀の教會分離者中の讃美歌作者等に共通せる如く、彼の歌も洗鍊を缺き、修飾の跡を示し居らざれども、彼の歌は他の作者のと異りて平凡ならず。自ら獨特の流儀をなして之を後世に遺せり。歌體しばしば粗に陷れども、何となく快味の逝るものあり、此を以て大に行はるゝを得たり。極端のカルヴィン派は常に之を愛す。されど教

有ある人の中には之を厭ひしものも少からず、ジョンソンの如きも其の一人なりし如し。『訴に惱む人疾く〳〵来れ』(Come, ye sinners, poor and needy) は我國の讃美歌中にも收められる。

ハートレー デーヴィッド Hartley, David

人名 一七〇五—五七　英國の哲學者。ハリファクス近傍に生る。醫業をなせり。心理學上所謂『聯念』(アソシエーション)學派の祖にして、其倫理に關する著を『人間に關する觀察』と云ふ。其倫理說は吾人の凡ての心雜複雜なる諸感情を觀念聯合の一法に依りて說明せるを特色とす。即ち彼は想像の苦樂、名聞の苦樂、自利の苦樂、同情の苦樂、神官の苦樂、道德官の苦樂の六者を以て、聯念律の作用に依りて最原始的なる感覺の苦樂より次第に發展し來れる者也となし、道德上の進步は自愛に始まりて無我に終ると云ひ、吾人の目的とする所は自利を一步々々減殺し往きて、終には全く自己を壓滅し盡し、專ら神のみを愛するの境に到達するに在りと說けり。

ハドリアヌス Hadrian.

人名 羅馬帝（一一七—一三八在位）。西班牙人の血統にしてトラヤヌス帝の親戚たり。七六年羅馬に生れ、トラヤヌスの臨終に繼嗣とせらる。性頗恰なる上に敎育また善く盡され、完全なる軍人たり。理學奧術は知らざりしが、機才に富み、驍勇なる記憶力を有し、容貌端美、性質快濶なりき。然れども性格の統一を缺き、事に偏し、自家矛盾に陷りしこと多し。位に即きては帝國の擴張よりも之を鞏固にするの方針を取り、トラヤヌスの征服せしメソポタミヤ、アッスリヤ、アルメニヤ等を棄て、自ら國境内を巡視して發れたる物を復し、施すべき設備をば施せしかば、其の治世中建築は著しく起り、立法、敎育、軍事、行政等の上に非常なる改革を見たり。而も此の巡視中病に罹され羅馬に歸りて死す。基督敎に關しては、或は彼は其の大敵なりしと云ふもあれば、或は味方なりしと云ふものあり。されど實相を思ふに、ハドリアヌスは基督敎を知らず、之に無頓着なりしが如し。セラヴィアヌスに贈りし書翰には、基督信徒をセラピス禮拜者と同一視せり。傳說にアテネの監督デオニシウス、アレオパギタや、アレキサンドルや其他の殉敎者がハドリアヌスより殺されしと云ふは疑はしく、さりとて狂熱せる異敎徒をして基督信徒を一人だも殺さしむべからずと布令せしを、宗敎寬容と言ふも早計なり。唯だ政府の權に由らずして人を殺すを禁じたるのみ。

ハバクヽ Habakkuk

人名 希伯來人の預言者。次の條を見よ。

哈巴谷書（ハバクシヨ）The Book of Habakkuk.

經名 舊約預言書中の一書。小預言者中の第八位に在り。ハバクヽの生涯に關しては何事も明ならず。唯書中彼が特に『預言者』と稱せられたるより知るのみ。三の十九に『我琴』とあるより、彼は神殿唱歌隊の一人にしてレビ族に屬したりしなるべしと想像する者あれ共、確かならず。

【此書の內容】ハバクヽはカルデヤ人の權勢隆々たりし初めに預言せり。預言は彼とエホバとの間になされたる問答の體に記されたり。預言者は先づエホバに向ひて、當時ユダに行はれたる强暴、掠奪、不善、不正に對する失望の叫を擧げたりしに（一の二—四）エホバ之に答へて、故に我れカルデヤ人を興して人にして、地を縱橫に往きめぐり、己の有ならざる住處を奪ふ者也』其進むや迅くして懼るべく、其攻むるや堅城湯池も亦拒ぐに由なしといふ（五—十一）。預言者此に於て惑ふて云ふ、エホバもしカルデヤ人を選びて審判の具となし給はゞ、是れ豈偶像なる偶像禮拜の民を用ゐて正義の民を滅ぼし、放恣なる帝國を以て神の選民を亡ぼす者に非ずやと（十二—十七）。彼は望所に立ち戍樓に身を置きて、エホバの答を待てり（二の一）。エホバ答へて曰く『彼の心は高ぶり其の中にありて直からず、去れど義しき者は其信仰に由りて生くべし』と（二の四）。其意偶像なるカルデヤ人は遂に滅ぶべしといふに在り。預言者はカルデヤ人の尊大にして飽くなき有樣を叙し（二の五）而して終に其亡ぶる日諸國民立ちて誘語を以て彼を評すべしと云へり。所謂彼等の誘語は五の『禍なるかな』より成れる者にして、即ちカルデヤ人の强慾にして他の所有を掠奪せる事、其所領を擴張せんとて不義の利を取りたる事、其城邑を築かんため血を流し惡を行なたる事、他國民の苦を見て喜べる事、及び偶像を禮拜せる事是也（二の六—廿）。第三章は抒情詩にして、其詩想の高きこと、其句法の美なること、希伯來詩歌の最上なる者（出十五、士五）と比するを得べし。此詩に於て預言者は神を以て自ら審判の坐に立ち、其選民の敵に向て報ひ給へる者として顯はせり。先づ彼はエホバが曾て約せし言（二の四）に從ひ、カルデヤ人を審判き給はんことゝ、審判の時にも憐憫を忘れ給はざらんことを祈れり（三の二）。三—七にはエホバの顯現と其効果とを叙して、エホバ、エドムの方面より顯はり給ひしに、其榮光諸天を蔽ひ、地振ひ、民怖れ慄ひたりしと云ひ、八—十五には顯現の動機を述べ、身づ敎車に乘り給ふエホバは、何に向ひて憤り給ふか、海

に向ひて怒り給ふか、問ひて、再びエホバの地を過し、遊ぶ者を叙し、次に問者の問に答へて、エホバの出現、給ふには、神の力を救ひ、之を說諭せんとするものなる旨さんが詠也と云へり。而して詩人は終りに、エホバの顯現を想起することに依りて其心に生じたる效果、即ち一方に在りては畏怖戰慄、他方に在りてはエホバに對する平靜、喜悅の信賴を叙して此詩を結べり（三の十六—十九）。

【著作の時代】ハバクヽ、預言の精確なる時代は定め難し。一の七—十、十五—十七、二の六以下の語に依りて之を見れば、此書の書かれたるはカルデヤ人の性質、目的漸く明となり、且彼等が既に勝利を得たりし時の如し（二の八）。然れ共ハバクヽが此事をユダに告ぐるも、ユダは之を信ぜざるべしと云へるを見れば（一の五）彼等の運動が尙未だユダ人の驚愕を來すに至らざりし以前なりしなるべし。思ふに此預言のなされたるは、エホヤキムの治世（前六〇八—五九八）に於てなりしなるべし。尤も吾人はカルデヤ人の當時の運動及びユダ人が之に依りて惹き起したる注意に就て充分精密なる事を知る能はざるが故に、此書が六〇四年カルデヤ人がカルケミシに於て埃及人を敗りし前に書かれたりしや、又後に書かれたりしやを確言すること能はず。此勝利はカルデヤ人前途の運命を定めたる者にして、エレミヤは直ちに之を看取したりき。然るに一の五の語調及び一の六の『我れカルデヤ人を興さんとす』といへる語には、此勝利を含み居るとは認め難し。左れば此書の預言は此勝利の起りたる少し以前、ネブカトネザル帝國がニネベを滅ぼし（前六〇七）漸次其勢力を得つゝありし頃に書かれたる者なるべし。

【參考書】デーリッチの『ハバクヽの預言』エワルドの『預言』ヒチッグ。カイル。ピウゼー。ウェルハウゼン。ノリック。ジョルジ、アダム、スミッス等の『小預言者註釋』ユーハビー、デーヴィッドソンの『哈巴谷書』（創橋聖書）ファーラルの『小預言者』（メソ、オフ、バイブル』中）カータ、パトリックの『預言の敎義』ドライヴェルの『舊約文學總論』等。

ハーパー ウィリアム レーニー William Rainey Harper,

人名 一八五六—一九〇六　米國の學者、敎育家。オハイオ州ニウコンコルドに生る。十四歲にしてマッキンガム大學を卒業し希伯來語の演說をなし、十九歲にしてエール大學の大學院を終り哲學博士の學位を受領す。四年デニソン大學の講師となり、此地に於て基督敎を宗じ、バプテスト敎會に於て受洗し其會員となる。一八七九年イリノイス州モルガンパーク、バプテスト神學校の希伯來語敎授となり、八六年エール大學のセミチック語の敎授に擧げられ、八九年同大學に於て更に聖書文學の講座を擔任す。九一年當時新設せられたるシカゴ大學の總長となり死に至る迄其任に在り。彼はモルガンパーク神學校の諸敎授の講座を擔任せる時より、歸納法を基とせる希伯來語敎科書の編輯を初め、且之を完成し、彼の希伯來語に關する著書は "Elements of Hebrew" "Hebrew Syntax," "Hebrew Vocabularies" 等として、何れも版を重ね廣く米國の諸大學に採用せらる。彼は又希伯來語の通信敎授を開始して大に成功し、數千の學生を有するに至れり。又一八八〇年夏期希伯來語の敎授を初めしが、此は遂に發達して希伯來語夏期學校の開設となる。二年後は又『希伯來語學生』(ヒブライカルウオルド)なる雜誌を創刊せしが、今の『聖書世界』は其發達したる者也。一八八四年『ヘブライカ』を創刊せしが、此雜誌は後一米國セミチック語及び文學の雜誌』と改名せり。斯くの如く彼は米國に於ける希伯來語研究の興味を增進し、且最近の敎育主義に從て敎科書を作成せり。彼は又聖書の通俗的說明者の一人にして、『米國聖書文學書院』なる者を創設し、通信敎授に依りて聖書の智識を普及せんと企てたり。彼は希伯來語に關する者の外に『亞麻士及び何西阿書註釋』『誘引的新約聖書』『希臘語文法』『歸納的拉丁語初步』『英語の歸納的研究』『歸納的希臘語初步』等の著あり。又ヴィルジル。セノホン。キケロ等に註釋を附して出版せり。彼は斯く學者たる性格を有したりしのみならず、又事務家たる才能をも備へ、シカゴ大學の組織及び發達に於て之を關したりき。

法王 ペパ Pope.

職名 原語は拉丁語のパパス (papas) より出で、父を意味す。古代にては凡て基督敎の敎師を斯く呼び、次に監督及び僧院長の稱呼となり、次に羅馬の監督及びアレキサンドリア、アンテオケ、エルサレム、コンスタンチノープルの諸敎長の稱呼に限られたり。希臘敎會にては、今尙凡ての在家僧を呼ぶの名となり居れり。此名の羅馬監督の稱呼として始めて現はれたるは、執事セヴェロスがマルケリヌスに贈れる書中にして（二九六—三〇四）其公然用ひられしは、羅馬監督シリキウス（三八四—三九八）の始めし所、職務用にせしはレオ一世（四四〇—四六一）に始まり、特に羅馬監督のみ之を用ふる權ありと要求せしはグレゴリウス七世（一〇七三—八五）なり。法王は此名の外にポンティフェクス、マキシムスと呼べり。此は榮橋者の義にして、政治上宗敎上の運用權を兼ねし羅馬皇帝に倣ひて稱した

るものなり。又ボニファキウスは七二二年法王を聖被得教會の司牧（ヴィカー）と呼び、インノーセント三世（一一九八—一二一六）は始めて耶蘇基督の司牧又は神の司牧と呼び、グレゴリウス一世（五九〇—六〇四）以後の法王は自ら神の僕の僕（Servus servorum Dei）と呼べり。

法王は通例白絹の『カサク』（Cassock）及び『ロック』（Rochet）を着け、其上に緋色の袈裟（ストール）をかけ居れり。ミサ式を行ふ時には、其のガウン（外被）を教會暦に從ひ四季に應じて變へ行くなり。即ち聖靈降臨節（ペンテコステ）日曜を始める週間）には赤、復活日曜前夜には黑、復活日曜には白、大齋（復活日曜前四十日間）及び降誕季節には黒色を纏ふ。其の被章は袈裟なり。羊毛布製にして手の幅ほど廣く、六個の黒色の十字架を以て飾らる。此の被章を凡ての場合に纏くるを得る者は法王のみにして、大都監督は其の教領内のみにて用ふるを得。法王は又直杖を持つ。曲らずして首に十字架ある杖なり。彼は又チアラ（tiara）を用ふ。此は三の冠にて圍まれたる金糸織の高帽にして、二の冒布頂まで垂れ居れり。法王即位式に當りて二人のカルディナル及びデアコノは此の高帽を法王の首に戴かせ『三冠にて飾れるチアラを受け、汝が諸監督と諸王の父、世界の此世の治者、我等の救主耶蘇基督の司牧たるを知れ。主に榮あれ、世界は限りなくあれ』といふなり。法王の公文は法書（Brief）又は法令（Bull）なり。法王選擧の事は別項にあり。歴代の法王は左の如し。

法王名	在位年代
リヌス（Linus）	六七—七六（？）
クレトス（又はアナクレト Cletus）	七六—八一（？）
クレメンス一世（Clemens I.）	九一—一〇〇（？）
アレキサンデル一世（Alexander I.）	一〇七—一一一
シクストス（又ソシストス）一世（Sixtus I.）	一一五—一二八
テレスフォルス（Telesphorus）	一二八—一三二（？）
ヒギヌス（Hyginus）	一三二—一三六（？）
ピウス一世（Pius I.）	一三六—一五六（？）
アニケトス（Anicetus）	一五六—一六七（？）
ソテル（Soter）	一六七—一七五（？）
エレウテルス（Eleutherus）	一七五—一九〇（？）
ヴィクトル一世（Victor I.）	一九〇—二〇一（？）
ゼフィリヌス（Zephyrinus）	二〇一—二一八
カリストス一世（Callistus I.）	二一八—二二三
ヒポリトス（Hippolytus）（對立）	二三五—二三五（？）
ウルバヌス一世（Urbanus I.）	二二三—二三〇（？）
ポンチアヌス（Pontianus）（退放）	二三〇—二三五（？）
アンテロス（Anterus）	二三五—二三六
ファビアヌス（Fabianus）（殉教）	二三六—二五〇
（空位）	二五〇—二五一年三月迄
コルネリウス（Cornelius）（退放）	二五一—二五三（？）
ノヴァチアヌス（Novatianus）（對立）	二五一—二五八
ルキウス一世（Lucius）	二五三—二五四
ステファヌス一世（Stephen I.）	二五四—二五七
シクストス二世（Sixtus II.）	二五七—二五八
（空位）	二五八—二五九
ディオニシウス（Dionysius）	二五九—二六八
フェリクス一世（Felix I.）	二六八—二七四
ユウチキアヌス（Eutychianus）	二七四—二七五
ガヨス（Gaius）	二七五—二八三
マルケリアヌス（Marcellinus）	二八三—三〇四
（空位）	三〇四—三〇九
マルケルス（Marcellus）	三〇八—三〇九
ユウセビウス（Eusebius）	三〇九—三一〇（？）
（空位）	三一〇—三一四
ミルティアデス（Miltiades）	三一一—三一四
シルヴェステル一世（Silvester）	三一四—三三五
マルクス（Marcus）	三三六—三三七
ユーリウス一世（Julius I.）	三三七—三五二
リベリウス（Liberius）	三五二—三六六
フェリクス二世（Felix II.）（對立）三五五	三五五—三六六
ウルシヌス（Ursinus）（對立）	三六六—三八四
ダマソス（Damasus）	三六六—三八四
シリキウス（Siricius）	三八四—三九八
アナスタシウス（Anastasius）	三九八—四〇一
イノケンチウス又（Innocentius）	四〇一—四一七
はインノーセント（Innocentius）	四〇一—四一七
ゾーシモス（Zosimus）	四一七—四一八
ユウラリウス（Eulalius）（對立）	四一八
ボニファキウス（Bonifacius）	四一八—四二二
ケレスチヌス（Coelestinus）	四二二—四三二
シクストス三世（Sixtus III.）	四三二—四四〇
レオ一世（Leo I.）	四四〇—四六一
ヒラリウス（Hilarius）	四六一—四六八
シムプリキウス（Simplicius）	四六八—四八三
フェリクス三世（Felix III.）	四八三—四九二
ゲラシウス一世（Gelasius I.）	四九二—四九六
アナスタシウス二世（Anastasius II.）	四九六—四九八
シムマクス（Symmachus）	四九八—五一四
ラウレンチウス（Laurentius）（對立）四九八	
ホルミスダス（Hormisdas）	五一四—五二三
ヨハネス一世（John I.）	五二三—五二六
フェリクス四世（Felix IV.）	五二六—五三〇

ボニファキウス二世（Bonifacius II.）	五三〇—五三二
ディオスコロス（Dioscorus）（對立）	五三〇
ヨハネス二世（John II.）	五三二—五三五
メルクリウス（Mercurius）	五三二—五三五
アガペトス一世（Agapetus）	五三五—五三六
シルヴェリウス（Silverius）	五三六—五三七
ヴィギリウス（Vigilius）	五三七—五五五
ペラギウス一世（Pelagius I.）	五五六—五六〇
ヨハネス三世（John III.）	五六〇—五七四
ベネディクトス一世（Benedict I.）	五七四—五七八
ペラギウス二世（Pelagius II.）	五七八—五九〇
聖グレゴリウス一世（St. Gregory I.）	五九〇—六〇四
サビアヌス（Sabianus）	六〇四—六〇六
ボニファキウス三世（Boniface III.）	六〇六
ボニファキウス四世（Boniface IV.）	六〇八—六一五
デウスデディト（Deusdedit）	六一五—六一八
ボニファキウス五世（Boniface V.）	六一九—六二五
ホノリウス一世（Honorius I.）	六二七—六三八
セヴェリヌス（Severinus）	六三八—六四〇
ヨハネス四世（John IV.）	六四〇—六四二
テオドロス一世（Theodorus I.）	六四二—六四九
聖マルチン一世（St. Martin I.）	六四九—六五五
ユウゲニウス二世（Eugenius II.）六五四—六五七	
ヴィタリアヌス（Vitalianus）	六五七—六七二
アデオダトス（Adeodatus）	六七二—六七六
ドヌス（ドムヌス）一世（Donus I.）	六七六—六七八
アガトー（Agatho）	六七八—六八一
レオ二世（Leo II.）	六八二—六八三
ベネディクトス二世（Benedict II.）	六八三—六八五
ヨハネス五世（John V.）	六八五—六八六
コノン（Conon）	六八六—六八七
パスカル（Paschal）（對立）	六八七
テオドロス（Theodorus）	六八七
セルギウス一世（Sergius）	六八七—七〇一
ヨハネス六世（John VI.）	七〇一—七〇四
ヨハネス七世（John VII.）	七〇五—七〇七
シシニウス（Sisinnius）	七〇七
コンスタンチヌス一世（Constantine）	七〇八—七一五
グレゴリウス二世（Gregory II.）	七一五—七三一
グレゴリウス三世（Gregory III.）	七三一—七四一
ザカリアス（Zacharias）	七四一—七五二
ステファヌス二世（Stephen II.）	七五二（三日間）
ステファヌス三世（Stephen III.）	七五二—七五七
パウルス一世（Paul I.）	七五七—七六七
コンスタンチヌス二世（Constantine II.）（對立）	七六七
ステファヌス四世（Stephen IV.）	七六八—七七一
ハドリアヌス一世（Hadrian I.）	七七二—七九五
レオ三世（Leo III.）	七九五—八一六
ステファヌス五世（Stephen V.）	八一六—八一七
パスカル一世（Pascal I.）	八一七—八二四
ユウゲニウス二世（Eugenius II.）八二四—八二七	
ヴァレンチヌス（Valentinus）	八二七（半日間）
グレゴリウス四世（Gregory IV.）	八二七—八四四
セルギウス二世（Sergius II.）	八四四—八四七
レオ四世（Leo IV.）	八四七—八五五
ベネディクトス三世（Benedict III.）	八五五—八五八
アナスタシウス（Anastasius）（對立）	八五五
ニコラス一世（Nicholas I.）	八五八—八六七
ハドリアヌス二世（Hadrian II.）	八六七—八七二
ヨハネス八世（John VIII.）	八七二—八八二
マリヌス（Marinus）	八八二—八八四
ハドリアヌス三世（Hadrian III.）八八四—八八五	
ステファヌス六世（Stephen VI.）	八八五—八九一
フォルモソス（Formosus）	八九一—八九六
ボニファキウス六世（Boniface VI.）八九六（十五日間）	
ステファヌス七世（Stephen VII.）	八九六—八九七
ローマヌス（Romanus）	八九七（四月間）
テオドロス二世（Theodorus II.）	八九七
ヨハネス九世（John IX.）	八九八—九〇〇
ベネディクトス四世（Benedict IV.）	九〇〇—九〇三
レオ五世（Leo V.）	九〇三（一個月間）
セルギオス三世（Sergius III.）	九〇四—九一一
アナスタシウス三世（Anastasius III.）	九一一—九一三
ランドー（Lando）	九一三—九一四
ヨハネス十世（John X.）	九一四—九一八
レオ六世（Leo VI.）	九一八（七月間）
ステファヌス八世（Stephen VIII.）	九一九—九二一
ヨハネス十一世（John XI.）	九二一—九三六
レオ七世（Leo VII.）	九三六—九三九
ステファヌス九世（Stephen IX.）	九三九—九四二
マリヌス二世（Marinus II.）	九四二—九四六
アナスタシウス（Anastasius）（對立）	九四五—九五六
ハドリアヌス（Hadrian）（對立）	九四六
ヨハネス十一世（John XI.）	九四六—九四八
ステファヌス十世（Stephen X.）	九四六—九四八
ヨハネス十二世（John XII.）	九四八—九六四
レオ八世（Leo VIII.）	九六三—九六五
ベネディクトス五世（Benedict V.）	九六五—九六六

アガペトス（Agapetus）　九三五—九三六
ヨハネス十二世（John XII.）　九五五—九六四
レオ八世（Leo VIII.）（對立）九六三—九六五
ベネディクトス五世（Benedict V.）九六四
ヨハネス十三世（John XIII.）　九六五—九七二
ベネディクトス六世（Benedict VI.）
九七三
ボニファキウス七世（Boniface VII.）
（對立）　九七四
ベネディクトス七世（Benedict VII.）
九七四—九八三
ヨハネス十四世（John XIV.）　九八三—九八五
ヨハネス十五世（John XV.）　九八五—九九六
グレゴリウス五世（Gregory V.）九九六—九九九
カラブリタヌス　ヨハネス十六世
（Calabrifanus John XVI.）（對立）九九七—九九八
シルヴェステル二世（Silvester II.）九九八—一〇〇三
ヨハネス十七世（John XVII.）一〇〇三
ヨハネス十八世（John XVIII.）一〇〇四—〇六
セルギオス四世（Sergius IV.）一〇〇九—一一
ベネディクトス八世（Benedict VIII.）
一〇一二—二四
グレゴリウス（Gregory）（對立）一〇一二
ヨハネス十九世（John XIX.）一〇二四—三二
ベネディクトス九世（Benedict IX.）（廢）
一〇三二—四四
シルヴェステル三世（Silvester III.）
（對立）一〇四五—四六
グレゴリウス六世（Gregory VI.）一〇四五—四六
クレメンス二世（Clement II.）一〇四六—四七
ダマリス二世（Damasus II.）一〇四七—四八

レオ九世（Leo IX.）　一〇四八—五四
ヴィクトル二世（Victor II.）　一〇五五—五七
ステファヌス十世（Stephen X.）（廢）
一〇五七—五八
ベネディクトス十世（Benedict X.）
（對立）一〇五八—五九
ニコラス二世（Nicholas II.）一〇五八—六一
アレキサンデル二世（Alexander II.）
一〇六一—七三
カダロス（ホノリオス二世）
（Cadalus or Honorius）（對立）一〇六一
グレゴリウス七世（Gregory VII.）
一〇七三—八五
ウィベルトス（クレメンス三世）
（Wibertus or Clement III.）（對立）一〇七五—八四
ヴィクトル三世（Victor III.）一〇八六—八七
ウルバヌス二世（Urban II.）　一〇八八—九九
パスカル二世（Pascal II.）　一〇九九—一一一八
テオドリクス（Theodorius）（對立）
一一〇〇
アルベルトス（Albertus）（對立）
マギヌルフス（シルヴェステル四世）
（Maginulfus or Silvester IV.）（對立）一一〇五—一一
グラシウス二世（Gelasius II.）一一一八—一九
ブルディヌス（グレゴリウス八世）
（Burdinus or Gregory VIII.）（對立）
一一八—二一
カリクストス二世（Calixtus）　一一一九—二四
テオバルドス　ブラカディロス（ケレス
チヌス）（Theobaldus Buraccenus or Celestine）
（對立）　一一二四

ホノリウス二世（Honorius II.）一一二四—三〇
インノーセント二世（Innocent II.）
一一三〇—四三
アナクレトス二世（Anacletus）
（對立）一一三〇—三八
グレゴリウス（ヴィクトル四世）
（對立）　一一三八
ケレスチヌス二世（Celestine II.）一一四三—四四
ルキウス二世（Lucius II.）　一一四四—四五
ユウゲニウス三世（Eugenius III.）
一一四五—五三
アナスタシウス四世（Anastasius IV.）
一一五三—五四
アドリアヌス四世（Adrian IV.）一一五四—五九
アレキサンデル三世（Alexander III.）
一一五九—八一
オクタヴィアヌス（ヴィクトル四世）
（Octavianus or Victor IV.）（對立）
一一五九—六四
ギドー　クレメンシス（パスカル三世）
（Guido Cremensis or Paschal III.）
（對立）　一一六四—六八
ヨハネス　デ　ストルマ（カリクストス
三世（Johannes de Struma or
Calixtus III.）（對立）　一一六八—七八
ランドス　チチヌス（イノケンチウス
三世）（Landus Titinus or Innocent III.）
（對立）一一七九—八〇
ルキウス三世（Lucius III.）　一一八一—八五
ウルバヌス三世（Urban III.）　一一八五—八七
グレゴリウス八世（Gregory VIII.）一一八七

クレメンス三世（Clement III.）一一八七—九一
ケレスチヌス三世（Celestine III.）
一一九一—九八
インノーセント三世（Innocent III.）
一一九八—一二一六
ホノリウス三世（Honorius III.）一二一六—二七
グレゴリウス九世（Gregory IX.）一二二七—四一
ケレスチヌス四世（Celestine IV.）一二四一
インノーセント四世（Innocent IV.）
一二四三—五四
アレキサンデル四世（Alexander IV.）
一二五四—六一
ウルバヌス四世（Urban IV.）　一二六一—六四
クレメンス四世（Clement IV.）一二六五—六八
グレゴリウス十世（Gregory X.）一二七一—七六
インノーセント五世（Innocent V.）
一二七六
アドリアヌス五世（Adrian V.）　一二七六
ヨハネス二十一世（John XXI.）一二七六—七七
ニコラス三世（Nicholas III.）一二七七—八〇
マルチン四世（Martin IV.）　一二八一—八四
ホノリウス四世（Honorius IV.）一二八五—八七
ニコラス四世（Nicholas IV.）　一二八八—九二
聖ケレスチヌス五世（St. Celestine V.）
（讓位）　一二九四
ボニファキウス八世（Boniface VIII.）
一二九四—一三〇三
ベネディクトス十一世（Benedictus XI.）
一三〇三—〇四
クレメンス五世（アビニョン移廳者）
一三〇五—一四

（空位）
ヨハネス二十二世（John XXII.）一三一六—三四
ベネディクトス十二世（Benedict XII.）
一三三四—四二
クレメンス六世（Clement VI.）一三四二—五二
インノーセント六世（Innocent VI.）一三五二—六二
ウルバヌス五世（Urban V.）　一三六二—七〇
グレゴリウス十一世（アビニョン廳終）
一三七〇—七八
ウルバヌス六世（Urban VI.）　一三七八—八九
クレメンス七世（Clement VII.）
（對立）　一三七八—九四
ボニファキウス九世（Boniface IX.）
一三八九—一四〇四
ベネディクトス十三世（對立）
一三九四—一四〇三（一四〇九廢位）
インノーセント七世（Innocent VII.）
一四〇四—〇六
グレゴリウス十二世　（廢位）　一四〇六—一五
アレキサンデル五世（Alexander V.）
一四〇九—一〇
ヨハネス二十三世　（廢位）　一四一〇—一四
マルチン五世（Martin V.）　一四一七—三一
クレメンス八世　（對立）　一四二四
ユウゲニウス四世（Eugene IV.）一四三一—四七
フェリクス五世（Felix V.）（對立）
一四三九—四九
ニコラス五世（Nicholas V.）　一四四七—五五
カリクストス四世（Calixtus IV.）一四五五—五八
ピウス二世（Pius II.）　一四五八—六四
パウルス二世（Paul II.）　一四六四—七一

シクストス四世
インノーセント八世
アレキサンデル六世
ピウス三世
ユリウス二世
レオ十世
アドリアヌス六世
クレメンス七世
パウルス三世
ユリウス三世
マルケルス二世（Marcellus II.）一五五五
パウルス四世　一五五五—五九
ピウス四世　一五五八—六五
ピウス五世　一五六六—七二
グレゴリウス十三世　一五七二—八五
シクストス五世　一五八五—九〇
ウルバヌス七世　一五九〇
グレゴリウス十四世　一五九〇—九一
インノーセント九世　一五九一
クレメンス八世　一五九二—一六〇五
レオ十一世　一六〇五
パウルス五世　一六〇五—二一
グレゴリウス十五世　一六二一—二三
ウルバヌス八世　一六二三—四四
インノーセント十世　一六四四—五五
アレキサンデル七世　一六五五—六七
クレメンス九世　一六六七—六九
クレメンス十世　一六七〇—七六
インノーセント十一世　一六七六—八八
アレキサンデル八世　一六八九—九一
インノーセント十二世　一六九一—一七〇〇

クレメンス十一世	一七〇〇—二一
インノーセント十三世	一七二一—二四
ベネディクトス十三世	一七二四—三〇
クレメンス十二世	一七三〇—四〇
ベネディクトス十四世	一七四〇—五八
クレメンス十三世	一七五八—六九
クレメンス十四世	一七六九—七四
ピウス六世	一七七五—九九
ピウス七世	一八〇〇—二三
レオ十二世	一八二三—二九
ピウス八世	一八二九—三〇
グレゴリウス十六世	一八三一—四六
ピウス九世	一八四六—七八
レオ十三世	一八七八—一九〇三
ピウス十世（現法王）	一九〇三—

法王政治及び法王制度（ホウワウセイヂ及びホウワウセイド）**制度** Papal System. Papacy and 羅馬加特力教會の教義に從へば、基督は有形の組織體として教會を起すに當り、使徒彼得に他の使徒の長上權を與へ、之を自己の代表者又教會の中心となし、最高なる僧職教的教義的行政的權威を授けたり（太十六の十八、十九、路廿二の廿二、約廿一の十五—十七）。而して教會は何時も立てられあるが故に、彼得は後繼者なかるべからず。而して羅馬の教會は彼得の開基にかゝるが故に、最高權の相續は之に含める凡ての權利と共に永久羅馬教會に結合し居らざるべからず。此の權は主教（監督）より主教に降り、彼得は今も羅馬の主教卽ち法王に於て生けるなり。一四三九年のフィレンチエ會議告文、羅馬教問答『コンスチチューチオ、ドグマチカ』及び一八七〇年のヴァチカン會議告文等之を示す。されど歷史に從へば、羅馬教會の最高權は幾世紀間の長き發達の結果にして、羅馬公教會自身に關する教義亦之に外ならず。

基督教會設立後の初代に、羅馬の監督等が最高權を有せざりしは同教會創始と雖も否定すること能はず。素より第二世紀第三世紀に於て既に羅馬の教會と監督とが、西邦全體に非常なる尊敬を受け、其の教會は西邦にて使徒開基を揚言し得たる唯一教會たりしは事實なり。第三世紀に於て同教會は既に、彼得の後繼者たることを以て最高權要求の辭となさんと勉めたりしなるべしと雖も、三二五年のニカヤ會議は尙少しも斯かることを認め居らず。議論多かりし教會法第六には、羅馬監督を權力大なるものとし、以太利の凡ての監督就任の權を之に委し、亞歷山監督には埃及、リビア、及びペンタポリスの凡ての監督を就任する權を委したれども、最高權の事は少しも言ひ居らず。羅馬の監督なして其の要求せし如く、一般に認められたる法定の最高權を得せしめたるは、第一には其の富に由り、第二には其の世界の政治的中心地に在りし事に由り、第三には第四世紀より始まれる教義の論爭に於て、常に外交者的地位を取り、慣重に正統派に與みしたる事に由れり。三四三年サルデイカ會議は、監督にして大都監督管轄會議にて廢職せられたるものあらば、羅馬監督に訴ふることを許し、羅馬監督は必要と認むる時は、其の代理と幾人かの監督とに命じて事件を再審せしむることゝなりたるを以て、羅馬は此に最高判廷の觀あるに至れり。四四五年ウアレンチニアヌス三世有名なる布令を發し、羅馬監督を基督教會の首長と認め、裁判のみならず立法上の首長と認め、之に訴へたる告訴をも、又之より出す命令をも、權威ありとなしたり。されどサルデイカ會議は世界會議として承認せられず、ウアレンチニアヌスの布令も西方にて有効なるのみなりき。且之によりて法王の權力を增したれ共、法王は尙皇帝の權力下より脫することなかりき。然るに第五世紀の後半に於て、羅馬は重大なる問題に就ては東方にも勢力を有するに至り、既に集權の勢始まり居りしが、唯獨逸人種の侵入や、ブリテン、ガリア、西班牙に立ちたる諸王國が法王權侵入の門戶を開く餘地を示さゞりしことなどにて、發展する能はざりしも、時至らば十分に成熟すべき有樣となり居たり。

メロヴアヨス朝の佛蘭西にては、法王は基督教國の第一の監督と認められ、之と信仰上の交通を保つを必要と考へしが、フランク國教會の事には法王の直接干涉を法律を以て除き、法王は單に名譽の記號に過ぎざる羊毛布製裝をさへ、王の承諾なくばフランクの大監督等に贈ることを得ざりき。王は又凡ての教會の事を決するの權力を握り、國民的教會大會を召集し、其の決議會は自己の裁可を經べきことゝなしたり。然るに第八世紀に入りカロルス朝マーヨルドムス（大宰相）の下に變化起り、フランク教會はボニファキウスと交通の問柄となり、ボニファキウスのフランク教會改革及び改造案を採用せり。而もボニファキウスは法王代理として行動し、法王の命令に依て動きし者なりしかば、ガリア教會は形式的にこそ尙法王の最高權を認めされ、實際には之を認めたるなり。此の狀態はシャールマンネの下にも續き、帝は國家に於けると同じく教會に於て最高權を握ひ、法王なほ其の國の第一の監督として特權及び特殊義務免除を與へしが、而も其の全體の教會政策はガリア教會と羅馬教會とを全く一にせんとするにありき。帝の死後ルイ敬度王と其子等との間の爭ひ、及びフランク監督等と其の大都監督等との間の爭ひ

は、王權帝權を以て教會を治むること能はざるを證し、王法が其まで有し來りたる遺憾的感化は、教會の事をも政治の事をも左右するに至れり、殊にニコラス一世（八五八—八六七）は最も巧みに此の傾向を强くし、當時恰も知られたる僞イシドロス布告書を授きて此の努力の助となしたり。

されどニコラス一世の政策も其の遂行に當りては大なる障害に遭遇せり。フランク帝國の解體は以太利にも混雜を導き、羅馬は少數貴族黨の掌中に歸せしが、之も二個の厭ふべき婦人に由て覆へされ、法王政治は青年獨逸皇帝の助に由りて始めて其の底なき穽中より出づるを得たり。實に第十世紀の中頃（羅馬帝オトー一世、九六二）より第十一世紀の中頃迄獨逸皇帝は教會の眞治者なりき。されど彼はフランク帝等と異り、教會政治に關する最高の裁判行政權を擅らず、自ら世界帝國の首長を以て任じたるも、世界教會の首長は法王なりとし、教會政治の大綱、例之新監督位の設立、舊教會法律の厲行、改革の採用といふが如き事なば悉く法王に委れたり。然るに第十一世紀の中頃に至りヒルデブランド（後の法王グレゴリウス七世、一〇七三—八五）を頭とせる一黨派羅馬に起り、法王政治を全く世俗の權力より自由にし、法王を政治の上に於ても教會の上に於ても、最上權者となさんことを目的とせり。グレゴリウス七世は自己は地上の如何なる裁判者にも服すべき者に非ず、自己は皇帝を廢するの權あり、自己は世界會議を召集し、監督を廢免又は轉任せしむる唯一の權利者なりと宣言せり。

僧侶任職權の問題は久しく法王朝及び獨逸皇帝間の激爭せし所なるが、終に法王が皇帝の權力より離れ自由に之をなすを得ることゝなれり。其より後法王は教會政治に於ては最高權利の權威者となれり。されば其後の皇帝との爭は寧ろ政治問題の爭にして、法王は自己を歐洲政治界の首石とせんと欲し、インノーセント三世（一一九八—一二一六）に至て終に此の目的を達したり。法王の要求にては、彼は基督の代表者、地上に於ける神の代表者なり。故に當界の事も世俗の事も、凡ての權力は皆彼の有なり。彼は世俗に於ける權なば王侯に委し、之を自己の統御の下に置き、靈界の權なば自ら遂行し、地上の裁判には世界會議に至るまで服從するの義務なしとし、其立法權は在來の教會法に依ても、世界會議に依ても、制限せらるゝことなく、唯教義に依て制限せらるべしとなし、又其の全赦及び特殊義務免除の權は絕對なり、法王は自由に監督を任命免職轉任せしめ得べく、僧侶一般もしくは或る教會に課稅し得べく、或る收入を專ら自己のものとして保ち得べく、何所よりの上訴をも受くべく、又代理者を外に送る を得べしとなせり。此の法王政治を法王制度と稱し、ボニファキウス八世の一三〇二年の布令『ウナム、サンクタム、エクレシアム』中に最も善く言ひ顯はせり。

第十二世紀第十三世紀に於て教會政治の形となりたる嚴重なる僧級政治は、反動を呼び起し、第十四世紀に至りては反對の傾向生じ、貴族政治的の形となり、所謂監督制度なるもの發達の緒に就けり。此の制度の基礎となれる觀念は是なり。曰く、人を天に際ぎ又は解くの權は、平等に凡ての使徒等に與へられ、彼得は唯純一の有形の証徵を定むるために長者として選かれしのみと。此の見解は法王の最高權に反對せず、又最高權を構成する凡ての時權を法王に保たしむるを欲せざる者にも非ず。唯監督位自身を既に神定なりと考へ、羅馬監督は『基督の區下中の第一者』に外ならずとなせしなり。古代教會は一般に此の見解を取りしものにて、タブリアヌスの文書などは之を代表せり。此の古見解が第十四世紀第十五世紀に强き力にて再現し、ピエル、ダイリ。ダルソン。クルマンジュのニコラス其他之を唱へ、一般公衆も法王朝が古來定まれる他の權利を蠶蝕せることや、法王等の不敬極まる行爲や、殊に教會の大分立を見ることに由て以上の見解を取る方に傾きたり。ピザ、バーゼル、コンスタンスの諸會議は此の見解に贊し、第十六世紀に至りては佛蘭西教會は明に此の制度を取れり。第十八世紀の終に近づき獨逸にてはホントハイムのニコラス此の意見を代表し、ヨセフ二世之がために熱心に戰へり。法王は暫乎として之を斥けしも、此の見解第十九世紀の中頃まで徐々教會の中に地歩を進め居りしが、一八四八年後歐洲到る所に起りし反動は再び監督を法王の下にあるものとし、一八七〇年には法王ピウス九世は監督制度を非認し、法王制度はヴァチカンの世界會議に依て公然承認せられたり。然れ共此年以太利政府は羅馬を略取し、法王の政權を奪ひたりしを以て、法王は全く政權を失ひ、其有するものは宗教的權力のみとなれり。

（『羅馬教會』（ローマカトリック）『擅保法』（ナポレオン）の條參照。）

法王選擧室（ホウワウセンキヨシツ） Conclave. **釋語** 新なる法王を選擧するため集まれるカルディナルの會合をいふ。第十一世紀の終迄は、法王は羅馬に在る僧侶及び信徒の選擧する處なりしが、ニコラス二世は一〇五九年選擧權をカルディナルの手に一任し、一一七九年に至りアレキサンデル三世は、カルディナル三分の二の多數を以て選擧に必要なる數と爲せり。然れ共斯る多數を得るは實際に於て頗る困難にして、一

二六八年クレメンス四世のヴィテルボーに於て死したりし時は、十七箇月を經て尙規定の數に達せず。於此ボナヴェンチュラなる者ヴィテルボーの住民をして、カルディナルを法王宮殿に幽閉せしめたりしが、一年を經て尙其議一致するに至らざりき。於此或人の提案に基き宮殿の屋根を取り去り、選擧者を風雨に曝したりしかば、即日グレゴリー十世選擧せられたりき。此經驗に基き、リオンの第二宗教會議（一二七四）に於て、法王選擧に關する詳細の規則を設けたりしが、此規則は大體に於て今日も尙行はる。此規則に依れば、カルディナルは此時全く外界と交通を絶たれ、選擧室の戸は唯一箇處の闖を除くの外悉く閉鎖せられ、此開放せられたる一箇處の闖は、特に二重の錠を設けて其出入を嚴にす。若し三日を經て選擧者の議一致せざる時は、一日に一回の食を供するのみ。もし八日を過ぎて尙一致せざる時はパンと葡萄酒か與ふるのみ。選擧の方法は投票にして、カルディナルは各其選擧者の姓名と被選擧者の姓名とを並記し、之を密封して神壇の上に置き各宣誓式を行ふ。もし投票の結果定數に滿されば再投票を行ひ、他の人に投票するを許す。法王選擧には此の如く嚴密なる規則あれ共、古來の歷史は、法王選擧に最も卑陋なる陰謀奸計の伴はれたるを示す。

法王全權論（ハフワウゼンケンロン）　『法王無謬說』及び『ウルトラモンタニズム』（ハフワウイズム）の條を見よ。

法王內閣　雜語　法王內閣はカルディナルと稱する羅馬教會最高の僧侶に依りて組織せられ、二週間毎に會議を開き、法王之が議長となる。法王死する時は秘書會議を開きて其相續者を選定す。通常彼等の中より輩ぐるを例とす。而して相續者の決定する迄は教會の事務を總管す。內閣員は現今五十三人にして、其中三十二人は以太利人、六人は佛蘭西人、二人は獨逸人、四人は西班牙人にして、愛蘭、北米、南米、葡萄牙、濠洲及び伯耳義諸國各一人を有す。（『カルディナル』の條參照）。

法王無謬說（ハフワウムビウセツ）　Infallibility of Pope.　雜語　羅馬教會は宗教上及び道德上に關する教會の宣言には全く誤謬なしと主張す。希臘教會の主張が羅馬教會の主張と異る所は、前者は單に世界宗教會議に於て定めたる命令は誤謬なしと主張するに止まれるに在り。此主張は教會を以て神が特に世界の教師として任用せりとの假定に基くものにして、太廿八の十九、可十六の十五、弗四の十一—十六等を以て其憑據となす。然らば教會の代言者は誰ぞ、又教會は如何なる事柄に關して世界を教へ得べきや、是れ次に起り來れる問題にして、初代の教會は世界宗教會議を以て教會の代言者と認め、又法王之を承認せる場合には地方的宗教會議の議決も同樣の効力を有ゆる者と信じたりき。然れ共法王のみ宗教上及び道德上に關する宣言を爲す權力を有せりや否やとの事に關しては、久しき間本山主義派と非本山主義派との間に爭論あり。一八七〇年迄は羅馬教徒は凡て監督會議の同意を經たる者の外、何物をも信仰箇條として絕對的に信奉するの義務なしといふを得たりしが、同年開かれたるヴァチカン會議は、羅馬教會は法王が職權上宣言したるものを以て無謬也として承認せざる可らずとの議決をなしたり。而して法王が宣言し得る所のものは、教會に於ける眞理と純潔との維持擁護に關する事柄に限られ、科學的事實の如きは其中に含有せられずと思惟せらる。ドゥリンゲル及びフリードリヒは法王無謬說を拒み、羅馬教會より離れて、別に『舊カトリック派』なる者を組織したり。（『ヴァチカン會議』『舊カトリック派』『羅馬教會』『法王政治』『ウルトラモンタニズム』等の條參照）。

法王領（ハフワウリヤウ）　States of the Church or Papal States.　雜語　羅馬法王が初めて領地を有するに至りしは七五四年の事にして、フランク王ペピンが羅馬をロンバルド王アリスタルフの手より救ひ、土地を羅馬教會に與へたりしに初まる。法王インノーセント三世は一一九八年に至り更に其俗權を擴張したりしが、後法王の間に分裂を生じ相爭ひたりしがため、一時其權力を失墜したれ共（一三七八）シクストス四世に至りて再び之を回復したり（一四七一）。然るに後間もなくアレキサンデル六世（一四九二）は法王領をして他の以太利公國と同じく他國の干涉を受けしむるに至りしが、ユリウス二世（一五〇三）に至り以太利を佛國の手より救ひたりき。一七九七年佛國革命政府は再び法王領を占領したりしが、一八一五年維納の會議に於て又之を法王に回復したり。一八五九年以前の法王領は東經十一度十分五分より十三度五十分に至り、北緯四十一度十分より四十四度五十分に至り、一千六百方哩を有し、一八五九年には人口三百十二萬五千人を有したりき。然るに一八七〇年以太利がサボイ朝のために統一せらるゝに及び、法王領は沒收せられ、現今にては法王は特別補給として政府より三百廿二萬五千リラ（一リラは我三十錢に當る）を受くるのみ。（『擔保法』の條參照）。

ハマン　ヨハン　ゲオルグ　Hamann, Johann Georg　人名　一七三〇—一八八　獨逸の哲學者。ケーニヒスベルヒに生れ、同市の大

學にて古代文學及び言語、美文學及び言語學を學び、出でゝスクールランドに行きて某家の私家教師となし、リガの大商家ベーレンス家と相知り、國民經濟を研究し、同家の用務などを帶びて英國に行きしが、倫敦にて惡友と交はり所持金を騙取せらる。此に至て聖書を讀み、次で全然悔改し、一たびリガに歸り、直ちにケーニヒスベルヒに至り、初め行政官署の小吏を奉職し、後稅關に勤め文學を事とす。著書は大抵小册子なりしも世を感動す。晩年ヤコビ及びガリツチン侯妃等と交はりぬ。

ハミルトン　ウィリアム　Hamilton, Sir William　人名　一七八八—一八五六　蘇格蘭の哲學者。生れし時父はグラスゴー大學にて解剖及び植物學の教授たりき。後はグラスゴー、エヂンバラ、牛津諸大學に歷學す。初め醫學を修めしが、牛津在學中哲學及び古典學に一身を委ね、試驗の時アリストテレースの全著を演述し、其の研究の周到なるを示したり。次で又一八一三年蘇國裁判官試驗に合格す。間もなくプレストンのハミルトンの士爵權を要求して之を得たり。一八二一年エヂンバラ大學の史學教授に選ばれ、二六年後は二三年間腦體の作用に就て研究し、其の結果骨相學の非認を宣言す。一八二九年『エヂンバラ評論』に『無條件の哲學』を出し、其より十六年間有力なる論文を續出す。三六年エヂンバラ大學の論理及び形而上學の教授に選ばれ以て死に至れり。

ハミルトンは蘇國の當識哲學の最も有力なる說明者なり。即ち凡ての人に共通にして證明することも疑ふことも能はざる第一原則の知識の說明者なり。彼はトマス、レードの辯護者たり、カントの流を汲める蘇國派の最初の者なり。哲學界に於ける彼の功績は、第一に心理學に於ける意識の解剖と外部的認知の研究となり。曰く、意識は凡ての經驗の實質的要素、即ち必要的條件なり。意識は自己が或る狀態の內に存在することの知識なり。思想する主觀が其の行動及び感動を認覺することなり。直接知識なり。其の條件として決定即ち判斷と記憶とを含むと。此はレード及びスチュアルトの說を發展したるものにて、經驗派の首領ジョン、スチュアルト、ミルやヘルベルト、スペンセル等も之に同意せり。然れども、ハミルトンの外部的客觀は意識內に在りてふ外部認覺に就ての說は贊同者少なし。第二の功績は形而上學に於ける無條件の哲學なり。此は神學と密接に關係す。其の條件の法則と稱するものに曰く、思想にて觀念し得べきものは、皆二極端の中間にあり。此の兩極端は互に相矛盾するが故に、兩つながら眞理たること能はず、然れども相矛盾するが故に其の一は必ず眞理ならざるべからず。心意の法則として觀念すべきものは、有らゆる關係に於て觀念すべからざるものに由て限られ居れり。余は之を條件の法則と呼ぶ。無限また斯くの如し。無限は認覺すべからず觀念すべからざる者なりと。此の說は哲學の方面にては、理性は矛盾に到着するのみてふカントの說疑說の結果に反對し、神學の方面にては、絕對的に就ての知識を不可能となすものなり。カントは唯心意の形式よりのみ演繹せざるべからずとし、自我、宇宙、神の觀念なるのみ知力的推論の正しき途となせり。故に諸の獨斷的認覺の自家矛盾せるを說き、其の何れをも優れたりとする能はずと言へり。例之世界は初めありといふと、無しといふとの如き、凡ての複成物は一部一部より成るといふと、成らずといふとの如き、自然法によれる原因のみが世界を造るに働く原因に非ずといふと、否其が唯一の原因なりといふとの如き是なり。然れどもハミルトンは斯くの如き矛盾は理性の所產に非ず、理性を其の領分以外に働かせんとするより起る。觀念し得べきものは唯關係的有限的のものゝみなりとせば、不可思議なるものを思議せんとすれば矛盾起らざるを得ずと言へり。然れどもハミルトンの窮せし所は、斯くの如く無限者を觀念の限界內に引き入るべからずとなす時は、如何にして無限を知り、何を以て其の確實の源となすべきやの問題なり。彼は言ふ、絕對者は存在す、彼は凡ての有限物の源にして確實なる實在なりと。然れども彼は其の事實の知識は得べからずとなし居れるなり。彼の先輩レードは絕對者の存在は必要的眞理なりと言ひしが、ハミルトンは神の存在は少くとも自然的推論なりと言ひ、而も神は決して我等の知り得るものに非ずと說けり。此の不可知の說發達してマンセルに由て唱へられ、ジョン、スチュアルト、ミル及びヘルベルト、スペンセル等の經驗派に依て熱心に主張せらる。されば不可知說に就てはカント及びハミルトン何れも之を誘發助長したるものと謂ふべし。然れどもハミルトンは宇宙の唯理的說明を試みつゝある間に、少しも憚る所なく屢々神の知識てふことを語り、其の存在を言明せり。尤も彼は知識の有限を言ひ、無條件者の觀念すべからざるを言ひ、信仰こそ知識以上のものを考想する機關なれと言ひ、心意と信仰とを二つの認覺力となせり。彼の主著『ディスカッションス』及びレード著書の出版は其生時に顯れ『論理學及び形而上學講義』（四册）は其死後に出版せられたり。彼の哲學の最良なる評論は、ジョン、スチュアルト、ミルの『サー、ウィリアム、ハミルトン哲學の檢査』也。其外ヴ

アイチ『哲學叢書』中の『ハミルトン』を見よ。

ハミルトン パトリック Hamilton, Patrick 人名 一五〇三又は四—二八 蘇格蘭宗教改革最初の殉教者。父は初代ハミルトン男爵の私生子、武功に由てジェームス四世より男爵と領地とを與へらる。母はジェームス二世の第二子アルバニー侯アレキサンデルの女。其の從兄弟ジョン、ハミルトン及びジェームス、ハミルトンは改革前共に監督となれり。斯かる父母養誡の間に生れしことゝてパトリックも善き教育を受け、十四歳の時ロスシヤーのフェルンの僧院長に任ぜられ、其の教入に依て外國遊學をなし、先づ巴理大學とセンテーヴ、カレッヂとへ行く。時の大學者ジョン、メージョルは其所にて大なる感化を拵ひ、多くの青年を率引し居たりき。一五二〇年パトリック、ハミルトンは巴理大學を卒へ、ルーヴェーン大學に行く。語學研究の目的か、又は新學問の恩人エラスムスに接せんとてか、其の一のためなりしなり。ルーヴェーンにては言語學及び哲學に大進歩をなし、プラトーン哲學を愛しぬ。後は『ルーヴェーンの驚歸者等』をば好まざりしも、其所にも心の神に觸れたる人なきに非ず、其等とは相愛せずして已む能はざりき。一五二二年蘇國へ歸り、二三年聖アンドリウス市の學校に招かれ、其の舊師メージョルも同日同學校の長とせらる。是れ後の聖マリア學院なり。然れどもハミルトンは此の舊き煩瑣派學者メージョルよりも、寧ろアウグスチヌス系の下にある聖レオナルド學院の若き『カノン』等に同情すること多くなり居りしが、二四年同院美術學校の一教師に任ぜらる。彼は同校に勉强しつゝあり、宗教音樂にも堪能なりしかば、九月より成れるマスと稱する譜を作り、合唱の時は自ら指揮者となりて歌ひたり。一五二六年ティンダル譯の新約聖書ネテルランドより蘇國商人の齎らす所となり、其の部數の大部分は聖アンドウスにて買ひ取られて市中に散ぜり。ハミルトンは此機を利用して己れを信ずる人々に聖書を說明し、長く忘れられし眞理を語れり。幾何もなく此事大監督の耳に入りぬ。大監督は性質殘忍なる人にも非ず、又勢力あるハミルトンと爭ふことを欲せしにも非ざりしが、其の甥（後のカルディナル）等周圍の人物に、殘忍にして又無謀なる者あり、大監督に迫りてハミルトンを壓抑せんとせり。然も大監督は尙最も後繼の少き手段を取らんとして、ハミルトンを脅かすに異端を以て罪せんといふを以てせしかば、ハミルトンは友人の勸告に從ひて歐洲に脫れ、マールブルフに行きてティンダル及びラムベルトと交はり、彼等より安靜に滯留を勸められしも、故國を暗雲の下に置くに忍びずとて、一五二七年の晩秋死を決して歸國し、暫くの間に親戚中の多くの者を眞理に導き、又身分高き一貴女と相愛して結婚せしが、大監督より改革を棄てべく思はるゝ點に就き、教會の重立てる人々と會議すべければ、出席せよと召喚せられ、之に從ふ。初の程は一同調和の精神を表はし、教會に存する弊害をも認め、或者は同感なまで表し、一月ほどは自由に其の意見を吐露せしめしが、其は一時の緩略にして、假面は遂に撤せられ、二月二十八日捕へられ、翌日大會堂にて審問に遭ふ。罪狀の重なる個條に、彼が人に行ひて義とせられず、信仰に由る、信仰と望と愛とは相祭りて離れず、一を有するものは凡てを有し、一を缺くものは凡てを缺く、善き行は善き人を造らず、善人善き行みなすなど言へるを罪せる所あり。而もハミルトンは告訴者に對し、偶像を拜し又は聖徒に祈るの不法なるを主張し、靈魂を存する者は何人も神の言を讀むことを合法とす、何人も之を理會するの力ありと論ぜり。同日宣告定まりて火刑に處せらる。其の苦痛の中にも、彼は神と救主に對する信賴を持して死せり。

ハム Ham. 人名 ノア三子の一人にして、世界人類三大人種の一なるハム人種の祖（創五の卅二、十の六以下）其中にエテオピア人（タシ人）埃及人（ミヅレーム人）リビアン人及びカナン人を包含す。然れ共此區別は人種學上正確を缺くものあり。言語學者は尙埃及、エテオピア等の地方に於て用ゐらるゝ言語にハム語なる名稱を用ゐ共、此地方の言語は頗るセム語と類似する所あるを以て、又ハム的セム語（Hamito-Semitic）とも稱せらる。（『ノア』の條參照）。

ハムブデン レンディクソン Hampden, Renn Dickson 人名 一七九三—一八六八 英國の監督。牛津のオリエル、カレッヂに學び、キーブル及びニウマン等と友たり。ニウトン、ファーリングトン、ハクニーに相次で牧師となり、一八二八年オリエルの教師となり、三三年聖メリースホールの長となる。三二年パムブトン講演にて『須項哲學の基督教神學に有する關係』を說きしに、アリウス主義なりと訴へらる。然れども三六年にはレジアス神學教授に選ばれ、四八年ヒアフォルドの監督とせられ、十三監督の抗議出で其の信仰の正統なるやに就て議論喧しく、小册子頒出せり。ハムブデンの著には『基督教の哲學的論證』『希臘哲學の師父』『說教集』等あり。

ハムモンド ヘンリー Hammond, Henry, D.D. 人名 一六〇五—六〇 英國の

神學者。チャールス一世の宮中牧師たり（一六四五—四七）。クライスト、チャルチの副ディーンたり（四八）。然れども王家に忠なるの故を以て免ぜられ、牛津に禁獄せられ、免されて晩年を退隱的に終る。甚だ高潔の士にして、獨身生活を貫き、ウエストミンステル神學者會議員に擧げられしも之に出でず。之も王家に忠なるの故を以て褒められたり。著書の中『實際的信仰問答』『新約聖書同意譯及び註解』『詩篇』『箴言十章迄』は最も好く、問答書は一七一五年までに十五版を重ねたりき。

ハムラビの古法典 The Code of Khammurabi (or Hammurabi). 雜語 佛人モルガンが一九〇一—二年エラムの首府スサにて發見したる巴比倫王ハムラビの編纂に係る古法典。シュラーデルは創世記十四の一シナルの王アムラペルを以て此ハムラビと同一人也となせり。彼はエラム、ラルサ、スメル及びアカドに勝ちて巴比倫を統一せり。其治世の時代は紀元前二千四百年乃至二千年迄の間にして、在位凡そ五十五年間、アブラハムと時を同ふす。此法典はハムラビ王の石碑に刻まれ、上部には王が日神より法典を拜受せる樣を彫り、下には法文を記す。表面に十八行、背後に廿六行あり、內五行を逸す。文字は舊式の楔形也。碑はもとシッパルなる日神シャッの社內に立ちしも、後エラム族に奪はれ、三百哩外なるスサに移されし也。ハムラビは太古史上卓絕の英主にして、文學を奬勵し、宗教を保護し、寺院、宮殿、城壁を建て、水道を通じ、農耕を勵ませり。彼は累代の單行法を輯めて國內に之を布きしかば、前五百年代迄世に行はる。今尙判明せる律法二百四十五法にして、三十五法は堙滅して明ならずといふ。民事に關する者多き占め、刑法及び訴訟法に亘るものあれ共、宗教及び禮儀に關するものなし。法制の定むる所訴訟、竊盜、誘拐、兵役代理、家人の特權、借地、農事、家屋及び仲買、旅宿、委托保管、姦通、離婚、嫁資、近親結婚、養妾、財產相續、廢嫡、養嗣子、保姆、負債、醫師、獸醫、課診謝價、理髮師、建築師、船匠、水夫、一般勞働者、牧畜、工賃官定、奴隸賣買等に關す。判事、誣人罪證等近世法延の機關具備し、唯專門辯護士の制なく、女代り死するの酷法あり。又借財よりの奴隸を每四年に釋放するの制あり（申十五の十二、十四參照）。刑の種類は罰金、追放、水に沈溺せしむること、火刑、舌耳手の切取、笞烙等也。又一夫一婦制を原則とし、證據法を採用せり。而して法典が單に法官のみならず、一般民衆の用に供せられしを見れば、當時文明の程度を察すべし。之をモーセが制定せしといふ猶太の法典に比すれば、更に精緻にして序次頗塞の法迂かに之に屬れ共、精神に於ては之に劣り、殊に人命を輕視し、所刑の酷虐なるは缺點とすべし。然れ共社會の狀態を察して配慮せる狀寃も老父の其子を思ふが如きものあり。

此法典のモーセの律法に類似せる處頗る多し。神前の宣誓に『若し人…せば』の言を以て筆を起せしこと、文體の簡潔なる事、法典の神授を信ずる事（出廿一の一）妻が其夫に姦を謀むる事（創十六の一、六）父が其子のために婦を求むる事（創廿四の廿四）もし人他と爭ひて之を傷けなば、我れ故意に之を擊ちしに非ずと誓ひ其醫療を償ふべしと規定せる事（出廿一の十八、十九）目にて目を償ひ齒にて齒を償へと云へる事等は其最も著しき例也。此法典はモーセの法典より一千年も早く、アブラハムと時代を同ふせることとなれば、アブラハムは此法典を知りしなるべく、彼の後以色列民族は當に巴比倫文明の餘澤を蒙りしことなれば、此法典に學びし處多かるべしと雖も、殊に以色列人が埃及を出でカナンの地に來りし後、此處に久しく行はれしハムラビ法典に接し之を採用するに至りしものなるべし。此法典の本文はウィンクレルの獨譯、ジョンソン及びハーパーの英譯あり。ジョンソンの『世界最古の法典』クックの『モーセの律法とハムラビの法典』共に一九〇四版）を見よ。

破門 Ban or Excommunication. 制度 『バン』（Ban）なる語は元來古日耳曼帝國の國法に於て、法律上の保護外に置くことの宣告の義なりしが、第十二世紀に至り、教會は此語を用ゐて破門の宣告の義となせり。

古昔希伯來人の間に在りては、人にても動物にても其他の物にても、凡て敬虔なる人の眼に汚らはしく、若くは危險に見ゆるものは、之を通常のものと區別して神に獻げ、其償し給ふ能に任せたりき。此償價は最も古代に行はれ、異教の殿堂、祭壇、偶像等を初め、兵庫、武器、軍馬等の戰利品は皆之を毀ち、又異教の市邑は之を破壞し、其住民は之を殲滅したりき。而して此主義は最も嚴重に、凡て神聖なる制度に反對せる者に對する武器として適用せられたり。即ち神との契約を破り、偶像を禮拜せる人又は市邑を破門に處し、人をば殺し（利廿七の廿九）市邑をば焚き、其中の住民を殺せり（申十三の十六）。而して金屬器、土地の如き破毀し難き物をば浚收して聖殿の所有となせり。（利廿七の廿一—廿八）。スコテ、ベヌエル（士八の四—十七）ヤベシ（廿一の十）ベニヤミン（廿の四十八）等の民の罰せられたりしが如し。然れ共時代の進歩するに從ひ、嚴酷なる刑罰

を課するの風漸く衰へ。破門は單に宗教上の刑罰となるに至れり。例之エヅラの時代に、外國生れの妻を去ることを欲せざりし以色列人を會堂より放逐し、其財産を沒收したりしが如し。新約時代には破門に稍や寛大なる者（路六の廿二）と、稍や嚴しき者（約九の廿二、十二の四十二、十六の二）との二種ありしが如し。タルムドも亦二種の破門を記す。一は三十日間を限りたる者にて、會堂の禮拜には出席するを得れ共、特殊の門より出入せざるを得ざる者、他は會堂又は神殿より除外せられ、且同宗徒との交際を絶たれたる者也。

初代の教會は聖書の教訓（太十六の十九、十八の十八、約廿の廿三、撒前五の十四、雅五の十六、壹約一の八、五の十六、哥前五の十八）に基き、重き罪ある者を破門せしが、アンシラ（三一四）及びニカヤ（三二五）の宗教會議に於て一定したる制度となり、一旦破門せられたる者は痛悔禮を取るに非ざれば、教會に復歸するを得ざることゝなれり。然れ共痛悔禮は西教會に於ては發達するに至らずして止み、其代り破門の二種類發達せり。一は小破門と稱し、單に聖禮典に與るを得ざるに止り、他は大破門と稱し、マスに與ること能はざるのみならず、聖別せられたる土地に葬らるゝこと能はず、教會の管轄權を離れ、又基督教徒との交際を絶たれたる者也。而して後者は教會の權力を以て實行すること能はず、國家の助に依りて之を爲せり。宗教改革と共に此制度は大變化を來し、プロテスタント教會に在りては、國家教會の上に權力を取ること能はざることゝなりしが故に、大破門は廢止せられ、小破門のみ教會懲戒法として殘存せしが、破門なる者は漸次廢類し、今日にては試み、除名、放逐等の懲罰あるのみとなれり。

ハリス　ジェームス　レンデル　James Rendel Harris,　人名　英國の聖書學者。米國ジョンス、ホプキンス大學、ハーヴァードオルド、カレッヂの教授に歷任し、劍橋古文學の講師たりしが、一九〇三年以來和蘭ライデン大學の神學教授となる。新約聖書及び初代基督教著書の寫本の出版者として名高し。彼は又一八八九年シナイ山の一庵室に於て第七世紀に成りたる重要なるスリア寫本を發見せり。著書頗る多く『使徒の教訓』(一八八七)『ディアテッサロン』(九〇)『アリスチデスの辯證』(九一)『新約の西教會經文に關する四講演』(九四)『ザ Christian Legend』(一九〇三)及び "The Dioscuri in Christian Legend" (一九〇五) 等は其重なるもの也。

ハリス　トマス　レーク　Harris, Thomas Lake　人名　一八二三—一九〇六　『新生命の兄弟』の創立者。バックスのフェンニー、ストラットフォルドに生れ、米國に移住し、一八五〇年頃より精靈說を奉じ、五八年英國に往きて精靈說に就て講演し、六〇年米國に於て『新生命の兄弟』(The Brotherhood of the New Life) を立つ。其最も有名なる高弟はローレンス、オリファント (Laurence Oliphant) 也。此派には成文の信仰箇條なく、又一定の教會政治なく、神の靈通に從ひて統治せり。スウェーデンボルグ派と、フォリエル派とを混合したるものにて、聖書の教權を信じ、其婚姻の神聖を承認す。ハリスの著作には『天使の智慧』『基督教の秘密』『近代の精靈說』『千福年の時代』等あり。アレンの『先覺者ハリス』(一八九七) を見よ。

ハルデーン　ジェームス　アレキサンデル及びロベルト　Haldane, James Alexander and Robert　人名　兄弟の蘇格蘭人。共にエヂンバラの高等學校及び大學に學び、共に海軍に奉職せしが、ジェームス（一七六八—一八五一）は後宗教に熱心となりて、エヂンバラに歸り、一七九七—九八年に全蘇國及びオークニー島を巡歷說教して好成績を表はし、九九年エヂンバラ市の新立獨立教會の牧師となる。一八〇一年兄ロベルト同教會のために大會堂を建つ。ジェームスは殆ど五十年間こゝに務めて大に成功す。一八〇八年自ら浸禮派の說に改めしことを公表す。ロベルト（一七六四—一八四二）も一七八三年海軍を去り、大なる家產を相續して八六年エアルスレーの家領に遷き、九三年後は宗教に熱心して慈善のために非常に力を盡し、又多くの著作をなす。十五年間慈善のため散ぜし金額三十五萬弗、存世中十萬弗を費して三百人の傳道者を教育す。一八一六年一七年ジェネヴァとモントレーパンに住み、ジェネヴァにては家を開きて大學の神學生を迎へ、羅馬書を解きぬ。學生の之に集る者多く、メアルドーピュエ。マラン。ゴーセン等の如き人々も之に依て福音的見解を取るに至る。モントレーパンにても亦同樣に生活す。蘇國に歸りて後は教會運動に加はりて勢力ある地位を占めぬ。『天啓の證據と權威』『聖書のインスピレーション』『羅馬書解釋』等は其の著なり。

ハルトマン　カルルロベルト　エドウァルド　フォン　Hartmann, Karl Robert Eduard von　人名　一八四二—一九〇六　獨逸の哲學者。普佛西陸軍將官の子、伯林に生る。軍人教育を受け。一八六〇年近衛砲兵士官となり。

りしが、禁に患起りて廢となり、六五年退職し、音樂哲學の中を選ばんとして、少時逡巡の後哲學を選ぶ。六七年ロストック大學は彼に博士號を贈れり。其の哲學者として名を博せしは處女作『無意識の哲學』に由る。六九年出版し、九〇年までに十版を重ねたり。其の成功は表題の奇拔なると、內容の多種なると、其の厭世主義の人氣に合へると、文體の活氣に充てるとに由ること多し。彼は形而上的の終局原理を顯はすに無意識といふ語を以てせしが、其の觀念はさして破天荒のものにも非ず、唯在來の獨逸哲學者の所謂絕對なるものを不透明的に言ひ換へたるに過ぎず。若し其の厭かなる實驗的說明を取り去れば、其の無意識はヘーゲル哲學とショウペンハウエル哲學との融合に外ならず。無意識は意と共に理にして、凡ての存在の絕對包括的根柢なり。ハルトマンは曾てシェリングが幾分暗示したる所と同じく汎神論と汎理論とを融合したるなり。さはいへ無意識の原始的態容は理ならずして意なり、理以上に意が勢力あるに由て此の無意識なるものゝ活動は悲哀的なり。宇宙の根源に於ては意は可能的に存在し、理は潛在せり。意が可能的容子より愈々實際的意活動に移れば理は無となる。かくなる時は絕對的の不幸となる。之を癒さんため無意識は其の理の方を引き起して最善の世界を造る。此の世界は將來賢き厭世家の意識的理性中に於て、理が意の支配より逸脫し、之に由て實際の存在より救はるゝ望を有せり。存在せる意志の大部分（人類の多數）が理に由て非常に賢くせられ、存在に遊くべからざる不幸を看識するに至れば、無存在か意志する集合的努力は此に試みられ、世界は無に歸入すべし。即ち無意識は靜謐に歸入すべし。個人の幸福は此世にても未來にても得べから予。されど無意識は終局に於て苦痛より免るゝ望なきに非予。是れ其の哲學なり。彼は『生存意志の否定』を集合的社會的努力とし、個人的厭世主義とせざる點に於てショウペンハウエルと異れり『無意識』の救てふ觀念も其の倫理の根柢たるものなり。我等は生を取りて自ら社會進化のために獻ぐべく、到底得べからざる幸福を求めて勞すべきに非予。斯くすれば道德は人生の不幸を輕減すること、他の途を取るよりも大なるを見ん。自殺其他の主我的行爲は厭ふべき事なりと言へり。認識論に於ては、彼は超越的實在論を取り、其の立場より時間の實在を主張し、世界の數の發展を主張せり。『無意識哲學』(Philosophie des Unbewussten) の外彼の重なる著書は "Phänomenologie des Unbewussten", "Das religiöse Bewusstsein der Menschheit", "Die Religion des Geistes", "Die deutsche Aesthetik seit Kant", "Die Philosophie des Schönen", "Geschichte der Metaphysik" 及び "Die Weltanschauung der modernen Physik" 等也。

ハルナック　アドルフ　Harnack, Adolf　人名　一八五一　獨逸の神學者。父がバルチック州立ドルパット大學に牧會學教授の任に在りし時、同地に生れ、同地大學及びライプチヒに學び、卒業の後ライプチヒ大學に於て神學及び教會歷史の講座を擔任し、ノスチック說、猶太教及び基督教の默示錄、初代基督教の文學等の特殊なる問題に就て數年間講演を續け、著しき注意を呼び、一八七六年助教授に擧げられ、七九年ギイセンに招かれ、教會史の教授となる。此時齡僅に廿八歲なりき。フォン、グブハルトと共同して不定期刊行の雜誌『基督教古文學歷史の本文及び其研究』を出し、新約及び教父文學に關する論文を載す。八五年其大作『教義史』(Lehrbuch der Dogmengeschichte) の第一册を出す。九〇年第三卷を公にして以て之を完成せり。彼の所說に依りて彼の神學上の立場は明となれり。彼の所說『教義』とは基督教の初代に其萌芽を發し、第四世紀に至りて教會の採用する所となり、尙發達して宗教改革の時に至れる教義の系統を指せる也。彼の信ずる所に依れば、此教義の發達は基督教初代の信仰と希臘思想との混合せる結果にして、其中には本來基督教の本質に屬せざる者をも含有すれば、基督教新教徒は、是等の教義を奉ずるの義務なきのみならず、却て之を批評するの義務あり、新教徒は適當に教義と稱する者を有せずと謂ふべき也。八六年彼はマールブルヒに招かれ、八九年保守神學者の大反對ありしに拘はらず伯林に招かる。同大學にて心ならずも使徒信經に關する論爭に捲き入れらる。彼の意見にては同信經は基督教信徒信仰の標準としては不滿足なるを免れず、故に寧ろ更に簡單なるものを造るに如かずと言ふにあり。彼は伯林にて希臘師父文書を出版し、又初代基督教文學史を出せり。最も著作多き人にして、其の思想は獨逸及び諸外國の神學者の仰ぐ所となり、其門下よりはルーフス。ムーレル。クルーゲル等の學者を出せり。彼自身の觀察立脚點は常に史的批評にあり。教會史及び聖書の研究に公然たる自由を要求し、思辨神學をば正統派のみも自由派のみも斥け、宗教的生命を有する、而して神學組織ならぬ實際的基督教に對し深厚なる興味を有せり。其文章は明快にして、且美なるを以て著はる。最近の著書中最も重なる者は『基督教の本質』(英譯及び佛譯あり)『基督教の傳道及び擴張』(獨師なる路加)『耶蘇の言』(使徒行傳)(以上何れも英譯あり)

等也。彼は尙盛に活動し、一九一〇年八月伯林に開かれたる自由基督教世界大會に於ては『二重の福音』と題する講演をなし、基督教には耶蘇の福音と耶蘇に關する福音との二あり、前者は神の國は近づけりといふ耶蘇自身の說ける福音にして、後者は十字架に死して甦れる耶蘇を信ずるに依りて救はるべしと云ふ保羅の說ける福音也。第一は眞理其物を示し、第二は之に達する道を示す、今日は二者共必要也と論ぜり。

ハルボー ヘンリー Harbaugh, Henry, D.D. 人名 一八一七—六七 米國の日耳曼改革教會神學者。十九歲までペンシルバニヤ州マーセスボルグ附近の父の許にて農に從ひ、其より他業に轉じ、一八四〇年マーセスボルグのフランクリン、メンド、マーシャル學院に入り、三年の後出で

ハルナック

て同州リウイスボルグ、及びランカスター及びレバノンの諸改革教會に牧師として歷任し一八六三年博士ウォルフの後を襲ふてマルセスボルグの神學教授となり、同校派の有力なる代表者となる。彼は詩才をも有し所謂ペンシルバニヤ獨逸語にて詩を作り『ガーデアン』雜誌に掲げしが、死後寬められ廣く愛誦せらる。讃美歌をも作り『耶蘇よ我は君ゆゑに生く』(Jesus, I live to thee)等あり。著作の大なるは『天』『ミカエル、シュラッテル傳』『獨米改革教會の諸祖』等なり。

ハルムス クラウス Harms, Claus 人名 一七七八—一八五五 獨逸の神學者、倫理說全盛時代にありて信仰を尊びし人。シュレスウイヒホルスタインのファールスタットに生れ、十九歲まで父の水車場にて勞働せしが、父の死後古典學校に入り、次でキール大學に入る。大學の學風は甚しく倫理的なりしが、彼はシュライエルマッヘルの『宗教論』を讀みて倫理主義を棄て、基督に於ける信仰を罪人の唯一の望として取りぬ。一八〇六年ルンデンにて聞牧師となり、一六年キールに轉じ、其後伯林三一教會よりシュライエルマッヘルの後の地位に招かれ、其他に招きを受けしも辭して一生を同市に終る。然れ共四九年明を失して辭職す。ハルムスは倫理主義の橫行する時代に信仰を說きて强き感化を人々に與へ、大學々生は彼を追ひて教を聽けり。トウエステンが教授としてキールに赴きし後、世人評して曰く、トウエステンは梅改せしめ、ハルムスは洗禮を施すと。彼は最も平民的の人にして、說教も革新銳利なると共に平易なりき。一八一七年宗教改革の三百年祭あるや、ハルムスは機を利用して倫理主義反對演說をなし、ルーテルの九十五個條と並べて自己の九十五個條を表明し、理性は今日の法王なり、今ルーテル教會に橫行する倫理的宗教は基督を神壇より追ひ、神の言を講壇より投げ棄て、人を造れりと信ずられ來れる神を遂に創造すと言へり。此の個條文は獨逸全國に傳はり、倫理派は彼に對し

て論戰せしが、之がため全國に亘りて弱くなれる信仰を引き起せし所少からざりき。彼は讃美歌をも作り、其の幾分は歌集に收めらる。

ハルムス ゲオルグ ルドウィヒ デトレーフ テオドール Harms, Georg Ludwig Detlev Theodor 人名 一八〇八—六五 獨逸のルーテル派牧師。ゲッチンゲン大學にて學び、若干年私家教師をなせる後、ハノーフェルに近きヘルマンスブルフにて父の牧せる教會の副牧師となる。父は倫理派の人なりしも强健の性格を有せしが、ルドウィヒは大學在學中根本的の轉心をなしたることにて、ヘルマンスブルフにては當時一般の牧師の如く日曜全日を講壇にて勞し盡すといふことなせず、人民間の牧師として勞し、其の平民的なる所、貧き者悲める者と同情する所、大に人々の服する所となる。日曜午後三時間問きし問答會には會衆千を以て數ふ。之がため北獨逸は一體に未だ曾てなき覺醒をなしぬ。ハルムスの力は主として說教より出でしが、其の說教は單純にして明白なる言語を以て顯はしたり。例之聖な言は予して神を言ひ、罪を言は予して惡魔をいふ如き眞を以てせり。其の說く所日常の生活より引きて日常の生活に適用し、常に現在の聽者を對手とせることを忘れず、其の方言を以て語れり。其の題とする所は全然の悔改、信仰に由て義とせらるゝ事、一貫せる生活は信仰の證據なること等なり。彼は罪を容赦なく責め、人をして再び後戻りして之に閉ぢ籠らしめぬやうに其の扉を閉ぢ了る力を有しぬ。然れ共彼の身體は弱かりき。晋年は細切、講壇上の奏功は硬固、晚年には說教ゞ絕りまで續くることも困難なるほどなりき。而も尙始めて教會に當れり。其の感化に依て土地の信徒は著しく變化し、嚴格に日曜を守り、規則正しく家庭新禱會を開き、暴飲暴讀等は絕え、乞食は跡を絕ち慈善のための教會賦金は著しく增加し、一八五四年には人口三千五百の小邑の教會にして外國宣教費寄附金のみにて二萬四千マルクに上るに至れり。ハルムスは尙之にて止まず。一八四九年父の歿せし後宣教師養成の目的にて神學校を起し、之も大に成功して世界の各地に宣教師を送遣せし外に、亞非利加にヘルマンスブルフ殖民地を造りぬ。一八五四年には又宣教雜誌を起し、獨逸に行はるゝに至れり。其の說教集も獨逸にて最も多く讀まるゝ書なり。『福音說教』『書翰說教』『詩篇解釋』等即ち是なり。

ハレー ロベルト Halley, Robert 人名 一七九六—一八七六 英國會衆派の說教者又學者。倫敦に近きブラックヘスにて蘇格蘭系の父より生れ、ビーアレシス及びグリニッチにて則到なる古典學の教育を受け、倫敦ハマートン、カレッヂにて神學を研究し、學生時代に宗教寬容令に從て說教の准允を受け、一八二二年ハンチングドンシアー聖ニオツの『オールド、ミーチング』教會にて按手禮を受け、其の牧師となり、又學校教師を兼ね。二六年倫敦ハイポリー、カレッヂの古典講師となり、奴隸廢止運動及びユニテリアン論爭に加はり、テーツに贈れる書翰に依てプリンストン大學より神學博士號を贈らる。三九年マンチェストルの一教會の牧師に招かれ、九年間の牧會に依て會員增加し會堂を新築するに至る。五七年倫敦ニウカレッヂより神學教授及び哲理の地位に招かれ、十五年間勤續し、七二年辭任す。其の著作には一八四三と五〇年とに聖禮典に關する二の講義を、四七年に『洗禮論』を出し、後『ランカシヤ清教史』を出す。說教者としても當時の最有力なる一人なり。英國及びウェールス會衆派合同の會にて試みたるアブラハム、リンコルン解放演說は最も有力なる演說の一として傳へらる。

ハレルヤ Hallelujah (הַלְלוּיָהּ, *Hilleloud*). 雜語 『ヤー(ヱホバ)を讃美せよ』の義。詩篇中或る詩の初め(百十一、百十二)終り(百四、百五)及び初めと終り(百卅五、百四十六—百五十)とに記さる。故に讃美の樣式となり、祭壇に喜悅を表する日に唱へられたりき(默十九の一、三、四、六參照)。此語の記されたる詩篇は皆後代の編輯に係れる者にして、思ふに神殿用のためになしたる者なるべし。此語は基督教會にても使用せられ、殊に復活祭の時使用せられたり。希臘教會にては寃悅の日に於てのみならず、又悲哀の場合、斷食、葬儀の時に使用せらる。英國教會の祈禱書には之を英譯し、教師が『謝恩主を讃美せよ』といふ場合に、會衆は『主の名は讃美すべき哉』と答ふるやうになり居れり。日本語の『さんびか』中には希伯來語み其儘に使用せる者あり。又或る教派にては喜ばしき場合に『ハレルヤ』『アーメン』と唱ふる者あり。

ハロック ウィリアム アレン Hallock, William Allen 人名 一七九四—一八八〇 米國の小册子會社主動者。マサチウセッツ州ブレーンフィルドに生れ、一八一九年ウィリアムス、カレッヂを、二二年アンドーヴァル神學校を卒へ、ボストンにて新英州小册子會社に入り、二五年米國小册子會社の組織のために主動者となり、同會社最初の書記となり、四十五年間稀有の忠實と能力とを以て同會社のために盡す。其の注意に依り會社の出版は逐日數と必要とを增しぬ。彼は又數年間『アメリカン、メッセンジャー』を編輯し、又ジャスチン、

エドワルヅ及びハラン、ベージの傳等を著はせり。自己の出版せしもの凡一億五千萬部頒布せられしと稱せらる。

布哇（ハワイ）　又はサンドウィッチ群島The Hawaian (or Sandwich) Islands.　地名

北太平洋中の有人無人八百の島嶼の群にして、一五四二年西班牙の航海者ガイタノ（Gaetano）の發見にかゝり、一七七八年カプテン、クック之を訪ひ、一七九二年より九四年迄ヴァンクヴァル之を訪へり。最大島は布哇にして長サ百哩闊サ九十哩ほどあり。キラウア及びマウナの二火山あり。最高山マウナ、キアは海拔一萬三千八百五呎なり。首府ホノルゝはオアフ島に在り、サンフランシスコより二千百哩、良港あり、教會、公衙等莊麗なり。布哇人はポリネシア人種に屬し、ニウジーランド人、トンガン人等と同族なり。クックの時には四十萬と算せられ、一八二三年には十四萬二千人となり、一八三六年には十萬八千六百人となり、一八六〇年には六萬九千七百、一八七二年には五萬六千九百、一八七八年には四萬となり、一八九〇年には三萬四千四百となり、一八九六年には三萬一千となり激烈に遞減せり。之に反して日本人及び支那人其多數を占む。他國より來る者は年々激增し、一九〇〇年には全人口十五萬四千人あり。

布哇人の宗教はもと如何にありしか不明なれ共、迷信多くして人間の犧牲をもなし、偶像をも拜したり。且多妻制度一般に行はれ、性慾に關する言語なき程なりき。又殺兒は苦く行はれ、ディブルは小兒の三分の一は親より殺さると言へり。カラカウア一八七四年投票に依て王に選ばれしが、治世の初より政爭のために累はされ、國民黨と專制黨と相鬩ぎ、陰謀と徒黨と相讀き、一八九九年には一揆起り、王は一八九〇年病を愛はんとてカリフォルニヤを訪ひ桑港にて死し、其の姉妹リリウオカラニ位を嗣ぎしが、國步極めて艱難にして、權力は全く米國人の手に握られ、女王が一八九三年憲法を改正して舊專制政に復するを傾あるものとなすや紛擾は起り、一派は米國海軍の助に由りて政廳を占領し、王國の解散せることゝ米國合衆國と合併成るまで假政府を立つることゝを宣言したり。合衆國と合併の交渉は其年に始まりしも、同國大統領クリーヴランド公使としてウィリスを遣はして調査せしめしに、其結果ウィリスは女王の復位を假政府に求めたり。假政府は之を拒み米國政府は干渉を肯ぜざりしかば、一八九四年五月共和政府設立の會議を開き、七月四日エス、ビー、ドールを大統領とすることを宣言したり。然るに前女王リリウオカラニ復位を企てゝ陰謀を行ひしなどの事あり。一八九七年再び合邦の交渉ありて、六月十六日合邦の條約成りたり。爾來布哇は米國の領地たり。最初の宣教師ヒラム、ビングハム（Hiram Bingham）及びアサ、サルストン（Asa Thurston）が布哇に達したるは、一八二〇年三月にして、此二人は共にアンドーヴァル神學校出身なり。之より先きオプキアといふ土人一八〇九年ニウヘヴンに携へ行かれ、サミュエル、ミルスに會ひ、コルンウォール宣教師學館の最初の學生の一人となり、開校式にも出でたり。彼は一八一八年基督信徒の信仰を以て死したり。一八二六年學校中止せらるゝ前九人の布哇人之に入り居りしが、歸りて教師となれり。ビングハムとサルストンが布哇に到着せし時には、案外にも偶像は毀たれ、偽職は廢せられ、人間供物は止められ居りて、宣教師等は容易く人民と接するを得たりき。一八二二年には言語は文字に寫さるゝに至り、其年印刷も設けられたり。ポリネシア宣教師等にして旅行者たるエリスは、布哇を訪ひて同島宣教師等に土人語を知るの助を與へ、一八二三年にはビショプ、スチュアルトリチャルヅ、イリー。グードリッチ等の諸宣教師米國より到れり。一八二七年天主教宣教師も行きたりしが、彼等は逐ひ出だされしも、一八三九年佛蘭西兵の銃に後援せられて歸り來れり。一八三〇年二十の書物布哇語にて印刷せられ、三四年には五萬人の生徒學校に在り。三九年二月聖書飜譯完成し、信仰復興屢々全島に起り、五三年には布哇人自身がマルクエサスに宣教師を送り、六三年には布哇福音聯合協會造られ、教會はアメリカンボールドより獨立せりと宣言せり。六九年米國の教會の補助もはや不必要なりと宣言せられしが、其時までの宣教團の費用は百二十二萬弗、一八七〇年まで入會者五萬五千三百人あり。間もなく全島民基督信徒となりね。天主教も進歩し、英國教會も少數の信徒ありてホノルゝに監督在り。最も勢力あるは會衆派なり。一八七〇年六月十五日には五十年祭ホノルゝの石造大會堂にて行はれ、三千人會合し滿員の有樣にて、其の時の王も之に臨み、教師クアエア布哇語にて說教したり。布哇に在る日本人の數は現時凡そ七萬二千人にして、米國の傳道會社之に傳道し、メソヂスト派、會衆派殊に盛也。日本人の傳道者にして、米國傳道會社の下に在りて傳道する者少からず。

ハーン（ハーン）　ヨハン　ミカエル　Hahn, Johann Michael　人名

一七五八—一八一九　獨逸の宗教的文學者、讃美歌作者。ウュルチンベルヒの農父の子、初より宗教に傾き冥想に耽り、聖書に共にヤコブ、ベーメ。ニチンゲル其他の書を讀み

しが、傳道者となることなば育ぜざりき。然るに公に說教して多くの聽衆之に集まりしかば、高等教會議に召喚せられしも、善く辯護して全きを得、ジンドリンゲンの女侯フランチスカの領内に退きて平穩に餘生を終りぬ。著作多く（十二冊となり居れり）其の作りし讃美歌中國教會の讃美歌集に編入せられしもの多し。弟子をミカエリアンと稱へ、ウュルチンベルヒに多く、基督信徒の神より義とせらるゝを過重するに反して、御めらるゝことに重きを置けり。此徒は國教會より分離せず、唯其所此所に住み、時に聞て集り、專に慈善を目的とす。コルンタルの同派集合地はハーンの計劃に依て成りしものなり。

匈牙利（ハンガリー）　Hungary.　地名

匈牙利人の初めてカルパチアン山脈を横ぎり、ダニュブ、タイス兩河岸の地に殖民せし時は尙異教民なりしが、凡そ百年を經て基督教に接觸し（九七二）後獨逸國と政治上の關係を生ずるに及び、獨逸より宣教師派遣せられたりしが、プラーグのアダルベルトは九九四年ガイザの子ウォイクに洗禮を授け、之にステパノの名を與へたり。ステパノは種族的聯合を變じて王國となし、國内を旅行して福音を說き、洗禮を授け、教會及び學校を建て、政府を組織し、官吏を任命し、人民の教化に勤めたりしが、法王シルヴェステル二世より冠及び『アポストリック、キング』の稱號を得、紀元一千年グランの大聚會に依り王冠を授けられたり。爾間もなく國内に於て彼は僧侶を國王の首位に置き、監督に豐なる報酬を與へ、日曜日休暇、金曜日斷食制等を輸入せり。斯くして羅馬教會は繁榮を極むるに至れり。宗教改革運動の獨逸に起るや、改革者等の文書は匈牙利にも配布せられたりしが、一五二三年に開かれたる國會はプロテスタント教を禁絕すべく、ルーテル教徒をば捕縛焚殺すべき事を命じたりき。然るに一五二六年モハツの戰に於て國王ルイ二世陣歿し、土耳古人國の一部を略し、墺太利のツァポリア及びフェルヂナンドは國内に傳播し、國王フェルヂナンドは新教の信仰を公認するに至り、ルドルフ一世は一五七七年王位に即き、イエスイト教徒を保護し新教を迫害したりき。於是新教徒起りて叛亂を企て、遂に一六〇六年王をして『維納條約』を結ばしめ、以て信教の自由を與へしめたりき。然るに後又羅馬教會其勢力を挽回し、新教の會堂を奪ひ、且新教徒をして强て羅馬教の儀式を守らしめたりしが、新教徒又起りて之に抗し、一六四五年及び一七一一年の條約に依り、信教の自由を承認し、一七八一年寬容令發布せられたれ共、新教の勢力は甚だ微々として振はず。羅馬教は其勢力顯る盛にして、國王は羅馬教に對し最高保護權を有し、殆ど公認教たるの觀あり。最近の調査に依れば、人口一千九百廿五萬四千五百六十人（一九〇一年調）にして其四割九分は羅馬教に屬し、二割二分はプロテスタント教、五分は猶太教に屬せり。

燔祭（ハンサイ）　Burnt Offering.　慣例　モーセの律法に定められたる禮拜の行作にして、猶太人の獻げたる犧牲中最古の式也。燔祭には犧牲の肉脂共に皆之を燔けり。但し洗ふべき所は之を洗ふて後に燔くものとす（利一の七—九）。犧牲を燔くことは、獻者全く之を神に獻ぐることゝ、神之を受け給ふことゝを表す。燔祭に關して『是れ即ち火祭にして、エホバに馨しき香也』との語は常に用ゐらるゝ所にして、即ち神之を受け納れ給ふことを示す（利一の九、十、十三、十七）。犧牲を燒き盡す所の火は、初め天より出で、神は之を用ゐて以て犧牲を受け、之を其有となし給ふ也（利九の廿四）。此の火は祭壇の上より消うることなからしめんがため、絕えず燔祭と酬恩祭の脂とに依りて之を焚へり。（燔祭の特徵が獻者自ら其身を神に獻ぐるの義なることに就ては『羅十二の一、二を參照せよ）。日々朝夕に民の名義を以て獻ぐる所の犧牲は燔祭にして、之を不斷燔祭と稱せり。犧牲を供するは、常に新禱の時にして（但九の廿一、徒三の一）概して之を云へば、新禱は燔祭と共になされたり（代下廿九の廿七—卅、路一の八—十一）。安息日、新月及び毎年の祝節は燔祭の數を增して之を特表せり（民廿八の九—卅一）。（『犧牲』の條參照）。

頌瑣哲學（ハンシクテツガク）　『スコラ哲學』の條を見よ。

汎神論（ハンシンロン）　『萬有神論』の條を見よ。

ハンナ　Hannah.　人名

舊約聖書に出でたる女性の一人。此名は希伯來人及びフェニキヤ人の中に在りては女性普通の名也。エルカナの妻、サムエルの母にして、多年子なかりしが、エホバが其熱心なる祈に答へてサムエルを與へし次第は母前に記さる。サムエルの生れたる時ハンナが歌ひし讃美の歌（母前二の一—十）は耶蘇の母マリアの歌を預表せり（路一の四十六—五十五）。

ハンナ　ウィリアム　Hanna, William, D.D.LL.D.　人名

一八〇八—八二　英國の神學者、チャルマルス傳の著者。ペルファストに生れ、グラスゴーにて學び、蘇格蘭教會の傳道者となり、レナークシヤのイーストキルブライド及びコルリングの教會に歷任す。博士チャルマルスの長女と結婚し、四三年の分裂の時は自由教會に與みし、後

博士ガスリーの同勞牧師としてエヂンバラに招かる。有力なる説教者なりしが、又著書を以て顯はる。チャルマルス傳五册（一八四九—五二）『ウィックリフとユウゲノーの講演』二册（七七）等は名高し。

ハンニングトン ジェームス Hanning-ton, James **人名** 一八四七—八五 英國の亞非利加宣教師。サッセクスのハルストピーアポイントに生る。幼より波瀾冒險及び動植物學を好み、學校にては進歩少く、十五歲にしてブライトンに在る父の會計所に入りしも心之に向はず、唯義勇兵團隊の指揮や小蒸汽船のことなど考へて日を送れり。廿一歲の時牧師たらんと志し、一八六八年牛津聖メリースホールに入り、直ちに學友間に勢力を得しが、而も學問はあまり進まず。七〇年讀書修愛のためデボンシヤのマルチンホーに退くことを勸められ、之に從ひしが、此にても亦海岸の絕壁に途を過して洞穴に達し、又は海鳥の卵を取ることにて名高くなりぬ。七二年非常に愛し居たる母死して、深く感動し、克己勉强してパチエロル鍵を得、翌年デアコノに任職せられ、トレンチスホーの一教會を托せられ、此にて精神に一變化を來せり。ハルストピーアポイントにても牧會ぜし後、亞非利加ヴィクトリアニヤンザの海岸にて二人の宣教師殺されたりてふ事件のため感激し、自ら教會宣教會社に出願して、八二年六人の宣教師團に長としてザンジバルに向ひ、其よりウガンダに行きしが、熱病と痢病とに罹りて、八三年一旦英國に歸り、恢復の後東部赤道下亞非利加監督に任ぜられ、八五年任地に赴き、フレアタウンに到着して附近の傳道地を巡回せり。ウガンダへ新道を過ぜんと志して、ヴィクトリアニヤンザ附近までは達せしが、土人其の心を變ひ、王ムワンガは被等を鼠族の充てる穢き小舍へ宿らしめたり。八日後從者先づ殺され、十月廿五日ハンニングトン自身も兩腋を槍に刺されて死せり。王の遺はせし殺戮者に向ひ『行きてムワンガ王に告げよ、我は我血を以てウガンダへの道路を買ひぬ』と言ひしは最後の語なりき。

ハーンハーン イダ 伯爵夫人 Hahn-Hahn, Ida, Countess **人名** 一八〇五—八〇 獨逸の女流著作者。メクレンブルヒシュウエリンのトレスソーに生れ、一八二六年從兄弟たるハーンハーン伯に嫁せしが、二九年夫の素行修まらぬため離緣し、初め詩作に從事せしが、三八年に『社交に就て』てふ小說を著はし、其より續々小說を著はす。其の總ジョルジ、サンの著に似て稍穩かなり。五〇年天主教に入り、五一年『巴比倫よりエルサレム へ』を著はして自己の改宗を辯護し、教授アベーケンの反駁を喚び起せり。五二年アントワルプの尼院へ退きしが、尙著作を出しぬ。『ウルリヒ』と『フアウスチン』とは四一年の作にして最佳作とす。

半ペラギウス說 Semi-Pelagianism. **學說名** 半ペラギウス說といふ名は中世教會學者の發明にかゝる。師父時代に發達してアウグスチヌスとペラギウスの中間に地を見出さんと勉めたる神學說なり。西方にてはアウグスチヌス說が、アウグスチヌスの人格の力や、亞非利加教會の活氣ある勇敢や、羅馬教會の承認や、皇帝の答書の助などに依りて大に勝を占めしが、東方にては希臘教會は何等西方の出來事に頓着なく、其の方針を續け行き、ペツ大會がネストリウス派を否認し、ペラギウス派なども自然其と共に否認することゝなりたる後と雖も、東方は少しも變ることなく進めり。されど幾何もなく西方に於てさへ、アウグスチヌスの嚴酷なる說に不滿足なる者不知不識の間に多く存せること明かとなり、此不折合はアウグスチヌス死なざる前既に著しくなりて、其の二人の弟子アキテーンのプロスペルとヒラリーとは文書を以て師に告ぐるに、マシリアの僧等はアウグスチヌスがペラギウスとの論爭に當り、師父の說と教會一般の說とに反せることを言へりとて被を訴へたりと云ふことを以てせり。同文書によれば、マシリアの僧等は人もし自ら意を決するならば、何人にても信仰とバプテスマに依て救ほるべく、其の救はれんとする意志は造物主自身が人性に植ゑ付けし所なり、預定を信ずれば人性に差別ありとせざるを得ず、然らざれば宿命說に陷るべしなど主張せしを見る。即ち彼等はアウグスチヌスの預定說とペラギウスの自由意志說の中間に立たんとせしなり。其等の僧侶の長なるヨハネス、カシアヌスとなす。クリソストモスの弟子にして一時埃及曠野僧院にありし人なるが、其文書は僧侶的熱情あると共に、希臘神學の感化を受け居れるを示せり。アウグスチヌスは二弟子の通知に接して『聖プライヂスチナキヂクトルムヲヂドムペルナヴンシテ預定』と『聖徒の保存』を書きしが、マシリア僧侶は尙服せざりき。間もなくアウグスチヌスは死し（四三〇）プロスペルは半ペラギウス徒の當の敵となれり。彼は羅馬に歸りて法王ケレスチヌスに說きて、ガリアの監督等に書翰を贈りてアウグスチヌス說を辯護せしめしが、法王の半ペラギウス說攻擊の點は明白ならざりき。次の法王シクストス亦同じかりしかど、プロスペルは種々の書を著はし、他の者も之を助けぬ。De vocatione gentium は一般にレオ大法王の著はせしものと信ぜられ、兩說の調和を謀りたるものなれど、其主張をば少しも

在げず、而も何等の勢力なかりき。人民は却てアウグスチヌス預定說を非難するに至り、反對派に屬せぬ者までも之に同意し、アウグスチヌス預定派に屬せよりは宗派とせられざりしも、半ペラギウス徒よりは『預定派』（プライヂスチナチ）と稱せられ『預定派即ち預定說異端派』といふ書まで出でたり。此は小アルノビウスの著と信ぜらる。

第五世紀中ガリアは政治上の大變儀にて苦みしため、此の論爭は下火となりしが、同世紀の後半リエジュの監督ファウストスと長老ルーキドスとに依て再び燃え上れり。後者は熱心なる預定論者なりしかば、ファウストスは屢々戒めしも効なかりしを以て、終に公然之を攻擊し、彼を招きて監督等の會議にて討論したり。討論は四七五年のアールス大會に於てせられし如く、此時ルーキドスは自ら論敗を告げて其說を取り消せり。暫くしてファウストスは『惠と人の心の全き自由』を著はして喝采を博し、ガリア全體其說に傾く觀ありしが、第六世紀の初に至り形勢急に一變したり。かのユスチヌス一世及びユスチニアヌスの治世中コンスタンチノープルにて、基督の受難は神が彼に在て苦みを受けしなりと唱へてスクテア人僧侶等は自然ペラギウスの敵なりしが、法王ホルミスダスに謂ぜんとせしも甲斐なかりしかば、信仰の告白書をサルデニア道歸中の亞非利加監督等に送れり。其書はペラギウス及びファウストスの否認を以て結べり。監督の一人ルスプのフルゲンチウスは『化身と惠』を以て之に答へ、又半ペラギウス說を否認したり。皇帝ユスチニアヌスは之に由て注意を起し、ホルミスダスに意見を質せしに、法王は五二〇年穩めて外交家的の答をなし兩方を共に辯護したり。スクテア僧侶の首領ヨハネス、マキセンチウスは其の『ホルミスダスの書に答ふ』に於て無遠慮に之を評し、若しアウグスチヌス是ならばファウストスは非ならざるべからずと言ひ、勢は漸く變じ、ガリアにても半ペラギウス說は厭はれ、維納のアヴイトス、アールスのカイザリウスなど云ふ面々や、オランジュの大會も之を否認し、同大會の決定は其後法王ボニファキウス二世、ヴアーレンス大會に依て確定せられ、半ペラギウス說は職權を以て廢棄せられたり。されど此說は滅亡したりと見るべからず。オランジュ大會はアウグスチヌス說を取りたれど、實際其の說が全然人心を支配せざりしことはゴトシャルク論爭、中世學者と僧派論爭、改革者論爭、アルミニウス論爭、イエスイトとジャンセン派論爭などに現はる。

バアル Baal. **靈名** バアルは舊約聖書中偶像崇拜の以色列人、及びカンナ人（フェニキヤ人、及びエドム人）の信仰する神として屢々記さる。フェニキヤ人は其行く所に其信仰を伴ふが故に、バアルの名は昔く世に擴れり。

バアルとは『主』又は『所有者』の義にして、特別に用ゐるときは『妻の頭』の意あり。此意は他のセム人種の神々にも含まる。凡てセム人種の神は力を表し、アリヤン人の神と異れり。又セム人種の神は元來一なりしが、其信仰ぜらるゝ地方に從ひて名を異にし、終に多數の神となりたり。バアルはフェニキヤ人が神を呼ぶ普通の名稱にして、最も尊き神を呼ぶに此名を以てす。舊約聖書には屢々複數のバアルイムを用ゐて偶像を概稱し、又集合名詞のバアルスを用ゐて各地方の神々を表せり。バアルは日神にして且男神也。屢々バアル、チャンマンと呼ばる。チャンマンは『熱』の義にして、希伯來人は之を太陽に適用したり。故にバアルベクは希臘人にヘリオポリス（日の都）と稱ぜられたり。希臘人及び羅馬人がヅロのバアルなるメルカルトを日神ヘラクルスと同一視せるは注目すべし。ベスシエミス（太陽の殿堂）にはバアルの爲めに特別に設けたる祭壇あり。日神とバアルとを二神と爲せることあれ共、之を同一視せずと云ふに非ず（王下廿三の五）。アポロも元來日神なりしが、後には全く日神と別なるものゝ如くなれるに依りて知るべし。セム人種の神は仁慈と破壞力とを併有したり。故にバアルには『ハンニバアル』（バアルは助け給ふの義）の名稱あり。之に反してバアルは又恐る可き破壞の神にして、何物も其怒を和ぐるものなしとせられ、遂に小兒を犧牲とするに至れり（耶十九の五、廿二の廿五）。モロクとバアルは一にして二にあらず、唯一は仁慈の德を有し他は破壞の力を表するのみなるが如し（『モロク』の條參照）。

バアルは數多あり。（イ）バアルベリテ（契約の神）シケム人が人と人との間になされたる契約の守護神として崇拜せし神（士八の廿三、九の四）。（ロ）バアルペオル（ペオルの神）　モアブ人、ミデアン人の信仰せしものにして、ペオル山に祭られし故に此名あり（民廿三の廿八、廿五の八）。バアルペオルの祭典には淫猥の行爲伴へりと云ふ。（ハ）バアルゼバブ（ベルゼベブ參照）。（ニ）バアルガッド（運命の神）（ヘルモンに近き處に祭らる（書十一の十七、十二の七、十三の五）。（ホ）バアルメオン（住居の神）宮殿の在る邑の名にして、屢に云へば、ベテ、バアル、メオン即ち『バアルメオンの殿堂』にして（書十三の十七）約してバアルメオンと云ふ也（民廿二の廿八、代上五の八）。從てモアブ人の市は（結廿五

の九）ベテメオン（耶四十八の廿三）ベオン（民廿二の三）とも呼ばる。現今はマインと云ひ、ヘスボンの南東九哩に在り、ルーベンに分與せられたる地なり。（二）バアルゼフオン（出十四の二、民廿三の七）　紅海の邊以色列人の幕屋を立てし處。バアルの信仰は北方より輸入せられたり。　（ト）バアルタマル（棕櫚の神）　ギデオンに近き地方（士廿の廿三）。棕櫚の樹の亭々として空に萎ゆる、其の葉の繁茂せる、四時綠色を有するところ、能く萬物を生長せしむる太陽即ちバアルの模表なり。　（チ）バルミラの神銘に依れば尙二のバアルあり。一はアグリボル、他はマラクベルにして、此二は常に相伴ひ、一は日を表し、他は月を表す。上古希伯來人は其神をバアルと呼び做せしこと疑なし。サウルの家にてはバアルの名屢々用ゐられ、メシバアル、メリバアル等と云へり（代上八の廿三、廿四）。バアル禮拜は希伯來人が曠野に在りし時既に之を知り、多くの人々はモアブの婦の勸に從て之を信じたり（民廿五）。士師の時代には此信仰常に希伯來人を惱ましたりしかば、之を根絶せんが爲めには往々嚴酷なる方法講ぜられたりしも其功少かりき（士二の十一、十三、三の七、六の廿五、十の六、母前七の四、十二の十）。後サウル。ダビデの時に至りて之れが改革行はれ、ソロモンに至りて少しく寛になり、竟にイスラエル王アハブに至り、其妻イゼベルの勸に從ひ、シドニヤのバアル禮拜を輸入しエホバ禮拜を排斥するに至れり（王上十六の廿一、十九の十）。此のバアル信仰が如何に國民を惑はせしかは、エヒウが謀計を設けて數多のバアル信者を死に處し、僅かに其勢力を挫くことを得しに依りて知らる。然れども之れを唯暫くのことにして、人民は再び其信仰に歸りたり（王下十の十八―廿八、十七の十六）。ユダに於ても亦此信仰深く人民に浸潤し、イスラエルに於けるが如くならざりしも、アハズ（王下十六の三、代下廿八の二）ヘゼキヤ（王下十八の四）マナセ（王下廿一の三）等皆此禮拜を維持せり。バアルには動物の犧牲を供し（王上十八の廿三、王下十の廿一）香を焚き（耶七の九、十一の十三、廿二の廿九）其の像に接吻す（王上十九の十八）。其像又は柱は石又は木なり以て造らる（王下十の廿六、廿七）。時としては金又は銀にて造らる（何二の八）。バアルには常にアシラ又はアスタロテ伴ふ。而してアシラ像は天然若くは人造の祭壇の上に立ち（士六の廿五、代下廿四の四、耶十九の五、廿二の廿五）其側に日神の像立つ（代下廿四の四）。山に上るは神に近く所以也との信念より屋上に上りて香を焚くの風あり（耶廿二の廿九、王下廿三の十二）。サマリヤにバアルの殿堂あり（王上十六の廿二、王下十の廿一）。エルサレムも亦バアルの祭司預言者及び其の殘虐なる供式の存在せしを認む（王上十八の十九、廿八）。

バアルベク　Baalbek.　地名　ケルシリヤの都にして、第一世紀の頃は壯麗を以て名あり。故に其古蹟も亦著名也。此にバアルは日神として祭られ、後世愛と義の神なるヴィナスを祭る。此地不道德を以て有名也。對レバノン山脈の麓に在る平原に在り。ダマスコの北西四十哩、海拔三千八百呎。歷史には（ヘリオポリス（日神）として知らるれ共、バアルベクは古代の名稱也。埃及にもヘリオポリスと名くる處あり、又オンとも呼ばる。恐らくは兩者其起原を同うするならん。一說にヘリオポリスの大殿堂に安置せる古像は、埃及より持ち來れる者也と云ふ。此地羅馬人の殖民するや忽ち首要の地となれり。而して此の壯大なる都府の古蹟は、今尙幾多の漫遊者をして如何に第二、三世紀頃の帝王が人力資力を濫費したりしかを驚かしむ。基督教初代の頃は、此地は異教の最も盛なる處なりき。基督教の記者等は此地の不道德なることを記したり。紀元二九七年ゲレシナス此地に殉教す。彼は寓劇役者なりき。一日公衆の前に基督教の禮典を嘲ける所作をなし、洗禮を受くる擬似を爲したりしが、其洗禮の浴槽より出るや急に嚴然として云ひけるは、我は最早基督信徒なり、今浴槽の中に於て恐る可く又苦だ敬ふ可き者を見たり、今より後基督の爲めに死す可しと。此に於てか人民は大に怒りて之を撲殺したりしが、代官は更に之を斬首したりしと云ふ。ソマメンの說に依れば、コンスタンチヌス帝は此地の人民の放縱淫逸の祭典を戒むる勅說を出し、且此處に基督教の會堂を建てたりしと云ふ。然れども ユリアヌス帝の位に上るや、迫害大に起り基督教徒は大に苦みたりき。後テオドシウス大帝は此地のバラニヤスの殿堂を基督教の會堂と爲したりと傳へらる。後世ヘリオポリスの監督あり、以て基督教の旺盛となりしを知る可し。アプレ、ウバイダ、ダマスコよりハムスに進軍の途次此地を攻略し、爾來主權者は屢々變り、戰爭は癒え難き傷を留め、現今は見る影もなき荒村と變じ今昔の感に堪へざらしむ。

バイ・シラッグ　ウィリバルド　Beyschlag, Wilibald　人名　一八二三―一九〇〇　獨逸の新約聖書學者。一八六〇年ハレル大學の神學教授となり、死に至る。其主著は『新約聖書の基督論』（一八六六）『耶蘇傳』（九三年第三版）『新約聖書神學』二冊（九一―二）『英譯あり』『旅行書』（九七年第六版）

『舊公教主義』（八三年第三版）及び『全が傳』より（九六―九）等也。彼は獨逸主義の神學者にして、其思想穩健なれ共、創始的の見に富み、且文章巧妙にして讀み易し。其耶蘇傳及び新約聖書神學は廣く愛讀せらる。彼は第四福音書に記せる基督の豫先存在を說きて理想的に神の心に存在せりと云ひ、其他創見頗る多し。

バイブル　クリスチャン派　Bible Christians.　宗派名　メソヂスト派の一派にして、一八一五年英國コーンウォールの牧師ウィリアム、ブライアン（William Bryan）ウェスレヤン、メソヂスト派を離れて之を創立せり。故に又ブライアン派（Bryanites）とも稱す。其メソヂスト派と異なる點は、教會政治は教師と普通信徒と同數にて行ふ事、基督の體に區別を設く可らずとの理由に基き "Reverend" なる尊稱を拒否する事、及び婦人に說教するの權を與ふる事にして、其他は教義、政治共にメソヂスト派と異なる所なし。最近の調査に依れば、英國に於ける此派の教師は二百十人、會員三萬三千三百七十三人、會堂六百四十八箇也。合衆國にも此派あれ共甚だ振はず。加那太に於ける此派は他のメソヂストと合同せり。

バイロン　ジョルジ　ゴルドン　ノエル　Byron, George Gordon Noel, Lord　人名　一七八八―一八二四　英國の詩人。倫敦に生る。父ジョンソンは有夫の婦と手を携へて他郷に走り、傾て之を虐遇し其財を奪ひ寛に異邦に狂死せり。母も寒性の奇矯なること其夫に讓らず。バイロンは全く此母の手に養育せられ、其嬌麗なる容姿と共に不幸多感の性質を受けぬ。十一歲の時大叔父の非命の死を遂ぐるや其莊園邸宅を承け、且男爵をも得き。彼は此時よりヘーローの小學校に遊ひしが、性來傲岸にして人の下風に立つを屑とせず、別苦學精日夜讀書に沒ぜたりき。一八〇五年劍橋トリニチー、カレッヂに入學せしが、不羈放縱にして校則を輕じ、頗りに雜書を耽讀せり。〇九年大陸漫遊を思ひ立ち、西班牙、希臘、土耳其、小亞細亞等を巡遊し、一年本國に歸り、翌年其大傑作『ハロルド』の首篇を出せしが、詩名忽ち英文壇に喧しく、倫敦詩界の泰斗と仰がれたり。齡廿八歲にして妻を娶りしが、妻は夫の不羈放縱なるに驚き、十二ケ月にして離別し去れり。此離婚に關し社會はバイロンを責め屬ること甚しかりしが、彼は不平に堪えず、再び大陸を漫遊し、口を極めて英人の宗教、道德、政治を罵り、其慣慣を洩しゝが、是より肆に酒色に耽り漸く悖德の行多し。希臘國民が其祖國の獨立を圖らんがため一團の義勇軍を起すに會し、バイロンは大に喜びて之に投じ、熱心に之を助けしが、マラリヤ熱に罹り、齡僅に三十七歲にして死せり。彼は狹量にして心內の提鬼を自制すること能はず、又分別の力乏しく、高尙なる理想を缺き、幼より聖書を喜びしも新約の眞面目なる愛情を缺せしに非ず、唯舊約の神怒なる喜びしのみ。其多情は情慾のみ、宗教及び審美の高等なる情緖は頗る貧なりき。然れ共彼には熱誠あり。其言狂愚に類せる者ありしと雖も、句々衷情より迸出し間々鬼神を泣かしむるものありき。彼が傑作は『ハロルド』の外『海賊』『不信者』『タッソーの歎』『アビイドスの新婦』『シロンの囚人』等也。

バウエル　ブルノー　Bauer, Bruno　人名　一八〇九―八二　獨逸の神學者。サキソニーのアイセンベルヒに生れ、伯林大學を卒業し、一八三四年同大學にて神學教授准允者となり、三八年ボン大學の私費講師となり、三九年其の特別教授となり、四二年免職せらる。ヘーゲル學派右翼に屬せしが、三九年左翼に轉じたり。免職後伯林に行き博學なれど氣暴なる思索に充ちたる書を續發し、チウビンゲン學派の上に出でゝ、保羅書論を悉く否定し、更にストラウスの上に出でゝ、基督教は羅馬帝政時代の良心の所出にして、其の種はストア派、亞歷山派哲學の種なりとし、セネカを以て基督教の眞開祖となせり。其の精神多少病的なりしが如し『約論福音書批評』『共觀福音書批評』『福音書批評』『保羅書論批評』『使徒行傳』『基督とカイザル』等の著あり。

バウリング　ジョン　Bowring, Sir John　人名　一七九二―一八七二　英國の政治家、言語學者。エキセテルの人、散文及び詩の著作にて顯はれ、又讃美歌を作る『朝拜夕拜及び其の讃美歌文章』『朝拜後の讃美歌』等の著者なり。

バウン　ボルデン　パーカル　Bowne, Borden Parker　人名　一八四七―一九一〇　米國の哲學者、神學者。エウゼルシー州モンマウスのレオナルドヴィルに生る。一八七一年紐育大學を卒業し、後巴理、ハルレ、ゲッチンゲン等に學ぶこと二年、歸りて『インデペンデント』雜誌の編輯に從事すること凡そ二年、七六年ボストン大學哲學教授となり死に至る迄三十年間其職に在り。基督教の根本的眞理を闡明するに努め、教師として、著者として思想界に貴重なる貢獻をなせり。其主著は『ヘルベルト、スペンセルの哲學』（一八七四）『有神論の研究』（七九）『形而上學』（八二）『心理學說總論』（八七）『有神論の哲學』『倫理學の原理』（九二）『思想及び知識の原理』（九七）『基督教天啓論』（九八）『基督教的生活』（九九）『臨部論』（一九〇〇）『神の過

在(一九〇五)『人格主義』(一九〇七)及び『基督教の研究』(上記基督教大啓論以下三篇及び外数篇を編はめたる者)等也。彼はカントト。ヘーゲル其他の哲學者を大膽に批評せしが、殊に力を極めてスペンセルを攻撃せり。其最後の著『人格主義』は、科學が誤りて哲學の範圍に入り、哲學が科學の領域を犯せるがために諸種の混雜を生じたることを說き、從來の哲學は非人格主義なりしが故に問題の解決不可能なりしも、人格主義の立場に立つ時は凡ての問題は忽ち氷解すべしとて、一側絶對の人格的存在を主張したる者也。彼は又メッヂスト教會の說教家なりしが、屢々教會の教義、傳說に對し批評を加へ、ために異端の疑を起したることありき。彼は晩年に至り、教職に在る者は基督教の眞髓ならぬ教義に束縛す可からずとの事を熱心に唱へたりき。

バヴァリア Bavaria. 地名 獨逸帝國の一王國。早くより以太利より基督教宣傳せられしが、其全く基督教化せるは第八世紀の中頃にして、ボニファキウスの死せる頃、バヴァリアに於ける羅馬教會は七監督管區を有するに至れり。宗教改革の烈しり初には、其進歩頗る著しかしが、ウォルムスの會議(一五二一)以後ウィリアム侯改革に反對し、爾後バヴァリア侯は獨逸に於ける羅馬教會の熱心なる保護者となり、プロテスタント教徒は大なる迫害を蒙り、ウェストファリアの媾和條約(一六四八)も此國の新教徒には何等の結果をも與へざりき。一五四九年イエスイト派此國に入り、第十八世紀の終りまで盛大を極めしが、マキシミリアン、ヨセフ二世之を國外に放逐せり。新教を奉ぜる新領地の加へらるゝに及び、新政策の必要起り、一八一八年の憲法に依りて、新教徒も羅馬教徒と同等の權利を得るに至れり。バヴァリアは面積二萬九千二百八十六方哩、人口六百五十一萬三千人(一九〇五年調)にして、其三分二以上は羅馬教に屬す。

バークレー ジョルジ Berkeley, George 人名 一六八五—一七四三 愛蘭の哲學者。キルケンニー領キルクリンに生れ、ダブリンのトリニチー、カレッヂに學び、一七〇七年フェローとせらる。ダブリンに在りて其の傳來的煩瑣主義に對する反動の空氣中に生活す。其の著『平凡の書』は之が表はせり。尙少き時より、およそ世の中には意識的精神か、觀念(精神は此等觀念の意識なり)かの外、何物も存在すべからずとの思想を有し、後之を種々の形にて發表したり。彼れ曰く、存在する事物は觀念、即ち知覺せられ意志せられたる對象より成立せり。知覺及び執意は、心意即ち精神の動作となすの外には考ふべからず、又此外に有り得べからず。如何なる對象も心を離れては存在せず、此故に心は最高の實在なり。思想と實在(若し斯る區別ありとせば)とに先在せる者也と。一七〇七年數學書二部を發行し、〇九年『幻象新說』を出して、明白に見らるゝ對象の實在の信仰に就ては、視覺意識は何等の根據をも供せざるを論ず。一〇年の『人間知識の原理』は、其の說を完全に說明せるものなり。彼は一時教職に入り、一一年『受動的服從』を說教して『神學』を明にし、一三年大學を去て倫敦に行き、同年『ハイラスとフィロナウスとの問答』を著はして、更に一層の名を得たり。其より後七年間は大抵大陸にて送り、二二年愛蘭ドロモアの『デイーン』に、二四年デリーの『ディーン』に任ぜられ、二八年結婚し、一月後米國に渡り、ベルミダ島に學校を立てゝ米國に基督教と文明とを擴張せんとの豫期ての計劃を實行せんとし、ロードアイランド州ニウポルトに上陸し、政府は必ず己が犧牲を以て企て居れる此の計劃を喜び助くるならんと期し待ちしに、其の望は全く空に歸せしかば、倫敦に歸り、三二年『アルキフロン、一名小哲學者』(Alciphron or Minute Philosopher)を著はし、當時流行せる自由思想を否定して壯烈を極む。是れ蓋し彼の傑作なり。三四年愛蘭クロインの監督とせらる。四四年其の奇なる哲學驚學者『哲學的省察及びタル水の功益に關する研究』を出す。五二年牛津に行き、餘生を安靜に終れり。バークレーは史上の最純最誠なる基督信者なりき。其の米國のニウポート近き農園に在りし時は、英國の皇居に因みて名づけたる白館に住し、ニウポートの三一教會にて說教し、近傍一哩程なる海岸の岩頭に至りて瞑想し、友をも此に誘ひぬ。教育コロムビア大學の最初の校長サミュエル、ジョンソンは彼の說に心從したる人。ジョナサン、エドワルヅも亦彼の徒なりしと云はる。此外ロードアイランドに哲學思想を印象したること深きものあり。

バークレー ロベルト Barclay, Robert 人名 一六四八—九〇 蘇格蘭のクェーカル派著作者。ゴルドンスタウンに生れ、蘇國の舊家より出づ。父は大佐デヴィド、バークレーにして、獨逸瑞典に於ける戰爭にて名高き人なり。父より注意深き教育を受けし後巴理に行きしが、母方の伯父に誘はれて羅馬教會に轉ず。然るに父はクェーカル派に入り、爲めに多くの迫害を蒙りしが、父は成功してロベルトは終にクェーカル派の有名なる神學者となれり。彼の著作『クオロギエ、ヴェライ、クリスチアナイ、アポロギア』はクェーカル派主義の基礎となれる一種の神秘主義を顯はせるものなり。一六七六年出版し、七八年英語に、八四年獨語に、一七〇二年佛語に譯せられ、アントン、ライゼルやバルトルド、ホルフラッスやベンジャミン、フィグケンやウィリアム、ベーアー等の論爭を叫び起したりき。

バサルスト ウィリアム ハイレー Bathurst, William Hiley 人名 一七九六—一八七七 英國の詩人。ブリストル近傍のクリーヴデールに生れ、ウィンチェスター及び牛津に學び、一八二〇年ヨルクシヤのバーウィク、イン、エルメトの司長となり、五二年之を辭し、後グラウセスターシヤのシドニーパークの傳來領地に退きて終る。一八二七年『人類知識の限界』四九年『ヴィルジルのゲオルギクス續譯』三一年『讚詩及び讚美歌』を出す。作歌二百六、英米にて用ひらるゝもの多く『あだは嘲むとも恐れはせじ』(O for a faith that Will not shrink)は殊に著るし。

バシリカ型の建築 Basilica Architecture. 『建築』の條を見よ。

バシリデス Basilides. 人名 埃及のノスチック派の人。一二五年より一三〇年の間に死せし人也。其書に約翰傳の『凡の人を照す眞の光は世に來れり』『我時は未だ至らず』てふ小句を引き居りて、同福音書確實の最古の證據とせらる。彼と其子と其弟子イシドールスとの文書は今傳はらず。ヒッポリトスの文書及びカスカルのアルケラウスとマニとの對論(第四世紀の初め埃及にて書かる)中に拔萃せられあるのみ。彼の說はイレニウス及びエピファニウスに依れば、彼所的二元論なり。ヒッポリトス及び亞歷山のクレメンスに依れば、ストア的分子を有し、凡神論的色彩ある一元論なり。前說は第五世紀前の埃及のノスチック說と善く符合し居れど、後說は最も善く彼の文書の斷片中の說と合ひ一般に採用せらる。

バシルロス 又は**バジル** Basillus or Basil. 人名 カイザリアの監督。三三〇年頃カイザリアに生れ、三七九年同地にて死す。希臘教會の神學を大成したる三人傑として、ナジアンゾスのグレゴリウスと、自己の弟ニッサのグレゴリウスと並べて其の伸に置かる。ポントスのイリス河畔に在りし家領アンネシにて成長し、コンスタンチノープルにてリバニウスの下に哲學、修辭學を學び、アテネにてイメリウスの下に弟グレゴリウス及び帝ユリアヌスと同窓にて學ぶ。當時上流の子弟は、派手にして且立身の捷たる希臘哲學と、之れに反せる基督教隱遁主義との何れかを選ぶことゝなり居り、ユリアヌスは前者を選びて一生の破滅を來たせしが、バシルロスは勇みて後者を選びぬ。彼はリバニウスをもアントニウスも尊崇せしが、又後者を選びて之に就きぬ。三五七年アテネを去りてアンネシに歸り、嚴格なる隱遁主義の生活をなせる母及び姉マクリナと共に住み、此頃洗禮を受けたるが如し。其よりスリア、パレスチナ、埃及の諸隱者を訪ひ、歸りて其の財產を貧者に分ち與へ、アンネシ對岸のイリス山中に退き、小隱者團を作り、規則を立つ。當時僧院はバシルロスのユウスタティウスに依て其地方に立てられ居たるも、バシルロスの立てたる規則は恰も當時の要求する所に當り、希臘教會に善く行はれ得る唯一の規則たりしなり。之と共に此時より教義に關する熱心もバシルロスの中に芽を萌しつゝありき。三六〇年コンスタンチノープル會議に出席し、ユウスタティウス及びユウノミウスの討論を聞きしが、此時は尙中間派ホモイウジアンに屬して唯傾聽せり。されど軈て其の徒を率ひて正統派に加はるために招かれ、監督ユウセビウスに依てカイザリアの長老とせらる。然るに其の能力の非凡なるにより直ちに全教會の眞首領となるに至れり。三七〇年ユウセビウス死し、多少の反對ありしも監督となる。先づ始めしはアリウス主義の抑壓なり。帝ヴァーレンスは到る所にアリウス主義を樂勵せしが、カパドキアに至りバシルロスの勢力を見て少しも壓迫を加へず、監督が其の意のまゝに行動するを許したり。次でバシルロスは希臘羅馬教會の和合に苦心したり。多くの事は目に兩教會分離の媒となりつゝあり。聖靈發出の事は第下の問題なりき。バシルロスは此に於て『デ、スピリツ、サンクタ、アムフィロキウム』を著はせり。されど事は固より其の死する時まで落着せざりき。同時に彼は內部の者と論爭せり。殊にユウノミウスに對しては『リブリ、アドヴェルツス、ユウノミウム』を書きぬ。彼の地位は困難を極め、晩年一たび兄弟ペトロスを訪ひてポントのネオカイザリア附近に行きし時の如きは全市擾立ちし程なりき。

バジル派 Basilians. 僧派名 ベネディクトが西教會に於て寺院生活を創始せし如く、東教會に在りてはバジル(バシルロス、前の條を見よ)之が開始せり。當時寺院主義は小亞細亞に行はれ、ユウスタティウス之をポントス、カパドキアに輸入せしが、共住的の方法に於て之を發達せるは、全くバジルの功に歸すべし。彼は基督教の恩惠は孤棲獨居

の生活にて受け得べき者に非ざるを悟り、第四世紀の中頃ポントスのイリス河畔に共棲的寺院を創立せり。彼の課したりし規則は、日夜規則正しく勞働工作と冥想祈禱とをなすべきことにして、即ち一日に一食し（パンと水とより成れる）夜間需時睡眠し、朝、晝、夜祈禱、唱歌し、午前及び午後勞働工作する事等也。此規則は更に發達完全せられ、又之と均しき寺院は零時の間にポントス、カパドキアの諸處に建てられ、それより西歐にまで及べり。東西兩教會の分離するに及び、此派は主として東教會内に限られ、バジル派と云へば東方教會の僧侶の魂を表するに至り、西教會に於てはベネディクト派起るに及びて、全く此派に代りしが、法王の最上權を承認せる此派の寺院は、尚多少少シ、リ及びスラヴォニヤ國内に殘存せり。

バシャン Bashan. 【地名】 亙人レバイム人の國（創十四の五）以色列人に敵して敗れ殺されたるアモリ人オグの國也（民廿一の廿三、廿二の廿三）。此地は東ヨルダン地方の北部に位し、南ギレアデの境より北ヘルモン山に至り、西はアラバ即ちヨルダンの谷より、東はゲシュル人及びマカド人の境に達す。マナセとギレアデの兩種族の占領せし所也。モーセの記事に依れば、其都府は高き城壁城門を以て圍まれたり（申三の五）。此地方は人口多く農業進歩せり。エヒウの時ハザエル、ヨルダン河の東に在る領地を以色列人より奪ひしが（王下十の廿三）エロボアム二世の時之を回復せり（王下十四の廿五）。ブルル及びチグラトピルゼル相繼ぎて此地を攻めしが、終にチグラトピルゼルは此地の民を西ヨルダン地方の民と共に捕虜として携へ行けり（王下十五の十九、廿九）。此時よりスリヤ人及び亞剌比亞人此地に繁殖したり。亞歷山大帝の死に依りて其領土に大混亂を引き起すや、此の地は爭奪の目標となり、イドミの王、ナバテの王、亞剌比亞の酋長等交々之を支配せり。紀元前二十年の頃アウガスタス帝之をヘロデ大王に與へ、大王は之を其子ヒリプに讓る。後クラウデオ帝此地とアビレネの地とを併せて、ヘロデ、アグリパに與ふ。第二世紀の頃エーメン（南亞剌比亞）の地方人口增加し、爲めに諸種族バシャンの地に殖民するに至りしが、此の殖民は平和にして秩序あり、且能く近傍劫略の敵を防ぐの功ありしを以て羅馬人は之を歡迎したりき。此殖民は基督教徒なりしと云ふ。此第一殖民の後に又基督教徒たる殖民（ジェフニデス）來り前者を壓伏してしまえば、支配權を得たりしこと凡五世紀間なりしが、紀元六三七年に至りて回教の亞剌比亞人の爲めに征服せられ、昔時の繁榮亦見る能はざるに至れり。

バーゼルの會議 The Council of Basel. 【事蹟】 一四三一年—四九年に亘れる宗教會議。コンスタンスの會議（其條を見よ）は法王及び法王政府の除謀に依り、教會の改革を實行するに至らずして解散したりしが、以太利以外の地に於て更に新會議を開くべしとの要求漸次迫り來りしかば、法王マルチン五世は遂にバーゼルに於て會議を開くべしとの布令を發したりしに、幾ならずしてマルチン死せしかば、其相續者ユウゲネ四世其布令を實行し、四三一年八月廿七日を以て開會するに至れり。然れども法王政府に對する人民の信任甚だ缺乏せしを以て、召集に應じ來れる監督の數甚だ少く、『カルディナル』セッサリニがニコラス、クザヌスを率ゐて來り、羅馬の王ジギスムンドが其代理を送り來りしに及び、漸く世人の注意を喚起するに至れり。然るにセッサリニを議長として會議漸く成立し、議事の進行初まるに及び、法王政府は議會の勢力の侮る可らざるを見、十二月十八日を以て法王は議會解散の法令をセッサリニに傳へたりしに、議會は法王に對する權能なしとして之を聽かず。三二年四月法王及び其内閣員を議會に招ぎたりしに、彼等來らざりしを以て、議會は將さに法王の廢位を議決せんとしたりしに、ジギスムンドの到着するに及び、其仲裁に依りて僅に事なきを得たり。此議會の解決せんとしたりし三大問題は、ボヘミヤに於ける異端の處置、教會の改革、及び羅馬、希臘二教會の調和にして、教會の改革に關しては、法王政府容易に讓歩せず。其中には僧侶の蓄妾、寺院内に行はるゝ惡習等道德上の問題ありしが、殊に法王及び法王政府の收入に關する經濟問題に就ては議論容易に一致せず。遂に羅馬、希臘二教會合同の問題に至りて議論破裂し、三七年三月七日には殺氣議場に充ちたりしが、市民の力に依り僅に事なきを得たり。於是セッサリニ及び法王黨は悉く議場を去り、權力は之よりアルレの大監督ルイ、ダアルマンに歸し、議會は一層平穏的となり益々嚴授を極むるに至れり。同年七月法王ユウゲネ四世反對の議再燃し、三九年六月遂に之を廢し、フェリックス五世を選びて法王となせしが、ユウゲネはバーゼルの會議に集れる教父等を目して惡魔の黨也とし、更にフェルララに會議を召集し、且瑞西及びバヴァリア侯の外フェリックスの法王たるを承認する者なかりしかば、事體は頗る困難を極め、遂に獨逸皇帝の仲裁を仰ぐ事となりしに、皇帝はユウゲネの法王たるを宣言し、フェリックスは遂に其職を去るの止むを得ざるに至れり。幾ならずユウゲネ死して、議會はニコラス五世の相續者たることを承認し、且回

九年四月廿五日を以て自ら其解散を宣告せり。斯くて教會の改革は到底平和の手段を以て爲し得べからざること漸く明なるに至れり。

バーゼルの信仰告白 The Confession of Basel. 【信條】 一五三一年九月バーゼルの總會に於て、エコラムパディウスがなしたる問會演說の最初の部分なりしを、彼の死後ミコニウス之を敷衍し、三四年一月廿一日市民集會の席上に於てレフォルムド派の信條として發布したる者にして、ルーテル及びツウィングリーの中間を占むる單純、溫和の信仰告白也。之を第一バーゼルの信仰告白となす。然るに此信仰告白はレフォルムド派普通の信仰を表白するには尚不充分也とし、更に完全なるものを作らんとして、一五三六年一月ツウリヒ、ベルン、バーゼル其他よりの代表者バーゼルに會合し、初め拉丁語にて草し、後獨逸語に飜譯し、直ちに之を採用せしが、後多少修正の上同年二月廿六日正式に之を採用せり。此信仰告白は又ヘルヴェチック第一信仰告白（Confessio Helvetica Prima）と稱す。

バッカナリ派 Baccanarists. 【僧侶名】 イエスイト社の所體後、新なる名稱と新なる形狀とに於て之を回復せんため、一七七三年バッカナリの創設せる僧派にして、法王ピウス六世の保護を得たりしが遂に盛衰に赴かず。一八一四年イエスイト社の再興せらるゝに及び其中に合せり。

バック チャールス Buck, Charles 【人名】 一七七一—一八一五 英國の非國教徒神學者、有名なる『神學辭典』の著者。バックは一生英國の獨立教徒の牧師として終れり。其の『神學辭典』は一八〇二年倫敦にて出でしより大英國及び米國には非常に多く賣れ行き、屢々版を改められ、種々の形に出版せられしが、全く其の用の廢するの時はあらざるべし。辭典の外宗教道德規範の論事』あり、却て普通人民に愛讀せらる。

バックスタル リチャルド Baxter, Richard 【人名】 一六一五—九一 英國非國教徒神學者。シュロップシャのロートンに生れ、家貧しく身體弱かりしも、苦學して博學の人となり、精確なる學者には非ざりしも、善く時代の潮流中に立て戰ふを得たり。清教徒たる家庭の感化に依て信仰篤く、暫く法廷の人となりしも、後英國々教會教職に入り、ウォルセスターの監督より按手禮を受け、二年間忠實に務めたる後、一六四〇年キッダーミンスターに招かれ、非常なる熱心を以て其の任を盡し、着任の時は無知惡德なる人民の信仰篤く、缺乏せしを以て義の模範たる所と化したり。四二年内亂の起りし時は、彼は教會にては長老黨に屬せしも、革命を喜ばず、常に王と教會とに忠なるべきを說教し、安全を謀りてグラウセスターに移り、又カヴェントリーに移り、二年間守備兵及び市民に說教せり。四五年クロムウェルの從兄弟ホワルレーの軍隊附牧師となりしも、四七年病重くして辭し、キッデルミンスターに歸る。其の從ひし軍隊は朝より夕まで神學の事のみを議論し居りしかば、之より解かれし彼は此に來て後は、彼の勇氣と德とを尊びしに依て迫害を受けず、來の安靜といふことを思想し、後世に愛讀せられたる『聖徒の永久の息み』を起稿し、五〇年出版せり。四七年より六〇年までは牧會に勉め、書物を著はすの外靜かに年を過ごしぬ。王朝回復をば公安のために歡迎し、佛蘭西の牧師にしてチャールスに新教徒たる證明を與へしデーレー。ドレランクターア。レーモン、ガーシュ等より自己に贈りたる書翰を弘く世に傳へ、之がため王より宮廷牧師とせらる。六二年シュロップシャの士官フランシス、チャールトンの女マーガレットと結婚す。淑德高く其の夫を助くること多かりし婦人なりき。一六六一年諸監督及び非國教徒神學者等のサボイ會合あり。式文の改訂を目的とせしものにて、其時は形勢頗る有望なりしが、六二年儀式劃一令決せられて其の地位を棄てざるを得ざることゝなり、キッダーミンスターをさへ罷め、アクトン及びトッテリッヂにて多勞危險なる日を送り、其後二十五年なば悲哀と病との中に過ごしぬ。說教中幾度も捕へられしことあり。圓書を悉く賣られしこともあり。教導を禁止せられしこともありき。されど屈せずして機會の許す限り說教し、又印刷物を利用して其の意見を弘布し、六九年有名なる『未悔改者の招』を著はす。同書は其の年二萬部を賣り揚げ、後には諸外國語に飜譯せられたり。彼は又七三年『基督教命令』七四年『貧人家内書』、八三年『悲哀と治癒』を著はし、八五年『新約意譯』を著はして、之がためにキングスベンチ獄に入れられ、八五年五月裁判長ジェフレーより審問を受け、五百マルクの罰金を課して其の償却まで在獄すべく、七年間教導を禁示すと宣告せらる。十八ケ月在獄の後天主教徒たるポーイス卿の靈力に依て罰金免除となり、八六年放免せらる。八八年ウィリアム三世國に入りて後は、彼の勇氣と德とを尊びしに依て迫害を受けざるに至り、說教を勉め、書籍を公にし、非國教徒國教徒の悼惜の中に死せり。バックスタルは最も高潔なる性格の人、時世より壓け投け居たる人なりき。當時は落逸なる王黨騎馬派と狂暴なる圓頭派とありて互に爭ひしが、バックスタルは其何れにも屬する能はざりき。双方の長所をも短所をも併せ見たれば なり。彼は天成の調和者なりしが、時代は彼を解す

る能はざりき。國教と非國教と相合ふの理あらんとは時人如何にしても思ふ能はざりしなり。此なほて兩方より或は嘲けられ、或は迫害を受けぬ。されど時間は正直なり。一八七五年にはキングーミンスターに肖像を立て、國教の『ディーン』スタンレーと非國教のジョン、ストートンは共にバックスタルの性格を頌讃したり。然れども又生時より友人なきにあらざりき『サー』マシウ、ヘールの變らざる信用あり、監督ボルネット又好意を以て承認する所ありアッシャーは『未悔改者の招』を書くを切に勸め、印度人エリオットは同書を聖書の次に纏課したり。バックスタルは詩をも書き、散文をも書き、著書甚だ多く、ロバルト、ボイルの如きは、若しバックスタルの文書を蒐めたらんには六十卷より下らざるべしと言へり。されど冗長にして重くるしき缺點あり。『聖徒の永久の息み』『未悔改者の招』は其名を人に知られ『ギルダス、サルヴィアヌス』と『基督教の說明』とは傑作にして又價値あり。神學に於ては『メトードス、テオロギエ、クリスチアネ』は拉丁語九百ページの書なり。彼は神學に於ても調和的抄集的なり。カルヴィン說とアルミニウス說、監督主義と長老主義、新教と天主教との共通點を取て之に神學を立てんとし、見て基督を主なりと告白する者は皆公同教會に屬する者なりと言へり。其の所信は頗る見分け難きも、共通の恩惠は萬人に與へらる、然れども之をして働きて救拯に力あらしむるには特別の理惠を要すと言ひ、又神は人を選べり、然れども罰の因となる所の罪に就て責任を負はずと言ひ、基督は萬人のために死せり、故に招は廣く與へられ共、さりとて悉く平等には非ずと言ひ、聖徒の持久及び意志の說に就てはカルヴィンに從へり。バックスタルの神學に從ふ者をバックスタル派と稱す。

バットラル　ジョセフ　Butler, Joseph

人名　一六九二—一七五二　英國ダルハムの監督『類推論』の著者。バークシヤの牛津に近きワンテージに生る。兄弟八人中の末子なり。父トマス、バットラルは世を退ける麻布商にして、堅固なる長老派信者なりしかば、其子を同派の教職たらしめんと欲せしが、バットラルは初にワンテージの國立教會の牧師フイリプ、バートンの學校にて教育を受け、次でグラウセスターにて有名なるサミュエル、ジョンスの分離教會學校にて教育を受けし後、心に變化を起し、國立教會の教職に入らんと決心せり。父も之を許し、一七一八年牛津のオリエル、カレッヂに入りしが、バットラルは其年『テアコノ』とせられ、一八年長老とせられ、其年倫敦のロルス會堂の說教者とせらる。此は有給職よりは名譽の地位にして、友人サミュエル、クラーク及びサリスボリー監督の子タルボットの幹旋に依る、聽衆は大抵法律家なりき。二一年監督タルボットよりホートンの受給教師とせられ、二五年スタンホープに轉じ、二六年說教者たる事を辭し、七年間退きて研究し、大著作の準備をなせしが、友人等は斯くの如き思想家を長く隱れたる所に置くを大なる損失とせしと見え、ヨルクの大監督は女王カロリンよりバットラルは死せしかと問はれしに答へて、否、陛下よ、彼は葬られ居れるなりと言ひしことあり。されば三三年には大尚書の附屬牧師とせられ、三六年にはローチエスターの受給教師とせられ、同年女王內殿書記とせられ、午後七時より九時まで女王と宗教的勸行をなし、神學上の事を談論す。宮中にては哲學者たると共に基督信者として敬神の德を發揮し、周圍を感化して大に人望ありたり『類推論』(Analogy)を著はせしは、宮中にてなしたる會話に刺激せられて思ひ到りたるにて、彼は同書を女王に呈せり。女王の死後王より國內最貴の教領を有するブリストルの監督とせられ、四〇年聖保羅會堂の『ディーン』とせられ、四六年王の內殿書記とせらる。王はいよ／＼バットラルの如何なる地位にも適せるを見て、四七年大監督とせんとせしが、バットラルは既に老いて此の倒れんとせる教會を支ふるに堪へずとて之を辭す。五〇年最富の教領を有するダルハムの監督とせられしが、廿ケ月にして死せり。

バットラルは嚴肅にして絕望的性情の人なりき。此を以て不信の精神が時代に漲るを見て深く之を嘆じたりしも、之を改良する爲めにはあまり多くの活動をなさゞりき。されど自らは動かざる信仰を有せり。彼は其の凡ての職責をば小心翼々として果たしぬ。彼の如き餘りに聡を知り、感情鋭く、控へ目なる人は、牧師には不適當なりしなり。彼は終に不婚にて貫けり。彼の名を博したるは、著者として博したるものにて、神學道德の上に秀でたる著者なりしのみならず、實に第十八世紀英國教會の知力の大明星たりしなり『類推論』は百五十年間世に行はれ、今尙讀で益あるものなり。

二十一歲の時博士サミュエル、クラークに匿名の書を贈り、クラークの『神の存在體(ビーイング)と屬性に就て』を批評し、クラークは之に答へて、此の兩方の書論を同書の新版に載せたることあり。一七二六年『ロルス會堂の十五說教』を出せしが、世に反應少く、四九年『公の場合に於ける六說教』を加へて四版を出せしが、此は倫理學の教科書となすべきものにて、牛津大學は之を採用せり。其の中の道德說にては

（一）に自愛と個々の欲望とを區別し（二）に自愛と他愛の併存を說し、其の調保を論ぜり。彼は又此書にて良心即ち反省の原理を說き、之が諸の動識を監視して、或は之を押し進め、或は之を退止することを主張せり。『類推論』は女王カロリンの哲學茶話會にて出でし論爭に就て考へ、斷片的の談話にては到底問題を決するの力なきを感じ、二十年間思想の末、當時盛なりし超越神論を駁せんため著はせしものなり。此書は先づ神の存在を說き、自然界の吾人に知られたる徑路を說き、吾人の知識の有限なるを說き、斯くて聖書に存する難解は自然界の働に存する難解と異らず、吾人は此等の難解を基として聖書に對する反對を否定するのみならず、進んで聖書も自然も同じ作者より出でたりと推論せざるべからずと論ぜり。されば同書は宗教哲學にはあらず、唯宗教に對する反對を除かんとせるものなり。書中また絕えて他人の書を引かず、去れどバットラルは汎讀の人にして、何人も無學を以て彼を誇る能はざりき『類推論』は時代に大なる功を成せり。基督教の敵は其侮るべからざるを見、味方は其の道理あるを見、同書は長く諸大學の教科書に用ひられ、今尙多少世に讀まれつゝあり『外形宗教の用と肝要』はダルハム教區の教職等に示したる書なるが、當時の人民の信仰の調子は非常に低かりしことゝて、彼が禮拜の儀式を重ずるを以て直ちに法王教徒なりとなし、其のブリストルの會堂に十字架を建てたることゝ併せて彼を窃かに羅馬教に入りしものとして疑ふの因となしたり。是れ素より迂方もなき誤解なりしなり。バットラルに就て詳なることを知らんと欲せばレスリー、スチーブンの『第十八世紀に於ける英國思想』ダブリウ、エル、コリンスの『バットラル』（哲學教書中の）フイッツゲラルドの『バットラル傳』及び（バットラルの著書（ベルナルド又はグラドストンの編輯に成れる）を見るべし。

バッハ　ヨハン　セバスチアン　Bach, Johann Sebastian

人名　一六八五—一七五〇　獨逸の音樂者。アイゼナハに生る、父祖數世音樂の才を以て著はる。少にして父母を喪ひ、一七〇三年ワイマルの宮廷音樂者となられ、二三年既に有數音樂者の一人としてライプチヒの教會音樂長とせらる。オルガン及びピアノは其の最も長じたる所なりき。作譜は後に至ては音樂史上に獨逸派と稱せらるゝものゝ基礎となりしが、其の存生中には多く世に認められざりき。其等の譜の多くは教會音樂、オラトリウム、ミサ等に用ふるものにして、オルガン、オルケエストラ等を以て奏すべく、器樂樂曲兩用となるものなり。死後原稿は諸子の分配する所となり、殆ど著はれずして埋り居りしが、メンデルソーン出でゝ之を世に名高きものとせり。

バテシエバ　Bathsheba.

人名　ヘチ人ウリヤの妻、後以色列王ダビデの妻となり、ソロモンを生む。ダビデが之を容れて妻となせる不法の擬舞及びバテシエバが宮中に入りて權威を得るに至る次第は母後十一章及び王上一章に記さる。（『ダビデ』の條參照）。

バーデル　フランツ　クザーフェル　Baader, Franz Xaver

人名　一七六五—一八四一　獨逸の神秘的神學者。ミウニヒに生れ、初め醫學、次で鑛山學を研究し、一七九二年より九六年まで英國に在りし後、ミウニヒの鑛山局の顧問より其長となり、一八二六年同市大學の哲學及び思辯神學の教授とせられ、著しき感化を與ふ。彼は哲學者と云ふよりは接神家なりしが、而も思想嶄新にして大なる暗示力あり。羅馬加特力教徒なりしも、法王制に就ては獨立の地位を維持し、法王制は曖昧の制度にして必ずしも教會の實質たるものに非ずと論じたり。

巴比倫　バビロニヤ　Babylonia.

地名　希臘人及び羅馬人が『カルデヤ人の土地』に與へたる名稱也（耶廿四の五、廿五の十二、結十二の十三）。舊約聖書には通例シナルと云ひ（創十の十、十一の二、十四の一）ユフラテ、チグリス二大河に沿ふて、其相接近する所より彼斯灣に注ぐ所に達し、東はエラムより西は亞剌比亞に境する土地の總稱也。此地方は一望平坦の廣原にして非常に肥沃也。古代此の地方は卓越なる耕鋤の力によりて其生產力は豐富なりき。又兩大河の洪水を防ぐ爲め、又は其水を利用する爲めに無數の水力應用の事業企劃せられたりき。ユフラテは靜かなれども、チグリスの水流は極めて激し。故に巨大の堤防、無數の貯水池、長き溝渠等ありて之に備ふ。人口の繁殖著しきを以て、彼等は農業のみならず又能く工商業をも發達したり。數物、羊毛、麻布、及び硝子、青銅の類は尤も著名なる產物なり。之を以て常に亞剌比亞、エテオピア及び印度諸國の民と交易し、國民は富めり。彼斯國の如きは後に至りて其歲入の三分一を此地方より取りたりと云ふ。此文明國の住民は單純の人種に非ずして、二種の本源あり。一はツルコ、タータリク即ちウラロ、アルタイク人種と同種なるアッカド人にして、他は純粹のセミチック的カルデヤ人也。アッカド人即ちシナル本來の人種は其楔形文字の碑銘に依りて、吾人に其言語文學歌謠也詩學術技藝天文學建築術等の如何

に發達せしかを知らしむ。カルデヤ人は其史詩な翻譯し、其建築術を採用し、且之を一層發達せしめたるなり。巴比倫帝國政府の中心となり、又其事業の中心となれる諸都府は皆此アッカド人の創立にかゝる。其中四個は今尚存す。其一は即ちウル、即ち舊約聖書に所謂カルデヤ人のウル(創十一の廿八)にして、ユフラテの右岸北緯三十一度に位し、マグハイルの古蹟是也。其二はラムサムにして、ユフラテの左岸に在りて稍北方に偏す、センケレの古跡是也。第三はアルクにして稍其北方に位す、現今のワルク、聖書のエルク(創十の十)希臘人のオルケと唱ふるもの是也。第四は即ちバビル又はバビロンにして聖書のバベル是也。其他アッカド、クタ、セフハルバイム、及びネボルの如きは聖書及び碑銘に記されたれども、未だ何れの古蹟なりや明ならず。但此等の都府が何れもセミチック人の手によりて創建せられたる者に非ざることは其古蹟より出でたる碑銘によりて明也。而して聖書も亦此說と一致す。即ち聖書はバベル、エレク、アッカド、カルネ等はハマイ人(クシ人)ニムロデの創立にかゝると云へり(創十の十)。元初時代には此等の都府相爭へり。有史時代に入りて最初の有力なる王はウルの支配者ウルタ也。碑銘は此王に關して記すこと頗る多し。又タダルマブク王あり、ウルタ王と同時代にしてラルサムの王也。此王はアサルバニパルの碑銘にセンナカリブの前一六三五年巴比倫を統轄せりと云はるゝタダルナンシヤンチ王と同一ならんと思はる。即ち紀元前二二八〇年頃にして、恐くはエラム朝即ち純粹のツーラニヤン朝に屬し、聖書の所謂ケドラオメル(創十四章)の事ならん。此等の諸小國を合併して一大帝國となせるは、第十六世紀の頃の王ハンムラビの力也。彼はエラムより來れるカッシ人にして、巴比倫の王となり、彼斯剛頭に至る全地方を攻略し、バビロンを其帝國の首府となし、ベルの禮拜を盛大にし、終に之を以て巴比倫帝國の宗教の主要の神となすに至れり。彼は尚他の殿堂宮殿都府を建立し、又ハムラビヌプスニシと稱する巴比倫帝國を横斷する一大水道を穿ちたり。

セム人は最初亞剌比亞より來りてウルの內外に殖民し、其北方に擴まり、屢々アッカド人と戰ひて勝ち、終に勢力を得るに至れり。如此にしてカルデヤ人は支配者の位置を得るに至りしが、其文明は皆アッカド人のものを採用したる也。紀元前第十七世紀の頃エレクを攻略せしセム人なるアガネの王サルゴンは、アッカド人の經典を飜譯するに苦心したりと云ふ。此くの如くにしてアッカド人の叙情詩及び史詩の全體は其國語とセム語の飜譯とにて存在すること を得たる也。大洪水に關するカルデヤ人の傳說はアッカド人のより飜譯せしものにして、一大史詩の一部たるもの也『イヅマバルの冒險』と稱するものは、ホーメルの希臘人に於けるが如く、巴比倫人には大切なるものとせらる。近世生活の基礎とも云ふべき宗教思想は、實に以色列人がカルデヤのウルより學得したるものにして、近世文明の學術的技藝的の傳說も亦實に此の同一の源泉より來り、唯之れが羅馬人希臘人を經て來りしを異れりとするのみ。又アッカド人の國語には精細なる天文學の符號あり、之を以て彼等は此學術に於ても亦カルデヤ人の師たりし事を知るべし。又世界最古のものと云はるゝ法律の目錄、及び其中に含有する道德思想も、亦其記されたる言語の一種の沿着性を帶ぶる所より、ウラロ、アルタイク種に屬することを知るべし。ウラロ、アルタイクの法律は母を父よりも重ずることなるが、此法律にも亦此點を存することによりて益明也。巴比倫の人民が二重の性質を有することは、アッカド人カルデヤ人の二人種より成立せるより起れるものにして、巴比倫の王が諸小國を併呑して稱自ら『スミル及びアッカドの王』と稱せしを見ても明也。スミルは蘆しシナルの事ならん。

アッスリヤと巴比倫の接觸は、チグラトピルゼル二世の時より始まる(前七四五—七二八)。彼は二度巴比倫を攻めて之を服したれ共、又二度ベス、ラキンのメロダク、バラダン反逆に逢ひたり(七二一、七一〇)。之より後メロダク、バラダン、サルゴン王の爲めに全く敗らるゝに至りて初めて兩國の合同成立せり。サルゴンは(七二七—七〇七)巴比倫の王と稱し、自ら其國を支配す。エッサルハッドン(六八一—六六九)も亦之に倣ひしのみならず、自らバビロンニ住す。彼は猶太王マナセを此のバビロンに捕虜としたり(代下廿三の十一、喇四の二)。然れどもアッスリヤ王は大抵總督を置て巴比倫を治めたりしが、是れ反逆の屢々起りし所以也。此に於てアサルバニパル(六六八—六二六)は其兄弟サムルスムキンを以て巴比倫の總督となしたりしが、是亦反を謀りて殺さる。アサルバニパルの相續者アサル、エビ、イル王の時に至りて、巴比倫終に大に反を謀り、其總督ナボポラサーなる者ミデヤの王シヤクスカラスと同盟してアッスリヤを攻め、前六〇五年終にニネベを陷れ、バビロンを以て此の大帝國の中心となすに至れり。是れナボポラサー及び其子ネブカドネザルの時也(六〇四—五六一)。ネブカドネザルの死するや巴比倫の勢力漸に衰へ、紀五三八年終に彼斯王クロスの爲めに全くにされ其領土となる。

アッスリヤ、巴比倫共に亡びて、此大帝國がセム人種の手を脫し、クロスに依りてアリアン人種に移したるは誠に人類の幸福と云ふ可し。現代文明の最も古き宗教的學術的及び美術的の傳說は皆巴比倫の搖籃より出でたるものなることは明かなれども、而かも其宗教は野卑なる偶像教にして、人智の發達學術の進歩を妨ぐるものなり。之を道德の方面より見れば、人慾を抑制することを教へず、寧ろ之を挑發するが故に、人をして放縱淫逸ならしむ。巴比倫の神々は元來地方的のものにして、ベル及び其伴侶たるベリト(又はミルタ)は元ニプルの神なりしが、バベルに移され、バビロンが其大帝國の首府となるに至りて最上主要の神となるに至れり。月の神なるシンは其初め巴比倫文明の最も古き中心の一なるウルの神なりしが、巴比倫人は非常に之を崇めて日の神なるシヤマスよりも尊びたり。諸天の神アヌ及び其伴侶ナヽはエレクの神なりき。又海及び惡鬼の住處の神なるヘア及び其伴侶ダルキナはエリダの神なりき。此等の諸都府合して一大帝國となるや諸神は皆一つの組織の下に集められ、其間に階級を立て又系統を作られたり。神秘的にして奇怪なる天體との關係は、各其名に結び付けられ、斯くして半ば詩的にして半ば學術的なる神話は作爲せらるゝに至れり。然れども其神話は已に信仰の力を失ひ、又之に代る可き哲學も出でずして、巴比倫の文明は短き運命の遺骸を餘惡と呪詛の中に葬らるゝに至りたりき。(巴比倫の事に就て詳に知らんと欲せば、ホメルの『巴比倫及びアッスリヤ史』デーリッチの同名の書、スミス及びセースの『巴比倫史』マスペロの『文明の曙光』及び『諸國民の爭』マッカーデーの『歷史、預言及び碑銘』ラダウの『初代巴比倫史』ピンチの『記錄の光明に照せる舊約聖書』(ピロニヤノシヤウ色列エル)の條を見よ。

巴比倫の俘囚 Babylonish Captivity. 『以色列』の條を見よ。

バビロン Babylon. 地名 巴比倫帝國の首府。ユフラテ河の兩岸に跨る、今のヒルラス是也。舊約聖書(創十の十)に依れば、バベル、エレク、アッカデ、及びカルネは共にハム人(即ちクシ人)ニムロデの創建する所也。近世此等の古蹟より發見したる碑文はウル(創十一の廿八)アルク(近世のウアルカ、聖書のエレク)バビル(聖書のバベル)等は、セミチック人に屬せざる人種の創建せし都府なるを證明して餘く前說と一致す。バベルの名は言語の混亂、人民の四散等に關して著名なれども(創十一の九)近世發見の碑文に依れば、バベルは『エルの門』又は單に『神の門』と云ふ意なり。此都はカルデヤ、ブロカルデヤ、アッカデヤ諸文明國の中心にして、前凡三千年以前に屬す。ナボポラサル及びネブカドネザル之を擴張し且完成したり。クチシヤスの說に依れば、周圍五十六哩ありと云へり。是れ恐くは後に至りて郊外の地ボルシッパをも加へて算へたるに依るならん。此の都を圍繞する城壁は高さ二百キュビト厚さ五十キュビトにして、四馬に駕したる兵車二輛相駢びて其城壁の間を通過するを得たりと云ふ。煉瓦と石灰とを以て積み上げ、二百五十の塔ありて之を裝ふ。深く且廣き城壕は其下を廻りて、常にユフラテの河水之に流入せり。ユフラテの沿岸には堤防を築きて敵の侵入に備ふ。黃銅の門及び石を疊みて階段を作り、以て河に通ず。又一大長橋ありて之れに架す。ネブカトネザルの作りし所にして、兩岸に巨大の樓ありて之を支ふ。杉及び柳子樹を以て作りたる通路あり。夜間は之を撤す。此都は數多の小區劃に分たれ、百五十呎の幅ある道路其間を通ず。三層四層の家屋櫛を並べて市街を爲す。中央に花園あり。之れぞ全地の人の頌美(ほまれ)(耶五十一の四十一)カルデヤ人のほこりとなせるバビロン(賽十四の十九)にして、西亞細亞の壯麗、富貴、驕奢、美術、學問の中心たりし所也。而して又實に汚辱と諸惡との中心なりし也。

此都の古蹟は東西二部に分れ、其東部は西部よりも更に壯大にして人目を驚かすものあり。巨大なる丘陵三箇より成る。即ちアルカスル、テルアムラン、及びバビル是也。其小丘より出でたる碑文に依れば、アレカスルはネブカトネザル王の建てたる宮殿の古蹟なり。此小丘は七百ヤルドの周圍を有する方形のものにして、煉瓦、瓦、及び石片より成る。硬壁の斷片及び建築用裝飾の遺物等今尚此の小丘より發掘せらる。又其小丘の北方より墨色玄武岩にて作れる大なる獅子像出でたり。亞剌比亞人は之を『偶像』と呼べり。アルカサルの南七百メートルを距りてテルアムランの小丘立つ。此上にアリの子アムランの紀念の爲めに立てたる一個の禮拜堂あり。故に此名を存す。此小丘は不平行四邊形にして幅四百メートルあり。他の二邊は五百メートルと三百メートルあり。硬壁の斷片等一も存せず。表面は砂と塵芥とのみにして長年月の間墓地に使用されたるものゝ如し。此の小丘は彼の有名なる懸空延園の古蹟ならんと一般に信ぜらる。バビルの古蹟は尤も壯大にして、長百七十メートル、幅七十メートル、高四十メートルあり。墻壁其他建築物の遺物によりて、此の小丘は尊當のものにあらざるを認む。恐くは是れベラスの宮殿の遺蹟ならん。即ちネブカドネザルに先だつ一百

年チグラテピルセル四世の碑銘中に記さるゝ殿堂にして、ベルメロダクに献げたるものなり。但しユフラテの西岸ボルシッパに在りてベルネボに献げたるバベルの塔と稱せらるゝものとは異れり。

ユフラテの西岸にして恰かもテルアムランの對岸稍二哩許北方に偏して、古代のボルシッパに於く第二の王宮の遺蹟あり。是れ前述のベルネボの殿堂の遺蹟にして、極めて興味多き古蹟なり。此の殿堂は寇然煉瓦を以て造れる人造の山の如し。此の殿堂の立つ所は地域方形にして、各方面凡そ千二百呎餘あり。土壁ありて四方を圍む。中央に煉瓦と土瀝青とを以て作れる方形の建物あり。各方面六百呎許あり。此の上に高さ六百呎許の三角形の塔立つ。階段ありて之を昇り、屋外に出で又經頂の室に至るを得べし。此室内には黄金の祭壇及び盛裝したる神像の臺のみ存す。又最下層の室内には黄金の臺に坐する神像あり。其前に黄金の祭壇ありて、毎年其祭日に數千磅の香を薫す。二個の碑銘に依れば、ネブカトネザル帝て此の建築物を見、其未だ完成せざる處あり、又其已に朽腐せる處あるを見て、痛く之を嘆き此を修築したりと云ふ。果して然らば此建築物は非常に舊き物なるべし。且此地方に存する傳説は此のビルスニムロドの古蹟はバベルの塔と同一なるものなりとなす（創十の十）。又アッスリヤ學者の多數は此の傳説を採用するを見れば、此の建築物の舊き事明かなり。

巴比倫帝國の亡ぶるや此の建築物は漸く敗頽したり。ザルタセスは其經頂の室より凡ての裝飾を取り去れり。亞歴山大帝は此の建築物を修復せんと欲し、二ヶ月の間一萬の人夫を使用して堆積せる屑芥を掃除せしめたりと云ふ。現今は僅に其建築物の高さの半を殘存せるのみ。頂上の塔は倒れて下層の建物を壞殘せり。又火災の爲めに其一部は多大の損害を受けしものゝ如し。

此都は前五三八年初めてクロス王の爲めに攻陷せられ、次で五一八年又ダリアスヒスタスペスの爲めに略せらる。ダリアスは其城壁を削りて半ばとなせりと云ふ。ザルクセスは諸寶物を奪略し、舎にベルスの殿堂のみならず王宮の寶物までも奪取したりと云ふ。之れが恢復を企てし亞歴山大帝は藥半ばにして死す。此都が受けたる最も恐ろしき打擊は即ち近く墟を接したるセルキヤの新王宮より受けたるものにして、さしもの大都一朝化して石墳と變じたり。セルキヤ、クテシフォン、クーパ、及びバグダクトの如き皆此のバビロンより煉瓦を携へ行きて其都市を築きたりと云ふ。此都の廢墟に立ちて古を懐ふ者誰れか諸預言者の言を追想して長大嘆息せざらんや（寒十三の九、十四の四、耶五十一の三十七）。

バプテスト教會 (ヤククリイ) The Baptist Church.

宗派名　主としてバプテスマの禮典に關し特殊の教義を有するより起りたる宗派にして、此點に關する彼等特殊の主張は之を二に約すべし。即ち（一）彼等は教會を以て純然たる靈的組織となすが故に、會員たるものは必ず信者ならざるべからずとなし、信仰を有する者のみ入會の禮典、即ちバプテスマを受くるを得べしとなせり。此見地より彼等は小兒のバプテスマに反對し、小兒は自ら信ずること能はざるが故に、又バプテスマを受くるの資格なき者也と論ぜり。（二）次に彼等は浸禮を以てバプテスマ唯一正當の方法也となし、他の教會にて執行する洗禮は此禮典の意義を没却し、歴史的證據を無視する者也として強く之に反對せり。彼等はバプテスマを以て耶蘇の遺命（太廿八の十九）なるが故に最も重視すべき者也となし、而してバプテスマなる言辭は『水に浸す』の義なるが故に、正當のバプテスマは浸禮ならざる可らずと云ひ、又新約時代に於けるバプテスマが河（太三の六、可一の五）又は池（徒八の廿六、約三の廿三）に於て施されたりとの事、及び耶蘇自らがヨルダン河に於てバプテスマを受けたり（太三の十六、可一の九）との例を引きて、當時のバプテスマが浸禮なりしことを證し、又保羅が我倩はバプテスマに依りて基督と共に葬られ、又基督と共に蘇へさるゝ也と云び（羅六の四、西二の十二）彼得が水に依りて表したるバプテスマ耶蘇基督の復生に依りて我倩をも救ふ（彼前三の廿一）と云へるは、當時のバプテスマの浸禮なりし事を證する者にして、浸禮のみ此禮典の意義を適當に表白し得べしと論ぜり。教會政治は會衆派と同じく個々の教會各々獨立を保持せり。尤も國民的同盟（例之蘇國バプテスト同盟、英國バプテスト同盟等の如し）なる者ありて、個々の教會は大抵此同盟に加入せりと雖も、此同盟は單に個々の教會よりも廣き範圍に於て攻勢的事業を爲さんため、若くは互に補助奬勵せんために、組織せられたるものにして、個々の教會の上に統御權を有するものに非ず。斯く此教派に個々の教會獨立なるが故に、教派全體の信奉せる信仰箇條なるものなく、教師及び會員は各々聖書の權威に據り、其心の自由を有す。然れ共大體に於ては彼等はウェストミンステルの信仰告白を採用せり。

【バプテスト派の畧史】　バプテスト派は教會史上特殊の大運動に其起源を有せず。聖書の中に其特殊の教義の憑據を發見するを以て滿足せり。尤も彼等はカタリ派、アルビゲンス派、及び其他の教派と歴

史的連續を有せりとのことを承認すれ共、第十六世紀に於ける獨逸アナバプテスト派及びメノー派とは何等の關係を有せざることを主張す。バプテスト派の初めて瑞西に顯はれたるは、一五二三年頃にして、當時被等はツウィングリー及び羅馬教徒のために劇しき迫害を蒙りたりき。次で一五二五―三〇年の交彼等は獨逸の南部及び中央に於て繁盛を極めたりしが、此處にも亦劇しき迫害を蒙りたりき。セラヴイヤは比較的信教の自由を有せしかば、バプテスト徒の此處に避難する者頗る多かりき。一五三四年以後被等は獨逸の北部、和蘭、白耳義等に繁榮し、此等の諸地方に於て漸次其數を增加したりしが、第十七世紀の中頃より漸次衰頽し、現今歐羅巴大陸に在りては、和蘭に少數の信徒を有するのみ。英國に在りては、ヘンリー八世の時代に至り漸く世人の注目を惹くに至りしが、エリサベツ女王及びジェームス王の時代には、和蘭及び獨逸より多數の教徒遁れ來れり。被等が如何なる勢力を有したりしや明ならざれ共、被等が久しき間劇しき迫害を蒙りたりしことは明なる事實にして、一六八九年寛容令の發布せらるゝに及び、漸く其他の宗派と同樣の取扱を受くるに至れり。關後今日に至るまで此派の英國に於ける進歩は著しから字。最近の調査に依れば、信徒の數英蘭及びウェールスに於て四十萬二千五百人、蘇國に於て二萬六百四十七人、愛爾に於て二千九百八十八人を有するに過ぎず（一九〇五年調）。此派の初めて米國に移殖せられたるは一六三〇年頃の事にして、米國に於ては其進歩頗る著しく、メソヂスト派を除き信徒の數最も多し。最近の調査に依れば、教會五萬五千二百九十四箇、教師三萬八千二百七十九人、信徒五百廿二萬四千三百五人、神學校九箇を有す（一九〇七年調）。而して米國に在りては此派は多くの小派に分れ『セヴンス、デー、バプテスト』等凡そ十四派に分る。蘇國バプテスト派と稱するは、各教會に二人の牧師を要すとの説を主張する者の謂にして、英國バプテスト派は此點に於て會衆派及び長老派に類似す。而してバプテスト教會の最大多數は、實際にバプテストと特殊バプテストとの間の相違は、元來アルメニヤ派とカルヴィン派との間の相違と同樣なりしが、前者は基督論に關してはソーチヌスの如き説を取るに至れり。寛容バプテスト及び總般バプテストなる名稱は、小兒のバプテスマを行ふ者と共に主の聽髮を受くること能はざる者とに適せる者也。

此派は最も早くより傳道事業に活動せし宗派の一にして、ウィリアム、ケーレー。サミュエル、フーレルの如き有名なる宣教師を出せり。現今世界の各所に許多の傳道地を有す。

【日本に於けるバプテスト教會】　バプテスト（浸禮）教會は最も早くより日本に傳道したる教派の一にして、其最初の宣教師ゴーブル（Goble）は米國バプテスト自由傳道會社（Baptist Free Missionary Society）派遣の宣教師として、萬延元年（一八六〇）四月渡來せり。是れより先きゴーブルは米國提督ペルリが安政元年日本に來りし時に、其軍艦に搭乘して浦賀に上陸し、日本人千太郎なる者を伴ひて歸國し、之に教育を施し浸禮を授けて信徒となしたりしが、此歳千太郎を伴ひ來れり。彼は千太郎必ず傳道上大なる働をなすべしと思惟したりしに、千太郎は元來無學文盲の漁師なりしかば、何等の貢献をも爲すこと能はざりき。且ゴーブル自らも當時渡來せる宣教師ワイリアム又はヘプボンの如き教育を受けたる人に非ざりしのみならず、元來短慮の人なりしかば、傳道上何等の效果を收むること能はざりき。斯くて明治六年（一八七三）に至り、米國バプテスト傳道同盟會（American Baptist Missionary Union）は新に日本に傳道を開始したりしが、此年自由傳道會社は其働を舉げて傳道同盟會に移せり。米國バプテスト傳道會社（English Baptist Society for Propagating the Gospel among the Heathen）も亦明治十二年（一八七九）を以て傳道を開始したりしが、此派の宣教師は保護又は學術研究の名を假りて內地に入り（當時日本政府は此目的以外に外人の內地に旅行するを許さざりき）傳道をなすは其心の許さゞる所也とて、東京にのみ留りて傳道したりしが故に、其働甚だ振はず、後其事業を舉げて之を米國浸禮派に移せり。米國浸禮派は明治七年東京駿河臺に駿臺女學校を建て、西は横濱、神戸、姫路、北は仙臺、盛岡、秋田等に傳道し、宣教師シー、エチ、カーペンターは北海道根室に傳道地を開始し、アイヌ土人に福音を傳へたり。斯くて明治廿二年（一八八九）に至り、米國南部バプテスト教會（Southern Baptist convention）も亦日本に傳道を開始し、主として長崎、福岡、博多、久留米等の九州地方に傳道せり。米國浸禮派が擴張の方針を取りたりしも亦此頃の事にして、明治廿二年には新に十一人の宣教師派遣せられ、下關に新傳道地を開き、明治廿五年には更に大阪に傳道を開始し、斯くして北は根室より南は下關に至る廣全國首要の地に傳道地を有するに至れり。此時迄此派の事業は主として傳道的方面のみなりしが、明治廿三年頃より教育事業の必要を認め、久しく校舎の設備なかりし神學校も、明治廿六年に至りて、

横濱に新校舍を設立し、教師を聘し、漸く新生活に入るを得るに至りたりき。又明治廿八年東京牛込に東京學院を設立し、タレメントを校長として中學教育事業を開始せり。女子教育の事業としては駿臺女學校の外に横濱に捜眞女學校の設けありしが、此前後より更に仙臺、函路及び長府等に同一種類の女學校を創立せり。浸禮教會は之を組合、日本基督及びメソヂスト諸派に比すれば其進歩遲々たれ共、現今其傳道地は殆ど日本全國に亘り、之を分ちて關東、奥羽、東北、西南、北海道の五部會となし、東京を中心として神奈川、長野、栃木、茨城諸縣は關東部會に屬し、神戸を中心として京都、大阪、兵庫、奈良、沖繩諸府縣は近畿部會に屬し、仙臺を中心として宮城、福島、青森、岩手諸縣は東北部會に屬し、長崎、福岡、熊本、山口諸縣の教會は西南部會を形づくり、根室、小樽、札幌の諸教會は北海道部會を形づくれり。最近の調査に依れば（明治四十二年）米國浸禮派は教會三千餘、内自給三餘、講義所百三十四餘、會員二千九百一人、按手禮を受けたる教師廿人、補助傳道者三十七人、外國宣教師（妻を含む）六十二人、最近一年間に於ける日本人信徒の寄附額七千七百八十六圓、南浸禮派は教會十餘、講義所五十八餘、會員五百四人、按手禮を受けたる教師六人、補助傳道者七人、外國宣教師（妻を含む）十九人、最近一年間に於ける日本人信徒の寄附額二千五十圓也。明治四十二年（一九〇九）有馬に於て開きたる浸禮兩派の合同會議は神學校合同の議を可決し、且爰來兩派の間に存在したりし傳道地の境界線を撤去し、日本全國を以て兩派の傳道地となし、兩派合同一致して教化を全ふせんことを議決せり。

バプテスマ Baptism. 禮典 水を灑ぎ又は水に浸すことに依りて、基督教入門を證する儀式にして、舊新兩教會共に一般に之を以て教會の聖禮（ホーリーサクラメント）典となす。水を灑ぐ場合には洗禮と譯し、水に浸す場合には浸禮と譯す。

【語源】 洗禮又は浸禮なる語は、希臘語の βαπτίζω, βάπτισμα 又は βαπτισμός 又は βαπτίζειν 又は βαπτίσμα を譯せる者にして、此詞は βάπτειν なる動詞より來る。此動詞は七十人譯に在りて、前者は『潤す』又は『浸す』の義に用ゐられ、後者は都合四回如字的、比喩的及び儀式上の洗の義に使用せられたれ共、儀式的の場合には通常 λουτρόω なる名詞は三回用ゐられたれ共、βαπτισμός 及び βάπτισμα は一回も使用せられず。新約に於ては βάπτειν は七十人譯と同樣に使用せられ共、βαπτίζειν の法用は大に變化せり。即ち路十一の廿八に於ては儀式上の洗の義に用ゐられ、又耶蘇は比喩的に苦難の義に之を用ゐたれ共（可十の廿八、廿九、路十二の五十）之を外にしては βαπτίζω なる語は、常に宗教上の目的を以て洗ふの義に用ゐらる。而して路十一の廿八に依れば Βαπτίζω なる語が、必ずしも水に浸すの義を有する者に非ざること明也。βαπτισμός 及び βάπτισμα なる名詞は二語共用ゐらる。而して此二語の用法に區別あるが如しと雖も、如何に區別すべきや明ならず。可七の四及び來九の十に依れば、前者は通常儀式上の洗の義を表し、羅六の四、弗四の五、及び彼前三の廿一に依れば、後者は洗禮其もの、義を表するが如しと雖も、來六の二に於ては βαπτισμῶν の中にも亦基督教のバプテスマを含めるが如し。

【バプテスマの起源】 バプテスマを以て宗教上の儀式となすことは、何時頃より初まりたることなりや明ならずと雖も、素より基督教會の創始したる者には非ず。基督教會以前既にヨハネのバプテスマあり。又其以前既に『プロセライトのバプテスマ』（Proselyte Baptism）なる者ありしが如し。今此の二のバプテスマのことを略述せんに、

（一）プロセライトのバプテスマ　は晩代の猶太教に於て、異邦人にして猶太教に入門し、以色列人とならんと欲する者に施したるバプテスマにして、猶太教に依れば、斯る人は割禮及びバプテスマを受け、而して後犠牲を献げざるべからず。故に斯る志願の人ある時は、之に律法を教へたる者彼を池に携へ往き、律法の誡を誦む間彼をして水中に立たしめ、而して其の誡を守るべしとの約束を彼に爲さしめたる後祝福の新禱をなし、其全身を水中に浸したり。然れ共此猶太教入門のバプテスマが、猶太教の創作したる者に非ざるは明也。此バプテスマの事に關しては、舊約にも經外聖書にも又新約にも何事をも記載せられざるのみならず、ヨセフアス。フィローン及びタルガムにも記載せられず、ミシナにも之に言及せる所なきが如く、初代基督教會の著作者等も之に言及せざりしが如し。此に於て此儀式を以て、基督教のバプテスマの立てられたる後に起りたるには非ずやと思惟する者あれ共、基督教と猶太教とは當時互に仇敵視したりしことなれば、猶太教が幼稚なる基督教會の制度を採用したりしとは信じ難し。思ふに此はモーセの律法に於て、猶太人たる者はレビ的淸潔を受くるために水にて其身を滌がざるべからずと規定せるに基ける者にして（利十一―十五、民十九）猶太人さへ汚れより潔めらるゝために、其身を水にて滌ぐの必要ありとせば、異邦人が以色列人の家族に

入らんとするに方り、充分なる潔淸を要するは當然の事也との思想より、猶太教入門のバプテスマは起り來りたる者なるべし（此點に關して詳なることを知らんとせば、エデルシャイムの『メッシヤの傳及び時代』卷二附錄、及びシウレルの『猶太人民の歴史』卷二第二章を見るべし）。

（二）ヨハネのバプテスマ　ヨハネ以前に猶太教入門のバプテスマありしことは疑なしと雖も、明白なる證據の上より云へば、バプテスマの歴史はヨハネに初まりたりといふも可也。ヨハネのバプテスマが以色列人を神の國に導く準備なりし事は明白なる事實にして、彼が此儀式を用ゆるに至りしは、律法に定められたるレビの潔めの禮及びプロセライトのバプテスマの先例を襲ひしものなる事殆ど疑を要せず。然れ共彼のバプテスマは此二者と同じからず。即ち律法上の潔めの禮は人を其通常の狀態に回復せんとする潔身の禮なれ共、ヨハネのバプテスマは人を全く新なる狀態に入らしめんとする準備の行爲也。又前者はレビの律法上汚れたりとせられたる人が自ら身を潔むることなれ共、後者は悔改めてヨハネに涙れる者が彼より受けたる禮也。前者は單にレビ的不淨より身を潔むるの義に外ならざれ共、後者は道德的潔淨の表徴として用ゐられたり。ヨハネが其バプテスマに道德的準備を要したりしことは、彼のバプテスマが明に『悔改のバプテスマ』と稱せられたりしに依りて明也（可一の四、路三の三）。又ヨハネのバプテスマがプロセライトのバプテスマと異りたりしことは、彼が猶太人より『爾は基督に非ず、エリヤに非ず、彼の預言者にも非ずして何ぞバプテスマを施すや』との非難を蒙りたりしことに依りて推知すべし（約一の廿五）。斯くヨハネのバプテスマはレビの潔めの禮及びプロセライトのバプテスマとも異りたるが如く、彼方に在りては又基督教のバプテスマとも異りたりき。此相違はヨハネ自ら之を認めて『我は爾曹を悔改めさせんとて水を以て爾曹にバプテスマを授く、我れより後に來る者は……聖靈と火を以て爾曹にバプテスマを授けん』と云へり（太三の十一、約一の卅三）。徒一の五、十一の十六參照）。而して此相違の重要也と思惟せられたりしことは、ヨハネのバプテスマを受けたるエペソの信者が、更にパプテスマを受けて耶蘇の名に入れられ、保羅の手を其上に按くことに依りて聖靈を受けたりしことふに依りて知るべし（徒十九の三―六）。又第四福音書に、耶蘇の弟子がバプテスマを施したることありしとの事實を記せり（約三の廿二、四の一、二）。此バプテスマの如何なる者なりしやは明記せられざるを以て確知し難けれ共、蓋し基督教のバプテスマとよりも寧ろヨハネのバプテスマに近かりしなるべし。

【基督教のバプテスマ】（一）制度　基督教のバプテスマは、耶蘇が世を去るに臨み『爾曹往きて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子となせよ』（太廿八の十九）と命ぜし時に創るを得べし。使徒等は『上より權を授けらるゝ迄は此命を實行せざりしが、ペンテコステの日聖靈の降るや、彼得は人々に向ひて悔改を勸め、罪の赦を得させんがため、『耶蘇基督の名に託りて』バプテスマを授けたり（徒二の廿八）。此日バプテスマを受けたる者三千人ありしと云ふ（二の四十一）。是れ即ち基督教のバプテスマを受けたる者の嚆矢也。耶蘇最後の命令には『父と子と聖靈の名に入れて弟子となせよ』とあるに反し、此最初のバプテスマの記錄及び使徒行傳に記されたる他の記事に依れば、唯『耶蘇基督の名に託りて』のみバプテスマを施したるが如く（八の十六、十の四十八、十九の五）又新約書中三位一體の名に託りてバプテスマを受けたる者の記事なく、保羅の書翰にも亦『バプテスマを受けて基督に入る』とのみ記されたり（羅六の三、加三の廿七、哥前の十三、六の十一）。此を以て或る學者は之を說きて、耶蘇の弟子等は耶蘇在世中耶蘇基督の名に託りてバプテスマを施すの習なりしが、後等は耶蘇の死後も尙此習慣を襲用したりしなるべしと云ひ、他の學者は、三位一體なる神の一神格の名に託りてバプテスマを授くるは、三位一體なる神の全神格の名に託りてバプテスマを授くると事實に於て同樣の價値を有せりと說き、又他の學者は『耶蘇基督の名に託りて（或は入りて）バプテスマを授く』といふは、斯る人々が基督を主と仰ぎてバプテスマを授けられたりとの義にして、バプテスマの時用ゐられたる樣式を示したるに非ずと說けり。然れ共初代教會に於ける原始の樣式は、思ふに單に『耶蘇基督の名に託る』とのことにして、三位一體の名に託りてバプテスマを施すことは後代の發達なるべし。吾人は廿八の十九に記載せられたる以後、ユスチヌスの時代迄は此樣式を發見せず。蓋し三位一體的樣式の普通に使用せらるゝに及び、之を以て原始の樣式也と思惟し、其起源を耶蘇に歸したる者なるべし。（第一福音書は現時の形狀に於ては、エルサレムの滅亡以後に書かれたる者也。少くも耶蘇の遺命は後人の攙入なるべしとは、今日多くの學者の想像する所也）。使徒時代に一定の樣式なかりしことは、此點に關する使徒行傳の記事の間に相違あり、書翰の言辭も亦一定せざるに依りて明也。三位一體的樣式の初めて用ゐられたる

は、何時頃の事なりしや確かならざれ共、ユスチヌスの頃より用ゐられたることは明にして、爾後今日に至る迄新舊教會共に之を使用せり。

（二）バプテスマを受くる人　の資格として聖書に示されたるは、悔改及び信仰の二にして、耶蘇の遺命（太廿八の十九）及びペンテコステの日に於ける最初のバプテスマの例（徒二の廿八）は明に之を示す。以上の例及びコルネリオ及び其友（徒十の四十三―四十八）ピリピの獄吏及び其家族（徒十六の廿一―廿三）の例に依れば、バプテスマを受くる者は充分の教育及び準備を要せざるが如くなれ共、後教會は幾多の經驗に依り、不適當なる信者の入會を拒がんため、バプテスマを受けんとする者に向て、福音の眞理に關する充分の智識を要求するに至れり。

（三）バプテスマを施す人　何人がバプテスマを施し得べきやに關しては、聖書より何等の證據を得難し。基督の遺命（太廿八の十六―廿）は初め十一使徒に與へられたる者の如くなれ共、其他の人々が十一使徒と共に居らざりしや否斷言し難し。ペンテコステの日三千人にバプテスマを施したるは誰なりしや。之を使徒なりしとするも、彼等のみにて此多數にバプテスマを施したりしとは思惟し難し。保羅にバプテスマを施したるは、アナニヤなりしが如く（徒廿二の十六）彼は『律法に稽へる神を敬ふ人』なりしかども、思ふに通常の信徒に過ぎざりしなるべし。彼得はコルネリオ及び其友等にバプテスマを受くべきことを命じたれ共（徒十の四十八）之を施したるは彼に非ずして、ヨパより來りし兄弟なりしが如し。而して此兄弟等は長老にも執事にも非ざりしが如し。是に依りて之を見れば、新約聖書は授手禮を受けたる教職を以てバプテスマに於く可らざる要素とはなさゞりしが如し。テルチュリアヌスは抽象的には普通信徒のバプテスマを施す權を承認したりしが、教會の一致と秩序とを保護するために、必要の場合の外、之を監督の權力に限るなよしとなすと論ぜり。イェロニムスも亦同一の說を有したりき。バプテスマを施すことを、使徒の繼承者として監督の絕對權となすべしとの事を初めて唱へ出せるをタブリアヌスとなす。初代の教會は初め此權を監督に與へ、必要の場合には之を普通信徒にも許したりしが如し。煩項哲學者殊にトマス、アクイナスは之を修正し、此權を一般の教職に及ぼせり。羅馬教會はトレントの會議に於て、監督及び司祭は此點に關し同權を有す、執事は監督の命を受けたる場合に此權を有し、必要の場合には何人を論ずず（男女、クリスチャン、猶太人等の別なく）バプテスマを施すを得べしとの事を規定せり。ルーテル教會は必要の場合には普通信徒にバプテスマを施すの權を與へ、レフォルムド教會は之を全く教職に限れり。プロテスタント教會の多數は後者に從へり。

（四）儀式　儀式の詳細に關しては、聖書の何れにも記載する所なし。然れ共其要素は水にして、其之を用ゆる方法は通常其中に浸す事なり。元來バプテスマは潔淨を表する者なるが故に水を用ゆ。而して全身を水中に沒することに依りて、罪に死することを表し、水より上ることに依りて、義に蘇ることを表す。羅六の四、西二の十二は當時浸禮の行はれたることを含む。思ふに初代教會に於ては浸禮一般に行はれたりしことなるべし。ネモルの會議（一二八四）は必要の場合にのみ水を注ぐことを許し、トマス、アクイナスは浸禮は安全なる方法なれ共、水を注ぐことも亦可也と云へり。初めて洗禮浸禮撰擇の自由を許したるは、ラヴェンナの會議（一三一一）にして、此頃より洗禮一般に行はれたり。現今羅馬教會は洗禮を行ひ、希臘教會は浸禮を必要也となせり。ルーテルは浸禮を主張したれ共、カルヴィンはバプテスマの方法に關しては頓着せざりき。バプテスト（浸禮）教會が特に浸禮を主張するは其名の示すが如し。使徒時代のバプテスマが耶蘇の名に託りて行はれ、後ユスチヌスの頃より三位一體の神の名に託りて行はれたりとの事は、前既に述べたるが如し。バプテスマの詳細なる儀式は各派之を定めて其式文中に示せり。

（五）教義　（イ）新約聖書の教訓　新約は悔改と信仰とに依り、正當の手續を以て受けたるバプテスマは、種々の効果を有すとのことを教ふ。即ち第一は新生にして、耶蘇が『人は水と靈とに依り新に生れずば神の國を見ること能はず』（約三の三、五）と云へるは、水のバプテスマに依りて表する外部の潔淨が、内部の潔として新生を來すべしとの事を云へる也（多三の五參照）。新生の結果として次に生ずるは、神との新なる關係にして、バプテスマを受くる者は神の子とせらる（加三の廿六、廿七）。既に神の子とせられたる者は罪より潔められ（徒廿二の十六、哥前六の十一、弗五の廿五、廿六）教會に入れられ（徒二の四十一）基督と一となり（哥前十二の廿七、加三の廿七）靈の賜を受け（哥前十二の十三）教に與ることを得べし（可十六の十六、徒二の四十七、多三の五―七、壺約五の十二）。

（ロ）初代教父の說　バプテスマは初代教會に於て聖禮典中最も重要なる地位を占め、神の家族に連りたる確かなる證據也と思惟せられ、遲くも第二世紀

の中頃より、規則的に此禮典を行ふことに依りて、過去一切の罪赦さるべしとの信仰一般に行はれ、且バプテスマは新生及び悔悟の方法、永遠の生命に定められる丶禮典、新生の洗盥、救の水の洗盥、新生の水など稱せられたりき。是れユスチヌス及び彼に繼げる教父等がバプテスマに依りて新生すとの教義を說きしに依る。然れ共此等の教父はバプテスマの效果に多少の制限を附したり。即ちテルチュリアヌスは浮むる力を水に附し、罪の赦は此禮典を受くるより來らざるべからずと思惟したりしが如しと雖も、又他方に在りてはバプテスマを受けたる者も、相當の悔改をなさゞる時は其受けたる恩惠を直ちに失はざる可らずと云へり。オリゲヌスは『バプテスマを受けたる者皆救に入るに非ず』『唯罪惡を離れたる者のみバプテスマに依り罪の赦免を得る也』抔云へり。又此等の教父はバプテスマを以て靈の生活に絕對的必要也と認めたるに非ず、唯道德的更新の道路に於ける最良の方法と認めたるのみ。小兒にバプテスマを施すことは、オリゲヌス及びタブリアヌスの時代に於ては教會政治の一なりき。オリゲヌスは之を使徒の傳說に基くとなせり。テルチュリアヌスは幼少無邪氣なる小兒に、バプテスマの約束の如き重大なる責任を負はしむるは不可也と云ひて之に反對せり。

（ハ）アウグスチヌスの說　アウグスチヌスは禮典と其内容とを區別し、此二者は必ずしも併行する者に非ずと云ひ、禮典を以て表式也となしたれ共、之と共に彼は禮典の眞實性を拒否せざりしのみならず、後に至りては、禮典に與からざる者は救ほる可らずと論じたり。此說は彼の公同教會の觀念に基く者にして、彼の說に依れば、教會は基督の體なるが故に、教會以外に救なし、而して教會に入り、基督の體と結合するは、外部的にはバプテスマ、内部的には信仰に依りて生ずる靈の潤きに依る也。彼は最初バプテスマに依りて救さるゝは、實罪のみ也との受くることに依りて赦さるゝは、我には原罪も亦バプテスマを受くることを教へたりしが、後には原罪と實罪とを問はず、之に依りて一切の罪赦され、且以前よりも一層深き恩寵與へらるべしとのことを教へたり。バプテスマの效果に關する煩瑣哲學者の說も、アウグスチヌスを敷衍せるに過ぎず。彼等は原罪と實罪とを問はず、之に依りて一切の罪赦され、且以前よりも一層深き恩寵與へらるべしとのことを教へたり。ペラルミンの說も之と同じく、バプテスマを以て罪過を拭ひ腐敗を愈し、又バプテスマを受くる以前に在りし不充分なる信仰を變へて充分なる信仰となす者也となし、バプテスマを受けざるものは成人と小兒とを論ぜず凡て亡ぶべしと謂ぜり。是れ羅馬教會が今日取る所の地位也。

（ホ）プロテスタント教會　バプテスマの必要及び効力に關するルーテル派の說は、羅馬教に似たる處あれ共又多少の相違あり。ルーテル派はバプテスマを以て贖の恩惠を來すに有効なる方法也となし、或る場合にはバプテスマを受けざる前に、信仰に依りて靈の賜を受くることあるべしと雖も、正當に之を受くる時は如何なる場合にも恩寵の方法にして、もし前に受けたる恩賜あらば、之を確むる者也となせり。小兒のバプテスマに關しては、羅馬教と異り、之を受けざるも神の非常の恩惠に依りて救はることを得べしと論じたれ共、父母が其小兒に之を受けしむるは其義務也と云ひ、必要の場合には普通信徒もバプテスマを施すを得べしと云へり。而してルーテル派は一般に信仰は靈の恩寵を受くるに必要也と唱ふるを以て、小兒のバプテスマを主張する場合には、小兒は既に信仰の賜を有せりと說けり。

レフォルムド派はルーテル派の如くバプテスマの必要を主張せず。カルヴィンは『無頓着若くは輕蔑若くは怠慢より廢したるに非ざれば、禮典を廢するも可也、又神より之を行ふの權を授かりたる人以外より之を受けずとなすは、却て禮典を尊敬する所以也』と云ひて、普通信徒のバプテスマを行ふに反し、ツウィングリーはバプテスマは之に依て信仰を增すと云ふよりは、是迄存したる信仰を證すといふべしと說けり。然れ共此派中にも之れより强き意見を抱ける者なきに非ず。スコッチ信條、三十九箇條、フレンチ信條等の如きは即ちバプテスマの效果を重ずる者也。小兒のバプテスマに關しては、レフォルムド派の說は左の二點に於てルーテル派の說と異れり。即ち前者は後者の之を必要となせるに反し、單に之を小兒の權利又は特權となせり。又前者は後者の小兒はバプテスマを受くるに際し、實際の信仰を働かすといへる說を排し、聖靈の働は小兒の心靈中に在り、其結果將來に於ける實際の信仰の基礎となるとのことを承認せり。

ソーチニウスはバプテスマを以て必ず受くべき者也

と說かざれ共、ソーチニウス派全體は、基督教會にて常に守り來りし外部の儀式即ち聖禮典とはバプテスマと晩餐也と云ひ、又浸禮を以て適當の方法也と云へり。クエーカル派は基督教には唯純然たる靈のバプテスマあるのみ、水のバプテスマは最早教會內に存在するを要せずと唱ふ。バプテスト派は浸禮を以て缺く可らざる方法也となせり。近來プロテスタント教會一般の傾向はバプテスマを以て必要なりと爲すに於ては從前と異る所なしと雖も、之を以て救拯の必要條件也とはなさず。合理派は之を以て單に表號に過ぎずとなせり。

バプテスマのヨハネ　『ヨハネ、バプテスマ』の條を見よ。

バベルの塔　The Tower of Babel.　雜語　ノア大洪水の後其子孫の東に移り、シナルの平野に住める者等、名を揚げて全地の表面に散ることを免れんためとて邑と塔とを建てたりしに、エホバ之を見て彼等の言語を亂し、彼等を彼處より全地の表面に散したり。故に其名をバベルと呼べりとの物語創十一の一—九に記さる。此は人種言語の相違を解說せんとて、後の記者が作りたる物語なること殆ど明也。近代の學者はバベルの塔を以てサゲイルラ神殿のチッタルラフトと同一視せり。其遺址は今アムランと稱せらる。セースの『古碑銘よりの新光明』ジー、スミスの『創世記に關するカルデヤの說話』を見よ。

バムブトン講演（コウエン）　Bampton Lectures.　雜語　基督教の信仰を維持し、異端を撲滅するの目的を以て、毎年牛津大學に於て爲さるゝ八回續きの講演にして、サリス、ベリーの『カノン』ジョン、バムブトン（一六八九—一七五二）の遺志に基き立てられたる者也。講演は主として聖書の權威、元始教會師父の文書、教祖及び聖靈の神性、及び信條等に關する主意に就きてなさるゝを常とす。講師たるべきものは牛津若くは劍橋の卒業生にして、少くともマストル、オフ、アーツの學位を有する者ならざる可らず。而して分科大學長此中より之を選定す。何人も二回其選に當るを得ず。此講演の初められたるは一七八〇年にして、其講演集は基督教辯解學上最も貴重なるもの也。

バーユス（デ　ベー）ミシェル　Bajus (De Bay), Michel　人名　一五一三—八九　フランダースの神學者。ハイノーのメランに生れ、ルーヴェーン大學に學び、一五五〇年神學博士號を得、五一年よりは教授として、七五年以後は大學長として、一生同校に關係せり。天主教會がアウグスチヌスを神學上最高の權威としながら、實際に於ては其の根本の教義から離れて半ペラギウス說に達せる事實は、バーユスの痛快に指摘せし所なり。彼はアウグスチヌスの罪と惡の說を確守せしかば、當時の教會の一般の傾向と反對に出でざるを得ず、此を以て大學の同僚との間に激しき論爭を生じぬ。教會は一方に宗教改革運動を控へ居るものから、此の論爭を單に學派の爭と爲して抑壓し、揉み消し了りしが、而も問題は再び復活して、ドミニコス對イエスイト派の爭となり、更にジャンセン派論爭となりて燃え上れり。五一年大學の四教授はトレント會議に證はされ、バーユスは留守を命ぜられ、四教授中の一人死に代り時大學には外國の感化の侵入し居るを見たり。其結果六〇年ツルボンにてバーユス講義中より抄出せる十八箇條の否認となれり。バーユスは辯論せんとせしな、メシュランの監督に之を止め、兩派なして共に沈默を守らしめたり。されどバーユスは六三年教義的小冊子『デ、リベロ、アルビトリオ』『デ、エスチチア』『デ、ユスチフィカチオネ』六四年『メリチス、オブム』『プリマ、ホミニス、ユスチチア』等を著はし、六六年此等を蒐集して『オプスクラ、オミニア』として出せり。ルーヴェーン諸教授及びフランシスコ派は如何でか默すべき、起て之と爭へり。六七年十二月法王の命令書は出で、七十六條の否認ありて、ルーヴェーン大學に調印を命ぜり。而して其中にバーユスの名なく、而して否認文中故らに句點を脫し、之を文中の語の前に附すると後に附するとに依て意味全く顚倒するやうになしありたり。之を有名なる『コムマ、ピアヌム』と云ふ。バーユスは之を善き方に解して法王に辯證文を呈し、自說はアウグスチヌス等の說ける所なるを陳ず。而も法王の書翰尙前命を主張せしかば終に服從調印せり。然れども新法王立つや或はバーユスが前命取消し運動をなすも謀られずと思はれ、七九年グレゴリウス十三世は前命を再び確定せり。バーユスはアルデゴンドに由て宗教改革とも自由に關係し、其の監督權威の意見も法王無謬說の意見も極めて自由なりき。ネチルランド及び北部佛蘭西には其感化廣く行はれぬ。

バラク書（シュ）　The Book of Baruch.　書名　舊約經外聖書中の一書。七十人譯は之を耶利米亞記と哀歌との間に置き、拉丁譯は哀歌の後に置けり。此書はエレミヤの友にして其書記たりしバラクの書きたる者也と稱すれ共、明に相異れる四部分より成り、四人の作なること殆ど疑なし。

部書にして、之と一の十五—二の八との間には著しき相違を示ぜり。此は思ふに後の作者の作なるべし。蓋し當時バラクの作れりと傳へられたる二個の懺悔的新禱——一は遺れる民のため、他は俘囚民のための——存在せり。作者は之が起源を解說し、以爲らく、バラク巴比倫に在り、エコニヤ王及び俘囚の民に向ひて懺悔及び新禱の文を讀めり。二の六—三の八に記せる者即ち是也。彼等は之を聞きて泣き、且斷食し、ユダに在る彼等の同胞も亦其心をエホバに向けんことを願へり。於是バラクはユダに在る人々に遞せる懺悔文を書きたりしが、俘囚の民はバラクに依りて之をユダに送れり、是れ一の十五—二の五に記せる處の者也と。斯くして後の所謂歷史家は此最初の十四節を附したる者なるべし。

一の十五—三の八は懺悔的新禱にして、一の十五—二の五はパレスチナに遺れる民の懺悔、二の六—三の八は巴比倫に在る俘囚の民の懺悔、新禱也。此部分の書かれたる時代に就ては學者の說一ならず。之を以て歷史上のバラクの作也（前五八三年）となす者あり。エルサレムが羅馬帝チタスのため滅されたる後、即ち紀元八十年頃の作也となす者あり。前三二〇年トレミーがエルサレムを取りし頃の作也となす者あり。又それよりも少し早き時代の作也となす者あり。後の二說事實に近きが如し。一の一—三の八までは、もと希伯來語にて書かれたる者也と思惟せらる。

三の九—四の四は智慧の讚詞にして、以色列晩代の智慧文學と同じく、智慧を以て律法と同一視せり。紀元七十年エルサレム滅亡前後の作にして、もとアラメイック語にて書かれたる者也と思惟せらる。

四の五—五の九は俘囚民に對する慰藉勵にして、紀元七十年エルサレム滅亡以後の作なること疑なし。

バラクの默示錄（ショク）　The Apocalypse of Baruch.　書名　舊約經外聖書中の一書。此書は久しく喪失せられ居りしが、セリアニ、ミランの圖書館にて第六世紀頃書かれた西利亞語の寫本を發見し、一八六六年之を拉丁語に譯して出版せり。西利亞語のはもと希臘語のより譯したるものにして、希臘語のは希伯來語のより譯したる者也。此書の作者はネリヤの子バラクの名に於て、場所はエルサレムの附近、時はエルサレムがカルデヤ人に掠取せられたる前後の時代を包含し、彼が其經驗及び以色列人の將來に就て受けたる默示を記す。近年までは一般に一八九一年カピシュが此書は少くも三人若くは四人の作に成れる者を編輯したる者也との理由を擧げて、其眞なる部分即ち一—廿三、卅一の二—卅五、四十一—五十二及び七十七—八十七は紀元七十年エルサレム滅亡後の作にして、此等の章にはエルサレム神殿の破壞せられたる事實を含み、且無限の絕望を洩せり。其他の章には尙以色列人民最後の勝利に對する信仰、及び地上に於けるメッシヤ王國建設の希望顯はれ、且エルサレム市の堅固なることの假定せられ居るを見れば、エルサレム滅亡以前の作なること疑なし。然れ共此は一人の作に非ずして、數人の作なること亦疑なし。思ふに紀元百年乃至百三十年頃に至り以上の諸作編輯せられて一書となりし者なるべし。而して書中功德及び律法に關する教訓は、此書の作者が悉くパリサイ派に屬する者なりしことを示す。

バラバ　Barabbas.　人名　猶太の長民等が、ポンテオ、ピラトに向ひて、ナザレのイエスの代りに死刑を赦されんことを請ひし罪人の名（太廿七の十六、徒三の十四）。古傳說に依れば、彼の本名はイエスなりと云ふ。或る記錄及び數種の古き飜譯にはイエスと云ふ名バラバに伴へり。アルメニヤ譯には『我れ福音書に讀み赦さんことを欲ふや、イエス、バラバ乎、將たキリストと唱ふるイエス乎』とあり（太廿七の十四）。イエロニムスは『希伯來人の福音』と稱する書の中にも、之れと同一の語ありと云へり。されども聖書學者の多數は此說を斥く。ランゲ其他の學者中にはバラバは僞メッシヤなりしと云ふ說を持する者あり。タルムドの中にはバラバの名普通也。

バラム　Balaam.　人名　エホバの預言者。其事蹟は舊約民數記略廿二の五より廿四の廿五に記さる。大略下の如し。即ちモアブの王バラクは以色列人と戰ふも勝つ能はざるを知り、一策を案じ、東方に於て名譽ある預言者バラムを招きて味方となし、以色列人を呪はしめんと謀りたり。バラムは以色列人と信仰を同うせるを以て、彼をして以色列人を呪はしむるは、異邦人の呪ふよりも力あるべしと信じたれば也。バラム其招を受くるや之をエホバに告ぐ。エホバ許さず。バラム其招を辭す。此に於てモアブ及びミデアン人再三鄭重なる使者を以てバラムを招き、誘ふに富貴を以てす。バラム心動き、再びエホバに諮る。エホバ終に之を許す。唯エホバが其口に云はしむるところの外は一言も云ふ勿れと命ず。此に於て彼は將來の榮華を想ひ、而してエホバの命ぜし條件が彼の希冀を空うすべしとは夢にも思はず、喜びて行きたり。偶々エホバの天使來りて途に彼

を述る。此時彼の乘りし騾馬物云ひて、其主人よりも寧ろエホバに柔順なるを示したり。バラム、バラクに進ぶて、告ぐるにエホバの彼に命ぜし事を以てするや、バラクは大に驚き、且つ怒れり。是れ彼がバラムを招きし希望を空うすべければ也。バラムは初めの間は異教の卜者の如くなりしも、終に神の力彼に加はりて、彼は雖紿を以て以色列人の爲めに祝福を說けり。此に於てかバラタ怒りてバラムを追ふ。バラム悄然としてベトルに向て歸途に就く。途次ミデアン人の間に止まり、失望の餘且は名譽恢復の爲め一計を案じ、モアブ及びミデヤンの婦女を以て、以色列人の間にバアルの禮拜を盛ならしめ、以て以色列人を滅さんとせり。此くの如くにして民廿四の廿五と三十一の八とを一致せしめ得べし。次で戰に於てバラムは以色列人の爲めに殺さる。バラムは新約聖書中不義の利を得んとする者、又人を誘惑に誘く者の模型として記さる（徒八の九—廿四）。

バーリット　エリヒウ　Burritt, Elihu　人名

一八一〇—七九　米國の博愛家又外國言語精通者。コンネクチカット州ニウブリテーンに生る。父は一時新英州に有り勝ちなりし百姓鍛冶なり。バーリットは鍛冶場にて初め數學を、次で語學を研究して非常なる成功をなし、一年間中學にて教へしが、健康を損して他の職業を勉め、三七年ウオルセスターにて復た鍛冶に歸りしが、言語博識者たる評判傳へられて、四一年には講演を請はれ、非常なる成功を以て此の請を充たし、其より講師、演說者、編輯者、博愛家として有名となりぬ。彼は終生奴隷廢止、平和、禁酒、自修の賛成者として戰へり。而して盡勤自由あればとて終に不婚にて貧き、一生の大部分をば英國にて過れり。四七年には海律ペンニー郵稅の思想を表明し、島嶼の郵便には一ペニーを加ふべしと唱へ、大なる同情を得たり。四九年巴理に開かれたる第一回平和會議の同席には彼の刺激に負ふ所少から寸。五六年オハイオ州クリーグランドにて組織せられし國際賠償奴隷解放會にも重立ちたる活動をなせり。六五年より六九年迄は、英國バーミングハム駐在の米國領事たり。後は四十餘種の言語に通ぜしが、他の事にも能力あり、而して其の計劃せし事の實現を見るに至りしこと彼に於けるほど多かりしは稀なり。奴隷制は内亂にて打破せられ、英國郵便報書は實際の海律ペンニー郵稅たり、六五年のジネヴア會議は平和の計劃を助け、七一年のワシントン條約が仲裁の利益の證明となれるは卽ち其れなり。著書も存す。

バーリングゴウルド　サバイン　Baring-Gould, Sabine　人名

一八三四　英國の神學者、小說家、著者。エキセテルに生る。一八六六年ダルトンの牧師となり、七一年エセックス、東メルシーの司長（レクトル）となり、トレンチャルドの司長となる。其最初に公にせる最も重要なる著作は『中世の奇異なる神話』にして、次で『基督教信仰の起源及び發達』及び『聖徒傳』十五卷を著はせり。彼は又教會の讃美歌を作れり。『みよや十字の旗高し』（Onward, Christian soldiers）及び『夕日落ちて』（Now the day is over）は卽ち彼の作にして、日本讃讃美歌集に收めらる。此外小說、說教集、物語類等の作頗る多し。

バールト　カルル　フリードリヒ　Bahrdt, Karl Friedrich　人名

一七四一—九二　國逸の僧侶なる倫理論者。サヘフューのビショッフスウェルダに生る。一七六一年ライプチヒ大學の聖書講解講師兼聖彼得教會牧師となり、六六年聖書言語學の特別教授となる。其頃は正統信仰を持し、其の說教等も面白きものありしに、一七六八年個人生活を講毀して失敗してより信仰一轉し、六八年より七九年までエルフルト、ギーセン、デルタハイム等を巡りて、或は大學教授となり、或は管理長となりしが、何れも一二年にして公又は私の謗毀のため罷められては不思議にまた用ひられ、此間常に倫理主義の終極點に一歩〳〵近づき行きしが、其の人格は一歩〳〵低きに沈み行きたり。其の頃の主なる著は『書翰及び傳記に於ける神の新啓示』にて聖書を崩壞せるものなりしが、其中にあらゆる人を誹毀せり。七九年監走者としてハルレに往き、フリードリヒ二世の治下に隱れ、希伯來語、形而上學、倫理學等を講義し、或時には九百の聽衆を得しが、此の成功に依て萬事を信用せざるに至り、唯だ人道教のみを信じ『道德的宗教』を著はせり。やがて其の精力衰へし頃フリードリヒ二世死後の誇譽四に於ける宗教的反動は來れり。彼は此の勢に感染し自ら實際的に之に處せんとし、ハルレの近傍に酒店を開き、巡環圖書館のために汚らはしき小說を著はし、或は醫業に注意せらるゝ秘密結社を造り、或は通化芝居を以て一七八八年の宗教令を嘲刺する如きことをなせり。然れ共政府は之を黙乎に置かざりき。彼はマグデブルヒの獄中に一年を送り、赦免の後病を得劇藥を用ひたるために死せり。著書は讀むに足るものなし。

バルトロマイ　Bartholomew.　人名

耶蘇十二使徒の一人。『トロマイの子』の義。通常ヂタナエルと同一人也と思惟せらる。使徒の目錄には常にピリポと併び記さる（太十の三、可三の十八、

路六の十四）使徒印度、アルメニヤ、埃及等に傳道したりとの事、及び彼の殉教に關する種々の物語は後世の假作にして信ずるに足らず（『ヂタナエル』の條參照）。

バルトロマイ派　Bartholomites.　僧侶名

一三〇七年バシリヤの僧數人道書のために、アルメニヤより遣れてジェノアに來り、其處に教會を立てゝ使徒バルトロマイに獻げ、他の人々も亦來りて之に加入せり。法王クレメント五世其儀式に拙びて神を拜するの許可を之に與へしに、後漸次他の僧侶に混同し、一六五〇年に至り、インノーセント十世のために全く滅ぼされたり。他のバルトロマイ派と稱する在家智の團體バルトロメアス、ホルツハウセルに依りて、說教又は教訓を施さんとの目的を以て、サルツバルグ（一六一三—五八）に於て創立せられ、一六八〇年インノーセント十一世之を許可し、急足の進歩を以て獨逸、瑞西、伊牙利、及び波蘭に傳播せしが、第十八世紀に至り漸減したり。

バルトロマイの默示錄　The Apocalypse of Bartholomew.　『經外聖書』の條を見よ。

バルトン　ベルナルド　Barton, Bernard　人名

一七八四—一八四九　英國の詩人。僧侶に生れ、サフォルクのウドブリッヂにて死す。『クェーカル詩人』として名高し。十四歲にしてエセクスのハルステッドにて靴商に奉公し、一八一〇年より銀行書記たり。されど此の境遇の中にて多くの詩を作れり。バイロン及びフムは彼に全然著作者を以て立つ如れと忠告せしも尙多くの著作をなしたり。『エフェージョン』『詩集』『ナポレオン』『詩の通夜』『信仰の詩』『家庭の詩』等是也。其の詩調强からざれども快くして敬虔なり。我國の『讃美歌』にも二つ收められあり（第百廿四、第二百五十二）。

バルトン　ロベルト　Barton, Robert　人名

一五七六—一六三九　英國々教會の牧師。リンドレーに生れ、牛津にて學び、教議に入り、一六三六年シグレーヴの司長（レクトル）となる。數學者たり、博讀者たり、博愛家たり、又愉快なる友たり。有名なる『憂鬱の解剖』は二一年に出す所。チューンの英國文學史に言ふ如く、彼が三十年間讀書して著へたる所を不盡の勞にて注ぎ出せるものなり。

バルナバ　Barnabas.　人名

基督教授初の改宗者の一人。クプロ島のレビ人にして、本名ヨセ（Joses）と呼ばる。教會の創立せられし頃エルサレムに居住せり。彼は勸めを爲すの才能を有し、且快活の人なりしかば當時の基督教徒は、彼をバルナバと呼べり。バルナバとは『勸めの子』の義也。彼が信仰の厚きは、其自ら寡びてタアロの所有地を賣り、之を使徒の足下に捧げたりしに依りて知るべし（徒四の廿六、廿七）。彼は忽にして初代教會の先進となりたり。彼が悔改したれども猜疑の中に在りしサウロをエルサレムの教會に推薦したりしは、蓋し共に猶太人にして又嘗て友人たりしなるべし。彼はサウロの不思議なる事歷を證明したり（九の廿七）。アンテオケの信仰復興視察の爲めに遣されたるは、彼が新しき信徒を訓練教導するに長じたるを證す。彼はサウロを探れてタルソに赴き、歸りて後相携へて數ケ月の間道を傳へ大に成功せり（十一の廿二—廿六、十四の廿八）。彼は又サウロと共にエルサレムの貧しき信者を助けん爲めに、集められたる義捐金を携へてエルサレムに往けり（四四年）。是れ兩人の名の並べ稱せらるゝ初也。彼等はヨハネ（マコ）を伴ふてエルサレムより歸り（十二の廿五）聖靈の導に依りて三人共に傳道の途に上れり。ヨハネはベルガにて別れてエルサレムに歸りしが、二人は尙其旅行を續けたり（十三の二—五、十三）。バルナバの威嚴ある態度、保羅の雄辯はリステラの人をして前者をゼウスと、後者をマルキュリーに比せしめたり。アンテオケに歸るに及びて猶太教より改宗せし者と衝突し、エルサレムの使徒會議に出席して漸く事治まるを得たり。後ヨハネに關し異論起りて、此兩人遂に相分るゝに至りしは遺憾なり（五〇年）。バルナバの事蹟は徒十五章以下には見へざれ共、加二の十三及び哥前九の六に於て僅かに彼の事を窺ふを得。卽ち前者に於ては彼が猶太教の改宗者の非難に對して甚だ恐れを懷きしこと、又後者に於ては彼が尙紀元五十七年の奉傳道に勵み居りしことを知る可し。此外種々の傳說あり。一說にバルナバは羅馬及び亞歷山に送られたりと云ひ、亞歷山のクレメントは彼を基督の七十人の弟子の一人なりしとなし、基督在世の頃羅馬にて傳道せりと云へり。彼がタアロ島に於て道の爲めに働きしこと、又殉教せしこと等は、第三世紀の頃より傳へらるゝ說にして、バルナバに對する稱讚の物語は、第五世紀頃のタアロ島の信者及び僧アレキサンデルに依りて傳へらる。ウェノ帝（四七四—四九四）の時バルナバの遺骨タアロにて發見せられたりと傳へらるれども、此は揑造說に過ぎざるものゝ如し。バルナバは使徒なりやとは古來の疑問にして、嚴密なる意味にては使徒にあらざれ共、使徒の職分と働きとを爲したる者也と云ふを得べし（徒十四の十四）。テルチュリアヌス及び他の亞非利加記者等は、希伯來書を以てバルナバの著となす。此說は羅馬より出でしものの如く、蓋し此書羅馬に於て始めて讀まれし故なら

ん。又バルナバ書と呼ばれたる者あり。此書のことに就ては次の條を見よ。

バルナバ書 The Epistle of Barnabas. 聖書の或る初代寫本の中に發見せられたる重要なる書にして、オリゲヌス及び亞歷山のクレメントは眞實の書として承認したりしが、ユウセビウスの時代に至りては其僞作なること一般に承認せらるゝに至れり。此書二部より成る。即ち(一)一章より十七章迄は眞の基督教的智識(グノシス)の何物なるやを說き、殊に基督教と猶太教の教訓との關係を明にし(二)十八章より廿一章迄は『二の道』即ち基督教生活を承認する者と拒否する者との事を描けり。此書の調は著しく反猶太教的にして、基督教徒のみ獨り約束を嗣ぎ得べき者なることを主張せり。此書の後半は『使徒の教訓』(Didache)と密接の關係を有す。故にホルツマンは二書共『二の道』と呼ばれたる書の省略也と信ぜり。ハルナックは此書の書かれたる時を一三〇年乃至一三一年に在りとなし、ライトフートは七九年よりも早しとなせり。

バルナバ派 Barnabites. 一五三〇年ザカリア。フェルラリ。モリギアと云へる三人の僧侶が、其當時以太利全國に行はれたる宗教的運動の影響を受け、ミランに建てたる僧派にして、一五三三年クレメント七世の准許を得、三五年直接に法王の管轄下に置かる。貧究・貞潔及び服從の誓約に加ふるに、更に遊說を求めざるの誓約を以てす。而して此派は說教と教訓とを以て其二大目的となす。

バルネット サミュエル アウグスタス Barnett, Samuel Augustus 人名 一八四四 英國の博愛事業家。ブリストルに生る。一八九三年ブリストルの『カノン』となる。トインビー館の創設者及び最初の看守者にして、トインビー館は大學出身者の模範に依りて會教貧民の道德的智識的狀態を改善せんために建てられたるもの也『實際的社會主義』(一八九三)及び『神のつとめ』(一九七)なる著はす。

バルネット ギルバルト Burnet, Gilbert 人名 一六四三—一七一五 英國サリスボリー監督。蘇格蘭エヂンバラに生れ、アベルディーンにて教育を受け、佛蘭西、和蘭を旅行し、一六六五年サルタウンの牧師に任職せられ、六九年グラスゴーの神學教授となり、七三年倫敦に轉じ、ロルスチャペル教會の說教者、聖クレメント會堂の講師となり、最も人望ある說教者たりしが、八四年ラッセル卿と親しく、卿が斬首臺まで見送りしとの故にて俸職せらる。ジェームス二世即位後一六八五年英國を去り、佛蘭西、以太利を訪ひ、ハーグに留り、オレンジ公の計劃成就に盡力し、八八年ウイリアム二世に從ひて英國に歸り、八九年サリスボリー監督と改革の歷史』七冊『當時の歷史』六冊に有益の書なり。此外『ウイリアム、ベデル傳』『三十九箇條說明』『ハミルトン侯紀念』『ジェームス二世の歷史』及び多くの史的論爭的信仰的著作あり。

バルバウルド アンナ レティティア Barbauld, Anna Letitia 人名 一七四三—一八二五 英國の女流著作家。レーセスターシヤのキプウォルスに生る。牧師にして學校教師たる神學博士ジョン、エーキンの女にして、高等の教育を受け、一七七四年サッフォルクにて且說教し且教授せしユニテリアン派牧師ローチモント、バルバウルドに嫁す。七三年兄弟に助けられて『詩集』を出し、一年にして四版を重ね、同年父兄妹の作『散文雜纂』を出し、七五年アンナのみにて『散文讚美歌』『少年課程』『ダビデの詩より集めたる信仰的斷片』を出し、其より後尙種々著作し時に政治論をも出せり。『心穩に主の御手に眠る正しき御民の臨終の床しさ』(How blest the righteous when he dies) は彼の作れる讚美歌なり。

バルメス ハイメ ルシオ Balmes, Jaime Lucio 人名 一八一〇—四八 西班牙の政治宗教的著作者。カタロニアのヴイッチに生る。父母は貧しかりしも、佳良なる教育を受くるを得、セルヴェラ大學を出でゝ種々の學士號を得たり。按手禮を受けて一八三二年助教授となり、三五年博士せられ、三七年數學教授となる。其の時の三年間西班牙はマリア、タリスチアナとドン、カーロスとの間の爭にて亂れたり。バルメスは著作と教授とに從ひながら深く勢の推移を觀察す。八二年信仰問答書を發行して大に行はる。八二年文學雜誌『文明』の補助編輯者となり、其の政見を發表し、人民の革命的精神を抑へ、女王とドン、カーロスの子との結婚の議を紛爭終熄の最良の途として贊す。女王又此意あるに至るや、乃ち有利なりし其の雜誌を廢刊す。然も健全なる原理と思ふ所に依て人民を教育することゝを欲して已まず。ピウス九世の法王となりしを祝し、著書を以て之を讚美せり。著作の重なるは『根本的哲學』『新舊兩教の比較と其歐洲文明との關係』の二なり。後者はギゾーの著に對し、舊教が文明に於ける感化は遙に新教に優れたるを說明せしもの。素より議論は劈けれども、其の目的を述ぶるには十分なるものなり。

バルンス ウィリアム チャルマルス

Burns, William Chalmers 人名 一八一五—六八 蘇格蘭の支那派遣宣教師。ダンに生る。父母共に性格高く、父は長老派の牧師なりしが、基督教牧師の模範たり、母は輝く天使の如くにして共に信仰篤かりき。されどウイリアムは極めて單純の幸福に依て養はれ、其の教育も平凡にして、唯だ農夫たらんと志し居たり。十三歲の時叔父は彼を拉してアベルディーンに携へ行き、語學校に入れ、純然たる學者ジェームス、メルヴインの下に學ばしめたり。其より大學に入り、一八三一年大學を去て、法律家たらんとせしが、心此に一變して傳道者たらんとせしは、父母の意外の喜びなりき。三二年舊の大學に再び入り、此度は至て眞面目に勉學して著しく優秀の成績を表はし、三四年學位を得、更にグラスゴー大學に入りて神學を學び、三九年同長老會にて准允を受け、暫くはマクチェーンのパレスチナ旅行中其の教會にて說教し、マクチェーンの歸任後は福音宣傳者となり、信仰振興會を開き、蘇、英、愛及び加那太に於てまで大成功をなせり。是れ四四年より四六年迄の事なり。而もバルンスは尙其以上の召命を待ちしに、終に英國長老教會にしてモリソンを送り出せし同じ長老中會は、彼を宣教師に任職し、同じく支那に送れり。彼は四七年六月渡航し、到着後僅に二ケ月にして支那語にて說教し、次で支那服を着け、斯くて一個の支那人となり了れり。香港、廣東、厦門、上海、北京、牛莊は其の住みて傳道せし所なり。五三年厦門にて『天路歷程』前編を支那語に譯し、次で後篇を譯せり。彼は專ら福音の種子を蒔く志なりしも、其の言語の才と常識と經綸と高尙なる談話とは共に彼をして人民の尊敬を博せしめたり。されば彼が直接に悔改に至らしめし人は少數なれど、支那にては何人にも知られ、其の與へし感化は廣く深きものあり。其の名を呼べば發奮し讚美を起すを常とせし程なりき。

バルンス ロベルト Burns, Robert 人名 一七五九—九六 蘇國の詩人。アロウエーに生る。赤貧洗ふが如き窮迫の間に成長し、十二歲にして父の農事を助け、十五六歲に至りては全然一個の勞働者なりき。幼時に於ける此過勞は其健康を損し、彼をして終生心臟病と不眠症とのために苦しめたりき。彼は農事を押しを讀み、夜に入りて詩思を凝らしたりき、彼は將る境遇に人となりしかば、從社會に立つに及びても富貴權勢を恐れず、常に貧者弱者に同情し、全力を盡して愚習俗を攻擊し、教會を非難し、又所謂文明的生活を厭り、絕對的平等主義を主張し、人生の尊卑は其位階に非ずして人物其者に在りとなせり。彼の傑作は蓋し『Jolly Beggars』也。貧困の中に三十八歲を一期として其生を終れり。

バロニウス カイザル Baronius, Caesar 人名 一五三八—一六〇七 天主教會の歷史家。ナポリのソラに生れ、ヴェロリにて教育を受け、ナポリにて神學及び法律を學び、一五五七年羅馬に移り、フイリポ、デ、ネリの新立せるオラトリの會に入り、教會史を其の源泉にて研究するの便を得、五七年より其の大著作たる『アンナレス、エクレシアスチキ』の著述にかゝり、一五八八年より一六〇七年まで羅馬にてフォーリオ版十二冊を出す。自己はヴアチカン圖書館長とせられ、九六年カルデイナルとなり、クレメンス八世の死後にもレオ十一世の死後にも將に法王に選ばれんとせり『アンナレス』はフラチウス其他のルーテル派史家の編纂せる『マグデブルヒ』諸世紀史』が世の注意を引けるより、之を否認する要あるを認めて編したるものにして、中は學問の寶藏なり。バロニウスは實に此の大事業のために疲れて死せり。されど同史は全く年代史にして、年月の項に事實を蒐集列記したるに過ぎざれ共、浩瀚なるものなり。彼の死後多くの學者は此の事業を繼ぎて同史を大成せんとせしが、レーナルドス。ラデルチ。テイネル等幾世紀に亘れる繼承の勞も一五八六年の頃までに到らせたるに過ぎず。尙後繼者を待てり。

バウル フェルヂナンド クリスチアン Baur, Ferdinand Christian 人名 一七九二—一八六〇 獨逸の教會史學者。カンスタットに近きシュミーデンに生れ、ブラウボイレン學校及びチウビンゲン大學にて教育を受け、一八一七年ブラウボイレンの拉丁語希臘語教授、二六年チウビンゲンの教會歷史教授となる。其の才能と學問と熱情とに依て學生直ちに群集す。自らヘーゲル派なりしものから、ヘーゲルの歷史は正、反、合の三經路を經りて發達すといふ哲學說を教會史に適用し、斯くて所謂チウビンゲン派を起せり。同派は實に使徒時代及び使徒後時代の教會史を一變したるものなり。教會史家としてバウルの獨立的開創的學者的なるは、彼をしてネアンデル及びギーセレルと相伯仲する學者たらしめたり。其の批評的の才、問題を捕ふるの確なるに至ては稀有の人なり。然れども其の判斷は偏せり。故に研究に疲れず、其說を吐くに大膽なれ共、時勢を重ずるに急にして人物及び事實を輕ぜり。彼は初代教會に分離ありて、彼得派と保羅派ありしとなし、此の兩派の競爭にて教會發展し行き、所謂公(カトリック)同教會成り、之に復帰せられて此の戰

止めり、而して使徒行傳は此の包容の文書なりと論ぜり。彼は又かゝる紛爭の跡を殘さゞる新約の書翰は、凡て出所正しからずと言へり。彼は教會史より超自然的分子を驅逐せしが、保羅の改心は心理的奇蹟なりと言ひ、斯くて基督の復活を等れざるを得ざるに至れり。彼の說は新約歷史の研究を刺激し、其の知識の增加に大なる助を與へたり。彼は實に此の部面の學問の開路者たりといふべし。然れども彼は羅馬書、哥林多前後書、加拉太書の四大書翰のみを保羅の筆とし、默示錄を使徒時代の著とするものから、彼の說に從ふ者等は自己の双を以て自己の腹を切るが如く、一歩一歩否定の領分を縮めて、後には保羅の十書を承認し、唯だ牧會書翰のみを殘すに至れり。パウルの文學的活動は大なるものなりき。歷史的の著書にては『マニカイ教史』『基督教教孫の教義史』『基督教知識史』『三位一體及び神の化身の教義』『教義史講義』『ティヤナのアポロニウス論』『ソクラテスと基督』あり。聖書批評には『所謂使徒保羅の牧會書翰』『耶蘇基督の使徒保羅』『英譯あり』『正謬福音書の研究』其他『神學時報』誌上の多くの文章あり。一般教會史には『最初の三世紀に於ける基督教及び基督教會』（英譯あり）、第四世紀より第六世紀迄の基督教會』『近世の基督教會』『基督教會歷史』『五冊』、及び『論爭的史論等』あり（『高等批評』『チウビンゲン派』『獨逸神學』の條參照）。

萬有活物說 Animism. 學說名　萬有活物說とは萬有は其生物たると無生物たるとを問はず皆活ける者意識ある者なりとなす說を云ふ。野蠻人は自己の意識より類推して、萬有に靈ある事を信ず。即ち彼等は禽獸草木及び岩石等皆其意識的生活をなす事人間に異ならずと信ずる也。靈魂が肉體を離れて存在し得べしとなすの說、例之睡眠、氣絕、死は一時若くは永久に靈魂の分離な現はすものなりとなすの說も亦アニミズムと稱せらる。

萬有神論 Pantheism. 學說名　又汎神論、凡神論等と稱せらる。通常萬有神說とは天地萬有を神と同一視する說也と解し、萬物は神の性質の部分にして、凡ての動作凡ての出來事は神の活動の顯現也といふもの、換言すれば、自然の勢力、人心の運動、個人の生活、國民及び人類の歷史に起れる一切の出來事を以て神の性質及び生命の直接の顯現となし、有限世界の外に神を求めず、自然及び人間其れ自らな神となす者是れ即ち萬有神論也と思惟せらるる者是れ共、萬有神論は此の如く有限世界を神格化する者に非ず。否寧ろ之に反對して吾人の目に見ゆる此世界の實存を否み、之な以て一切空也となす者也。而して斯く此世界の實存なる以て一切空也となすことの中には、永遠の實在の觀念を含み、神は一切萬事也と云へる原理を隱然承認す。是れ即ち萬有神論也。斯る觀念は實際の方面に在ては印度の宗教に於て最もよく顯れ、思辨的方面に在てはスピノザの哲學に於て最も能く顯れたり。

印度古代の宗教なる吠陀（ヴェーダ）の宗教は、天、太陽、曙光、風雨、水流等の如き自然の現象又は勢力を神格化し、之を讃美し之を禮拜したりしな以て、一見多神教の如しと雖も、仔細に之を檢すれば、吠陀の詩人が讃美せる種々の神は、全く相異りたる種々の神に非ずして、實は一個の分つ可らざる總全に對し種々なる名を附したるに過ぎず。彼等は其崇拜の多くの對象の下に隱然統一あるを認め、眞の實在は天に非ず、地に非ず、太陽に非ず、風雨に非ず、此等のものは一時之が表象たり得べしと雖も、眞の實在は自然の一現象に依りて充分に代表せられ得可らずとのことを信ぜり。故に吠陀神話の諸神は、希臘及び羅馬の神話に於ける諸神の如く、其人格的要素高調せられず。此等の諸神には特性なく、系統なく、其關係全く融通的にして、殊に吠陀教の晩年に至りては、諸神の背後に在る統一の觀念顯る明白に顯はれたり。然れ共此時代に在りては、萬有神的觀念は尚未だ充分に發達せる宗教的信仰となるに至らず。自己の弱きこと及び果敢なきことを意識し、感覺世界以外に安心立命の地を求めんとする宗教的渴仰心は、唯僅に幼稚なる形狀に於て顯はれたるのみなりしが、吠陀の宗教に潛在したりし萬有神的要素は、婆羅門教殊に其哲學諸派に至りて漸く分明に顯はれ、自然の或る物の媒介に依りて神に達せんとして不滿足な感じたる宗教的意識は、今や自然及び自然の現象以外に有限なる萬有の根柢に存在せる實體の觀念を捕捉せんと試むるに至れり。婆羅門教思想の全過程を支配する神の思想は、即ち文化の或る程度に達したる人心が求むる萬有の根柢に横たはれる唯一の思想、換言すれば、轉變常なき世界の現象の下に存在せる常住不變の實體の觀念に外ならず。婆羅門教徒が宇宙の謎を解く鍵也と思惟したりしは即ち此思想にして、彼等は一切萬物の變化活動して暫くも靜止せざる、人生の無常にして果敢なき、飲樂の影の如くして追ふ可らざるを見て曰く、此等のものは表面の現象、實質なき出來事に過ぎずして、此等のものゝ根柢に唯一不變の實在あり、是れ即ち梵也と。彼等は此の如く梵を以て一切萬物の統一的根柢、衆生の源、唯一の實在となし、其他一切の現象世界は虛妄幻影に過ぎずと思惟したり。

スピノザ哲學の起りたる最初の動機は知識的なるよ

りも寧ろ道德的宗教的なりき。彼は自然科學的精神に富めると共に、其深なる宗教的熱情を有し、此世界の榮華と惡とより脫れ、永遠の實在と調和し、以て眞正の平和と安心とを得んと欲したりしが、彼は人類の不安不幸の源を其世界觀の誤れるに歸し、此不幸の狀態より免れ、眞の平安を得る唯一の道は、其誤りたる世界觀を棄て、之に代ゆるに一切萬物の假相の根柢に實相を認ずる合理的世界觀を以てするに在りとなせり。彼以爲らく、通常の人々は此世界に在る萬物の個々離れ々々に存在する有樣を見て、之を實に個々離れ々々に存在する者也と想像し、之に獨立の存在を與ふれ共、個々物が個々離れ々々に存在するが如く見ゆるは、唯此等のものが互に相關係するがためにして、素より獨立的實體を有する者に非ず。此は物質に就ていふも思想に就ていふも相同じ。故に吾人各自の有する所謂獨自一己なる者は、一方に在りては無限の過去に潤り、他方に在りては無限の將來に及び、更に他方に在りては意識世界の全體に滲れる思想の行程に於ける過渡點なるに過ぎず。此の如く吾人は個々の事物に於て獨立的存在を發見すること能はず。之を發見するは唯神に於ての み。神の外宇宙には實在なし。吾人領らく感覺及び想像の上に超然として宇宙の實相を觀ずべし。去らば吾人は現象の根柢に一個の實在あり、差別の背後に永恒一如の本體ある を看取するを得べし。凡そ事物を確定することは否定することにして、積極的に何物なも表示せず。換言すれば事物は斯る者也との事を示すことに非ずして、唯斯るものに非ずとの事を示すのみ。特殊の事物又は思想は、之な時間又は空間の中に在る一定の物として見れば、それ自ら實體を有するものに非ず。之な他の事物及び有限世界の全體と關係せしむるも亦然り。其實體を有するは唯無限の延張又は思想の中に在りてのみ也。有限世界なるものは、要するに無限の延張及び思想の發現に外ならざれば也。然れ共思想と延張、心靈と物質との區別は、要するに有限者のために設けたる名目に過ぎずして、差別の根柢には一致あり、凡その事物と思想との根柢には、吾人が神と稱する無限の實體ありとの假定より來る也。換言すれば、心靈と物質とは神と稱する唯一實體の二屬性にして、それ自ら實體には非ず。故に宇宙の秘義、萬物の實相に達せんとせば、須らく時間空間の中に立ちて萬物を觀する差別見に執することなく、超然として神の永恒相を觀ずべき也。（『スピノザ』の條參照）。

以上は即ち萬有神論主張の大要にして、其中に眞理を有するは云ふ迄もなきことなれ共、其根本に於て有限世界を唯一絕對者の中に沒入せしめんとして有限世界を唯一絕對者の中に沒入せしめ、其存在の理由な全く失はしむるに在り。換言すれば、現象世界の差別見な撤することに依りて達したる無限の實體は、單に絕對不定の存在、無狀態的存在者の論理的抽象に過ぎず。差別相な撤したる統一の觀念は之に依りて明となり、たれ共、何が故に世界の差別相は生じ來りしやの理由は明ならず。故に萬有神論は一方に在ては人間の狹隘卑陋なる一切の妄情な脫し、無限絕對の實在に融合することに依りて、其靈的渴望な滿すことな得べきが如しと雖も、其融合する所の實在なるものは一切の思想及び生命の遑沒する無限にして、豐富溢大なる生命を有する無限に非ず。故に其結果は神の思想意志な調和せんために、有意識的に吾人の欲望意志な之に服從せしむることに非ずして、吾人の意識、活動及び人格な永恒不動の深淵中に沒入して、以て全く吾人の個性な喪失せしむること也。而して斯く萬有の差別見な全く撤去せる萬有神論の必然到達すべき道程上の結論は、人の自由、責任及び善惡の區別な無視する必至觀也。宇宙の萬物は其れ自ら存在なく生命なく、在る者は唯一個の絕對者のみ也とせば、人の一切の動作は唯一絕對者の發現に過ぎず。從て人は一動作以外に動作するの自由な有せざることゝなり、從て又責任なく、善惡の別なきことゝなるべし。然れ共此は一方の觀察にして、他方より見れば萬有神說は全く道德な無視するに非ず。萬有神說は現象世界な以て虛妄也と斷じ、眞の實在は現象世界以外に在りとなし、而して之と融合するの道唯吾人の心中に在る一切の妄情な排し煩惱な滅し、意識其のものさへも全く斷滅するの外なしとなすが故に、厭世的禁慾主義に陷る也。（萬有神論に對する基督教有神論よりの批評な知らんと欲ずばブルースの『辯證學』（一八九一）フリントの『反有神論的諸說』（一八八五）ビクトンの『萬有神論、其物體及び意義』（一九〇五）等の書な見るべし）。

萬軍の主 The Lord of Hosts. 聖語　通常『萬軍のエホバ』（יהוה צבאות）と稱せられ共、本來の名稱は『萬軍の主エホバ』（יהוה צבאות）也。此稱號モーセの六經中にはなけれ共、預言書に屢々顯はれ、詩篇の中にも亦記さる。此稱號の起源は明ならず。『萬軍』と譯せる原語サバオスは天使にも星辰にも人間にも均しく適用するな得べし。此に於て之な以色列の軍勢也と解し、エホバは異邦人に對して戰へる以色列軍の長也との義に取れるものあり。然れ共此意義にては解し難き場所に此稱號の起れるより、之な天使軍の意に解し、エホバは即ち天

使軍の主也との義となすものあり。エヲルドは此說を持し、オエレル。シュルツ等亦之に從へり。又之を日然の勢力の義に解し、エホバは即ち天地自然の勢力の主也との義となすものあり。ヘルデル。カウチュ。スメンド等此說を取り、ドライヴェルも此說を以て比較的優れりとせり。兎に角此稱號はエホバに對する最も莊嚴なる稱號にして『全能の神』と云へるが如き義に解すべきが如し。

晩餐（バンケット）『主の晩餐』の條を見よ。

バンヤン　ジョン　Bunyan, John　人名

一六二八—八八『天路歷程』の著者。英國ベッドフォルドより一哩なるエルストーに生れ、倫敦にて死す。父の業を繼ぎて鑄匠師たり。英國國教會に列りしも、少時には虚言妄誓等の惡德に陷りたり（是れ彼の自白にして、素より自己を責むること嚴しければ、輕く見るべきなり）。されど基飲又は女子と不潔の關係なく、同盟間の最優者なりき。一六四五年數月間兵士たり、歸鄕して一年後結婚す。時に餘凡そ二十歲。されど其頃より心に煩悶を覺え、宗教に關して憂鬱となり、太く腦を亂されたり。然るに妻は自ら清教徒の教派に錬成されたる人なりしと共に、結婚の時唯一の持參物として父より傳へられし二書、即ち監督リウイス、ベーレーの『敬神の實行』アーサー、デントの『不凡の人の天に行く途』を携へ來れり。バンヤンは之がため苦痛を覺えしも、又太く心を動かされ、次第に彼岸やチブキャトや教會の鍵擔きや（之も彼の一の寓意なりき）ウササムプトンのサー、ビヴイス傳（當時有名の小說）を讀むなどを一つ〳〵廢し行きしが、又之に依て一のパリサイ的の人となりぬ。去れど非常に罪を嘆き、神の罰を思ひて苦惱し、危くも教すべからざる罪に陷らんとして惠みの目の去れるを思ひたり。此頃其の職業は繁昌せしものと見えて、ベッドフォルドシャより三十六人の者が書をクロムウェルに呈して、長期議會の解散を贊し、新議會に用ひらるべき適當の人を推薦せし連名上書に彼の名あり。斯かる自に彼は漸くに神惠を感じて終に悔改せり。ベッドフォルドの信仰篤き婦人や、神の知き牧師ジョン、ギッフォルドや、ベッドフォルドの浸禮派の牧師や、何れも此の變化の導者なりしが、終に一六五三年アウスにて洗禮を受け、浸禮派の人といふよりは基督信者となり、直ちに傳道者となれり。彼の著物といふは、唯一冊、即ち聖書のみ。實に無類なる無學の傳道者なりしも、其の經驗は深かりしなり。其の神學はカルヴィン主義なりき。

ジョン　バンヤン

一六五五年ギッフォルドの教會にて執事たりし時說教を始めしに、人望著だしく、五七年には全く著作のために時を用ふるに至れり。されど時を定めたる說教をなすべき職を選びたるは、實は自らの知らぬ內に『天路歷程』を書かせんための神の攝理なりしと見るべきなり。六〇年宗教割一令復活せられて、國教會へ出席を迫らる。非國教徒へは何處たるを問ぼず此令を適用せしかば、無害の浸禮派やクェーカル派も、墓囚なる獨立派長老派と同等に遇せられたり。ベッドフォルド浸禮徒は、命に服從するを肯ぜず、此に於てバンヤンは其の教職を秘密に持續すとの廉に依て捕へられ、獄に下されしが、地方官吏の親切に依りて寬待せられつゝ十二年間獄に在りたり。

彼の如き立派なる人物を獄中に投ずるは、凡ての黨派の人々の快しとせざる所なれば、何等か機會さへあらば之を免れさせんとせしも、バンヤンが斷然國教會參列と說教の中止とを肯ぜざりしに依りて、事已むを得ざりき。彼の家庭にては二年前妻は死し、四人の子女皆幼く、殊にメリーといふ女は盲目なり。バンヤンは前妻死後一年ほどの內に後妻を迎へしが、若くして又信仰と勇氣に富める婦人なりき。彼の如き人がかゝる家を離るゝは實に深き苦痛なりしなり。妻は知事の親切なる伸介に依て、一六六一年四月チャールス二世即位の時の解囚の結果として赦免の請願をなし『サー』マシウ、ヘールも大に之に同情せしも、法律は抵ぐべからず、バンヤンの如き剛情なる囚人を如何ともする能はざりき。囚はれても初は名ばかりにして、何所に行くも自由に許されしが、バンヤンが說教を再始せしため、嚴なる禁獄に處せらるゝに至れり。されば長期入獄は官吏の殘酷なりしためには非ざりしなり。バンヤンは獄中にて非常に苦しみ、妻子は外にて飢に泣きし如く思はれ共、彼は人々に敬重せられ居りし上に、浸禮派教徒も友情ありたるべければ、北ほどの事はなかりしなるべく。獄中にては聖書、同索引及びフォックスの『殉教者の書』を讀み、獄中の幽暗なれば讀書著作（天路歷程も此の時起稿す）をなし、乾燥の麻

金を造り、斯くして家族を支ふるの途を講ぜり。在獄間の末となりては頗る自由となりたるものゝ如く、七〇年には森林中にて人々に說教を讀み聞かせ、七一年には長老となり、其の十二月にはベッドフォルド浸禮教會の牧師となれり。然るにチャールス二世は天主教より受くる眼側を除かんと欲し、七二年大赦令を發し、非國教徒の刑罰令を去りしかば、五月八日バンヤンも赦されて自由となり、翌日牧師たる准允を得たり。王の心は少しもバンヤンを思ひやりしには非ざりしも、バンヤンは此の赦免を德とし『基督の敵に就て』を著はし、無邪氣に王の美はしく神を敬ふ心を讚し、國民に忠信を勸めしが、後年此書は敵のために利用せられ其責むる所となれり。晩年は多勞なりしが又名譽ある歲月を送りたりき。ベッドフォルドの牧師たる事依然たりしが、年々倫敦の浸禮教會にて說教し、家庭又愉快なりき。唯だ在獄中育の女を喪ひしのみ。自己も從康なりしが、最後に或る女子の不和を仲裁して、家に歸る途中、暴雨に遭ひて惡寒に冒され、終に死せり。彼は實に清教徒中の最清なる者なりき。其の若き時の生活は、自らは非常に之を責め居れども、決して普通職人に有り勝なる罪を犯し居らず、高潔なる師掛師たりしを見るべく、而も謙遜にして神の前に畏れ慎けり。其の過過せし煩悶も當時に多かりし作爲的のものと異りて、確かに神靈の活動を示せり。神は實に卑賤の中より此の適當なる人格を拔擢して大なる感化を世に與へしめしなり。

バンヤンの著書の中『天路歷程』は神特に之を作るがために、バンヤンの一生を導き給へりと信ぜらるゝほどのものにして、世界の典書とはなれり。コルリッヂが聖書を別にして、耶蘇基督に在る心に存する教の眞理を敎示する最大の書なりと言ひ、マコーレーが書中記する所の經驗の典路は、實に奇蹟的なりと言ひ、又其の文體は愉快にして絶然たる英語なりと言ひ、第十七世紀中大なる開創的の心は二つ『失樂園』を產みし心と『歷程』を產みし心となりと言ひしは凡ての批評を代表せる者といふべし。バンヤンの著書には『歷程』の外『ベッドマン（惡人）君の傳』『聖なる戰爭』『說教集』『論爭文』『聖書字句等』あり。『罪人の首長に從るゝ惠』は自己の悔改始末の記なり。バンヤン傳はバーダー（一七八六）ホーカー（一八三九）フィリップ（一八三九）フラウド（一八八〇）等の著にかゝるものあり。バンヤン全集また出版せられたり。

バウリシアン派　Paulicians.　宗派名

第七世紀の頃のスリヤ及びアルメニヤに起りし異端派にして、使徒保羅の書翰を尊重せるより斯く名けられしが、即し。此派の祖コンスタンチヌスは四福音書及び書翰を學び、二元論と基督教の教義とを結合し、當時の教會の形式主義に反對し、自ら保羅の純正なる基督教を再興するの使命を荷へりと稱し、保羅の弟子シルバノの名を取りて己が名となし、六六〇年其最初の教會をアルメニヤのキボッサに建てたり。彼等の採用せる教義の詳なることは明ならざれども、二元論的世界觀を採用し、見ゆる現世界は惡靈の造る所、見えざる未來世界は眞靈の造る所となし、又アダム不從順の罪は人類に對する神の祝福の變形したる者にして、教會に對して犯す罪はアダムの罪よりも大也と云へり。彼等は路加、約翰の福音書、保羅、約翰、雅各、猶太の書翰を承認したれ共、馬太、馬可の福音書、彼得の書翰及び舊約書全體をば排尽して取らず。又マリア禮拜を排斥し、基督の天より來れるは人を惡なる肉體及び此世界より救ひん爲めも也とし、十字架を尊ぶは異教的也となし、主の晩餐及び洗禮を排斥し、禮拜の場所を『新の場所』と稱せり。彼等は隱遁主義を取りたれ共婚姻を承認し、斷食を排斥し、又僧侶主義に反對し、信徒皆祭司なるを主張せり。コンスタンチヌスは六八七年死刑に處せられ、チタス彼に嗣ぎしが六九〇年又死刑に處せられたり。爾後迫害相續き、女王テオドラは凡そ一萬人を殺戮したりしといふ（八四二）。次でバシリウス又之を迫害し、殆ど之を勦絶したり。然れ共十字軍がコンスタンチノープルを取りし時（一二〇四）には尙其殘徒を發見したりしと云ひ、又第十九世紀の初めにヒリッポリスにも多少の殘徒生存したりしといふ。

パウリヌス　ポンチウス　メロピウス　Pontius Meropius Anicius　人名　三五三—四三一　第五世紀の人格高き僧。ノラに居りしを以てノラヌス（Nolanus）と稱せらる。ボルドーの富める名家より出で、巨大の財產を相續し、少時は逸樂に耽り、三七九年には議官たり、地位高き官職に在りしものゝ如し。されど思想一變して宗教の事に向ひ、ツーアのマルチン及びアムブロシウスの感化に依りて僧となれんと決心し、妻テラシアの同意を得て之と別れ、三九三年若くは九四年にバルチェロナにて長老となり、其の財を散じ、幾分をば殘して慈善のために用ひ、僧侶及び貧者の病院を建て、ノラに大水道工事を起すなどの事をなせり。ツーアのマルチンもアウグスチヌスもイェロニムスも彼の自己捐棄と献身とを稱讚せり。彼は自らは極めて質素に生活し、隱遁

的實行を勸めたり。三九四年パウリヌスはノラに定住し、其後同地の監督に選ばれたり。彼の文書は五十の書翰と三十の詩と存す。書信中には當時の教會建築に關する記事と、アガペーの舉行に關する記事あり。

パウルス ハインリヒ エベルハルド Paulus, Heinrich Eberhard Gottlob Gottlob 人名 一七六一—一八五一

獨逸聖書批評の方面に於ける偏理派の首領。ウュルテンベルヒのレオンベルヒにてシェリングと同じ家に生る。父はレオンベルヒにて『ディアコノ』なりしが、偏理派なりしのみか一時は復活説さへ奏ひし人なり。此の疑を霽さんため、彼は妻の死なんとする時、之に向ひて死後有形の姿にて現はれんことを求め、妻に之に應じて現はれたりとて、彼は靈的幻象のあるを確信主張し、之がため一七七一年免職となれり。子のパウルスは嚴格に育てられ、八四年チュビンゲン大學を卒へ、ジョルンドルフの教師となりぬ。研究に耽り、必要上八七年八八年に全獨逸、和蘭、英蘭、佛蘭西に亘る長期旅行をなし、八九年イエナに招かれて東邦語教授となる。此時またシェリングと同僚となりぬ。パウルスは偏理時代の最も色彩鮮かなる所産兒なりき。彼の主張は少時より老後に至るまで一貫變ることなかりき。彼は宗教を以て神を知力的に知ることなりとなし、感情的要素を伴へる解釋や、直接意識の活動とせる解釋は之を敬虔主義神秘主義の臭あるものとして悉く排斥し去りたり。パウルスは東邦語教授としては成功せざりしかど、九三年デデルラインの死後組織神學教授に轉ぜり。されど研究著作に代がしく、九一年『詩篇之言語學的健論』を、九三年『以賽亞書言語學的健論』を、一八〇〇年より〇四年迄に『新約言語學的批評』三篇を、〇二年スピノザ集二冊を出だせり。舊約聖書に關する勞は何等の印象を起さゞりしも、新約の批評の原則とせしものは大なる感動を呼び起し、所謂基督の奇蹟の自然的解釋は彼の名と伴ふに至れり。此の解釋法は彼の哲學主義と一致せるものにして、即ち事實なれば其の可能を標準として判斷せし法なり。眞に死にし者が復た生きんことは不可能なればとて、彼は基督は墓の中にては唯表面死に居たるのみと言ひ、基督湖上を歩みしてふ事は、不可能なれば福音書の記事は單に湖岸を歩みしな意味するならんと言へり。勿論此等の説は後世の偏理派も取らず、ラファエルの如きは斯かる解釋を博言學者の創造せし一奇蹟として嘲笑せり。一八〇三年パウルスはイエナを去てウュルツブルヒの招に應ず。當時同大學か新興の偏理主義の中心とせんとせる計劃あり。シェリングとフーフェランドとは既に招かれて前に在り、フォクスとシュライエルマッヘルまた赴くべくなり居たり。パウルスは神學教授として神學百科學の講義に大なる望を屬せられしが、此は美事に失望なまた減じ行けり。〇七年パウルスは學校長としてバムベルヒに行き、〇八年ニュルンベルヒに行き、同じく校長たり。されど〇〇年アンスバッハに行き、同じく校長たり。〇七年パウルスは學校長としてバムベルヒに行き、〇八年ニュルンベルヒに行き、同じく校長たり。されど彼は何處かの大學に奉職せんと切望せしが、一一年に至りハイデルベルヒの教會史教授に招かるゝを得たり。同大學にては非常に活動し、其の講義は舊約新約の全面の批評に亘れり。此の時代の最も重要なる著作は『初代基督教の歴史の基礎としての耶穌の害の人格の奇蹟なることみに承認し、基督の奇蹟なる所は基督自身なりと言へり。天主教神學者フーグはパウルスに優る精覈と判斷力を以て パウルスの解釋法に反對し、ストラウスは『耶蘇傳』に於て最後の鐵槌を彼に加へぬ。時勢は變化し、教育は進みて、パウルスは直ちに之に遅れたれども、老て尚壯にして、何時までも其の意見を改めず、之を以て世を敎へんと欲し、其の『知的信仰』主義を固執し、九十歳の高齢を以て死せり。

パウルス三世 Paulus III. 人名 羅馬法王（一五三四—四九在位）。本名アレキサンデル、ファルネース。一四六八年カリノに生る。母の家は曾てボニファキウス八世を出せしことあり。アレキサンデルは一四九三年アレキサンデル六世より『カルディナル、ディアコノ』とせらる。アレキサンデル六世はアレキサンデル（即ちパウルス三世）の姉妹と破戒的關係を續け居たるなり。レオ十世の死後とアドリアヌス六世の死後とに、彼は法王に選ばれんとして當らず、クレメンス七世の死後に至て始めて法位に登る。歴代の法王に重用せられ、又自から獨身生活の禁を犯して四子を擧げ居たるに拘はらず（一子ピエル、ルイギは放蕩を以て臨名高かりき）法位に登りたるは、其の能力の非凡なりしを示せり。即位後直ちに其の孫の十四歳と十六歳の二少年を『カルディナル』となす。皇帝之に異議を挿みし時には、彼は二少年は擢籠の時より『カルディナル』とせられ居たりと答へ、反對の勢やゝ揚らんとするを見ては、コンタリニやポールやサドレトの如き名僧を『カルディナル會』に入れて彌縫を謀り、教會の弊害矯正を目的とせる世界會議の開催に同情すと宣言し、斯くて改革の波を押し戻め、皇帝に助けられてサンファアに之を開かんことを布告せり。されどマ

ンツ伯費用の全額を法王の支拂ふに非ざれば同地に開會することを拒みしかば、一五三八年五月ヴィチェンザにて開會と定めたり。同年六月彼はカルロス五世とフランツア一世との間の平和をニカアにて結ばしむ。法王は會議に提出するため教會改革案三十項を草せしめしが、之れは人望なく、ルーテルは之を獨逸語に譯し、起稿委員等を『不定見の徒、狐の尾を以て教會を改革せんとする者』と呼べり。法王は上述の世界會議を太く重視し、英王ヘンリー八世が二書を發して會議に反對するや、法王はかれての行態を引き此に結論して破門な宣告したり。法王は又一族の幸福のために熱心し、曾孫及び甥等の利益を謀りぬ。ペルギア市が種稅を拂ふことを拒むや、彼は禁令を布き、其子をして軍を率ひて行きて罰せしめたり。一五四〇年彼はイグナチウス、ロヨラの宗派を認定し、其のプロテスタント抑壓の精神を行ふため暴手段を取りたり。されど彼は飽くまで會議に依て事を定めんと欲し、ウオルムスの討論に代理を遣はし、又『カルディナル』コンタリニを四〇年と四一年にレゲンスブルヒの對論會に遣はしたり。然るにかれて計劃の會議は法王と皇帝とのルクチヤ會見にて四一年十一月トレントにて開くことなり、其まで に所謂異端禁止を謀り『カルディナル』カラファの建言を容れて、羅馬を中心とし凡ての異端を撲滅せんため、四二年七月教會『リケト、アブ、イニチオ』を發し、檢教院判官を任命し、本部を羅馬に置きたり。カルロス五世は政略上パウルスを味方とせんと勉めしが、法王がミラノを其の甥に與へよと求めしを聽かざりしため、法王は却てフランツア一世の方に傾き、敵對は再發して世界會議はまたも四三年七月に延ばされぬ。斯かる内に檢教は以太利にては十分其の功を奏せり。然るにカルロス五世は法王に謀らずして佛蘭西と平和を結び、且スピーレスにてプロテスタント徒に幾分の寛典を決せしかど、法王は大に之を憤り、書を皇帝に贈りて帝をネロよりアンリ四世に至るまでの迫害者中の最惡なる者に比したり。改革者等は之を聞き、ルーテルもカルヴィンも共に小冊子にて之を嘲りぬ。教會はまた發せられてトレント會議は四五年三月召集せらる。其頃『カルディナル』ファルネース（即ち法王の孫）は宗教改革抑壓の手段を新にし、之がため新舊兩教間には未曾有の惡感情を惹起し、四五年六月法王は終にプロテスタント徒に對する戰のため、兵一萬二千五百と金十萬クラウンとを募るの已むを得ざるに至れり。皇帝は法王の子ピエル、ルイギにパルマ及びピアチェンザを與ふることを認可して、法王の味方に立ちぬ。四五年十二月トレント會議は終に開かれたり。皇帝は改革の字句を取らんことを要求し、法王は教義上の論爭を決せんと欲したり。思想に此の相違ありしと、且法王が皇帝の南國遊を失ひ居たるため以太利の事に干渉することの過大ならんを恐れたるとは、法王をして寧ろ改革者等の勝たんことを望ましめしかば、皇帝は四八年自己の責任を以てアウグスブルヒ議會に於て協約を結ぶの已むなきに至れり。陰謀は連りに行はれ、パウルスの親族庇護策は失敗し、カルロスはピアチェンザを奪つることを育せずしてパルマをも取らんとし、法王は其の親戚のために得んとしたる所為法王領として得んと要求せしも、其の未だ成らず除謀の遂行しつゝある中に死せり。ヴェネチヤ、西班牙、佛蘭西の外交者等はパウルスを老齢にて先見あり計劃の遂行に能力ありし人なれども、機に臨んで果斷を缺くと觀察したり。然れども此はプロテスタント徒に取りては却て非常なる幸なりしなり。

パウルス四世 Paul IV. 人名 羅馬法王（一五五五—五九在位）。宗教改革の猛烈なる反對者。本名ジョーバンニ、ピエトロ、カラファと云ひ、ネアポリスの貴族より出づ。一四七六年に生る。叔父『カルディナル』オリヴィエロ、カラファに愛せられ、教會の地位上進の門戸を開かる。ユリウス二世より一五〇四年キエティの監督とせられ、政治上の使節に用ひられ、レオ十世より代理として英國に遣はされ、彼得教會稅を要求し、西班牙に遣はされては、土耳其人に對する基督教同盟を作るために、フェルデナンドを勸誘す。此の第二の使命には成功せざりしも、カラファは西班牙王の寵を得多年其の宮廷副大牧師とせらる。王の死後以太利に歸り、一五二〇年後は羅馬に住みたり。彼はレオ十世が異端撲滅のため任定したる八委員の一人なりしが、强硬の手段を取らんとして失敗したり。彼は又『神愛の拜室』の會員にして、凡て世俗の財産を棄て、其の職に從ひたり。此の誤後にキエティ派となれり。一五二七年ヴェネチヤに在りて異端征伐の擧に着手す。パウルス三世に上書して曰く、異端は異端なれば斯かるものとして取り扱はざるべからずと。パウルス三世は彼を『カルディナル』となし、カラファは直ちにコンタリニの率ふる穏和黨に反對せる徒に加はる。コンタリニのプロテスタント徒と協同する計レゲンスブルヒ對論會にて全く失敗に歸しては、急進黨羅馬にて勢を得『リケト、アブ、イニチオ』教令發せられ、檢教制立てられ、カラファは全力を盡して之を厲行せり。愈々法王位に登るや、彼は以太利に網の如く檢教を執行し、西班牙、佛蘭西、英國

にまでプロテスタント反對の活動を擴張し、イエスイト徒を愛護して、其の第二の設立者と言はるゝまでに至れり。臨終の際集まれる『カルディナル』に向ひては檢數の非を告げたり。其の死するや人民は極度を以て之を祝し、檢數院に暴行を加へ、四人を殺ち、法王の像を毀ち、其の首を街上に曳き行きぬ。されど翌日に至れば全羅馬はまた故法王の靈柩を見んために群集したりしと云ふ。

パウルス五世 Paul V. 人名 羅馬法王（一六〇五—二一在位）本名カミルルス、ボルゲース。一五五二年羅馬に生る。ペルギアにて哲學を修め、パデュアにて法律を學び、一五九六年クレメンス八世より『カルディナル』とせらる。是れ西班牙に於ける法王代理としての功と、其の後の檢數官としての功を認められてなり。即位後は法王權の擴張を謀りしが、却て之を屈くなせり。イエスイト徒モリナの事業に關するイエスイト徒對ドミニコ派論爭に於ては、彼は前者に利あるやう裁決したり。一六〇六年にはヴェネチエが教會の事に干渉したりとて禁令を發す。パウロ、サルピは議官キリノと共に反對の文書を公にし、イエスイト徒キエティ徒カピュシン徒の外は教令服從を抵みしに、法王は飽くまで之を壓へて其の意志を遂行し、反對諸宗派なば追放し、西班牙を刺激して反對諸市に對する十字軍を起さしめんとせしが、其の手段を誤り、却て自ら屈するに至れり。是れ歴代法王が發したる最後の禁令なりき。法王は英國の天主教徒に國王に對して忠誠を誓ふことを禁じ、又佛蘭西のアンリ四世の死後にも同じ事をなして、益々諸國との間係を困難にせり。イエスイト徒マリアナが暴虐なる王等を殺すことを勸めたる著書は、佛國々會の命にて執刑者に依て焚かれ、同じ精神にて書かれたるベラルミンの書は英國々會の命に依て國内頒賣を禁ぜられ、法王がスワレズをして英王に對して書かしめたる書は、ジェームス一世の命に依り公然焚かれたり。パウルスは教會の事よりも藝術奬勵に成功せり。聖彼得會堂なばカルロ、マデルノをして飾らしめ、ボルギースの大宮殿なば己が寄附に依て建て、羅馬市の水道を修理し、ヴァチカヌス圖書館を擴張せり。自ら神聖視せられんことを願ひたる點のみは後のピウス九世と相似たるものあり。

パウロ 人名 **保羅** 使徒 Paul the Apostle. 基督の大使徒。其生涯と其傳へたる教義の概略を左に叙す。

【保羅の生涯】（一）誕生及び教育　保羅自らの事を語りて曰く『我はキリキアのタルソに生れし猶太人にて、賤しき邑の民に非ず（徒廿一の卅九）。此邑（エルサレム）のガマリエルの足下にて育てられ、先祖の嚴なる律法に依て教へられ、初より神に熱心なりき（廿二の三）。我が先祖に倣ひ清き良心を以て神に事へ（提後一の三）八日目に割禮を受けたる者にして、以色列の族ベニヤミンの支派希伯來人より生れたる希伯來人、律法に依ればパリサイの人、熱心に依れば教會を迫害する者、律法の義に依れば玷なき者也（腓三の五、六、羅後十一の廿二、羅四の一、九の三、十一、徒廿三の六）。我れ又心を人よりも先祖等の傳說に熱くし、猶太數に在りては我國人の中年相若く多くの人に優りたり』（加一の十四、徒廿六の四、五）と。而して又曰く『我は生來の羅馬人也』（徒廿二の廿六—廿八、十六の卅七）と。イエロニムスは、保羅はガリラヤのギスカラの人なりしと云ふ傳說を傳へたりしが、此は必ずしも根據なき說に非ざるべく、思ふに保羅の誕生より少し前に、父祖はギスカラよりタルソに移りたる者なるべく、言語精神に於ては依然希伯來人なりしものなるべし。此を以て保羅は少時には學問のためエルサレムに送られ、後に至ては其の姉妹の子の同市に住み居る者ありき（徒廿二の十六—廿二）。元來キリキアの猶太人は、エルサレムと關係深く、同市内に自己等の會堂を立て（六の九）エルサレム攻圍の時には、國のため賠償を行ひし事に依りて有名也。保羅の父が相應の富を有せし者なりしことは、子を遊學せしめたり事に依て知らる。保羅が後に天幕を造る業に從ひしも之が反證となす可らず。當時の猶太人は其子等に手工を教ふるが例としたれば也。保羅の母が篤信の女なりし事は、加一の十四に依て察せらる。保羅原の希伯來名はサウロ、同族の書の王の名に倣ひしものなるべし。後使徒としての活動をなして、羅馬社會に接するに至り、羅馬人の名パウロ（保羅）と改む。サウロの改宗と同時に起りし如く記されあるを以て、オリゲヌス。イエロニムス。アウグスチヌスを初め學者の中には、保羅は此の勝利に因みて改名したりと解せる者あり。レナンは『パウロ』は『小』といふ語と音相似たれば、矮小なりしより名けられたりしなるべしと言ひ、又謙遜して自ら『小』と稱せしものなるべしと推測せし者もあり。されど『パウロ』なる名は拉丁人には珍らしからず。思ふに彼は羅馬市民權の獲得と共に此名をも冒したるものなるべし。而して之は家の名（即ち姓）なれば、其人自身の名も拉丁にては二つある筈なれど不明なり。彼は羅馬人には Paulus 希臘人には Παῦλος 猶太人間又エルサレムにてはサウロ（Saul）と呼びし也。

保羅は先づ『猶太人』即其色列人』希伯來人』なりき。即ち國籍及び教育に於ては猶太人、家系信條に於ては其色列人、言語、傳說に於ては希伯來人なりき。父の家の中には當時パレスチナ通用語なるアラム語用ひられ、彼は修學時代全く之を修め得て、後にはエルサレムの群衆に向ひて自由に演說し（徒廿二の二）何處にても猶太人には猶太人の如くなりたりき（羅前九の廿）。舊約聖書の引用も七十人譯に基すれど、希伯來古語を知れる事又仄めき見ゆ。其色列の特權を語り、神の選を信じ、同族猶太人を愛し、舊約聖書の精神に浴し居たること彼に優る者無かりしを見る（羅三の一、二、四の十六、十七、九の一—六、十の四、十一の十四、十五の八—十二、腓三の七、徒十三の卅二、卅三、廿四の十四、廿六の六、七、廿八の廿、加三の七—十四、六の十六、羅後十一の廿二）。

少時パリサイ主義にて嚴格に育てられしかど、保羅は神より義とせらるゝため律法を守るも甲斐なきことを底まで味ひ、律法に由り、我れは律法に就ては死にたりといふ自覺に達し、斯くて其の悔改し使徒となるに至る準備なば自ら知らず求めざる間に爲しつゝありたり。されどパリサイ主義が保羅の大を成すに多くの貢献をなしたるも事實なり。彼がガマリエルの足下にて學びし事は、終身其の精神より離れざるものあり。後年の神學の論法、形式、聖書の引用する樣などは、全くラビ的也。原罪、復活等の說は依然パリサイ說也。當時パリサイとサドカイとの間には律法に對て論爭あり。保羅は懷疑的縮小主義のサドカイに反對して、常にパリサイに同情し、其の色彩を帶びたるまゝ基督教會に入り來れり。彼は古き猶太主義の根本を破壞せずして、之を新要素に應じ、廣く世界のものとするに適したる人にして、實に彼は基督を信じて此の變化を實際に經驗したりき。ハウスラートは聖和なるガマリエルの門下より出でしを怪しみ、入門の事實なり、熱狂的の保羅の出でしなば之を疑ふは非也。

保羅は斯くパリサイ的パレスチナ猶太人的なりしも、亦當時の希臘化神學と全く沒交渉なること能はざりき。此派の神學は亞歴山よりデアスポラまで弘布し、アポロ（徒十八の廿四）及び希伯來書記者等は之に感染せる所あり。保羅も此派より出でし『智慧』の書を自由に引用し、西一の十二—廿には亞歴山のエクセネス派猶太人等の思想を採從せるが示し、其の用語は同時代の人フイローンと文學的關係ありしなる示せり（ペライトフート。クレグベル。ジェウエット等の論を見よ）。

保羅に於ては、斯く猶太主義と希臘主義とが集合したるのみならず、更に羅馬主義も集合して、愛に其の大なるなせり。彼はタルソに生れて羅馬の市民權を有したり。タレンケルは彼のタルソ出身を疑ひ、レナン。ハウスラート等は市民權の所有を疑ひたれ共、保羅は自ら加一の十五に於て、神が已れの母の胎を出でし時より選び置きて、已れを召し基督を異邦人に宣べしめんとしたるか言へり。彼は曾て異邦の市にて育ち、エルサレムの下に學び、又異邦の市にて育ちの如く生活したるが如く、基督のエルサレム上洛の時は郷に在らざりしが如し。彼が偶像禮拜の道德的弊害を看取し、異邦人の氣質を善く知れる所なるは之を證せり。タルソは東西物貨の湊まる所、其港には萬國の船舶來り泊せり。感受强き彼は、之に依て大世界を思ひ、諸人種混和を思ひたるなるべし。其の異邦人の使徒たる使命を果たすためには、實に恰好の事情塩遇の下に在りたる也。

タルソはキリキアの首都にして、當時スリア總督領に併せられ居たり。此市は幸に羅馬内亂のために害を受けず、且大都（metropolis）の號と、自由市（urbs libera）の特權とを受け、從て議會、執政官、地方法廳等ありたり。保羅の父は市の選舉權と帝國の選擧權とを有したりしが如し。保羅は斯る地に生れしを以て、猶太教の學者熱心者たりしと共に、世界の一市民たることを得たり。而して彼の想像は耶蘇の如く田園及び自然界に融せず、常に市生活の上に在り、之より比喩を取りたりき。且又猶太異邦間分子の結合は、彼をして社會の廣き範圍に適合する人たらしめたりき。タルソは又此の時代に於て、有名の大學都會なりき。ストア哲學の名士は此より出でぬ。後には羅馬法律の大教授も此より出でぬ。嚴格なる猶太人は希臘學校と無關係にて立ち居たりしかば、保羅の文學にも古典の教育を受けし跡殆ど之れなく、其の言語は地中海東沿岸のコイネ語を、七十人譯聖書及び會堂の希伯來思想にて豐富にし、獨創力を以て基督教の新思想に適用したるものなりき。其の希臘古書より引ける語は、通俗にして誘の如くなれるものなり。畧前一の廿、西二の八に在る如き語は、當時の詭辯派學者や空虛なる誇衒を賤しめたるを示せり。さはいへ保羅が斯くの如き知識の中心地に在りて、全く其の刺激を受けずして已む能はざりしは明也。殊に悔改して後異邦宣教の志を抱きつゝ暫く歸郷せし間の如き、其の新鮮の心を以て善く異邦人思想を考察したること殆ど疑なし。アレオ山上に於ける演說は、彼もし自ら好まば、哲學者ゝ教ふる哲學者となり得べかりしことを示せり。されど

彼の教の中に、セネカ又はストア派の教と相似たるものあるは、深き結合ありしを示す者に非ず。此は唯當時浮動し居りし思想を呼吸し、無意識に同情したるものと見るべきのみ。保羅の思想の形式と發表法とは、猶太のラビ風なるよりも、キニク派ヽストア派の議論の風に似たるもの多し。此もタルソ出身に由るとせざるべからず。保羅が天幕製作を營みたるに至ては（徒十八の三）全くタルソ人たりし賜也。タルソは粗なる山羊の毛の織物の製造中心地にして、此の織物は靴、蓆、被物等の材料とせし故製造盛なりしかど、之を習ひ居たりし保羅は、何處に至ても其の苦貧の生活を維持するに差支なき能得たりき（提前二の九、提後三の八—十、哥前九の六—十八等）。

羅馬の法律に就ても保羅は知識を有し、帝國臣民としての權利を遂行したり。此の知識は又神の法則を普汎的の法律として考ふる助となりね。予とせらるといふ說（Wieseler）は希臘又は羅馬の習慣より考へ出したるものにして、教會の觀念も猶太神治政治より取りたる所と、羅馬國家より取りたる所とあり。彼は實に基督教を大羅馬世界の宗教として考へ、自ら又羅馬人の如く政治家組織家の才を發揮し、羅馬の殖民地に教會を立て、羅馬人には最も親密なる書翰を贈り、多年羅馬に遊ぶ傳へんとして其の方向を取りて傳道し、終に自己の辯護のため之に赴き、帝國法廷の前にて其の使命を述べ、己が事を果せるを自覺したり。彼は羅馬神士たるにふさはしく、高官や王の前に立ち、セルギオ、パウロやポルキオ、フエストスより尊敬を受け、羅馬へ護送せられつゝ千人長より厚遇せられ、羅馬にては獄に在りしも尚寬大の取扱を受けたりき。

（二）保羅の性格　保羅の性格は論理の力と宗教的神顯と珍らしく結合したるを其特色となす。即ち理と感との活動の一致也。之に加ふるに熱烈なる感情及び想像あり。感情美はしく、意志堅く、男子の剛氣漫湧、而して壯嚴にして且と婦人の柔とあり。心氣澄渊、酒落なる所あり。性情尊富にして、道德眼銳く、鑑機應變の才と手練とを備へ、組織に長じ、生れながら人の長たる質を有し、又思想と共に之を發表する才能を備へたりき。されど體質は其の精神の大と調ほざりしものゝ如く、コリントの反對者よりは風采拙らず、辯舌拙きを以て誹られ、ルステラの蠻人はバルナバをヅオイスと信じ、保羅をばヘルモスと信じたりき。其他彼は其の容貌風采のために常に苦しめられしが如し。されど彼は之を靈の力の源となし、又常に其體質の弱き意識より、未來永遠を望む心を強くしたり。最も古き傳說によれば、保羅は頭禿げ、脛曲り、體剛にして軀小く、眉蹙に鼻列合に大きく、溫顏時として人の如く見えしと云ふ。第四世紀以後のものならぬ象牙二枚合はせの繪も亦之と合ふといふ。されど保羅の體質の强く、精力の充滿せしことは、其の稀有の旅行と其の心身の激勞に堪へしことに依て知られ、辯舌拙しと雖も、非常なる力ありて聽者を首肯せしむるか、然らずんば反對せしめしことも明に見ゆ。情操また非凡に發達し、氣質は猛烈にして羅氣に充ち、ストアの如く冷灰的ならず、信徒を見る慈母慰人の如く、常に產みの苦勞を感じ、基督の委の成るを待ち、或は疾病不幸等のために心沈むことなきに非ざれ共、又快潤にして基督に依れる豐裕を感じ、其の苦に異かり、其の書翰にはこもゝ〳〵怒りこもゝ〳〵愛するの情の明白に見らるゝものあり。されど決して正確の判斷を失はざりしことも見ゆ。彼は心を以て心に語り、基督の其裏に在ますを自覺せり。彼は實に靈的の人なりしなり。若し强て缺點を求めば、猛烈性急時として逆るが如く現はれ、後悔を起すに至りしことありし事也（徒十五の世九、廿三の四等）。彼は又超自然の賜をも受け、奇蹟をも行ひ、之を以て使徒の證とし、又自ら基督を見、一たびパラダイスに携へ行かれ、形容すべからざる言を聞きたり。神と基督と聖書と靈界とは彼には直接の實在なりしなり。

彼は肉體に刺を與へられしと自ら言へり（哥後十二の七）。此は非常に高き經驗なし、パラダイスに携へ行かれて言ひ知れぬ言を聞きたる事と結合せりと彼自ら語り、而して此の肉體の刺は、此の非常の悅樂の對抗藥なりと思惟したりき。此の刺は彼を苦しめ、謙遜ならしむるものにして、其の依て來りし所不思議なれば、惡靈の力に依ると考へられぬ。前後の言を照らし合はすれば、此は彼の哥後書を贈りし時より十四年前（紀元四三年）の大悅樂の經驗に伴ひて來りしものにして、彼は之を自己の空しく誇ることなからんための神の惠の手段也と思ひたりき。而して彼は三たび之を取り去らんことを願ひたれども、得ず、神は惡靈に此の打擊をなすを許し給ひぬ。而も神は彼に惠を約束し、彼は神の力は弱に於て完きものなることを知り、之に依て神を崇めたりき。加四の十三—十五も此の刺に就て暗示する所あり。即ち此處に保羅は、ガラテヤにて此の刺のため事業を阻止せられ、人の輕侮を受けしも、ガラテヤ人は善く彼を遇せしことを言へり。抑も此の刺とは何ぞや。ルーテルは之を高慢惡潰などいふ精神的誘惑なりとし、羅馬教會の註釋者は之を肉慾の刺激なりと

し、クリソストモスエラスムス其他は之を人間の反對者なりとせしが共に當れりと思惟し難し。エワルド。ホルステン。フオン、ホフマン。クレツベル。ライトフート。シュミーデル、クレンケル等は、此は形を亂くする種類の疾病なりしなるべく、而して其は神經組織の內に潛みて時か隔てゝ起り、保羅の幻を見天啓に接する如き感の昂りたる時に出でしものなるべしと云へり。之を癲癇又はヒステリアの一種とするは最もよく保羅の事情に合へる者の如し。成年後の癲癇は生命にかゝはり、又活動を甚しく妨ぐる程のものならぬは其の例多し。或は之を眼瞼炎とする說あり。加四の十五に基きたるものなれ共凡ての事情と合はず。ラムゼーはマラリヤ熱ならんと言ひ、保羅はパムフリヤにて之に襲り、之がため風土を選みてバルナバと共に小亞細亞の山國へ行きたるならんと言へり。（『加拉太書』の條は此說に從へり）。テルチュリアヌス其他古の註釋家中には、頭痛也と解說したるものあれ共、此は當を得たりとも見えず。假りに保羅神經內に病を有し居たりとなすも、之を以て直ちに其の天啓及び聖靈の感動を不健全の致す所なりとなすべからず。彼は肉體に刺の痛を有せしだけ、基督の惠を受くることも深かりしと思惟するはなし難きことに非ず。

（三）保羅の悔改　保羅の一生涯は其の悔改を要となせり。其の教義の根本も實に此に在り。此の一事は、使徒時代の歷史中最も多くの未來を孕み、彼の長き精神的發展の結果にして、又神の國の新紀元の一造成力となりたるも亦也。保羅は青年パリサイ人として、かのステパノが最も强く耶蘇の流風を響かせる說教をなし、パリサイ人をして曾て耶蘇に對して抱きし憎惡を再發せしめしを見、自己も憤怒に堪へず、其の石にて打ち殺さるゝを見て之を好しとしたり。彼に耶蘇の徒と猶太主義とは水炭相容れざるものなりき。其師ガマリエルの寬容政策は、此の十字架につけられし救主、僞の神の子の宣傳に途を讓るものにして危險千萬なりとし『兒言と殺氣とを吐きて主の弟子を責め』たりき。猶太教徒は之を見て善き器を得たりとなしぬ。政治上の事情に依りて彼等此のナザレ宗を縱まゝに壓抑し得るに至るや、サウロは祭司長の命を受け『此の道に從へる者』を見ば、之を囚人としてエルサレムに護送せんとして、ダマスコに向ひたりしに、ダマスコに近づきし時『忽ち天より光ありて彼を環照し』中に輝ける人の奏ありて『我は汝が迫害する所の耶蘇なり』と告ぐるに接せり。其の結果は言はずして明なり。此事使徒行傳には三たび記され、廿二章の保羅のエルサレム演說中には、耶蘇の顯現の全く客觀的にして自己の心之に顚覆せられたる事を極力明言せり。彼の書翰中にも此悔改の事に語り及べる所多し。彼は自己の使徒たる事も、主耶蘇を見たる事實に基すとなし（哥前九の一）自ら耶蘇の復活の最後の見證者なりと信じ、耶蘇の直弟子に非ずして使徒とせられしも此故なり、神は基督の顏に依て光を輝かし、盲なりし心を照らせり、是れ實に一の創造なりと云ひ（哥後四の四—六、五の十六—十九、徒廿二の十一）且神と和合せしと同時に、世界の和合のための使命を受け（哥後五の十八、十九）而して之を直接に獨立的に基督より受け、悔改後エルサレムに往かずして亞剌比亞に往きしも此故なり、自ら他の十二使徒と同等の地位に居るも此故なりと云へり（加一等）。

彼の悔改は奇蹟的に來りしと雖も、全く天外より落ちて來りしには非ず。其の精神には疾くより此の天啓を受け得るの準備行はれ居たりし也。彼は長く既に心中に苦悶せり。顯現の時耶蘇が『汝刺ある笞を蹴るは難し』と言ひしは此の迫害を道破せる者にして、彼れナザレ宗の彼を迫害すればするほど平痛き笞撻の胸に喰込むを覺えたりしなり。ダマスコへ急ぎし時にも、彼は己が律法の義を充たし、メッシアの救を受くる力なきこと、及び國人も亦其力なきことを怒を思ひて心を壓へられ、益々怒りて耶蘇の徒に向ひたりしなり。去れ共此時まで彼が少しも耶蘇の徒を正しと思はざりしことは疑なし。彼は十字架に死にし耶蘇は決してメッシアに非ず、之をしか言ふは神を瀆すなりとなし、復活の事實の如きは毫も之を信ぜざりき。耶蘇生存中彼が之と接せず、又之を意に留めざりしことも殆ど疑なし。基督信徒の信仰を告白し迫害に堪ふる樣なども、多少心に映ぜしならんも、先入主となり居たれば、之がため多く動かさるゝこと勿りしなるべく、耶蘇を救主とするなどいふ思想は思ひもよらず、彼は極力之を嫌惡して迫害したりし也。彼の悔改は唯だ心理上の出來事のみならず、又道德上の問題にして、實際ダマスコへ行く途上耶蘇を見たりしとするに非ざれば彼が耶蘇は復活せりといひ、又神の子なりと云ふ確信に達したる理由を解釋すべからず。彼は其後三日間氣を喪へる人の如くなりて、ダマスコに在りしが、彼の從來抱き來りし思想は之がため全く顚覆し了り、耶蘇は神の子なり、神は己れの裏に其子を現はせりといふ確信勃然として起れり。之より先きアナニアは既に神の示現を蒙り、ダマスコに來り居りしが、於此此の慢悔者を受け容れ、之に救罪の確かなることを宣言し、右の手を接きて基督教兄弟の證を與へ、バプテスマを施し、聖靈の降下ありて、保羅は基督の徒と

なり、アナニアは保羅が宣教のため招かれしことを預言せり。斯くて保羅は數日間此塲の信徒と共に在りて公に悔改を告白せしが、打たれし心を拾集し、前途を考ふる必要を感じて、亞剌比亞に退き（加一の十六―十八）益々力づきて歸り來り（徒九の廿二）耶蘇の基督なるを說きて猶太人を言ひ伏せたり。彼は亞剌比亞退隱に依て新なる活力を得たりしなり。

（四）宣教活動　保羅は末終に異邦人の間に神の子を宣べ傳ふべき使命を自覺しつゝ、亞剌比亞より歸り來りしが、其司族傳道の失敗は益々此確信を强くしたり。彼は初より此自信ありしも、エルサレムより傳道を始めて同族を說かんとし、ダマスコにて彼を殺さんとする陰謀あるや、エルサレムに歸り、促々として希臘語の猶太人と論じ、十五日間此市に在りたり。此時ケパと知り、又耶蘇の兄弟ヤコブと知れり（加一）。徒九にバルナバが彼を使徒たちに紹介せりとあるは此の二人のことを指すものならん。されど保羅が說教を始むるや、猶太人等は彼の變化を發見して裏切をなし、之を殺さんと謀りしかば、兄弟等は强て彼をカイザリアに携へ行き、船にてタルソに送れり。聖都滯在中彼は多くの基督信徒と相知るの機を得たりき（加一の廿二―廿四）。保羅は悔改後第二年若くは三年にタルソに到着し、其より傳道に着手し、スリア及びキリキアにて傳道をなし、エルサレム會議の時に及べり。而して其の

（イ）第一期　は紀元三七年頃より四四年頃までにて、重に目立たぬ活動をなし居りしが、バルナバ來りて彼を引き出し、アンテオケに携へ行きて己れを助けしめたり。其までの保羅の勞は加一、徒十五の廿三等より推すに、其の生國附近に多くの教會を起したるものゝ如し。彼は之に依て益々自信を加へたりき。

（ロ）第二期　はアンテオケに行きてより始まれり。アンテオケはスリアの首都にして、羅馬帝國第三の都會也。バルナバは徒十一の十九―廿四に記されたる事情のため、エルサレムより此に遣はされて教會を司り居たり。保羅は哥後十二の二―四に記せる幻象を見し後、此に來り大に重を置かれたり。一年後彼はバルナバと共に飢饉のために困窮せしエルサレムの兄弟救濟の寄附金品を携へて猶太に行き、此に於て猶太人異邦人信徒の一體の實いよ〳〵堅くなりしが、二人はアンテオケにて多くの預言者教師中より聖靈に依て選び出されて、大膽なる福音宣傳に從ふことゝなりぬ。是れ實に教會史の第二期、即ち全羅馬帝國內傳道の期に入りたるものにして、使徒行傳にては彼得の行傳より保羅の行傳に移りたる所也。

斯くして保羅の第一傳道旅行は初より、彼はバルナバと共にバルナバの甥マコ（西四の十）を伴ひて、セルキアより船出し、サラミスに上陸し、クプロ島を東より西に縱斷して、猶太人の會堂にて傳道し、パポスにては方伯セルギオ、パウロに招かれて道を說けり。此人は賢明なる羅馬官吏にして、宗教に趣味を有せし人なりしかば、道を聽て悔改せり。是れ信仰の一勝利なりき。之と同時にマギ教を代表せしエルマス（又はエトイマス）に勝ちしことも、亦信仰の進歩に取りて重大の事なりき。是より保羅は活動の重なる立物となり、パポスよりパムフリアのペルガに渡る時の記事は、彼を首として記せるを見る。マコがパムフリアより去てエルサレムへ歸りしも、一は叔父の地位下りしを見し故には非ざるか。是よりガラテヤ南部に行かんと決せしが、此は『聖靈より送らる』とあれば、病の故にはあらざりしなるべし。

保羅は直ちにピシデアのアンテオケを指して進めり。此市は廣きガラテヤ地方の南部の軍事上行政上の中心地なりき。此時保羅は既に傳道計劃の立案者となりたるべければ、此の如き地を選みて傳道せしは最も當を得たりき。何となれば此の如き地には猶太教會堂ありて、福音の足場となる常としたればなり。ペルガより此まで一百哩、途はタウロス山脈を越え、險峻にして『河の難』『盜賊の難』『哥後十一の廿六）にも逃ひたりしなるべし。此地の會堂にて保羅がなしたる說教は、他國に在る猶太人に對する標本的の說教なりき。多くの猶太人及び異邦人猶太教信者は之を聽きて信仰を起せしが、猶太教首領等はメッシアの救の異邦人に及ぶといふを憤り、又異邦人猶太教徒が此の新宵教者に從ひてパプテスマを受くるを嫉み、市の執政官や暴民を動かして使徒等に反對せしめ、使徒等は此の『同族の難』のためアンテオケより逐はれてイコニオムに移れり。

イコニオム（今のコニエ）は繁華の商業市にて、會堂あり。彼は此にて長く道を說けり。されど終に猶太人の陰謀のため、此なも追られてガラテヤ內ルカニアの諸市へ移れり。先づルステラに至る。ルステラはイコニオムの南二十哩に在り、アウグストの立てし城邑也。此にて足萬き者を癒して、粗朴なる人民より希臘の神々とせられ、又猶太人より迫害せられてデルベに行けり。此地はイコニオムの東南五十哩に在り、此の方面のガラテヤ邊邑なり。此にては流石の猶太人の迫害もなかりき。保羅等は希臘羅馬の文明及び統治と、猶太人殖民の系脈を辿りて傳道せしなる也。彼等の所々にて衝突せしは、羅馬官憲に非

ずして地方官吏なりしかば、年改まりて其の受代ありしを以て、傳道旅行の途途には復た前行きし諸市を訪ひ『弟子等の心を堅くし』『凡の教會に長老を立て』たり。ルステラには猶太人住居したるは明にして、テモテは實に此市の半猶太人なりしなり（徒十六の一、二）。使徒等は歸途ペルガにても『道を傳へて』アッタリアに近き港より船出し、スリアのアンテオケに歸れり。ラムゼーは此の不在の間を二年以上と計算したり。此の旅行に依て一には異邦人が福音を受くる方に傾けること明となり、二には保羅異邦人敎化の首長と目せらるゝに至れり。今や神は公に印を押して此人を選めぬ。アンテオケに歸りし後バルナバは必ずや『彼は益々盛に我は益々衰ふべし』と感じたりしなるべし。されば暫くして後（一年か）アンテオケ教會がエルサレムより來れる割禮主張者に依て煩はされし時には、エルサレム教會に具申せんため『保羅とバルナバ』遣はされしと記され、保羅の名なほ劣頭に記すに至れり。但し徒十五の十二―廿五にバルナバが先に記されあるは年長者なるがためなるべし。

エルサレム會議の事は徒十五に於て外廓の叙述を見、加拉太書に於て其の內面の描寫を見る。保羅は此時極めて强硬の態度を取り、異邦人信徒の割禮を受くるを要せざるを主張したり。此時より彼は使徒等の間に著しく際だち、全く異邦人への福音を委れられたる者と視られたり。エルサレムより歸りて、彼はまたアンテオケ教會の預言者及び教師の一人として立ちぬ。斯くて第一傳道旅行は成功を以て終りたりき。

（ハ）第三期　は歐羅巴まで傳道擴張せられ、且初の頃の書翰（撒前後）の書かれたる時代也。第二傳道旅行の記事は、徒十五の廿六―十八の廿二に在り。初めにマコを伴ふことに關して、保羅とバルナバとの間に爭論あり。其一原因は兩者の地位の變化に在りたるなるべし。（マコは後保羅と和せり、門廿四、西四の十、提後四の十一を見よ。『マコ』の條參照）。保羅は單獨にて出立し、小亞細亞の傳道地に進み、シラス（又シルワノ）を伴ひぬ。シラスはバルナバと保羅とがアンテオケへ歸る時、エルサレムより遣はされたる兩使者の一人也。彼が保羅に從ひしは此行のみにして、後には彼得の書記となりたり（彼前五の十二）。異邦人教會との間の力ある連鎖なりき。保羅とシラスとはキリキア山道より南ガラテヤに入り、デルベに往き、次でルステラに達し、此處にて青年テモテを信者に加へ、之を伴侶として携へ往きしが、彼の母は猶太人にして、且猶太人信徒の感情もありたれば先づ之に割禮を施しぬ。さて到る所にてエルサレム會議の決議（徒十五の廿三―廿九）を傳へしかば、各塲喜びて之を受け、律法主義の侵入は此に止められ、兩アンテオケ間の諸教會は『信仰を堅くし、日毎に其の數を加へたり』。

保羅の計劃にては、南部ガラテヤの教會訪問を終り直ちに西の方エペソに行かんとせしが如し。エペソは小亞細亞の名都にして、希臘及び羅馬への鍵鑰に當れり。然るに『亞細亞に道を傳ふる事を聖靈に止められ』（亞細亞とは羅馬領のエペソ邊の名也）途を北西に取りてムシア境に近づき、其より北方ビッニアに入らんとせしに、またも『耶蘇の靈之を許さゞりければ』。終に西に向ひてトロアスに赴げり。此にてマケドニア人の來りて救を求むる幻を見、アイガイ海を渡りて歐羅巴に道を傳へたりき。是れ使徒史の最も重大なる時期にして、之に先ちて三の天啓ありしも怠むに足らず。されど此に至るまでの小亞細亞旅行は、行傳記者が叙述を急げるため稍不明の廉あり。保羅が北部ガラテヤに傳道せしやに就ては之を疑ふ者あり。ラムゼーは保羅の此の行に傳道したるは、先きに彼が傳道したるイコニオムよりアンテオケまでの間にして、其より直ちにトロアスの方向に赴けりと言ひ、ミンステル。ベロット。レナン。ハウスラート。ワイツゼッケル等又此說を主張したりき。然るにライトフート。フィンドレー等は徒十六の六に『彼等フルギアとガラテヤの地を過ぎし時』とある語は、活動一新の意を含むものにて、ガラテヤといふは此に始めて記されあり。保羅は既に前よりガラテヤ地方に來り居れるに、始めて此に此名の出でたるは、ガラテヤ本部即ち北方を指せるもの也と言へり。前說眞に近きしが如し。（『加拉太書』の條を見よ）。

ルカが保羅に會ひ一行に加はりしは、トロアスに於てなりき。ラムゼーは保羅の夢の中のマケドニア人はルカ其人なりと言へり。ルカはピリピに留まり、保羅が後再び此を訪ひし時また會ひたること見ゆ。行傳の『我等』でふ語は十六の十―十七までに現はれ、二十の五、六に至て再現せり。ピリピは名ある羅馬殖民地にして、猶太人の小住地あり、何時に當に新なる所ありき。保羅とシラスは先づ此處にて集まれる婦人等に傳道し、異邦人猶太教徒たりしルデアといふ女第一の歐羅巴悔改者となりぬ。ピリピの教會にては婦人當に勢力ありしを見る（腓四の一―三）。保羅等は此の所なる所にて暫く傳道せしが、卜占をなす靈に憑れたる一人の奴隷女子の靈を逐ひ出せしかば、其主人は營業を妨害せしとて有司に訴

へ、人民も騒擾せしかば、有司は笞罰を加へ之を獄に投ぜり。保羅は即ち『異邦人の難』に遭ひぬ。獄中の事と其の放免の事の記事は行傳中最も面白き物語の一也（一六の廿五―四十）。

マケドニアに於ける保羅の奮鬪は、苦勞多かりしだけに成功せり。彼等はマケドニアの首都テサロニカ（今のサロニカ）に入りぬ。此市はスリアのアンテオケに次で保羅の事業に重大なりし所也。テラキア半島の商業の中心にして、羅馬の行政所々在地又有力なる猶太教會堂所在地たり。一たび此に蒔かれし福音は直ちに四方に散布したり（撒前一の六―十）。此の忠義なる市にては、攻撃は新しき裝を取りて來り、使徒は耶蘇といふ他の王を說きて羅馬皇帝に謀反を敎ふるものとせられしかば、去てベレアに行けり。此地にては福音善く受けられ、多くの猶太人まで信仰せしが、テサロニカより猶太人來りて彼等を擾がせ、生命も危ふかりしかば、人々は保羅を海路アテネ（アンゼス）に行かしめたり。ベレアにて保羅は事を半にして去りし上に、信者を思ふの心强く且つ土地の重要なるを考へしを以て、堅く再訪を決心したりしが（撒後二の十七、十八、三の十）後アテネよりテモテを遣し、テモテは保羅のコリントに在る時歸り來りて復命し、保羅は敎會の好況を知りて始めて心を安じたり。

アテネは哲學者の都、偶像の充てる所はるが、保羅は奇なる宗敎思想を傳ふる一巡回講師として歡迎せられ、ストア及びエピクロス派に擁せられて市の公衆敎育の監督所たるアレオ山（實際の山に非ず）に登り、使十七の廿二以下に記されたる演說をなし、神の舊なる事、人に對しては父なる事、基督の再來、死者の復活を說きしが、殆ど影響なく、唯一人の說員と少數の人々之を信ぜしのみなりき。

保羅はアテネを去てコリントに到りぬ。其時は『窮く且恐れ且戰けり』（哥前二の三）。是れ病にも由りたるべく、アテネの不成功、マケドニアの事の憂にも由りたるなるべし。彼は先づアクラとプリスキラ夫婦を親友となしたり。此夫婦は皇帝クラウデオの猶太人羅馬放逐令のため少し前羅馬より此處に來り居りし者也。保羅は夫婦に接して益々羅馬傳道の心を堅くしたりしなるべし。初め暫くの間會堂にて保羅の說きし敎は、猶太人にも希臘人にも喜ばれしが、テモテとシラスがマケドニアより歸り來りて敎會の好況を報ずるや、保羅の氣力俄に充溢し、彼は耶蘇のメッシヤなる事と十字架の事とを大膽に說きしかば、（使十八の五―八、哥前一の十八―廿五、二の二）猶太人は之に讀き分裂起りぬ。保羅は會堂の隣なるユストの家を本據として活動し、會堂の宰は信仰を起せり。コリントの信徒は『智慧ある者力ある者尊き者多からず』とあれば、少しは地位敎育ある者なりしこと察せらる。即ち諸階級の人ありて、市の一般の氣風の中に起りし敎會なれば、又其勢をも受くる所ありしなり（哥前一の五、六の九―十一、哥後十二の廿、廿一等）。コリントには猶太人の勢力も弱かりし故、保羅は十八ケ月間滯在し、幻に依て身の安全と信徒の續出すべきことを保證せられ、羅馬法律の保護をも味ひたりき。方伯ガリオはセネカの兄弟にして、宏量の人なりしが、保羅に對する猶太人の訴を棄却し、告訴者は傍觀者より打ち懲らされたり。スリアのアンテオケと此市とのみにては保羅は迫害を受けずして傳道するを得たりき。帖撒羅尼迦前書は保羅がコリント滯在の初期、テサロニカを去りてより六ケ月以内に書かれ、同後書も續て補遺解惑のために書きしものなること明なるが、其の內容は保羅の最も重ぜし十字架の敎義徹に說き及ぼされあるのみにて、重に未來觀の事にかゝれり。

此の第二旅行の徑路を一觀する時は、撒後二の二の『邪なる惡しき人』の意味朦に見ゆる心地す。保羅は帝國を旅行して其の偉大を見、その組織を見たり。されど彼は其の『皇帝禮拜』を見ては燦厭に堪へず、之を邪なる事の絕頂と見たるなるべし。カリゲラがエルサレムの神殿に自己の像を置かんとせしは、紀元三九年のことにして、其時猶太人が驚慌したることは保羅の忘れざる所なりしならん。旅行して見れば到る所皇帝禮拜行はれ、ペルガモにては殊に盛なる禮拜行はれ居たりしかば、彼は之を見て羅馬帝國の基督の王國に對する關係を反對の性質のものと思ひ、甚しく之を憤怒したりしなるべく『邪なる惡しき者』と云へるは蓋し之を暗示せるものなるべし。

此の旅行は保羅の最大活動にして、其行程は東帝國の半を超え、凡そ三年の時日を費したりしなるべく、彼はエルサレムへ上らんとしてカイザリヤに向ひ、歸途エペソに立寄り、再來を約してプリスキラとアクラを殘し、エルサレムへ第四回の訪問をなせり。其の滯在は短く、直にアンテオケに行き、暫く此處に留まれり。思ふに此處に冬を過ごせしものならん。彼は之より第三傳道旅行に上りぬ。

第三傳道旅行は保羅がテモテを從へ、ガラテヤ及びフルギアに向ひて出立せし時に始まるものなれ共（使十八の十八―廿三）第二と第三の旅行の間に彼得のアンテオケ訪問と彼得と保羅との衝突起りたるものゝ如し。此は加二の十一―廿一に記され、ネアンデル。ウィーゼレル。アウギュスト、サバチエ。フィンドレー等所く考ふ。使十五の猶太化說の敗北は

一時其の勢猶ほ殺此せし事明にして、帖撒羅尼迦前後書中には少しも保羅が彼等のために心を煩はされ居る形跡なし。然るに後得のアンテオケ訪問中『ヤコブより來る者』到りて、此處に公然の分裂起り、猶太人の特權を主張する派と基督敎の世界主義を唱ふる派と再び相爭ふに至り、此の火の手はアンテオケより發して保羅の傳道せし地方の全體に及び、ガラテヤ及びコリントにて最も甚だしく、エルサレムよりの使者が信徒を惑はしたりしこと少からざりき。初め保羅が第二旅行より歸り來りし時は形勢大に異り居たるが如し。猶太化主義者は一旦落ちし勇氣を回復し、且異邦人の敎會に溢れ居るを見て之を危險となし、反抗の手段を講じ、此度は前の如く割禮のみ以て敎に必要なりとは說かず、神の律法の有無は猶太人異邦人の差別を成せり、此の差別は食事に關するレビ法にて保護せらる、萬民一樣に敎はるべきも猶太人には特權あり、されば異邦人は禮典を守りて始めて此の特別の祝福に與かり得べきのみと說けり。彼得とバルナバとはアンテオケにて此派に迫られて共同會食の席を退きたり。エルサレム會議の決議必ずしも斯の如きものならざりしなるべきも、亦斯く解し得るものたりしなるべし。斯くて此派は遣んで保羅の事業をも破壞せんとし、エルサレムの使徒等よりの使者也と稱し『鹿書』を示し（加二の十二、哥後三の一）保羅の說の誤を正すと稱し、母敎會への服從を要求し、保羅は基督を知らず、之を說くの權威を有せずと論じ、其證としてコリントにては保羅が報酬を受けざりし事までを權利の屬き故也となせり。保羅は第三旅行中常に此等の反對者と戰はざるを得ざりき。彼は此に於て先づガラテヤの信徒へ書を贈りて之を警め、コリントに至れば既に反對者より生ぜし制せられしが、コリントより羅馬へ書を贈りて之を豫め警めたりき。而して反對者の言の如き保羅と他の使徒との間の扞格は實際は存せしとは見えず。其の關係は寧ろ圓滿にして互に相補ふことをなしたりし也（加二の九、十）。

（ニ）第四期　事情以上の如くなるを以て、第四期は保羅の論爭時代、即ち四大書翰を書きたりし時代也。福音の使者たる彼は今や此の方面に力を用ひ、既に得たる者を堅固にする務を果たしぬ。彼は途すがら『凡の弟子を堅くす』するを主とし、傳道さへも前度の補遺なるかの如く活動し、ガラテヤ及びフルギアを經てエペソに着けり。エペソは大都會にして、第二旅行の目的地なりしも、彼は其時之を果さず、歸途立ち寄りしも時日短かりしが、今や此に來りて羅馬行政の保護の下に傳道し『亞細亞の祭を司る者』の一人とも親しき仲となりぬ。此人は地方の政治宗敎の長官たりし者なり。保羅は戲園に入れられて猛獸と鬪はさせられんとせしこともあれど（哥前十五の廿二、十六の九）三年間此に在るを得て『亞細亞に在る者皆主の言を聽く』に至り、魔術書をも集めて焚かゝる如き成功を見たり。されど之がため女神アルテミスの像の賣行非常に減ぜしかば、工人等は之を怒り、暴民を煽動して有名の女神を亡ぼすものなりと騒ぎしかば、保羅は終に此を去りぬ。されどエペソに於ける彼の成功は勵かすべからず。後ヨハネは此處に住し此地は其後の使徒時代基督敎の大中心となれり。哥羅西書、腓利門書は保羅が自ら傳道せざりし土地の人に贈りし書、以弗所書は廣く其邊の敎會に廻はしたる書なるを思へば、彼の此の傳道の結果は實に大なるものなりしなり。エペソを去りし後トロアスにて其首敎團體を造りしこと、（哥後二の十二、十三、使二十の六―十二）次の夏のマケドニア巡回中と思はるゝ頃イルリコに傳道したること（羅十五の十九―廿一）とを合はすれば、敎會は更に二回線を加へたることゝなり、第三旅行の終には敎會はエルサレムよりイルリコに至り、其の線は羅馬を指したりき（使十九の廿一）。

此間彼は日毎の傳道の勞苦と共に『凡ての敎會の憂』を抱きぬ（哥後十一の廿八）。哥林多書、加拉太書は其の證なり。加拉太書は普通エペソ滯在中の作也と云へ共、ライトフートは哥林多前後書、羅馬書の後にマケドニア又はコリントより贈りしならんと言ひ、ラムゼーは南部ガラテヤ說に合はすため第三旅行前アンテオケより贈りしならんと言ひ、クレメンスは同書が論爭の調激しければ、羅馬書の後に書かれたならんと言へり。哥林多前後書は保羅がエペソに在りてコリント敎會を洞觀し居たるを示せり。されど其の手續は不明なり。哥後十三の一、二を見れば、保羅は此の時より前にコリントに第二回の訪問をなし居たること明なり。此の時彼は信徒中再び醜爭せし者あるを見て之を責めしも、太く罰せずして歸りしを、反對者は之を以て保羅の權威少き故歟に之を罰し得ずと嘲りしが如し（哥後十の一―十一、十三の一―十）。此の訪問は保羅がエペソより船にて赴きたるものにて、哥前が書かれし春（哥前五の八、十六の八）の前の秋頃ならん。敵は此の時の保羅の處置を見て與みし易しとし、保羅はコリントに來るを懼れ居れりと言へり（哥前四の十八―廿一）。此の訪問は哥前には全く記しあらず、兩方とも故意に之を忘れんとしたるものならん。されど彼は哥後に之を言へり。彼はコリントを訪ひてエペソに歸りし後、直ちに嚴しき書翰を贈りしが（哥前五の九―十三）之

なも顧みず教會は尚惡しき麵酵を容れたりき。加之教會には分爭あり、我はケパ、我はアポロ、我は保羅に屬すといひ。基督の名をまで引けりといふ事も彼の耳に入りぬ。且コリントの教會はエペソに在る彼に書を贈り、哥前六章までに記せる深き問題の事は何なも言はず、自らに就ていと滿足せる心を顯はせる事を書き、實際上の大問題に就て彼の教を請へり。三人のコリントの信徒此の書を齎らしぬ。保羅は此に於て使者に托して答書を贈り、且懇に使者を推薦せり。是れ哥前也。此の書中に始めて『エルサレムの聖徒のために金を集む』てふ事見ゆ。コリントの教會は既に之に熱心なりしを證す。此の迫害の中に在りし母教會を扶助せしことは、全基督教會一致の精神を養成する力となること大なりしなり。

保羅は此書を贈り自己の其地に行かんことを言ひしも、其時尚遠ければ今はマケドニアに在るテモテを立ち寄らしむべく、テモテは己れの『基督に在る途』を彼等に『思ひ出ださせん』と言へり。テモテは確かにコリントを訪ひしが如し。何となれば哥後に何等違約の辯解もなければなり。されどテモテ訪問の事が、哥後のテモテの名を出せる挨拶の語にさへ全く記されざるは、是れ亦故意の忘却にして、テモテが彼等に歡迎せられざりしを察すべし。後書には又何者か、非常に人を傷めたる者あることを記し、而して之を赦すべきを勸めあり。思ふに教會員の多數其者を讃賞したるに依るものならん（哥後二の五―十一）。此の加害者は誰なるか。エドワルド及びピートの註釋、クレッベルの註釋等には哥前五の一の父の妻を妻とせる者ならんとあれ共、此の者のため教會が分れたりと言ふは當らず。サバチエ、ジュミーデル其他は、保羅自身に對する或コリントの分子ならんと言へ共、もし然らば保羅の如き勇敢なる人は先に訪問せし時面前にて責め、別に書翰を要せざりしなるべし。プライデレル、バイシラッグ等はテモテに侮辱を加へたるものなりしならんと言へり。此は最も事情に當れるが如し。テモテ此の悲しき報知を齎らし歸るや、保羅は『心の痛』より哥前と哥後書との中間の一書を書きしが、此書は失はれしものと見ゆ。保羅は之に於て此の人を痛めたる者を責めんことを教會に命じ、テトス此書を持ち行けり。教會は命に從ひ、且保羅とテモテへ誠ある辯解をなしたり（七の十一―十二）。されば共保羅はテトスの歸りの遲きために大に憂へつゝ（二の十二、十三、七の五、六）エペソを去りトロアスにて暫くテトスを待ち、尚會はすしてマケドニアに渡りたり。此の行保羅は重き病に かゝりぬ。其報はテトス尚コリントに在る時コリントに達し、教會は深き同情を寄せたり。此の病は時も時として保羅に取て非常なる打擊にして。之に依て彼の經驗は深き跡を殘せり（四の十五、五の十）。斯くて『人を傷めし者』の問題は收まりしが、更にコリントには猶太人の使至りて之を惑はし大なる論爭を起りたり（三の一、十一の廿二、廿三、十二の十一）。テトスは歸りて之を報じぬ。保羅は哥後の贈り、其の三―六と續論の章とに於て之に對せる論爭をなせり。保羅はテトスと外一人を遣はして此の書翰を致し、且『集金』の事を結了せしむ。此の書翰はコリントの教會の叛反を慎めしと見えて、保羅は豫ての計劃の如くエルサレムに行く前の冬をコリントにて過ごし（徒廿の二、三、哥後二の一）且此處にて羅馬書を書けり。『集金』の委員の一行（徒廿の四）と共に保羅はパレスチナに行かんとせしが、猶太人の彼を殺さんとするに由り、コリントより船に乘ることを止め、ピリピの方へ廻り論越節を過ごし、トロアスを經てエルサレムに達せり。ピリピよりは行傳著者たるルカも伴ひしこと見え記事詳細なり。

（お）第五期　彼は多くの危險の兆候に接しながらエルサレムに達しぬ。『兄弟』は彼を歡迎せしも、徒廿一の廿以下を見れば、猶太人信徒の背き去りし者多かりしが如し。ヤコブの助言に依て律法に從ひて儀式を守りしが、反對の氣勢は少しも衰へずして益々烈しく、亞細亞より來りし猶太人は神殿にて彼を殺さんと謀りしも、羅馬衛兵のために果さゞりしかば、保羅を猶太教の敵と宣言しぬ。之より保羅は羅馬官吏のため執へられて四年間不自由の身となりしなり。先づ保羅は神殿の階段上より民の前に自己を辯護し、次で衆議所にて辯護し、次で方伯ペリクスの前にて辯護し、次で交任せし方伯ペストスの前にてカイザルへ上告せんと言ひ、次でペストスの延にてヘロデ、アグリッパ二世の前にて辯護したり。羅馬官吏は何れも保羅の法律上無罪なるを知れど、猶太人の怒を買はんことを恐れて免さず、左りとて羅馬の市民たる保羅を猶太人の犠牲とすることもなし難く、唯未決狀態に置く安全となしたり。保羅は獄に入れられし初夜幻を見て、久しく望める羅馬を見るの機來れるを知り、此を以てカイザリア總督の安若ありて審問新にせらるゝや、彼はカイザルに上告せんと言ひ出でたりき。此の上告は大なる費用を要せしが、ラムゼーは保羅此時には頗る多くの財金を得、父の產業を嗣ぎ居たるなるべしと推せり。羅馬への航海と破船の事は徒廿七、廿八章に頗る鮮に描かる。此時に保羅の非凡の人物は萬事に於て十分に現れたるを見る。羅馬の教會は彼を歡迎し、彼は彼等に道を語れり。行傳は『保羅其の借受けし

家（即ち自由監視）に居り凡て來り見んとする者を迎へて、憚からず神の國を宣べ主耶蘇基督の事を教へて妨げらるゝ事なかりき』と言ひて大尾となせり。羅馬政府も保羅を待つことカリオの如くペストスの如かりしなり。法律上には無罪を知れど、猶太人の暴擧を憂ひて之を免さゞりしのみ。アグリッパ王もペストスも監視保護の任を命ぜられし千人長ユリオスも、保羅の人格に就ては有利の證明をなしたること明也。門廿二、腓一の廿四―廿六、二の廿四も亦免さるゝ望の十分なることを示せり。保羅もし紀元六四年まで羅馬に在りしならば、ネロの迫害に依て死にしは明なり、多くの學者は斯く想像す。されど年表を精究するに從て徒廿八の三十の『二年』は迫害より少しく前に當り、遲くも六三年までとなる。されば第一禁獄より免されずして死にしとは斷じ難し。

保羅がカイザリヤにて入獄せし二年間の行傳記事は殆ど空虛なれば、此間は嚴酷に繫ぎ居られしなるべし。腓利門、哥羅西、以弗所書は勿論腓立比書も此間に書かれしならんとは多くの有力なる學者の說なれど、羅馬にての禁獄が頗る自由なりし理由より、四書とも羅馬にて書きしならんと考ふる人亦多し。羅馬にては確かに自由にして多くの感化を與へ、其の不幸は却て『福音進步の助』となり（腓一の十二）番問は却て基督教を傳ふる機會となり、基督教は宮廷まで入り行きたり。　此等の書翰は『午後の書翰』と稱せらるゝ者にて、多少不幸と老齡の感とに蔽れる點もなきにあらず、第三旅行時代の書翰の如く元氣縱橫の趣なしと雖も、柔和にして敬虔の感深く、精神の內面的發達著しきを示せり。而して哥羅西書は教會內に新らしき異分子の起れるを現はせり。エパフラスは保羅に告げて、コロサイの教會には或る哲學的教師說問して亞歷山の交神說を宣傳し、基督なる天使の如き仲保者となし、且猶太教の儀式を救に必要なりと論じたりと言へり。保羅は此に於て西一の十四―廿三の大なる基督論を書けり。加拉太書、羅馬書にては救は猶太の外に溢れ出づるを說きしが、哥羅西書、以弗所書にては基督に在る生命は時間と人類に超越するを言へり。之と共に『教會』の觀念を基督教社會の大にして其の交りの聖なることを論じ、之に依て一致を保つを得せしめんとせり。彼は羅馬より全帝國を見わたし、教會も斯くの如くならざるべからざるを思ひしも也。

（ヘ）第六期　行傳末尾に依て保羅は一旦放免せられしを推すべく、彼は第六期の活動をなせしが如し。牧會書翰は此消息を傳ふ。此等の書翰實に保羅の作ならば徒二十八の記事より以後のものなり。假令多くの學者の云へる如く、之を保羅の作ならずとする も使徒後時代の傳說は、保羅が羅馬在獄後尚活動せし事を傳へたり。保羅は豫てイスパニアまで傳道せんとの志切なりき（羅十五の廿八）。然るに一代後の羅馬のクレメンスの文書を見れば、此事實行せられたるが如し。彼は保羅が『西の極』まで正義を敎へたるを記し、彼を『東と西との宣傳使』と呼べり。最古の傳說か代表せるムラトリ文書また之を記し、最古の『アクタ、アポクリファ』も之を言ひ。リプシウス其他が第二世紀までに探源せるシメオン、メタフラステスの文書またイスパニア宣敎の事を記せり。クレンダーは保羅が羅馬以西に行かずと云ふ事、又行傳末尾にて一生を終りしと云ふ事は、第四世紀以前には斷定せられし跡なしと言へり。勿論此問題は確定せりといふべからず。尚研究を待つべきものなれ共左の如く解するを得べし。

提後は最後の書翰と見るべく、冬を控へて書き、トロアスに殘せる上衣と書物とを要すと記し、テモテの來らんことを望み、自己の周圍には友のなくなりルカのみ忠實に殘れるを言ひ、今度は誅らせれ殺されんとすとあり。之を見れば此前に彼はトロアスに在り。又ミレトス及びコリントにも在りたるが如く（四の二十）又彼はテモテと會ひたる後マケドニアに行き、提前をマケドニアより發し（一の三）エペソ教會牧會の途に就て言ひ殘せる所を敎へたるを見る。されば此に至りし順序を言へば、保羅はミレトスに寄りて、其所より近きエペソに在るテモテを招きて語りたる後、トロアスに行き、其よりマケドニアに渡り、其よりコリントに行き、此にてタレテに在るテトスに書を贈り、其の冬は以太利の對岸ニコポリスの港にて過ごさんと期し居たり（多三の十二）。然るに間もなく捕へられて羅馬へ送られしと見ゆ。斯く考ふれば牧會書翰の事情に最も善く適合す。而してミレトスよりコリントに行きし旅行の前に、保羅とテトスとはクレテに在り、テトスは同島に殘りて教會を立てたり（多一の五）。保羅はニコポリスにてテトスを待ち合はす約なりき（三の十二）。此等を見れば保羅はイスパニアに宣敎し、陽途クレテに立寄り、其よりミレトスに行き、トロアスに行き、マケドニアに入り更にコリントに行きたるものと解するを得べし。

牧會書翰は保守的の傾あり。保羅既に老齡に達し、職ふべき職を終ひ、今は既に攻擊の時代を經て、守成の時代となれり。書翰の傾向素より然らざるを得ず。『眞の道を守るべし』といふは即ち其の精神なり。牧會書翰は又當時教會に潛入せんとせし知

議說を非難し、其の理と合はず道德を危みくし教會を惑す者なることを示ぜり。彼は福音を護るに忠なりき。故に假令之を以て保羅の書に非ずとするも、最も善く保羅の心を現はしたるものにして、之を研究するに從て益々保羅の個人的關係の密なるを發見すべし。

提後四の六―八は基督の偉大なる忠僕の最後の宣言也。彼は羅馬の傳說に依れば、羅馬よりオスチア街道に當り都より三哩ばかりの所、昔アカイサルヴィアイと云ひ、今トレフオンターネといふ所にて、首を斬られたり。處刑所の附近には保羅會堂立てり。コンスタンチヌスの建立にかゝる。

（五）保羅傳の年表　行傳の著者ルカは路加傳にては明白に年代を記したる所あれども（三の一、二）行傳にては斯くの如き研究の助なゝ供ぜず、故に其の年代は他の歷史と照合して之を知り得べきのみ。即ちヘロデ、アグリッパの死は從十二の一―四、十九―廿三に在り。此はヨセフスの歷史にもありて紀元四四年の復活節後間もなく、又同じ王が迫害を始めて後間もなき時の事也。パルナバと保羅がアンテオケより救助の訪問をなせし亂離に（從十一、十二）ヘロデの死と同時に起りて數年續けり。此の訪問が加二の一に記さるゝ訪問と同じものとすれば、飢饉の時は四五年か四六年也として、加二の一の『十四年』なる保羅の悔改は紀元三二年又は三三年となり、其の後の加一の十八にある『三年』は三三―三五年となり、四四年か四五年にパルナバに依りアンチオケに引き出されしことゝなり、其の間の十年はキリキヤにて顯れざる傳道に從ひし事となる。されど之には異論あり。（イ）若し然かせばステパノの殺されたる事は遲くも三三年の事となる。羅馬官吏たるピラトが在任せる同に、從八、九に在る如き兇暴を容さん理なく、又若し羅馬官吏之を容したりとせば行傳記者は必ず其旨を記載せざる可らず。故に此の迫害はピラトがスリア總督ヴィテリオスより停職せられ居りて後任者尚なかりし三六年秋以後か、又はピラト停職の直前彼が猶太人より上告せられんことを恐れて、猶太人を放ちて極惡を逞うせしめしと思はるゝ頃起りたりし者なるべし。（ロ）若し保羅の悔改を三二年又は三三年とすれば、アレタ王は三五年にはダマスコを領し居たる譯なり（晉後十一の世二、世三、加一の十八、從九の廿三―廿六）。アレタはヘロデ、アンチパスが己れの女を離婚せしめ之と戰ひ、大に之を敗りしが、羅馬帝テベリオはヘロデを援け、ヴィテリオスは其命を奈七、三七年の五旬節にはアレタ征討の途中エルサレムにありき。然るに此時テベリオ死してガヨス代りしに、アンテパスは皇帝の意を損して廢せられ、競爭者アグリッパ獄中より出されて王とせられ、此後に至てアレタ始めてダマスコを支配したり。然れば三六年三七年のエルサレム及びダマスコの狀態はステパノの徒殺、ナザレ宗の撲滅運動、サウロのダマスコ逃亡其他を最も善く說明するものに非ずや。

保羅傳後年の年代標準は、ラムゼーは從廿の六、七より取れり。保羅はトロアスよりエルサレムに向ひ、最後の船出を月曜日に於てしたり、而してトロアスに來りしは逾越節終りて直ちにピリピを立ち來りしなりき。之に依て計算し、リウィンは五八年とし、ラムゼーは五七年となせり。保羅の聖都訪問とカイザリア禁錮を五七年とすれば、之より算へてペリタスとペストス交代、保羅の上告、秋のメリタ島航海は五九年、羅馬の第一回入獄は六〇―六二年とすべし。其より五年を經て死にしとすれば、ネロの治世中なり。此間東方教會を訪ひ、イスパニアに傳道し、更に小亞細亞、マケドニア、アカヤを旅行し、捕へられ、審問を受けしとすれば、年月長きに過ぐといふべからず。ユウセビウスの『歷史』も傳說も之を指示ぜり。五七年より測れば、保羅の第三旅行の初期彼がエペソに著きしは五三年となり。保羅及びシラスの旅行は四九―五二年と概算せられ、第一旅行は四六年乃至四九年の間となり、エルサレム會議（從十五、加二）は四九年となる。ステパノの殺されし時保羅は『若者』なりしと記さる。而し猶太の習慣にて公事に關係し得し齡也とすれば、三十歲となすべく、さすれば其の誕生は紀元後六年となり、其死にし時は六十歲となる。之より若くはあらざりしなるべし。門六にも自ら『年老い』と言へり。

ルナックは保羅の基督教活動を紀元三〇―六四年までとなし、諸書簡は（牧會書翰を除き）晉五九年に羅馬にて免されし時書きたりといひ、漸くてネロ迫害前に第一羅馬禁獄より免され事と、イスパニアに傳道せし事を容るゝ餘地を作り、エルサレム會議（從十五、加二）は四七年とし、悔改後十四年（加二の一）に加ふる三年（加一の十八）後也とせり。彼は又ユウセビウスの保羅死去年代を否認せしが、ペストスの在任をばユウセビウスに據りて五五―五六年となせり。されどシウレルはアンゲル。ウィーゼレル。ウルム等の早き研究者と同じく、ユウセビウス此點に誤れるを說き、ペリタスは五五年後も在任したりとし、其の召還を六〇年とせしが、五八―六一年迄の間ならば何れの年にも置き得べしと言へり。此に採用せる計算を以てすれば、ペストスは五九年に方伯となり、前任者ペリタスの前に保羅の立ちたるは五七年と

かり、ペリタスは七年、ペストスは三年在任となる。ヨセフスの歷史の記事も亦同じ。（此處に記せる年代は『新約聖書の年代』の條に記せる年代と多少相違せり。學者の研究する所同じからず。悉接せる書に依りて此相違を來せるも亦止むべからず）

【保羅の教義】　保羅の書翰は何れも機に應じて書きたるものにして、人々の靈を救ひ、教會の穩を立つるを目的とせるもの也。されど其の思想教義は論理的にして、自から統一あり、法式立ちて頗る合理的也。而して後の思想には又進歩發展あり。種々の變化ありて、色彩參差たる中に脈絡自ら一貫せる者あり。感動は一上一下し、時としては矯促すべからざる趣あれども、又主義徹底して神學組織の十分に立てるを見る。然れ共其文書に依りて其の教を解剖することは極めて困難にして、學者の保羅思想の整理が十人十色なるも亦止む可らず。

チウビンゲン派のバウルは、其の大なる史眼に依り、ルーテル派の說より出立して、保羅の教義は四大書翰に在る者以外に之れなしと云ひ、之を以て經驗的宗教也となし、保羅は少時よりパリサイ主義に依りて育てられしかば、後の生涯は之に反抗したるものとして說明すべく、又說明せざる可らずと言ひ、明白の筆を以て、保羅の信仰に依て義とせらるてふ教義を說明したり。其の後のバウル派の學者、例之ホルツマン。ブライデレルの如きは、四大書翰の外少くも撒前、腓利比、腓利門の三書を保羅のものとなし、且保羅にはパリサイ反抗といふ消極的要素の外、他の思想あり、即ち希伯來主義の外に希臘主義あり、保羅の思想は此の兩要素の抱合せる者にして、在天の基督に依る救の說、聖靈の作用の說等は即希臘的要素也と言へり。されど希臘的要素が根本的に保羅を感化したりとの說を取らざる學者多く、バルナクタも其一人にて、彼は保羅を以て純然たる希伯來主義の人也となせり。バウル派は右翼左翼に分れ、ハルナック。リプシウス。フォン、ゾーデン。ユーリッヘル等右翼を代表し、保羅書翰に關しては稍や保守的の地位を取り、左翼は極端バウル派にて、和蘭の急進派より成り、ローマー。ピーアソン。ナーベル。ヴアン、マーネン等之が首たり、獨逸のスチック。フェルチル等之に與みす。此派は四大書翰も其の大部分は保羅後の筆にして、一片のみと說けり。佛蘭西のロイス及びアウギュストゥ、サバチエ等は保羅神學は保羅人格の所產也とし、ロイスは保羅の生涯こそ其神學解釋の鍵なれ、保羅の宗教は希伯來、希臘などの外部より加はりて生じたるものに非ずして實に其の內より發す、其て墳墓、教育、經驗及び其他凡ての事は皆彼に材料を供し、生ける耶蘇の顯現てふ事實を中心として、磁力に接する如く引着けられて宗教を結晶したる也と言へり。ロイスは保羅の福音を產みたる顯現を主觀的に考へ、基督に依りて救を分ち與へられたるものとなし、保羅の思想を此の方より解剖し行きしが、サバチエは基督の顯現を客觀的に取り、保羅の靈に基督の現はれたるものとなしたり。されどサバチエは實際に於ては近代哲學的に解剖して、一に心理的方面に於ける、二に社會及び歷史の方面に於ける、基督教意識の原理となし、形而上學の方面に於ける、基督教教義の所に入れたり。バイシラグは保羅の宗教を全く心理的發展となし、肉と靈との反對といふことより出發し、人生論的に成り、人間中心的に考へられたるものとなし、基督をば靈的の人の首の型となせりと言へり。ブライデレルは一層進みて、降世前の基督は創の天に在る人、創造の主なりといふ所まで進み行けり。エー、ピー、ブルースは保羅は何所までも實際的の人にして、形而上學者的の人に非ず、耶蘇は保羅に取りて救主なりし故に主なりしとし、彼の基督教は基督の主なることを先にして考へたる基督教也と言へり。デー、ソーマーヴィルはバイシラグ等のやうに、保羅は基督を人性の首の型と考へしが、是れ其宗教の根本思想なり、降世前の存在、永遠の性の如きは其より演繹し來れるものなりと言ひ、且保羅の思想は人間本位也と言へり。

保羅の教義は神本位にして人間本位には非ず。所謂形而上的方面は保羅に取りては宇宙の大事實を含める者なりき。神は凡てに滿つる凡て也。されば神の說を第一とし、其より律法の事、義の事、罪の事を說きしは、保羅の救拯論の組織也。此點に於て昔の獨斷的解剖は正當也。近頃ジー、ピー、スティーヴンスまた斯く解剖したり。保羅は榮光を受けたる耶蘇を見たり。彼は救主なり、保羅は神と自己との關係之に依て改まれるを見たり。彼の救拯論も基督論も神性論に基す。而して此の神は以色列の神と同じ神なりき。舊約は保羅に取りて無意義ならざりき。彼は悔改後、舊約聖書の至る所に新約の準備を發見したりき。彼は以色列の信仰の中より咲き出でたる基督教使徒にして、其基督教に入りしは猶太教を棄てしに非ざりき。異邦人は害木につがれたる野生の木也。基督はダビデの裔より出でたり。此は過去と現在との關係繫がり居るがためなりき。

（一）神に關する教義　神に關する保羅の觀念は、之を猶太教時代に有したるべきものに比すれば、皆壞の差をなして發展したり。左に彼の觀念の要を

叙すべし。

（イ）神の父なる事　保羅の神性論は、耶蘇と同じく神の父なる事の教義也。是れ保羅教義の前提にして、又其の神性論全體の礎なり。彼は基督の眞弟子として、此の根本點に於て基督と全く同じ所に立てり。『アバ父よ』といふ絶叫は、耶蘇の言より取りし者にして、新生の特別の聲也。猶太教より基督教への變化を表する者也。愛と慈と憐と惠とは神の屬性にして、平和と慰と望と寧とは神の賜なり。是れ保羅が猶太教時代に殆ど知らざりし要素なりき。『子とせらるゝ事』といふ法律上の用語を用ひたればとて、保羅は必ずしも人類がもとより神の子たる事を否定せしには非ず。徒十七の廿八、廿九、加四の五、西一の廿一、廿二、弗二の十六の ἀποκαταλλάσσω の ἀπο（gr.zeno）は保羅神學を支配する語也。惠は之を受くるに足らざる人に對する神の好意を意味し、基督に於て示されしもの、人の救のために動く神の愛を指す。保羅は神の子を迫害せし者を其の使徒となせしも神の惠也と感じ（羅一の五、哥前十五の九、十）其光は凡て行動思想を照らすとなし、之が讃美に全力を注ぎ、神の力も攝理も父の愛を行はんため也とし（徒十七の廿四―廿八、羅四の十六、十一の十五、廿二、加三の廿三―四の七、弗一の四―十一、二の四―七、十三―十八、三の七―十二）惠は義に依て宰り、永生に至らせんと言へり（羅五の廿一）。

（ロ）神の義　此は羅馬書特殊の語也。羅一の十六―十八の『神の義』は神より出づる義には非ず、神自身の義なり。義は神の所有にして、其の道德政治の主義原則也、人を取り扱ふ道德的の原律也。此の義今や新しき側面に依り、人を讃ひ人に接するの義として現はれたり（哥後五の廿一）。神の義は絶大君主の無心無情の義にはあらずして、父の義也。惠と義とは別なれども、互に結合し、共に人に向ひて從る。是れ福音也。第二以賽亞書及び晩代の詩篇は、既に義と救とを同義となせり。保羅は之を捕へて其思想を立て、基督と十字架に於ける神の顯現とに依て之を十分に明にせり。此義即ち道德活動をなしつゝある神の側面は、之に反する者を罰する性質あり、又之を得るに堪へて之を得居らざるものに己れを分ちぬ與へんとするに切なり。『神罪を知らざる者を我等の代りに罪人となせり、是れ我等をして彼に在りて神の義となることを得しめんためなり』（哥後五の廿一）。此義に依て父は『其の獨子をも吝まず、我等凡てのために之を棄てたり』。此れ我等が其子の像に造られん爲なり』斯くの如くして得たる義は神の義にして、人自身の義には非ず（羅十の三、腓三の九）。

（ハ）神の怒　は神の義が罪と接する所に催されて現はれたり（哥後五の廿一）。神の義は絶大君主の無心無情の義にはあらずして、父の愛也。惠と義とは別なれども、互に結合し、共に人に向ひて從る。是れ福音也。第二以賽亞書及び晩代の詩篇は、既に義と救とを同義となせり。保羅は之を捕へて其思想を立て、基督と十字架に於ける神の顯現とに依て之を十分に明にせり。此義即ち道德活動をなしつゝある神の側面は、之に反する者を罰する性質あり、又之を得るに堪へて之を得居らざるものに己れを分ちぬ與へんとするに切なり。『神罪を知らざる者を我等の代りに罪人となせり、是れ我等をして彼に在りて神の義となることを得しめんためなり』（哥後五の廿一）。此義に依て父は『其の獨子をも吝まず、我等凡てのために之を棄てたり』。此れ我等が其子の像に造られん爲なり』斯くの如くして得たる義は神の義にして、人自身の義には非ず（羅十の三、腓三の九）。

（ハ）神の怒　は神の義が罪と接する所に催されて『不義を以て眞理を抑ふる者に向ひて現はれ』（羅一の十八、撒後二の六―十二）道德の腐敗せる所、國民及び個人の亂れたる所に見え、最後に發したるものは神に從はざるものゝ滅亡となる（羅一の十八―廿二、二の五―九、八の六、七、九の十七、廿二、撒前五の三、九、撒後一の五―十）。神は惡き者をも愛すれど（羅五の八、弗二の四、五）罪人に對して怒り給ふ也（羅七の廿二―八の二）。

（ニ）神の律法　の觀念も義の觀念と共に著しく擴張し、多くの點に於て變化し、猶太教と基督教の思想の別明に現はれたり。保羅は律法と信仰、律法と約束、律法より來る義と信仰に依りて神より來る義とを相對立せしめ、所謂律法よりも以上の義を唱へたり。されど律法以上の律法あり（羅三の廿一―廿一）。彼は神の眞の律法は人の良心に記されありとし（羅二の十四、十五、廿六、廿七）律法の普汎的なるを說き、猶太人も異邦人も一として罪なきはなし、殊に猶太人は其の特權の故に先づ咎を受くべきもの也、律法なくば罪は人に歸せられず、故に其自身は聖にして義しく善なる律法は却て人に死を齎らすの結果を來せり、之に反し福音は人を救に至らする神の力也と云へり（羅二の一―三の二、三の十九―廿三、七の七―廿四、哥前十五の五十六、加三の十―十四）。彼は其經驗に依りて舊意義の律法の力なきを唱へたれ共、無律法主義を唱へたるに非ず。彼は『生命の靈の律法は、基督耶蘇に在て我を死と罪の律法より解けり』といひ（羅六の十四、八の二、哥前九の廿一）又律法はもとモーセに依れる以色列と神との契約なりしが、今や基督の新約に依れる人類と神との契約となれり、此はアブラハムの約束に含まれあるが故に根據深く（加三の十四―廿二）道德の凡ての實質を含みて、心内より働く内部の主義にして、外より來る命令に非ず、愛に依て成功するもの也と云へり（加五の十四、六の二）。而して此の律法は人の信仰と聖靈の働とを、神人の關係に於ける合法の要素となせる者にして、彼は決して非道德律說を唱へず、又義なき愛を唱へざりし也。（基督に於ける神の顯彰は悔改（repentance）を迫り、其の性質方向を明にす。保羅は悔改を以て、偶像を棄て神に向ふこと、罪に死に、肉を捨て十字架につけ、舊き人を脫ぐことの義也となし（徒十三の廿四、十七の三十、廿の廿一、廿六の廿、撒前一の九、加四の九、五の廿四、羅六の二、十九―廿一、弗四の廿

二等）義とせられ認めらるゝ前には必ずや之を要すと云ひ、之を以て人を救ふ信仰の一要素となせり、而も亦神の觀念と相應ず。即ち子等が父に祈る所にして、基督の仲保あり、聖靈の同精深き助ありゝなせり（弗三の十二、十四、十五、哥前十四の十五、西四の二、撒前五の十七、十八、羅八の廿六、廿七等）。

（二）人に就いての教義　（イ）人の獸性　に就ての保羅の信仰は、舊約聖書と同じく、人は神の像又榮光にして（哥前十一の七）異邦人の意識また之を證すとなす（徒十七の廿八、廿九）。基督信徒は神の像に從ひて改造せられ、其の子供となりしもの也（西三の十、弗四の廿四、五の一）。凡ての人の理性は神の創造を認め、又神の律法を認む、故に罪に對して人皆責任あり（羅一の十九、廿、廿八、七の廿五）。舊約に在る如く、人は血統上の一體なり、又基督に於て道德的に一體なり。罪及び救は猶太人にも萬國民にも一樣にかゝはる。女は男の榮光にして、男は女の首也。基督に在ては男女平等にして、又互に相要し、共に罪の責任を分つ。されど保羅は女に服從を敎へ、敎會又は家内にて覺敎し又は之を支配すべからずと言へり（哥前十一の三―十五、十四の廿四、廿五、提前二の十二―十五、加三の廿八）。

（ロ）靈と肉　此の點に於ても亦舊約と同じく、人は此二者の結合より成るとせり。魂（ψυχή）は靈と肉の中間物にあらで、兩者の結合せるもの、即ち生ける自己とせらる。されど此語は多から ず。心（καρδία）（羅一の二十の思念等）之に代へらる。魂が集中して自意識せる自我となれるを指すなり。羅一の廿八、七の廿三、廿五の理性（νοῦς）心と譯しあり）は神の事を知る精神の力、羅二の十五の良心（συνείδησις）は道德的自意識を指せり。肉と靈は保羅に於ては單に心理學的に區別せらるゝのみならず、宗教的の意味あり。肉は人の罪ある性を指し、靈は之に反對し、聖靈に依て働く神の感化を受くるものを指す。此を以てパウル。ホルステン等保羅觀念の罪の實質を肉慾なりとする人々は、保羅は罪を人の性に根據し、物質的體形より出づとしたりと論じ、プライデレルは保羅の肉（σάρξ）の說に於て希臘思想を見ると言ひ、サバチエは羅五の罪をアダムの墮落に基すとせし所と、羅七の罪を道德的法律と肉體の欲望の衝突より起ると見し所とは矛盾せりと觀たり。然れども保羅の基督無罪の說、肉體の復活、其の聖靈の殿たる事等の思想は、彼が肉體を根本的に罪に屬すとしたりしとは思惟し難し。哥後七の一には、肉と靈共に汚るゝ事を言ひ、加五の十九―廿一の目錄には、肉より起らぬ罪をも加へ、撒後二の四亦然り。然れども罪肉體を占領し了れば一種の『肢體の法』となる（羅七の十四―廿五）。故に人は通例『罪の肉』を有する也（羅八の三）。而して此は基督と共に苦き人を十字架につくることに依て救はれ得べし（羅六の六、七の廿三、廿四、八の十三、西三の五）。基督信徒の眞面目は、聖靈の助に依り自己の靈を以て肉體を支配し、之を義の器として神に獻ぐるにあり（羅六の廿七）。罪の遺傳の事は羅五の十二に說かる。罪の汚は肉體と共に傳はる。唯だ神の子等は靈に依て生れしものなり（加四の廿九）。されど初の人アダムを地につける人と稱せしは、基督と對照せし者にして、靈の人の前の粗笨の狀態を指せるのみなり。

（ハ）罪と死　罪は人類に普及せり。罪とは神の惠又は神の義と反對せるものにして、不虔と不義（羅一の十八）は其の重なるもの、即ち神又は神の律法を犯せるもの也。換言すれば、罪とは非宗教非道德の謂にして、神への敵對也（羅八の七）。不道德の根本には必ず神に對する不從順なること存在す。罪は自ら犯せる行にして（羅二の廿三、加六の一）缺點弱點には非ず。罪は先祖より傳はり、萬人に及び、人を神の榮光より遠ざからしめ、其の結果死の普及となれり（羅三の十九、廿三、五の十二、廿一、哥前十五の廿二、五十六）。世の智慧は之を救ふの力なく（哥前一の十八―廿五）モーセの律法も唯罪を增すに過ぎず。是れ罪を太だ罪すべきに至らせんための神の計劃なりき（羅五の廿、廿一、七の十三、加三の十九―廿五）。罪の結果は死なり。故に死は凡ての人に及べり。何人も靈の體に化するに非ずんば天に在る者となる能はず。罪は全人類に死を齎らせし故、人は神の生命と離れ、實際に死なざるべからず（哥前十五の四十四―四十九、羅七の九、八の十、弗二の一―五、四の十八）。故に生命は神と同體なるに依てのみ存す（羅六の十、八の六、西三の一、提前六の十九）。而して之に入るは基督に依る也（羅六の六、加二の二十）。

（ニ）人類の歷史　は又罪と贖の物語也。歷史に二大別あり、舊人の時と新人の時にして、基督の十字架之を昇せり。昇天よりメタシヤの世となり、暗黑の世の中に神の愛子の國の設立となれり。されど此に至るには準備ありき。暗黑の中にありて罪惡は跋扈せしと雖も、其の中にも神の導は休まず、新時代のための準備ありき（從十四の十五―十七、十七の廿二―廿一、羅一の十八―廿二、二の十四、十五、廿六、廿七、哥前八の四、十の十九―廿一、十二の二、加四の八。）

以色列も神の僕にてありながら（羅八の十五、加四の一—七、五の一）其の律法を守る能はず、其の特權を誇り傲慢頑固に陥り（羅二の三—九、撒前二の十五、十六）神の惠より閉ち出されたれ共（加三の廿二、廿三）而も其の中に尙殘りの者あり、祝福を受くるを得べきやう神に計劃せられ準備せられたりき（羅十一、徒廿八の廿八）。

（三）**基督論及び救拯論**　保羅の基督論及び救拯論は神の觀念と人及び罪の觀念とに共して出で來れり。

（イ）**基督の人格**　保羅はダマスコの途上に閃めける天啓に依て、其の賤しみたりし耶蘇を直ちに『主よ』と呼びぬ。『主』の思想は既に他の使徒等の抱きたりしものにして、メッシヤを意味し、肉に從ひてダビデの裔たるのみならず、又榮光の主いと高き神の子の義なりき。保羅は此の思想を採り、直ちに之を說きぬ。基督主たるが故に、彼は其の犧牲に無限の價を認め、恥辱の十字架に於て神の榮光の顯彰を見、神は律法の下にある者を贖ばんため其子を惜まざりしと信じたり。『神の子』とは兄弟中の初生子の義也。保羅は大抵之を『主』と呼べり。希臘譯舊約の習慣にては『主』は神の義也。保羅は教會を支配する者として基督に此語を用ひ（哥後四の五等）又宇宙の支配者として之を用ひたり（弗二の九—十一）。哥羅西書の基督は天地萬物を治め、萬物を生じたるものにして、萬物の本たる父なる神と共に立てり。されど之と共に、基督は子として父より授られ、其の事業を全うする時は父に國をわたすもの也（哥前十五の廿八、弗二の十一）。神に從へ共神と一なる者也（哥前十一の三）。保羅は神に祈りしと共に基督に祈り、信徒をば基督の名に招かれたる者と稱せり（哥前一の二、羅十の十三、提後二の廿二）。基督が其の贖へる教會に『首』として之に充ち、之を永へに導くは、彼がもとより神的なりければ也。後に至て主と呼ばれたる彼は、實は初より主なりしなり。彼は初より神の形にて在りたるか、之を虛うして、謙りて人の世に降れる也（腓二の四—十一）。されど神性を棄てたるに非ず、人たるの事情に合したるなり。此を以て保羅に取りては基督はもとより神なりしなり。保羅は基督の豫先存在を前定したりき。パウル。プライデレル。バイシラッゲ、シュミーデル等は、保羅は降生前の基督を以て理想的の天にある『人』人間たるものゝ初の型、其の首なりとしたる也と言へり。是れ哥前十五の四十五—四十七をフィローン派學者及び晩代のラビ等の解釋に從ひ、二のアダムあり、一は天にある理想の型にして、神と共に天に留まり、一は地に現ぜれたる人としたる也と解說せるに依れり。されど保羅は然か考へしとは見えず。彼は二の人を天よりと地よりとの者とし、其の由來を說きたりしも、其より以上に測りては考へざりしが如し。

基督に於ける神人兩性の共在は、保羅の屢く認めて當に集ける所なれども、彼は此の關係を說明せんことを企てざりき。基督は神の子として、又人の子として、續へる國に臨めり、神の位に登れる救贖者は又永久に人なりき。（羅一の三、四、九の五、加四の四、弗二の五—十一、提前二の五、哥前十の四。彼は人に對しては初より切ること能はざる關係を有す。（哥前八の六、西一の十六—十八、弗一の四、二の十）。故に其の降生も贖罪も此の關係より發出せしなり。人類との此の關係より、人が罪を犯せるに依て人に至れる咒は基督にも關係せり。神は『彼を我等のために罪ありとし給へり。されど之に依て基督自身の自由は包み了られず、彼は自ら罪を知らざる者なりき（羅八の三、哥後五の廿一）。

基督のメッシヤなることは、基督てふ名に依て顯はされたり。保羅は舊約に依りてメッシヤの苦を受くべきことを說き、耶蘇は此の基督なることを言ひて之を證明し、其のダビデの子なること、割禮を受けしこと、神は先祖に立てし約束を果ぜること等を說けり。されど彼は此の舊約の觀念を擴張し、肉に從ひて生れし『キリスト』を望みたりしも『もはや肉に依て彼を知るまじ』と言へり。

（ロ）**十字架の死**　以上の如くダビデの裔にして神の子たり、罪のために咒はれて、而も罪なき基督は、十字架の死を遂げたり。即ち人の犯罪のために犧牲となれり。十字架は保羅の基督教思想の本幹なり、中心なり。凡ての物みな之に集中せり。基督の死は保羅に取りて無限の意義を有するが故に、彼は之を顯はさんとして種々の語を用ひたり。是れ人類の首たる者の代表的の死にして『凡ての者のために』死にたるもの（哥後五の十四、十五）最廣の意味に於ける贖罪祭物として凡ての人に必ず至る律法の結果より免れしむるもの也（羅五の十二、八の二、哥前十五の廿二、加四の四、五）。之に基ける赦免は即ち『義とせらるゝこと』にて、凡ての者『彼に在て死にたるなり』（羅四の二、五、六の七、哥後五の十四、西二の十三、十四）。此死は其自身正しくして又人を正しくす。此死は又贖罪の祭物なり。何となれば罪を怒る神の心に同情し、服從し、自ら選びて人の罪のために苦に耐へたれば也（羅三の廿五、弗五の二）。されば基督の死は凡ての方面より見て犧牲なれ共、

基督は人のものならで神のものなるが故に、此犧牲は神のなしたるものなり。神は其子を送り、凡ての者のために付して挽回の祭物となせり（羅五の八、八の三、哥二の二）。故に此に『和合』を來す。是れ素より神の心にありたることなり（羅五の十一、哥後五の十八—廿一）。斯くて神と人と相合ひ、基督の十字架に依て敵對を除き（弗二の十三—十八）一の家族となる。我等の救を全くする此等の祝福を總稱して『贖罪』といひ、基督の血を價として得たるものとせらる（哥前一の廿、六の廿、弗一の十四、徒廿の廿八）。

然れ共保羅の十字架觀には尙一面あり。羅八の一—四の中には、其の下に基督の死の道德的の力ある意味せり。『潔められゝ事』（羅六）は『義とせらるゝ事』（羅三—五）と共に十字架より發出す。其の力は人の罪を負へる基督の復活に依て正確となり、愈々効力を發揮せり（羅四の廿四、廿五、八の廿四、十の八—十、腓三の十）。耶蘇基督に在るものは罪せらるゝ事なし、肉の思を棄てゝ靈の思を取りし者は、もはや死の刺より脫したり（羅六の二、八の一—十一、哥前十五の五十六、五十七）。保羅の心には對象の變化と共に、性格の變化てふこと併せ存したり。故に贖罪の法律說も道德說も共に相補ふもの也。

（八）**信仰の新生命**　基督と共に死ぬれば其時より信仰の新生命始まる（加二の十九、廿）。人の方の『信仰』てふ語は神の方の『恵』といふ語と並びて保羅宗教の一特色なせり。信仰は心の作用にして、人の內部の生活は此を中心とせり（羅十の十、弗三の十七）。信仰といふ時は神と基督の愛に應答する事、神の意志召命に服從する事、福音の眞理を曉ること等を含む（羅五の八、六の十六、十七、一の五、加二の廿、撒前二の十二、十三、撒後二の十—十三）。弗、西、腓、提、各等保羅晩代の書論にては、信仰の心意的方面特に重き置かる。保羅の知識と云ひし は訓練せられし信仰の意に外ならず。信仰は義とせらるゝことの主觀的方面の一條件にして、此は人の義に依らず、信仰に依れり（羅三の廿二—廿五、五の十—十七、九の三十—十の三）。信仰は神の力と認めて之に從ひ、絕えて自己の力を思はざる所に力あり。之あれば義とせらる。されば信仰とは人が神に對して其の當然取るべき心の態度を取るに外ならず。

斯く信仰は神との關係を正しうすると共に、人をして生ける基督と合一せしむ。『基督を信ずる信仰』は基督の死と共に復活を信じ、死に於て作用せる義とする活動を實際に働かしめ、基督と恒久の靈の合一に至らしむ（弗一の十九—廿三、二の四—六、羅六の十、十一）。基督に在て生くるは保羅の正則の基督教生活とせし所也。斯くて我等は基督と同化し、基督を再現す（羅六の五）。基督に依て罪惡死し、其跡に建てられたる者は即ち基督と同體なる生命、即ち新しき人、新しき世界也（羅五の十、六の八—廿三、哥前十五の廿—廿八）。保羅の道德說も之より出ず。基督と共に神の中に藏れ在る生命の道德なり（西三）。十字架を以て保羅神學の大支柱の客觀的方面とすれば、生ける基督との合一は其の主觀的方面也。子とせらるゝ事（υἱοθεσία）の教義は、保羅の二大主義、即ち神の父なることと、基督との靈的合一てふこととの結合せるもの也。信徒が子たる事は初より神の永遠の所定にかゝり（弗一の三、四）此の狀態は全く基督に由て得らる。我等は元來基督に似せて造られあり（羅八の廿九、廿、弗四の二十—廿四、廿二、五の二、西三の八—十三、一の十五、腓二の五、加四の十九等）。此の姿々は隱れあれど、人は萬物と共に之を待ち神の子たちは現はれ出で、體は贖はれ、基督の榮の姿と同じくなるべし（羅八の十八—廿五、哥前十五の四十三—五十七、腓三の廿、廿一、弗一の十四、西三の三、四）。此の望を以て信徒は神の世嗣たり、基督と共に世嗣たるを宣說する者なり（羅八の十六、加四の六）。

（四）**聖靈の教義**　基督論は進んで聖靈論に達す。

（イ）**內在せる神**　神の子は神人の關係の根本たると共に、此の關係を造り支ふる生ける動力あり、即ち聖靈なり。基督は我等に現ぜれたる神、聖靈は我等の內に働く神也。父なる神より信徒に與へられたる鳴、新事情に應ずる新しき力なり。神は基督の死に於て消極的に罪を赦すのみならず、積極的に聖靈を與へたり（羅五の五、八の二、十五の十三、十六、哥前二の四、十二の十一、加三の二、三、四の六、五の廿五、弗三の十六、多三の四—七等）。聖靈は一方に於ては神より人に至る交ぜりの機關也（羅五の五、八の十六、十五の十九、哥前二の十—十六、加四の六、腓一の十九、撒前一の五、提前四の一、提後一の七）。又一方に於ては人の心を動かして神に向はしめ、其の活動を助くる者也（羅八、十二の十一、哥前十二の七—十一、弗二の十八、廿二、撒前五の十九、多三の五）。聖靈は神の子たる證明をなし、神の虛に人を注ぎしめ、又我等を基督と一にす（羅八の九—十七、弗二の十八、三の十六—十九）。斯くて神の靈たると共に基督の靈なり。人の體及び靈は聖靈の殿なり。新生命の生ずる經驗及び德義は彼の結ぶ果也（加五の廿二—廿五）。

（ロ）**靈の人**　聖靈は聖なるが故に又人を聖とす。

潔むることは義とすることに伴ふ（哥前六の十一、七の十四）。保羅は信徒を聖徒と稱し、基督の靈を有する神の子等は聖なる人也とせり。潔めは漸次に進み行くものとして、保羅は其の十分とならんために祈れり（撒前五の廿三、羅八の四―十九、加五の十六―廿五）。聖靈人に住めば、人は聖ならんとする心を强く起す（撒前四の三―八、哥前六の十九、二十）。潔むる事は道德上の淸めとは異れ共、之をも伴ふ。聖靈は心を淸むるものなり（羅八の十三、加五の廿二等）。人の靈は肉を超脫して上り、聖靈に占領せられ、之と同化するに至る。靈の人とは其の靈の中に神の靈の作用の行はれ居る人の謂也（羅八の五―九、哥前二の十四、十五、羅八の六）。

（五）教會に關する教義　教會は地上に於ける神の靈の證據にして、又其の寫本也、基督に依て神の世界に引き續き顯現する特殊の機關也（哥前三の十六、十七、十二の十一、廿四、廿五、哥後三の三、弗二の廿二、三の廿一、腓二の十二―十八、撒前一の八、提前三の十五）。

（イ）基督の肢體　聖靈は凡ての信徒に住み、教會は多くの信徒に依て造られ、而して聖靈は基督の靈と同一なるが故に、教會は基督の肢體也。即ち神の子等より成る全教會又は諸教會にして、神の家、聖靈の住所也。（弗二の十八―廿二、四の四、十二、哥前三の十六、十七、十二の十三、徒廿の廿八、提前三の五、十五）。保羅の教會觀は其の活動と共に次第に發達せり。撒前後は勿論哥前後にても教會は尙其土地の教會なりき。然るに弗、西の諸書に至りては教會全全世界一つにして基督の體たり、基督は其の首たるなり。彼は又基督と教會との兩方の義務を、新郎と新婦との譬にて示し、基督は教會を愛したり、故に教會も彼を愛して己を献ぐべしと云へり（弗五）。

（ロ）兄弟の關係　教會の第一要義は兄弟の愛也（撒前四の九―十二、羅十二の九、十）。兄弟の誼はもと猶太同族間に限りしが、今や神の家の中に充つる愛は門墻を超えざるべからず（撒前五の十五、加五の十四、六の十、羅十二の十二―廿一）。教會は愛に依て建てらる（弗四の十六）。牧會書翰の『善き業』といふは信仰の事と愛に依る勞力との事也。

（ハ）聖靈の賜　保羅時代の教會には、教會の德を立つるために多くの賜ありたり、預言、辯舌、智慧の言等是也。最前の書かれたる頃の教會は、尙秩序もなく、此等のもの自由に働きたり。されど此の書中にも神は『統治』を賜はりたりといへり。其より教會は次第に秩序生じ、牧會書翰の時代には任務の階級ありたるを見る。

（ニ）バプテスマ及び聖晩餐　保羅は此の二禮典の事を說きたれ共、相互の關係等は之を言はず。二禮典は基督教生活に入り、之を繼續する事を表し、教會に加はりしことゝ、首たる基督に結べることゝを示す（哥前十二の十三、十の十七）。一のバプテスマは主一信仰一たることの有形の記號（弗四の五）にして、一片の麵包を分つことは一體を表し、王の晩餐の卓上の材料に就て祝禱し感謝することは、舊約宗教の祭物奉獻後の食事の精神を留め、神が人と會食するの悅を表す。此の二禮典は唯だ基督の立てたるものなるが故に價ありといふのみに非ず、實に精神上の事實を最も善く表はせる譬喩なり。バプテスマは基督教悔改を示し、水に浸り暫く留まりて出で來るは、耶蘇の死と葬と復活とを繰り返すものにて、腓に死に、過去より離れ、基督と共に生きて神に人るを表す（羅六の一―四）。此禮は本人に在りては此の事實を發表する印、教會に在りては之を認むる印也。聖晩餐は哥前十、十一に在る如く、麵包と盃とに於て基督の體と血とを代表し、此の一の體一の盃を分つことに依て、信徒は人となれる救主に於て同體たるを示すなり。而して此の式を行ふ人物如何は多く問ふ所に非ず（哥前一の十三―十七）。要は基督の制定たり、之を受くる者どもの意向精神の確かなるを旨とす。即ち此式は一の職務に非ず、基督と其徒との間の交りの式なり。

（ホ）教會の組織　教會の組織に就ては保羅の最初の書翰と、最後の書翰とには著しき相違あり。之を以て牧會書翰を保羅の作ならずとする議論も起りし也。十五年の星霜は保羅の思想の此點にも大發展を來せしなり。徒十四に在る保羅とバルナバの南ガラテヤに於ける第一傳道旅行の時には、各教會に長老を立てたりとあり。此は猶太教會を治めし長老に似たるものならん。テサロニカ教會を治めし者も亦同種の役員なりしが如し（撒五の十二）。哥前後書には未だ定まれる役員あるを示さず、唯だ抽象的に『助をなす者治むる者』あるをいへるのみ。四年後の腓書の問安の辭には『監督及び執事』を言ひ、牧會書翰には此の二階級定立せるを示せり。而して長老は支配し執事は之を助けしを見る。提多一の『監督』は長老と同じ者を指し、唯だ監督といふ時は職務をいひ、長老といふ時は其の尊嚴をいへり。『監督』は始めて徒廿の廿八、廿九に現はれ、保羅がエペソの長老を指して、聖靈彼等を監督とし、教會を牧せしむといへりと記せり。されば保羅は始めて此語を取りて通用語となしたりしと見るを得べし。ヘッチは監督職は希臘より來り、長老は猶太より來ると云ひたれ共、

行傳及び終前は之を反證す。長老は教訓をなして教會を治めしが（提前五の十七）中には教訓せざる者もあり、而して會員は何れも說話をなすを得たり。提前五の九には老たる寡婦を役員籍に錄することに就て言へり。此れは女執事をもいふなるべし。羅十六の一、二は早き頃に女執事の在りしを示す。行傳及び諸書翰に依りて當事の教會組織を明白に知ることは難し。されど思ひの外組織整ひ、當時の社會制度を自由に取捨して教會を組織し居たることゝ推測せらる。

保羅は自己を以て基督に召されし使徒、十二使徒と同格の者也とし、基督の下に最高權あるを主張し、教會の父、工師の長、萬民の教師也といへり（哥前三の十、四の十四、十五、提前二の七、羅一の五、六、十五の十六―廿、弗三の七―十一）。其の『使徒たるの證』としては、彼に依て信仰に入りたる信徒の群の生ける書也、教會の首たちも之を承認すと言へり（哥後十二の十二、十三の三等）。されど彼は常に基督の役者といふ語をば複數詞を用ひて記し、他人を認むること十分なりき（哥前四の一、哥後一の十八、十九）。

（六）神の國の教義　猶太人は神の國をメッシヤの地上に建つる神聖の國と考へたりしが、基督は之を取りて全く精神的觀念に化したり。保羅は基督の觀念に據りて其の思想を立て、此國は萬民に亘り、此世以上に亘り、其の榮光は思の及ばざる所まで充ち滿てりと考へたり。來世觀も之より來る。彼は基督に依り天の國に安らかに携へ行かれんことを願へり（提後四の十八）。彼はパリサイたりし時代に神の國を望みしが、其の根本の心は今も變らず。神の國と教會との思想は決して相殺せず、並行し互助して存したりき（撒前二の十二等）。されど神の國は人は勿論天使をも其他をも包めるものにて、基督の權下に在るものゝ全體なりしなり（弗一の廿―廿三、西一の十五―廿、哥前十五の廿四―廿八、腓二の九―十一）。然も此國は精神的內面的なり、義と平和と聖靈に由る喜とを離すべからざるものとして有せり（羅十四の十七、十八、西二の十六、廿、三の四、十五、腓四の七）。此の靈界の內面より其の有形の體に依て凡て外部の活動行はれ、神の心に合ふものとせらる。

（イ）神の主權　神の國の教義の根本には、神を絕對的主權者となす思想横はれり。神の判斷、神の決定は凡て絕對的にして、神には一の不義なく、智慧を以て統治す（提前一の十七、六の十五、十六、羅一の廿五、九の十四―廿一、十一の廿三―廿六、十六の廿七）。神の預知は愛と合ひ、其の經綸は世を逐ふて現はれ、基督の事業に於て集中す（弗一の五、九の十一、三の十一、羅八の廿八、十六の廿五―廿七、提後一の九、哥前十二の六）。神の計劃は少しの缺點なく之を遂行して神の配剂となる（弗一の十、三の九、提前一の四）。創造と贖罪とは兩ながら一の經綸の部分にして、世を逐ふて明となり、活動して統一あり（西一の十五―廿三、弗一の十、三の十、十一）。『神の召』に人を招きて『聖徒とし』また『召して使徒とす』（羅一の一、六、哥前一の二）。こは預め選びし所に依るものにして、神の預知と憲ある主權と此に現はる（羅八の廿八、廿九、卅三、十一の五、撒前一の四、撒後二の十三、十四）。

（ロ）神の敵　神の國に敵する者あり、其の重なる者をサタンとなす。基督信徒の敵も恐ろしき敵にして、異教徒の中に働きて其の勢力を逞うし、稱々偶像の形に依て拜まれつゝあり。不義不潔等の惡はサタンの國を組織せり（哥後六の十四―十六、四の四、弗二の二、六の十六、一の廿一、撒前三の五、哥前十の十九―廿一、西一の十三、十六）。保羅は惡靈の存在を確信し、人類の始祖の墮落も其の誘惑のため也となし（哥後十一の三、提前二の十三、十四）保羅の肉に在る刺もサタンの使、彼の事業を妨ぐるものも其れ也となせり（哥後十二の七、加四の十四、撒二の十八）。死は善く此世を支配す。此最後の敵たる死が亡ぼされて、神の國は始めて完全す（哥前十五の廿―廿八、五十四）。世の終の前には惡の力も非常に發現し、神の國との間に大戰爭あるべく、基督の再び來ることに依て之を破壞すべしと思想せり（撒後二の三―十二）。此の點に於て彼は全く猶太教の子なりき。

（ハ）神の國の完成　神の國は此世をも含めり。當時の國家も有司の權も神の經綸の中に在り。世には罪惡充滿すれど、又神の心の行はるゝこと明にして、神より外に何ものも在らず。されど神の國の本來の現彰光榮は未來に屬せり。今は隱れ妨げられ、其一部分は苦惱を以て現出せり。其の現存の賜は未來のものゝ保證なり、質なり（羅八の十五―廿五、哥前十三の八―十二、哥後四の十六―五の五）。目標に達するには尙多くの苦惱を經ざるべからず。故に望は大切なり。神の國の完成を確信して望むべきなり。保羅の生命の目的とする所は實に此の神の國の全現出にありき。保羅の來世觀に就て著しく見ゆる點は（a）凡ての信者の道德の完全なり。彼は自ら之を目的として勞したり（西一の廿―廿二、廿七―廿八、六の九、弗五の廿五―廿七等）。（b）體の復活なり。此は靈の生命に必要なりと考へらる。彼は肉體

は靈の機關にて、靈より離れて存在せず、故に末には適當の形にて再成すべし、義者も不義者も共に復活すべし、基督の復活は彼を信ずる者の復活すべきことを確む、聖者は終に化して靈體となり、朽つべき者は生命に呑まれんと考へたりき（哥前十五等）。(c)死してより基督の再來までの中間の狀態に關しては彼は明白なる思想を有せず。基督は死後の狀態を眠ると云ひ、比較的に靜寂なる思ひたれど、而も何意識あるを並せ考へたり。保羅は世を去て基督と共に在るは更に我ために善しと言ひ、基督との關係一層密なるべきを考へたり（腓一の廿一—廿三、哥後五の六—八）。哥前書に至るまでの諸書翰には此の點見るべきものなく、基督の再來てふことに就ては、彼は半ば豫太的に考へ居たり。其經驗の進むに從ひ彼の來世觀は稍や一變し、基督の有形的再來や萬民の復活や大審判廷の光景は一層精神的となり、靈魂は死を經て一層善く天に入り、基督と深く交るに至るべしと云ふ信仰となりたれ共、身體の全然なくなることは彼に取りては恐ろしき思想なりき。故に彼は基督の再來と審判とを以て終りまで神の國の完成に必要なりと考へたりき。(d)基督の再來は彼に取りて萬事の終りなりき。初の三書翰（撒前後、哥前）の『パルウシア』(παρουσία) は最後の三書翰の『エピファネヤ』(ἐπιφάνεια) となりぬ。共に大なる神と基督の榮光充てる顯現なり。此の望は基督の約束、メッシヤの救の預言に基づけり。舊約のエホバの大なる日は基督の大なる日となりぬ。基督は天使を率ひ、火と焰との中に現はれ、其の聲にて死者は甦り、生ける聖徒は化して地より擧げられ、凡ての者基督の前に出でゝ審判を受くべく、其時靈と體とは再び結合し、各々其の行に從て報を受け斯くて我等も願はさるべし（撒前一の十、四の十六、腓三の廿、廿一、提後一の七—九、二の八、哥前十五の五十二、三の十二—十五、加六の七—十、羅二の六—十一）。之にて歴史の幕は閉ぢ、神の義と惠の配劑は終る也。死亡ほされ、基督は國を神にわたし、自ら又神に服從すべし（哥前十五の廿四—廿八）。其の使命遂げられたれば也。斯くて天地は全く一に歸し、神の榮光之に充滿し、父なる神は永遠に至高者にして、惠は凡ての上に及ぶなり。是れ保羅の神學也。

【參考書】　保羅研究の參考書は頗る多し。其傳に關しては、シュラーデルの『使徒保羅』パウルの『保羅の生活と事業』ハウスラートの『使徒保羅』レナンの『使徒保羅』ルタルドの『使徒保羅』クレンケルの『異邦人の使徒保羅』ハウソン共著の『保羅の傳及び書翰』（英國にて保羅事業の歴史的及び心理學的研究の基礎となれる書）レウインの『保羅の傳及び書翰』（老古學的の材料豐富也）ファーラルの『保羅の傳及び事業』（簡略平易なれ共力あり）イヴェラックの『保羅の傳と其時代』バリングゴウルドの『保羅の性行及び說の研究』コーンの『保羅、人とし、宣教師とし、教師として』ギルベルドの『學生用保羅傳』其外保羅の傳及び性行の特殊の點に關する著書は枚擧し難し。マッギフェルトの『使徒時代の基督教史』ラムゼーの『羅馬帝國の教會』及び『旅行者保羅』マセソンの『保羅の靈的發達』サッカレーの『保羅と當時の猶太思想との關係』等は其中最も參考とすべし。教義に關しては、シュミッド。ウーステルジー。ウァイズ。ベイシラッグ。スチーヴンス。イムメル。ボヴォン。アドネー。ホルツマンの新約聖書神學の外アイロンスの『保羅の教へたる基督教』フライデルの『保羅教』及び『基督教の發達に及ぼせる保羅の影響』アルノルドの『保羅及びプロテスタント教』ホルステンの『保羅の福音』ブルースの『保羅の基督教』スチーブンスの『保羅神學』クラークの『現代觀念に譯せられたる保羅の觀念』等は最も著名なる者にして、特殊の問題に關する參考書は一々擧げ難し。書翰に關する參考書は各書の條に就て見よ。此條へスチング『聖書辭典』フィンドレーに負ふ所多し。

パウロ　セルギオ Paulus, Sergius　人名

使徒保羅は其の第一傳道旅行の時、タプロ島のパポスを訪ひしに、方伯セルギオ、パウロは使徒保羅及び同行のバルナバを召して、神の言を聽かんことを求めたり。方伯は賢き人なりしが、教を聽て心動けるものゝ如し。此を以て其の從者たりしト者エルマスは其の心を翻へさせんとせしに、使徒保羅に責められて一時盲者となりしかば『方伯この有りし事を見て、主の教を驚き之を信ぜり』（使十三の六—十二）。

セルギー (Sergii) は羅馬の高貴の氏族にして、パウロは此氏族及び他の氏族の用ひし姓なりき。古記錄には紀元一六八年領事セルギオ、パウロなるものあり、又時代不明の頃同名の領事補ありしこと見ゆ。プリニオスの自然史著者索引には、セルギオ、パウロの名を二回まで記しあり。之が聖書中の同名人なるや否明ならざれ共、ト者を從へ居りしといふを以て同人也と想像せらるゝ也。セルギオ、パウロの方伯と記されしは確實なる事實と思はる。始め紀元前二七年帝國區分の時には、タプロは皇帝管轄地とされしが、紀元前二二年使地方と交換せられて元老院

領とせられ、後アドリアヌスの朝に再び帝室領とせられて、知事之を治めたり。紀元五一年五二年よりの日附ある印刻物や、第一世紀の貨幣は明にタプロが方伯に依て治められしを示せり。其の最も面白きは、チェスノラの發見し、ホガルトの出版したる印刻物にして、明に方伯パウロのことを記せり。紀元五五年のものと思はる。ホガルトは是れ聖書の同名人の事に相違なしと言へり。使徒保羅の羅馬名が方伯パウロと何等かの關係ある如く思ふ者あれ共、此は確かならず。（使徒保羅の條を見よ）。

保羅の默示錄（パウロノモクシロク）　The Apocalypse of Paul.

『聖外聖書』の條を見よ。

パーカル　ジョセフ Parker, Joseph　人名

一八三〇—一九〇二　英國會衆派の說教者。ヘッキスハムに生る。オンベリー（一八五三）マンチェスター（五八）及び倫敦ボウルトリー、チャペルの牧師に歴任す。後者は後にセチー、テムプル (City Temple) となりし者にして、彼は死に至る迄之が牧師なりき。彼は英國自由教會に於ける當時の最も偉大なる人物にして、神學者として、又聖書註釋者として非凡の才能を示したりしが、其長所は寧ろ說教家としてに在りき。說教家としての彼の勢力は實に偉大にして、彼は倫敦市中の繁華なる場所に在りて、日曜日朝夕と木曜日夜說教したりしが、聽衆は常に堂に溢れたりき。彼の說教は聖書の句を以て縱横に織はれ、神秘的、詩歌的、諷刺的にして、其中に規諫あり、慰藉あり、人をして或は微笑せしめ、或は泣かしめ、其人生の悲歌を叙し、失敗を語る時の如き何人も嗚咽せざるを得ざりしといふ。彼は堅く福音主義を奉じ、基督の贖罪を信じ、何物よりも先づ基督の十字架を說きたりき。彼は又熱心なる非國教徒にして、英國教會の取れる地位に神力反對したりき。彼は又儀式的、外形的宗教を排斥し、聖禮典に不當の重を置くことに反對し、洗禮及び晚餐を以て單に表號的のものと見たり。彼の文學上に於ける地位ほ特にふべきものなし。Ecce Deus 及び Parodete の二書は彼が苦心の末成りたるものにして City Temple Sermons 及び People's Bible の二書は永久に傳ふべし。（バイタの『博士パーカル及び其友』一九〇五）を見よ）。

ルカーパ　フセョジ

パーカル　セオドール Parker, Theodore　人名

一八一〇—六〇　米國の思辨的神學者。マサチウセッツ州レキシントンに生る。父はジョン、パーカルと云ひ、農夫にして車輪工也。母はハンナと云ひ、聰明にして人格高く其心銳き女なりき。家貧多くして生計豐ならざりければ、子女に充分の教育を授くる能はざりしも、其の感化に依て善く之を育て、セオドールは父より剛毅の質を、母より感動性を繼承したり。彼は形式的教育としては唯地方學校の教育を受けしのみにて、父の業を助け居りしが、其の知識慾の盛なると、且見て接觸するものの感受するに敏なるとは教師等の注目する所となれり。一八三〇年ハーバード大學に入り、バチェロル號を得て卒業し、三四年同大學神學校に入學せり。之れより先き有名なる猶太人教師に就て希伯來語を學び居りしかば、教授不在中は之に代りて同語を教へたり。絶え字種々の文學事業に從ひ、健康の許さるに至りしまで已むことなかりき。讀書は非常に迅速なりし故、精密に記臆し引證することは聊か缺け居りしも、古典、歴史、哲學、神學を知り、之を用ひし能力に至りては殆ど比類なかりき。三六年神學校を卒業す。試補時代には其の說教は乾燥にして研究的なりとの批評を說教學教授より與へられしも、愈々出でゝ公衆の前に立つや、彼は直ちに有力多望の說教者として目せられ、數ケ月間所々にて教會に盡したる後、今ボストンの一部となれるウェストロクスボリー教會の牧師に聘せらる。同教會は村落教會にして、會員は富める聽明の農家なりき。彼が當時一般に行はれたりしユニテリアン主義より離れ初めたりしは何時なりしか不明なれ共、其の私書の殘れるものには煩悶ありしを示し、牧會早々より自由思想を抱き、之を發表し、ユニテリアン派の稍保守的分子は未だ友情の變らざる中に、既に彼を其の講壇に立たざらしめたりしを見る。やがてジョルジ、リプレーやアルコットなど所謂超越學派の首領等と相交はり。之に依て其の思索の世界を擴張したり。されど彼はロック等一派の感覺主義と反對して超越主義を取りしに拘はらず、所謂超越學派には屬せざりき。神の人格たる事、人の靈の所有に依て神と交通し得る事など、宗教根本の眞理に就ては、彼は毫も疑を挿みしことなきが如し。然るに超越學派の徒は、此等の點に關し全く曖昧浮動なりき。パーカルが始めて公然當時の一般信仰より分離せることを明にせしは、四一年チャールス、チョーンシー、